

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第446集

したかま
下構遺跡第2次発掘調査報告書

ほ場整備事業（一関第2地区）関連遺跡調査

岩手県一関地方振興局農林部農村整備室

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

しがま

下構遺跡第2次発掘調査報告書

ほ場整備事業（一関第2地区）関連遺跡調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,000ヵ所以上にも及ぶ遺跡が確認されております。先人の残した文化遺産を保護し保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、快適な生活を送るための地域開発と社会資本の充実もまた県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日における課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を実施し、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、県営ほ場整備事業に関連して、平成14年度に実施した平泉町下構遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査の結果、9世紀代の集落跡、12世紀奥州藤原氏の時代に関連する遺物、近世の屋敷跡などが発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が活用され、考古学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する関心と理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査ならびに報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県一関地方振興局農林部農村整備室・平泉町教育委員会をはじめとする多くの関係各位に衷心より謝意を表します。

平成16年1月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例 言

1. 本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町大字長島字下構地内に所在する、いわてけん にしいわいぐん ひらいずみちようおおあぎながしまあざしたがま下構遺跡第2次調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手県一関地方振興局農林部農村整備室との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡登録台帳に記載されている遺跡番号はNE 76 - 1226、遺跡略号はSG - 02 - 2である。
4. 発掘調査期間は平成14年4月12日～10月18日、調査面積は10,000 m²である。室内整理期間は平成14年11月1日～平成15年3月31日である。
5. 発掘調査、室内整理の担当は、文化財調査員 羽柴直人、期限付職員 立花公志である。
6. 本報告書は羽柴直人が執筆、編集した。
7. 託業務は以下の機関に委託した。
 - (ア) 基準点設置 興国設計株式会社
 - (イ) 空中写真 東邦航空株式会社
 - (ウ) 石質鑑定 花崗岩研究会
 - (エ) 樹種同定 パリノ・サーヴェイ株式会社
8. 本報告書の作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導をいただいた。(敬称略) 井上雅孝(滝沢村教育委員会) 藤沢良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)、本澤慎輔、及川司、菅原計二、鈴木江利子、鹿野里絵(以上平泉町教育委員会)、八重樫忠郎(平泉町世界遺産推進室)、千葉信胤(平泉町郷土館)、佐藤ノブ(平泉町境田)、及川真紀(前沢町教育委員会)、斉藤邦雄、佐々木務(岩手県教育委員会生涯学習文化課)、矢崎木綿子(柳之御所遺跡調査事務所)、大平聡(宮城学院大学)
9. 土層の観察は「新版標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所監修1989)を使用した。
10. これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料や調査略報等に発表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先するものである。
11. 調査で得られた出土遺物や整理に係わる諸記録等については、すべて岩手県立埋蔵文化財センターが保管・管理している。

目 次

序	第5章 出土遺物	104
例言	第1節 縄文時代の遺物	104
第1章 調査に至る経過	第2節 9世紀の遺物	105
第2章 遺跡の立地と環境	第3節 12世紀の遺物	115
第1節 位置	第4節 中世の遺物	118
第2節 地形	第5節 近世、近代の陶器	120
第3節 基本土層	第6節 近世の磁器	153
第4節 周辺の歴史的環境	第7節 近代の磁器	171
第3章 調査と整理の方法	第8節 ガラス製品	183
第1節 野外調査の経過	第9節 石製品	197
第2節 室内整理の経過	第10節 木製品	204
第3節 野外調査の方法	第11節 金属製品	208
第4節 室内整理の方法	第12節 土製品	215
第4章 検出した遺構	第6章 付編	217
第1節 竪穴建物	第1節 1次調査検出の近世墓	
第2節 掘立柱建物	について	217
第3節 井戸、土坑	第2節 下構屋敷の墓石について	226
第4節 倒木痕	第3節 下構屋敷佐藤家の伝世品	
第5節 溝	について	235
第6節 焼土	第4節 下構屋敷系図稿本について	238
第7節 梅の木、柿の木	第7章 まとめ	245
	写真図版	249
	報告書抄録	388

〈図版・表目次〉

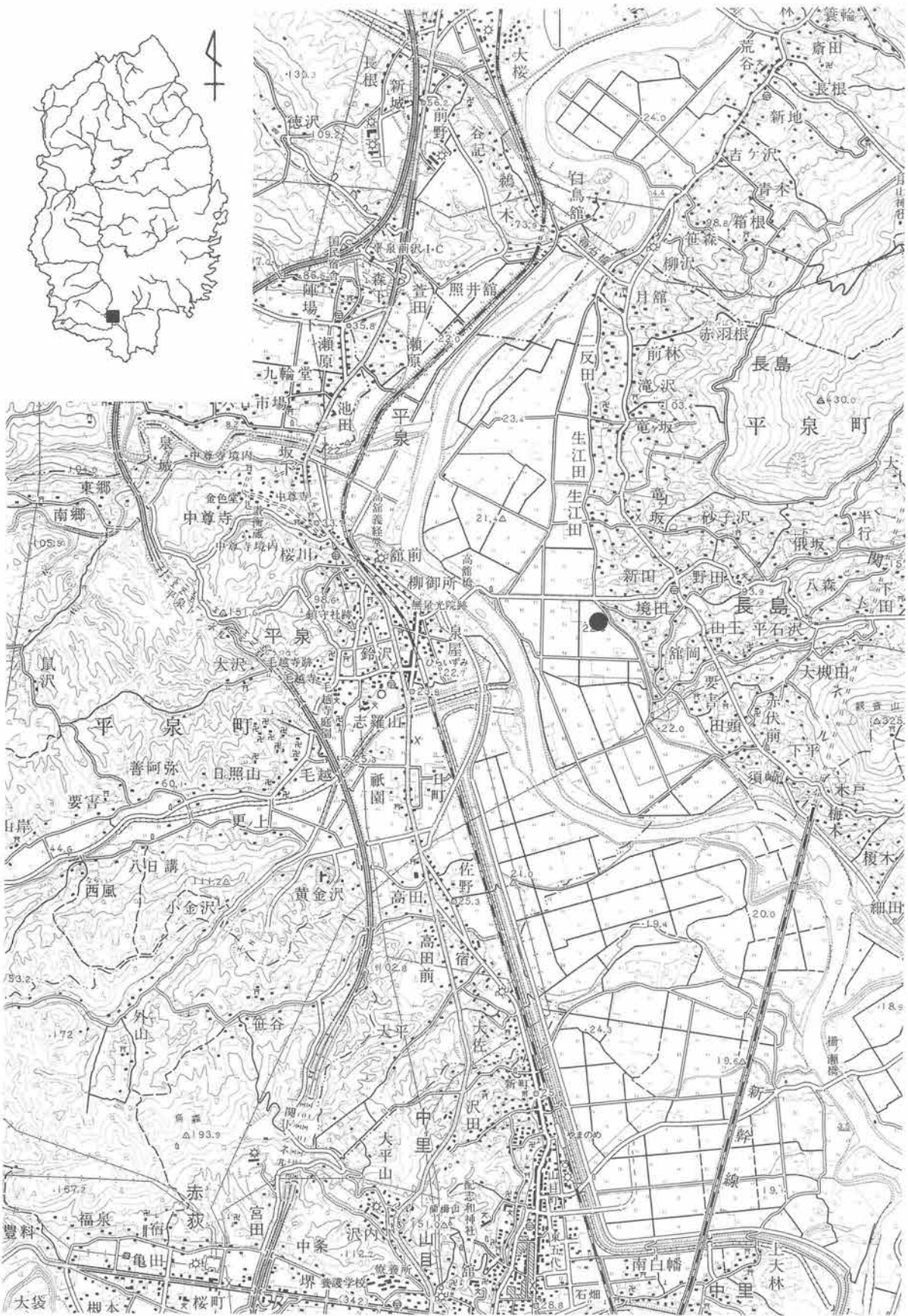
第1図 遺跡位置図 …………… 1	第50図 SK 31、35、36、37、38、39、40、41 …… 80
第2図 遺跡周辺の地形 …………… 2	第51図 SK 45、46、47、48、49 …………… 84
第3図 地形分類図 …………… 4	第52図 SK 50、51、53、54 …………… 86
第4図 基本土層 …………… 5	第53図 1号、2号倒木痕 …………… 89
第5図 平泉町遺跡分布図 …………… 7	第54図 3号、4号倒木痕 …………… 90
第6図 下田窯製品（吉家家所蔵品） …………… 9	第55図 SD断面図（SD 1～12） …………… 92
第7図 下田窯製品、窯道具（窯跡採集品） …………… 10	第56図 1号、2号、3号、4号、5号焼土 …………… 97
第8図 下田窯製品と推測される陶器 …………… 11	第57図 縄文時代の遺物（1～4） …………… 105
第9図 赤荻窯採集品・伝天王小森窯製品 …………… 12	第58図 S I 1 出土遺物①（101～107） …………… 106
第10図 下構遺跡遺構配置 …………… 16	第59図 S I 1 出土遺物②（107～110） …………… 107
第11図 S I 1 …………… 18	第60図 S I 2 出土遺物①（111～119） …………… 108
第12図 S I 1 カマド …………… 19	第61図 S I 2 出土遺物②（120～124） …………… 109
第13図 S I 2、SK 52 …………… 20	第62図 S I 2 出土遺物③（125） …………… 110
第14図 掘立柱建物位置図 …………… 21	第63図 S I 2 出土遺物④（126～153） …………… 111
第15図 SB 1 …………… 24	第64図 2号焼土出土遺物（154～159） …………… 113
第16図 SB 2 …………… 25	第65図 2号、3号、4号焼土出土遺物 遺構外の土師器、須恵器（160～167） …… 114
第17図 SB 3 …………… 27	第66図 12世紀のかわらけ（201～221） …………… 116
第18図 SB 4 …………… 28	第67図 12世紀の国産陶器①（222～237） …………… 117
第19図 SB 5、6 …………… 29	第68図 12世紀の国産陶器②・中国産磁器 中世の古瀬戸（238～253） …………… 119
第20図 SB 7 …………… 31	第69図 近世、近代の陶器①（1001～1020） …………… 129
第21図 SB 8 …………… 33	第70図 近世、近代の陶器②（1021～1042） …………… 130
第22図 SB 9 …………… 34	第71図 近世、近代の陶器③（1043～1045） …………… 131
第23図 SB 10 …………… 35	第72図 近世、近代の陶器④（1046～1054） …………… 132
第24図 SB 11 …………… 37	第73図 近世、近代の陶器⑤（1055～1060） …………… 133
第25図 SB 12① …………… 39	第74図 近世、近代の陶器⑥（1061～1071） …………… 134
第26図 SB 12② …………… 40	第75図 近世、近代の陶器⑦（1072～1084） …………… 135
第27図 SB 13 …………… 41	第76図 近世、近代の陶器⑧（1085～1091） …………… 136
第28図 SB 14 …………… 42	第77図 近世、近代の陶器⑨（1092～1106） …………… 137
第29図 SB 15 …………… 43	第78図 近世、近代の陶器⑩（1107～1115） …………… 138
第30図 SB 16 …………… 45	第79図 近世、近代の陶器⑪（1116～1118） …………… 139
第31図 SB 17 …………… 47	第80図 近世、近代の陶器⑫（1119～1124） …………… 140
第32図 SB 18 …………… 48	第81図 近世、近代の陶器⑬（1125～1135） …………… 141
第33図 SB 19 …………… 49	第82図 近世、近代の陶器⑭（1136～1144） …………… 142
第34図 SB 20 …………… 51	第83図 近世、近代の陶器⑮（1145～1153） …………… 143
第35図 SB 21 …………… 52	第84図 近世、近代の陶器⑯（1154～1158） …………… 144
第36図 SB 22 …………… 53	第85図 近世、近代の陶器⑰（1159～1160） …………… 145
第37図 SB 23 …………… 55	第86図 近世、近代の陶器⑱（1161～1163） …………… 146
第38図 SB 24 …………… 56	第87図 近世、近代の陶器⑲（1164～1167） …………… 147
第39図 SE 1 …………… 58	第88図 近世、近代の陶器⑳（1168～1173） …………… 148
第40図 SK 1 …………… 60	第89図 近世、近代の陶器㉑（1174～1186） …………… 149
第41図 SK 2、3 …………… 62	第90図 近世、近代の陶器㉒（1187～1193） …………… 150
第42図 SK 4、5 …………… 64	第91図 近世、近代の陶器㉓（1194～1204） …………… 151
第43図 SK 5、6、7、8、9、10 …………… 66	第92図 近世、近代の陶器㉔（1205～1207） …………… 152
第44図 SK 11、12、13、14 …………… 68	第93図 近世、近代の陶器㉕（1208～1209） …………… 153
第45図 SK 15① …………… 70	第94図 近世の磁器①（1301～1312） …………… 159
第46図 SK 15② …………… 71	第95図 近世の磁器②（1313～1328） …………… 160
第47図 SK 16、17、18、19、20、21 …………… 73	第96図 近世の磁器③（1329～1341） …………… 161
第48図 SK 22、23、24、25、26、32 …………… 76	第97図 近世の磁器④（1342～1353） …………… 162
第49図 SK 27、28、29 …………… 78	

第 98 図	近世の磁器⑤ (1354 ~ 1364)	163	第 132 図	金属製品② (1910 ~ 1927)	211
第 99 図	近世の磁器⑥ (1365 ~ 1379)	164	第 133 図	金属製品③ (1928 ~ 1942)	212
第 100 図	近世の磁器⑦ (1380 ~ 1393)	165	第 134 図	銭貨① (1943 ~ 1954)	213
第 101 図	近世の磁器⑧ (1394 ~ 1397)	166	第 135 図	銭貨② (1955 ~ 1966)	214
第 102 図	近世の磁器⑨ (1398 ~ 1407)	167	第 136 図	土製品 (2001 ~ 2008)	216
第 103 図	近世の磁器⑩ (1408 ~ 1415)	168	第 137 図	1次調査墓墳	218
第 104 図	近世の磁器⑪ (1416 ~ 1427)	169	第 138 図	1次調査出土遺物①	221
第 105 図	近世の磁器⑫ (1428 ~ 1441)	170	第 139 図	1次調査出土遺物②	222
第 106 図	近代の磁器① (1442 ~ 1449)	175	第 140 図	1次調査出土遺物③	223
第 107 図	近代の磁器② (1450 ~ 1465)	176	第 141 図	1次調査出土遺物④	224
第 108 図	近代の磁器③ (1466 ~ 1480)	177	第 142 図	1次調査出土遺物⑤	225
第 109 図	近代の磁器④ (1481 ~ 1496)	178	第 143 図	下構屋敷墓石模式図①	228
第 110 図	近代の磁器⑤ (1497 ~ 1505)	179	第 144 図	下構屋敷墓石模式図②	229
第 111 図	近代の磁器⑥ (1506 ~ 1513)	180	第 145 図	下構屋敷墓石模式図③	230
第 112 図	近代の磁器⑦ (1514 ~ 1515)	181	第 146 図	墓石拓影図①	231
第 113 図	近代の磁器⑧ (1516 ~ 1519)	182	第 147 図	墓石拓影図②	232
第 114 図	近代の磁器⑨ (1520 ~ 1524)	183	第 148 図	墓石拓影図③	233
第 115 図	ガラス製品① (1601 ~ 1621)	189	第 149 図	墓石拓影図④	234
第 116 図	ガラス製品② (1622 ~ 1631)	190	第 150 図	中世板碑拓影図	235
第 117 図	ガラス製品③ (1632 ~ 1642)	191	第 151 図	佐藤家所蔵の和鏡①	236
第 118 図	ガラス製品④ (1643 ~ 1647)	192	第 152 図	佐藤家所蔵の和鏡②	237
第 119 図	ガラス製品⑤ (1648 ~ 1652)	193	第 153 図	河川台帳副本に載る下構屋敷	247
第 120 図	ガラス製品⑥ (1653 ~ 1658)	194	柱穴計測表①	100	
第 121 図	ガラス製品⑦ (1659 ~ 1669)	195	柱穴計測表②	101	
第 122 図	ガラス製品⑧ (1670 ~ 1677)	196	柱穴計測表③	102	
第 123 図	石製品① (1701 ~ 1710)	198	柱穴計測表④	103	
第 124 図	石製品② (1711 ~ 1718)	199	近世墓石観察表	227	
第 125 図	石製品③ (1719 ~ 1720)	200	下構屋敷人員構成表	243	
第 126 図	石製品④ (1721)	201	付図 下構遺跡遺構配置図 (全体)		
第 127 図	石製品⑤ (1722)	202	下構遺跡主要部分遺構配置図		
第 128 図	石製品⑥ (1723)	203			
第 129 図	木製品① (1801 ~ 1806)	206			
第 130 図	木製品② (1807 ~ 1812)	207			
第 131 図	金属製品① (1901 ~ 1909)	210			

〈写真図版目次〉

写真図版 1	調査区遠景・調査区全景	251	写真図版 49	S B 23、S B 24 柱穴断面	299
写真図版 2	S B 11 完掘・小島村細見全図	252	写真図版 50	S E 1	300
写真図版 3	12 世紀の陶磁器、 古瀬戸・肥前産磁器碗	253	写真図版 51	S K 1	301
写真図版 4	大堀相馬、切込産徳利・ビール瓶、 サイダー瓶	254	写真図版 52	S K 2	302
写真図版 5	航空写真①	255	写真図版 53	S K 3、4、5	303
写真図版 6	航空写真②	256	写真図版 54	S K 5、6、7、8	304
写真図版 7	基本土層・S B 1 完掘	257	写真図版 55	S K 9、10、11、12	305
写真図版 8	S B 2、3 完掘	258	写真図版 56	S K 13、14、15	306
写真図版 9	S B 4、5 完掘	259	写真図版 57	S K 15	307
写真図版 10	S B 6、7 完掘	260	写真図版 58	S K 15、16、17	308
写真図版 11	S B 8、9 完掘	261	写真図版 59	S K 18、19、20、21	309
写真図版 12	S B 10、11 完掘	262	写真図版 60	S K 22、23、24、25	310
写真図版 13	S B 11、14、12 完掘	263	写真図版 61	S K 26、27、28、29	311
写真図版 14	S B 14、15 完掘	264	写真図版 62	S K 29、31、32、35、37	312
写真図版 15	S B 16、14 完掘	265	写真図版 63	S K 37、38、39、40、41	313
写真図版 16	S B 17、18 完掘	266	写真図版 64	S K 41、45、46、47、48	314
写真図版 17	S B 19、20 完掘	267	写真図版 65	S K 48、49、50、51	315
写真図版 18	S B 21、22 完掘	268	写真図版 66	S K 52、53、54	316
写真図版 19	S B 23、24 完掘	269	写真図版 67	1～4 号倒木痕	317
写真図版 20	S I 1、2 完掘	270	写真図版 68	S D 1、2	318
写真図版 21	S I 1	271	写真図版 69	S D 3、4	319
写真図版 22	S I 2	272	写真図版 70	S D 5、6、7、8	320
写真図版 23	掘立柱建物完掘 (S B 1～8)	273	写真図版 71	S D 8、9、10	321
写真図版 24	掘立柱建物完掘 (S B 9～16)	274	写真図版 72	S D 10、11、12	322
写真図版 25	掘立柱建物完掘 (S B 17～24)	275	写真図版 73	1～4 号焼土	323
写真図版 26	S B 1 柱穴断面	276	写真図版 74	下構屋敷の梅の木、柿の木	324
写真図版 27	S B 2 柱穴断面	277	写真図版 75	台風 6 号の被害	325
写真図版 28	S B 3 柱穴断面	278	写真図版 76	現地説明会、調査風景など	326
写真図版 29	S B 3 柱穴断面	279	写真図版 77	縄文時代の遺物 (1～4)・古代の遺物① (101～110)	327
写真図版 30	S B 3、S B 4 柱穴断面	280	写真図版 78	古代の遺物② (111～125)	328
写真図版 31	S B 5 柱穴断面	281	写真図版 79	古代の遺物③ (126～167)	329
写真図版 32	S B 6、S B 7 柱穴断面	282	写真図版 80	12 世紀の遺物 (201～253)・近世、 近代の陶器① (1001～1019)	330
写真図版 33	S B 7、S B 9 柱穴断面	283	写真図版 81	近世、近代の陶器② (1020～1047)	331
写真図版 34	S B 7、S B 9、S B 12 柱穴断面	284	写真図版 82	近世、近代の陶器③ (1048～1062)	332
写真図版 35	S B 7、S B 8、S B 9 柱穴断面	285	写真図版 83	近世、近代の陶器④ (1063～1089)	333
写真図版 36	S B 9、S B 10 柱穴断面	286	写真図版 84	近世、近代の陶器⑤ (1090～1106)	334
写真図版 37	S B 10、S B 11 柱穴断面	287	写真図版 85	近世、近代の陶器⑥ (1107～1117)	335
写真図版 38	S B 11 柱穴断面	288	写真図版 86	近世、近代の陶器⑦ (1118～1123)	336
写真図版 39	S B 11 柱穴断面	289	写真図版 87	近世、近代の陶器⑧ (1124～1139)	337
写真図版 40	S B 12 柱穴断面	290	写真図版 88	近世、近代の陶器⑨ (1140～1153)	338
写真図版 41	S B 13 柱穴断面	291	写真図版 89	近世、近代の陶器⑩ (1154～1158)	339
写真図版 42	S B 14 柱穴断面	292	写真図版 90	近世、近代の陶器⑪ (1159～1160)	340
写真図版 43	S B 15、S B 16 柱穴断面	293	写真図版 91	近世、近代の陶器⑫ (1161～1165)	341
写真図版 44	S B 16 柱穴断面	294	写真図版 92	近世、近代の陶器⑬ (1166～1169)	342
写真図版 45	S B 17、S B 20 柱穴断面	295	写真図版 93	近世、近代の陶器⑭ (1170～1180)	343
写真図版 46	S B 20、S B 21 柱穴断面	296	写真図版 94	近世、近代の陶器⑮ (1181～1202)	344
写真図版 47	S B 21、S B 22 柱穴断面	297	写真図版 95	近世、近代の陶器⑯ (1203～1209)	345
写真図版 48	S B 22、S B 23 柱穴断面	298	写真図版 96	近世の磁器① (1301～1321)	346

写真図版 97	近世の磁器② (1322～1346) ……	347	写真図版 119	木製品② (1812)・金属製品① (1901～1927) ……	369
写真図版 98	近世の磁器③ (1347～1375) ……	348	写真図版 120	金属製品② (1928～1952) ……	370
写真図版 99	近世の磁器④ (1376～1393) ……	349	写真図版 121	金属製品③ (1953～1966) ……	371
写真図版 100	近世の磁器⑤ (1394～1407) ……	350	写真図版 122	土製品 (2001～2008)・ 梅の木、柿の木 ……	372
写真図版 101	近世の磁器⑥ (1408～1421) ……	351	写真図版 123	下構遺跡1次調査① ……	373
写真図版 102	近世の磁器⑦ (1422～1441) ……	352	写真図版 124	下構遺跡1次調査② ……	374
写真図版 103	近代の磁器① (1442～1452) ……	353	写真図版 125	下構遺跡1次調査出土遺物① ……	375
写真図版 104	近代の磁器② (1453～1477) ……	354	写真図版 126	下構遺跡1次調査出土遺物② ……	376
写真図版 105	近代の磁器③ (1478～1499) ……	355	写真図版 127	下構遺跡1次調査出土遺物③ ……	377
写真図版 106	近代の磁器④ (1500～1511) ……	356	写真図版 128	下構屋敷の墓石① (1～6) ……	378
写真図版 107	近代の磁器⑤ (1512～1515) ……	357	写真図版 129	下構屋敷の墓石② (7～11) ……	379
写真図版 108	近代の磁器⑥ (1516～1524) ……	358	写真図版 130	下構屋敷の墓石③ (12～20) ……	380
写真図版 109	ガラス製品① (1601～1631) ……	359	写真図版 131	下構屋敷の墓石④ (21～27) ……	381
写真図版 110	ガラス製品② (1632～1644) ……	360	写真図版 132	下構屋敷の墓石⑤ (28～39) ……	382
写真図版 111	ガラス製品③ (1645～1652) ……	361	写真図版 133	下構屋敷の墓石⑥ (40～46)・ 中世板碑 ……	383
写真図版 112	ガラス製品④ (1653～1666) ……	362	写真図版 134	佐藤家伝世品① ……	384
写真図版 113	ガラス製品⑤ (1667～1677) ……	363	写真図版 135	佐藤家伝世品② ……	385
写真図版 114	石製品① (1701～1718) ……	364	写真図版 136	佐藤家伝世品③ ……	386
写真図版 115	石製品② (1719～1721) ……	365	写真図版 137	昭和37年の航空写真 ……	387
写真図版 116	石製品③ (1722) ……	366			
写真図版 117	石製品④ (1722、1723) ……	367			
写真図版 118	木製品① (1801～1811) ……	368			



第1図 遺跡位置図

1 : 50,000 平泉、一関



第2図 遺跡周辺の地形

(平泉町都市計画図 昭和59年製を使用)

第1章 調査に至る経過

下構遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）一関第2地区の施工に伴い、その事業区内に位置することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は西磐井郡平泉町長島地内の323.9haの地区で、現況の水田は昭和30年代に10a区画に整備されたものの、区画形状が小さいうえに農道が狭小なため、農地の流動化や農産物の輸送、大型機械の搬入に支障を来している状況であった。それらの阻害要因を除去し、高生産性農業の確立を図るために大区画ほ場の整備を実施することとして、平成10年度に新規採択されたものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成11年2月2日付一地整第616号により岩手県一関地方振興局農林部農村整備室より岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をし、平成11年4月8日付け教文第34号の回答で、工事範囲内に下構遺跡が含まれていることが確認されたことに始まる。

分布調査結果に基づき農林部農村整備室では、平成12年9月22日付け一農整第345号で教育委員会に試掘調査を依頼した。依頼を受けた県教育委員会では、平成12年10月3日に試掘調査を実施し、その結果、発掘調査が必用なことが判明し、平成12年10月6日付け教文第806号でその旨の回答があったものである。

(岩手県一関地方振興局農林部農村整備室)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 位置

下構遺跡が所在する西磐井郡平泉町は岩手県南部に位置し、北は胆沢郡衣川村と前沢町、南と西は一関市、東は東楡山を境に東磐井郡東山町と接する。町の総面積は63.75 km²で、そのおよそ半分は山林原野が占め、水田・畑地の割合は3割強である。昭和30年代に1万人を超えた人口は、それ以降減少傾向にあって、現在はおよそ9000人強となっている。平泉町には、平安美術の宝庫といわれる「中尊寺」、大規模な浄土庭園を有する「毛越寺」、そして、奥州藤原氏の居館と推測される「柳之御所遺跡」があり、年間200万人以上の観光客が訪れる全国有数の観光地として知られている。平成12年度には、世界遺産の暫定リストに「平泉の文化遺産」として登録され、本登録へ向けた官民一体の様々な活動が展開している。

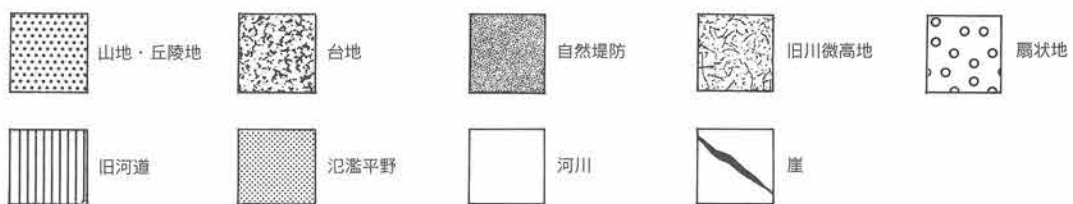
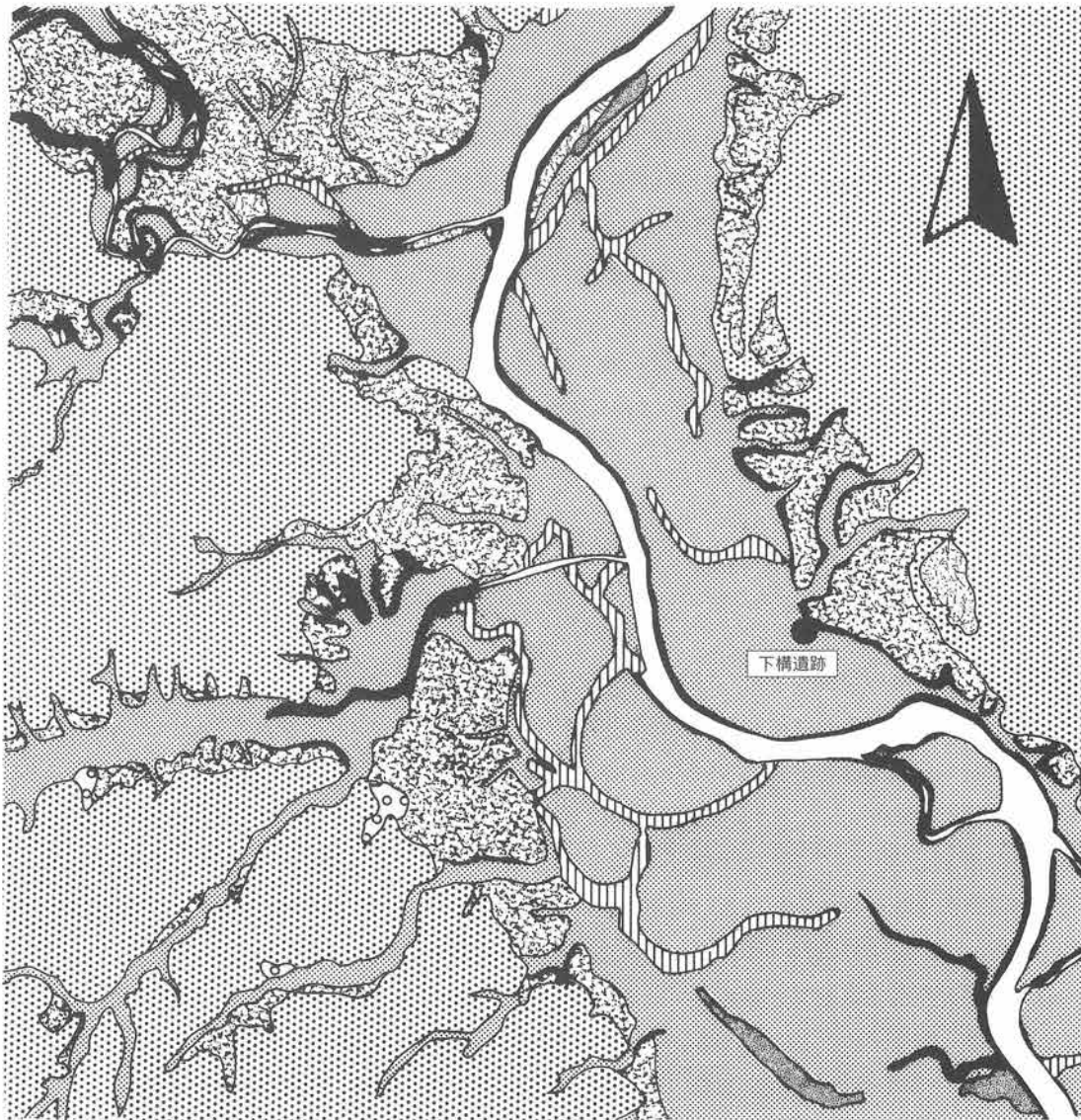
下構遺跡は平泉町大字長島字下構地内に所在する。その位置は、平泉市街から東へ約2 km離れた北上川東岸である。北上川までの直線距離は約600 mである。地形図上の位置は、国土地理院発行の5万分の1地形図「一関」(NJ-54-14-15)及び、2万5千分の1地形図「一関」(NJ54-14-15-1)にある。遺跡の経・緯度は北緯38°59'40"、東経141°7'53"（世界測地系）である。

第2節 地形

平泉町周辺は、東は北上山地、西は奥羽山脈に囲まれ、その中央部を一級河川北上川が南流している。平泉町は北上川の中流域にあたり、北上川によって形成された氾濫平野や、谷底平野、後背湿地などの低地と河岸段丘上にある。

本遺跡は北上川東岸の沖積低地（氾濫平野）と台地の境界付近に位置している。地形分類図上では氾濫平野の上にあるが、周囲の沖積低地よりも約1 mの比高差が高く、沖積低地に半島状に張り出す地形となっている。東側の台地との比高差は約20 mある。遺跡と台地の境界には低地が入り込むことが、現況地形から

読み取れる。調査区内の標高は海拔約 21 m、調査前は水田、畑として利用されていた。



第3図 地形分類図

第3節 基本土層

遺跡調査区内の基本土層は以下の通りである。(6 v ~ 8 v ライン)

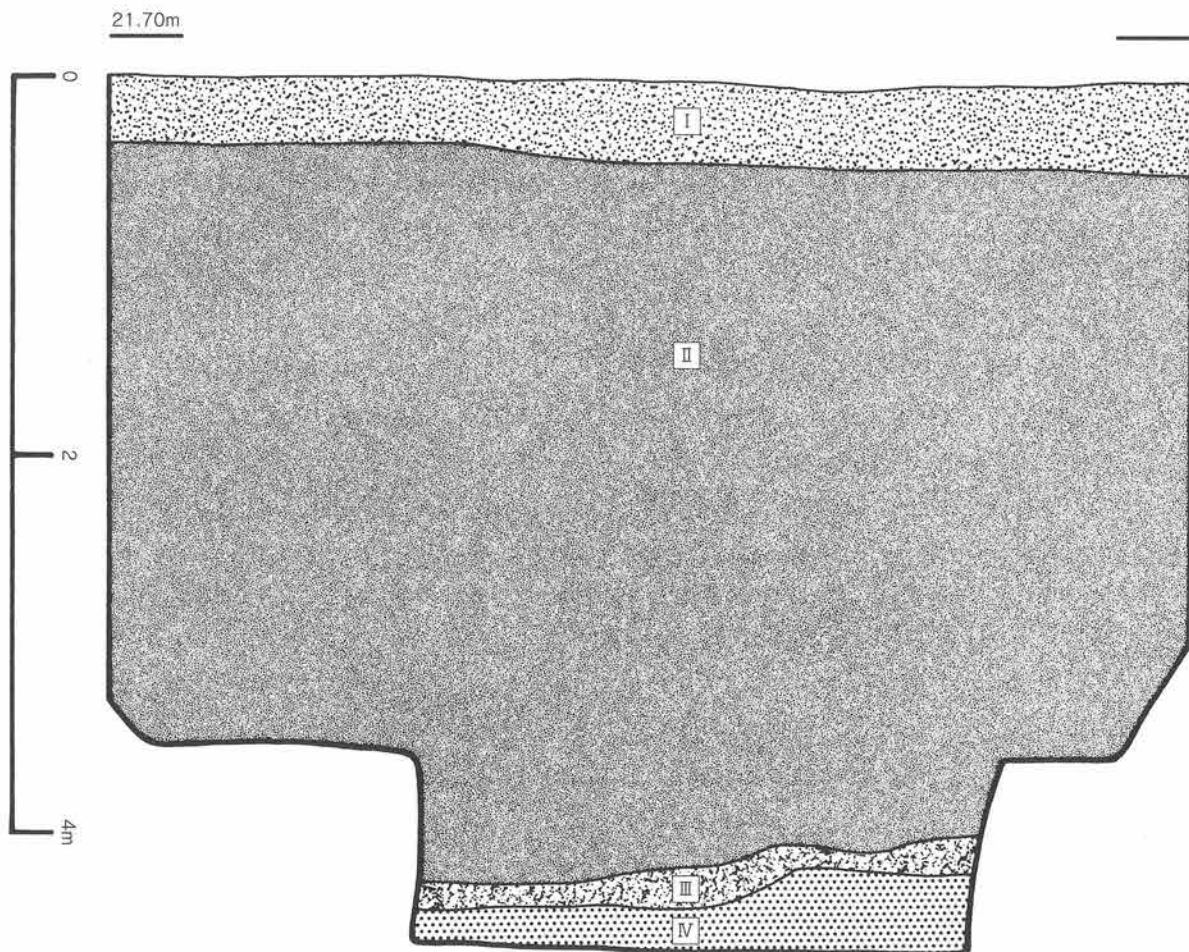
I層 表土、耕作土 10 YR 5 / 3 にぶい黄褐色土 炭化物粒、草根多量に混入 層厚 0 ~ 50 cm

II層 10 YR 5 / 6 黄褐色土 まれに炭化物混じる 粒子がやや粗く、砂のような質感の土
層厚 390 ~ 410 cm

III層 10 YR 6 / 8 明黄褐色土 10 YR 3 / 2 黒褐色土まだらに多量混入 層厚 10 ~ 20 cm

IV層 10 G Y 7 / 1 明緑灰色ローム 層厚 20 cm以上

II層上面が古代~近世、近代までの遺構検出面である。II層以下には、遺物、遺構の存在は見出されなかった。



第4図 基本土層

第4節 周辺の歴史的環境

下構遺跡は平泉町大字長島字下構に所在する。北上川東岸の長島地区（旧長島村）は、昭和30年（1955）に平泉町と合併し、平泉町の大字となった。旧長島村は明治22年（1889）の町村制施行に伴い、長部村と小嶋村が合併し成立したものである。村名の「長島」は長部の「長」と、小島の「島」を組み合わせて合成した地名である。今回の発掘調査では、近世前半に成立した「下構屋敷」に関連する遺構、遺物が多数検出された。「下構屋敷」は小島村に属する屋敷である。よって、ここでは下構遺跡の内容をより深く理解するために、旧小島村の範囲を中心として、歴史的環境、埋蔵文化財包蔵地を記述する。

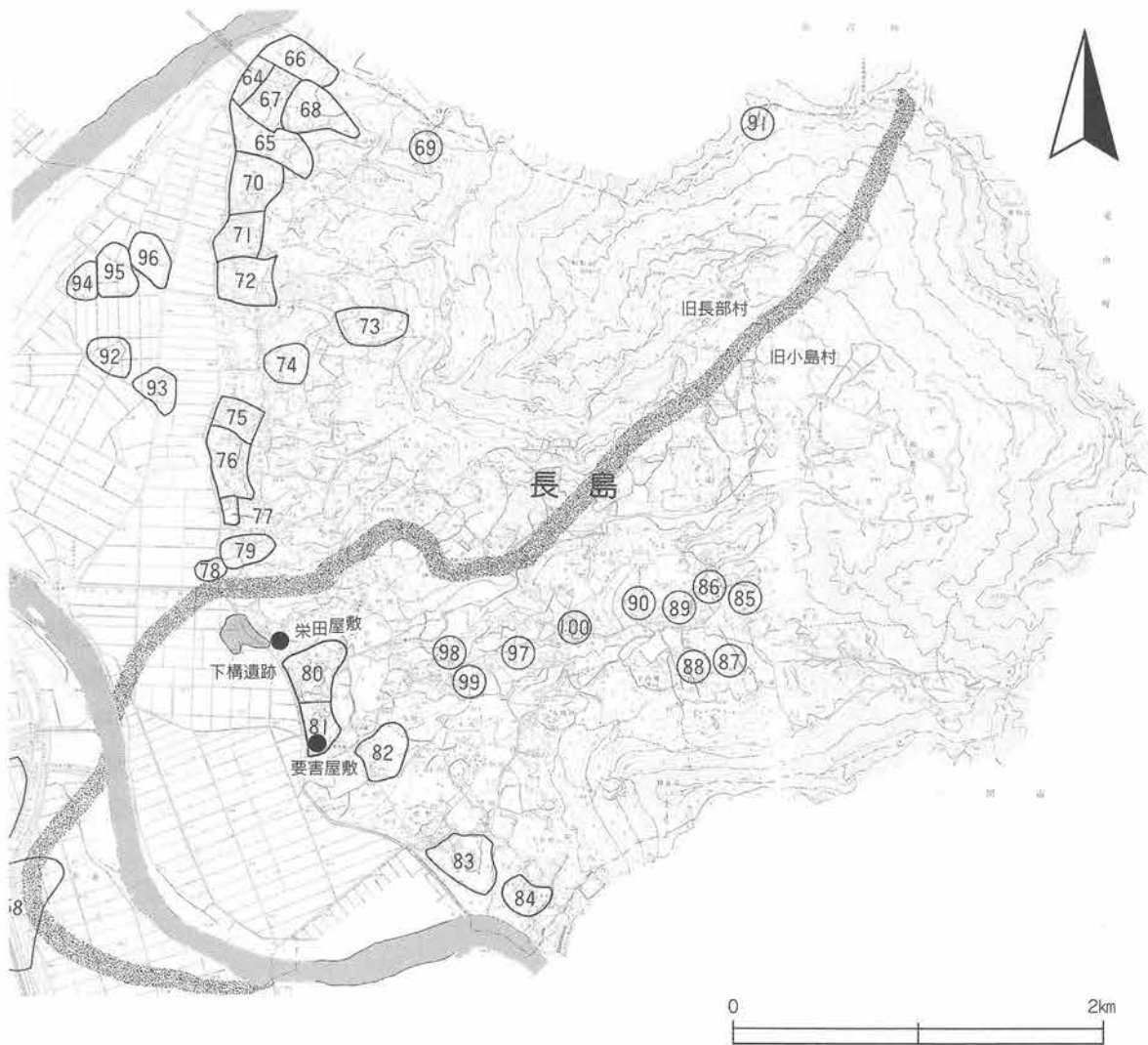
小島（おじま）の地名が文献にみられる最古の事例は、天正7年（1579）に加瀬谷源蔵が軍功により「岩井郡小嶋村之内五千刈」を加増されたとの記述である。また慶長5年（1600）の葛西大崎船止日記には「にしおしまの内 ふね四そう」とある。

藩政時代、小島村は仙台藩領東山南方に属していた。安永年間（1770年代）に仙台藩領の村々に提出させた書き出し「安永風土記」によると、小島村は、人口1209人、家数240軒、田代72貫693文、畑代52貫216文、馬134疋とある。また年貢米を収納し出荷する「御蔵場」が、要害屋敷肝入喜左衛門屋敷内と栄田屋敷市郎左衛門屋敷内の2箇所あると記されている。要害屋敷は現在の字館岡菊地氏宅、栄田屋敷は字境田千田氏宅である。これらは本来であれば、薄衣御本石御蔵、松川雑穀御蔵に納めるべきものを、遠方であるため、許可を得て、自宅の蔵を転用した「自分蔵」であるという。栄田屋敷は下構遺跡から南東約200mの地点に所在する（千田健氏宅）。千田氏の話では昭和8年頃まで御蔵4棟が屋敷内に残存していたということである。

小島地区には下構遺跡を含め16箇所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。中村Ⅰ、中村Ⅱ遺跡は平成10～12年の3ヵ年にわたって、平泉町教育委員会により内容確認を目的とした発掘調査がおこなわれた。調査の結果縄文時代後期、晩期の遺物が多量に確認された。その内容は縄文土器（深鉢、鉢、浅鉢、皿、壺、注口、香炉形）、土偶、耳飾、石器（石鏃、石匙、石斧、石錘、凹石など）、動物遺体、植物遺体である。その他に3遺跡（館岡Ⅱ、下平、下田）が縄文時代の遺跡として登録されているが詳細は不明である。

中世の遺跡には、館岡館（館岡Ⅱ遺跡）、小島館、猪岡館の3ヶ所が城館として確認されている。館岡館は長島字館岡に所在する。下構遺跡からは約600mの近距離である。安永風土記には「古館」とされ、城主、年代ともに不詳と記される。岩手県中世城館跡分布調査報告書（岩手県教委1986）には、「南北に細長い丘陵に堀が3本、南に池があったといわれる平場、主郭（130×120m）」とある。小島館は安永風土記では「古館」とされ、城主小嶋三右衛門で年代は不明とある。岩手県教委1986では、「八幡宮が中央にある主郭（150×140m）東に堀1本。」とある。猪岡館は平成13年度に一関遊水地事業関連工事に係わり、（財）岩手埋文により発掘調査がおこなわれた。調査区は館の南側縁辺部に限定されたものであるが、調査担当者は発掘調査、縄張り図の作成、古地図の読み取りから館全体の構造を推測している。それによると、館は8つの曲輪から構成され、東西350～400m、南北150～200mの規模で、主要部は二重の堀で守られる平城連郭形式の城館としている。これは発掘調査前に認識されていた規模よりもかなり大きく、飯岡館の評価を一変させる成果である。時期については、文書や出土遺物から16世紀中頃から奥州仕置（1591年）の間と推測している。城主は安永風土記などでは猪岡玄蕃と伝えられ、磐井川南岸の猪岡村に拠点を置く葛西氏の家臣猪岡氏の系統と推測される。猪岡館はその規模の広大さと、交通の動脈である北上川の要所を占める点から、猪岡氏の有する居館の中でも、重要度の高いものであった事は疑いない。

また、下西風Ⅰ遺跡、経壇長根遺跡、経壇坂遺跡が「経塚」、下西風Ⅱ遺跡が「塚」として登録されてい



北上川東地区(長島)埋蔵文化財一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別
64	月館Ⅰ遺跡	字月館	散布地
65	新山権現社遺跡	字月館	散布地
66	月館Ⅱ遺跡	字月館	城館地
67	月館Ⅲ遺跡	字月館	散布地
68	東福寺Ⅰ遺跡	字赤羽	寺社
69	東福寺Ⅱ遺跡	字赤羽	根田
70	二反田Ⅰ遺跡	字二反田	城館地
71	二反田Ⅱ遺跡	字二反田	散布地
72	滝ノ沢遺跡	字滝ノ沢	散布地
73	長部館跡	字竜ヶ坂	城館地
74	道綱館跡	字竜ヶ坂	散布地
75	竜ヶ坂遺跡	字竜ヶ坂	散布地
76	佐藤屋敷遺跡	字新田	田館地
77	新田遺跡	字新田	散布地
78	矢崎Ⅰ遺跡	字矢崎	散布地
79	矢崎Ⅱ遺跡	字矢崎	散布地
80	踏岡Ⅰ遺跡	字踏岡	他館地
81	踏岡Ⅱ遺跡	字踏岡	他館地
82	小島館跡	字古館	城館地

番号	遺跡名	所在地	種別
83	猶岡館跡	字須崎	城館地
84	下平遺跡	字下平	散布地
85	中村Ⅰ遺跡	字中村	散布地
86	中村Ⅱ遺跡	字中村	散布地
87	下西風Ⅰ遺跡	字下西風	経塚
88	下西風Ⅱ遺跡	字下西風	経塚
89	下田遺跡	字下田	散布地
90	長島焼跡	字下深山	窯跡
91	経塚山遺跡	字深本	経塚
92	本町遺跡	字本町	散布地
93	畑中遺跡	字畑中	散布地
94	里前Ⅰ遺跡	字里前	散布地
95	里前Ⅱ遺跡	字里前	散布地
96	里遺跡	字里	散布地
97	経檀根遺跡	字山谷	経塚
98	経檀坂遺跡	字平石	経塚
99	万福寺跡	字山谷	寺社
100	阿弥陀堂跡	字平石	寺社

平泉町教育委員会 平成10年1月末現在

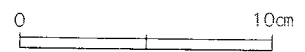
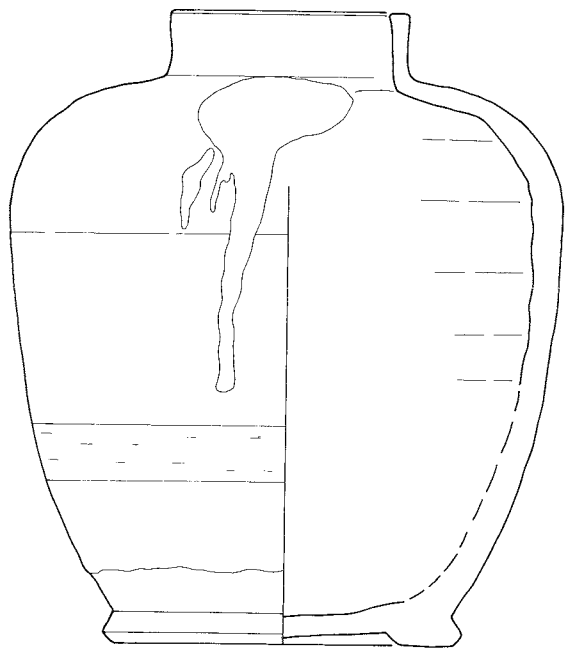
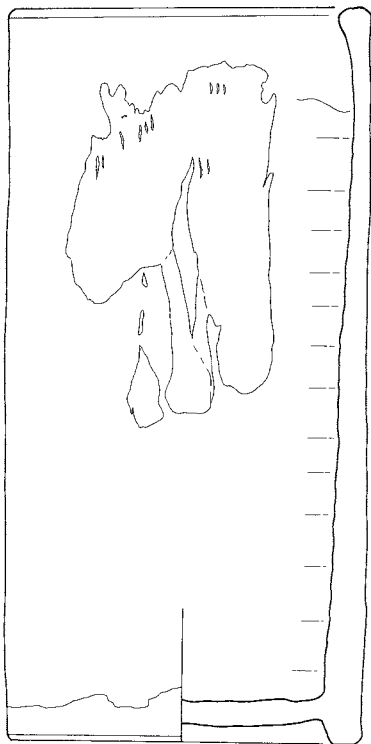
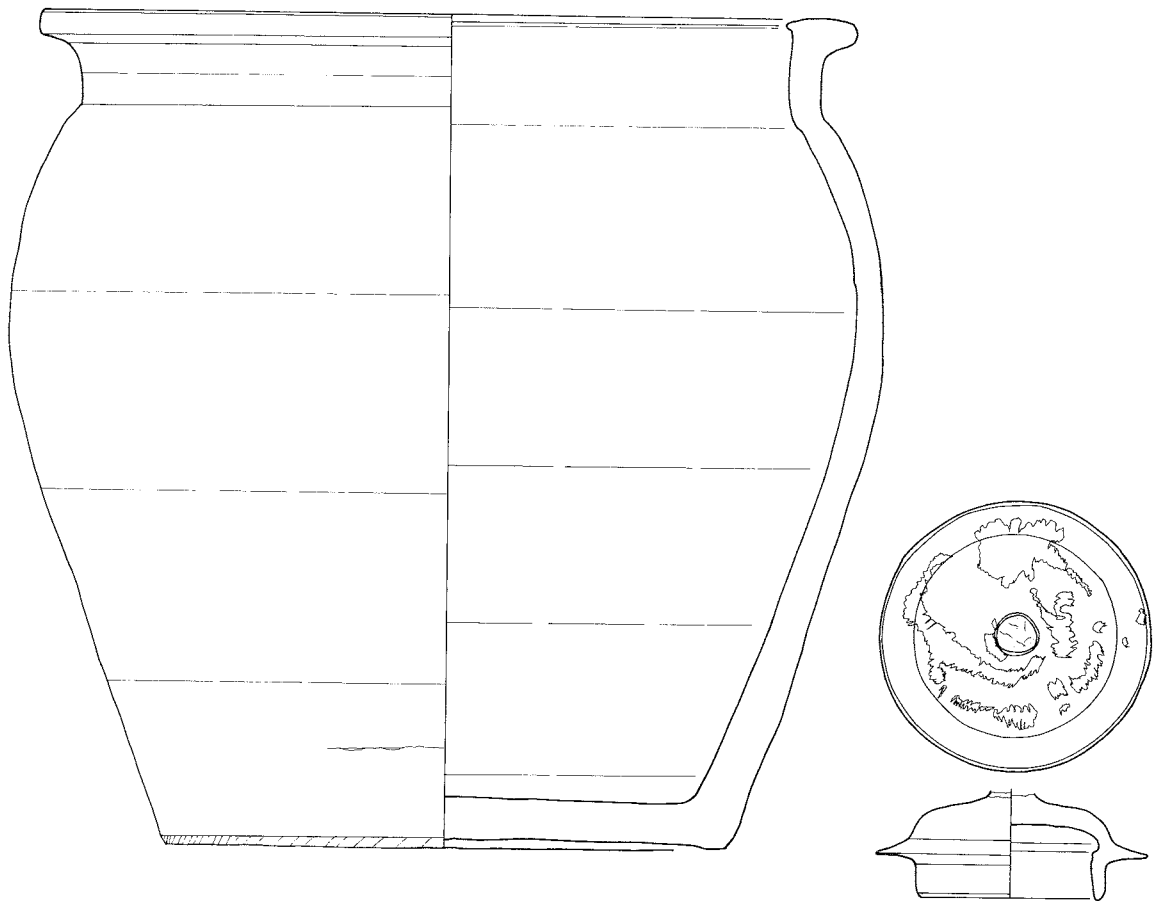
第5図 平泉町遺跡分布図(長島地区)

る。経壇長根遺跡では墨書のある石が採集され、一字一石経塚と推測される。時期は近世の可能性が高い。他の経塚、塚については詳細不明である。万福寺は現在も存在する寺院であるが、前身の堂が存在すると推測され、「万福寺跡」として登録されている。万福寺境内には中世板碑が2基（種子阿弥陀と地藏、いずれも記年銘なし）存在し、中世以来の寺院である可能性は高い。安永風土記では万福寺について、宝永6年（1709）中興で開山の年は不明とある。阿弥陀堂跡は「じごくおえっこ」と称される地獄絵図が納められるお堂であったという。お堂は昭和10年ごろまで存在していたというが、現在その周辺は改変が著しい状態である。

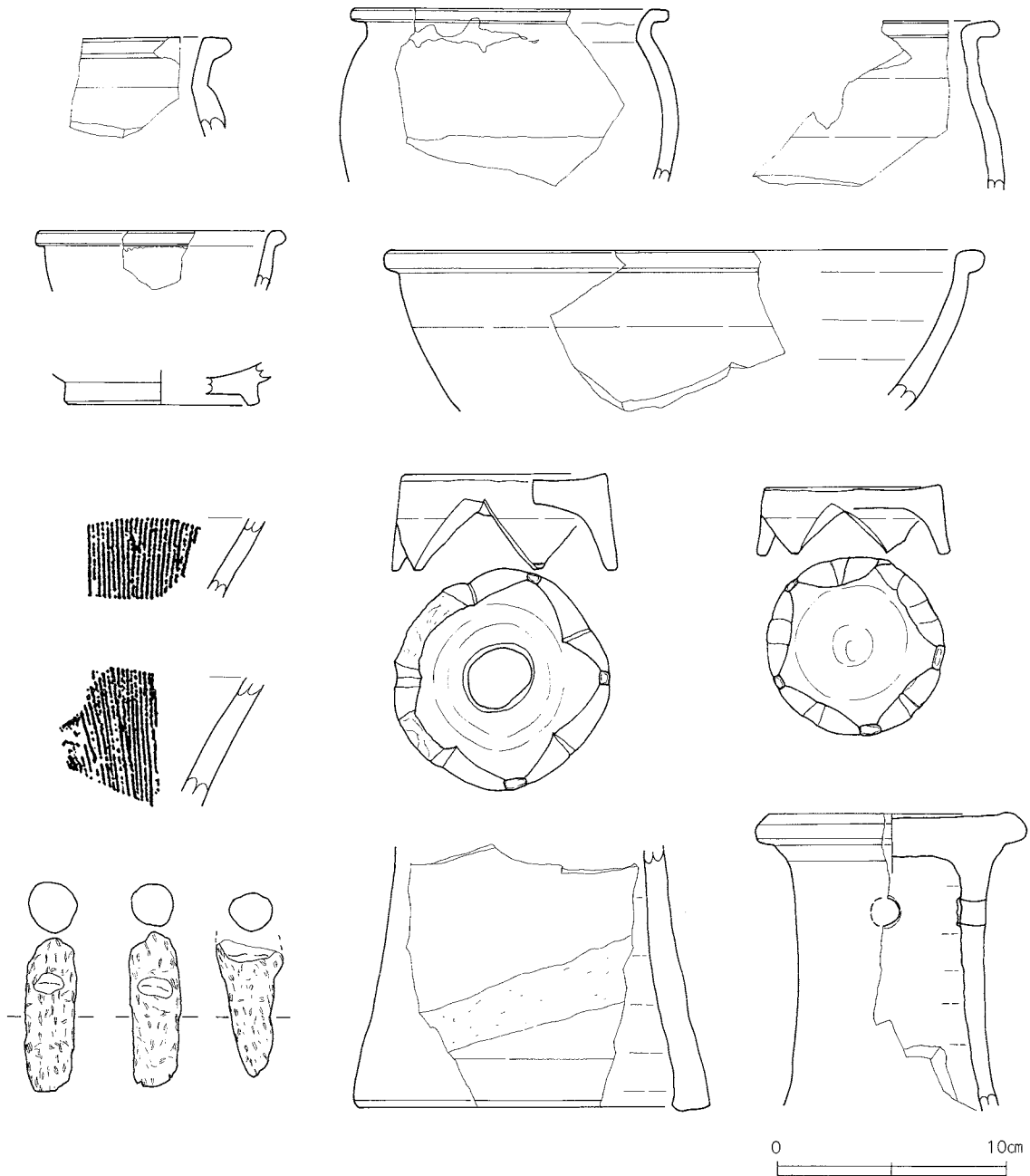
長島焼跡（下田焼窯跡）は嘉永4年（1851）頃から明治3年（1870）頃まで操業した陶器の窯跡である。字下田の吉家（きっか）家の屋敷内に登窯の跡がある。吉家家の屋号は「せとや」であり、窯業を営んだことに由来するものである。本窯は「長島焼」と通称されているが、操業時に「長島」の地名は存在しておらず、字名を用いて「下田焼」と称するのが妥当と考える。図示した陶器、窯道具は吉家家に伝世する資料と、羽柴が窯跡から表採したものである。また下田焼製品の可能性が高いものとして、下長根丸山家と平石沢石川家所蔵の陶器を示した。下長根丸山家も平石沢石川家も小島地区内の旧家で下田窯とは距離が近く、そして陶器自体の特長（器形、胎土、釉調など）も窯跡採集品との類似点が多く、これらが下田焼製品である蓋然性は高いと考える。参考のため近隣の一関市赤荻焼の窯跡採集品と、前沢町天王小森焼焼製品と伝えられる甕を図示した。赤荻焼窯は一関市赤荻に所在し、下構遺跡から直線距離で約8km西にある。文化年間（1810年頃）から操業を開始し大正10年（1921年）頃廃窯したという。図示したものは窯元の荻荘家所蔵のものを羽柴が実測したものである。天王小森焼（古森焼）は、前沢町生母天王に所在する。下構遺跡からは直線距離で約9km北にある。操業開始年代は不明であるが、幕末頃に後藤兵蔵が小久慈焼の技法を会得し、帰郷して開窯したと子孫に伝えられている。廃業は明治30年（1897）頃とされる。図に示した甕は窯元の2軒隣の後藤家所蔵品で、天王小森焼製品と伝えられているものである。昭和49年ごろに後藤家から前沢町教育委員会に寄贈されている。

参考文献

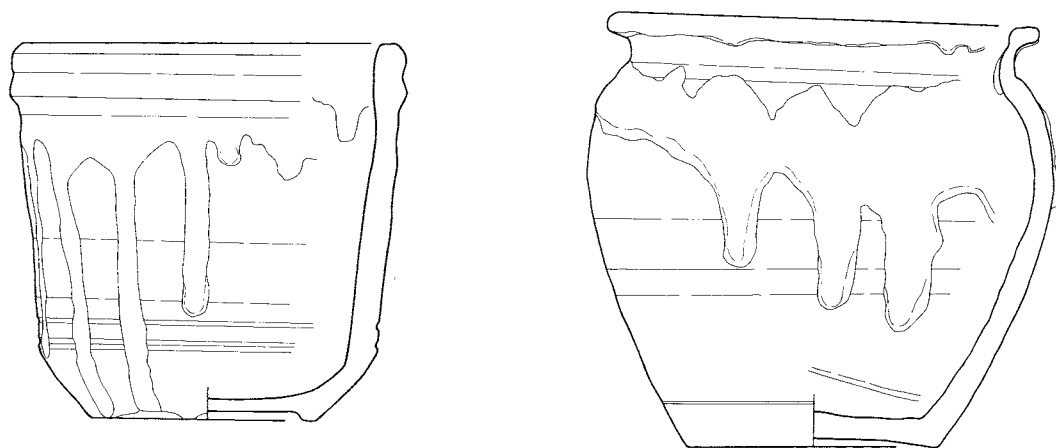
- 岩手県企画開発室 1978 「北上山地開発地域 土地分類基本調査（一関）」 岩手県
- 岩手県教育委員会 1986 「岩手県中世城館跡分布調査報告書」第82集
- 金野清一ほか 1990 「岩手県の地名」日本歴史地名体系3 平凡社
- （財）岩手埋文 2002 「里遺跡発掘調査報告書」第383集
- （財）岩手埋文 2003 「猪岡館第2次発掘調査報告書」第398集
- 鈴木 透 1992 「前沢歴史散歩 一前沢の文化財一」
- 高橋富雄ほか 1985 「3 岩手県」角川日本地名大辞典 角川書店
- 羽柴直人 1997 「事例報告 岩手県2」『東北地方の在出土器・陶磁器Ⅰ』東北中世考古学会第3回研究大会
- 羽柴直人 1998 「岩手県南の播鉢について」『紀要XVIII』（財）岩手埋文
- 平泉町教育委員会 2002 「埋蔵文化財一覧表」『平成14年度 平泉の教育』
- 平泉町教育委員会 2002 「長島中村地区発掘調査略報」第80集
- 平泉町郷土館 1988 「平泉の古絵図」平泉郷土館図録第2冊
- 平泉町史編纂委員会 1993 「平泉町史資料編二」
- 前沢町教育委員会 2000 「町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ 生母地区」第10集
- ※ 小島地区の遺跡、歴史的環境については、平泉町郷土館千葉信胤氏から、多くのご教示を得た。



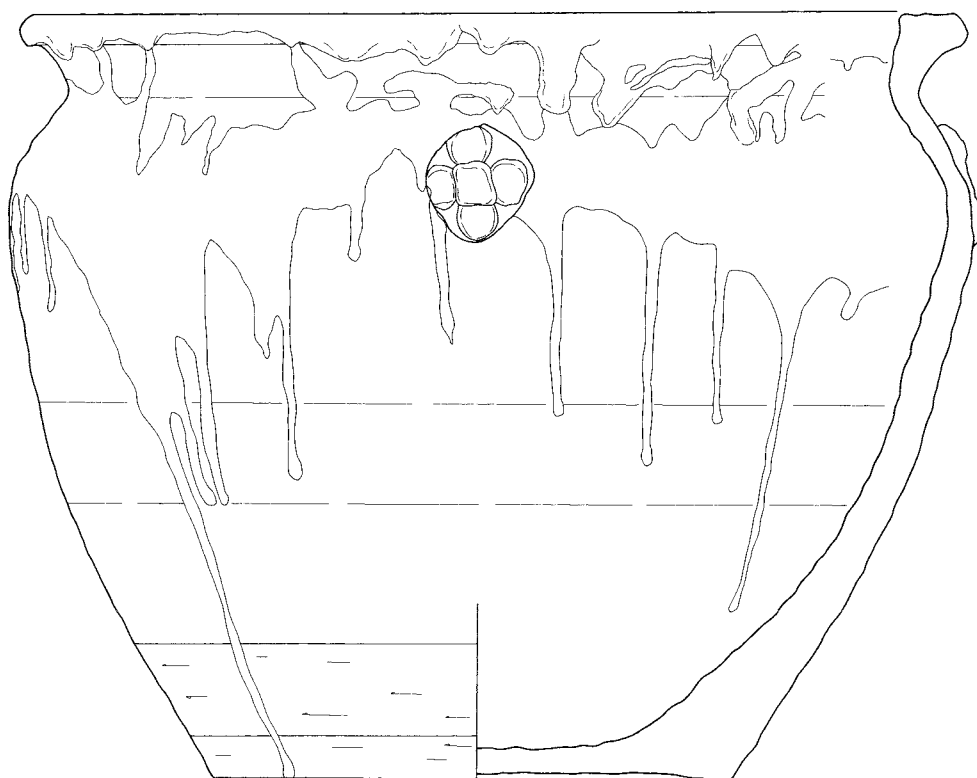
第6図 下田窯製品（吉家家所蔵品）



第7図 下田窯製品、窯道具（窯跡採集品）



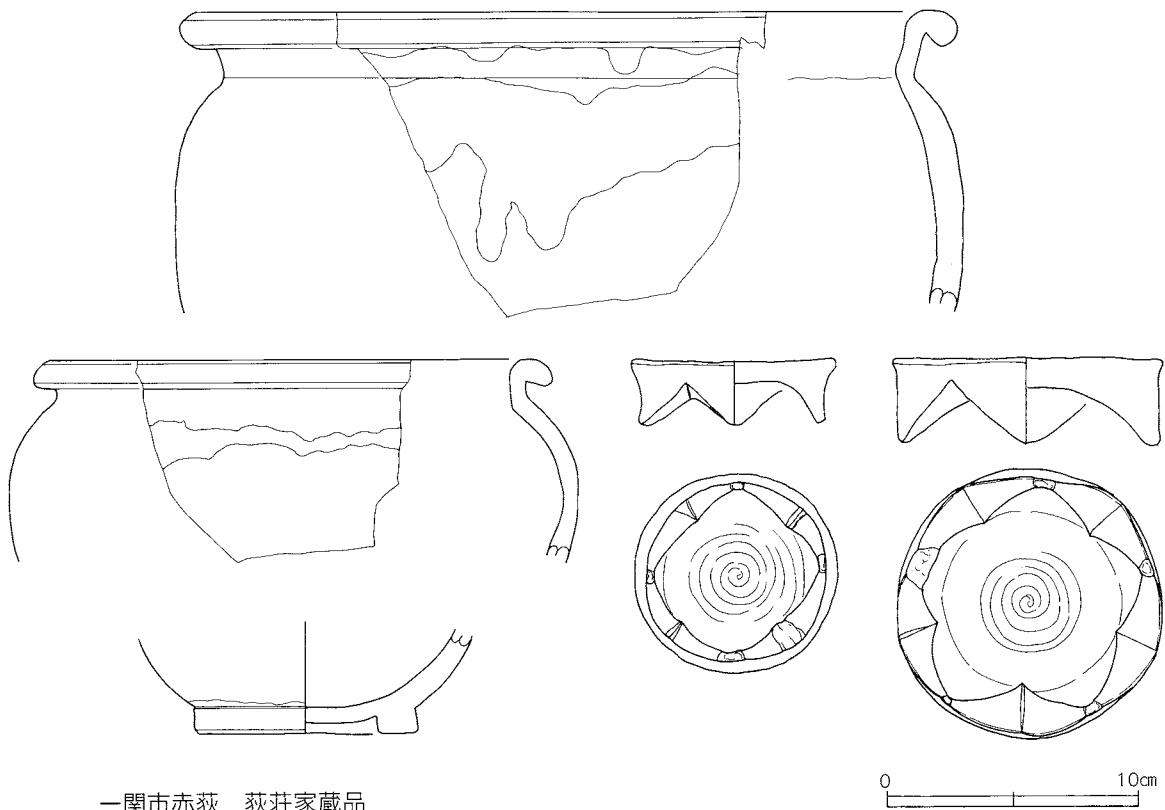
下長根 丸山家蔵品



平石沢 石川家蔵品

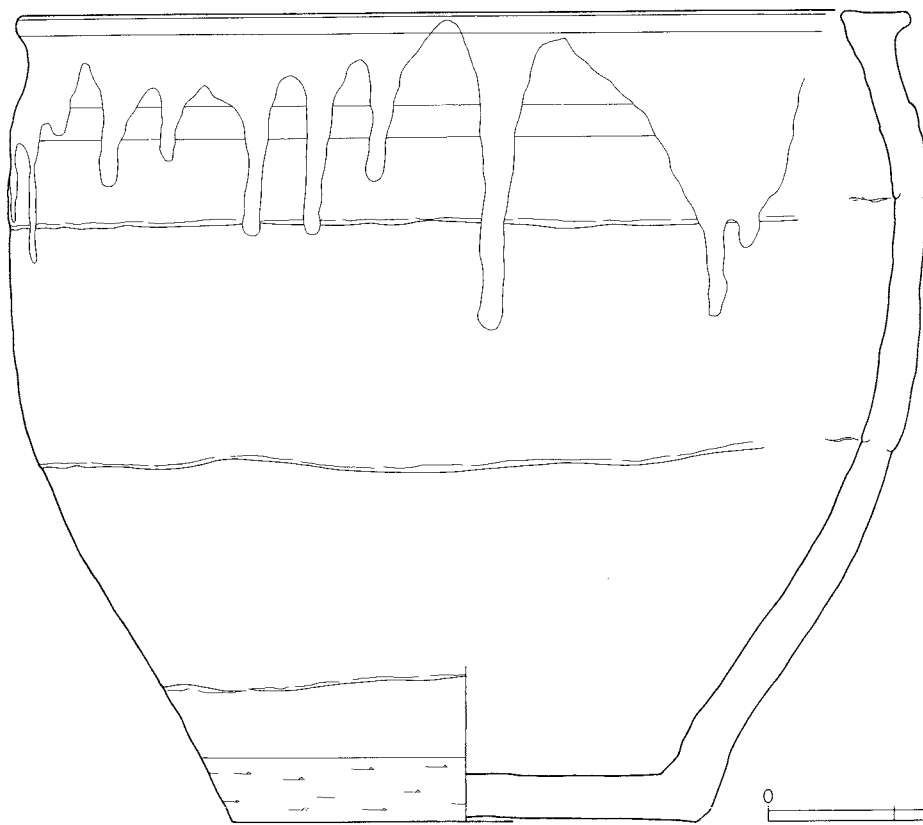


第8図 下田窯製品と推測される製品



一関市赤荻 荻荘家蔵品

0 10cm



前沢町教委蔵品

第9図 赤荻窯採集品・伝天王小森窯製品

0 10cm

第3章 調査と整理の方法

第1節 野外調査の経過

下構遺跡第2次調査の野外調査は、平成14年4月12日から10月18日までおこなわれた。発掘調査面積は10,000㎡、調査担当者は羽柴直人と立花公志である。

4月12日（金）、雨天の中、8時45分より埋文センターにて機材の積み込みをおこない、11時より下構遺跡現地において器材の積み下ろしをおこなった。4月15日（月）より人力による粗掘りと平行して重機による粗掘を開始した。バックホー、キャリアダンプは（有）阿部組（平泉町志羅山）に委託した。重機粗掘は4月30日（火）まで（稼働10日間）おこない、調査区南側約6000㎡の粗掘を終了した。また、興国設計株式会社に委託していた基準杭設置が4月17日（水）に完了した。それに伴い、粗掘終了箇所より順次、5m又は、10mメッシュでグリッド杭の設置をおこなった。

5月7日（火）より遺構検出を開始した。遺構検出は5月29日（水）に約6500㎡分を終了した。実働に日数は約15日である。5月30日（木）より検出した遺構の精査を開始した。遺構は掘立柱建物を後回しにして、土坑、溝等の精査を先行しておこなった。

7月11日（木）、台風6号が岩手県に接近し、遺跡内の冠水が予想され、朝7時にプレハブより実測図面、測量器材、カメラ等を搬出した。その後、北上川の水位の上昇が顕著になり、午前10時には遺物、その他器材を遺跡内から搬出を開始した。伴出途中から調査区に水が押し寄せ始め、11時頃には調査区全体が冠水した。プレハブ内にはまだ器材が残っていたが、これ以上の作業は危険と判断し撤退した。水位はその後も上昇を続け、夜にはプレハブの窓の上30cmまで冠水し、屋根のみが水面に突き出している状態であった。翌12日、ようやく水位は低下を始め、午前11時頃はプレハブの窓の上端が現れ、午後4時には床下まで水位が低下し、調査区内に足を踏み入れることが可能になった。翌13日は土曜日であったが、作業員に集合してもらい、プレハブ内の清掃をおこなった。多くの器材、消耗品が冠水したが、遺物、実測図面、撮影フィルムはすべて搬出しており無事であった。翌週7月15日（月）には台風7号が接近し、雨天のため調査区内の復旧作業は中断せざるを得なかった。17日（水）に天候が回復し、調査区内に散乱するブルーシート、土嚢、土砂の片付けを開始した。復旧作業は22日（月）まで続けた。

7月23日（火）からは気を取り直し、遺構精査を再開した。7月24日（水）からは掘立柱建物の精査を開始した。7月29日（月）からは掘立柱建物の精査と並行して、未了であった調査区北側（約3500㎡）の重機による粗掘を開始した。重機粗掘は8月7日（水）（実働8日）に終了した。粗掘終了後、南側の遺構精査を一時中断し、北側の遺構の検出を開始した。北側部分は遺構の数が少なく、遺構検出は8月9日（金）に終了した。

8月10日（土）より8月18日（日）までお盆休みとし、調査を中断した。8月19日（月）より調査を再開し、以後9月19日（木）まで遺構の精査を続けた。9月10日（火）には東邦航空株式会社に委託して、セスナ機による航空写真の撮影をおこなった。また9月12日（木）から9月19日まで調査区内の地形測量をおこなった。そして、9月21日（土）に10時30分～12時まで現地説明会をおこなった。参加者は約127名であった。この段階で、第1検出面（Ⅱ層上面）の調査は概ね終了したことになる。

現説終了後9月25日（水）より、縄文時代の遺構の有無を確かめるために、重機を使用してⅡ層の掘り下げをおこなった。掘り下げは10月8日（火）（稼働8日）までおこなったが、遺構、遺物は全く検出されず、Ⅱ層以下には遺構が存在しないと判断された。それを受けて10月9日（水）に終了確認をおこない、埋め戻し、調査終了日を打ち合わせた。10月10日（木）から10月17日（木）まで深堀部分の埋め戻しを行い。10月18日（金）午前中に器材をトラックに積み込み、野外調査を終了した。

第2節 室内整理の経過

下構遺跡2次調査の室内整理は、平成14年11月1日（金）から平成15年3月31日（月）までおこなった。整理担当者は羽柴直人と立花公志、室内作業員は5名である。11月1日に打合せ後、遺物の選別が完全には未了の状態であったが、遺物実測（ガラス製品）を開始した。その後、羽柴は11月19日（火）まで一関市楊生新城館跡の野外調査、立花は11月29日（金）まで北上市大橋遺跡の野外調査に出向いている。その間、室内作業員は遺物の実測を続けていた。

11月20日（水）から羽柴が内勤になり、未選別の出土遺物の仕分けを開始した。11月29日には遺物の仕分け、掲載遺物の選択、台帳登録が終了した。その後、羽柴は遺構の第2原図作成を開始し、作業員は引き続き遺物実測を行った。12月27日（金）に遺構第2原図の作成を終了した。また、この日までに陶磁器、ガラス製品の実測が概ね終了した。

12月16日（月）から18日（水）まで羽柴は資料収集のため、平泉町に出張した。下構遺跡の土地所有者である佐藤家を訪ね、先祖について聞き取り、文書、墓石について調査をおこなった。

年が明け、1月6日（月）から遺物（土師器、木製品など）の実測を再開した。1月14日（火）には全ての遺物の実測が終了した。1月15日（水）から拓本の作成を開始し、16日（木）に終了した。1月17日（金）から遺構のトレースを開始した。1月24日（金）に遺構トレースが終了し、同日から引き続き、遺物トレースを開始した。2月12日（水）に遺物トレースを終了し、台紙の作成を行った。2月13日から遺構図版の作成を開始し、2月14日（金）に終了した。2月17日（月）からは遺物図版の作成を開始し、2月21日（金）に終了した。2月23日（日）から遺構写真図版の作成を開始し、2月28日（金）に終了した。

3月に入り、遺物の観察表、柱穴の計測表を開始し、3月14日（金）に概ね終了した。3月4日（火）から遺物写真の撮影を開始し、3月 日に終了した。遺物写真は現像終了のものから順次、処理をおこない、遺物写真図版の作成を進め、概ね3月28日（金）に終了した。

3月17日（月）からは遺物、写真、実測図の収納の台帳作りを開始し、3月28日（金）までに終了した。12月中頃より、羽柴は随時、原稿の作成、編集作業をおこなっており、3月31日（月）までに概ね終了した。

第3節 野外調査の方法

1 グリッドの設定

グリッドは平面直角座標のX系に沿って設定した。グリッドは一辺5mとしている。グリッドの基点（1a）は $X = -111960,000\text{ m}$ 、 $Y = 26190,000\text{ m}$ （世界測地系）とし、ここからグリッドは北に向かって5mおきに小文字のアルファベット（a、b、c、d・・・y、z）、東に向かってアラビア数字（1、2、3・・・）とし、その組み合わせでグリッドを示している。グリッドの名称はその南西隅の杭の名称による。

2 遺構の名称

遺構の名称は以下のように略号を付した。

掘立柱建物・・・SB 竪穴建物・・・SI 井戸・・・SE 土坑・・・SK 溝・・・SD 柱穴・・・P

また、立木の抜根痕を「倒木根」、現地性焼土を「焼土」とし、略号を付していない。

また、調査時にSKとしたものの幾つかを、検討の結果、掘立柱建物の柱穴に変更しているが、名称はSKのまままで報告している。それからSK 30は欠番となっている。

3 粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを設定し、遺物の包含状況、遺構の確認面を把握した。その後、遺構確認面まで重機を用いて表土を除去した。遺物を多く包含する層に関しては人力によって表土の除去をした。遺構の確認は表土を除去した面をジョレン、両刃鎌で、平滑にしプランを確認するようにした。

4 遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げを基本とした。掘立柱建物は、平面プランを把握した後に、柱穴の断ち割りをを行うようにした。

5 遺物の取り上げ

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

6 実測・写真撮影

平面実測は簡易遣り方測量で、5mグリッドを1mに細分したメッシュを用いておこなった。原則として1/20の縮尺を用い、必用に応じて任意の縮尺を用いた。

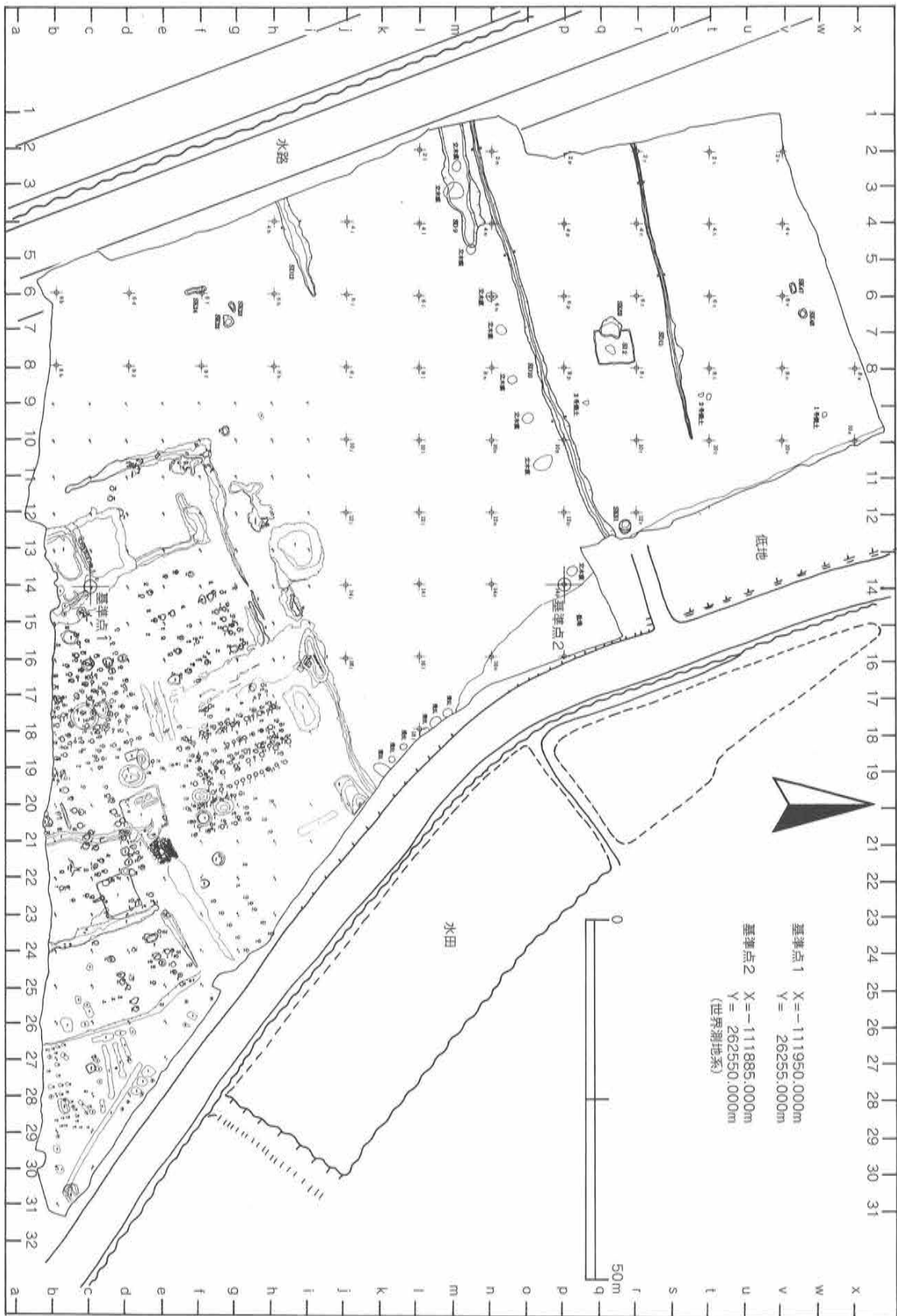
写真撮影は35mmモノクロームとカラーライドを主に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行った。また調査終了時にはセスナ機により空中写真を撮影した。

第4節 室内整理の方法

出土遺物は水洗注記を行い、必用なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選び出し、登録をおこなった。

遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で作成した遺構実測図は、必要なものについては第2原図を作成した。その後、これらの遺構、遺物実測図のトレースを行い、種別ごとに観察表と図版を作成した。

撮影したフィルムはネガアルバムにベタ焼きの写真と一組にして収納した。カラーライドはスライドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の撮影を行い、写真図版を作成した。これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。



第10図 下構遺跡遺構配置

第4章 検出した遺構

下構遺跡2次調査で検出した遺構は、竪穴建物（S I）2棟、堀立柱建物（S B）24棟、井戸（S E）1基、土坑（S K）53基、溝（S D）12条である。

これらの所属時期は、古代（9世紀）、12世紀、近世～近代（17～20世紀）である。

遺構の検出面は、いずれも基本層序のⅡ層上面である。

第1節 竪穴建物

9世紀の竪穴建物が2棟検出された。カマドを有していないもの（S I 2）もあり、竪穴住居ではなく、竪穴建物とする。

S I 1（第11、12図、写真図版20、21）

〔位置〕21 c、22 c、23 c、22 d、に位置する。

〔重複〕S B 20の柱穴、S K 10、S K 39、S D 6と重複するが、本竪穴が古い。

〔形態〕東西約510 cm、南北約480 cmの方形のプランである。床面積は約24.48 m²である。床面は判別し難かったが、概ね平坦と判断された。貼床は施されていないと判断した。確認面から床面までの深さは約28 cm、床面の標高20.52 mである。柱穴、壁溝は検出できなかった。西壁際の北寄りにピット1、カマド東脇にピット2が検出された。ピット2の埋土中から、ほぼ完形の土師器坏（101）が出土した。

〔カマド〕南壁中央より、やや西よりにカマドが構築されている。煙道は掘り込み式で、煙出し部分の底面が窪んでいる。ソデは礫を心材にしている。天井部に使用していたと推測される扁平な細長い礫が、火焼面前面の焼き口を塞ぐ状態で置かれていた。カマド廃絶時の儀礼行為の可能性もある。カマド南側にはカマド構築材の礫が散乱している。火焼面は厚く地山が熱変化している。また、火焼面に突き刺された状態で石製の支脚（110）が直立していた。

〔埋土〕埋土は1層に分けられる。地山と埋土が非常に類似しており、壁、床を検出するのが非常に困難であった。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕ピット2、カマド周辺から遺物が出土している。土師器坏（101～105）、土師器鉢（106）、土師器長胴甕（107～109）を図示した。土師器坏104は内外面、底面に黒色処理が施されている。線刻文字「上」は土師器焼成後に施されたものである。105は外部下半に回転ヘラケズリをおこなった後、ヘラミガキを施している。底面は回転糸切後に回転ヘラケズリをおこなっている。土師器鉢106は通常、製作にロクロが使用される器種であるが、この個体にはロクロ調整痕が確認できない。土師器長胴甕107は二次被熱により、内外面ともに調整が見え難くなっている。109はロクロ使用長胴甕の下半部と推測される。石製支脚110は、黒色の多孔質の熔岩安山岩である。上端を平坦に成型している。

〔性格〕古代の竪穴住居である。

〔年代〕出土遺物から9世紀前～中葉と推測される。

S I 2（第13図、写真図版20、22）

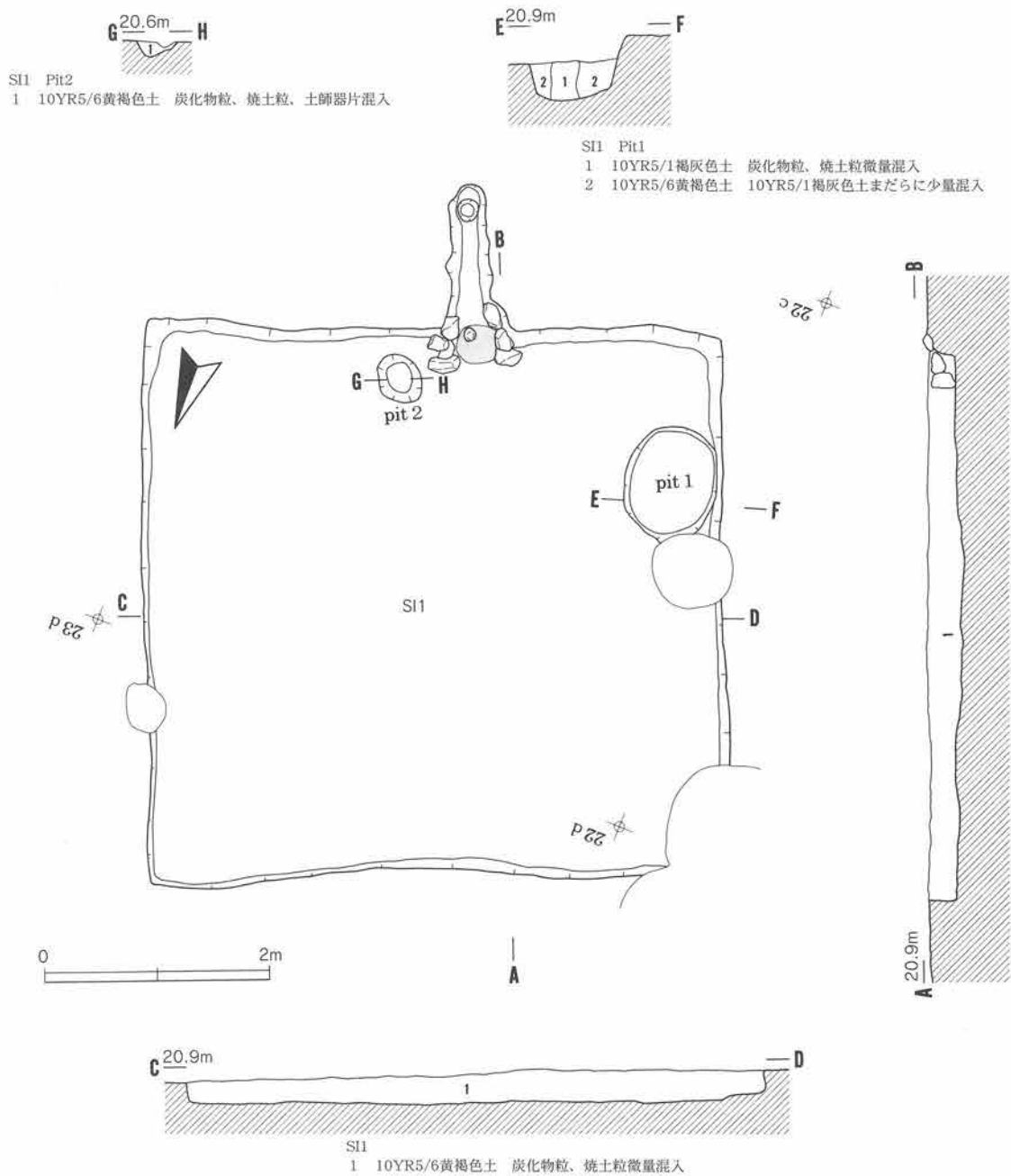
〔位置〕7 r、7 pに位置する。

〔重複〕S K 52と重複するが本竪穴が古い。

〔形態〕 東西約445cm、南北約500cmの、やや平行四辺形の平面形である。床面積は約22.24㎡である。床面はわずかに凹凸があり、部分的に張床が施される。床面中央からわずかに南東寄りに地焼炉が存在する。地焼炉南東側にはピット1～3の掘り込みが存在する。また床面北側には不整なプランの掘り込みが2箇所検出されたが、性格は不明である。柱穴とする根拠は見出せなかった。

〔カマド〕 カマドは検出されなかったが、上述のように地焼炉が存在する。焼土は厚く、硬く焼き締まっており、恒常的に火が焚かれていたことを示している。

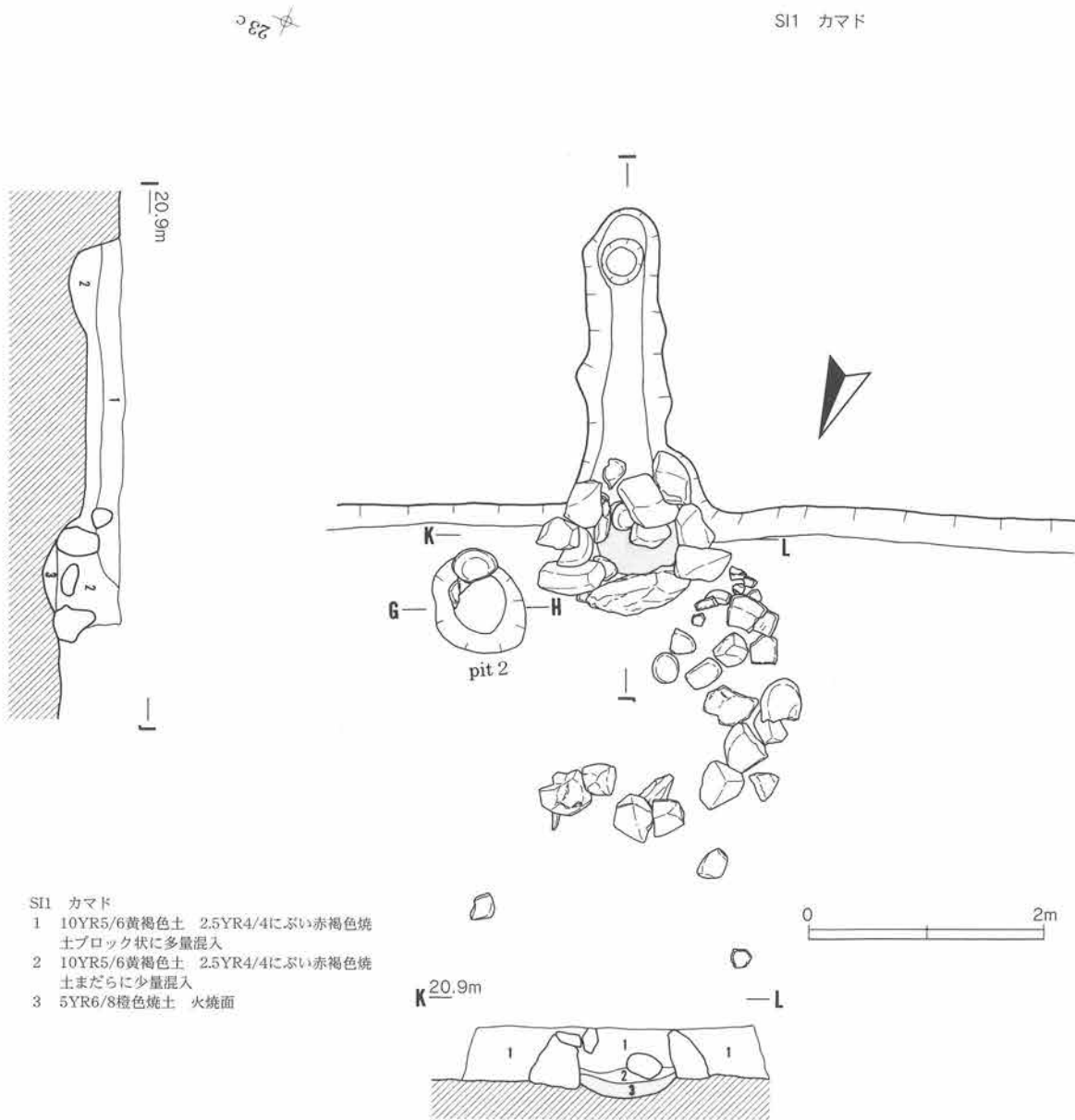
〔埋土〕 埋土は2層に分けられる。2層は地焼炉に由来する焼土、炭化物が多量に混入している。3層は張床



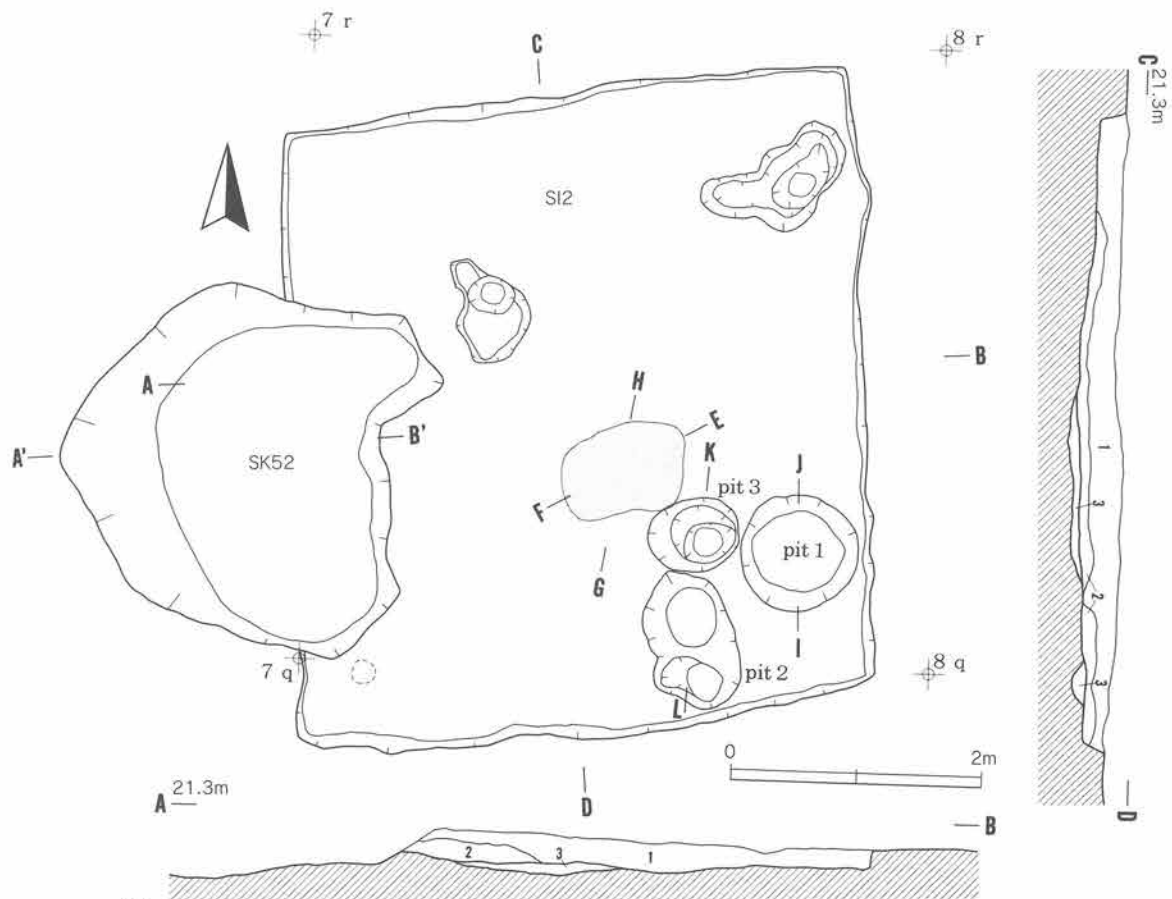
第11図 SI1

の土である。

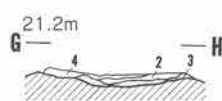
〔出土遺物〕埋土中から多くの遺物を出土した。図示したのは土師器坏（111～114）、土師器羽釜？（115）、土師器長胴甕（116～123）、須恵器甕（124）、須恵器大甕（125）である。土師器坏（112～114）は底辺部、または外底面にヘラケズリ再調整が施される。115は、つばの付く特異な器形である。内外面ともにロクロ調整である。116は小型の土師器長胴甕で、口縁部内面に帯状に炭化物が付着する。117～119はロクロ不使用の土師器長胴甕、120～123はロクロ使用の土師器長胴甕である。ロクロ使用長胴甕121、122はロクロ調整の下地にタタキ目が観察できる。120にはタタキ目が見出せないが、121、122と器形が共通しており、ロクロの下地にはタタキ目が施されていると推測される。120は地焼炉に接する東側に、倒立の状態出土した。125の須恵器大甕は、S K 52出土の破片と接合した。土錘（126～153）は28点出土し



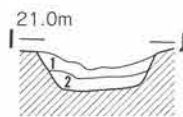
第12図 SI1カマド



- SI2
- 1 10YR5/6黄褐色土 炭化物粒、焼土粒少量混入
 - 2 10YR5/6黄褐色土 焼土粒、炭化物粒非常に多量に混入
 - 3 10YR5/6黄褐色土 礫多量混入 炭化物粒多量混入 土器片含む 貼床か



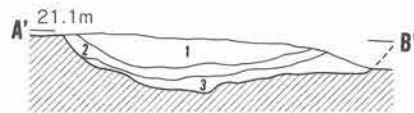
- SI2 焼土
- 1 5YR7/8橙色焼土 非常に硬い
 - 2 2.5YR6/8橙色焼土 焼土粒、炭化物粒非常に多量に混入
 - 3 2.5YR6/8橙色焼土 10YR5/6黄褐色土まだら少量混入
 - 4 10YR5/6黄褐色土 炭化物粒、焼土粒多量混入



- SI2 Pit1
- 1 10YR7/2にぶい黄橙色土 炭化物粒、焼土粒多量混入
 - 2 10YR7/2にぶい黄橙色土 焼土粒、炭化物粒少量混入



- SI2 Pit2, Pit3
- 1 10YR7/2にぶい黄褐色土 焼土粒、炭化物粒多量混入
 - 2 10YR7/2にぶい黄褐色土 焼土粒、炭化物粒少量混入



- SK52
- 1 10YR6/2灰黄褐色土 炭化物粒少量混入 他山の区別が非常に難しい。
 - 2 10YR6/2灰黄褐色土 2.5Y8/2灰白色火山灰まだら、あるいはブロック状に多量混入
 - 3 10YR5/3にぶい黄褐色土 炭化物粒少量混入

第13図 SI2・SK52



第14図 掘立柱建物位置図

ている。126～133の8点は床面南西側で一括の状態出土した。他は埋土中からの出土である。

〔性格〕古代の竪穴建物である。

〔年代〕重複し、本竪穴よりも新しいSK52の埋土には十和田a降下火山が含まれていた。よって、本竪穴は十和田a降下火山灰の降下よりも以前に埋没していたと理解される。また、出土土師器の形態、調整から、9世紀前半～中葉に使用された竪穴建物と推測される。

第2節 掘立柱建物

SB1（第15図、写真図版7、23、26）

〔位置〕16b、17b、15c、16c、17cに位置する。

〔重複〕SB4、SB8、SB13、SB24とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く、前後関係は不明である。またSK54と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは1075cm、梁間は424cmである。面積は45.58㎡（13.8坪）である。使用した柱穴は12個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN-21°-Wである。

〔柱間寸法〕基準寸法は212cm（7.0尺）である。

〔出土遺物〕P60埋土から12世紀のロクロかわらけ（205）が出土した。

〔付属施設〕建物のプラン内に納まる状態でSK25とSK12が位置し、建物に伴う可能性がある。しかし確固たる根拠もなく、無関係の可能性もある。

〔建物の性格〕建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕近世に属するが、詳細な年代は不明である。

SB2（第16図、写真図版8、23、27）

〔位置〕19f、20f、19g、20gに位置する。

〔重複〕SB10、SB15と柱穴が切り合うが本建物が新しい。またSK28、SK29と重複するが本建物が新しい。またSB6とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。しかしSB6は本建物に伴うSK7と切り合い、古いので、本建物はSB6よりも新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは764cm、梁間は382cmである。面積は29.18㎡（8.8坪）である。使用した柱穴は12個である。P147は梁間の中間に位置しないが、他の建物にも使用する用途がないため本建物の柱穴と判断した。

〔建物方位〕桁行きの軸方向はN-15°-Wである。

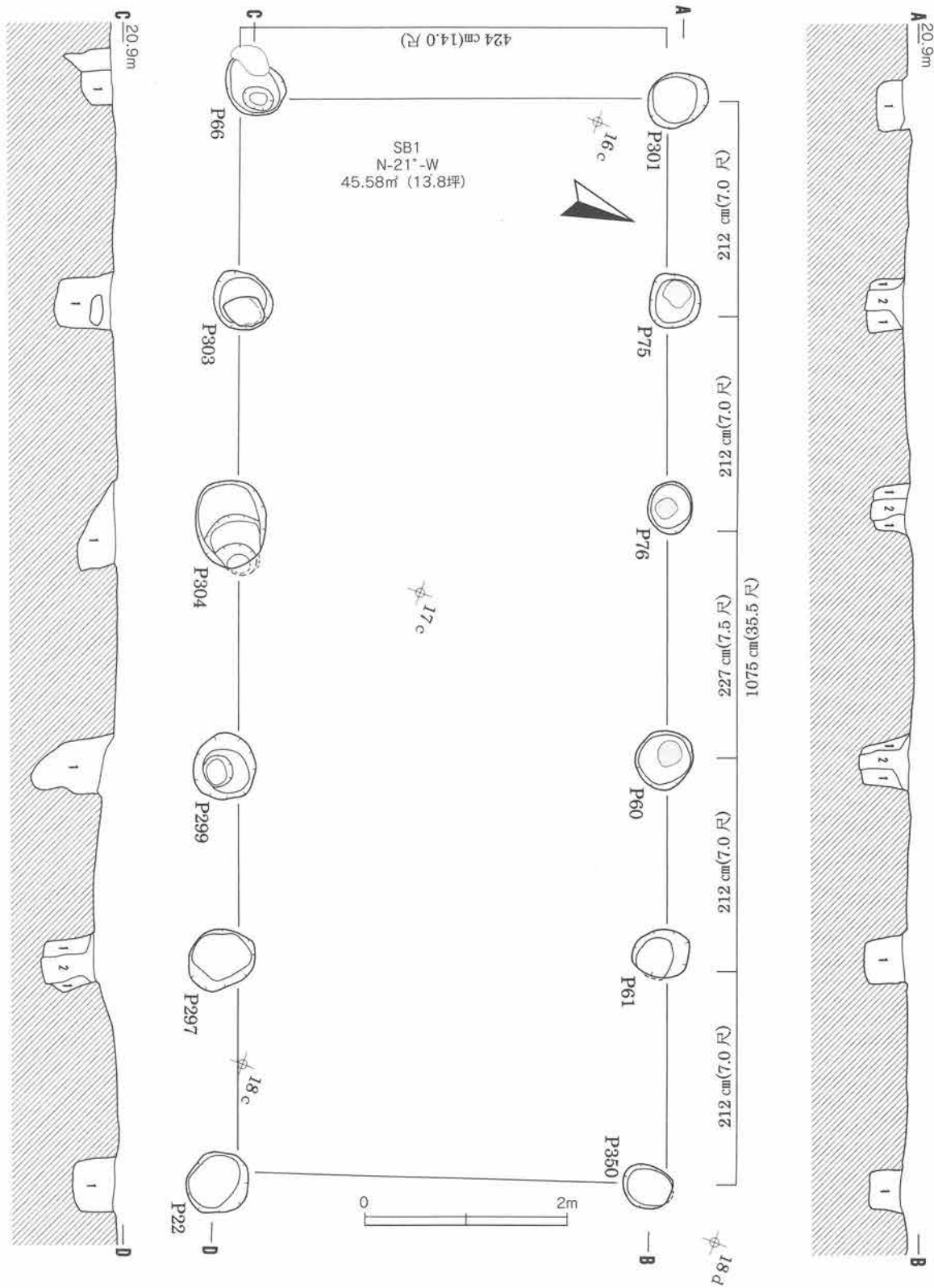
〔柱間寸法〕基準寸法は191cm（6.3尺）である。

〔出土遺物〕P289の掘方から古代の須恵器微細片（図示なし）が出土している。

〔付属施設〕建物のプラン内の中軸線上に納まる状態でSK7が位置し、建物に伴う土坑と考えられる。SK7は桶を埋設した遺構である。

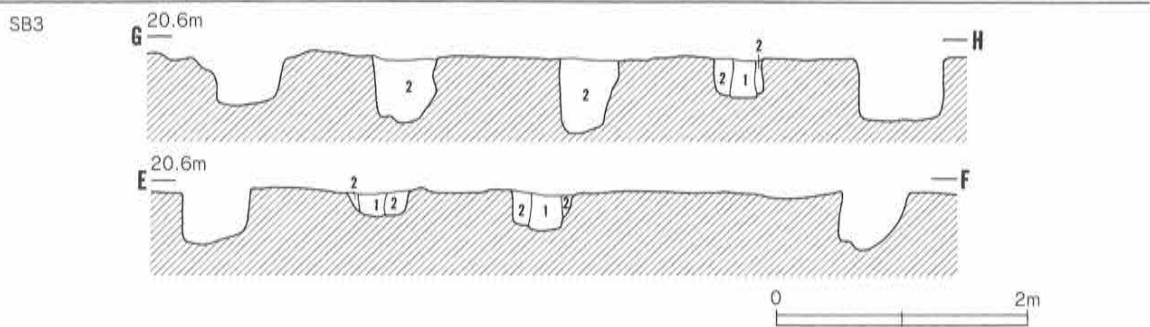
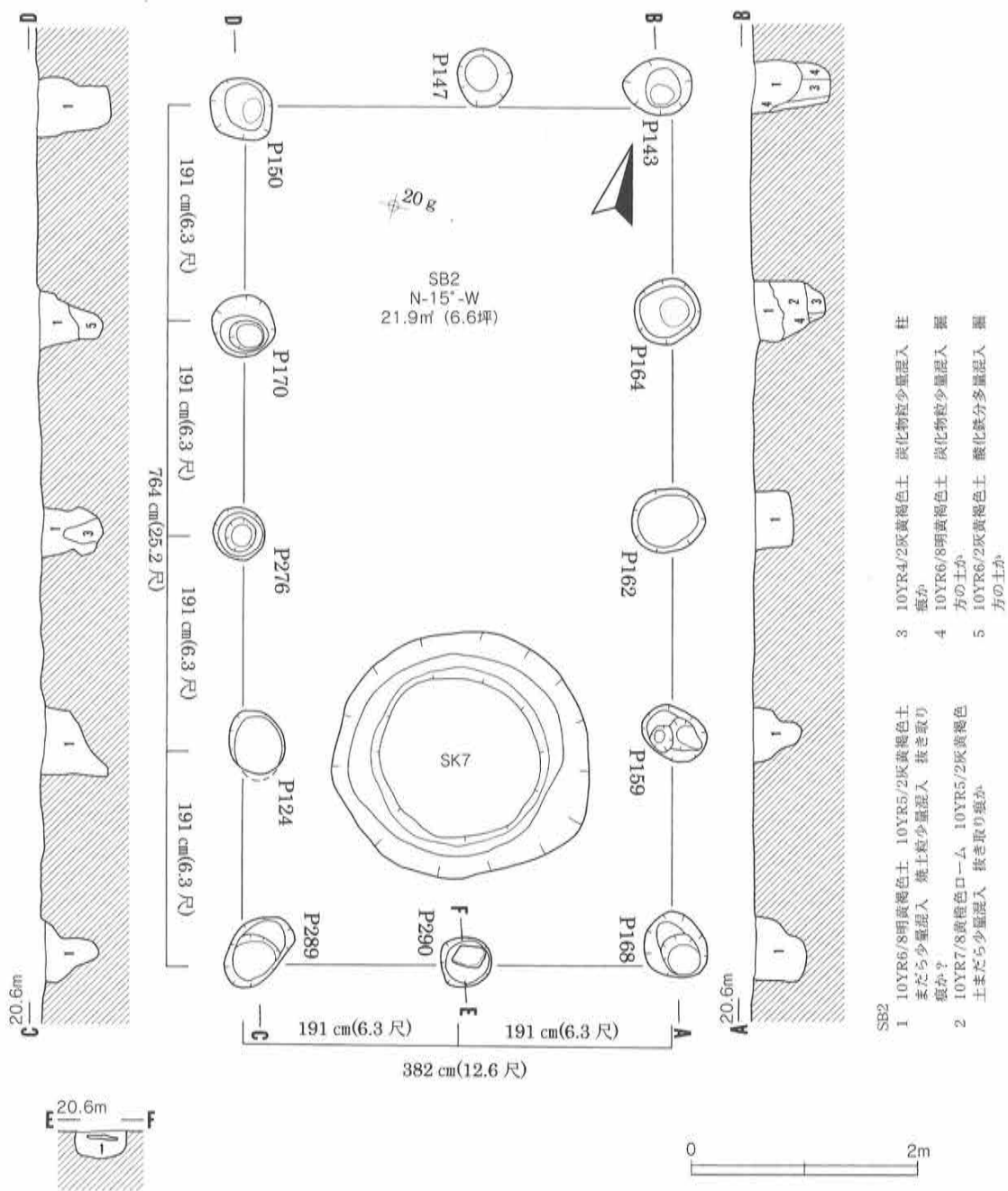
〔建物の性格〕建物内部に埋設した桶を有することから、便所と判断される。

〔年代〕近世に属するが、詳細な年代は不明である。



- SB1
 1 10YR6/6明黄褐色土 10YR5/2灰黄褐色土まだら多量混入
 2 10YR6/1褐灰色土 酸化鉄分多量混入 柱痕か

第15図 SB1



第16図 SB2

S B 3 (第17図、写真図版8、23、28～30)

〔位置〕18 f、18 g、19 fに位置する。

〔重複〕S B 7と柱穴が切り合うが本建物が新しい。またS B 9、S B 12、S B 14とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。またS B 10とは棟が近接しており、同時存在とは考え難い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは1081 cm、梁間は508 cmである。面積は54.91 m² (16.6坪) である。使用した柱穴は27個である。基本的には半間ごとに柱穴が配される。P 267とP 184、P 283とP 281の間には柱が存在せず、この空間が出入り口の可能性が高い。またP 375の存在により、前後2室に分かれると推測される。

〔建物方位〕桁行きの軸方向はN - 24° - Wである。

〔柱間寸法〕127 cm (4.2尺) と95.5 cm (3.15尺) が使用されている。

〔出土遺物〕P 67の埋土から渥美産陶器甕片(249)が出土している。またP 291の掘方から肥前産陶器碗(1006)の細片が出土している。

〔付属施設〕特になし。

〔建物の性格〕建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕近世に属するが、詳細な年代は不明である。

S B 4 (第18図、写真図版9、23、30)

〔位置〕16 b、16 c、17 c、17 dに位置する。

〔重複〕S B 1、S B 8とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く、前後関係は不明である。またS B 13と柱穴が切り合うが本建物が新しい。またS K 25と重複するが本建物が古い。S B 24とはプランが重複しないが、軒の距離が非常に近く同時存在ではありえない。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは800 cm、梁間は418 cmである。面積は33.44 m² (10.1坪) である。使用した柱穴は9個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN - 21° - Wである。

〔柱間寸法〕桁行きの基準寸法は200 cm (6.6尺) である。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕建物のプラン内に納まる状態でS K 19とS K 20が位置し、建物に伴う可能性がある。しかし確証はなく、無関係の可能性もある。

〔建物の性格〕建物の規模から附属屋と推測される。

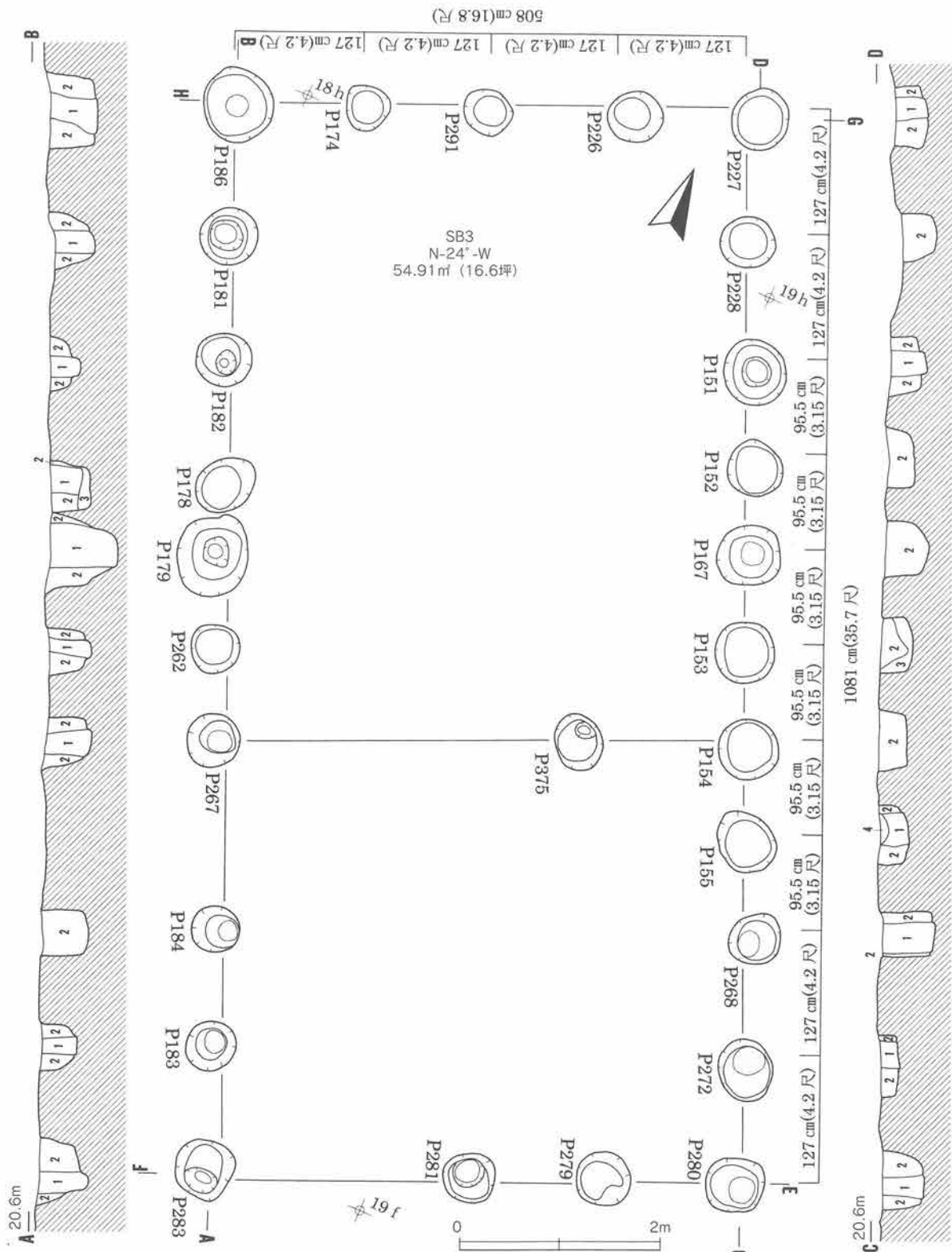
〔年代〕近世に属するが、詳細な年代は不明である。

S B 5 (第19図、写真図版9、23、31)

〔位置〕22 f、22 g、23 f、23 gに位置する。

〔重複〕なし。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは800 cm、梁間は400 cmである。面積は32.00 m² である。使用した柱穴は12個である。

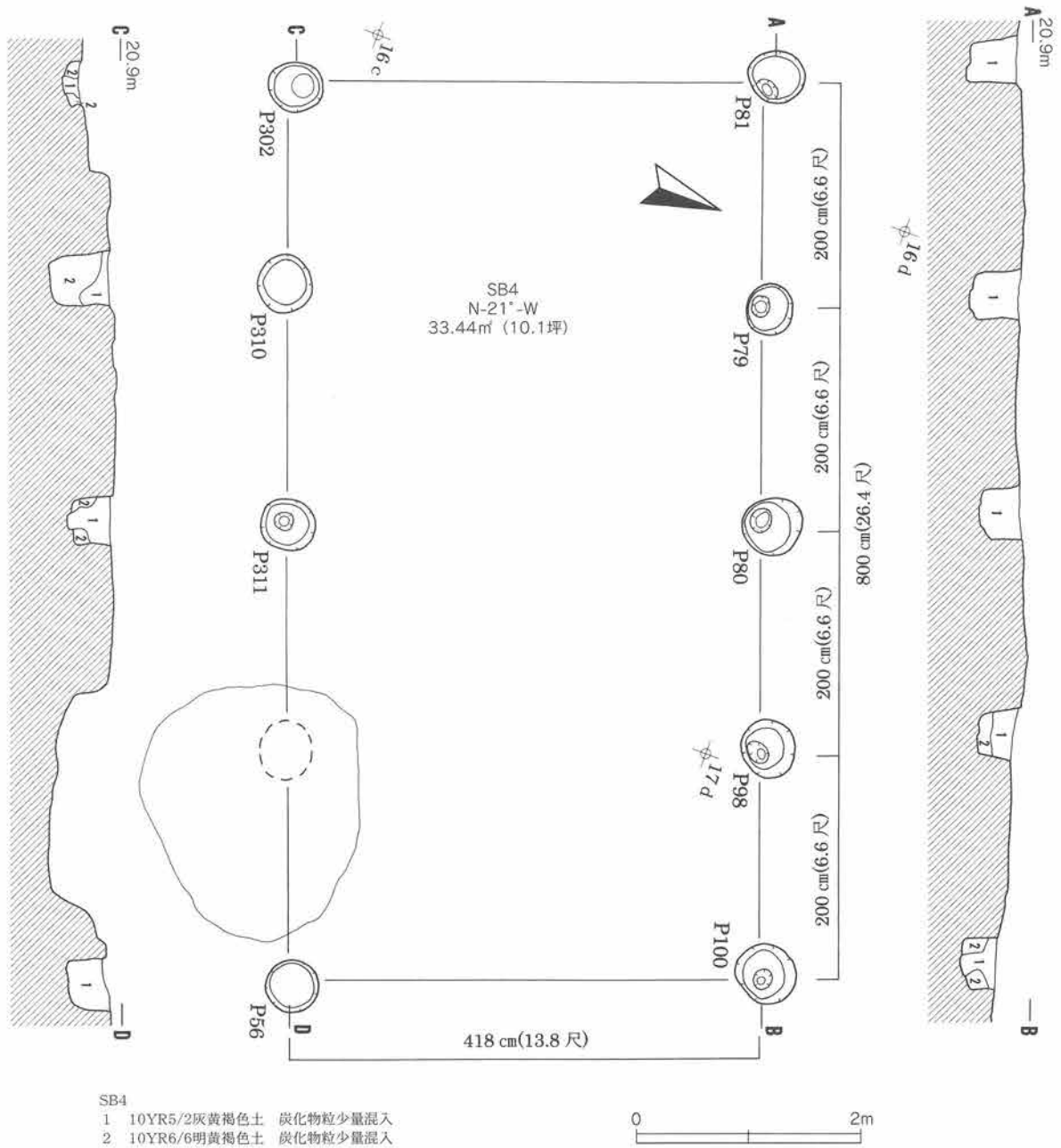


SB3

- 1 10YR6/1 褐灰色土 10YR5/6 黄褐色土まだらに少量混入 炭化物粒少量混入 柱痕
- 2 10YR5/6 黄褐色土 10YR6/1 褐灰色土まだら多量混入 掘方の土

- 3 10YR5/6 黄褐色土 10YR6/1 褐灰色土まだら少量混入 掘方の土か
- 4 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし

第17図 SB3



第18図 SB4

〔建物方位〕 梁間の軸方向はN - 33° - Wである。

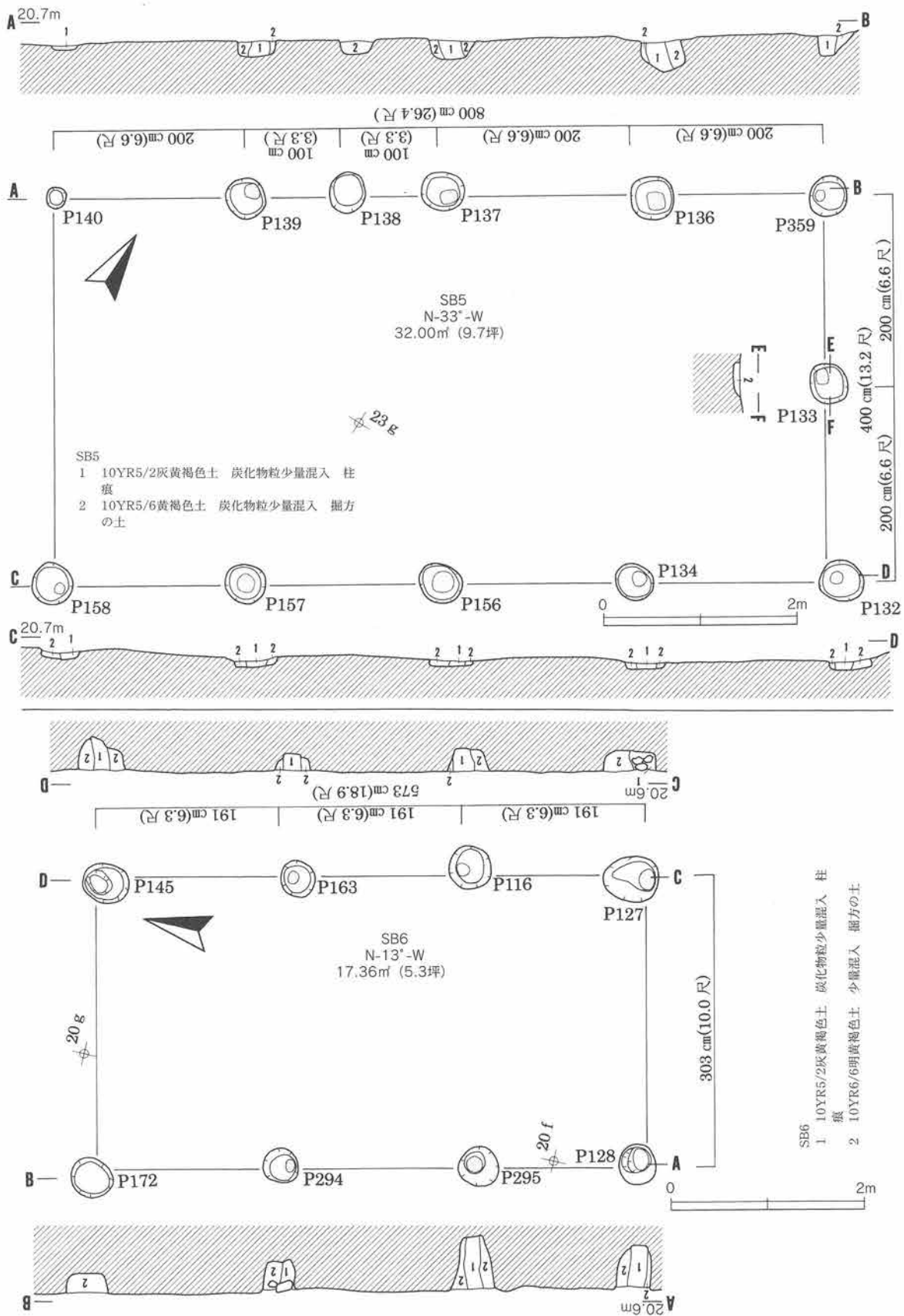
〔柱間寸法〕 基準寸法は200 cm (6.6 尺) である。

〔出土遺物〕 なし。

〔付属施設〕 なし。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



第19図 SB5・6

SB 6 (第19図、写真図版10、23、32)

〔位置〕 19 f、20 e、20 f、20 gに位置する。

〔重複〕 SB 2、SB 10、SB 15とプランが重複するが直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。またSK 28、SK 29と重複するが本建物が新しい。またSK 7と重複するが本建物が古い。SK 7はSB 2の内部施設であるので、本建物はSB 2よりも古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは573 cm、梁間は303 cmである。面積は17.36 m² (5.3坪) である。使用した柱穴は8個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN - 13° - Wである。

〔柱間寸法〕 桁行きの基準寸法は191 cm (6.3尺) である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 特になし。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。

SB 7 (第20図、写真図版10、23、32～35)

〔位置〕 18 e、17 f、18 f、17 g、18 g、17 h、18 hに位置する。

〔重複〕 SB 3と柱穴が切り合うが本建物が古い。またSB 9と柱穴が切り合うが本建物が新しい。SB 10、SB 12、SB 14、SB 19とはプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは1400 cm、梁間は500 cmである。面積は70.00 m² (21.2坪) である。使用した柱穴は24個である。間仕切りの柱の存在により、4室に分かれると判断できる。P 264には柱材が残存していた。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN - 24° - Wである。

〔柱間寸法〕 桁行きでは200 cm (6.6尺)、梁間では250 cm (8.25尺) が使用されている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 特になし。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。

SB 8 (第21図、写真図版11、23、35)

〔位置〕 16 b、16 c、17 b、17 cに位置する。

〔重複〕 SB 1、SB 4、SB 13、SB 24とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く、前後関係は不明である。またSK 54と重複するが本建物が新しい。またSK 19と重複するが本建物が古い。

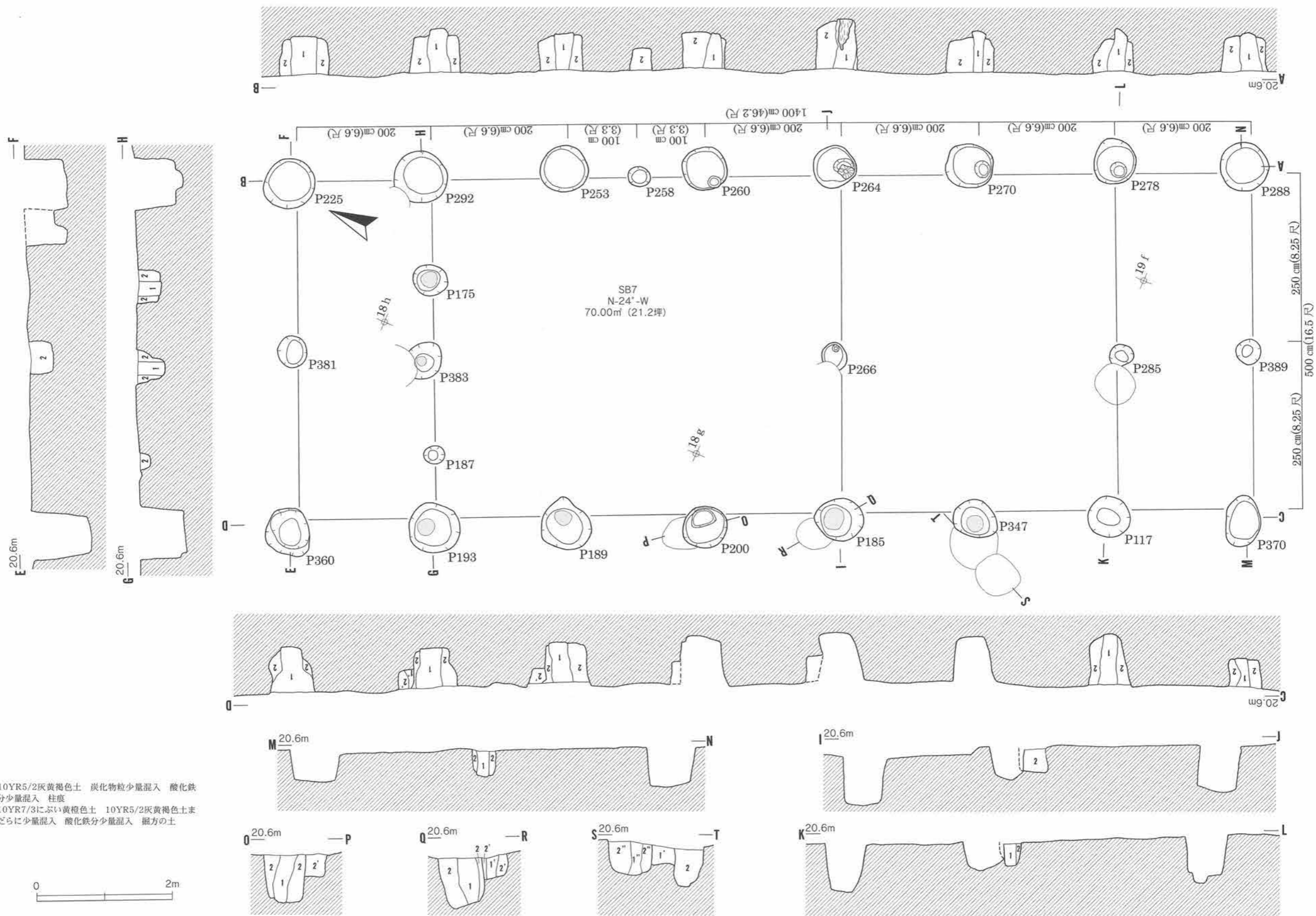
〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは800 cm、梁間は436 cmである。面積は34.88 m² (10.5坪) である。使用した柱穴は10個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はN - 21° - Wである。

〔柱間寸法〕 桁行きの基準寸法は200 cm (6.6尺) である。

〔出土遺物〕 P 357の掘方から肥前磁器皿(1302)が出土した。

〔付属施設〕 建物のプラン内に納まる状態でSK 25が位置し、建物に伴う可能性がある。しかし確証はなく、

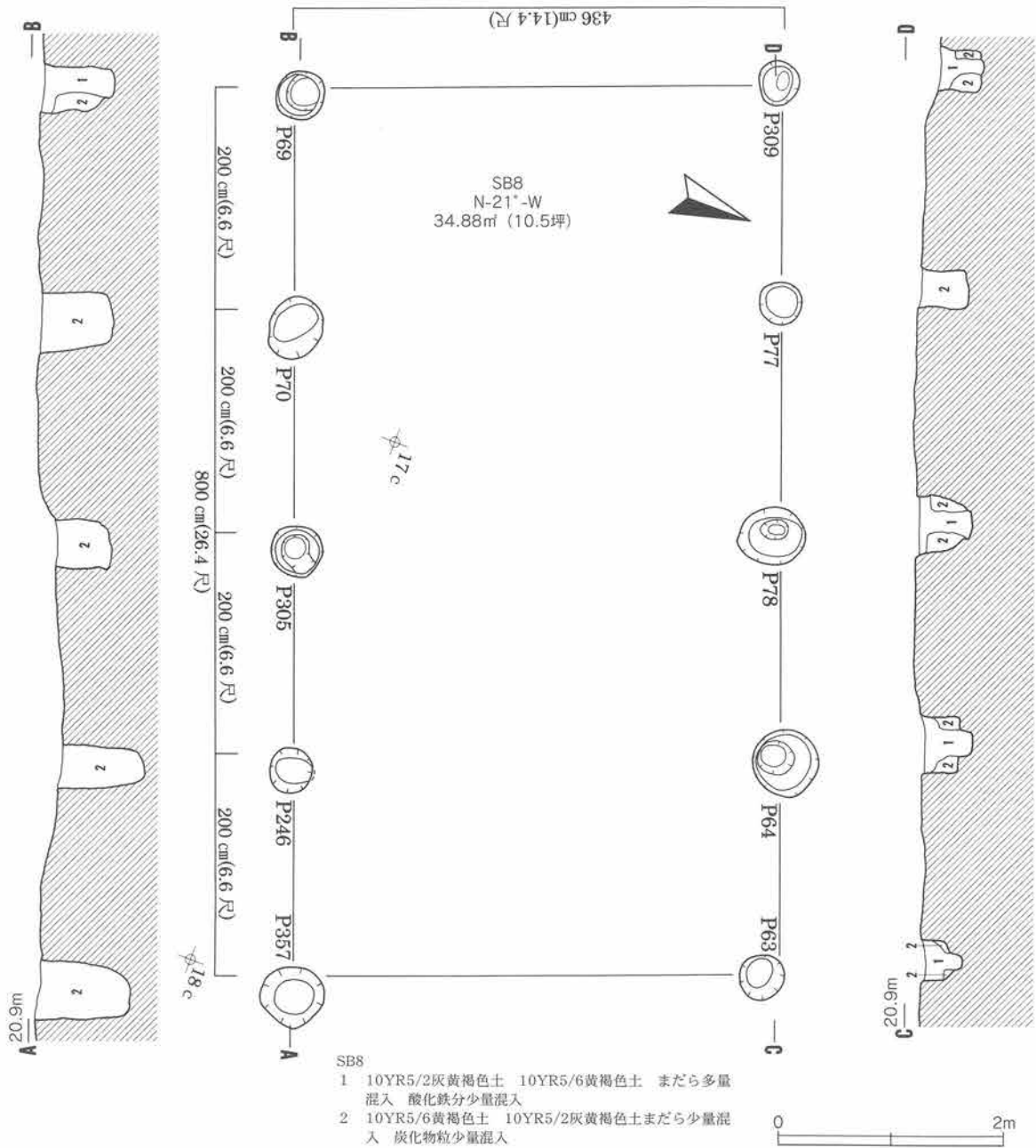


第20図 SB7

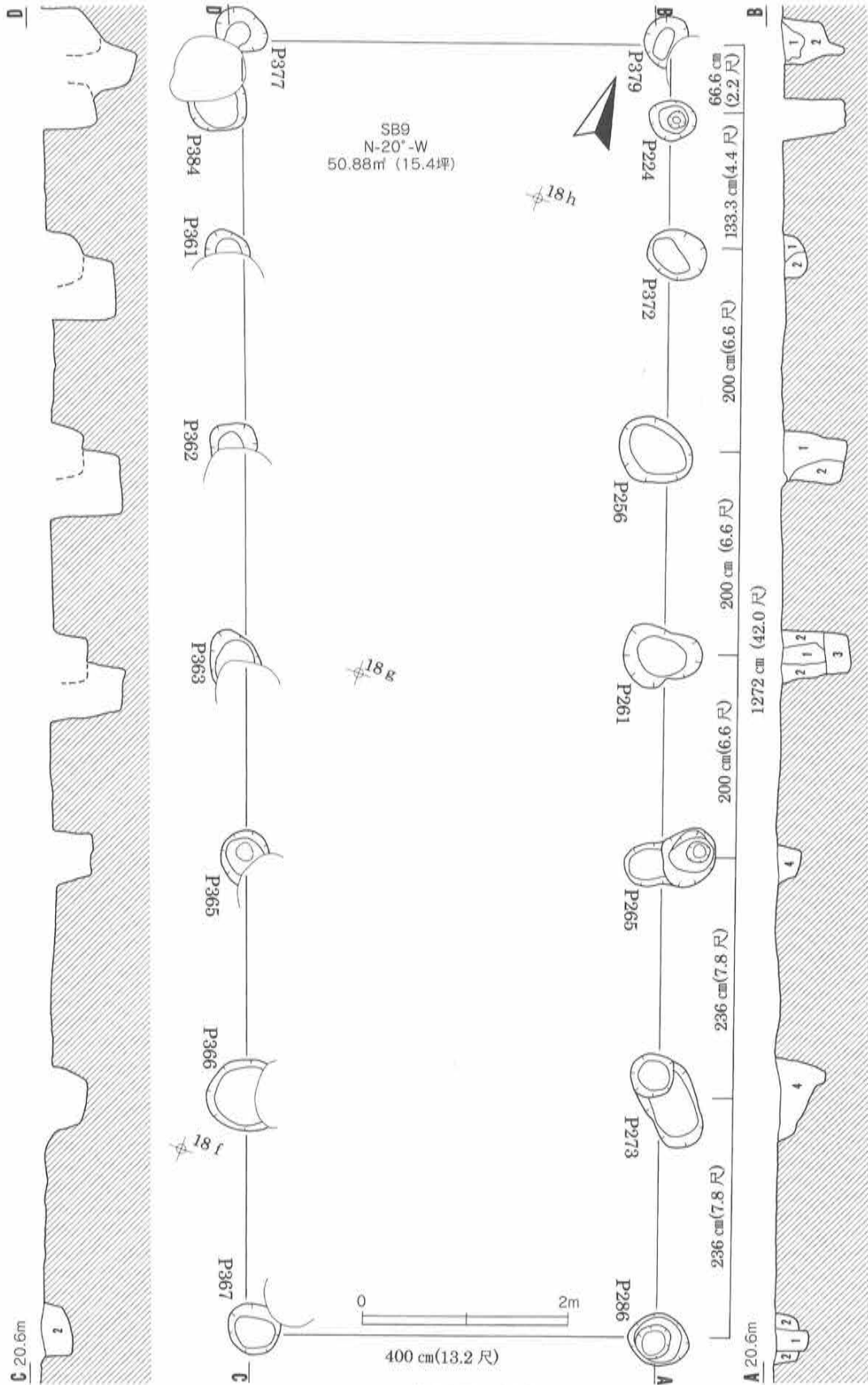
無関係の可能性もある。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



第21図 SB8



- 6BS
- 1 10YR5/2灰黄褐色土 炭化物粒少量混入 柱假か
 - 2 10YR5/6黄褐色土 10YR5/2灰黄褐色土またら少量混入 藪方か
 - 3 10YR5/3にぶい黄褐色土 藪りすぎではない
 - 4 10YR4/4褐灰色土 燧土粒、炭化物粒少量混入

第22図 SB9

SB 9 (第22図、写真図版11、24、33～36)

〔位置〕 18 e、17 f、18 f、17 g、18 g、17 h、18 hに位置する。

〔重複〕 SB 7、SB 12と柱穴が切り合うが本建物が古い。SB 7はSB 3より古いので、本建物はSB 3よりも古い。またSB 14とも柱穴が切り合うが本建物が新しい。またSB 19とはプランが重複しないが、距離が非常に近く同時存在とは考え難い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは1272cm、梁間は400cmである。面積は50.88㎡(15.4坪)である。使用した柱穴は16個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-20°-Wである。

〔柱間寸法〕 桁行きでは200cm(6.6尺)と236cm(7.8尺)、梁間では200cm(6.6尺)が使用されている。

〔出土遺物〕 P 363埋土から肥前産?磁器碗(1393)が出土した。

〔付属施設〕 特になし。

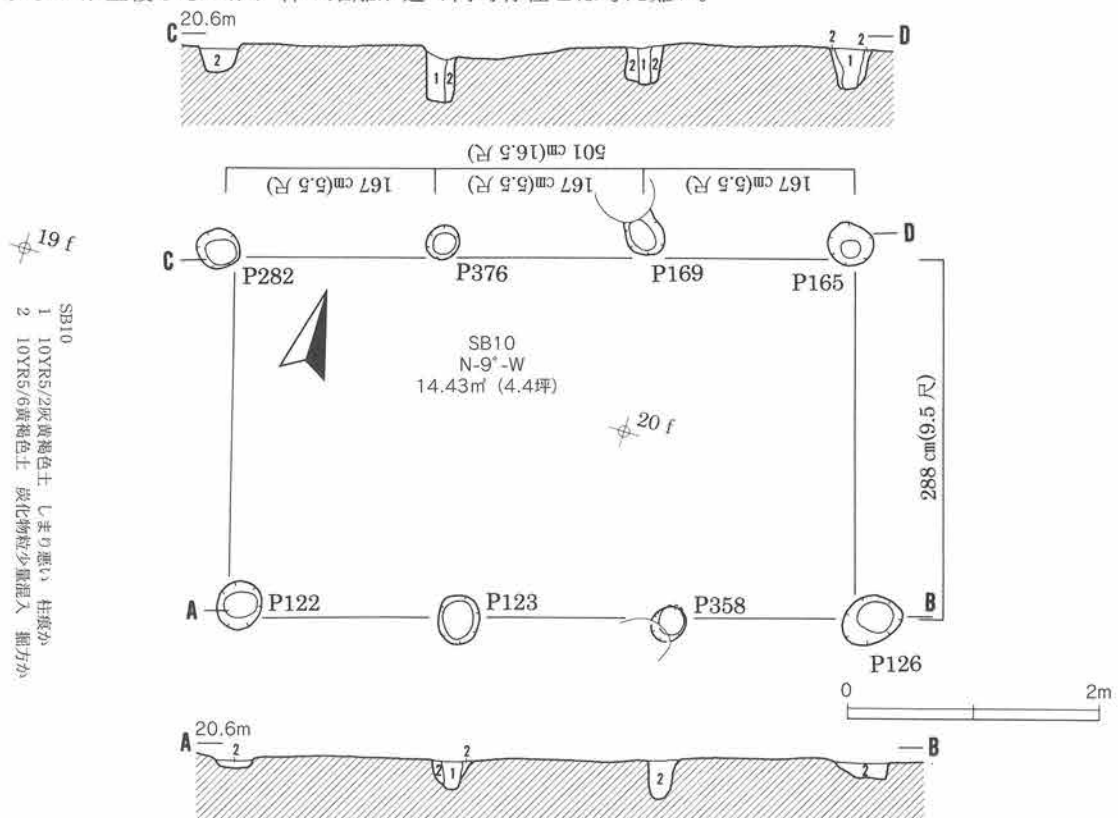
〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。

SB 10 (第23図、写真図版12、24、36、37)

〔位置〕 19 e、19 f、20 e、20 fに位置する。

〔重複〕 SB 2と柱穴が切り合うが本建物が古い。またSB 6、SB 10、SB 7とプランが重複するが直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。またSK 28、SK 29と重複するが本建物が古い。またSB 3とはプランが重複しないが、軒の距離が近く同時存在とは考え難い。



〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは501 cm、梁間は288 cmである。面積は14.43 m² (4.4 坪) である。使用した柱穴は8個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN - 9° - Wである。

〔柱間寸法〕桁行きの基準寸法は167 cm (5.5 尺) である。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕建物のプラン内に納まる状態でSK28が位置し、建物に伴う可能性がある。しかし確証はなく、無関係の可能性もある。

〔建物の性格〕建物の規模から附属屋と推測される。SK28が本建物に伴うのであれば、SK28は埋設桶の痕跡で、便所の可能性がある。

〔年代〕近世に属するが、詳細な年代は不明である。

SB11 (第24図、写真図版12、13、24、37、39)

〔位置〕13 d、13 e、13 f、14 d、14 e、14 f、15 d、15 e、15 f、16 e、16 f、16 g、17 e、17 f、17 gに位置する。

〔重複〕SB16、SB18の柱穴と切り合うが本建物が新しい。また16 f、16 g付近の攪乱によって、本建物の柱穴が数個失われている。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは2030 cm、梁間は912 cmである。面積は185.13 m² (56.1 坪) である。使用した柱穴は35個である。本建物の間取りを、現存する近世民家の間取りに当てはめるならば、東側の部屋は「ニワ」、真ん中の前の部屋が「ナカマ」、真ん中の後が「オカミ」、西側前の部屋が「ザシキ」、西側後が「ナンド」ということになる。

〔柱穴〕上屋柱と下屋柱で、柱穴掘方の大きさ、深さに著しい差がある。いずれの柱穴も確認面、断面では柱痕が認められず、柱の抜き取りが行われたと判断される。柱穴の底面に礫が存在するものが幾つかある。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN - 26° - Wである。

〔柱間寸法〕一見すると、柱間寸法は様々で基準寸法は見出せない。しかし梁間、桁行きの全長を、203 cm (6.7 尺) で割ると、それぞれ4.5間、9間で割り切れる。よって全体のプランの設定には203 cm (6.7 尺) を基準寸法にしたと理解できる。また、ザシキ部分で4寸角の柱を使用したと想定し、その柱間の内法寸法を求めると、ザシキ部分に6.3 尺×3.15 尺の畳をぴったり15畳敷くことができる。よって本建物のザシキ部分には畳割を想定した内法寸法の柱間寸法が用いられていたと考えられる。

〔出土遺物〕P314 埋土から2.5×1.0 cm程度の不整な形状の透明なガラス？が出土した。

〔付属施設〕位置関係からSB9が本建物の付属屋の可能性はある。

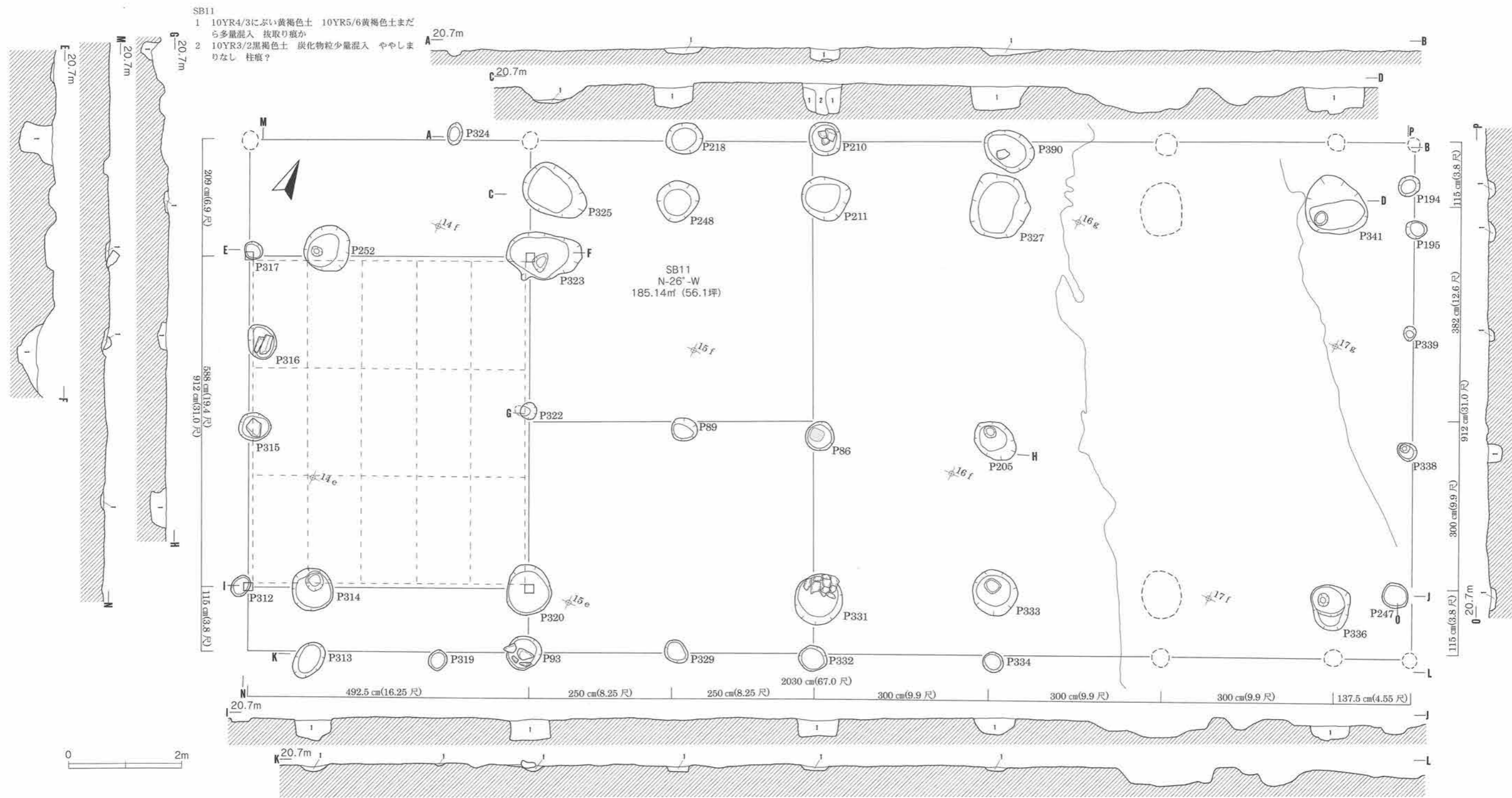
〔建物の性格〕近世民家の主屋である。

〔年代〕屋敷が開始された年代(1642年)と重複する建物(SB16)の年代観を考え合わせて、17世紀後半に建築され、18世紀前半に解体されたと推測される。P314の出土遺物は上記の年代観と矛盾するが、この周辺には攪乱が入っており、それによる混入の可能性はある。

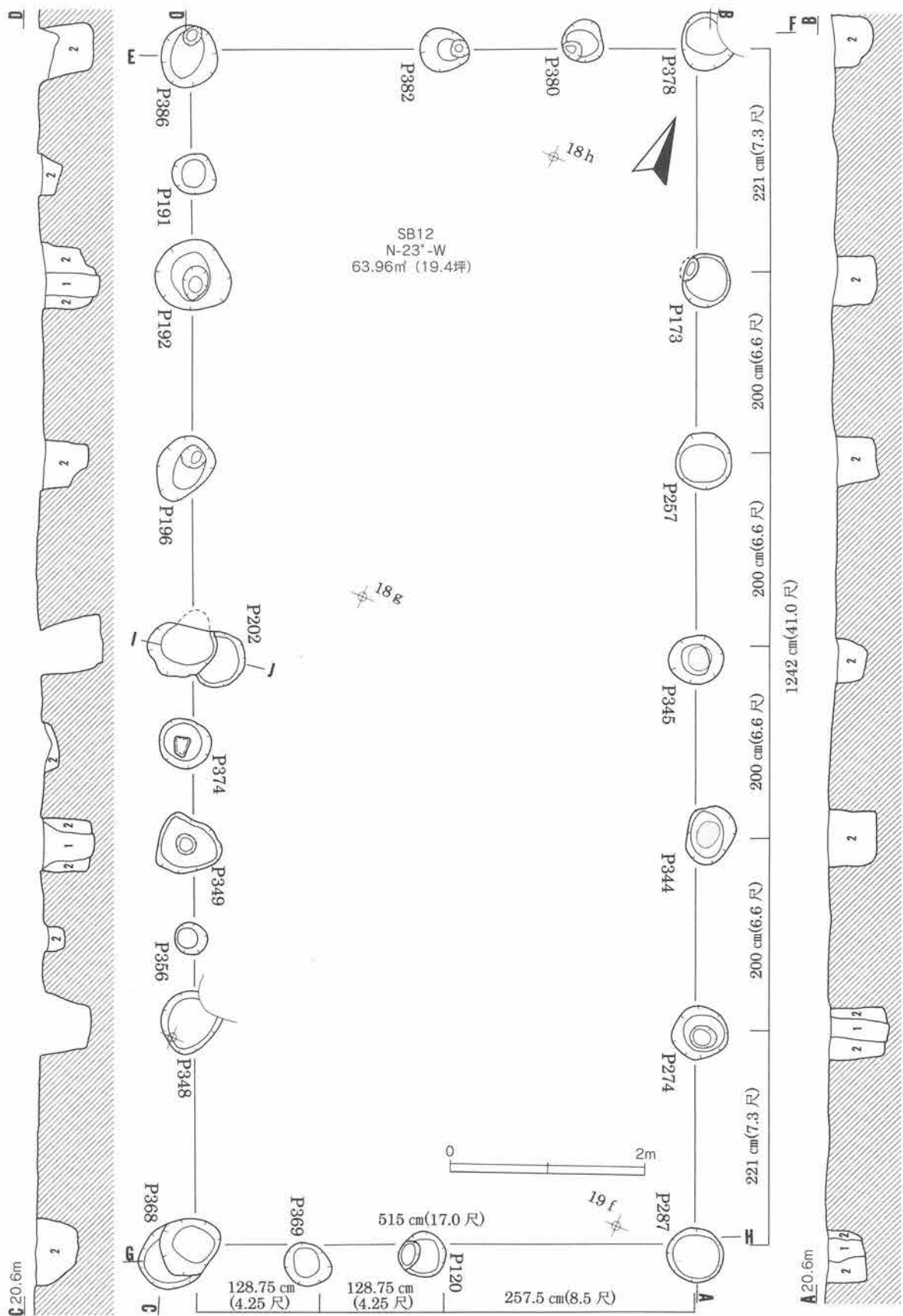
SB12 (第25、26図、写真図版13、24、40)

〔位置〕18 e、17 f、18 f、17 g、18 g、17 h、18 hに位置する。

〔重複〕SB7と柱穴が切り合うが本建物が古い。SB7はSB3より古いので、本建物はSB3よりも古



第24図 SB11



第25图 SB12①

い。またSB 9と柱穴が切り合うが本建物が新しい。SB 14はSB 9より古いので本建物よりも古い。SB 19とはプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは1242 cm、梁間は515 cmである。面積は63.96 m² (19.4坪) である。使用した柱穴は21個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-23°-Wである。

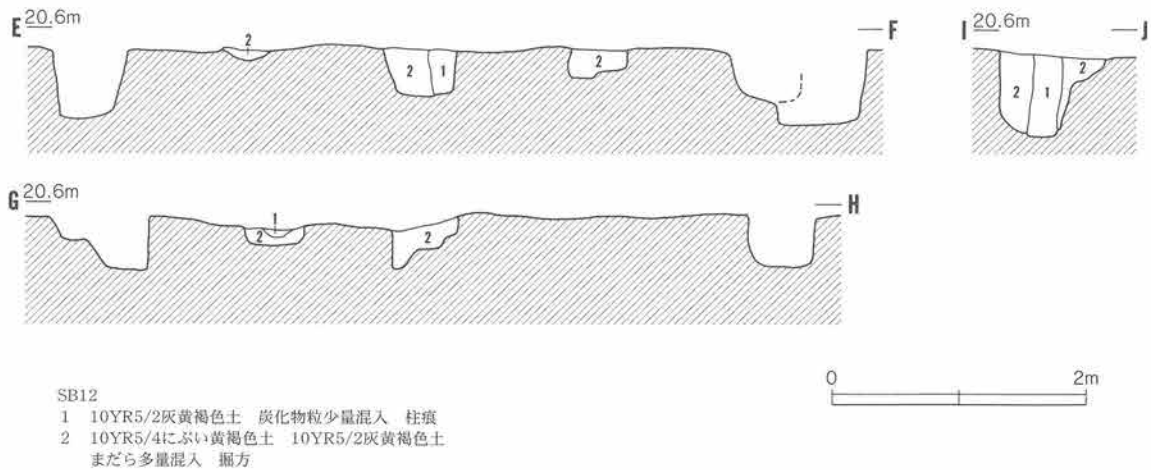
〔柱間寸法〕 桁行きでは200 cm (6.6尺) と221 cm (7.3尺)、梁間では257.5 cm (8.5尺) が使用されている。

〔出土遺物〕 なし。

〔付属施設〕 特になし。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



第26図 SB12②

SB 13 (第 27 図、写真図版 24、41)

〔位置〕 15 a、16 a、15 b、16 bに位置する。

〔重複〕 SB 1、SB 8、SB 17、SB 24とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く、前後関係は不明である。また、SB 4と柱穴が切り合うが、本建物が古い。また、SK 12、SK 25、SK 35と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは900 cm、梁間は700 cmである。面積は63.00 m² (19.1坪) である。使用した柱穴は13個である。なおSK 34は本建物の柱穴であるが、名称は調査時のままSKとしている。前後に下屋が付く形態である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はN-16°-Wである。

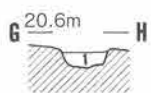
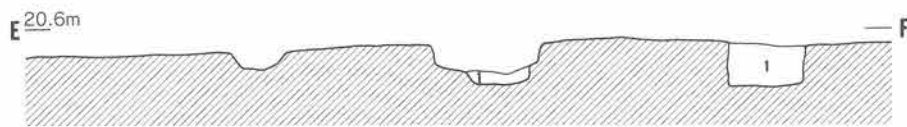
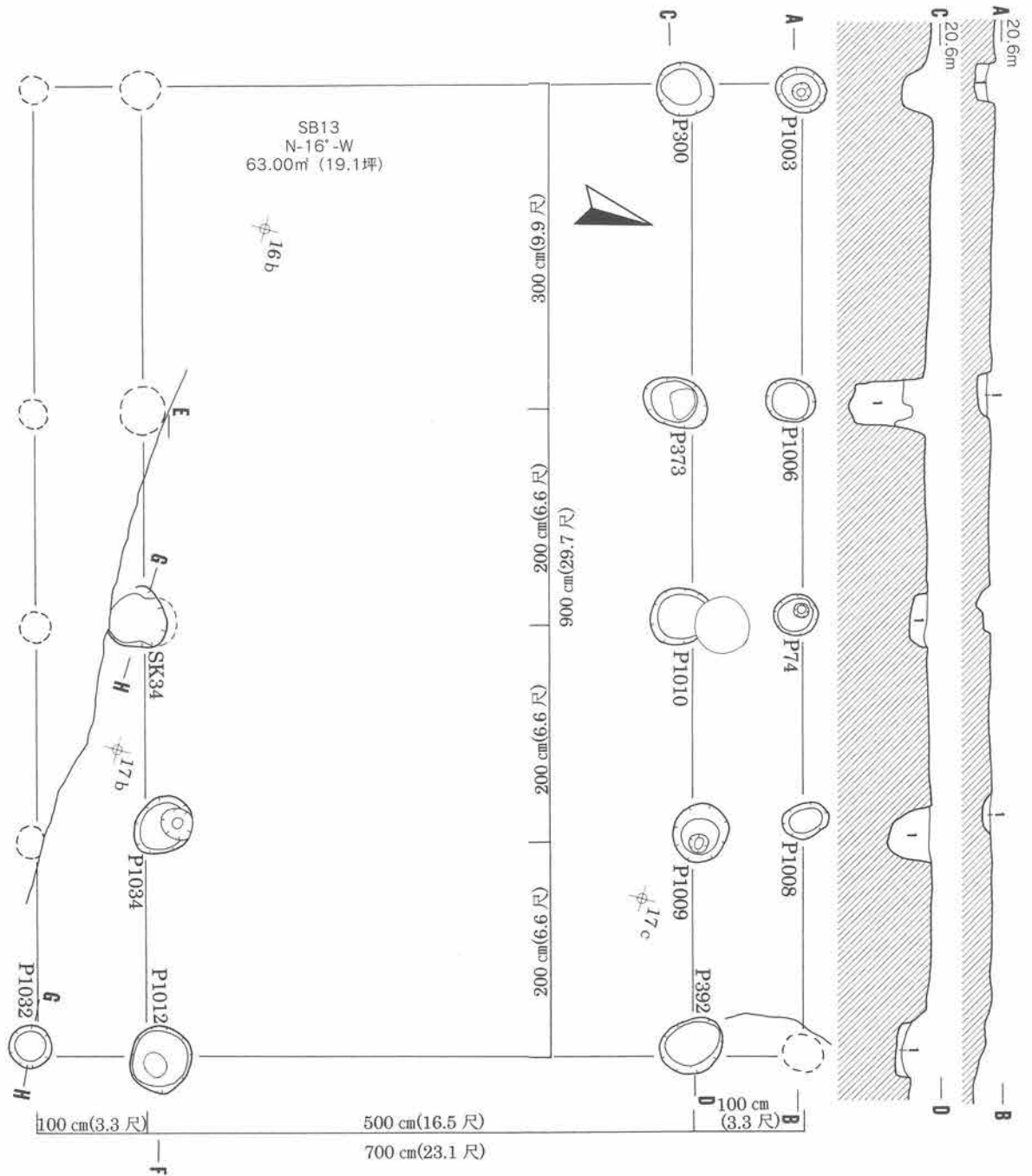
〔柱間寸法〕 いずれの柱間寸法も100 cm (3.3尺) で割り切れ、基準寸法は100 cm (3.3尺) と判断できる。

〔出土遺物〕 P 392の埋土中から肥前産?磁器碗の細片(1392)が出土している。

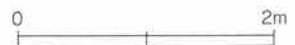
〔付属施設〕 特になし。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



SB13
1 10YR5/2灰黄褐色土 10YR5/6黄褐色土まだら多量混入



第27図 SB13

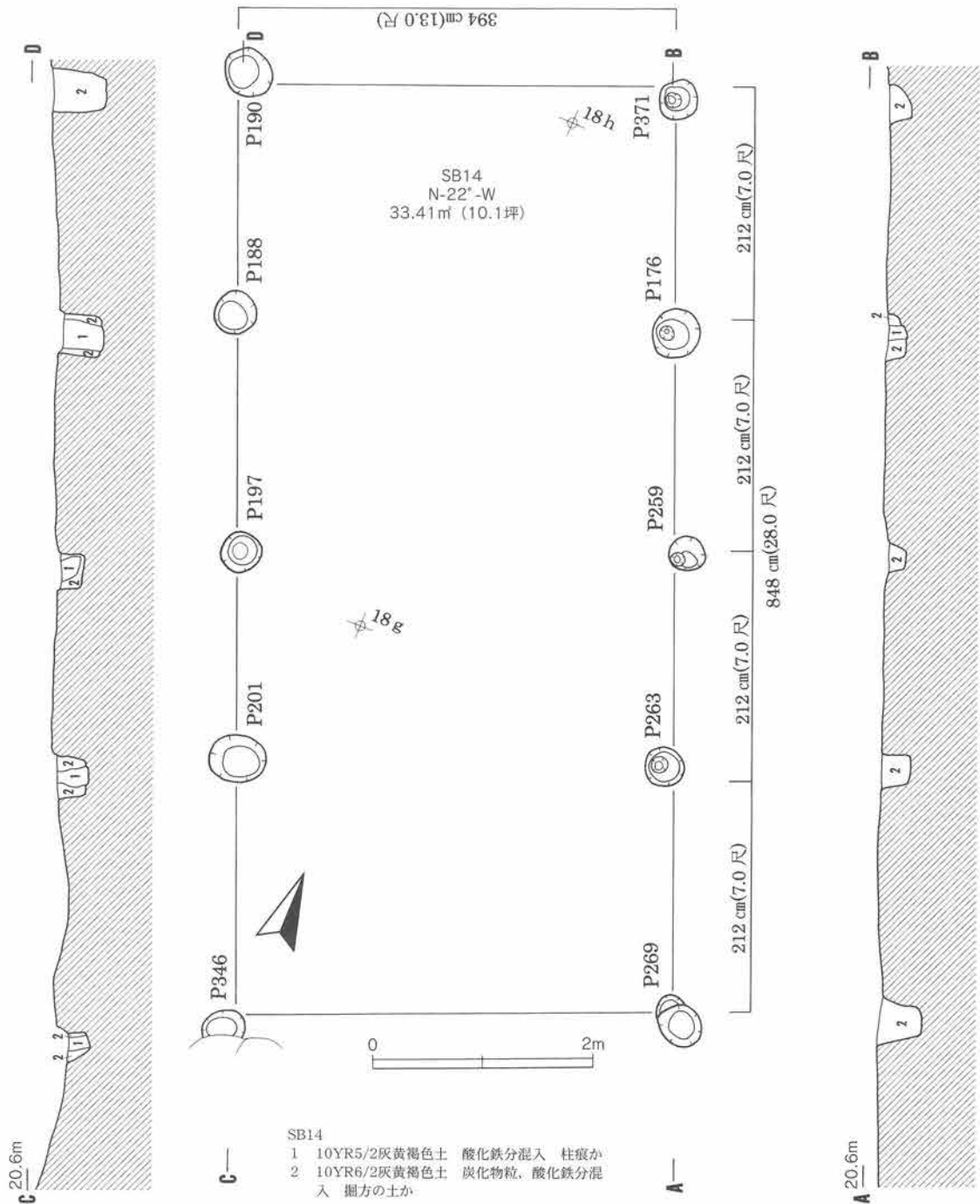
SB 14 (第 28 図、写真図版 13、14、24、42)

〔位置〕 17 f、18 f、17 g、18 g、17 h、18 h に位置する。

〔重複〕 SB 9 と柱穴が切り合うが本建物が古い。SB 9 は SB 3、SB 7、SB 12 より古いので、本建物はこれらの建物よりも古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは 848 cm、梁間は 394 cm である。面積は 33.41 m² (10.1 坪) である。使用した柱穴は 10 個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向は N - 22° - W である。



第28図 SB14

〔柱間寸法〕 桁行きでは212 cm (7.0 尺) を使用している。

〔出土遺物〕 なし。

〔付属施設〕 特になし。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。

SB 15 (第29図、写真図版14、24、43)

〔位置〕 19 f、20 fに位置する。

〔重複〕 SB 2と柱穴が切り合うが本建物が古い。またSB 6、SB 10、SB 7とプランが重複するが直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。またSK 28と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは400 cm、梁間は364 cmである。面積は15.46 m² (4.4 坪) である。使用した柱穴は6個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-17°-Wである。

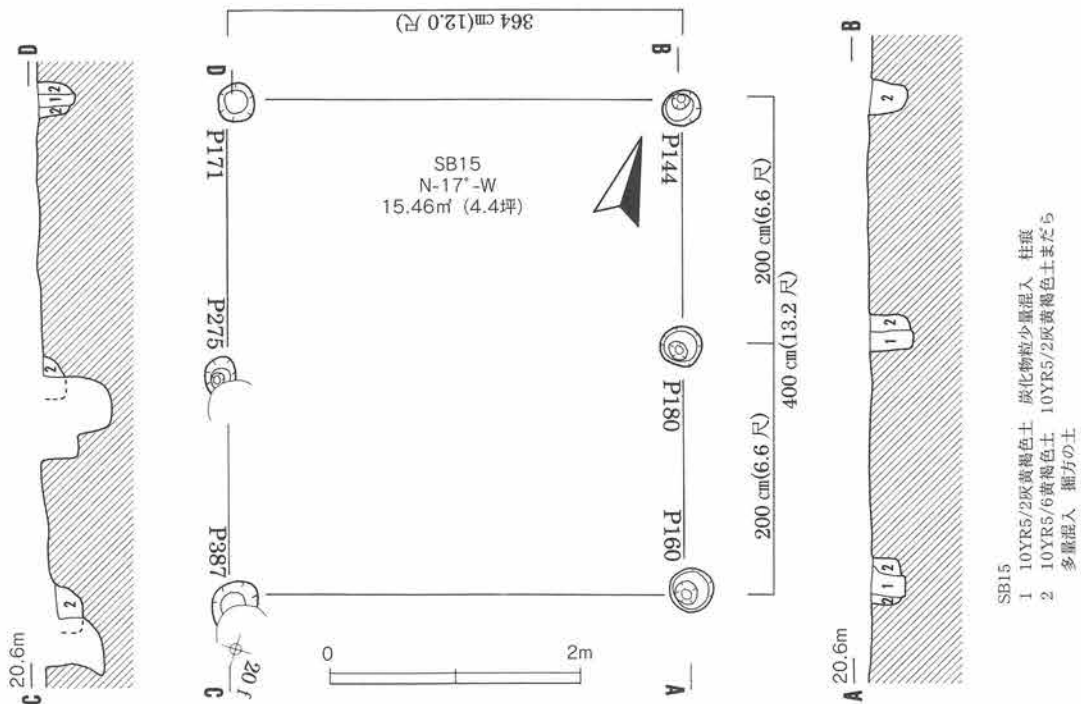
〔柱間寸法〕 桁行きの基準寸法は200 cm (6.6 尺) である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 建物のプラン内に納まる状態でSK 29が位置し、建物に伴う可能性がある。しかし確認はなく、無関係の可能性もある。

〔建物の性格〕 建物の規模から附属屋と推測される。SK 29が本建物に伴うのであれば、SK 29は埋設桶の痕跡で、便所の可能性がある。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



第29図 SB15

S B 16 (第30図、写真図版15、24、43、44)

〔位置〕14 e、15 e、16 e、14 f、15 f、16 f、15 g、16 gに位置する。

〔重複〕S B 11と柱穴が切り合うが本建物が古い。またS B 19とプランが重複するが直接重複する柱穴が無く、遺構の切り合い関係からの前後関係は不明である。また16 f、16 g付近の攪乱によって、本建物の柱穴が数個失われている。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは1442 cm、梁間は892 cmである。面積は128.63 m² (39.0 坪) である。使用した柱穴は16個である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。南辺の下屋柱は1個しか検出されていないが、周辺の削平の度合いを考慮すると、失われた蓋然性が高い。

〔柱穴〕いずれの柱穴も確認面、断面では柱痕が認められず、柱の抜き取りが行われたと判断される。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN - 24° - Wである。

〔柱間寸法〕桁行きでは206 cm (6.8 尺) を多用している。これを6で割った数値は34.3 cmである。これを任意の1尺とすると、桁行きで他に使用されている240 cmは7尺、172 cmは5尺、梁間の身舎618 cmは18尺 = 3間、下屋の出の137 cmは4尺となる。よって本建物の寸法には曲尺を用いず、任意の1尺 = 34.3 cm、1間 = 206 cmを使用したと推測される。桁行きの総長1442 cmは206 cmで割ると7間になる。

〔出土遺物〕なし。

〔付属施設〕位置関係からS B 14が本建物の付属屋の可能性はある。

〔建物の性格〕近世民家の主屋である。

〔年代〕屋敷が開始された年代(1642年)と重複する建物(S B 16)の年代観を考え合わせて、屋敷開始時の1642年に建築され、17世紀後半に解体されたと推測される。

S B 17 (第31図、写真図版16、25、45)

〔位置〕17 b、18 b、19 bに位置する。

〔重複〕S B 13、S B 24、S K 31とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。またS K 54と柱穴が重複するが、前後関係を明確にできなかった。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが南側調査区外に伸びるため、全体形は不明である。桁行きは879 cmと推測される。面積は不明である。使用した柱穴は4個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN - 9° - Eである。

〔柱間寸法〕桁行きでは273 cm (9.0 尺) を多用している。

〔出土遺物〕なし。

〔付属施設〕なし。

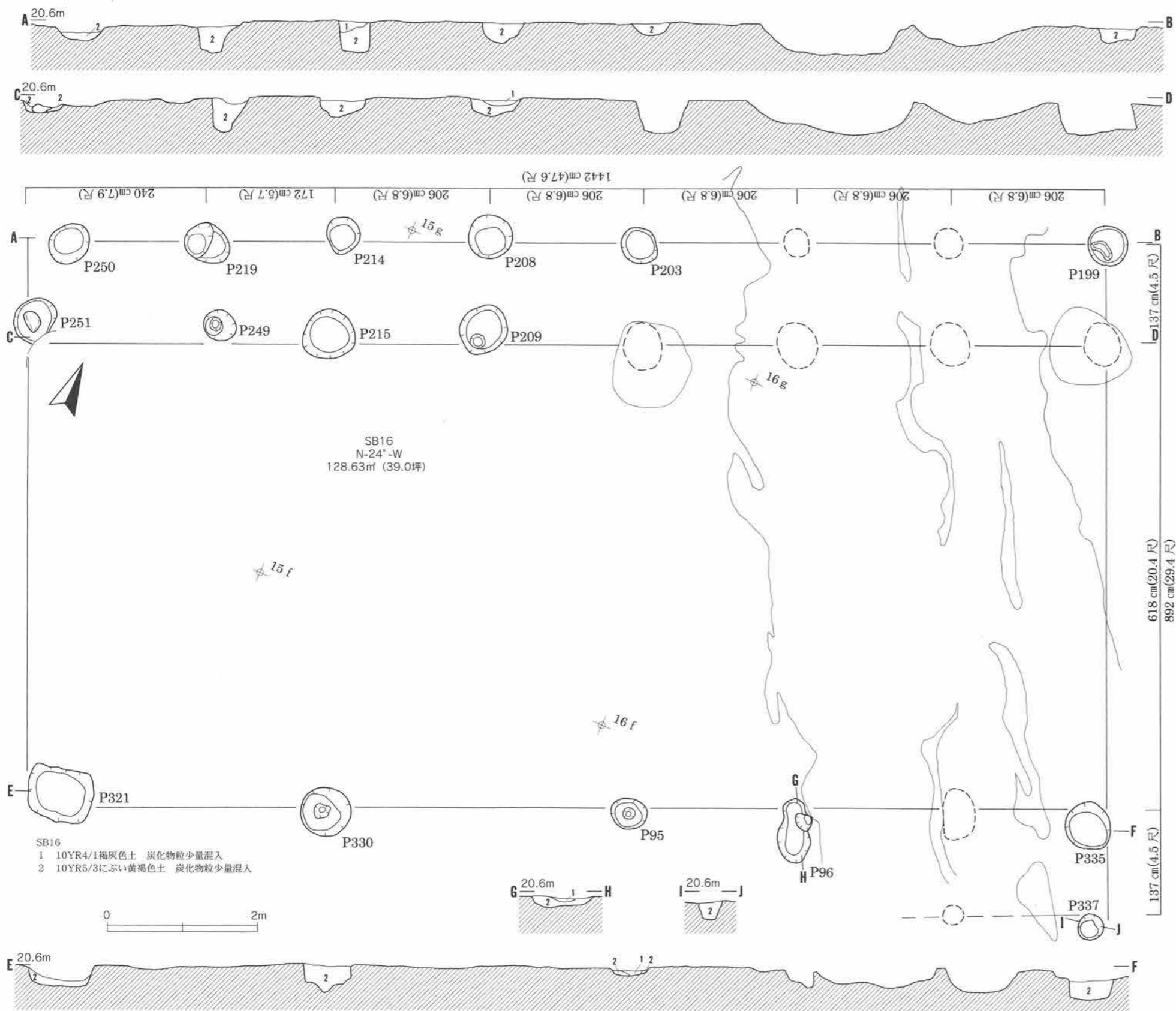
〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕近世の建物はいずれも軸方向が西に傾いているが、本建物のみは東に軸が傾いている。よって近世以外の時期に属する可能性が高い。本遺跡では12世紀の遺物が出土しており、本建物が12世紀に属する可能性を指摘しておく。

S B 18 (第32図、写真図版16、25)

〔位置〕15 f、15 gに位置する。

〔重複〕S B 11と柱穴が重複するが本建物が古い。またS B 16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴



第30図 SB16

が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは667 cm、梁間は266 cmである。面積は17.74 m² (5.4坪) である。使用した柱穴は9個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-24°-Wである。

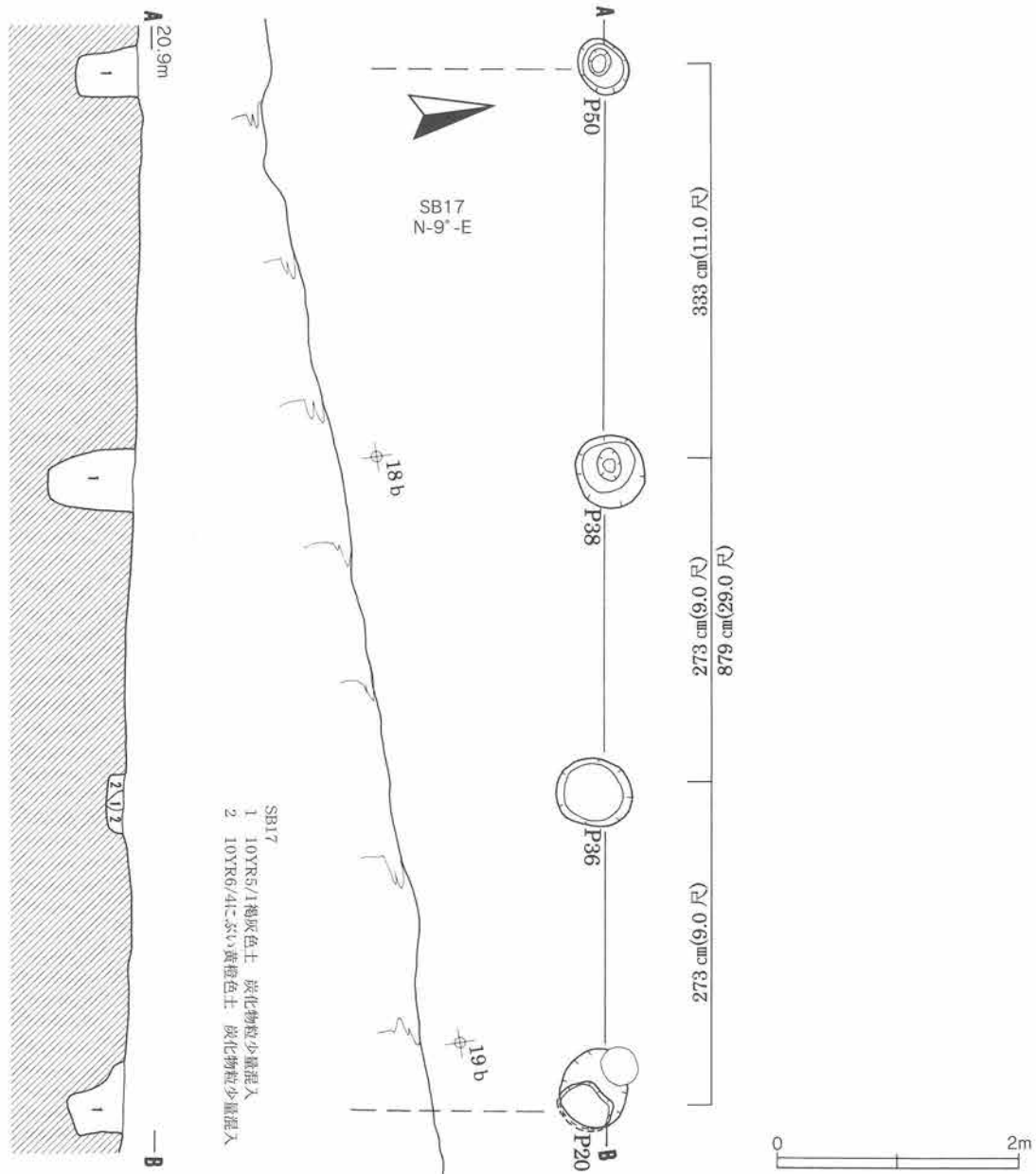
〔柱間寸法〕 桁行きでは200 cm (6.6尺) を多用しているが、基準寸法を見出し難い。

〔出土遺物〕 なし。

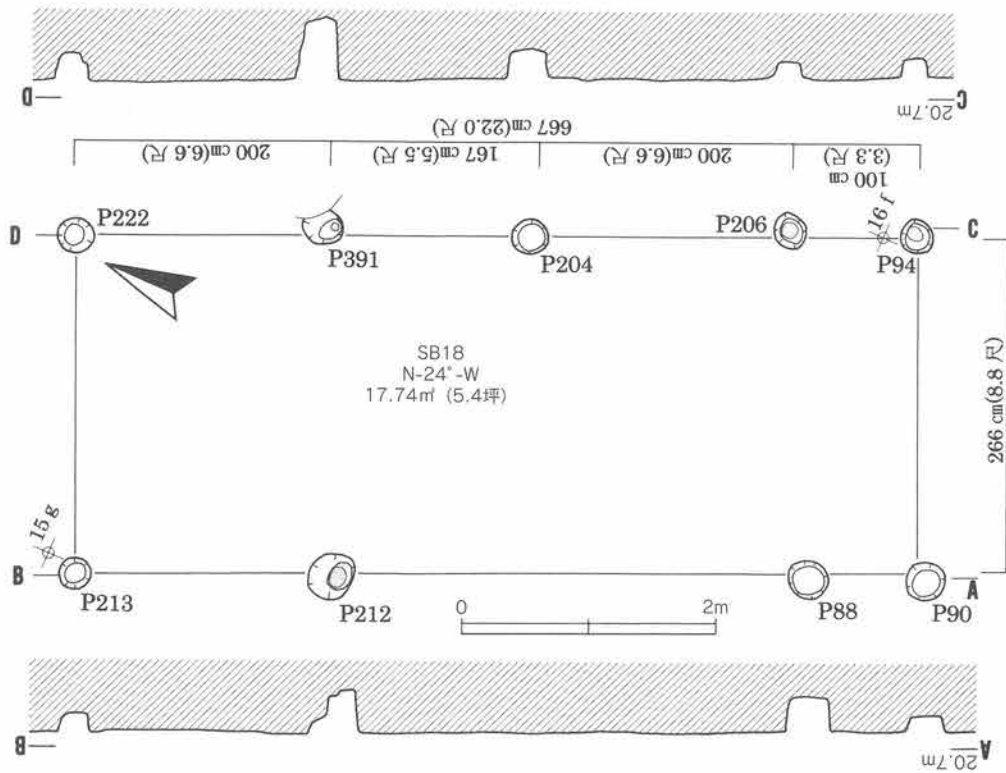
〔付属施設〕 なし。

〔建物の性格〕 規模から附属屋と考えられる。他の建物との位置関係から考えると不合理な位置に建っており、恒常的な建物ではなく、臨時の建物の可能性も考えられる。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



第31図 SB17



第32図 SB18

SB 19 (第33図、写真図版17、25)

〔位置〕 18 c、18 d、19 d、17 e、18 eに位置する。

〔重複〕 SB 7、SB 12と重複するが本建物が古い。またSB 9とは軒の距離があまりに近く同時存在とは考え難い。SK 5との重複関係は断定できないが、おそらく本建物が古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは955cm以上、梁間は477cmである。面積は45.55m² (13.8坪)である。使用した柱穴は10個である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-15°-Wである。

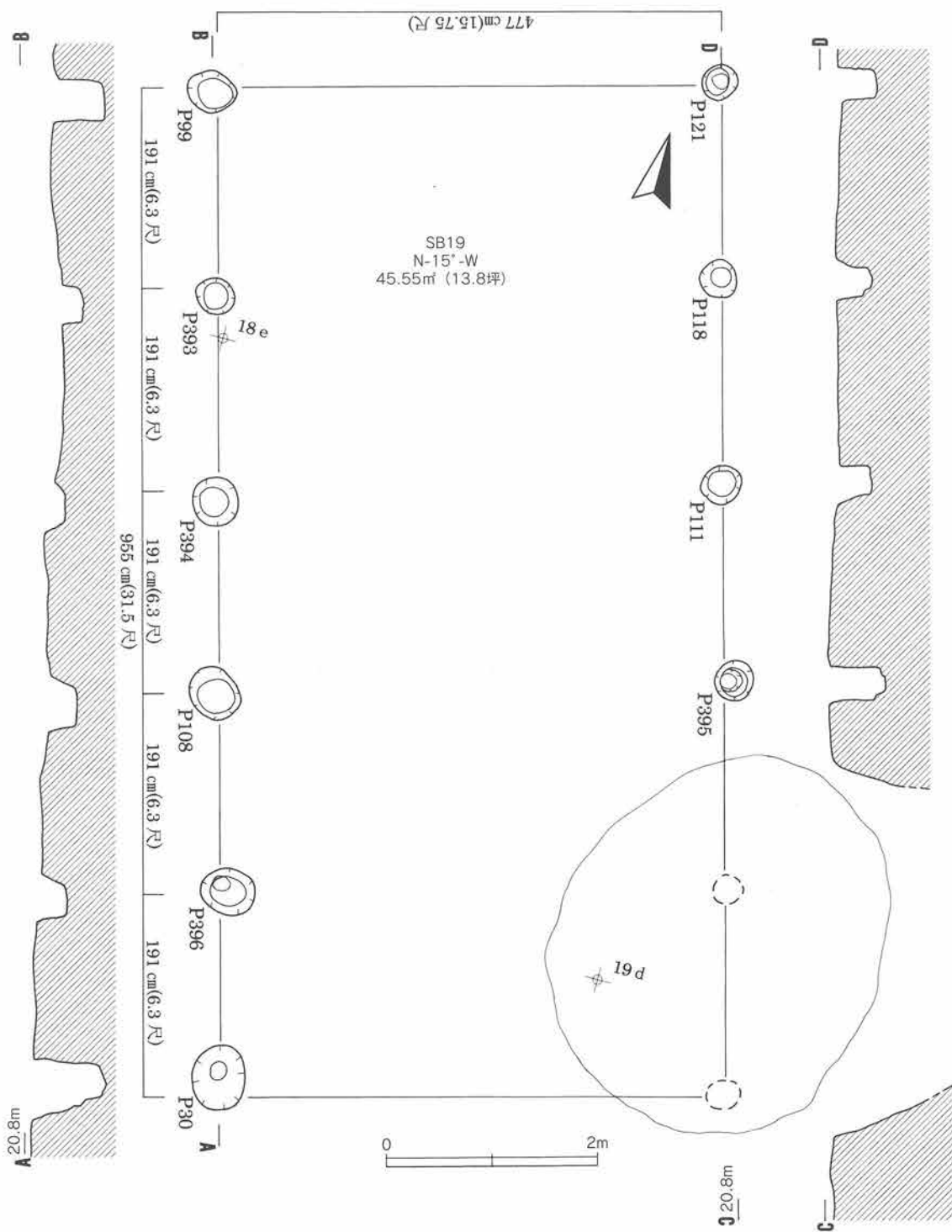
〔柱間寸法〕 桁行きでは191cm (6.3尺)を使用する。梁間の477cm (15.75尺)は191cm (6.3尺)の2.5倍の長さである。よって本建物の基準寸法は191cm (6.6尺)と判断できる。

〔出土遺物〕 なし。

〔付属施設〕 建物のプラン内に納まる状態でSK 6が位置し、建物に伴う可能性がある。しかし確証はなく、無関係の可能性もある。

〔建物の性格〕 規模から附属屋と考えられる。他の建物との位置関係から考えると不合理な位置に建っており、恒常的な建物ではなく、臨時の建物の可能性も考えられる。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。



第33图 SB19

S B 20 (第 34 図、写真図版 17、25、45、46)

〔位置〕 20 b、20 c、21 c、21 d に位置する。

〔重複〕 S B 21 と柱穴が切り合うが本建物が新しい。また S D 4 と S K 4 と重複するが本建物が古い。また S I 1 と重複するが本建物が新しい。S K 10、S K 37、S K 38、S K 39 と重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは 1000 cm、梁間は 450 cm である。面積は 45.00 m² (13.6 坪) である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は N - 24° - W である。

〔柱間寸法〕 桁行きでは 200 cm (6.6 尺)、300 cm (9.9 尺) を使用している。梁間の長さ 450 cm (14.85 尺) は 300 cm (9.9 尺) の 1.5 倍である。これらの点から、本建物の基準寸法は 100 cm (3.3 尺) の倍数と判断できる。

〔出土遺物〕 なし。

〔付属施設〕 なし。

〔建物の性格〕 規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。

S B 21 (第 35 図、写真図版 18、25、46、47)

〔位置〕 19 b、19 c、20 b、20 c、21 b、21 c に位置する。

〔重複〕 S B 21、S K 38 と柱穴が切り合うが本建物が古い。また S D 4 と重複するが本建物が古い。S K 10、S K 37、S K 39 と重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行きは 1090 cm、梁間は 484 cm である。面積は 52.75 m² (16.0 坪) である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は N - 18° - W である。

〔柱間寸法〕 桁行きでは 121 cm (4.0 尺)、182 cm (6.0 尺)、242 cm (8.0 尺) を使用している。梁間の長さは 484 cm (16.0 尺) である。いずれの柱間寸法も約 60.5 cm (2.0 尺) で割り切れる数値を用いている。

〔出土遺物〕 P 411 の埋土から煙管の雁首 (1929) が出土した。

〔付属施設〕 なし。

〔建物の性格〕 規模から附属屋と推測される。

〔年代〕 近世に属する。出土遺物から 17 世紀～18 世紀前半頃に属する可能性が高い。

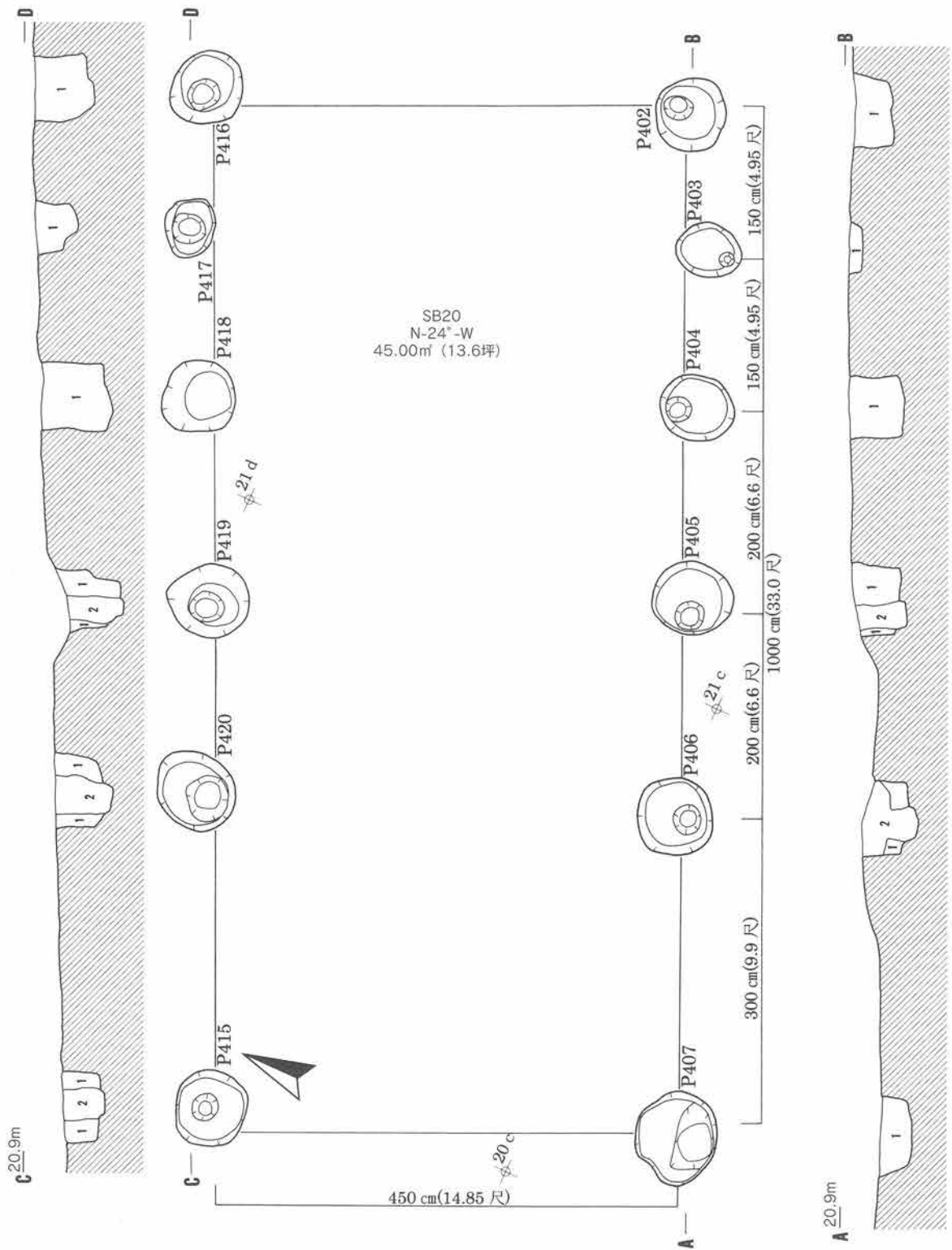
S B 22 (第 36 図、写真図版 18、25、47、48)

〔位置〕 24 c、23 d、24 d、25 d、24 e、25 e に位置する。

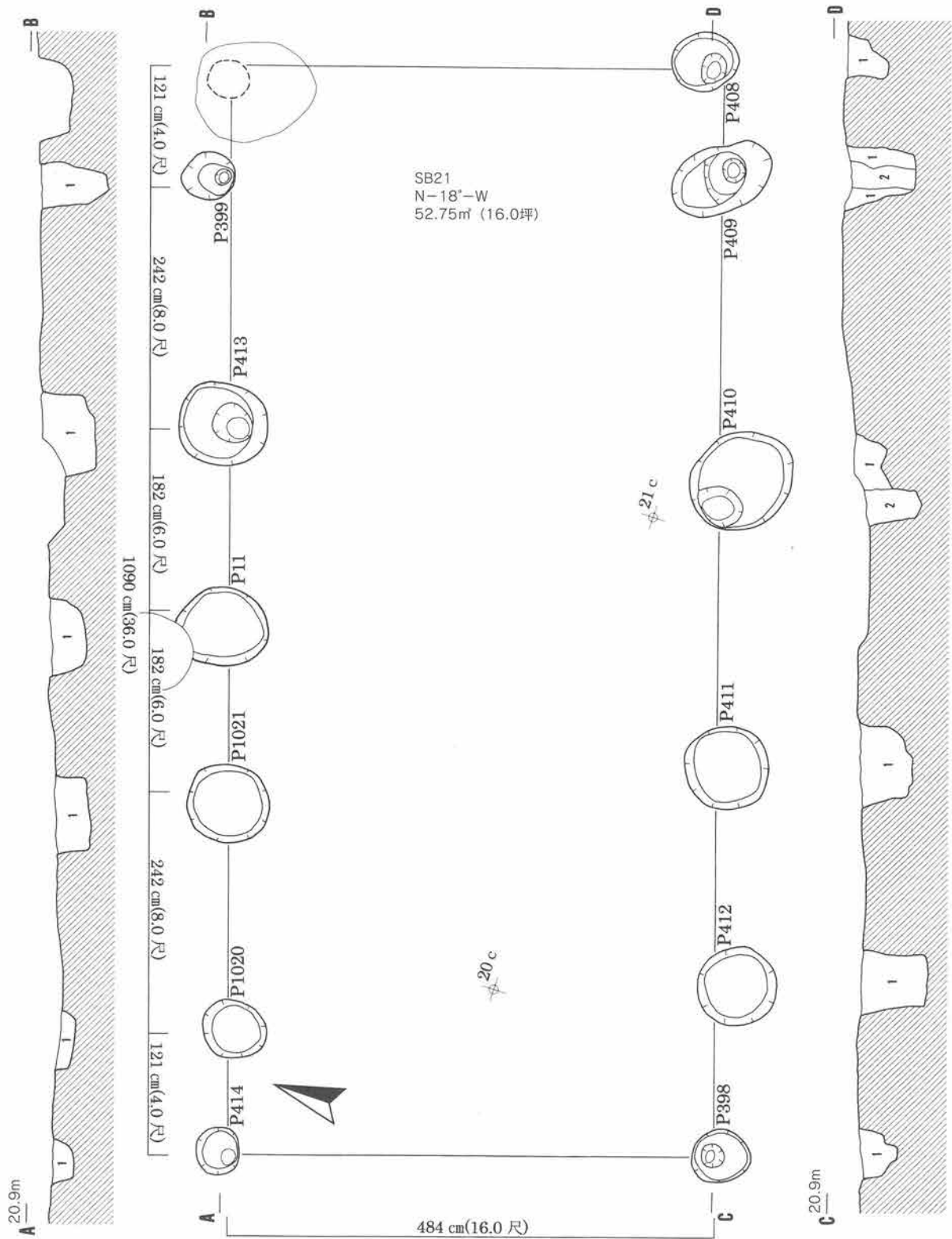
〔重複〕 S K 40 と重複するが本建物が古い。また S B 23 とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく切り合い関係から前後関係を判断できない。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。プランの東側は近年の土砂の切り取りにより失われている。検出された分の桁行きは 700 cm、梁間は 697 cm である。検出された分の面積は 48.79 m² (14.8 坪) である。使用した柱穴は 9 個である。

〔柱穴〕 いずれの柱穴も確認面、断面では柱痕が認められず、柱の抜き取りが行われたと判断される。いずれ



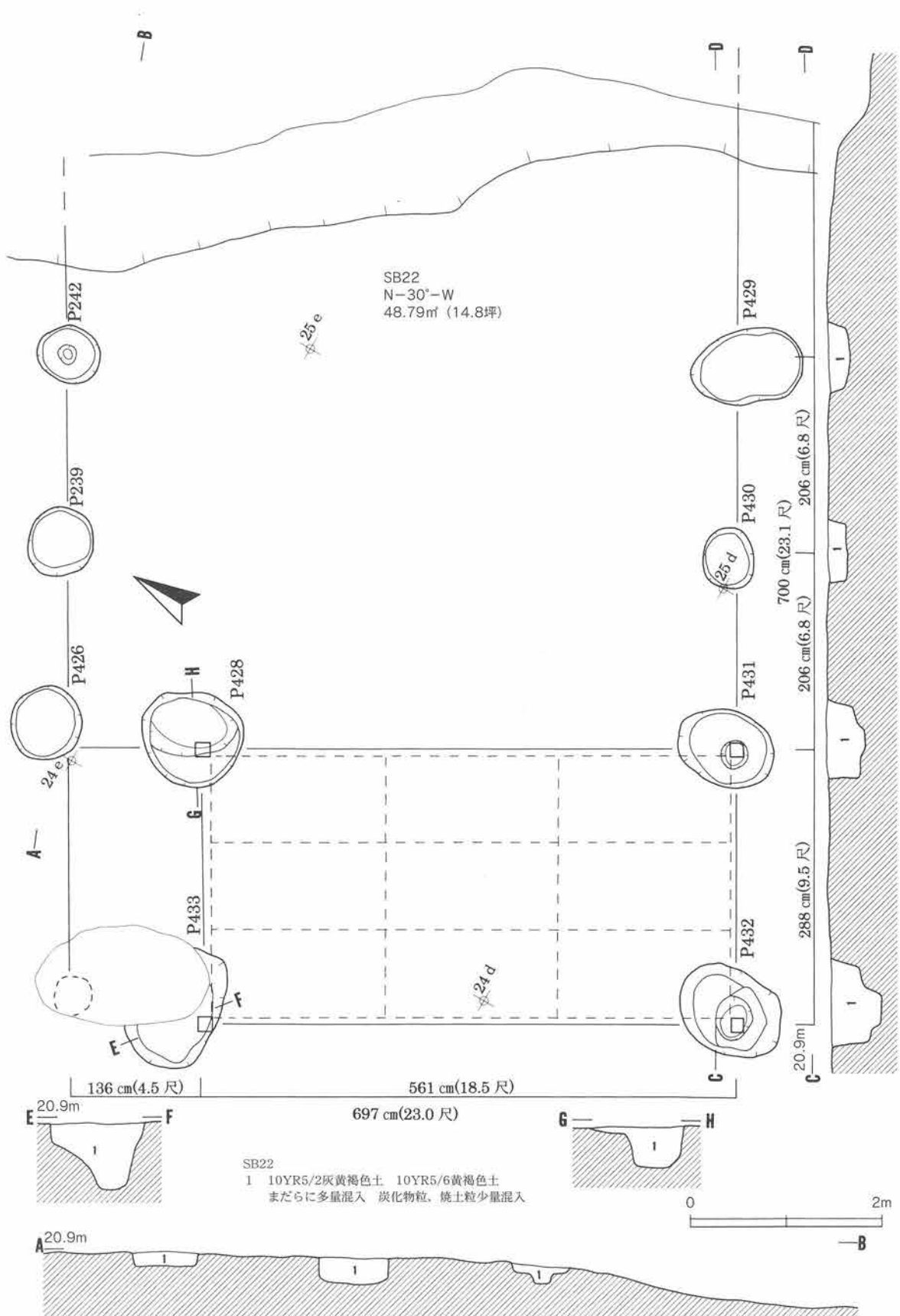
第34図 SB20



SB21

- 1 10YR5/2灰黄褐色土 10YR5/6黄褐色土
まだら多量混入
- 2 10YR5/2灰黄褐色土 炭化物粒少量混入
しまりなし 柱痕か

第35図 SB21



第36図 SB22

の柱穴も浅く、建物の周囲は削平が著しいと判断できる。削平の度合いを考慮すると、検出された柱穴の他に、下屋柱、間仕切りの柱が存在した可能性が高い。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はN-30°-Wである。

〔柱間寸法〕 東側が失われており、また下屋の存在も想定され、検出された状況のみでは基準寸法は見出せない。また、南西の部屋について、4寸角の柱を使用したと想定し、その柱間の内法寸法を求めると、部屋の内部に6.3尺×3.15尺の畳をぴったり9畳敷くことができる。よって本建物の南西部分には畳割を想定した内法寸法の柱間寸法が用いられていたと考えられる。

〔出土遺物〕 P 433 埋土から大堀相馬産陶器火入れ(1094)が出土している。遺物の年代は18世紀代と推測される。

〔付属施設〕 SD 6、SD 7は本溝に伴う区画、排水の目的の溝と考えられる。

〔建物の性格〕 規模、形態から近世民家の主屋と推測される。しかし屋敷中央に位置する主屋SB 11に比較すると規模が小さく、また位置も屋敷の隅であり、下構屋敷に隸属する者の家屋、または隠居屋といった性格が想定される。

〔年代〕 出土遺物と形態から18世紀代の建物と推測される。

SB 23 (第37図、写真図版19、25、48、49)

〔位置〕 24 c、24 d、25 d、24 e、25 eに位置する。

〔重複〕 SB 22とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく切り合い関係から前後関係を判断できない。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。プランの東側は近年の土砂の切り取りにより失われている。検出された分の桁行きは400 cm、梁間は812.5 cmである。検出された分の面積は32.50 m² (9.8坪)である。使用した柱穴は8個である。なおSK 42、SK 43、SK 44は本建物の柱穴であるが、名称は調査時のままSKとしている。

〔柱穴〕 いずれの柱穴も確認面、断面では柱痕が認められず、柱の抜き取りが行われたと判断される。いずれの柱穴も浅く、建物の周囲は削平が著しいと判断できる。削平の度合いを考慮すると、検出された柱穴の他に、下屋柱、間仕切りの柱が存在した可能性が高い。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はN-26°-Wである。

〔柱間寸法〕 東側が失われており、また下屋の存在も想定され、検出された状況のみでは基準寸法は見出せない。

〔出土遺物〕 なし。

〔付属施設〕 SD 6、SD 7は本溝に伴う区画、排水の目的の溝と考えられる。

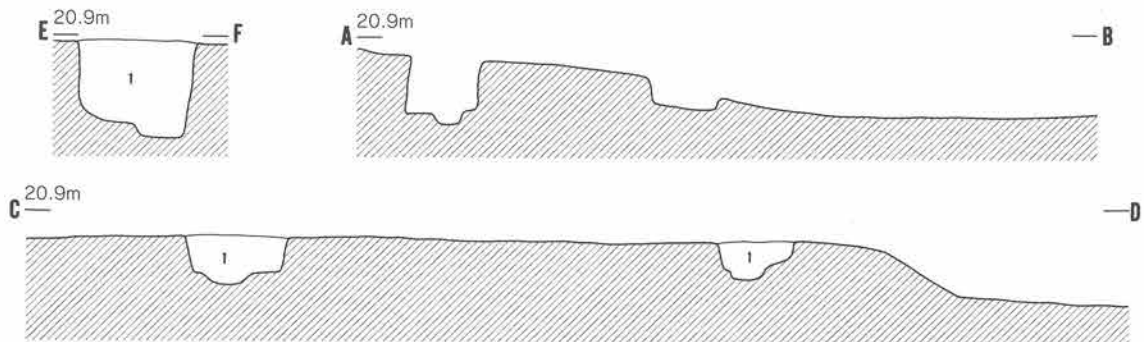
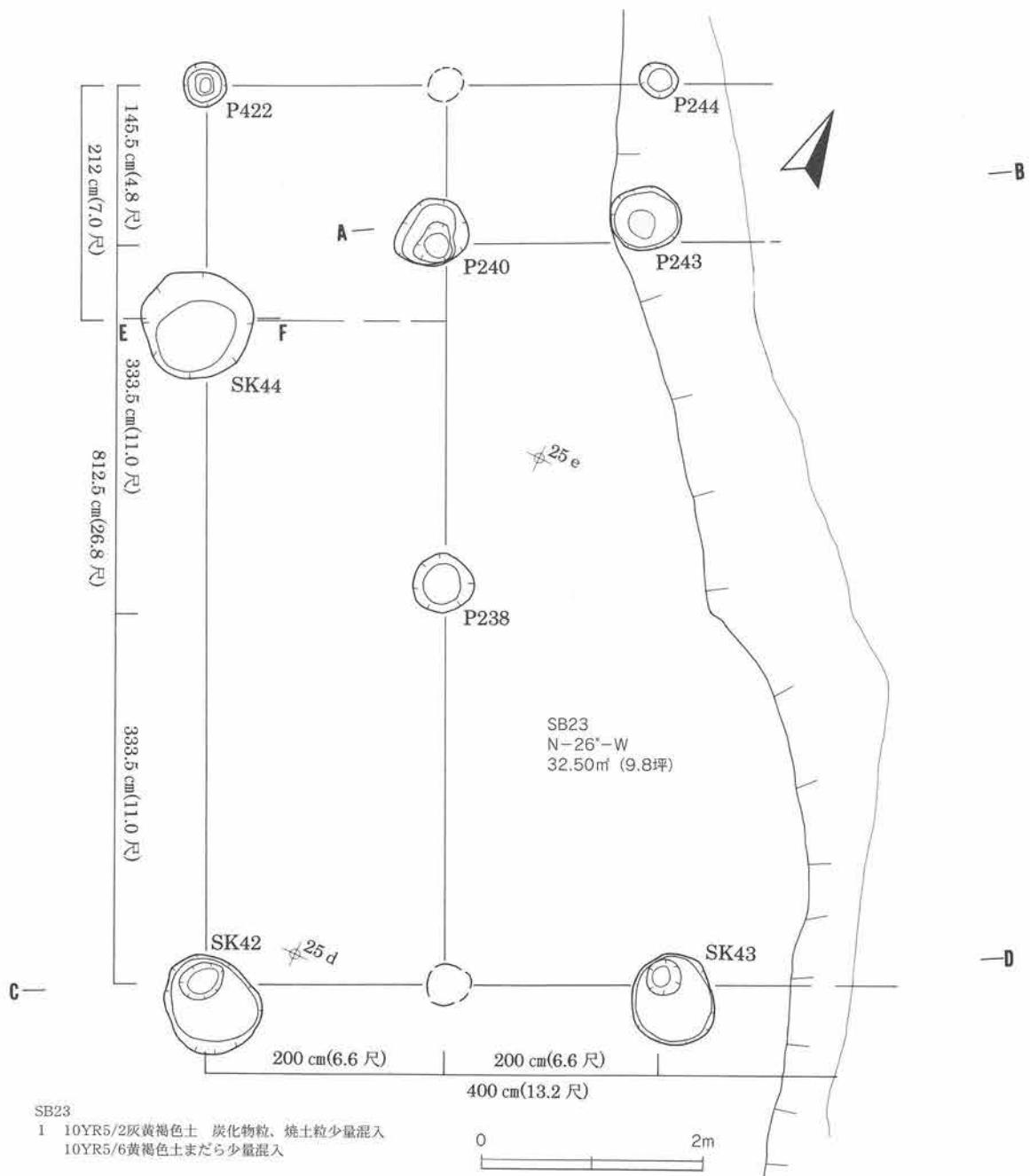
〔建物の性格〕 規模、形態から近世民家の主屋と推測される。しかし屋敷中央に位置する主屋SB 11に比較すると規模が小さく、また位置も屋敷の隅であり、下構屋敷に隸属する者の家屋、または隠居屋といった性格が想定される。

〔年代〕 近世に属するが、詳細な年代は不明である。

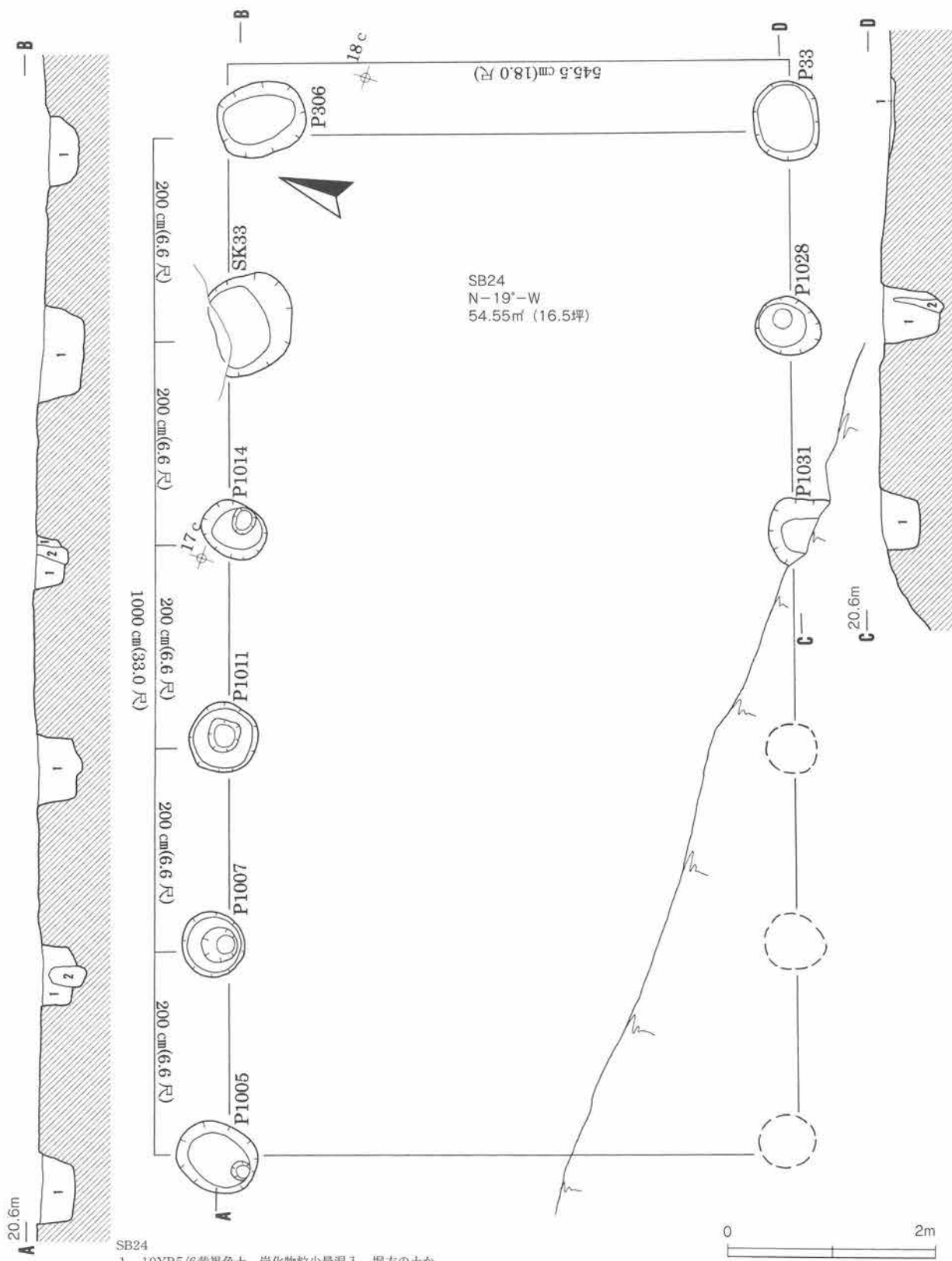
SB 24 (第38図、写真図版19、25、49)

〔位置〕 16 b、17 bに位置する。

〔重複〕 SB 1、SB 8、SB 13、SB 17とプランが重複するが、直接切り合う柱穴が無く、前後関係は



第37図 SB23



- SB24
- 1 10YR5/6黄褐色土 炭化物粒少量混入、堀方の土か
 - 2 10YR5/6黄褐色土 10YR5/2灰黄褐色土
まだら少量混入 しまりなし 柱痕か

第38図 SB24

不明である。S K 12とは柱穴が接するが前後関係を判断できなかった。またS K 54と重複するが本建物が新しい。またS B 4とはプランが重複しないが、軒の距離が近く同時存在では在りえない。

〔平面形式〕掘立柱建物である。南西部分が調査区外の削平部分に伸びるが、桁行きは1000cm、梁間は545.5cmと推測される。面積は54.55㎡（16.5坪）と推測される。使用した柱穴は9個である。なおS K 33は本建物の柱穴であるが、名称は調査時のままS Kとしている。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN - 19° - Wである。

〔柱間寸法〕桁行きの基準寸法は200cm（6.6尺）である。

〔出土遺物〕なし。

〔付属施設〕特に無い。

〔建物の性格〕建物の規模から附属屋と推測される。

〔年代〕近世に属するが、詳細な年代は不明である。

第3節 井戸・土坑

井戸は1基のみの検出である。土坑は48基を検出した。遺構番号はS K 54まで付しているが、S K 33、S K 34、S K 42、S K 43、S K 44の5基は検討の結果、掘立柱建物の柱穴と判断されたものである。本報告書では、これらの遺構の名称は変更せず、S Kのままにしている。また、S K 30は欠番である。

SE 1（第39図、写真図版50）

〔位置〕20 d、20 e、21 d、21 eに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕石組みの井戸である。径20～30cmの礫を底面まで組み合わせている。開口部は周囲よりも盛り上がるように作られており、石組みの周りに小礫を敷いている。掘方の開口部は円形である。

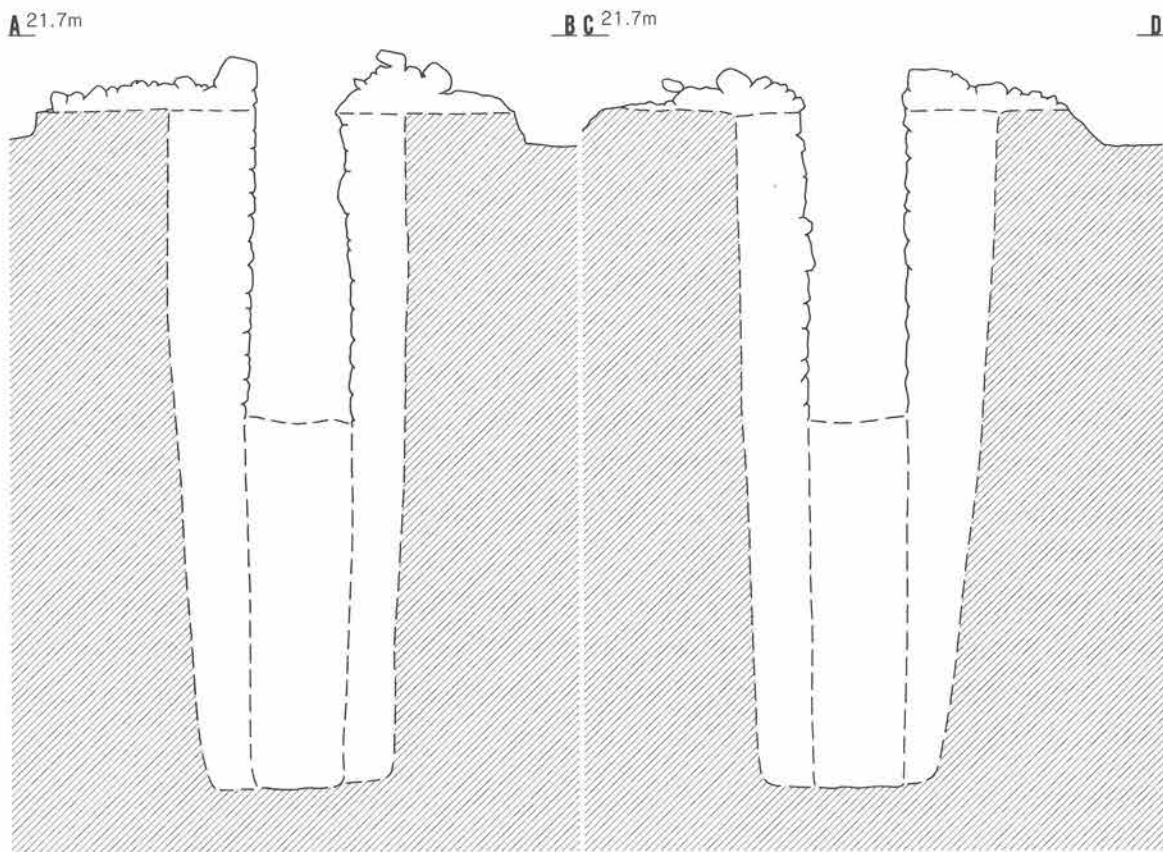
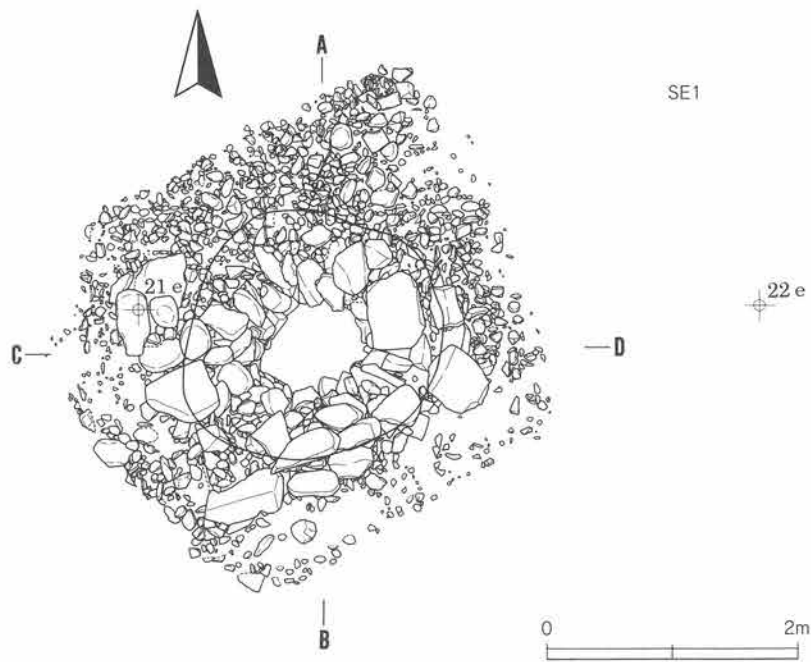
上端からの深さは584cmである。底面の標高は15.71mである。

〔埋土〕上端から深さ290cmまで埋め戻されていた。近年まで使われていた井戸で、埋め戻したのは平成13年のことであるという。埋土の色調、土質の観察はおこなっていない。

〔出土遺物〕井戸本体からの遺物の出土はない。石組み周囲の盛り上がり構成する土中から12世紀の手づくねかわらけ（213、215、221）、常滑産陶器甕（230、237）、中国産白磁壺（252）、在産陶器鉢（1135）、丹波系陶器播鉢（1145）、在産陶器播鉢（1170、1177、1183）が出土した。

〔性格〕井戸である。

〔年代〕屋敷廃絶後も使用が続けられ、井戸鎮めをおこない埋め戻したのは平成13年のことであるという。構築年代は、他に井戸が検出されていないことから、屋敷の開始時（1642年）に掘られた可能性もある。しかし本来の屋敷の範囲は、調査区の南側にも広がっており、調査区外にも井戸が存在した可能性もあり、構築年代は不詳とせざるを得ない。



第39図 SE1

S K 1 (第40図、写真図版51)

〔位置〕12 h、13 h、12 i、13 iに位置する。

〔重複〕なし。

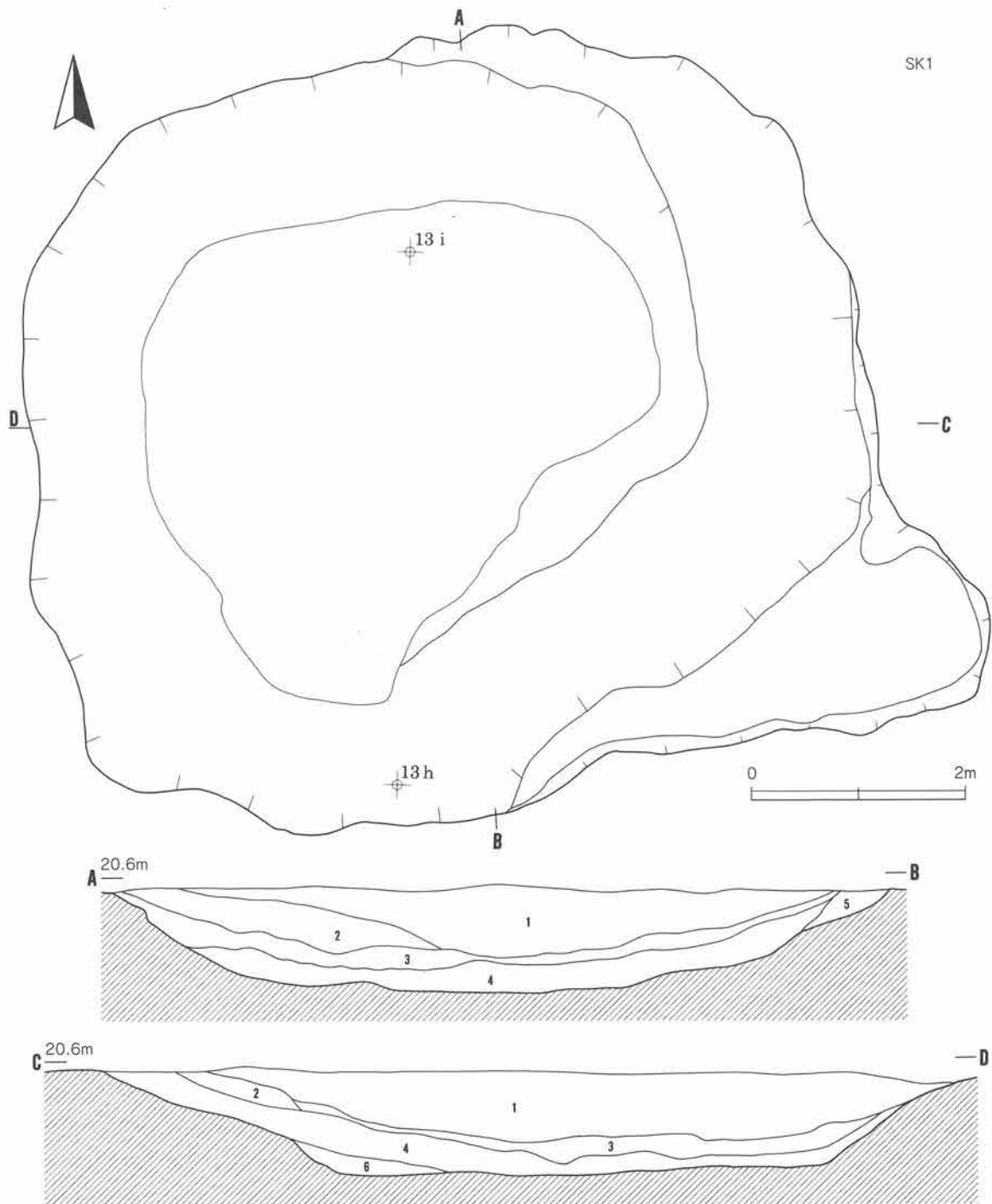
〔形態〕開口部はほぼ円形で、南東部に張り出しある。底面は概ね平坦である。壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは105 cmである。底面の標高は19.12 mである。

〔埋土〕6層に分けられる。3層、4層は泥状の有機質分の多い土である。3層中には多量の陶磁器、ガラス製品を含んでいる。1層、2層は非常に硬く人為的に埋め戻し、固めた土である。水が溜まり泥状になった3層、4層中に多量の遺物を廃棄し、その上に5層、6層の土で埋め戻した状況と推測される。

〔出土遺物〕3層を中心に多量の遺物が出土している。埋土中から、常滑産陶器甕(238)、肥前産陶器碗(1009)、大堀相馬産陶器碗(1019、1024、1026、1028)、大堀相馬産陶器小碗(1033、1037、1038、1039、1040)、肥前産陶器鉢(1043)、肥前産陶器皿(1047)、大堀相馬産陶器皿(1049、1052)大堀相馬産陶器土瓶(1057)、大堀相馬産?陶器土瓶(1063)、産地不明陶器急須(1072、1073、1074)、産地不明陶器土瓶蓋(1077、1079)、大堀相馬産?陶器土鍋(1080)、産地不明陶器湯のみ(1081、1082)、大堀相馬産陶器湯のみ(1084)、大堀相馬産陶器すず徳利(1086)、大堀相馬産陶器爛徳利(1090)、産地不明陶器爛徳利(1091)、在地産陶器灯明皿(1103、1105、1106)、大堀相馬産?陶器灯明皿(1104)、在地産陶器甕(1114、1117、1118)、常滑産陶器甕(1124)、在地産陶器鉢(1134、1137)、在地産陶器植木鉢(1140～1143)、在地産陶器餌入れ(1144)、在地産陶器播鉢(1162、1164、1168、1178)、在地産陶器ほうろく(1187)、在地産陶器器種不明(1202)、在地産陶器蓋?(1203)、在地産陶器火鉢(1205)、在地産陶器焜炉の台(1209)、肥前産磁器碗(1313、1329、1342、1343、1350、1352)、肥前産磁器小碗(1334、1339)、肥前産磁器碗蓋(1351、1353、1364)、肥前産磁器小碗(1366、1373、1374、1375)、瀬戸産磁器碗(1376、1377、1381、1384)、東北地方産磁器碗(1387、1388)、平清水産磁器碗(1389、1390)、肥前産磁器皿(1394、1398、1403、1407、1410、1412)、東北地方産?磁器皿(1411)、東北地方産磁器皿(1414)、肥前産磁器火入れ(1422、1423、1424)、肥前産磁器蓋付鉢(1426、1429)、切込産?磁器爛徳利(1437)、切込産磁器爛徳利(1438、1439)、肥前産?磁器紅皿(1441)、産地不明磁器碗(1442～1445、1447、1448、1450～1455)、産地不明磁器碗蓋(1449)、産地不明磁器小碗(1456～1465)、産地不明磁器湯呑(1466、1467)、産地不明磁器猪口(1468～1473)、産地不明磁器盃(1474～1496)、産地不明磁器皿(1497～1517)、産地不明磁器鉢(1518、1519)、産地不明磁器爛徳利(1520、1521)、産地不明磁器急須蓋(1524)、薬瓶(1601～1610、1612、1613、1622～1631)、インク瓶(1614、1615)、クリーム瓶(1618、1619)、びんづけ油瓶(1620)、哺乳瓶(1621)、清酒瓶?(1632～1637)、牛乳瓶(1638、1639)、サイダー瓶(1640、1641)、コップ(1642)、ワイン瓶?(1643、1644)、ビール瓶(1645～1658)、石油ランプ(1659、1660)、ランプのほや(1661～1674)、ランプの笠(1675～1677)、砥石(1708)、硯(1715、1716)、不明石製品(1717、1719、1720)、鎌(1901、1903、1904)、やっこ(1907)、キセルの吸口(1940)、小柄(1941)、寛永通寶(1955、1958)が出土した。

〔性格〕遺構の形状と3層、4層が水成堆積であることから、池の可能性が想定される。長島地区では以前、麻の栽培が盛んであり、刈り取った麻を浸しておく池が屋敷内に存在する事例が多かったという。当土坑も、麻を浸す用途の池の可能性を指摘できる。そして、廃絶時には不要物を捨てる廃棄坑として使用している。

〔年代〕遺物の年代観から廃絶時期は下構屋敷が移動した昭和5年(1930年)頃と判断できる。大正12年の紀年銘を有する盃(1477)が出土しており、廃絶年代を絞り込む有力な資料となる。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。



SK1

- 1 10YR5/6黄褐色土 地山の土に似る 非常にしまりある
10YR7/1灰白色ロームまだら少量混入 炭化物粒少量混入
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色土 礫を多量に混入 非常に硬い層
- 3 10G3/1暗緑灰色土 礫多量混入 陶磁器、
ピンを多量に含む 有機質分の多い層

- 4 10Y2/2黒褐色土 10G7/1明緑灰色ローム
まだら多量混入 有機質分の多い層 遺物はあまり混じらない
- 5 10YR5/6黄褐色土 炭化物粒少量混入
- 6 10G5/1緑灰色土 炭化物粒少量混入

第40図 SK1

SK 2 (第41図、写真図版52)

〔位置〕 15 h、15 i に位置する。

〔重複〕 SD 3 とプランが接するが、同時存在の遺構と推測される。

〔形態〕 開口部は不整な楕円径を呈する。底面は概ね平坦である。壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは110 cmである。底面の標高は19.35 mである。

〔埋土〕 9層に分けられる。4層～7層は泥状の有機質分の多い土である。これらは水成堆積と判断される。また、3層中には多量の陶磁器片を含んでいる。9層は構築時に形状を整えるために埋め戻した土と推測される。

〔出土遺物〕 埋土中から肥前産磁器碗(1010)、大堀相馬産陶器碗(1018、1025)、瀬戸・美濃産陶胎染付碗(1032)、大堀相馬産陶器小碗(1041)、肥前産陶器鉢(1043)、在地産陶器皿(1053)、大堀相馬産陶器土瓶(1055、1069)、在地産陶器土瓶(1060、1062、1068)、常滑産陶器甕(1124)、瀬戸・美濃産陶器片口鉢(1126)、在地産陶器鉢(1132)、肥前産陶器播鉢(1156)、在地産陶器播鉢(1157、1159、1160、1164、1167、1169、1174、1176、1183)、在地産陶器ほうろく(1188、1189、1191、1192、1194、1197、1198、1200、1201)、在地産陶器火消壺(1204)、在地産陶器火鉢(1206)、肥前産磁器皿(1311)、肥前産磁器碗(1313、1316、1322、1347、1354、1357、1358、1359)、肥前産磁器小杯？(1341)、肥前産磁器小碗(1365、1372)、瀬戸産磁器碗(1382)、肥前産磁器皿(1395、1401、1405)、肥前産磁器蓋付鉢(1430)、肥前産磁器瓶(1433、1435)、砥石(1702、1711)、漆器椀(1801～1803)、漆器椀蓋(1804、1805)、不明漆器(1806)、下駄(1807、1808)、曲物底板？(1809)、鍋蓋(1810)、棒状木製品(1811)、桶底板(1812)、釘(1913、1917)、受け金具(1920)、くつわ？(1922)、不明鉄製品(1924、1925)、煙管雁首(1931、1934)、煙管吸口(1939)、銅製金具(1942)が出土している。また図示していないが、建物の礎石と推測される石(写真図版52)が出土している。礎石建物の解体後、不要な礎石を廃棄したと考えられる。また底面に長さ2.8mの材木が出土した。枝は切り取られた状態であった。この材が不要物を廃棄したのか、何らかの意図があって置いたものかは判断できなかった。

〔性格〕 SD 3 と連続し、4層～7層が水成堆積であることから、溝に付随する水溜め、洗い場といった用途が想定される。SK 2 の西側にはSD 3 が連続しないが、本来は溝が存在していたと推測される。廃絶時には不要物を捨てる廃棄坑として使用している。

〔年代〕 遺物の年代観から廃絶時期は幕末頃(19世紀中頃)と推測される。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

SK 3 (第41図、写真図版53)

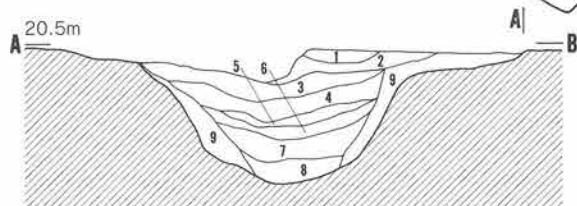
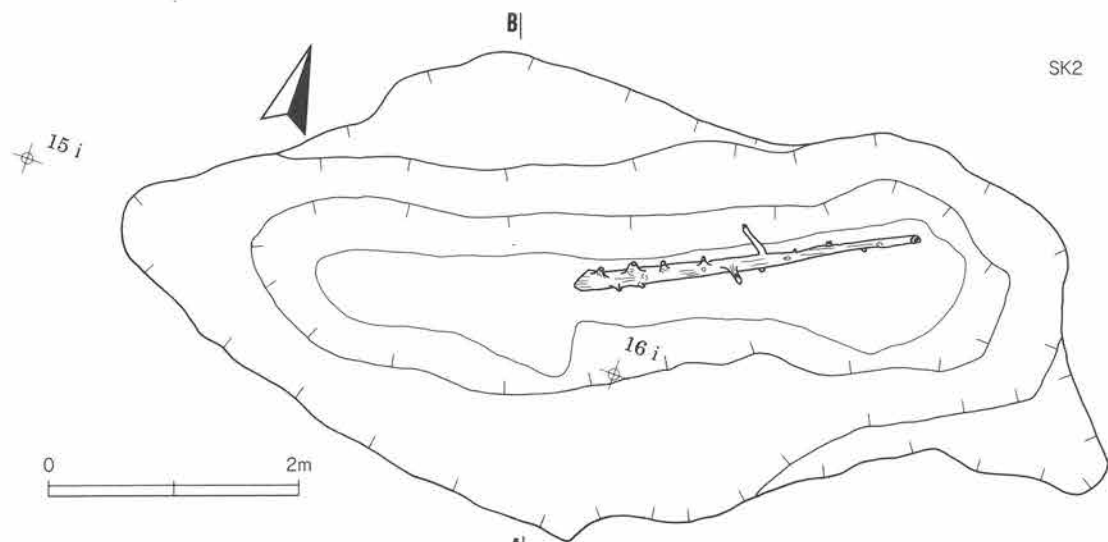
〔位置〕 16 h、16 i、17 h、17 i に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は楕円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は緩やかに斜めに立つ。確認面からの深さは42 cmである。底面の標高は20.04 mである。

〔埋土〕 4層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は判断できない。

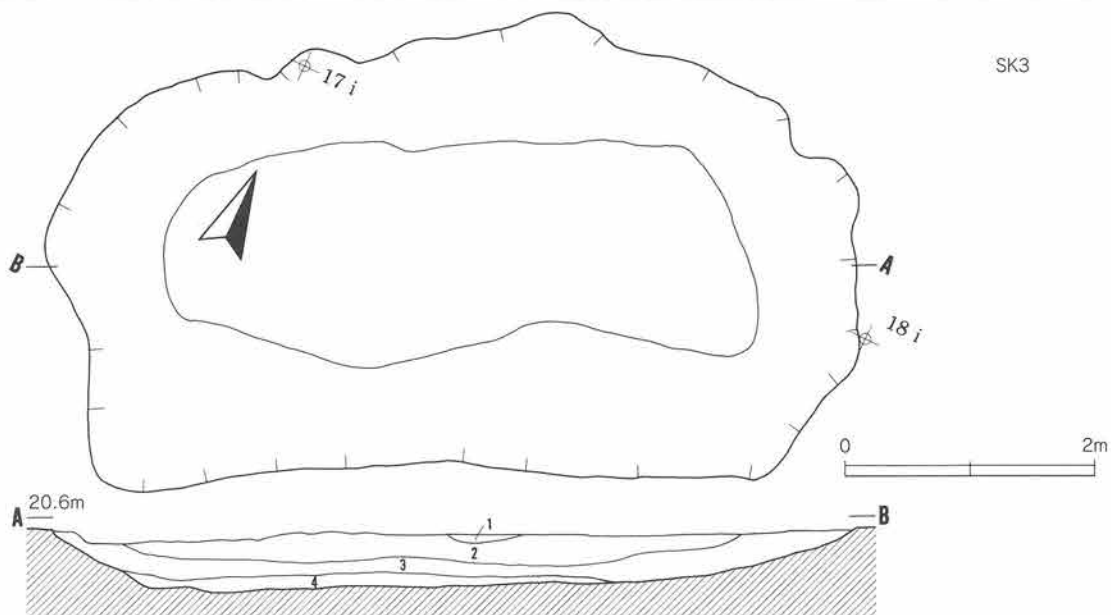
〔出土遺物〕 埋土中から肥前産陶器碗(1006、1007)、大堀相馬産陶器碗(1017、1020、1021)、肥前産陶器鉢(1043)、在地産陶器甕(1115)、瀬戸産陶器播鉢(1149)、在地産陶器播鉢(1166)、肥前産磁器皿(1307、1308)、肥前産磁器蓋付鉢(1432)、砥石(1703)、包丁(1906)、鉄製くさび(1921)が出土している。



SK2

- 1 10YR7/8黄橙色ローム 10YR2/1黒褐色土、
10YR5/6黄褐色土まだら多量混入
- 2 10YR3/1黒褐色土 炭化物粒多量混入
近世陶磁器片含む
- 3 10YR3/2黒褐色土 10YR4/6褐色土
まだら少量混入

- 4 10YR6/3にぶい黄橙色土
炭化物粒多量混入木屑多量に含む
- 5 10YR5/1褐灰色土 炭化物粒多量混入 木屑多量に含む
- 6 10G4/1暗緑灰色土 炭化物粒多量混入 木屑多量に含む
- 7 10G4/1暗緑灰色土 10G6/1緑灰色土まだら多量混入
炭化物粒、有機質分多量混入
- 8 10G6/1緑灰色土 10G4/1暗緑灰色土まだら多量混入
炭化物粒、有機質分多量混入
- 9 10YR7/4にぶい黄橙色土 10G4/1暗緑灰色土まだら少量混入



SK3

- 1 10YR4/1褐灰色土 炭化物粒非常に多量混入
- 2 10YR4/1褐灰色土 炭化物粒少量混入

- 3 10YR3/1黒褐色土 炭化物粒少量混入
- 4 10YR6/2灰黄褐色土 炭化物粒、酸化鉄分少量混入

第41図 SK2・3

土した。また図示した以外に、素焼きのほうろくの細片、在地産陶器の甕細片が出土している。

〔性格〕不明である。

〔年代〕出土陶磁器の年代観から幕末頃（19世紀中葉）に廃絶した可能性が高い。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

S K 4（第42図、写真図版53）

〔位置〕19 c、20 c、19 d、20 dに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は不整な方形である。底面は概ね平坦であるが、北東部分に溝状の掘り込みがある。確認面からの深さは溝状の部分で45 cm、他の部分は25 cmである。平坦部分の底面の標高は20.40 mである。

〔埋土〕3層に分けられる。おそらく自然堆積と推測できる。

〔出土遺物〕埋土中から大堀相馬産陶器碗（1027）、大堀相馬産陶器皿（1048）、信楽産陶器播鉢（1145）、在地産陶器土瓶（1059）、煙管雁首（1932、1933）が出土した。また、図示していないが、ビール瓶の破片、おはじき（白色ガラス製）、足袋のこはぜ（23.0、九半と刻印がある）、プラスチック製の分度器が出土している。

〔性格〕不明である。

〔年代〕出土遺物から廃絶時期は近代以降と判断できる。プラスチック製品が出土していることから、屋敷廃絶の昭和5年以降の可能性も高い。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

S K 5（第42図、写真図版53、54）

〔位置〕18 c、19 c、18 d、19 cに位置する。

〔重複〕S B 19とプランが重複するが本土坑がおそらく新しい。

〔形態〕開口部は円形である。底面には部分的に深い所があり平坦ではない。確認面からの深さは最深部で134 cmである。最深部の底面の標高は19.26 mである。

〔埋土〕2層に分けられる。1、2層ともに人為的に埋め戻した土と推測される。1層には人頭大の礫が多量に混入している。

〔出土遺物〕1層中から瀬戸産播鉢片（1150）が出土した。

〔性格〕一時に埋め戻しており、井戸を掘りかけ、途中で不都合が生じ、埋め戻した可能性などが想像できる。しかし、確定する要素はなく、性格は不明とせざるを得ない。

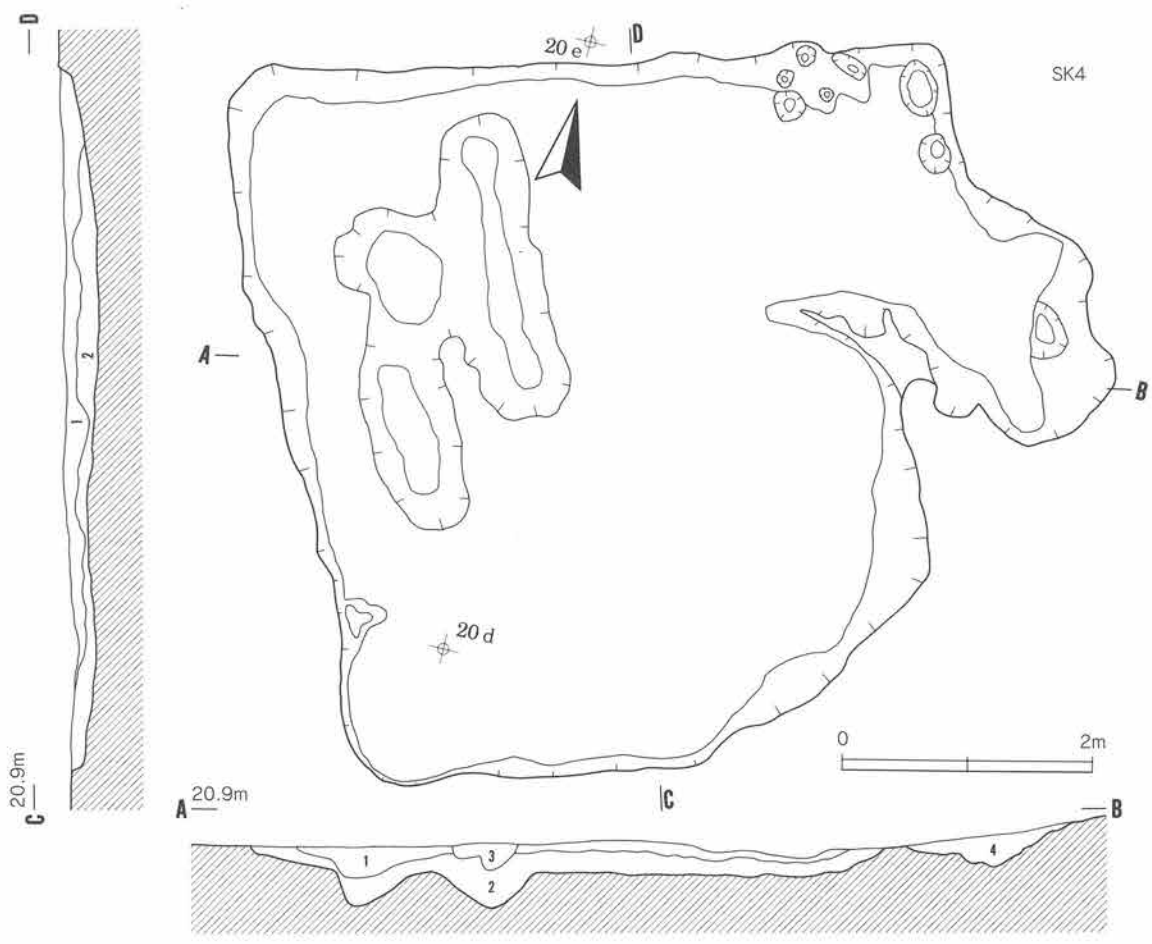
〔年代〕1層中から出土した瀬戸産播鉢は18世紀代のものと推測され、本遺構を埋め戻した年代は18世紀代以降と判断できる。構築年代はS B 19の廃絶後と推測される。

S K 6（第43図、写真図版54）

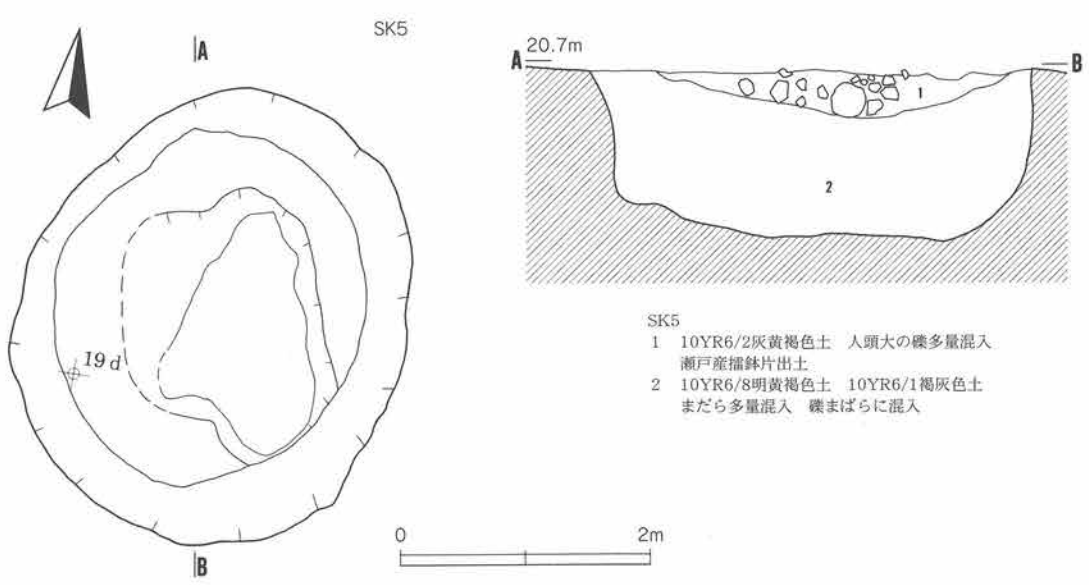
〔位置〕18 d、19 dに位置する。

〔重複〕S K 9と重複するが本土坑が新しい。また本土坑はS B 19のプラン内に納まり、同時存在の可能性もある。

〔形態〕開口部は楕円形で、途中ですぼまりプランが円形になる。確認面からの深さは48 cmである。底面の



- SK4
- 1 10YR4/2灰黄褐色土 炭化物粒多量混入
 - 2 10YR6/3にぶい黄橙色土 酸化鉄分多量混入
 - 3 10YR4/1褐灰色土 しまりなし 耕作痕が



- SK5
- 1 10YR6/2灰黄褐色土 人頭大の礫多量混入 瀬戸産摺鉢片出土
 - 2 10YR6/8明黄褐色土 10YR6/1褐灰色土 まだら多量混入 礫まばらに混入

第42図 SK4・5

標高は 20.14 m である。

〔埋土〕 3 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕 図示した遺物はないが、肥前産磁器皿? の微細片が出土している。

〔性格〕 不明である。S B 19 に伴う土坑であれば、桶などを埋設した痕跡の可能性がある。

〔年代〕 近世の遺構である。構築、廃絶の詳細な年代は不明である。

S K 7 (第 43 図、写真図版 54)

〔位置〕 20 e、20 f に位置する。

〔重複〕 S B 6 の柱穴と重複するが本遺構が新しい。また S B 10、S B 15 とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく、前後関係は不明である。また、S B 2 のプラン内の軸線上に本土坑が位置し、同時存在と推測される。

〔形態〕 開口部は円形である。底面には直径約 150 cm の円形の盛り上がり確認される。確認面からの深さは 56 cm である。底面の標高は 19.96 m である。

〔埋土〕 3 層に分けられる。断面形と土質の違いから、3 層は桶を埋設した際の裏込めの土と判断できる。

〔出土遺物〕 埋土中から 12 世紀のロクロかわらけ (203)、常滑産陶器甕 (242、243)、渥美産陶器甕 (248) が出土した。また図示した他に大堀相馬陶器碗? の微細片が出土している。

〔性格〕 桶を埋設した土坑である。掘立柱建物 S B 2 の内部に構築されており、便所の用途と推測される。

〔年代〕 出土遺物から廃絶時期は 18 世紀以降と判断される。

S K 8 (第 43 図、写真図版 54)

〔位置〕 21 f に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部はやや不整な円形である。底面は北側部分に凹凸がある。壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは 16 cm である。底面の標高は 20.36 m である。

〔埋土〕 1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 図示していないが、ガラス瓶 (青色、清酒 1 合瓶か) が出土している。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 出土したガラス瓶から近代以降の廃絶と判断できる。

S K 9 (第 43 図、写真図版 55)

〔位置〕 18 c、18 d に位置する。

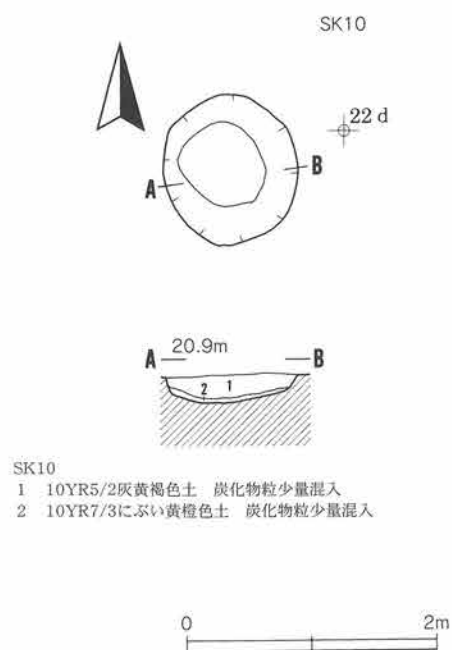
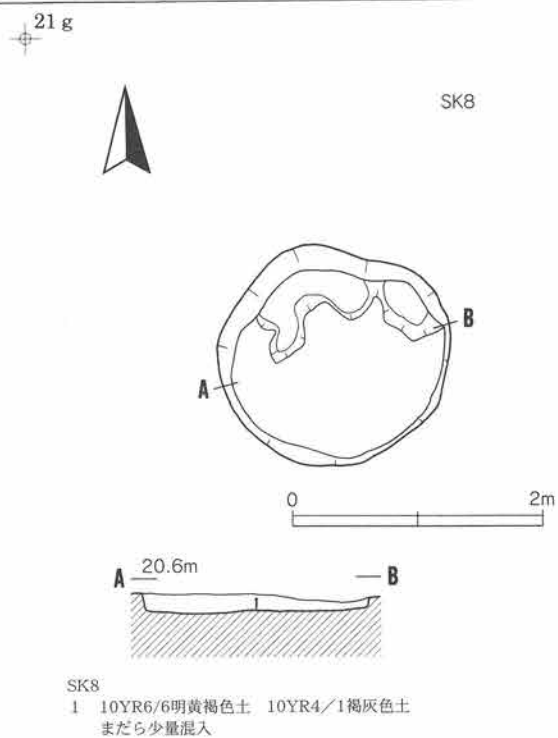
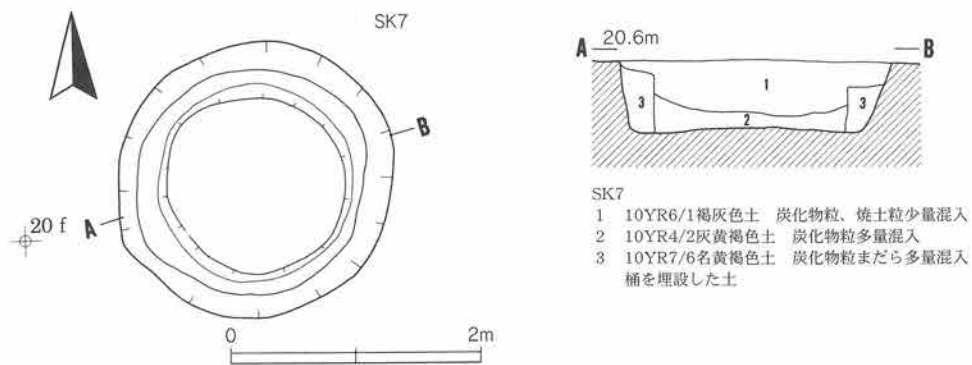
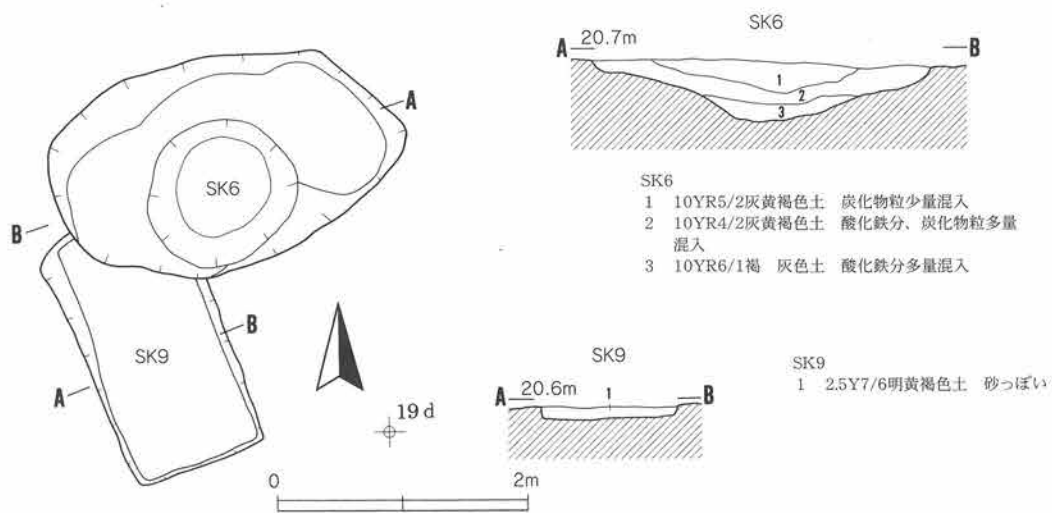
〔重複〕 S K 6 と重複するが本土坑が古い。また、本土坑は S B 19 のプラン内に位置しているが、直接切り合う部分がなく、前後関係は判断できない。

〔形態〕 開口部は長方形である。底面は概ね平坦で、壁は垂直に立つ。確認面からの深さは 9 cm である。底面の標高は 20.46 m である。

〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。



第43図 SK6・7・8・9・10

〔年代〕近世の遺構である。構築、廃絶の詳細な年代は不明である。

S K10（第43図、写真図版55）

〔位置〕21 c、21 dに位置する。

〔重複〕S I 1、S K 39と重複するが、本土坑が新しい。また、S B 20とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。

〔形態〕開口部は円形である。底面は平坦ではない。確認面からの深さは20 cmである。底面の標高は20.58 mである。

〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K11（第44図、写真図版55）

〔位置〕22 e、22 fに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は円形である。底面は概ね平坦で、壁は垂直に立つ。確認面からの深さは18 cmである。底面の標高は20.40 mである。

〔埋土〕1層に分けられる。少量であるが焼土が混入する土である。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕図示していないが、埋土から焼けた壁土片が出土した。

〔性格〕不明である。

〔年代〕周辺から12世紀代の遺物が出土しており、12世紀代の遺構の可能性もある。しかし確証はなく、年代は不明とせざるを得ない。

S K12（第44図、写真図版55）

〔位置〕15 b、16 b、15 c、16 cに位置する。

〔重複〕S B 4、S B 13の柱穴と重複するが、本土坑が古い。またS B 1とプランが重複するが直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。またS B 24の柱穴と本土坑が接するが前後関係を判断できなかった。

〔形態〕開口部はやや不整な円形である。底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは24 cmである。底面の標高は20.58 mである。

〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から在産陶器播鉢（1158）が出土した。

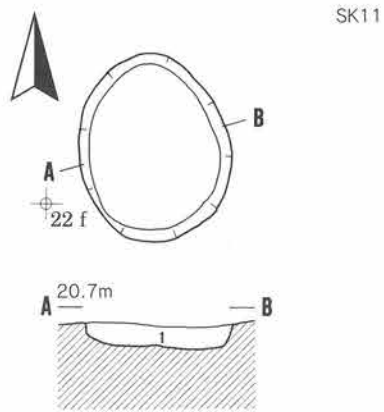
〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

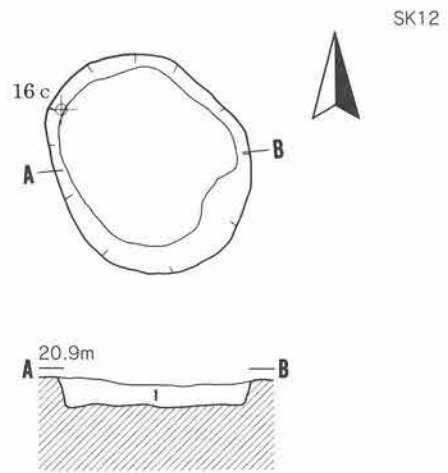
S K13（第44図、写真図版56）

〔位置〕15 c、16 cに位置する。

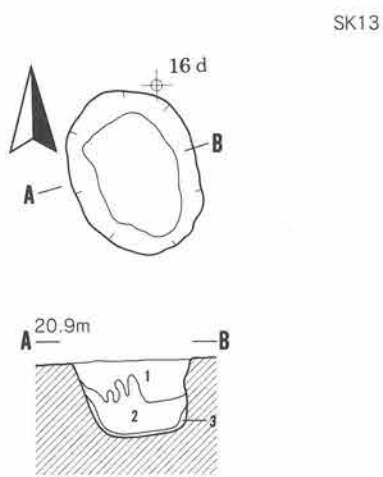
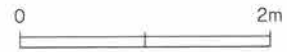
〔重複〕なし。



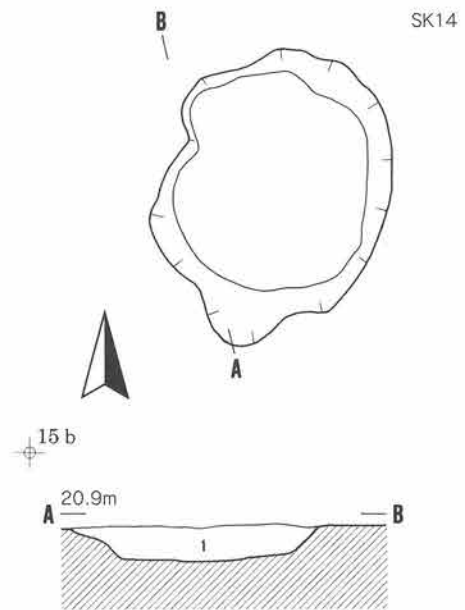
SK11
 1 10YR5/3にぶい黄褐色土 炭化物粒、
 焼土粒少量混入。焼けた壁土片？出土



SK12
 1 10YR6/4にぶい黄橙色土
 10YR4/2灰黄褐色土まだら少量混入



SK13
 1 10YR5/3にぶい黄褐色土 炭化物粒微量混入
 2 10YR6/1褐灰色土
 酸化鉄分多量まだらに多量混入
 3 酸化鉄分の層



SK14
 1 10YR6/2灰黄褐色土 炭化物粒微量混入



第44図 SK11・12・13・14

〔形態〕開口部は楕円形である。底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは60 cmである。底面の標高は20.16 mである。

〔埋土〕3層に分けられる。3層は酸化鉄分の皮膜の層である。

〔出土遺物〕埋土中から在産陶器挿鉢(1154、1161)が出土した。また図示していないが埋土中から、土師器甕細片、肥前産磁器碗?細片が出土した。

〔性格〕不明である。底面の酸化鉄分の皮膜は本土坑に水が溜まっていた可能性を示す。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K14 (第44図、写真図版56)

〔位置〕15 bに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は不整な楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは26 cmである。底面の標高は20.58 mである。

〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K15 (第45、46図、写真図版57、58)

〔位置〕12 a、13 a、14 a、12 b、13 b、14 b、15 b、12 c、13 c、14 c、13 dに位置する。

〔重複〕S K18と重複するが、本土坑が新しい。またS D8と接するが同時存在の可能性がある。

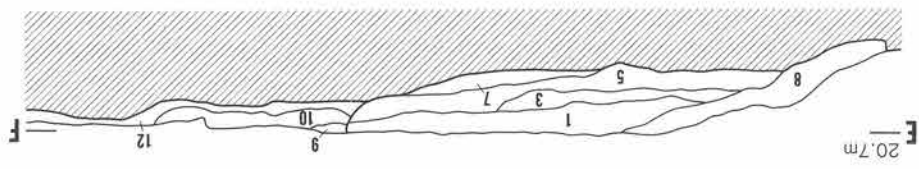
〔形態〕当初掘られた形状(旧段階)と、それを一部埋め戻し新たに構築した形状(新段階)がある。

旧段階・・開口部は不整な台形を呈する。プランは南側にさらに続いていたが、土が切り取られたため、本来の形状は損なわれている。底面は凹凸があり平坦ではない。壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは約55 cmである。底面の標高は約20.08 mである。また東側で梅の立木と重複しており、旧段階の本土坑は、梅の木よりも古いことになる。

新段階・・開口部は不整な方形を呈する。プランは南側にさらに続いていたが、土が切り取られたため、本来の形状は損なわれている。底面は段があり周囲より低い部分がある。東壁と西壁は斜めに立ち上がる。旧段階を埋め立てて構築された北壁は、ほぼ垂直に立ち上がった後になだらかになり、棚状の部分を作り出す。棚状部分の上には、石を組んで置いている。確認面からの深さは約45 cmである。底面の標高は約20.18 mである。底面付近には酸化鉄分が沈殿し、皮膜となっている部分が随所にみられた。

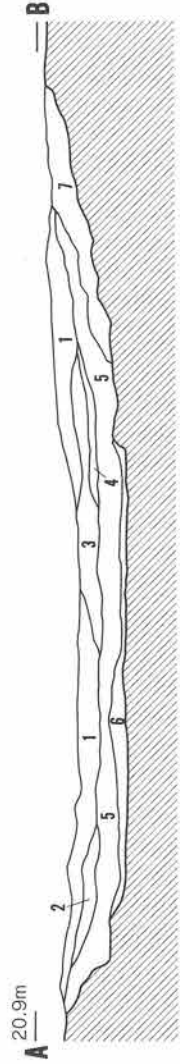
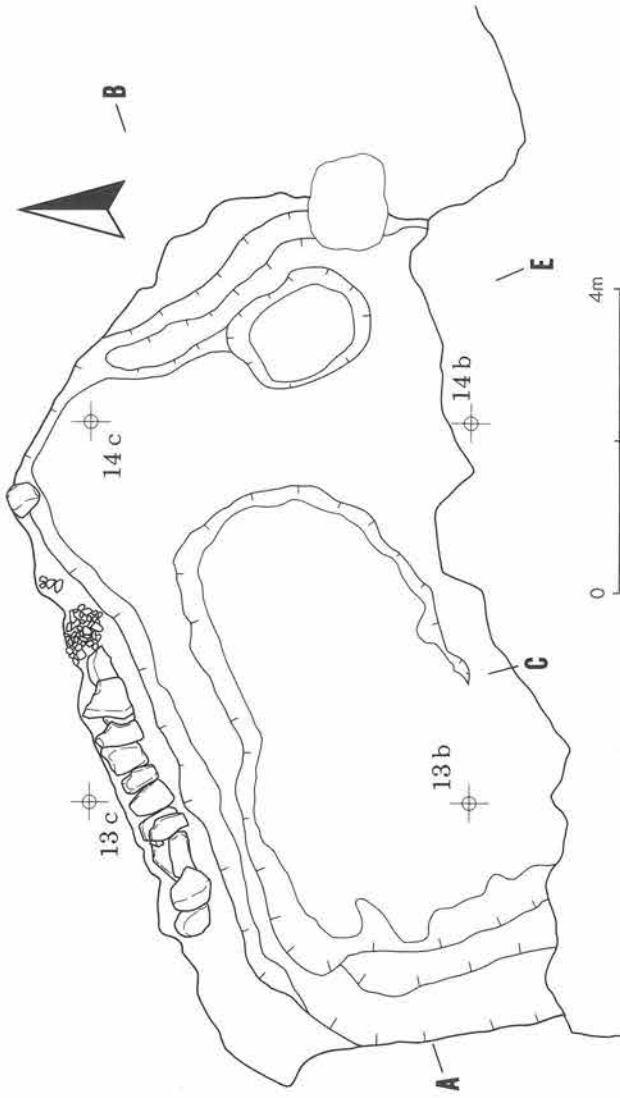
〔埋土〕旧段階、新段階合わせて14層に分けられる。10～14層は旧段階の形状を埋め立てた土である。9層は新段階の北壁に構築された石組みの裏込めの土である。8層は本土坑の埋め土ではなく、南側の土が切り取られた際に、切り岸の形状を整えるために貼られた土である。新段階の埋め土は自然堆積の可能性が高い。調査前の形状をみると新段階の土坑部分はやや窪んだ状況であった。この点から判断して新段階の埋め土は自然堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕埋土中から石鎌(4)、須恵器大甕片(167)、12世紀のロクロかわらけ(201、202、204、206、207、208、209、211、212)、12世紀の手づくねかわらけ(218、220)、常滑産片口鉢(222)、常滑産広口

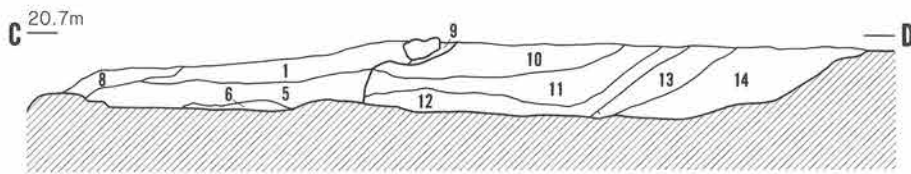


石組み側面図

SK15 (新)

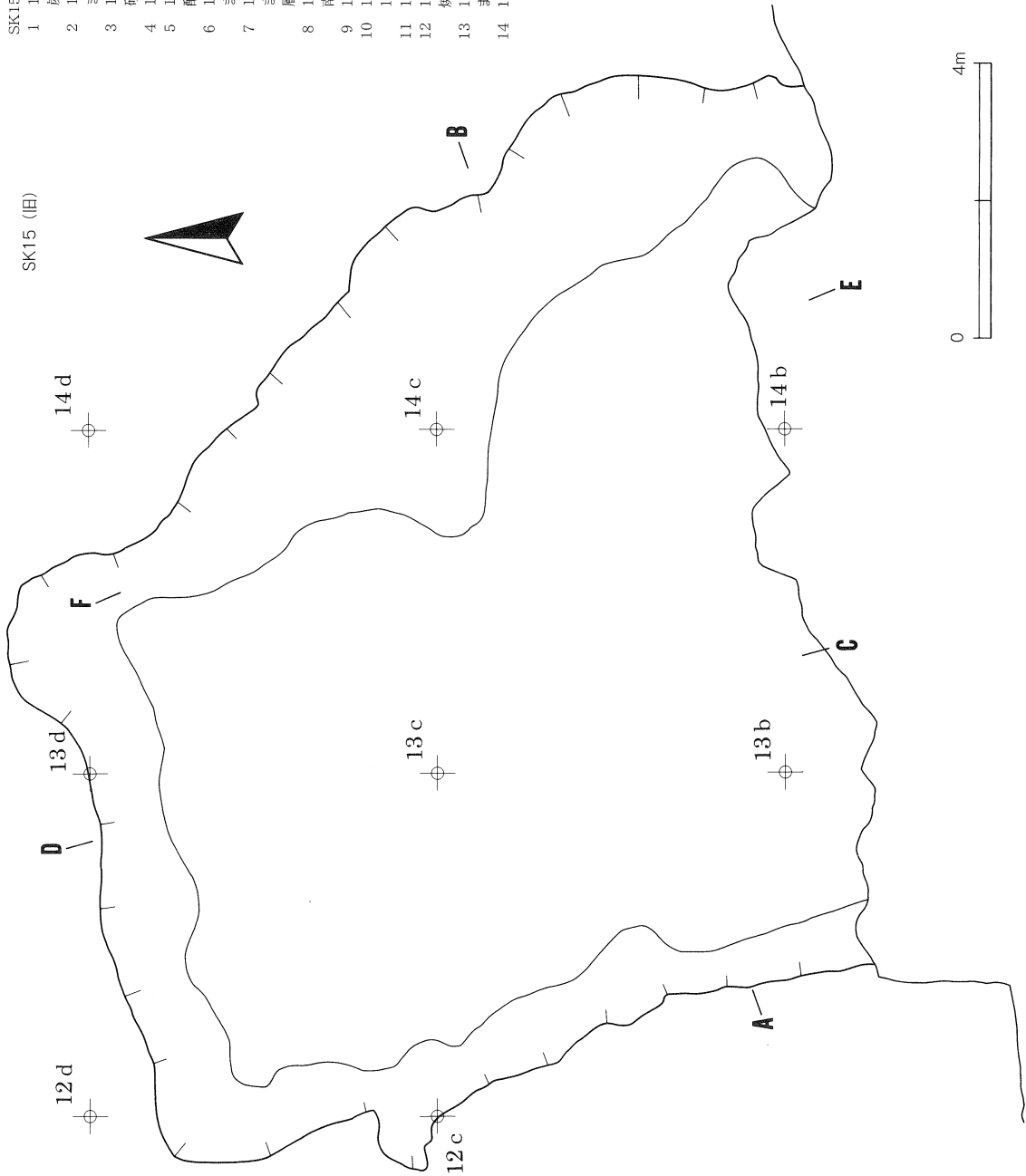


D F



第45図 SK15 ①

- SK15
- 1 10YR6/3にぶい黄褐色土 小礫、炭化物粒少量混入 しみりある
 - 2 10YR5/1褐灰色土 10YR6/3にぶい黄褐色土 まだら多量混入 炭化物粒少量混入
 - 3 10YR6/1褐灰色土 炭化物粒、酸化鉄分少量混入 砂粒少量混入
 - 4 10YR6/1褐灰色土 炭化物粒多量混入
 - 5 10YR5/1褐灰色土 炭化物粒少量、酸化鉄分多量混入
 - 6 10YR5/1褐灰色土 10YR6/8明黄褐色土 まだら多量混入 しみりがある
 - 7 10YR5/1褐灰色土 10YR6/8明黄褐色土 まだら多量混入 非常にしみりがある 層上面に酸化鉄分の皮膜あり
 - 8 10YR5/6黄褐色土 炭化物粒少量混入 南壁削平後に乗った土
 - 9 10YR4/1褐灰色土 礫を含む
 - 10 10YR5/6黄褐色土 炭化物粒多量混入
 - 11 10YR4/1褐灰色土 まだらに多量混入 しみりあり
 - 12 10YR4/3にぶい黄褐色土 炭化物粒少量混入
 - 12 10YR4/3にぶい黄褐色土 炭化物粒、焼土粒多量混入
 - 13 10YR4/4褐色土 10YR3/1黒褐色土 まだら少量混入
 - 14 10YR4/3にぶい黄褐色土 炭化物粒少量混入



第46図 SK15 ②

壺？(241)、常滑産甕(247)、渥美産甕(250)、肥前産陶器皿(1002)、肥前産陶器碗(1008)、大堀相馬産陶器碗(1016、1022、1023)、大堀相馬産陶器小碗(1036)、肥前産陶器鉢(1045)、在地産陶器輪花皿(1054)、在地産陶器土瓶(1058、1062、1063、1067)、大堀相馬産陶器土瓶(1065、1066)、大堀相馬産？陶器土瓶蓋(1076)、産地不明陶器湯のみ(1083)、産地不明陶器花瓶(1089)、瀬戸・美濃産陶器香炉(1092、1093)、大堀相馬産陶器火入れ(1095)、在地産陶器火入れ(1097、1098)、在地産陶器灰落し(1100)、在地産陶器甕(1110、1113、1114、1116、1121) 在地産陶器切立(1119)、瀬戸・美濃産陶器鉢(1125)、大堀相馬産陶器片口鉢(1127)、在地産陶器鉢(1133)、瀬戸産陶器播鉢(1146、1153)、在地産陶器播鉢(1161、1163、1175、1179、1182)、在地産陶器ほうろく(1199、)、在地産陶器火鉢(1208)、肥前産磁器皿(1304、1306、)、肥前産磁器碗(1315、1318、1321、1324、1326、1327、1331、1332、1348、1360、)、肥前産磁器小碗(1338)、肥前産磁器皿(1395、1396、1404、1408、1409)、産地不明青磁皿？(1420)、肥前産磁器火入れ(1425)、肥前産磁器瓶(1436)、肥前産？磁器水滴(1440)、砥石(1707、1709、1714)、墨書のある石(1718)、鎌(1902、1905)、釘(1910、1911、1912、1914、1916、1919)、煙管吸口(1937)、寛永通寶(1945、1946、1947、1948、1957)、仙台通寶(1965、1966)、土人形(2001、2003)、土鈴(2004)が出土した。〔性格〕新段階の底面に酸化鉄分の皮膜が観察されたことは、土坑内に水が溜まっていた可能性を示す。また遺構の大きさを考慮すると池の可能性を指摘できる。

〔年代〕埋土中からガラスの細片など近代以降の遺物が出土しているが、廃絶後の自然堆積の過程で混入した可能性が高い。出土遺物の全体的な傾向をみると、幕末頃(19世紀中葉)の廃絶と推測される。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

S K16 (第47図、写真図版58)

〔位置〕11 cに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は円形である。底面には凹凸があり、壁は概ね垂直に立つ。確認面からの深さは35cmである。底面の標高は20.18mである。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K17 (第47図、写真図版58)

〔位置〕11 cに位置する。

〔重複〕なし。

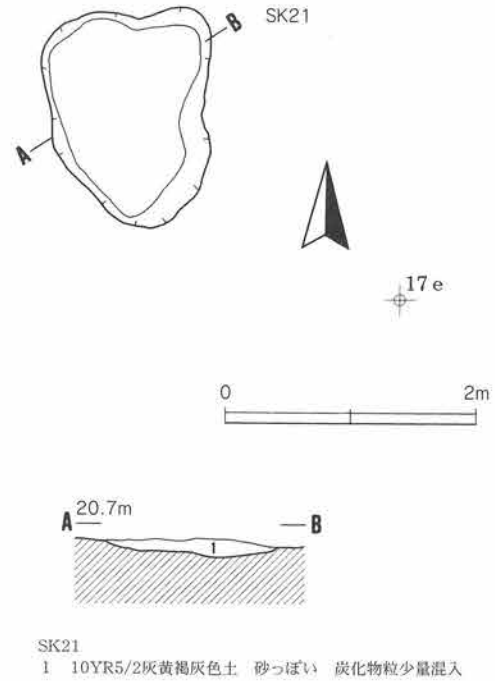
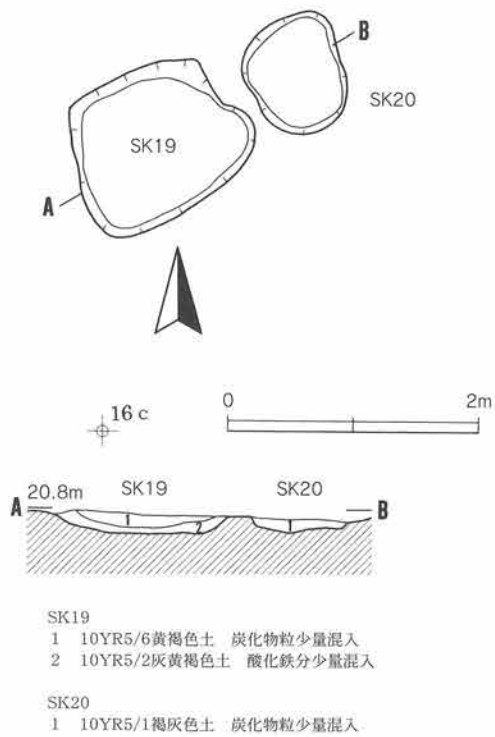
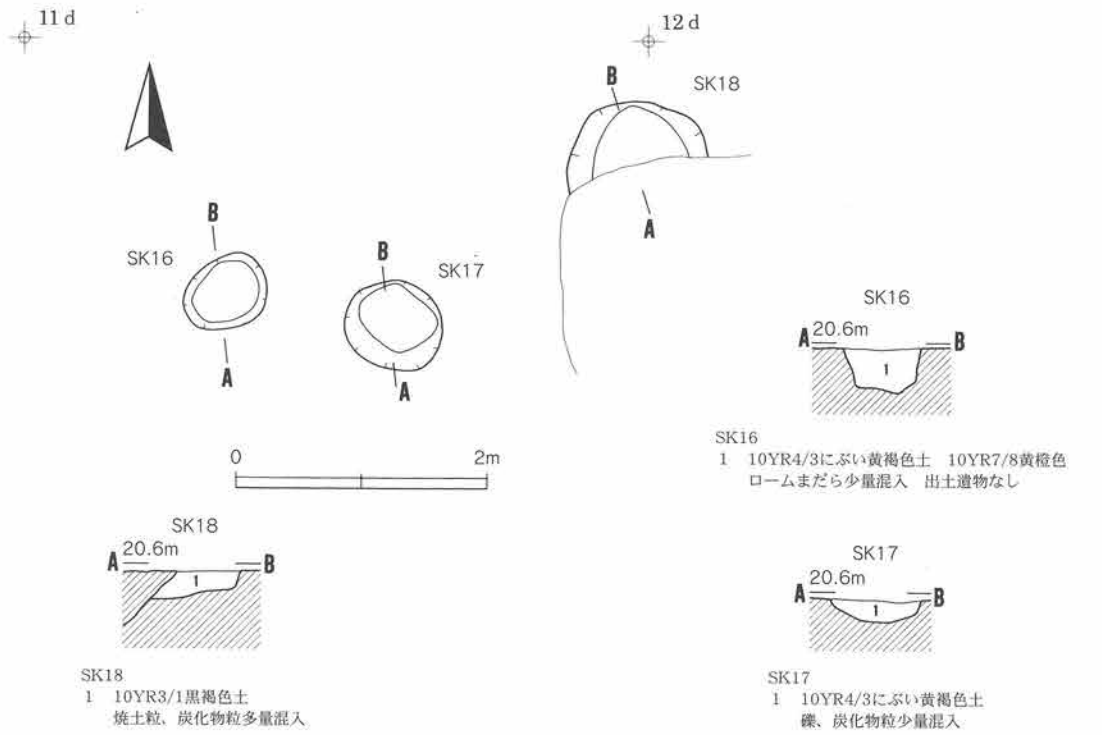
〔形態〕開口部は円形である。断面形は皿型を呈する。確認面からの深さは16cmである。底面の標高は20.36mである。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から在地産陶器播鉢(1182)が出土した。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。



第47図 SK16・17・18・19・20・21

S K18 (第47図、写真図版59)

〔位置〕 11 c、12 cに位置する。

〔重複〕 S K 15と重複するが本土坑が古い。

〔形態〕 南側が失われているが、開口部は円形と推測される。底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは21 cmである。底面の標高は20.32 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K19 (第47図、写真図版59)

〔位置〕 15 c、16 cに位置する。

〔重複〕 S B 8の柱穴と切り合うが本土坑が古い。また、S B 4とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。

〔形態〕 開口部は不整な方形である。底面は概ね平坦で、壁は斜めに立つ。確認面からの深さは16 cmである。底面の標高は20.60 mである。

〔埋土〕 2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K20 (第47図、写真図版59)

〔位置〕 16 cに位置する。

〔重複〕 S B 4とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。

〔形態〕 開口部は不整な円形である。断面形は皿形を呈する。確認面からの深さは10 cmである。底面の標高は20.60 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K21 (第47図、写真図版59)

〔位置〕 16 eに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は不整な形状である。断面形は皿形を呈する。確認面からの深さは12 cmである。底面の標高は20.42 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K22 (第48図、写真図版60)

〔位置〕 6 f に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は不整な円形で、それがすぼまり中途から楕円形を呈する。底面は概ね平坦である。断面形は漏斗状を呈する。確認面からの深さは32 cmである。底面の標高は20.42 mである。

〔埋土〕 3層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K23 (第48図、写真図版60)

〔位置〕 6 f に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は楕円形である。断面形は皿型を呈する。確認面からの深さは12 cmである。底面の標高は20.68 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K24 (第48図、写真図版60)

〔位置〕 5 e、6 e に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は楕円形である。底面は概ね平坦で、壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは26 cmである。底面の標高は20.52 mである。

〔埋土〕 2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

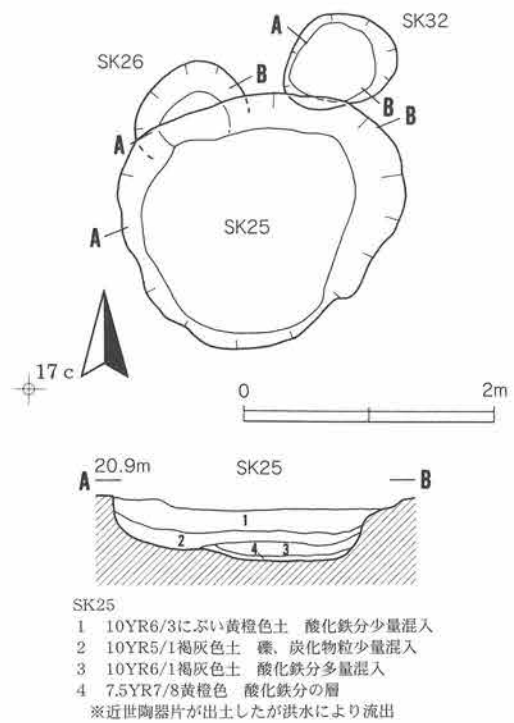
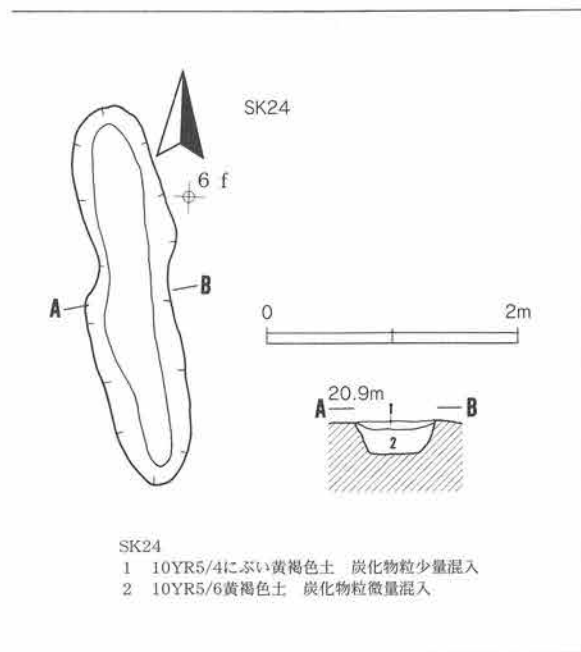
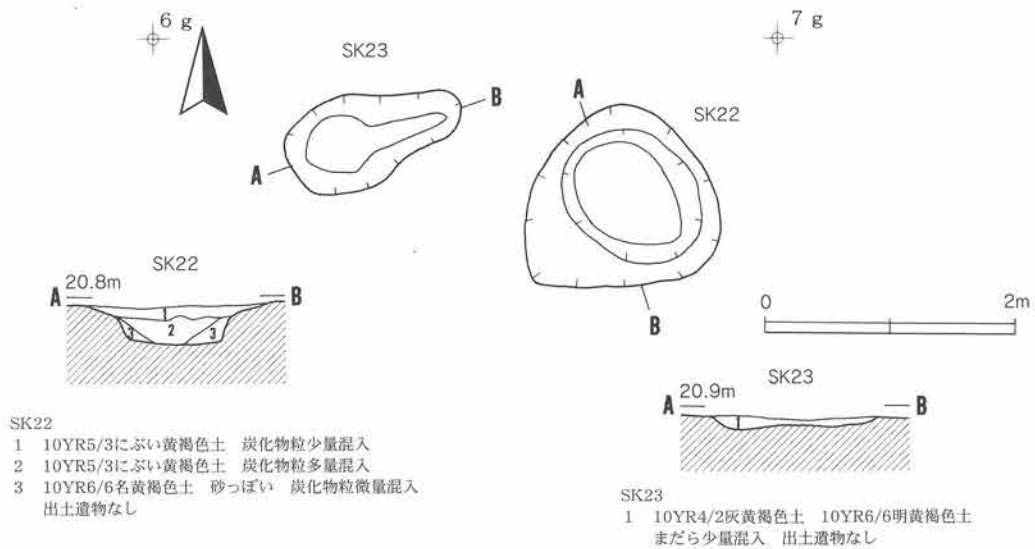
〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K25 (第48図、写真図版60)

〔位置〕 17 c に位置する。

〔重複〕 SK 26、SK 32、SK 54、SB 13の柱穴、SB 24の柱穴と重複するが本土坑が新しい。また、SB 4よりも本土坑がおそらく新しい。またSB 1、SB 8のプラン内に本土坑が位置するが、前後関係、あるいは同時存在か否か判断できない。



第48図 SK22・23・24・25・26・32

〔形態〕 開口部は不整な円形である。底面は凹凸がある。壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは48 cm、底面の標高は20.29 mである。

〔埋土〕 4層に分けられる。4層は沈殿した酸化鉄分の皮膜である。

〔出土遺物〕 埋土中から近世陶器（大堀相馬産陶器と記憶する）が出土したが、取り上げる前に7月の台風6号の洪水により遺物が流出した。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K26（第48図、写真図版61）

〔位置〕 17 cに位置する。

〔重複〕 SK25と重複するが本土坑が古い。またSB1、SB4、SB8のプラン内に本土坑が位置するが、直接切り合う部分がなく、前後関係、あるいは同時存在か否か判断できない。

〔形態〕 南側がSK25に切られるが、開口部は円形と推測される。底面は概ね平坦で、壁は斜めに立つ。確認面からの深さは36 cm、底面の標高は20.44 mである。

〔埋土〕 3層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 図示していないが、埋土中から大堀相馬産陶器碗の微細片が出土した。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 出土遺物から近世の遺構と推測される。

S K27（第49図、写真図版61）

〔位置〕 19 i、20 i、19 j、20 jに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 東側が調査区外に伸び、全体のプランは不明であるが、開口部は楕円形と推測される。底面は3段になっており、東に向かうほど深くなる。南北の壁は斜めに立つ。確認面からの深さは72 cm、底面の標高は19.68 mである。

〔埋土〕 埋土は3層に分けられる。3層には炭化物粒、焼土ブロックが多量に混じる土である。その上に堆積した2層は粘性のある土で、水成堆積と推測される。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文時代晩期後半の土器片（3）、12世紀のロクロかわらけ（210）、手づくねかわらけ（217）、常滑産陶器甕（235）、渥美産陶器甕（251）が出土した。また産地不明磁器仏飯器（1523）が出土した。

〔性格〕 不明である。

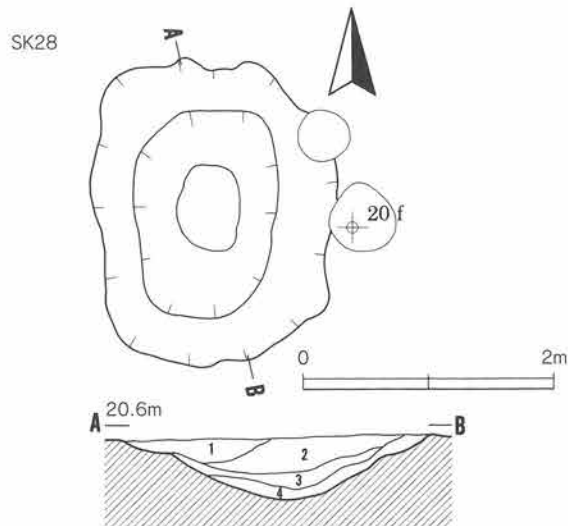
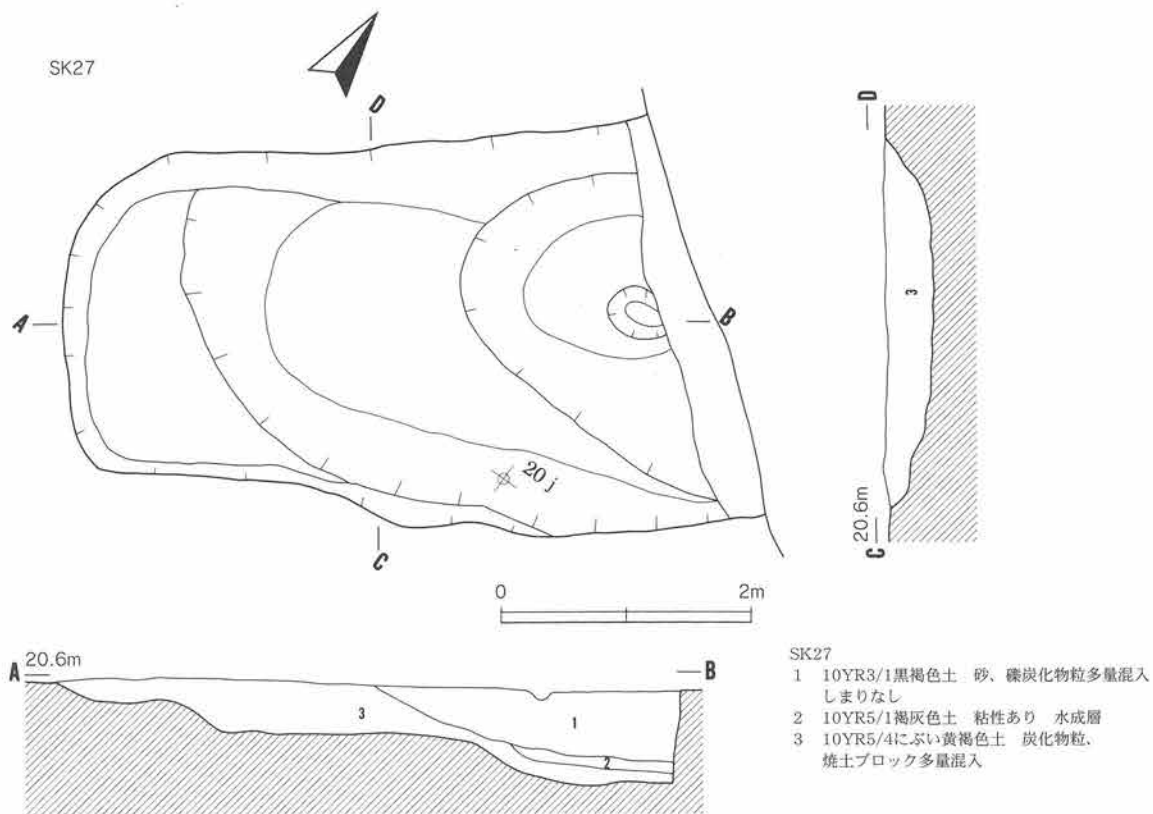
〔年代〕 磁器仏飯器の年代観から近代以降に廃絶した遺構と推測される。

S K28（第49図、写真図版61）

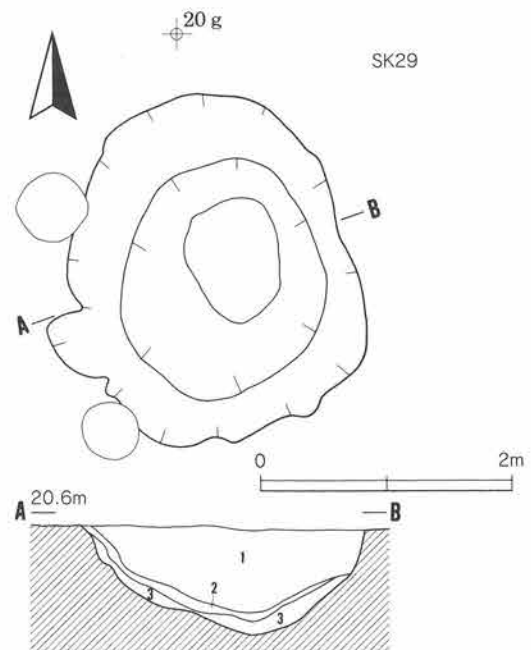
〔位置〕 19 e、19 fに位置する。

〔重複〕 SB6、SB15の柱穴と重複するが本土坑が古い。またSB10の柱穴と重複するが本土坑が新しい。SB2とは直接切り合う部分はないが、SB2はSB15より新しいので、本土坑はSB2より古い。

〔形態〕 開口部は楕円形である。断面形は皿状である。確認面からの深さは49 cm、底面の標高は20.05 mで



- SK28
- 1 10YR6/2灰黄褐色土 炭化物粒少量混入
 - 2 10YR5/6黄褐色土 10YR6/2灰黄褐色土
まだら少量混入
 - 3 10YR5/6黄褐色土 10YR6/2灰黄褐色土
まだら多量混入
 - 4 10YR3/2黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色土
まだら少量混入
埋土中から近世陶器片（志野）出土



- SK29
- 1 10YR5/6黄褐色土 10YR5/1褐灰色土
まだら多量混入
 - 2 10YR5/1褐灰色土 炭化物粒少量混入
 - 3 10YR7/1灰白色土 10Y6/6赤橙色焼土
多量混入

第49図 SK27・28・29

ある。

〔埋土〕 4層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 埋土中から美濃産陶器志野皿（1005）が出土した。

〔性格〕 S B 10の内部施設の可能性があるが、確証はなく不明とせざるを得ない。

〔年代〕 近世の遺構である。

S K29（第49図、写真図版61、62）

〔位置〕 19 f、20 fに位置する。

〔重複〕 S B 2、S B 6と重複するが本土坑が古い。またS B 10と重複するが、本土坑が新しい。S B 15とはプランが重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔形態〕 開口部は不整な楕円形である。断面形は皿状である。確認面からの深さは82cm、底面の標高は19.66mである。

〔埋土〕 3層に分けられる。最下層の3層は焼土が多量に混じる土である。これが現地性の焼土か否か判別は難しい状態であった。

〔出土遺物〕 埋土中から肥前産磁器碗（1328）が出土した。

〔性格〕 S B 15の内部施設の可能性があるが、確証はなく不明とせざるを得ない。

〔年代〕 近世の遺構である。

S K30 欠番

S K31（第50図、写真図版62）

〔位置〕 17 bに位置する。

〔重複〕 S K 54と重複するが本土坑が新しい。またS B 17とプランが重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔形態〕 開口部は不整な円形である。底面は皿状で、壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは28cm、底面の標高は20.49mである。

〔埋土〕 2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

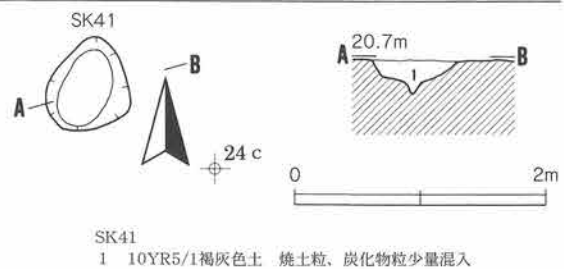
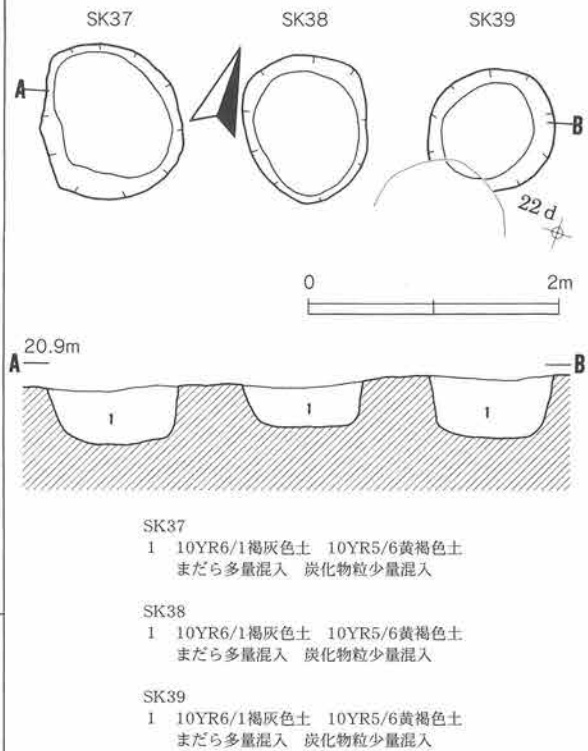
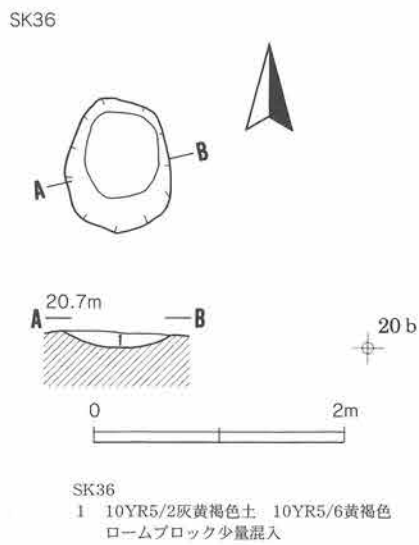
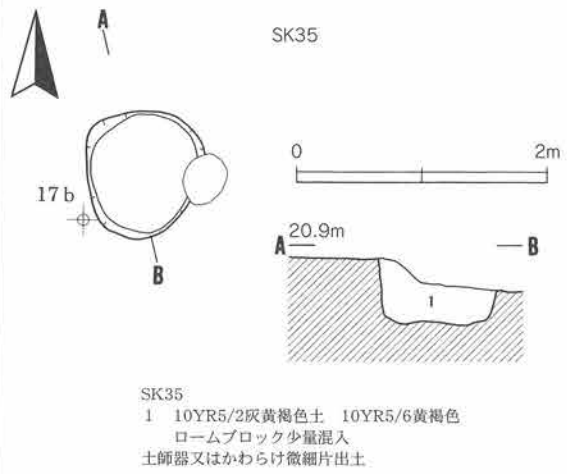
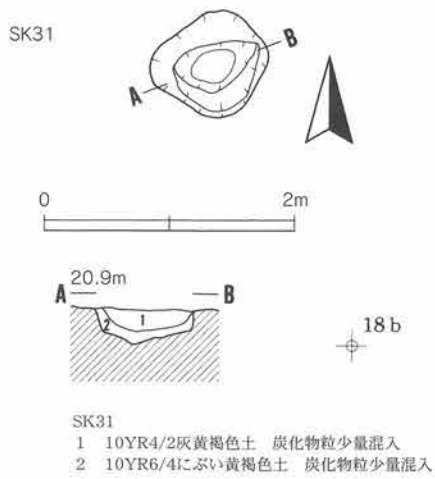
S K32（第48図、写真図版62）

〔位置〕 17 cに位置する。

〔重複〕 S K 25と重複するが本土坑が古い。またS B 1、S B 4、S B 8とプランが重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係、あるいは同時存在か否かは不明である。

〔形態〕 開口部は不整な円形である。底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは18cm、底面の標高は20.58mである。

〔埋土〕 2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。



第50図 SK31・35・36・37・38・39・40・41

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K33 S B 24 の柱穴に変更

S K34 S B 13 の柱穴に変更

S K35 (第 50 図、写真図版 62)

〔位置〕17 a、17 b に位置する。

〔重複〕S B 13 の柱穴と重複するが本土坑が新しい。また S B 24 とプランが重複するが直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。

〔形態〕開口部は不整な円形である。底面はやや凹凸がある。壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは 52 cm、底面の標高は 20.38 m である。

〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から 12 世紀の手づくねかわらけ片 (216) が出土した。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K36 (第 50 図、写真図版 62)

〔位置〕19 b に位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は楕円形である。断面形は皿状を呈する。確認面からの深さは 12 cm、底面の標高は 20.48 m である。

〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K37 (第 50 図、写真図版 63)

〔位置〕21 c、21 d に位置する。

〔重複〕S B 20、S B 21 とプランが重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔形態〕開口部は不整な円形である。底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立つ。確認面からの深さは 38 cm、底面の標高は 20.35 m である。

〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K38 (第50図、写真図版63)

〔位置〕 21 c、21 dに位置する。

〔重複〕 S B 21の柱穴と重複するが、おそらく本土坑が新しい。またS B 20とプランが重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔形態〕 開口部は不整な円形である。底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立つ。確認面からの深さは28 cm、底面の標高は20.45 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K39 (第50図、写真図版63)

〔位置〕 21 dに位置する。

〔重複〕 S K 10、S I 1と重複するが、本土坑が新しい。またS B 20とプランが重複するが、直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。

〔形態〕 開口部は円形である。底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立つ。確認面からの深さは38 cm、底面の標高は20.35 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K40 (第50図、写真図版63)

〔位置〕 23 dに位置する。

〔重複〕 S B 22の柱穴と重複するが本土坑が新しい。

〔形態〕 開口部は楕円形である。底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは102 cm、底面の標高は19.76 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕 図示していないが、肥前磁器?の細片が出土している。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K41 (第50図、写真図版63、64)

〔位置〕 23 cに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は不整な円形である。断面形は皿状を呈する。底面は概ね平坦である。確認面からの深さは26 cm、底面の標高は20.40 mである。

〔埋土〕 1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K42 S B 23 の柱穴に変更

S K43 S B 23 の柱穴に変更

S K44 S B 23 の柱穴に変更

S K45 (第51図、写真図版64)

〔位置〕28 bに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は楕円形である。断面形は皿状を呈する。確認面からの深さは38cm、底面の標高は19.86mである。

〔埋土〕3層に分けられる。最下層の3層は焼土が多量に混じる土である。これが現地性の焼土か否か判別は難しい状態であった。2層には礫が多量に混入する。

〔出土遺物〕図示していないが焼けた壁土片?が少量出土している。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K46 (第51図、写真図版64)

〔位置〕27 b、27 cに位置する。

〔重複〕現代の攪乱と重複するが、本土坑が古い。

〔形態〕開口部は隅丸方形である。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立つ。確認面からの深さは36cm、底面の標高は19.75mである。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕図示していないが、肥前産陶器碗の微細片が出土している。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K47 (第51図、写真図版64)

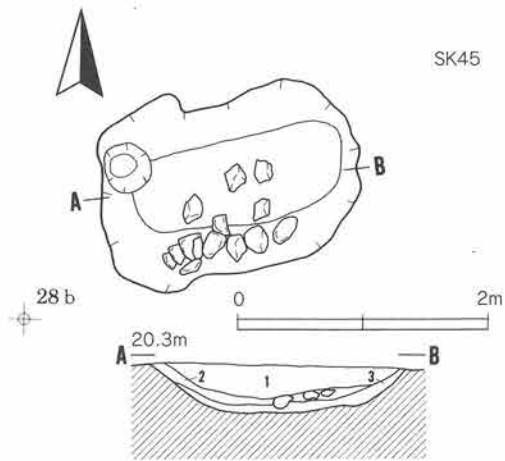
〔位置〕5 vに位置する。

〔重複〕なし。

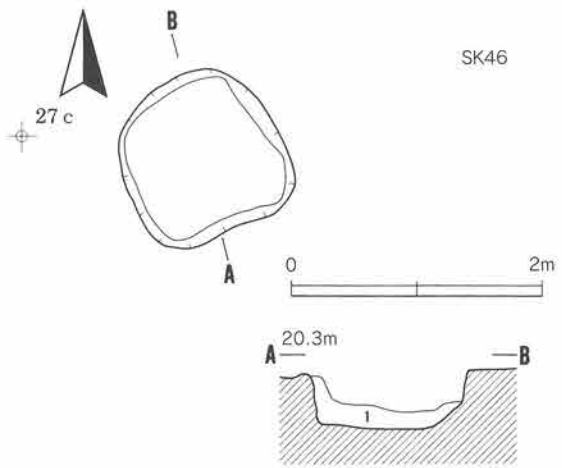
〔形態〕開口部は隅丸長方形である。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立つ。確認面からの深さは30cm、底面の標高は20.92mである。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

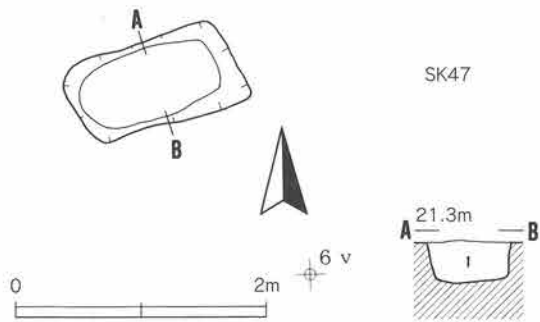
〔出土遺物〕なし。



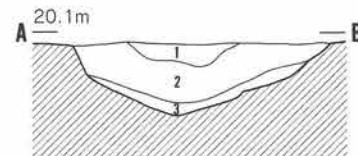
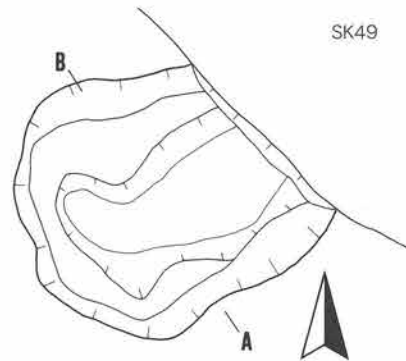
- SK45
 1 10YR5/3にぶい黄褐色土 焼土粒、炭化物粒多量混入
 2 10YR6/1褐灰色土 礫、炭化物粒多量混入
 3 5YR7/4にぶい橙色土 焼土粒多量混入



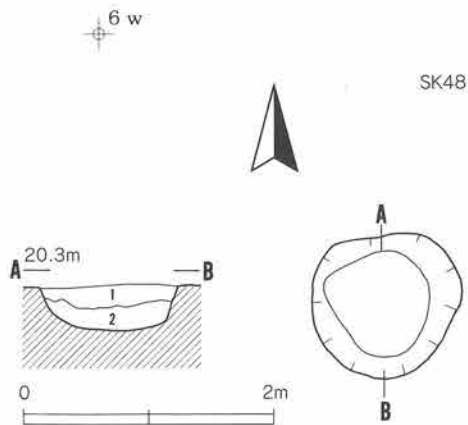
- SK46
 1 10YR5/2灰黄褐色土 炭化物粒少量混入 近世陶磁器片出土



- SK47
 1 10YR6/6明黄褐色土 炭化物粒少量混入 しまりなし



- SK49
 1 10YR4/1褐灰色土 礫少量混入
 2 10YR7/2にぶい黄橙色土 礫、酸化鉄少量混入
 3 10YR5/6黄褐色土 10YR4/1褐灰色土 まだら少量混入



- SK48
 1 10YR5/3にぶい黄褐色土 炭化物粒、焼土粒多量混入
 2 10YR6/6明黄褐色土 炭化物粒少量混入

第51図 SK45・46・47・48・49

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 不明である。

S K48 (第51図、写真図版64、65)

〔位置〕 6 vに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は不整な円形である。底面は概ね平坦である。壁は斜めに立つ。確認面からの深さは36 cm、底面の標高は19.82 mである。

〔埋土〕 2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 埋土中から大堀相馬産?陶器瓶(1088)、寛永通寶鉄銭(1960)が出土した。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K49 (第51図、写真図版65)

〔位置〕 30 bに位置する。

〔重複〕 現代の攪乱と重複するが、本土坑が古い。

〔形態〕 プランが調査区外の北東に伸びるが、開口部の形状は不整な円形と推測される。断面形は皿状を呈する。確認面からの深さは55 cm、底面の標高は19.50 mである。

〔埋土〕 3層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 埋土中から鍛冶滓(1926)、羽口(2005)が出土した。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K50 (第52図、写真図版65)

〔位置〕 9 fに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 開口部は楕円形である。底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは254 cm、底面の標高は18.02 mである。

〔埋土〕 3層に分けられる。全体に人為に埋めた土と推測される。最上層の1層は焼土、炭化物が多量に混じるが、これは現地性焼土ではない。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。水が湧いていた痕跡は全くなく、井戸とは考えがたい。

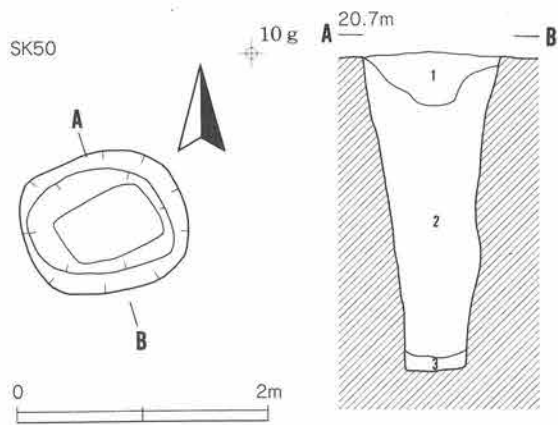
〔年代〕 近世の遺構と推測される。

S K51 (第52図、写真図版65)

〔位置〕 12 rに位置する。

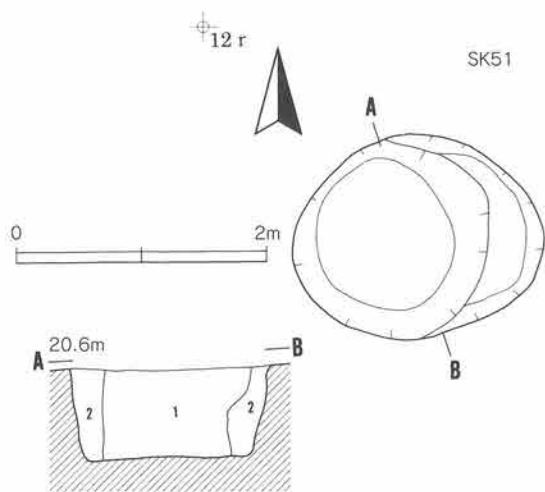
〔重複〕 なし。

〔形態〕 桶を埋設した遺構である。開口部は楕円形で、途中ですばみ円形のプランになる。底面は概ね平坦



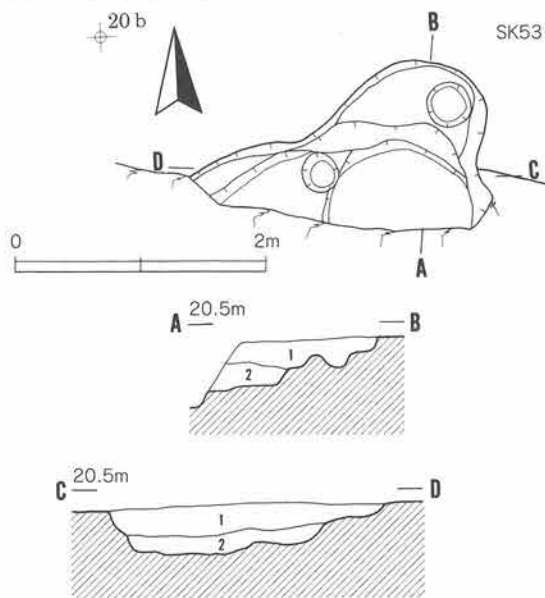
SK50

- 1 10YR5/2灰黄褐色土 5YR7/8橙色烧土、炭化物粒まだらに多量混入
- 2 10YR6/8明黄褐色土 10YR5/2灰黄褐色土 まだら多量混入 人為的に埋めた土
- 3 10YR5/2灰黄褐色土 炭化物粒(径5mm)多量混入



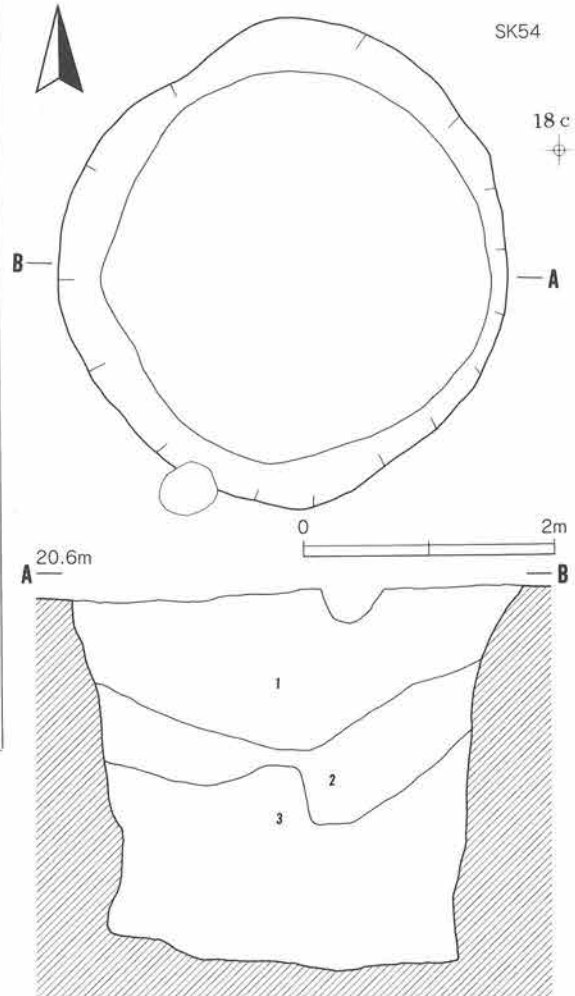
SK51

- 1 10YR5/6黄褐色土 10YR6/1褐灰色土 まだら少量混入 2層との境に桶のたがの痕跡あり
- 2 10YR6/8明黄褐色土 炭化物粒少量混入 桶を埋設した土



SK53

- 1 10YR6/1褐灰色土 10YR7/6明黄褐色土 まだら多量混入 炭化物粒少量混入
- 2 10YR5/1褐灰白色土 炭化物粒少量混入



SK54

- 1 10YR6/8明黄褐色土 10YR5/1褐灰色土 まだら多量混入
- 2 10YR5/6黄褐色土 10YR5/1褐灰白色土 まだら多量混入
- 3 10YR6/8明黄褐色土 10YR5/1褐灰白色土 まだら多量混入

第52図 SK50・51・53・54

で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは68 cm、底面の標高は19.78 mである。

〔埋土〕2層に分けられる。2層は桶を埋設した裏込めの土である。

〔出土遺物〕図示していないが、1層中からサングラスのガラス部分が出土した。また1層と2層の境界部分には桶のたがの痕跡が残っていた。

〔性格〕屋外に桶を埋設した遺構で、肥溜めと判断される。

〔年代〕近代～現代の遺構である。

S K52 (第13図、写真図版66)

〔位置〕6 q、7 qに位置する。

〔重複〕S I 2と重複するが本土坑が新しい。

〔形態〕開口部は不整形な形状である。断面形は皿状である。確認面からの深さは45 cm、底面の標高は20.62 mである。

〔埋土〕3層に分けられる。2層中には十和田 a 降下火山灰がまだら、あるいはブロック状に多量混入する。

最下層の3層が自然堆積後に、十和田 a 降下火山灰が二次的に流入したと推測される。

〔出土遺物〕土師器、須恵器片が出土した。これらは重複するS I 2に由来する遺物と推測される。

〔性格〕不明である。

〔年代〕十和田 a 降下火山灰降下直前に構築された遺構と推測される。

S K53 (第52図、写真図版66)

〔位置〕20 aに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕南側が土の切り取りのため失われている。残った開口部は不整形な形状である。底面には段がある。確認面からの深さは40 cm、底面の標高は19.94 mである。

〔埋土〕2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世の遺構と推測される。

S K54 (第52図、写真図版66)

〔位置〕17 b、17 cに位置する。

〔重複〕S B 1、S B 8、S B 24の柱穴、S K 25、S K 31と重複するが本土坑が古い。またS B 13とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。またS B 17の柱穴と接するが前後関係を明らかにできなかった。

〔形態〕開口部は円形である。底面は概ね平坦で、壁は概ね垂直に立つ。確認面からの深さは305 cm、底面の標高は17.39 mである。

〔埋土〕3層に分けられる。人為的に一時に埋め戻した可能性が高い。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕一時に埋め戻している可能性が高く、また深さを考慮するすると、井戸を掘りかけ、途中で不都合が

生じ、埋め戻した可能性などが想像できる。しかし、確定する要素はなく、性格は不明とせざるを得ない。
〔年代〕多くの近世の遺構よりも古く、近世でも前半に属する可能性が高い。

第4節 倒木痕

立木を伐採、抜根した痕跡が検出され、倒木痕として掲載する。調査時は名称を「風倒木痕」としていたが、強風により、自然に倒れたのではなく、人為的に抜根された可能性が高く、「倒木痕」と称することにした。

1号倒木痕（第53図、写真図版67）

〔位置〕11 f、11 g、12 gに位置する。

〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は不整な馬蹄形を呈する。底面は凹凸がある。確認面からの深さは20cm、底面の標高は20.15mである。風倒木痕の特長を有する形態である。

〔埋土〕1層に分けられる。人為的に一時に埋め戻した可能性が高い。

〔出土遺物〕埋土中から土師器鉢（166）、肥前産陶器鉢（1043）、大堀相馬産陶器火入れ（1096）、在地産陶器甕（1136）、瀬戸産陶器挿鉢（1152）、在地産陶器火鉢（1207）、肥前産磁器碗（1368）、肥前産磁器皿（1399）、東北地方産磁器皿（1413）、肥前産磁器瓶（1434）、挽臼（1721）、鑿（1909）、釘（1918）、不明鉄製品（1923）、寛永通寶鉄一文銭（1959）、寛永通寶鉄四文銭（1963）が出土した。また図示していないが、板ガラス（窓ガラス？）片が出土している。

〔性格〕立木を抜根した痕跡と推測される。それによって生じた空洞に不要物を廃棄したと推測される。

〔年代〕出土遺物から、屋敷廃絶時の昭和5年（1930年）頃、屋敷林を伐採し、根を抜き取ったと推測される。

2号倒木痕（第53図、写真図版67）

〔位置〕14 hに位置する。

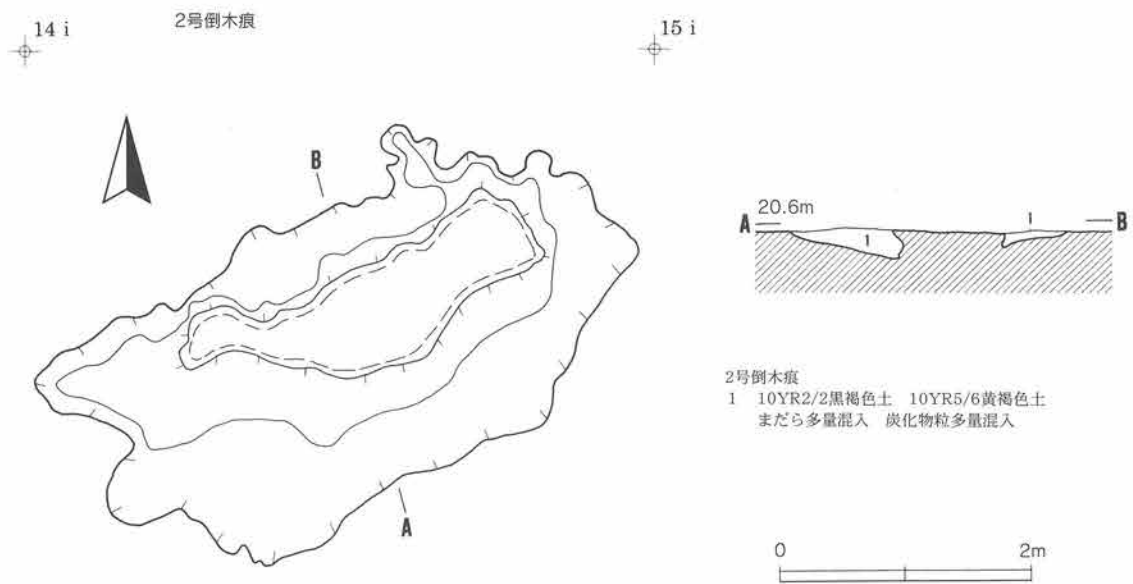
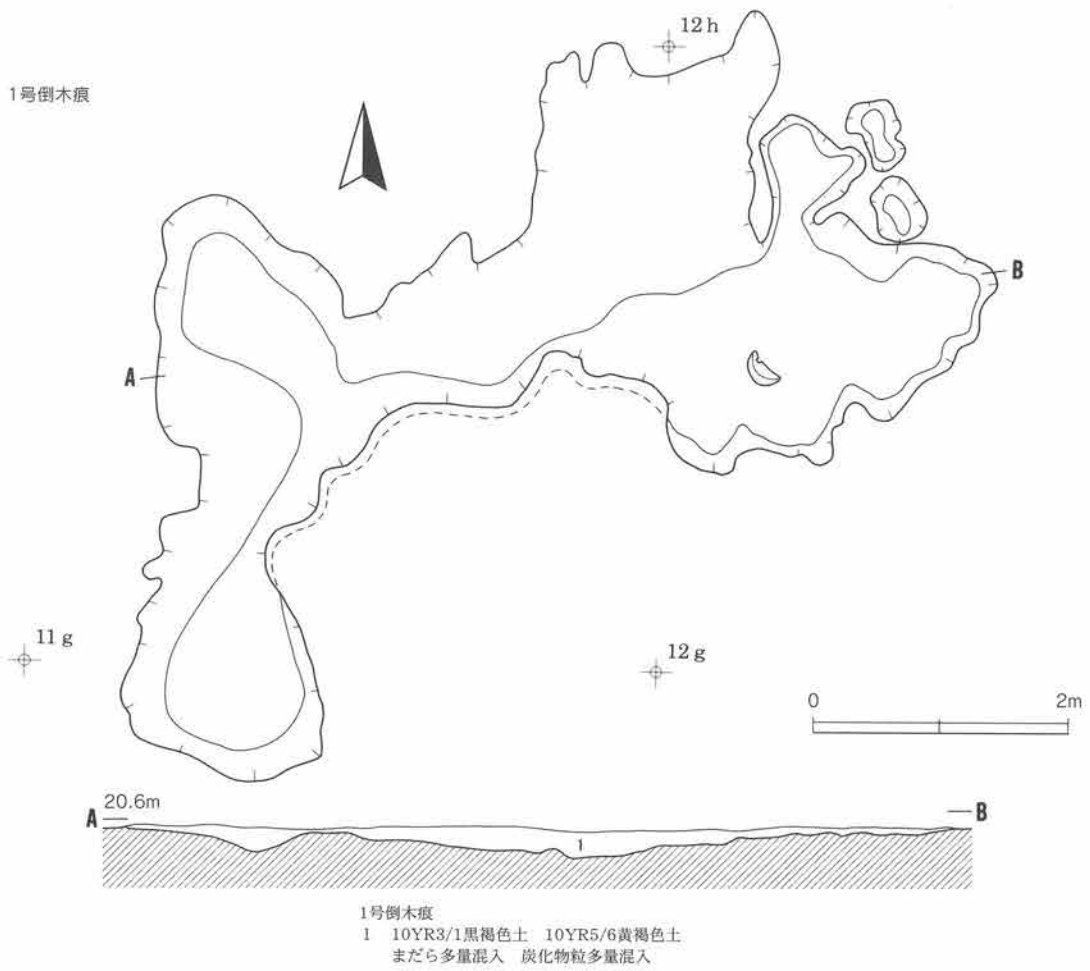
〔重複〕なし。

〔形態〕開口部は不整なリング形を呈する。底面は凹凸がある。確認面からの深さは22cm、底面の標高は20.24mである。風倒木痕の特長を有する形態である。

〔埋土〕1層に分けられる。人為的に一時に埋め戻した可能性が高い。

〔出土遺物〕埋土中から肥前産陶胎染付碗（1013）、瀬戸・美濃産陶器碗（1014）、大堀相馬産陶器皿（1050）、在地産陶器土瓶（1061）、大堀相馬産？陶器土瓶（1064）、在地産陶器急須（1070）、大堀相馬産陶器急須（1071）、瀬戸・美濃産陶器香炉（1092）、在地産陶器甕（1111）、大堀相馬産陶器片口鉢（1128）、瀬戸・美濃産陶器鉢（1130）、在地産陶器鉢（1131）、在地産陶器ほうろく（1193、1196）、肥前産磁器碗（1314、1325、1330、1357）、肥前産磁器小碗（1333、1337）、肥前産？磁器碗（1363）、東北産？磁器碗（1391）、肥前産磁器瓶（1436）、肥前産？磁器水滴（1440）が出土した。また、図示していないが板ガラス（窓ガラス）片が出土している。

〔性格〕立木を抜根した痕跡と推測される。それによって生じた空洞に不要物を廃棄したと推測される。



第53図 1号・2号倒木痕

〔年代〕 出土遺物から、屋敷廃絶時の昭和5年（1930年）頃、屋敷林を伐採し、根を抜き取ったと推測される。

3号倒木痕（第54図、写真図版67）

〔位置〕 10 eに位置する。

〔重複〕 1号溝と重複するが、本遺構が新しい。

〔形態〕 開口部は不整な形状で、底面は凹凸がある。確認面からの深さは15cm、底面の標高は20.39mである。木根が部分的に残存している。

〔埋土〕 表土を取り去った段階で、底面が現れた状態である。

〔出土遺物〕 木根が残存している。木の種類は杉と推測される。他に出土遺物はない。

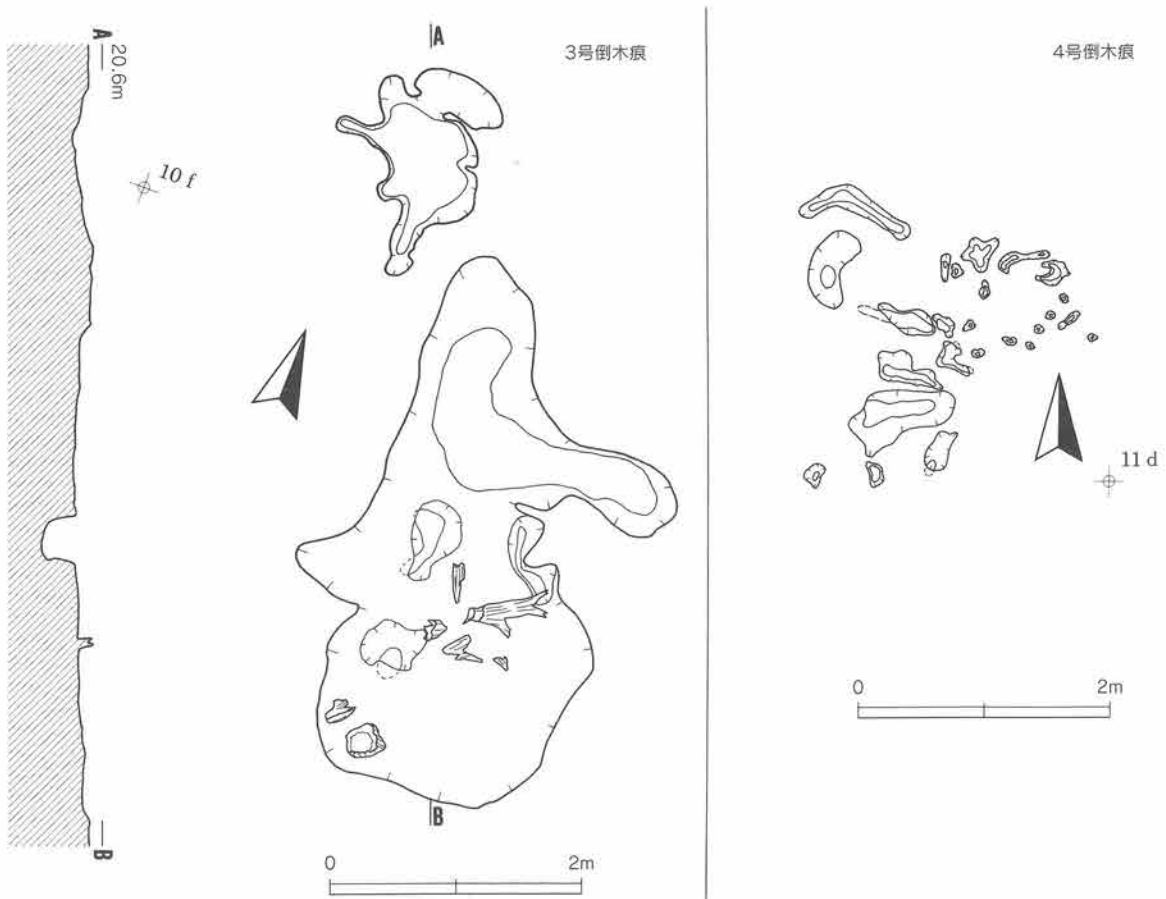
〔性格〕 立木を抜根した痕跡と推測される。

〔年代〕 出土遺物から、屋敷廃絶時の昭和5年（1930年）頃、屋敷林を伐採し、根を抜き取ったと推測される。

4号倒木痕（第54図、写真図版67）

〔位置〕 10 dに位置する。

〔重複〕 1号溝と重複するが、本遺構が新しい。



第54図 3号・4号倒木痕

〔形態〕根を抜いた小規模な穴の集合体である。確認面からの深さは15 cm程度、底面の標高は約20.36 mである。

〔埋土〕表土を取り去った段階で、底面が現れた状態である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕立木を抜根した痕跡と推測される。

〔年代〕出土遺物から、屋敷廃絶時の昭和5年（1930年）頃、屋敷林を伐採し、根を抜き取ったと推測される。

第5節 溝

溝は12条検出した。調査の結果、自然の流水痕の可能性が高いと判断されるものがあったが、調査時の遺構名のまま掲載している。またプランが長大なものが多く、冊子中の図に納めるのが不適切なものが多いため、溝の平面プランは付図の遺構配置図中に掲載している。

SD1（第55図、写真図版68）

〔位置〕11 b、10 c、11 c、10 d、10 e、10 f、11 f、12 f、13 f、13 g、14 gに位置する。

〔重複〕3号倒木痕、4号倒木痕と重複するが本溝が古い。

〔形態〕L字型の形状を呈する。東端では一旦途切れるが、再び東側に約4 m連続する。残存状況を考えると、なお東側に溝が連続していた可能性が高い。溝底面の傾斜は顕著ではないが、全体的には東→西→南に向かって水が流れるようになっている。

〔埋土〕1層に分けられる。明瞭な流水痕は認められない。

〔出土遺物〕埋土中から常滑産陶器甕（236）、肥前産磁器碗（1323）、仙台通寶（1964）が出土した。

〔性格〕屋敷の主屋を囲む位置に構築されており、排水あるいは区画を目的とした溝と推測される。

〔年代〕出土した仙台通寶の初鋳年代は1784年である。よって本溝の廃絶年代は1784年以降と判断される。そして、埋土中に近代の遺物を含まず、また、屋敷廃絶時に抜根した3、4号倒木痕よりも古いことから、廃絶は幕末頃と推測される。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

SD2（第55図、写真図版68）

〔位置〕14 g、15 gに位置する。

〔重複〕なし。

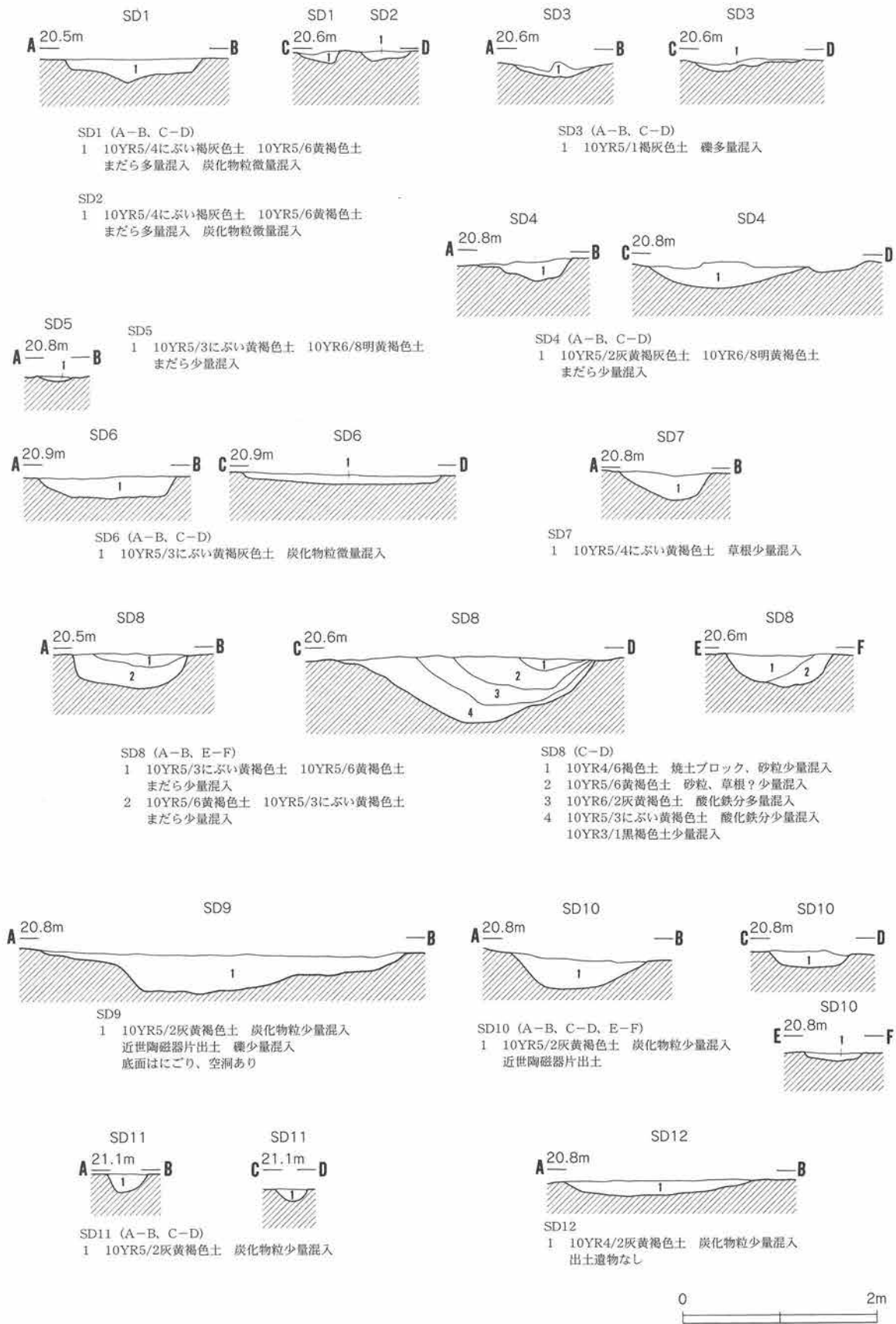
〔形態〕平面形はほぼ真直ぐである。溝の傾斜方向は明瞭ではない。

〔埋土〕1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。攪乱の一部分の可能性もある。

〔年代〕不明である。



第55図 SD断面図 (SD1~12)

SD3 (第55図、写真図版69)

〔位置〕 16 i、17 i、18 i、18 j、19 j、19 kに位置する。

〔重複〕 SK2と重複するが、同時存在と推測される。

〔形態〕 平面形は概ね真直ぐである。調査区外東側になお続いている。またSK2の西側にもプランが連続していた可能性が高い。溝の傾斜方向は顕著ではないが、全体的には東側に向かって水が流れる。

〔埋土〕 1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕 埋土中から在地産播鉢(1159)、肥前産磁器碗(1345)が出土した。

〔性格〕 区画、排水の目的の溝と推測される。SK2は同時存在と推測され、本溝に付随する水溜め、洗い場といった用途が想定される。SK2の西側には本溝が連続しないが、本来は溝が存在していたと推測される。

〔年代〕 遺物の年代観から廃絶時期は幕末頃(19世紀中頃)と推測される。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

SD4 (第55図、写真図版69)

〔位置〕 20 a、21 a、20 b、21 b、20 c、21 c、20 d、21 dに位置する。

〔重複〕 SB20、SB21の柱穴と重複するが本溝が新しい。

〔形態〕 平面形はやや蛇行している。北側は完結し、南側は土が切り取られた部分になお続いている。溝の傾斜方向は、北から南側に水が流れるようになっている。

〔埋土〕 1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕 埋土中から常滑産陶器甕(234、239)、在地産陶器甕(1108)、在地産陶器播鉢(1159、1184)、肥前産磁器碗(1317)、煙管雁首(1930)が出土した。また図示していないが、ガラス片、近代の型紙刷磁器碗の細片が出土している。

〔性格〕 排水目的の溝と推測される。

〔年代〕 出土した遺物から、廃絶は近代以降と判断される。

SD5 (第55図、写真図版70)

〔位置〕 20 bに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 平面形はほぼ真直ぐである。東側、西側ともに完結している。溝の傾斜方向は不明瞭である。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 不明である。近世に属する可能性が高い。

SD6 (第55図、写真図版70)

〔位置〕 23 a、23 b、23 c、22 d、23 dに位置する。

〔重複〕 SI1と重複するが本溝が新しい。またSD7とはプランの配置から同時存在と推測される。

〔形態〕 部分的に膨隆するが、平面形はほぼ真直ぐである。土が切り取られた南側にはまだプランが続いてい

る。北側は本来SD7に連続していた可能性が高い。溝の傾斜方向は顕著ではないが、全体的に水は南側に向かって流れる。

〔埋土〕1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕埋土中から砥石(1712)が出土した。また図示していないが、陶器土瓶の細片が出土している。

〔性格〕SD7と一体の溝で、掘立柱建物SB22、23に伴う、排水、区画の目的の溝と推測される。

〔年代〕出土遺物から廃絶は幕末頃と推測される。

SD7 (第55図、写真図版70)

〔位置〕22d、22e、23d、23e、24eに位置する。

〔重複〕重複する遺構はない。SD6とはプランの位置関係から同時存在と推測される。

〔形態〕平面形はほぼ真っ直ぐである。東側は壁の立ち上がりがなくなって消滅するが、本来は東側に続いていたと推測される。また西側はプランが完結しているが、本来はSD6に連続していたと想定される。溝の傾斜方向は明瞭ではない。底面の中央部分の標高が他よりやや高く、水は東西両方に流れるようになっている。

〔埋土〕1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕SD6と一体の溝で、掘立柱建物SB22、23に伴う、排水、区画の目的の溝と推測される。

〔年代〕SD6と同時存在で、廃絶は幕末頃と推測される。

SD8 (第55図、写真図版70)

〔位置〕13d、11e、12e、13e、12f、13fに位置する。

〔重複〕SK15(旧段階)とプランが連続するが、同時存在の可能性が高い。

〔形態〕平面形はL字型である。東西部分でプランが膨隆し、底面も他に比較して深くなっている。溝の傾斜方向は南北部分では、南から北に水が流れるようになっている。

〔埋土〕膨隆部分では4層、他は2層に分けられる。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔年代〕SK15と同時存在であれば、幕末頃(19世紀中葉)の廃絶と推測される。構築年代は判断する材料がなく特定が難しい。もちろん下構屋敷成立の1642年をさかのぼるものではない。

SD9 (第55図、写真図版71)

〔位置〕1l、1m、2l、2m、3l、3m、4mに位置する。

〔重複〕立木の痕跡と重複するが本溝が古い。

〔形態〕不整形形状で、底面はにごり、空洞が存在する。東から西に水が流れるようになっている。

〔埋土〕1層に分けられる。近世陶器片が出土した。

〔出土遺物〕埋土中から瀬戸美濃産陶器碗(1015)、京・信楽系陶器碗(1029)、瀬戸・美濃産陶器皿(1046)、在地産陶器土瓶(1060)、瀬戸・美濃産陶器徳利(1085)、在地産陶器すず徳利(1087)、大堀相馬産陶器火入れ(1096)、砥石(1706)、窯道具(2007)が出土した。

〔性格〕 プランが不整で、底面もはっきりせず、自然の流水痕の可能性が高い。

〔年代〕 出土した陶磁器の年代から、幕末頃（19世紀中葉）に形成された可能性が高い。

SD 10（第55図、写真図版71）

〔位置〕 1 m、2 m、3 m、3 n、4 n、5 n、6 n、6 o、7 o、8 o、9 o、9 p、10 o、10 p、11 p 12 p、12 qに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 平面形はやや弓なりになっている。東西ともにプランが調査区外に連続している。溝の傾斜方向は一定ではないが、全体的は西から東に水が流れるようになっている。

〔埋土〕 1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕 埋土中から常滑産陶器甕（223）、肥前産磁器小杯（1305）、砥石（1704）、煙管雁首（1928）、煙管吸口（1938）、窯道具（2008）が出土した。

〔性格〕 調査前の地境に沿って存在しており、地境を示す区画の溝と推測される。

〔年代〕 出土した遺物から近世～近代に機能していたと推測される。

SD 11（第55図、写真図版72）

〔位置〕 1 q、1 r、2 q、2 r、3 r、4 r、5 r、6 r、7 r、7 s、8 s、9 sに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 一部プランが膨隆する部分があるが、平面形は概ね真直ぐである。西側は調査区外になお続く。溝の傾斜方向は一定ではない。

〔埋土〕 1層に分けられる。明瞭な流水の痕跡は認められない。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 不明である。

〔年代〕 不明である。近世～近代に属する可能性が高い。

SD 12（第55図、写真図版72）

〔位置〕 3 h、4 h、5 h、5 i、6 i位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 平面形は概ね真直ぐあるが、不整な形状を呈する。溝の傾斜方向は東から西に水が流れるようになっている。

〔埋土〕 1層に分けられる。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 形状が不整で、自然の流水痕の可能性が高い。

〔年代〕 形成された年代は不明である。

SE 1 東側の自然流路（付図中）

〔位置〕 21 e、22 e 23 e、23 f、24 fに位置する。

〔重複〕 SE 1と重複するが本流路が古い

〔形態〕 平面形は概ね真直ぐで、東から西に向かうにつれ幅が大きくなる。水流は東から西に向かう。

〔埋土〕 断ち割りをおこなったところ、壁、底面が不明瞭であった。よって人為的な遺構ではなく、水が地下に浸透して流れた痕跡と判断された。本流路の西側の延長線上に相当するS K 5の底面近くの壁面に、地下水が伏流した痕跡が見出された。本流路の続きと判断される。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 形状から、自然の流水痕、伏流水の痕跡と判断される。

〔年代〕 形成された年代は不明である。

第6節 焼土

その場所で火が焚かれたと判断される現地性の焼土が5基検出されている。このうち1～4号焼土は覆土や周辺に土師器片を含んでおり、古代の竪穴建物のカマド、地焼炉の残存部分の可能性が高い。

1号焼土（第56図、写真図版73）

〔位置〕 9wに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 不整な円形を呈する。焼土は特に硬い1層と、あまり焼き締まっていない2層に分かれる。火焼面上面の標高は20.94mである。

〔出土遺物〕 図示していないが、周囲に土師器の細片が少量散布していた。

〔性格〕 現地性の焼土である。古代の竪穴建物の壁が失われ、残存したカマド火焼面、あるいは地焼炉部分と推測される。

〔年代〕 他の竪穴建物（S I 1、S I 2）の年代観から、9世紀前～中葉と推測される。

2号焼土（第56図、写真図版73）

〔位置〕 8s、8tに位置する。

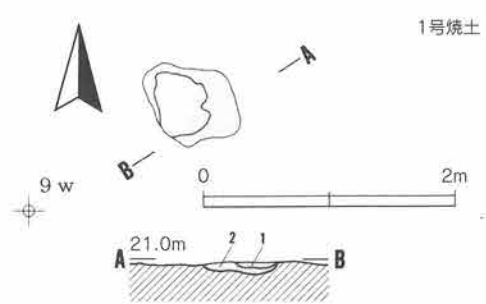
〔重複〕 なし。

〔形態〕 不整な円形を呈する焼土2個からなる。周囲に柱穴状のP i tが3個あるが、焼土との関係は不明である。また焼土内には礫が数個散布する。火焼面上面の標高は21.18mである。

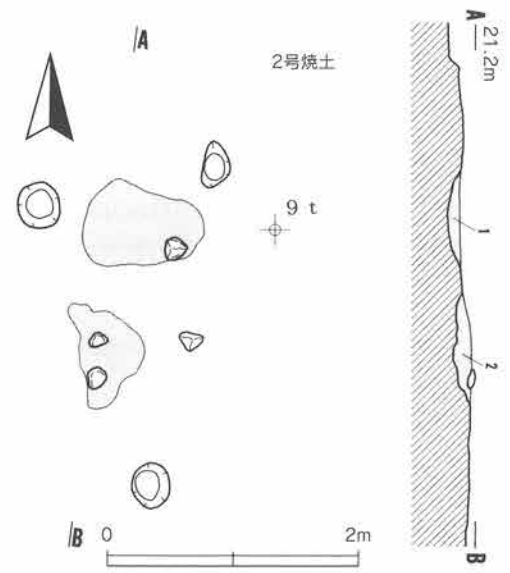
〔出土遺物〕 焼土の覆土や周囲から、土師器、須恵器が出土した。図示したのは、土師器長胴甕（154、156～158）、土師器鉢（155）、須恵器甕（159～162）である。土師器鉢115には線刻文字「方」が外面にある。これは土師器焼成前に施されたものである。土師器ロクロ長胴甕158はロクロ下地のタタキ目が確認できず、その有無は不明である。

〔性格〕 現地性の焼土である。古代の竪穴建物の壁が失われ、残存したカマド火焼面と煙道部の可能性が高い。散在する礫はカマド構築材と推測される。

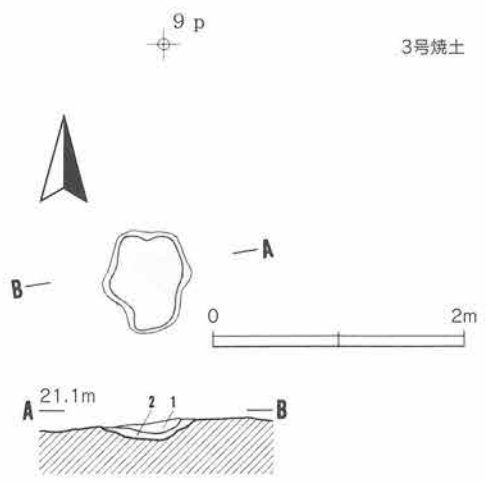
〔年代〕 出土した土師器、須恵器の形態と、他の竪穴建物（S I 1、S I 2）の年代観から、9世紀前～中葉と推測される。



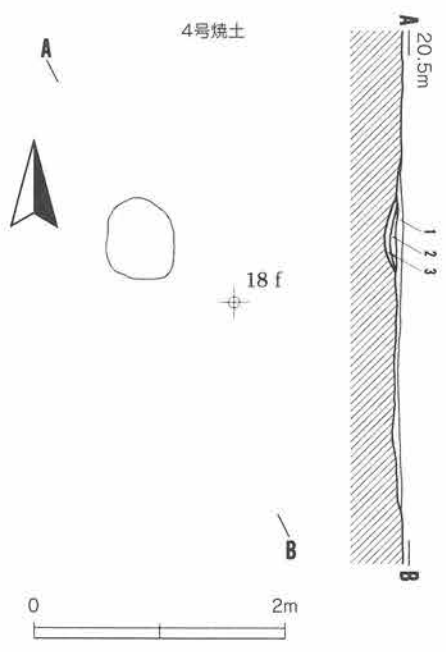
1号焼土
 1 5YR7/8橙色焼土 火焼面 硬い
 2 10YR5/2灰黄褐色土 5YR7/8橙色焼土
 ブロック多量混入 地山の熱変化が



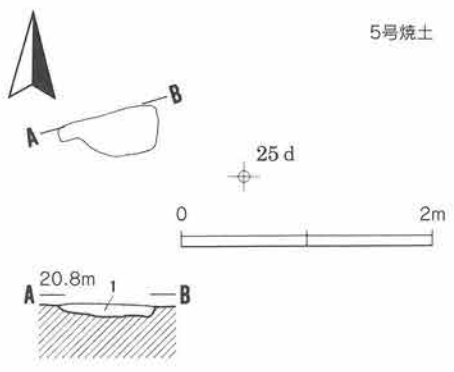
2号焼土
 1 5YR7/8橙色焼土 地山が熱変化したもの
 カマドの火焼面の残存か
 2 10YR5/2灰黄褐色土 5YR7/8橙色焼土
 ブロック多量混入 カマド煙道の残存部分か



3号焼土
 1 10YR6/4にぶい黄橙色土 焼土粒多量混入
 2 2.5YR6/8橙色焼土 地山が熱変化したもの



4号焼土
 1 10YR5/6黄褐色土 7.5YR6/8橙色焼土
 ブロック多量に混入 土師器片混入
 2 5YR6/3にぶい橙色焼土 火焼面 硬い
 3 7.5YR6/8橙色焼土 地山が熱変化したもの



5号焼土
 1 10YR6/3にぶい黄橙色土 5YR7/8橙色焼土
 粒状に多量混入

第56図 1号・2号・3号・4号・5号焼土

3号焼土（第56図、写真図版73）

〔位置〕 80、90に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 不整な円形を呈する焼土である。火焼面は皿状に窪んでいる。火焼面中央の標高は20.92mである。

〔出土遺物〕 焼土の覆土から、土師器が出土した。図示したのは、土師器長胴甕（163）である。

〔性格〕 現地性の焼土である。古代の竪穴建物の壁が失われ、残存したカマド火焼面、あるいは地焼炉と推測される。

〔年代〕 出土した土師器の形態と、他の竪穴建物（S I 1、S I 2）の年代観から、9世紀前～中葉と推測される。

4号焼土（第56図、写真図版73）

〔位置〕 17fに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 楕円形を呈する焼土である。火焼面はわずかに皿状に窪んでいる。火焼面中央の標高は20.38mである。

〔出土遺物〕 焼土の覆土から、土師器が出土した。図示したのは、土師器長胴甕（164、165）である。

〔性格〕 現地性の焼土である。古代の竪穴建物の壁が失われ、残存したカマド火焼面、あるいは地焼炉と推測される。

〔年代〕 出土した土師器の形態と、他の竪穴建物（S I 1、S I 2）の年代観から、9世紀前～中葉と推測される。

5号焼土（第56図）

〔位置〕 24dに位置する。

〔重複〕 S B 22、S B 23のプラン内に位置するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。

〔形態〕 不整な形状を呈する焼土である。火焼面上面の標高は20.72mである。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格〕 現地性の焼土であるが、周囲から土師器、須恵器は全く出土せず、性格を判断できない。

〔年代〕 不明である。

第7節 梅の木、柿の木

遺構ではないが、下構屋敷を構成するものとして、調査時まで立っていた梅の木と柿の木がある。これらは当然ながら下構屋敷が営まれている段階に植樹されたものであろう。これらの立っていた位置は遺構配置図上に示してある。

梅の木（写真図版74）

〔位置〕 14 b に位置する。

〔重複〕 S K 15 と重複するが、梅の木が新しい。同時存在ということもあり得る。

〔形態〕 樹高は約530 cmである。幹は幾つかに分かれるが、最も太い部分直径18×20 cmである。分かれた幹の一つは内部が空洞になり枯れていた。

〔年代〕 幹を輪切りにして持ち帰ったが、年輪を読み取れなかった。佐藤ノブ氏の話によると「座敷前の梅」と呼ばれていたという。

柿の木①（写真図版74）

〔位置〕 21 b に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 樹高は約600 cmである。幹の直径は30×43 cmである。

〔年代〕 幹を輪切りにして持ち帰ったが、年輪を読み取れなかった。

柿の木②（写真図版74）

〔位置〕 20 d、21 d に位置する。

〔重複〕 S B 20 とプランが重複する。

〔形態〕 樹高は約610 cmである。幹の直径は50×63 cmである。幹の内部は枯れて空洞になっている。

〔年代〕 幹を輪切りにして持ち帰ったが、年輪を読み取れなかった。

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P 1	7.5	20.505	
P 2	9.3	20.507	
P 3	10.7	20.530	
P 4	63.3	20.052	
P 5	66.8	20.056	
P 6	10.7	20.688	
P 7	欠番		
P 8	欠番		
P 9	欠番		
P 10	欠番		
P 11	33.7	20.261	SB21
P 12	37.0	20.182	
P 13	37.7	20.275	
P 14	26.3	20.307	
P 15	18.3	20.312	
P 16	30.6	20.266	
P 17	10.8	20.424	
P 18	58.3	19.977	
P 19	13.2	20.637	
P 20	43.3	20.178	SB17
P 21	欠番		
P 22	43.9	20.388	SB 1
P 23	21.2	20.518	
P 24	16.2	20.586	
P 25	39.9	20.356	
P 26	11.1	20.645	
P 27	10.4	20.716	
P 28	28.3	20.485	
P 29	欠番		
P 30	67.4	20.016	SB19
P 31	9.4	20.544	
P 32	9.6	20.506	
P 33	25.6	20.381	SB24
P 34	37.2	20.248	
P 35	13.1	20.509	
P 36	16.2	20.454	SB17
P 37	34.4	20.320	
P 38	82.0	19.905	SB17
P 39	43.6	20.334	
P 40	33.1	20.482	
P 41	19.7	20.623	
P 42	28.4	20.494	
P 43	39.8	20.366	
P 44	17.3	20.574	
P 45	18.9	20.455	
P 46	51.1	20.130	
P 47	25.6	20.545	
P 48	29.7	20.485	
P 49	38.1	20.416	
P 50	65.6	20.134	SB17

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P 51	10.0	20.690	
P 52	19.2	20.782	
P 53	22.4	20.588	
P 54	24.9	20.498	
P 55	14.3	20.652	
P 56	35.8	20.429	SB 4
P 57	49.7	20.295	
P 58	13.9	20.649	
P 59	15.6	20.617	
P 60	50.9	20.296	SB 1
P 61	41.2	20.354	SB 1
P 62	13.6	20.631	
P 63	52.0	20.200	SB 8
P 64	54.7	20.218	SB 8
P 65	欠番		
P 66	48.4	20.334	SB 1
P 67	24.7	20.553	
P 68	27.8	20.540	
P 69	73.2	20.075	SB 8
P 70	65.6	20.167	SB 8
P 71	48.5	20.342	
P 72	31.2	20.483	
P 73	15.6	20.647	
P 74	41.3	20.340	SB13
P 75	39.4	20.365	SB 1
P 76	40.8	20.390	SB 1
P 77	43.6	20.343	SB 8
P 78	50.1	20.293	SB 8
P 79	51.1	20.250	SB 4
P 80	50.2	20.324	SB 4
P 81	47.8	20.275	SB 4
P 82	25.3	20.507	
P 83	11.5	20.687	
P 84	17.0	20.457	
P 85	欠番		
P 86	15.7	20.387	SB11
P 87	28.5	20.269	
P 88	24.5	20.287	SB18
P 89	7.5	20.505	SB11
P 90	12.1	20.430	SB18
P 91	31.4	20.248	
P 92	9.3	20.495	
P 93	7.6	20.490	SB11
P 94	14.0	20.385	SB18
P 95	10.3	20.419	SB16
P 96	25.5	20.275	SB16
P 97	欠番		
P 98	42.1	20.307	SB 4
P 99	48.6	20.002	SB19
P100	32.7	20.253	SB 4

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P101	欠番		
P102	34.8	20.438	
P103	43.5	20.355	
P104	10.6	20.644	
P105	13.5	20.610	
P106	32.0	20.455	
P107	30.2	20.308	
P108	27.0	20.292	SB19
P109	24.5	20.355	
P110	欠番		
P111	31.3	20.225	SB19
P112	20.4	20.314	
P113	36.6	20.168	
P114	欠番		
P115	欠番		
P116	24.0	20.235	SB 6
P117	64.1	19.784	SB 7
P118	32.9	20.211	SB19
P119	欠番		
P120	38.0	20.050	SB12
P121	36.9	20.168	SB19
P122	9.7	20.380	SB10
P123	22.0	20.254	SB10
P124	63.3	19.882	SB 2
P125	16.0	20.337	
P126	12.0	20.350	SB10
P127	24.5	20.244	SB 6
P128	46.1	20.019	SB 6
P129	40.3	20.355	
P130	38.5	20.405	
P131	欠番		
P132	10.6	20.409	SB 5
P133	10.5	20.440	SB 5
P134	8.3	20.405	SB 5
P135	18.6	20.304	
P136	37.4	20.141	SB 5
P137	18.4	20.320	SB 5
P138	17.9	20.325	SB 5
P139	23.5	20.279	SB 5
P140	4.2	20.430	SB 5
P141	12.9	20.395	
P142	5.9	20.370	
P143	67.7	19.820	SB 2
P144	28.5	20.160	SB15
P145	35.0	20.110	SB 6
P146	15.1	20.347	
P147	36.1	20.144	SB 2
P148	21.8	20.252	
P149	8.5	20.435	
P150	65.3	19.873	SB 2

柱穴計測表 ①

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P151	39.2	20.082	SB 3
P152	32.5	20.160	SB 3
P153	29.8	20.222	SB 3
P154	30.8	20.232	SB 3
P155	27.8	20.246	SB 3
P156	3.6	20.435	SB 5
P157	9.1	20.427	SB 5
P158	11.8	20.497	SB 5
P159	52.2	19.955	SB 2
P160	34.3	20.127	SB15
P161	22.5	20.245	
P162	34.2	20.120	SB 2
P163	19.8	20.282	SB 6
P164	59.2	19.839	SB 2
P165	32.3	20.170	SB10
P166	13.4	20.376	
P167	49.0	20.000	SB 3
P168	50.0	19.974	SB 2
P169	33.2	20.171	SB10
P170	53.5	19.977	SB 2
P171	28.3	20.230	SB15
P172	20.1	20.304	SB 6
P173	52.8	19.956	SB12
P174	30.5	20.120	SB 3
P175	34.7	20.049	SB 7
P176	31.6	20.089	SB14
P177	欠番		
P178	40.0	19.984	SB 3
P179	85.8	19.532	SB 3
P180	34.0	20.120	SB15
P181	53.3	19.835	SB 3
P182	42.0	19.975	SB 3
P183	37.6	20.114	SB 3
P184	51.2	19.958	SB 3
P185	67.5	19.615	SB 7
P186	48.0	19.954	SB 3
P187	17.4	20.211	SB 7
P188	39.7	19.941	SB14
P189	63.1	19.696	SB 7
P190	51.5	19.900	SB14
P191	44.6	19.959	SB12
P192	59.1	19.766	SB12
P193	56.3	19.775	SB 7
P194	23.5	20.270	SB11
P195	10.5	20.369	SB11
P196	50.2	19.894	SB12
P197	26.7	20.074	SB14
P198	22.3	20.295	
P199	23.3	20.297	SB16
P200	75.9	19.620	SB 7

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P201	29.2	20.064	SB14
P202	64.6	19.789	SB12
P203	17.8	20.372	SB16
P204	20.9	20.307	SB18
P205	34.9	20.207	SB11
P206	11.4	20.406	SB18
P207	11.8	20.412	
P208	27.8	20.295	SB16
P209	22.9	20.309	SB16
P210	22.4	20.336	SB11
P211	51.1	20.050	SB11
P212	33.7	20.235	SB18
P213	13.5	20.440	SB18
P214	40.9	20.151	SB16
P215	26.9	20.275	SB16
P216	欠番		
P217	13.5	20.455	
P218	11.8	20.442	SB11
P219	38.4	20.127	SB16
P220	欠番		
P221	10.6	20.390	
P222	20.7	20.333	SB18
P223	欠番		
P224	39.2	20.048	SB 9
P225	56.8	19.880	SB 7
P226	54.8	19.896	SB 3
P227	36.8	20.062	SB 3
P228	41.4	19.966	SB 3
P229	欠番		
P230	欠番		
P231	7.7	20.569	
P232	5.2	20.600	
P233	欠番		
P234	8.8	20.578	
P235	欠番		
P236	35.5	20.463	
P237	15.2	20.648	
P238	13.8	20.650	SB23
P239	24.2	20.490	SB22
P240	52.3	20.174	SB23
P241	27.4	20.263	
P242	15.7	20.476	SB22
P243	9.9	20.307	SB23
P244	5.7	20.325	SB23
P245	欠番		
P246	80.1	19.827	SB 8
P247	10.7	20.354	SB11
P248	39.6	20.144	SB11
P249	45.5	20.087	SB16
P250	12.0	20.312	SB16

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P251	11.4	20.348	SB16
P252	76.5	19.745	SB11
P253	54.9	19.866	SB 7
P254	29.5	20.130	
P255	12.9	20.287	
P256	62.1	19.799	SB 9
P257	50.8	19.897	SB12
P258	37.8	19.990	SB 7
P259	33.0	20.055	SB14
P260	60.2	19.786	SB 7
P261	64.3	19.766	SB 9
P262	46.3	19.975	SB 3
P263	36.5	20.065	SB14
P264	81.1	19.645	SB 7
P265	50.9	19.956	SB 9
P266	36.0	19.590	SB 7
P267	42.6	19.976	SB 3
P268	51.9	19.976	SB 3
P269	39.0	20.048	SB14
P270	67.0	19.810	SB 7
P271	22.2	20.290	
P272	30.5	20.203	SB 3
P273	48.0	20.010	SB 9
P274	64.9	19.829	SB12
P275	26.2	20.215	SB15
P276	57.8	19.896	SB 2
P277	22.7	20.250	
P278	69.4	19.802	SB 7
P279	22.7	20.273	SB 3
P280	38.4	20.100	SB 3
P281	29.3	20.195	SB 3
P282	25.3	20.264	SB10
P283	48.9	20.015	SB 3
P284	16.2	20.308	
P285	36.2	20.072	SB 7
P286	34.4	20.166	SB 9
P287	41.9	20.094	SB12
P288	65.1	19.920	SB 7
P289	49.8	19.993	SB 2
P290	35.4	20.143	SB 2
P291	65.5	19.790	SB 3
P292	71.0	19.716	SB 7
P293	欠番		
P294	28.8	20.190	SB 6
P295	43.4	19.946	SB 6
P296	欠番		
P297	56.2	20.096	SB 1
P298	55.7	20.007	
P299	82.7	19.958	SB 1
P300	39.9	20.246	SB13

柱穴計測表 ②

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P301	31.7	20.465	SB 1
P302	16.8	20.397	SB 4
P303	60.0	20.200	SB 1
P304	31.4	20.512	SB 1
P305	51.4	20.161	SB 8
P306	75.3	20.035	SB24
P307	欠番		
P308	35.2	20.283	
P309	38.6	20.202	SB 8
P310	52.2	20.278	SB 4
P311	42.2	20.395	SB 4
P312	7.2	20.512	SB11
P313	12.6	20.472	SB11
P314	39.7	20.200	SB11
P315	6.4	20.486	SB11
P316	10.9	20.471	SB11
P317	10.0	20.430	SB11
P318	欠番		
P319	10.5	20.485	SB11
P320	39.6	20.202	SB11
P321	13.6	20.360	SB16
P322	34.2	19.990	SB11
P323	46.4	19.882	SB11
P324	11.6	20.376	SB11
P325	14.4	20.176	SB11
P326	欠番		
P327	45.0	20.090	SB11
P328	欠番		
P329	10.4	20.458	SB11
P330	36.8	20.214	SB16
P331	29.5	20.266	SB11
P332	6.5	20.498	SB11
P333	37.4	20.174	SB11
P334	3.3	20.498	SB11
P335	30.3	20.142	SB16
P336	36.2	20.082	SB11
P337	28.2	20.208	SB16
P338	36.0	20.132	SB11
P339	10.5	20.359	SB11
P340	21.1	20.311	
P341	47.0	20.048	SB11
P342	欠番		
P343	欠番		
P344	54.1	19.936	SB12
P345	63.6	19.759	SB12
P346	34.1	20.080	SB14
P347	66.1	19.705	SB 7
P348	53.3	19.895	SB12
P349	54.5	19.832	SB12
P350	35.5	20.415	SB 1

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P351	20.3	20.593	
P352	19.4	20.603	
P353	欠番		
P354	欠番		
P355	13.2	20.606	
P356	21.2	20.168	SB12
P357	87.3	19.975	SB 8
P358	29.0	20.180	SB10
P359	14.9	20.379	SB 5
P360	88.7	19.531	SB 7
P361	31.2	20.095	SB 9
P362	27.9	20.065	SB 9
P363	33.6	20.025	SB 9
P364	欠番		
P365	33.5	19.970	SB 9
P366	37.3	20.028	SB 9
P367	26.5	20.185	SB 9
P368	44.2	20.054	SB12
P369	14.8	20.042	SB12
P370	43.4	20.046	SB 7
P371	24.0	20.190	SB14
P372	23.0	20.192	SB 9
P373	85.2	19.706	SB13
P374	13.5	20.241	SB12
P375	43.1	20.046	SB 3
P376	34.1	20.054	SB10
P377	52.6	19.924	SB 9
P378	36.9	20.045	SB12
P379	60.8	19.842	SB 9
P380	27.7	20.161	SB12
P381	38.6	20.024	SB 7
P382	42.0	20.018	SB12
P383	39.9	20.020	SB 7
P384	51.0	19.925	SB 9
P385	欠番		
P386	53.5	19.879	SB12
P387	35.7	20.141	SB15
P388	欠番		
P389	39.9	20.095	SB 7
P390	8.7	20.415	SB11
P391	49.6	20.040	SB18
P392	16.2	20.247	SB13
P393	23.9	20.180	SB19
P394	18.8	20.381	SB19
P395	50.0	20.127	SB19
P396	26.2	20.378	SB19
P397			
P398	37.0	20.204	SB21
P399	73.6	20.000	SB21
P400	21.5	20.504	

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P401	11.4	20.694	
P402	49.0	20.106	SB20
P403	16.0	20.642	SB20
P404	53.9	20.256	SB20
P405	43.1	20.226	SB20
P406	47.9	20.106	SB20
P407	45.4	20.098	SB20
P408	38.5	20.375	SB21
P409	76.1	20.026	SB21
P410	61.4	20.014	SB21
P411	51.0	20.067	SB21
P412	61.8	19.956	SB21
P413	54.1	20.056	SB21
P414	21.6	20.360	SB21
P415	47.9	20.047	SB20
P416	63.2	20.178	SB20
P417	43.3	20.336	SB20
P418	99.1	19.747	SB20
P419	56.7	19.910	SB20
P420	56.0	20.018	SB20
P421	46.4	20.128	
P422	19.4	20.526	SB23
P423	7.6	20.654	
P424	11.3	20.645	
P425	24.6	20.543	
P426	11.8	20.699	SB22
P427	18.3	20.597	
P428	41.6	20.402	SB22
P429	38.4	20.262	SB22
P430	9.7	20.572	SB22
P431	38.8	20.289	SB22
P432	52.0	20.160	SB22
P433	35.2	20.486	SB22
P434	6.2	20.682	
P435	19.1	20.440	
P436	34.6	20.205	
P437	7.9	20.475	
P438	44.2	20.142	
P1001	41.9	20.075	
P1002	27.9	20.226	
P1003	29.9	20.247	SB13
P1004	18.9	20.335	
P1005	47.4	20.008	SB24
P1006	12.2	20.482	SB13
P1007	44.8	20.002	SB24
P1008	9.7	20.397	SB13
P1009	44.6	20.064	SB13
P1010	17.3	20.305	SB13
P1011	46.1	20.034	SB24

柱穴計測表 ③

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P1001	41.9	20.075	
P1002	27.9	20.226	
P1003	29.9	20.247	SB13
P1004	18.9	20.335	
P1005	47.4	20.008	SB24
P1006	12.2	20.482	SB13
P1007	44.8	20.002	SB24
P1008	9.7	20.397	SB13
P1009	44.6	20.064	SB13
P1010	17.3	20.305	SB13
P1011	46.1	20.034	SB24
P1012	32.2	20.125	SB13
P1013	27.8	20.175	
P1014	39.6	20.120	SB24

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P1015	14.5	20.210	
P1016	29.2	20.076	
P1017	31.0	20.227	
P1018	欠番		
P1019	45.9	20.131	
P1020	25.0	20.188	SB21
P1021	37.8	20.030	SB21
P1022	19.1	20.227	
P1023	18.3	20.185	
P1024	17.2	20.228	
P1025	9.6	20.260	
P1026	8.8	20.196	
P1027	37.7	20.060	
P1028	55.8	19.912	SB24

柱穴番号	深さ (cm)	底面の標高 (m)	建物番号
P1029	24.5	20.175	
P1030	9.5	20.275	S
P1031	36.2	20.108	SB24
P1032	14.9	20.325	SB13
P1033	15.8	20.162	
P1034	10.4	20.156	SB13
P1035	18.8	20.312	
SK34	14.0	20.320	SB13
SK44	79.0	20.080	SB23
SK42	41.0	20.290	SB23
SK43	31.0	20.340	SB23
SK33	46.0	20.040	SB24

柱穴計測表 ④

第5章 出土遺物

下構遺跡2次調査で出土した遺物は以下の通りである。

- 1 縄文時代の遺物（土器、石鏃）
- 2 9世紀の遺物（土師器、須恵器、土錘、石製支脚）
- 3 12世紀の遺物（手づくねかわらけ、ロクロかわらけ、常滑産陶器、渥美産陶器、中国産白磁）
- 4 中世の遺物（古瀬戸）
- 5 近世、近代の陶器（肥前産、瀬戸・美濃産、常滑産、京・信楽系、大堀相馬産、在産）
- 6 近世の磁器（肥前産、瀬戸・美濃産、切込産、平清水産）
- 7 近代の磁器
- 8 ガラス製品（薬瓶、インク瓶、哺乳瓶、清酒瓶、サイダー瓶、牛乳瓶、ビール瓶、ランプなど）
- 9 石製品（砥石、硯、挽臼など）
- 10 木製品（漆器椀、下駄、桶底板、鍋蓋など）
- 11 金属製品（釘、鎌、煙管など）
- 12 銭貨（永樂通寶、寛永通寶、仙台通寶）
- 13 土製品（土人形、羽口、窯道具）

各々の遺物については、実測図版の下に観察表を付した。出土地点、法量などは表を参照していただきたい。文章中では必ずしも個々の遺物について説明していない場合もある。また、拓本の断面寄りに外面を、内面はその左側に示している。

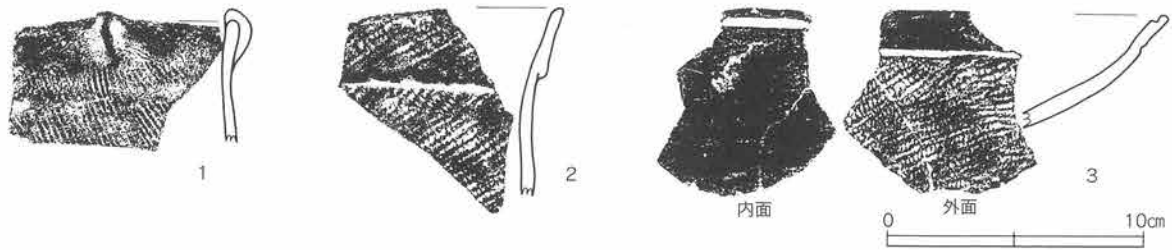
第1節 縄文時代の遺物

1 縄文土器（第57図 写真図版77）

下構遺跡2次調査では、微量ながら縄文土器が出土している。図示したのは3片であるが、他に微細な体部破片が13片ある。この中で7片が2と同一個体、1片が1と同一個体と推測される。1と2、そして図示していない破片は遺構検出の作業の際に出土したもので、包含されていた層はI層と推測される。また3はSK27の埋土から出土したが、SK27自体は近代以降に属する遺構であり、縄文土器片3は混入品と判断される。結果として今回の調査では縄文時代の遺構は皆無であり、出土した縄文時代の遺物も周辺地域からの混入品と判断される。1は深鉢の口縁部破片で、低い突起が付く、突起部分には隆線が貼り付けられる。施文はL縄文が施されている。時期は後期前葉と推測される。2は深鉢の口縁部である。口縁部は折り返されている。施文はLR縄文が施されている。時期は後期前葉と推測される。3は浅鉢、あるいは台付浅鉢の口縁部破片である。外面口縁部は無文で、内面には沈線が一条施される。体部にはLR縄文が施される。

2 石鏃（第57図 写真図版77）

縄文時代の石器は、図示した石鏃（4）が1点のみの出土である。出土したのは近世の土坑SK15の埋土中で、縄文土器と同様に周辺からの混入品と判断される。無茎鏃で、一方の脚部を欠損する。石質は頁岩で暗灰色の色調を呈している。



番号	種類	出土位置	その他
1	縄文土器	29a検出時	後期前葉 深鉢 L縄文
2	"	9l検出時	後期前葉 深鉢 LR縄文
3	"	SK27埋土	晩期後半 浅鉢 LR縄文



番号	種類	出土位置	その他	重さ (g)
4	石鉢	SK15埋土	無茎鉢 石質 頁岩 暗灰色を呈する	0.59

第57図 縄文時代の遺物

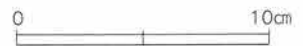
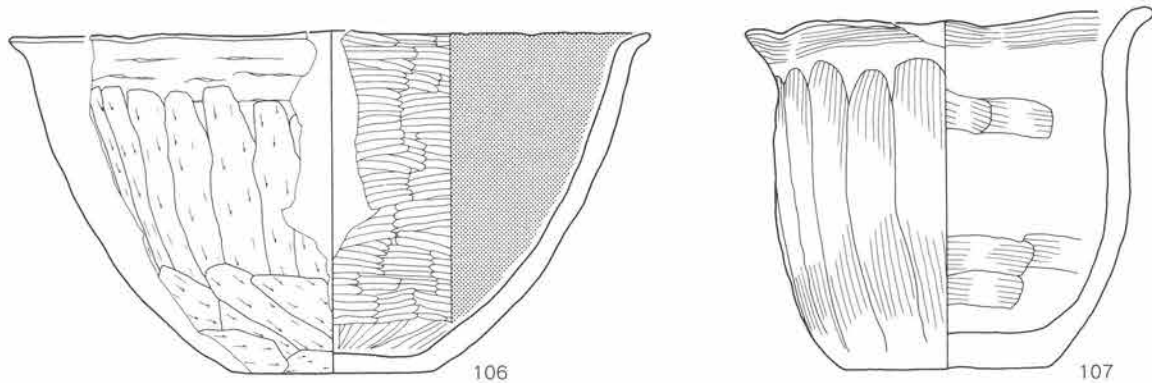
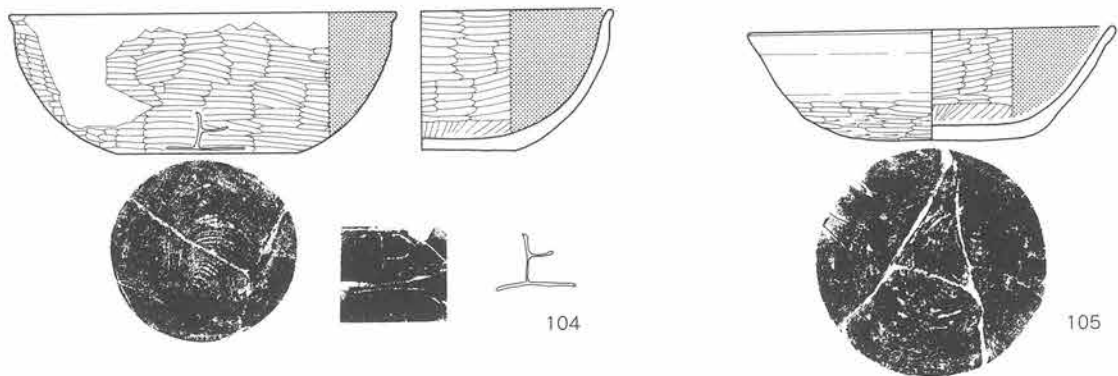
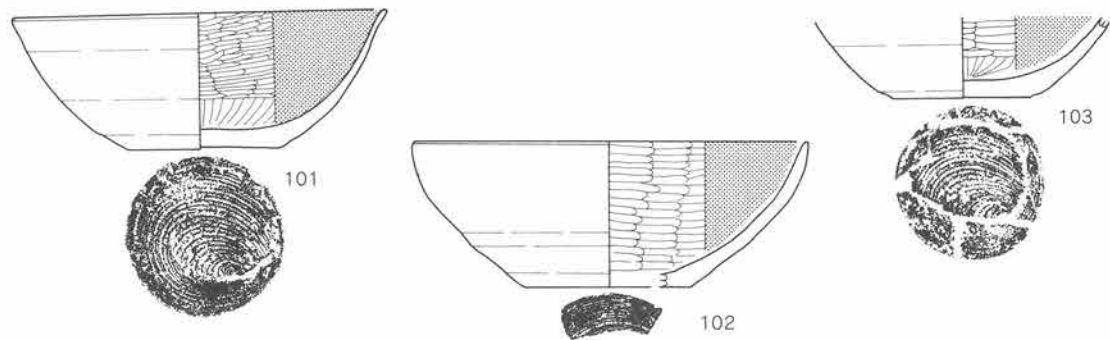
第2節 9世紀の遺物

9世紀の遺物は土師器、須恵器、土錘、石製の支脚がある。検出された9世紀の竪穴建物はS I 1とS I 2の2棟があるが、他に1号、2号、3号、4号焼土は竪穴建物のカマドか地焼炉の残存部分と推測され、本調査区内には小規模ながらも数棟の竪穴住居からなる集落が存在していたと推測される。各竪穴建物、焼土の出土遺物については、各遺構の文章中で触れているのでここでは遺物の種類ごとにその特徴を記す。

1 土師器 (第58～65図、写真図版77～79)

図示した土師器は坏9個体 (101～105、111～114)、鉢3個体 (106、155、166)、小型長胴甕4個体 (107、108、116、154)、大型長胴甕14個体 (109、117、118、119、120、121、122、123、156、157、158、163、164、165)、羽釜? 1個体 (115) である。図示した以外の土師器の総重量は20.6 kgである。

坏は9個体いずれも製作にロクロを使用しており、内面にはミガキを施し黒色処理をおこなっている。S I 2出土の112～114の底辺部、または底面にはケズリによる再調整が施されている。同じS I 2出土の111には再調整は施されていない。またS I 1出土の104は外面、外底面にヘラミガキが施され、黒色処理がおこなわれている。外底面には回転糸切りの痕跡が僅かながら観察できる。そして外面体部下半に線刻による文字「上」が施される。これは土器焼成後に施された線刻である。口縁端部が外反している。105は体部下半と外底面に回転ヘラケズリが施され、その上にヘラミガキが施される。外面口縁部はロクロ調整のままである。101～103には再調整が施されていない。内面のヘラミガキは102を除くと、下半部は放射状、



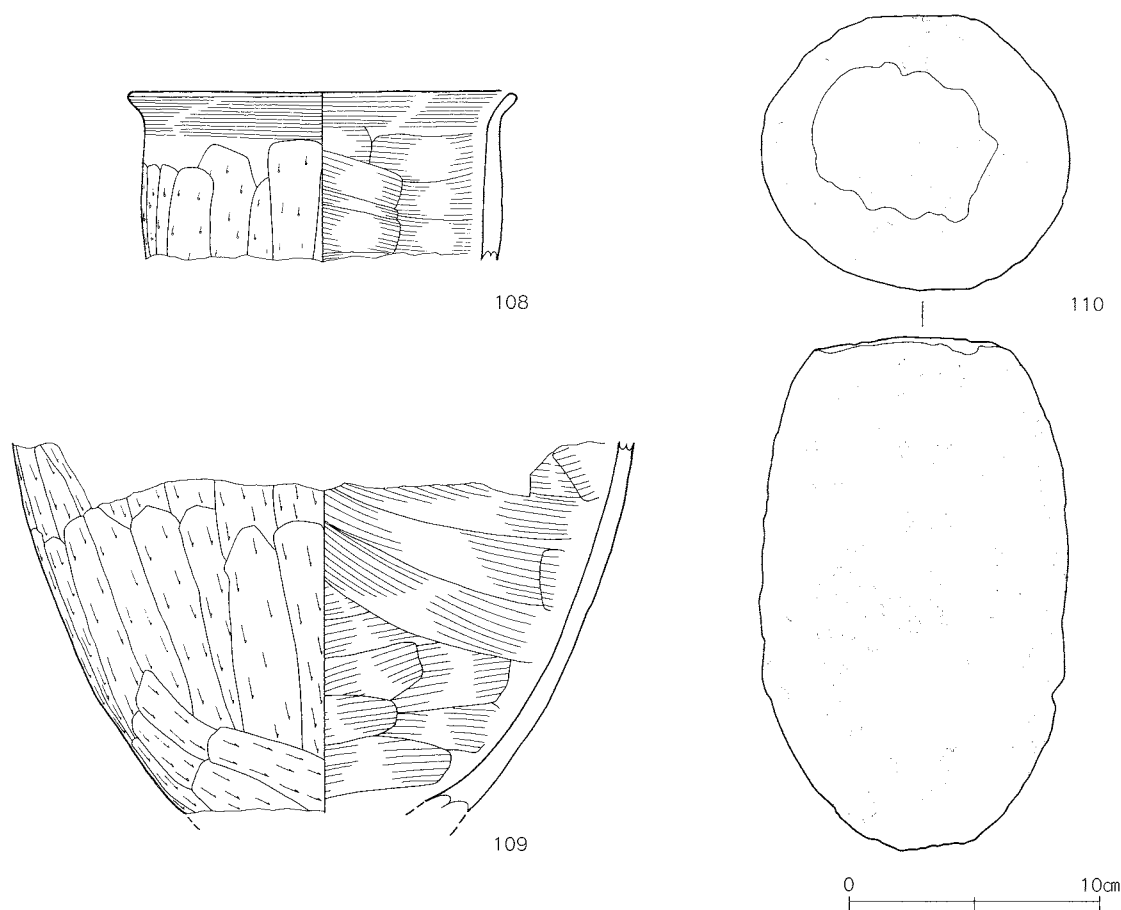
番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
101	土師器	杯	SI1 Pit2埋土	5.5	14.8	6.0	ロクロ	ヘラミガキ	橙色	内面黒色処理
102	"	"	SI1 Pit2埋土	5.8	15.6	6.6	ロクロ	ヘラミガキ	橙色	"
103	"	"	SI1 Pit2埋土	(3.1)	—	5.5	ロクロ	ヘラミガキ	黄褐色	"
104	"	"	SI1 カマド周辺埋土	5.6	15.3	7.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐灰色	線刻文字 (焼成後)
105	"	"	SI1 カマド埋土	4.5	14.5	4.7	ロクロ ケズリ	ヘラミガキ	明黄褐色	底面、外部下半ケズリの後ヘラミガキ
106	"	鉢	SI1 Pit2埋土	13.7	25.4	8.0	ヨコナデ ケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄褐色	内面黒色処理、ロクロ使用か?
107	"	長胴甕	SI1 カマド埋土	14.0	16.0	8.0	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	明赤褐色	内面摩耗

第58図 SI1出土遺物①

上半部は横位に施されている。

内面にヘラミガキ、黒色処理が施される個体を長胴甕と区別して鉢とした。106は器形、製作技法から判断すると、上半部にロクロ調整が施されているのが通常であるが、ロクロ目の痕跡を認め難い。外底面の形状、体部下半のヘラケズリ調整は、製作にロクロを使用するもの特有の様相を呈する。ロクロ調整がおこなわれなかったためか、体部上半には輪積みの痕跡が顕著である。この個体は割れた後に二次的に火熱を受けている。155は口縁部を欠損する個体である。体部上半に線刻により文字？が施されている。これは土器焼成前に刻まれたものである。欠損部分にも線が連続するので断定できないが「方」の字と推測される。166は器種をはっきり特定できないが、小型の鉢と推測される。内面にヘラミガキ、黒色処理が施され、外底部が高台状に突き出す。外面調整は不明瞭であるが、ヘラナデとヘラケズリが施される。

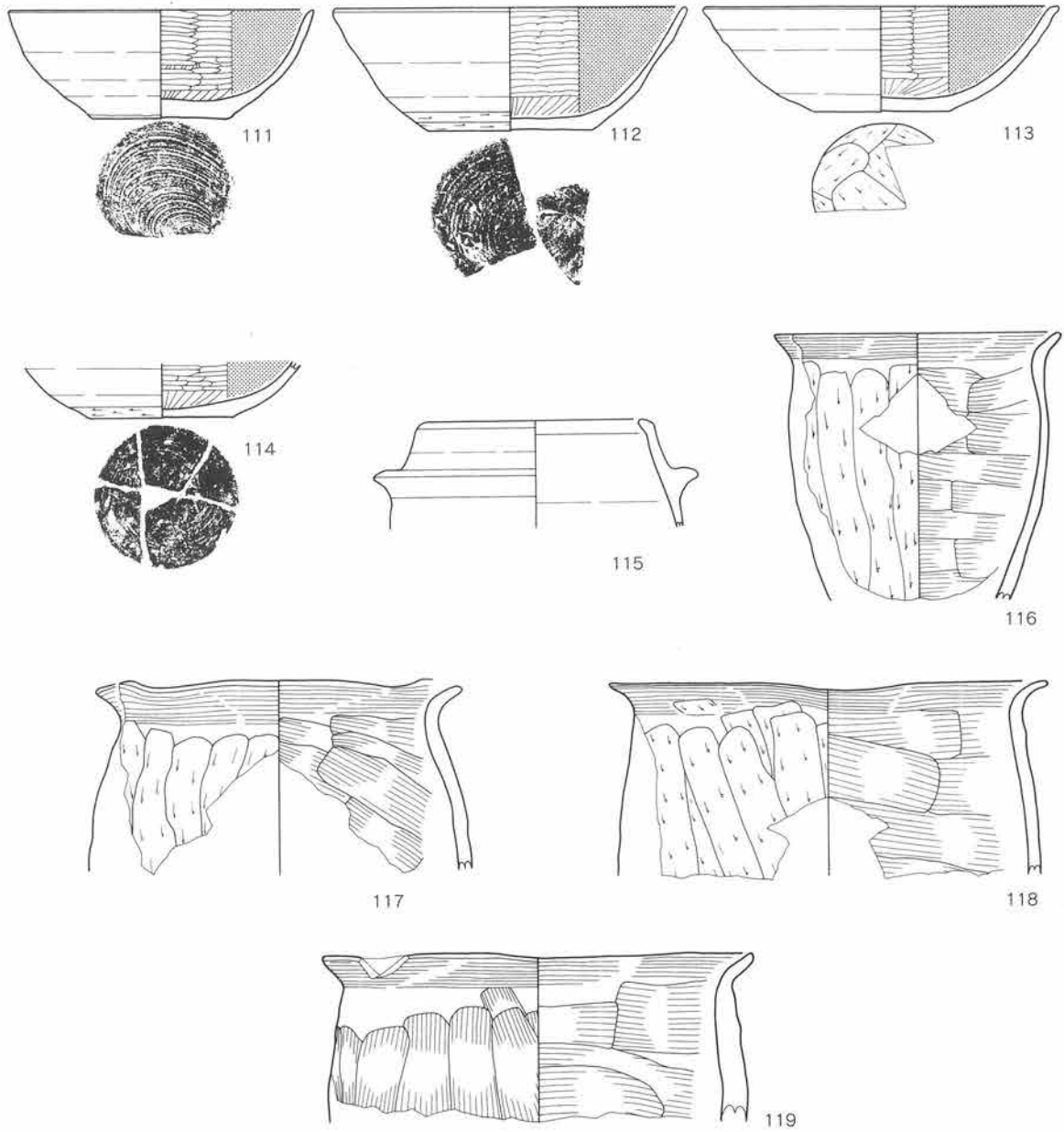
小型の長胴甕はロクロ使用とロクロ不使用のものがある。154はロクロ使用で再調整は施されていない。107、108、116はロクロ不使用である。107は形状が歪んでいる。二次火熱が著しく器面が荒れており、調整が不明瞭な部分もある。108は107と異なり製作が精緻である。116は薄手の造りである。口縁部内面に



番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
108	土師器	長胴甕	SI1 カマド埋土	(6.8)	15.3	—	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	明赤褐色	小型の長胴甕
109	"	"	SI1 カマド周辺埋土	(14.8)	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄褐色	ロクロ使用甕か

番号	種類	出土位置	石質	その他	重さ (g)
110	支脚	SI1 カマド火燃面	熔岩安山岩	火燃面に直立した状態で出土	1,610

第59図 SI1出土遺物②

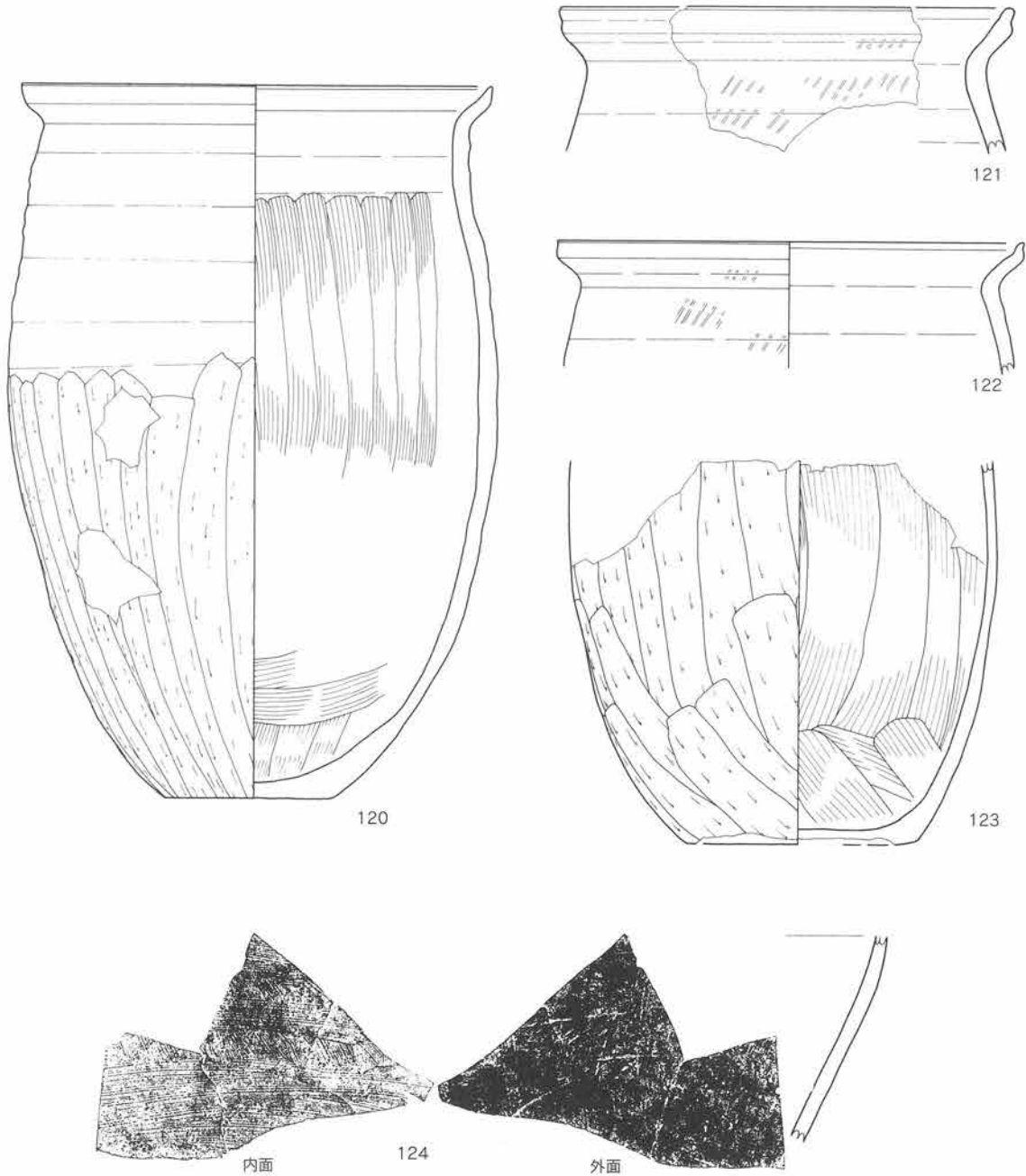


0 10cm

番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
111	土師器	坏	SI2 埋土	4.7	13.4	6.0	ロクロ	ヘラミガキ	灰白色	内面黒色処理
112	"	"	"	5.4	15.3	7.1	ロクロ ケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	"
113	"	"	"	4.6	15.5	6.0	ロクロ	ヘラミガキ	橙色	底面ヘラケズリ 内黒
114	"	"	"	(2.4)	-	6.2	ロクロ ケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	内面黒色処理
115	"	羽釜?	"	(4.7)	9.5	-	ロクロ	ロクロ	灰褐色	
116	"	長胴甕	"	(11.7)	12.5	-	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	浅黄橙色	口縁内面に炭化物付着
117	"	"	"	(8.5)	16.0	-	"	"	橙色	
118	"	"	"	(8.6)	19.2	-	"	"	浅黄橙色	
119	"	"	"	(7.4)	18.6	-	ヨコナデ ヘラナデ	"	にぶい黄橙色	

第60図 SI2出土遺物①

古代3



0 10cm

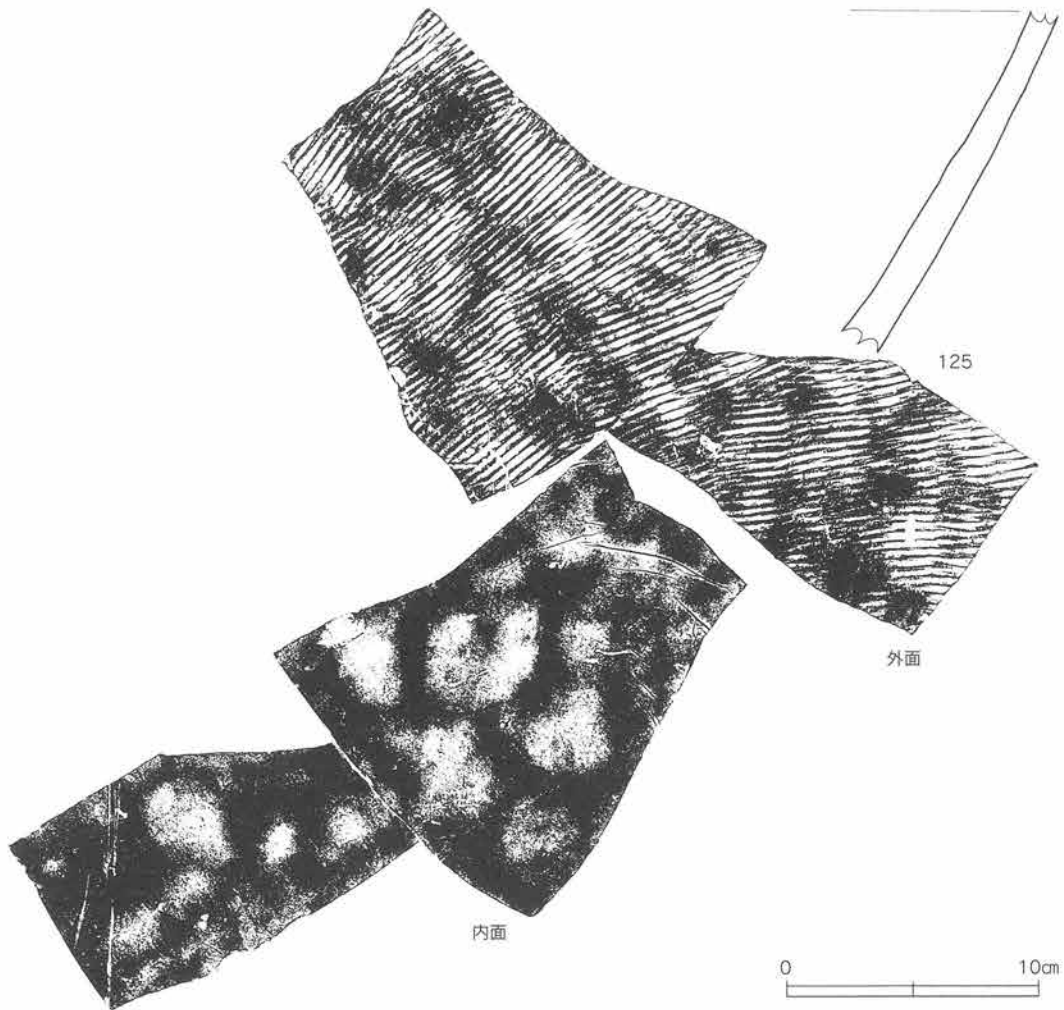
番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
120	土師器	長胴甕	SI2 焼土脇	31.8	20.6	7.3	ロクロ ヘラズリ	ロクロ ヘラナデ	橙色	内面中央付近摩耗
121	"	"	SI2 埋土	(6.5)	20.0	-	タタキ ロクロ	ロクロ	灰白色	ロクロの下地にタタキ
122	"	"	"	(5.6)	20.6	-	"	"	灰白色	"
123	"	"	"	(17.1)	-	9.5	ヘラケズリ	ヘラナデ	浅黄橙色	ロクロ長胴甕の下半部
124	須恵器	甕	"	(9.0)	-	-	"	"	灰色	

第61図 SI2出土遺物②

帯状に炭化物が付着している。

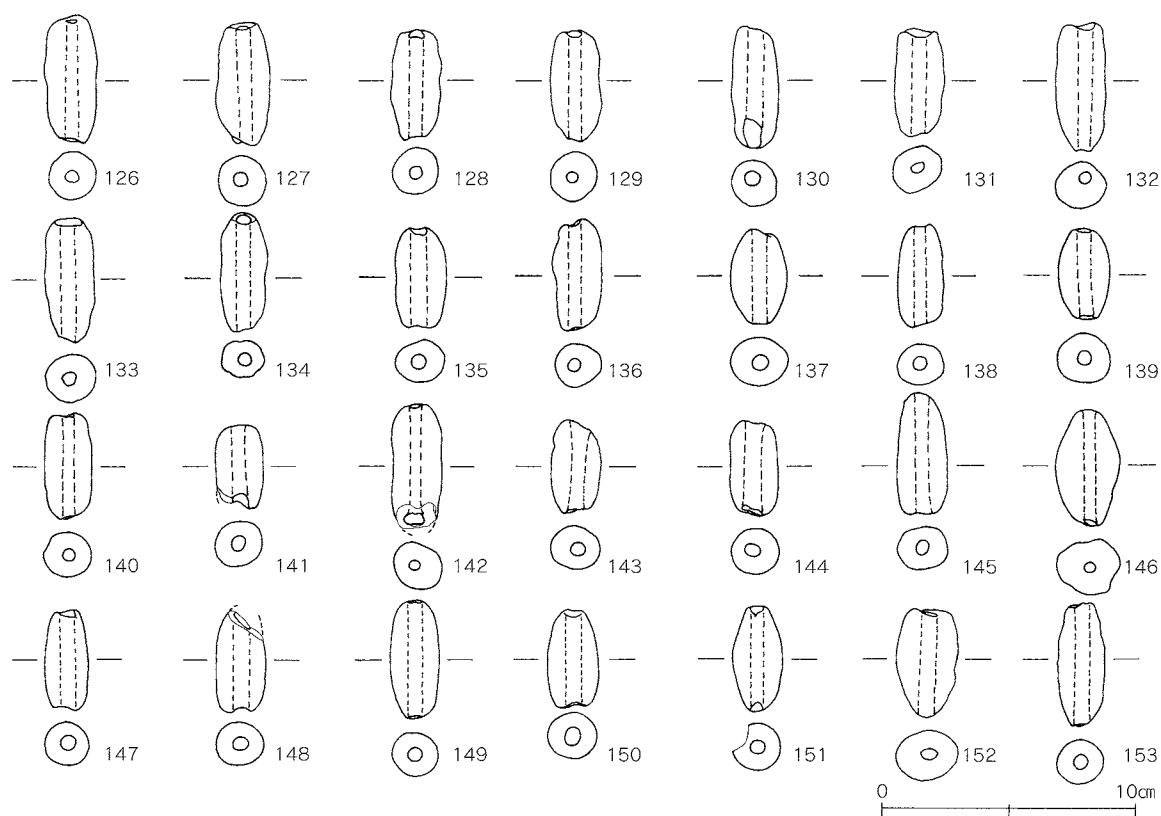
大型の長胴甕もロクロ使用とロクロ不使用がある。S I 2 出土の121、122はロクロ使用長胴甕で、ロクロ調整の下地にタタキが施されている。同じS I 2 出土の120はロクロの下地のタタキ目が見出せないが、121、122と口縁部の形態が共通で、本来はタタキが施されていたが、丁寧なロクロ調整によりその痕跡が消えたと判断できる。2号焼土出土の158もロクロ下地のタタキ目が見出せないが、120と同様に本来はタタキ目が施された可能性が高い。120の口径は底径の2.8倍で、底径が小さい器形といえる。123はロクロ使用長胴甕の下半部である。S I 1 の109もロクロ使用長胴甕の下半部と推測される。117～119、156、157、163～165はロクロ不使用の長胴甕である。164は口縁部の外反が弱い、他は口縁部が「く」の字に外反している。これらロクロ不使用長胴甕の調整は体部外面にはヘラケズリかヘラナデが施され、体部内面にはヘラナデが施される。157の外底面には木葉痕がある。

115は外面に凸帯が巡り、器種を羽釜とした。内外面ロクロ調整のみで、精緻で硬い焼成である。断面を観察すると凸帯は粘土を貼り付けた後、ロクロ調整を施したことを読み取れる。煮沸に用いられた明瞭な痕



番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
125	須恵器	大甕	SI2 埋土	(13.6)	—	—	タタキ目	アテ具痕	黒色	SK52からも出土

第62図 SI2出土遺物③



番号	種類	出土位置	その他	重さ (g)
126	土錘	SI2 床面	126~133 一括で出土	18.37
127	"	"		19.16
128	"	"		15.31
129	"	"		15.98
130	"	"		14.25
131	"	"		13.71
132	"	"		19.00
133	"	"		17.74
134	"	SI2 埋土		13.27
135	"	"		13.88
136	"	"		13.49
137	"	"		13.95
138	"	"		11.24
139	"	"		12.02
140	"	"		14.61
141	"	"	欠損	10.31
142	"	"	欠損	17.46
143	"	"		10.24
144	"	"		12.99
145	"	"		16.30
146	"	"		19.67
147	"	"		10.22
148	"	"	欠損	12.98
149	"	"		15.44
150	"	"		14.15
151	"	"	欠損	12.00
152	"	"		16.42
153	"	"		14.17

第63図 SI2出土遺物④

跡はない。

ここでは各遺構の土師器を一括して記述したが、これらの土師器は遺構が異なっても共通する要素も多く、遺構、遺物密度の点も考え合わせ、概ね同一時期の所属、あるいは時期差があっても僅かなものと考えたい。最も多量の土師器を出土したS I 2はSK 52と重複し、S I 2が古い。SK 52の埋土中には十和田 a 降下火山灰が堆積しており、S I 2は十和田 a 火山灰降下時よりも大分前に埋没していたことを示している。よって当然ながら、S I 2出土の土師器は十和田 a 降下火山灰よりも古い時期が与えられる。S I 2のロクロ使用長胴甕の下地にはタタキが認められ、口径に比較して底径が小さいという特長がある。また坏にも再調整が施される個体が多い。このように火山灰の関係と土師器の特長から、S I 2、または下構遺跡の土師器は9世紀の前～中葉に位置すると判断するのが妥当であろう。

2 須恵器 (第58～65図、写真図版77～79)

図示した須恵器は7点である。160～162は同一個体であるので、個体数は5個体である。器種は甕(124、159、160～162)と大甕(125、167)がある。他に図示していない須恵器片が総計で約50gある。

甕124は灰色を呈し、非常に精緻な焼成である。外面には縦位のヘラケズリ、内面には横位～縦位のヘラナデが施される。体部下半の破片である。159は小型の甕である。明るい灰色を呈し、精緻な焼成である。外面体部下半にヘラケズリが施される。160～162は同一個体の甕である。灰色でやや軟質の焼成である。160、161は体部中央～上半の破片、162は体部下半の破片である。外面調整はロクロとヘラケズリ、内面にはヘラナデとカキメが施される。

125は大甕の体部破片である。S I 2から出土したが、SK 52出土の破片が接合した。外面は平行タタキ目、内面にはアテ具痕がみられる。167は大甕の口縁部破片である。暗灰色で精緻な焼成である。口縁端部は沈線状の2条のくぼみがある。

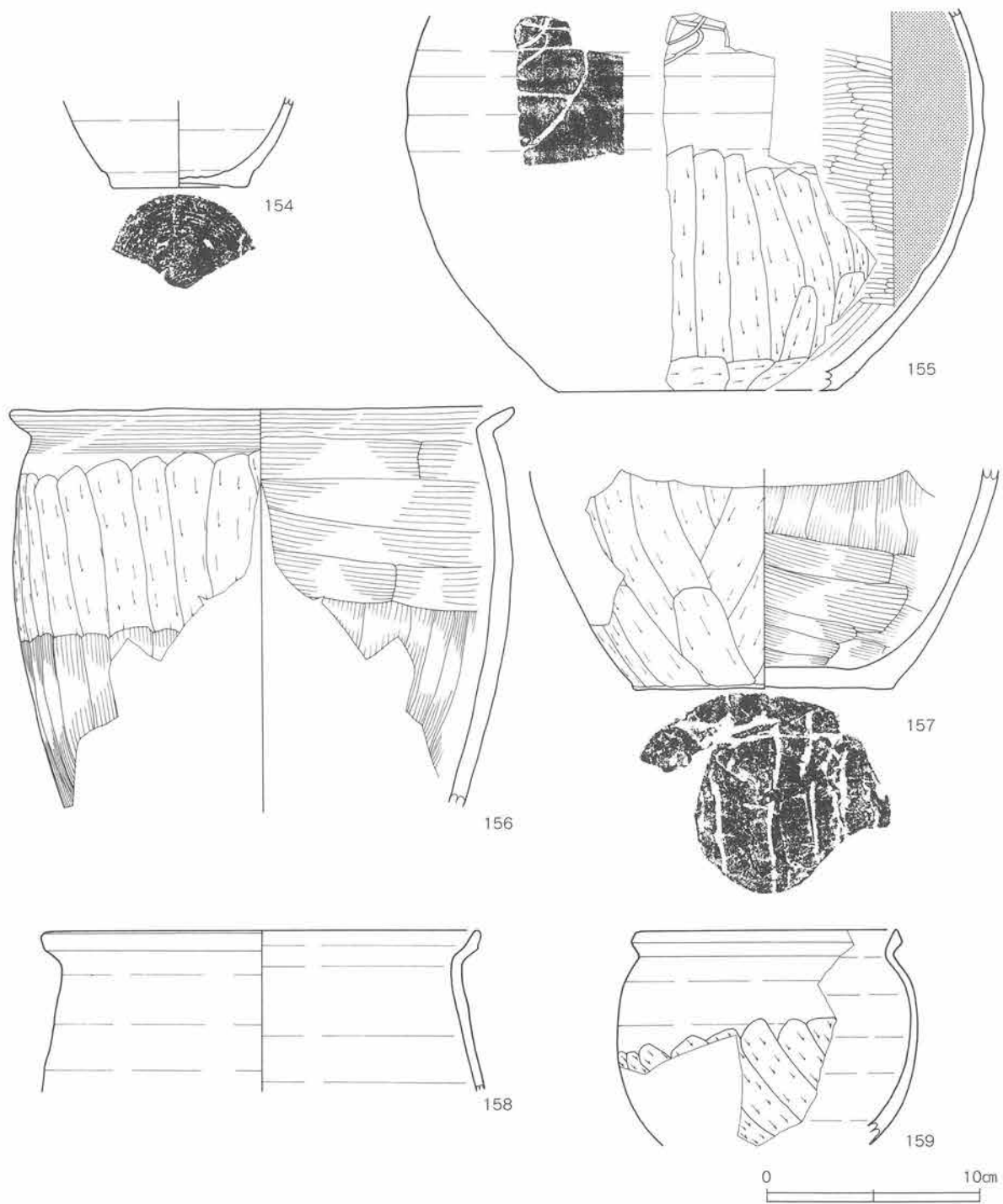
これらの須恵器の形状から時期を判断するのは困難であるが、供伴する土師器の年代観から9世紀前～中葉と想定される。

3 土錘 (第63図、写真図版79)

S I 2の床面と埋土中から土錘が28個(126～153)出土した。形状は均一ではないが、長さ約5cm、幅約2cm程度のもが多い。欠損していないもの24個の重量の平均値は14.81gである。色調は赤褐色～黄橙色を呈するものが多い。126～133の8個はS I 2の床面の一箇所からかたまって出土した。用途は漁労に用いる網の錘と推測される。時期は土師器の年代観から9世紀前～中葉と推測される。

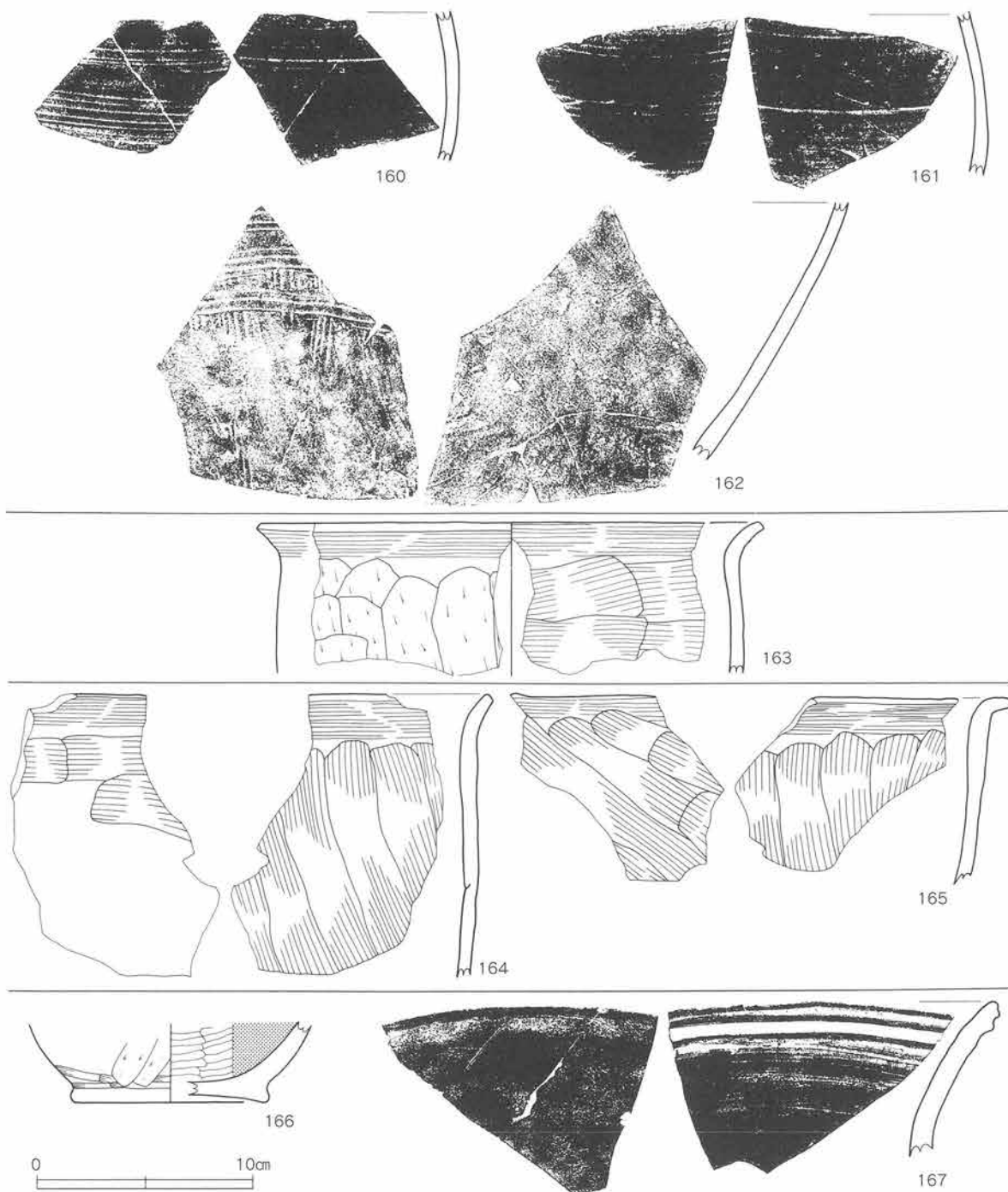
4 支脚 (第59図、写真図版77)

S I 1のカマド火焼面に直立する状態で石製の支脚(110)が出土した。石質は熔岩安山岩で他孔質の独特の地肌をなす。色調は黒褐色である。土器が載る頂部が平坦に加工されている。その他の部分には人為的な加工は施されていない。重さは1610gである。下部はカマド火焼面に埋め込まれて使用されていた。時期は土師器の年代観から9世紀前～中葉と推測される。



番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
154	土師器	長胴甕	2号焼土 覆土	(4.2)	—	6.4	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	底面回転糸切
155	"	鉢	"	(17.0)	—	13.0	ロクロ ヘラズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	線刻文字 (焼成前)
156	"	長胴甕	"	(18.9)	23.6	—	ヘラズリ ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	口縁内外面ヨコナデ
157	"	"	"	(10.6)	—	12.1	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	底面木葉痕
158	"	"	"	(6.6)	20.3	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	下地のタタキ確認できない
159	須恵器	甕	"	(10.3)	12.2	—	ロクロ ヘラズリ	ロクロ	灰色	

第64図 2号焼土出土遺物



番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
160	須恵器	甕	2号焼土覆土	(6.8)	-	-	ロクロ	カキ目	灰色	161, 162と同一個体
161	"	"	"	(7.4)	-	-	"	"	灰色	
162	"	"	"	(11.6)	-	-	ヘラケズリ	"	灰オリーブ色	下半部の破片
163	土師器	長胴甕	3号焼土覆土	(7.2)	23.2	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	浅黄橙色	
164	"	"	4号焼土覆土	(13.2)	-	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	橙色	内部摩耗
165	"	"	"	(8.7)	-	-	"	"	にぶい黄橙色	
166	"	鉢?	1号倒木痕埋土	(3.7)	-	9.0	ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	器種を特定できない
167	須恵器	大甕	SK15埋土	(7.2)	-	-	ロクロ	ロクロ	暗灰色	

第65図 2号、3号、4号焼土出土遺物
遺構外の土師器、須恵器

第3節 12世紀の遺物

12世紀の遺物はロクロかわらけ（201～212）、手づくねかわらけ（213～221）、常滑産陶器（222～247）、渥美産陶器（248～251）、中国産白磁壺（252）が出土した。図示したものは出土した全点である。これらの遺物の多くは近世の遺構内から出土している。

1 ロクロかわらけ（第66図、写真図版80）

ロクロかわらけは12点（201～212）出土した。出土した全点を図示している。細片のため判別が難しい個体もあるが、いずれも大型かわらけと推測される。201は底径が小さく、体部の立ち上がりが急で碗型の器形であり、12世紀前半代のかわらけの可能性が高い。205は底径が大きく明らかに12世紀後半の器形を呈する。外底面にはすのこ痕がある。他の個体は微細な破片で全体の器形を判別し難いが、ほとんどは皿型の器形と推測され、12世紀後半に属する可能性が高い。212の底面にもすのこ痕が認められる。胎土は201のみに金雲母が混入し、他と異なっている。他の個体は胎土に砂と海綿状骨針が混入し、北上川対岸の平泉拠点地区で出土するロクロかわらけの胎土と共通する。

2 手づくねかわらけ（第66図、写真図版80）

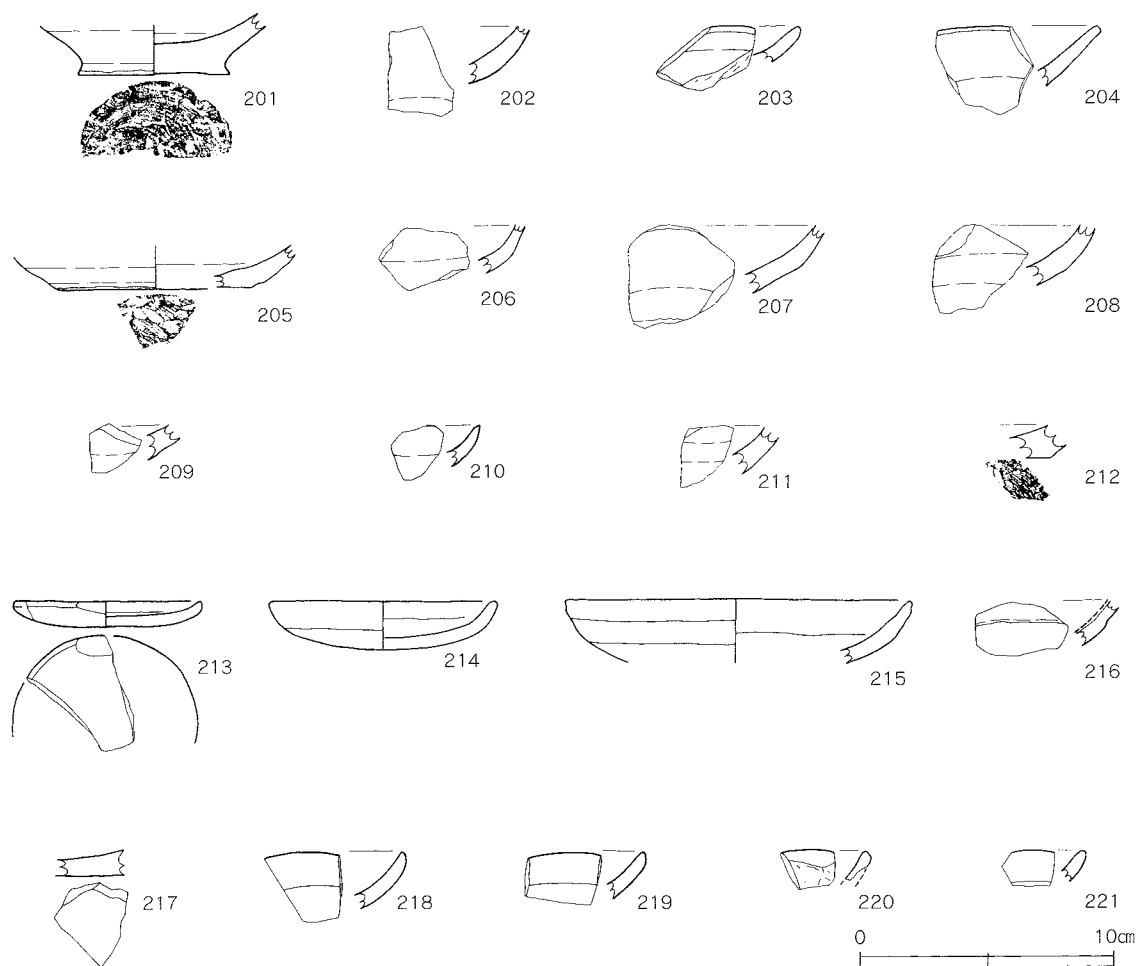
手づくねかわらけは9点（213～221）出土した。出土した全点を図示している。細片のため判別が難しい個体もあるが、小型が2点（213、214）、大型が7点（215～221）と判断した。213は1段ナデが施されるが、途中でナデの幅が極端に細くなっている。内面には指ナデが顕著にみられる。214は遺存度40%ほどの個体で、今回の調査で出土したかわらけでは最も遺存度が高い個体である。口縁部は1段ナデ面取りなしで、底面にはすのこ痕がある。215は大型かわらけで、口縁部は2段ナデ面取りなしである。口径を推測できる唯一の大型手づくねかわらけの個体で、推測口径は13.7cmである。216は内面が剥離しており、厚さが不明である。217は底面の破片である。218は口縁部1段ナデ面取りなしである。219は器面が荒れており、手づくねかロクロか判断に苦しんだが、胎土と口縁端部の形状から手づくねかわらけと判別した。おそらく1段ナデ面取りなしである。220、221は小破片のためナデの単位を読み取れない。

これらの手づくねかわらけの年代は、平泉拠点地区における手づくねかわらけの年代観照らし合わせて、12世紀後半のものと判断される。

3 常滑産陶器（第67～68図、写真図版80）

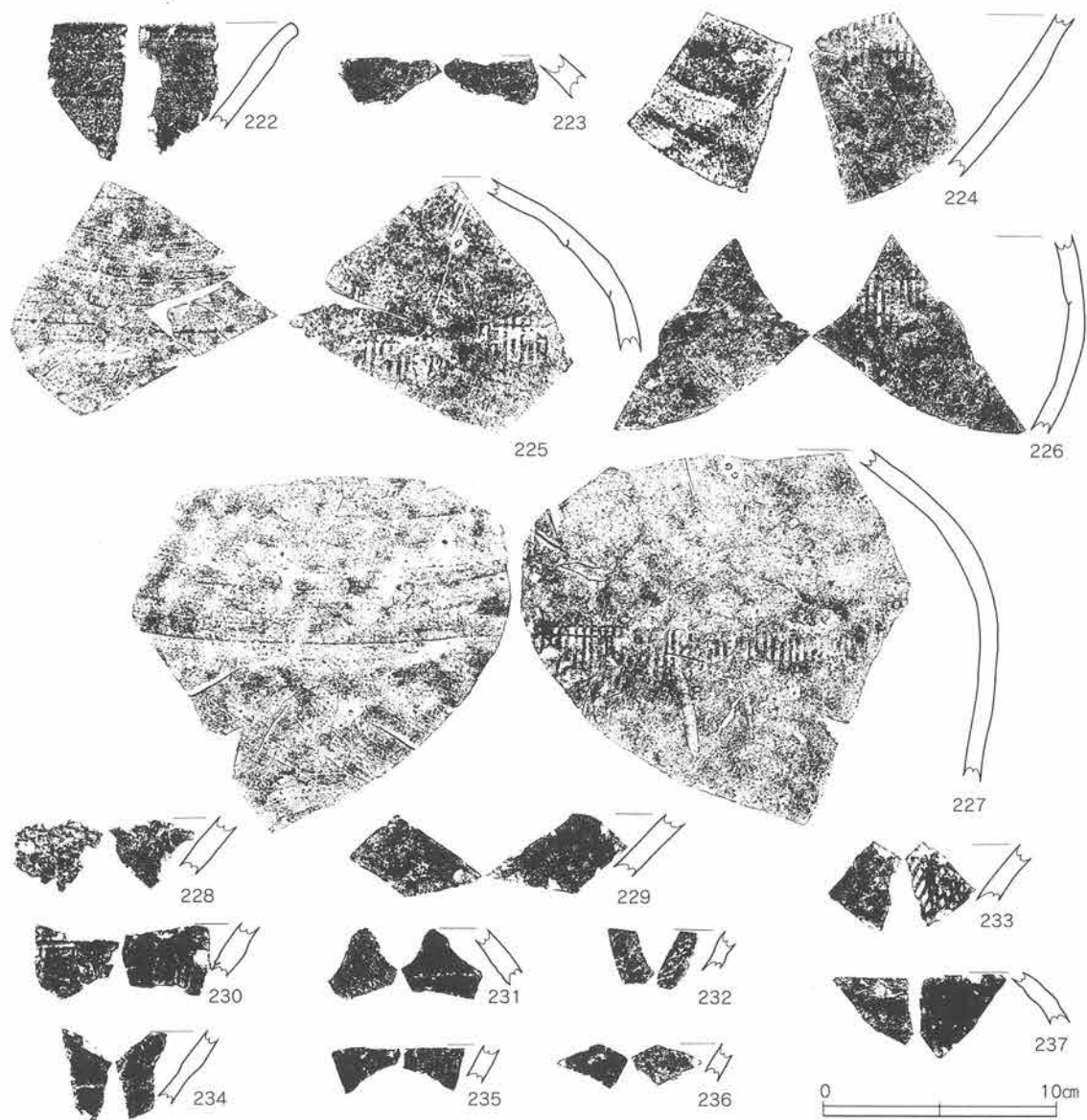
常滑産陶器は片口鉢1点（222）、甕17点（223～239）、広口壺8点（240～247）が出土した。出土した全点を図示した。これらには同一個体の破片が含まれると推測され、確実な個体数は判断できない。

222は片口鉢口縁部の破片である。口唇部の面取りは明瞭では無く端部は丸みを帯びる。内面には自然釉が付着している。223～229の甕は同一個体の破片と推測される。これらは調査区の北側で出土したが、個々の出土位置はあちこちに散在する状態であり、12世紀の原位置からは、かなり動いていると推測される。薄手の造りで押印が帯状に施されている。230～236の甕は同一個体と推測される。押印が認められる破片（230、233）があり甕と判断できる。調査区の南側の様々な地点から出土し、いずれの破片も細かく原位置を大きく移動していると推測される。231の内面には沈線状の筋が認められるが意図的なものかどうか判断できない。内面には自然釉、外面には垂下する自然釉がみられる破片が多い。237、238の甕は同一個体と推測される。237に押印が認められ甕と判断できる。どちらの破片も外面に自然釉がかかる。239の破片には



番号	出土位置	種類	法量 (cm)			内面 ナデ	外底 (すのこ痕)	遺存度 (%)	胎土	その他
			口径	高さ	底径					
201	SK15埋土	ロクロ大	-	(2.1)	6.1	ロクロナデ	あり	20	金雲母	橙色を呈する
202	SK15埋土	"	-	(2.3)	-	"	不明	5	砂粒	黄褐色を呈する
203	SK7埋土	"	-	(1.3)	-	"	欠損	5	骨針	黄褐～褐灰色を呈する
204	SK15埋土	"	-	(2.3)	-	"	欠損	5	砂粒、骨針	褐灰色を呈する
205	P66埋土 (SB1)	"	-	(1.7)	7.8	"	あり	5	砂粒	橙色を呈する
206	SK15埋土	"	-	(1.9)	-	"	欠損	5	砂粒、骨針	褐灰色を呈する
207	SK15埋土	"	-	(2.7)	-	"	"	5	"	赤褐色を呈する 摩耗著しい
208	SK15埋土	"	-	(2.4)	-	"	"	"	"	褐灰色を呈する
209	SK15埋土	"	-	(1.3)	-	"	"	3	"	赤褐色を呈する
210	SK27埋土	"	-	(1.6)	-	"	"	"	"	褐灰色を呈する
211	SK15埋土	"	-	(1.9)	-	"	"	"	"	赤褐色を呈する
212	SK15埋土	"	-	(1.3)	-	"	あり	"	"	橙色を呈する
213	SEI周辺	手づくね小	7.5	1.0	-	指ナデ	あり	20	細砂少量	1段ナデ面取なし (D3類)
214	22e検出時	"	8.9	2.0	-	"	あり	40	細砂多量	"
215	SEI周辺	手づくね大	13.7	(2.6)	-	"	欠損	5	細砂少量	2段ナデ面取なし (C3類)
216	SK35埋土	"	-	(1.8)	-	剥落	"	3	"	1段ナデか
217	SK27埋土	"	-	(1.1)	-	不明	不明	3	"	底部の破片
218	SK15埋土	"	-	(2.3)	-	指ナデ	欠損	3	"	1段ナデ面取なし (D3類)
219	表採 (7b)	"	-	(1.8)	-	不明	欠損	3	細砂多量	摩耗著しい ロクロの可能性もある
220	SK15埋土	"	-	(1.2)	-	指ナデ?	"	"	細砂少量	ナデの単位不明
221	SEI周辺	"	-	(1.2)	-	指ナデ	"	"	"	1段ナデか

第66図 12世紀のかわらけ



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
222	常滑	片口鉢	口縁部	SK15埋土	12C	灰白色	
223	"	甕	体部上半	SD10埋土	"	灰白色	223~229同一個体
224	"	"	体部下半	北側粗掘	"	にぶい黄褐色	
225	"	"	体部上半	北側粗掘	"	暗褐色	
226	"	"	体部	北側粗掘	"	暗赤褐色	
227	"	"	体部上半	北側粗掘	"	にぶい黄褐色	
228	"	"	体部下半	5m検出時	"	にぶい赤褐色	
229	"	"	"	5m検出時	"	にぶい褐色	
230	"	"	"	SE1周辺	"	黒褐色	230~236同一個体
231	"	"	体部上半	20c検出時	"	灰オリーブ色	
232	"	"	体部下半	23b検出時	"	黒褐色	
233	"	"	"	表採	"	黒褐色	
234	"	"	"	SD4埋土	"	黒褐色	
235	"	"	"	SK27埋土	"	灰白色	
236	"	"	"	SD1埋土	"	灰白色	
237	"	"	体部上半	SE1周辺	"	灰オリーブ色	237、238同一個体

第67図 12世紀の国産陶器①

押印がないが、甕と推測した。外面は近世陶器の鉄釉のような色調、質感を呈するが、胎土と内面の釉調から12世紀の常滑産陶器と判断した。240は広口壺の頸～首部の破片と推測される。胎土が渥美産陶器にも似ており判断が難しいが、一応常滑産陶器に分類した。242は押印が無く、また破片のカーブの具合から広口壺と推測した。外面に自然釉がかかる。241、243～247は断定する根拠はないが広口壺の破片と推測した。246と247は胎土が類似し同一個体の可能性がある。

これらの常滑産陶器は細片が多く、また口縁部破片も少なく詳細な時期を論じるのは難しい。出土した破片の厚さ、形状、質感と供伴したかわらけの年代観を考え合わせて、12世紀後半という年代が妥当であろう。赤羽・中野生産地編年(中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館)に当てはめれば、2～3型式と想定される。

4 渥美産陶器 (第68図、写真図版80)

渥美産陶器は甕4点を図示した。これが出土した全点である。これらは同一個体の破片で、出土した渥美産陶器の個体数は1個体ということになる。248、249は上半部の破片で、外面にオリーブ色の釉がかかる。またどちらの破片にも押印が施されている。250は下半部、251は体部中央部の破片である。どちらの破片にも押印が施される。胎土は4点ともに共通しており、灰色で堅緻な焼成である。詳細な時期は不明であるが、かわらけ、常滑産陶器の年代観から推測して、12世紀後半代の可能性が高い。

5 中国産白磁壺 (第68図、写真図版80)

12世紀の中国産磁器は白磁壺1点(252)のみが出土した。化粧土は認められず、大宰府分類Ⅲ系の壺である。内面にも施釉されている。器種は微細片のため断定できないが白磁四耳壺と推測される。外面には細かい擦痕状の傷がある。胎土はつやの無い白色を呈し黒い粒が混じる。時期は12世紀後半と推測される。今回の調査で出土した12世紀の中国産白磁は、この微細な破片1点のみであるが、12世紀の下構遺跡の住人が中国産磁器を所有することを示しており、意義深い遺物といえる。

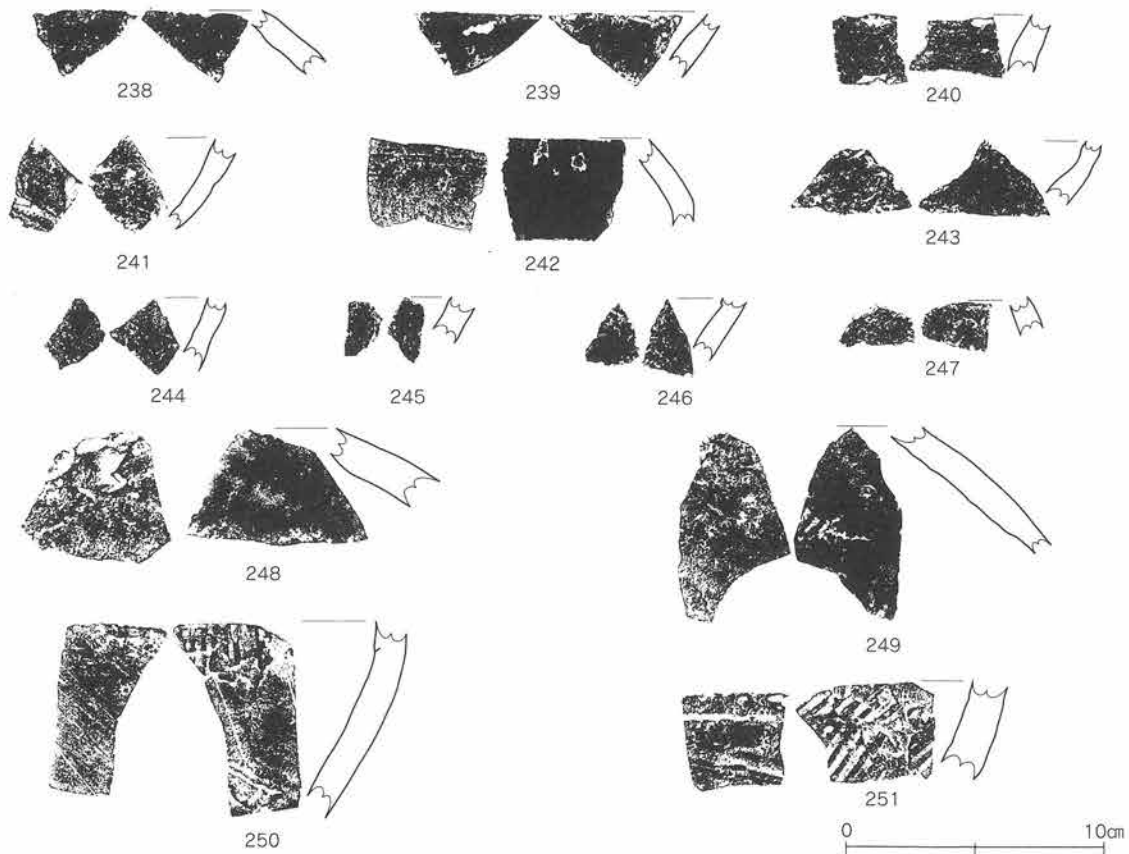
第4節 中世の遺物

中世の遺物は古瀬戸片が1点(253)のみ出土している。他に永楽通寶が2枚出土しているが、これは近世下構屋敷に伴う遺物と考え、ここでは扱わない。

1 古瀬戸四耳壺? (第68図、写真図版80)

古瀬戸の破片が1点(253)出土している。壺の体部破片と推測され、外面には緑色の灰釉が施され、内面は無釉である。胎土は灰色で、硬いがやや粗い感じのものである。(財)瀬戸市埋蔵文化財センター藤沢良祐氏に実見していただいたところ、古瀬戸であるのは確実であり、器種はおそらく四耳壺、時器は古瀬戸編年の中期で14世紀前半とのご教示を得た。

下構遺跡の調査では中世に属する遺物はこの1点のみであり、また中世に属する根拠のある遺構は皆無である。よって、この古瀬戸は近隣地域からの混入品の可能性が高い。この古瀬戸片は調査区内の南東隅付近からの出土である。よって調査区南側の土取りされた部分に当該期の遺構があった可能性もある。当地域では古瀬戸の出土、特に中期以前の事例が少ない状況である。混入品とはいえ貴重な資料と言える。



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
238	常滑	甕	体部上半	SK1埋土	12C	にぶい黄褐色	237と同一個体
239	"	"	体部下半	SD4埋土	"	にぶい赤褐色	
240	"	広口壺	頸部	表採	"	黒褐色	
241	"	広口壺?	体部下半	SK15埋土	"	灰黄色	
242	"	広口壺	体部上半	SK7埋土	"	オリーブ色	
243	"	"	体部下半	SK7埋土	"	灰色	
244	"	"	"	北側粗掘	"	灰白色	
245	"	"	"	SK7埋土	"	オリーブ色	
246	"	"	"	カクラン	"	黒色	
247	"	"	"	SK15埋土	"	黒褐色	
248	渥美	"	体部上半	SK7埋土	"	灰オリーブ色	248~251同一個体
249	"	"	"	P67掘方 (SB3)	"	オリーブ黄色	
250	"	"	体部下半	SK15埋土	"	灰白色	
251	"	"	"	SK27埋土	"	灰色	



番号	種類	出土位置	その他		
252	白磁壺	SE1周辺	大宰府分類Ⅲ系	白磁四耳壺の体部片か	12C後半



番号	種類	出土位置	その他		
253	古瀬戸壺	30b検出時	四耳壺か	古瀬戸中期 (14C前半)	外面灰釉 (緑色) 胎土灰色

第68図 12世紀の国産陶器②・中国産磁器・中世の古瀬戸

第5節 近世・近代の陶器

近世～近代の「下構屋敷」に伴う陶器を示す。近世に属するか近代に属するか明確に分類できない陶器が多いので、近世と近代を一括して示すことにする。また施釉されていない素焼の火鉢などの類があるが、ここではこれらも便宜的に「陶器」と称して扱っている。

図示したのは碗(1006～1032)、小碗(1033～1041)、仏飯器(1042)、肥前産の鉢(1043～1045)、皿(1001～1005、1046～1054)、土瓶・急須・土瓶蓋(1055～1079)、土鍋(1080)、湯呑(1081～1084)、徳利・瓶(1085～1091)、香炉・火入れ・灰落し(1092～1101)、瓶掛(1102)、灯明皿(1103～1106)、甕・壺・切立・蓋(1107～1124)、鉢・片口鉢(1125～1139)、植木鉢(1140～1143)、餌入れ(1144)、播鉢(1145～1186)、ほうろく(1187～1202)、素焼製品(1203～1209)で、合計209点である。なお、図示していない近世～近代の陶磁器は総計で7.3kgある。

1 碗(第69、70図、写真図版80、81)

1006～1010は肥前産の「呉器手碗」である。内外面、高台内部に透明釉が施される。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1013は肥前産の陶胎染付碗である。胎土は暗灰色を呈する。2破片に分かれるが同一個体と判断した。17世紀後半～18世紀前半のものである。1014、1015は瀬戸・美濃産の腰錆碗である。外面下半、高台内は鉄釉、外面口縁部、内面には灰釉が施される。1014は外面の灰釉と鉄釉の境界部分に無釉の部分が生じている。

1016～1028は大堀相馬産の碗である。1016～1019は外面下半、高台内が鉄釉、外面口縁部、内面は灰釉が施される。灰釉は緑色の透明性ある釉である。1016、1017は丸碗であるが、1018は器形が異なる。1019は大型の丸碗と推測される。時期は18世紀代と推測される。1020は体部に屈曲のある碗である。2破片に分かれるが同一個体と判断した。灰釉の下地に黒色の鉄釉が流し掛けられている。時期は特定できないが、灰釉は透明性があるものであり、18世紀代と推測される。1021、1022は灰釉の丸碗と推測される。高台は露胎で、18世紀代と推測される。1023はやや小振りの灰釉碗である。腰部に弱い屈曲がある。灰釉は透明性があり緑色を呈する。同一の形状の碗が、図示したものをに入れて最低8個体分出土している。1024は腰部がやや屈曲する碗である。同様の器形の1026よりもやや大振りである。透明性のある緑色の灰釉が施される。1025は腰部がやや屈曲する碗である。1024、1026よりも小振りである。透明性のある灰釉が施され、漆継ぎが行われている。1026は腰部がやや屈曲する碗である。灰釉は透明性があるが黄色がかっている。高台部は露胎である。図示した個体を含め、同様のものが最低4個体分出土している。1023～1026は灰釉の特長から18世紀代と推測される。1027、1028は失透性の藁灰釉(または粉殻灰釉の可能性も高いが、便宜的に藁灰釉とのみ称する)が施されている。どちらも高台部は露胎である。1028は図示したものを含め、同一の形状のものが最低5個体ある。これらの中には漆継ぎがおこなわれたものがある。

1029は京・信楽系の「京焼」と推測される。透明釉が施され、高台部は露胎である。出土した破片には上絵付けは存在しない。時期は判断が難しいが19世紀前半頃としておく。1030は瀬戸美濃産の小振りの碗である。灰釉が施される。胎土は灰色である。同一のものが図示したものを含め3個体出土している。1031は外面下半に刻みがある「鎧手」の碗である。外面口縁部と内面には黒色の鉄釉が施され、外面下半は無釉である。胎土は堅緻な灰白色である。産地は何処か判断できない。時期は19世紀前半?としたが、近代以降の可能性も高い。1032は瀬戸・美濃産の陶胎染付碗である。器形は「広東碗」である。図示したものを含め2個体分出土している。

2 小碗・仏飯器（第70図、写真図版81）

器高3.1 cm以下の碗を小碗として示した。9個体（1033～1041）を図示した。いずれも大堀相馬産で、失透性の藁灰釉が施されている。高台部は露胎である。時期は19世紀前半頃と推測される。1033の内面には酸化鉄分が付着しており、紅皿として使用された可能性を示している。

1042は仏飯器である。脚部を欠損する。大堀相馬産で、緑色の透明性のある灰釉が施される。時期は18世紀代と推測される。図示した個体を含め、同一のものが2個体出土している。

3 肥前産の鉢（第71図、写真図版81）

肥前産の鉢が3点（1043～1045）出土した。1043は「三島手」の鉢である。内面は線刻、刻印の中に白化粧を象嵌し、その上から透明釉を施している。外面は透明釉の上に鉄釉を流し掛け、高台部は露胎である。見込には目の痕跡がある。時期は17世紀後半～18世紀前半と推測される。1044は体部下半の破片である。内面に白化粧による刷毛目文様が施され、緑釉が流し掛けられる。外面は無釉で、胎土は赤褐色を呈する。1045は体部下半の破片である。内面には白化粧が施され、わずかであるが緑釉の飛沫がみられる。外面は無釉で胎土は灰色を呈する。

4 皿（第69、72図、写真図版80、82）

1001～1004は肥前産の皿である。1001は底部が基筈底状を呈する。胎土は黄橙色で見込には胎土目がみられる。時期は16世紀末のものである。1002は暗赤褐色の胎土でオリーブ色の釉が施される。見込には目痕がない。1003は口縁部、1004は体部下半の皿である。どちらも胎土は暗灰色である。1002～1004の皿は16世紀末～17世紀初頭の時期と推測される。

1005は美濃産の志野皿の口縁部破片である。内外面に厚く白濁した長石釉が施される。胎土は黄橙色でぼそぼそしている。時期は16世紀末～17世紀初頭と推測される。

1046は瀬戸・美濃産の皿である。内外面は灰釉で内面には銅緑釉が流し掛けられる。内面にはわずかながらひだが認められ、「菊皿」と判断できる。時期は17世紀後半と推測される。1047は肥前産の皿である。体部が屈曲する器形で、見込は蛇の目釉剥ぎである。内面は銅緑釉、外面下半は透明釉、上半は銅緑釉が施される。時期は17世紀後半～18世紀前半と推測される。

1048～1050は大堀相馬産の皿である。1048、1049は輪花の皿で、見込に七曜文の印刻が施される。釉薬はどちらも緑色の透明性のある灰釉が施されている。1048の内面口縁屈曲部分に灰釉が厚く溜り、空色の色調を呈している。時期は18世紀代と推測される。図示した個体を含め1048は3個体分、1049も3個体分が出土している。1050は輪花の皿である。内面と外面口縁部には藁灰釉、外面下半には褐釉が施される。高台は露胎である。時期は19世紀前半と推測される。図示した個体を含め2個体分出土している。1051は瀬戸・美濃産の皿である。畳付の幅が広く、内外面に灰釉が施される。19世紀前半と推測される。1052は大堀相馬産の型おこし皿である。四角の形状で口縁部は輪花になっている。見込には蝶が2匹向い合う形で配され、見込の四隅には目痕がある。釉薬は藁灰釉が施され、高台は露胎である。高台の形状も四角である。時期は19世紀前半と推測される。

1053、1054は在産陶器の皿である。1053は黄橙色の粗い胎土、1054は灰色の精緻な胎土である。釉薬はどちらも藁灰釉が施される。1053は見込蛇の目釉剥ぎである。1053は下半部と接合しないが口縁部片が存在し、実測図上で口径、高さを合成した。時期はどちらも19世紀代と推測される。

5 土瓶、急須、土瓶蓋、土鍋（第73～75図、写真図版82、83）

1055～1057は大堀相馬産の土瓶である。1055、1056は銅緑釉が施され、内面は無釉である。1056は小破片であるが、注口部の破片で1055とは明らかに別個体である。1057は山水文の土瓶である。黒、緑、茶色で山水文を描き、その上に透明釉が掛けられる。2破片に分かれるが同一個体と判断した。1055～1057は19世紀前～中葉と推測される。

1058～1062は窯を特定できない在地産の土瓶である。時期はいずれも19世紀代と推測される。1058は胎土が暗赤褐色で、外面には暗青灰色の釉が施される。外面下半は無釉で回転ヘラケズリが施されている。そしてこの個体は陶器にもかかわらず焼継がおこなわれている。1059は外面が無釉で内面には鉄釉が施される。数破片に分かれるが、実測図上で器形を復元した。外面体部下半には回転ヘラケズリが施される。胎土は暗灰色で硬い。1060は鶴文の土瓶である。外面には深緑色の釉が施され、その上に鶴文の輪郭を筒描きで表し、その中に鉄釉と白色の釉を用いて鶴を表している。底部～内面は無釉で、浅橙色を呈する。1061は筒描きで雷文、唐草文を描き、その上から深緑色の釉を施している。口縁部は上から見ると四角形になっており、体部も上からみると隅丸方形をなす。胎土は暗灰色で緻密である。同一個体の蓋も同じ番号で示している。蓋には筒描きの雷文とつまみがある。胎土、釉薬は共通である。1062は幾つかの破片の状態で出土した。外面には鉄絵が描かれ、その上に透明釉が施される。胎土は褐灰色で緻密である。蓋はつまみ部分が欠損している。施文、胎土は共通である。

1063、1064は大堀相馬産の可能性が高い土瓶である。1063は鉄絵に透明釉で、体部に横走る多条の沈線が施される。1064は藁灰釉が施されている。1063の胎土は黄橙色、1064は灰色を呈している。時期は19世紀代と推測される。1065、1066、1069は大堀相馬産の土瓶である。1065、1066は注口部、1069は底部の破片である。1065、1069は藁灰釉、1066は灰釉が施される。1065は1069と同一個体の可能性もあるが、確定する根拠は無く、別個体として示した。時期は19世紀代と推測される。1067、1069は窯を特定できない在地産の土瓶である。1067は口縁部破片で鉄絵の上に透明釉が施される。胎土は灰色で、類似する鉄絵が施される1062とは異なっている。1068は底部の破片で、内外面に鉄釉が施される。底辺部に釘状の粘土貼り付けがある。

1070は窯を特定できない在地産の急須と推測される。薄手の造りで下半部は鉄釉、上半部は白化粧が施され、その上に青色で染付がなされている。この個体は底部の形状から急須と推測した。時期は不詳であるが、一応19世紀代と推測する。1071は大堀相馬産の急須である。銅緑釉が施されている。把手は欠損しているが、その付根が残存しており急須と判別できる。19世紀代のものである。1072は無釉の急須である。胎土は灰色で表面は暗赤灰色を呈する。把手には透かしが施され、渦巻き状の装飾も付く。体部には印刻があり、上半部が欠損するが、「□日本□□製」の文字が読める。時期は近代以降と推測され、19世紀後半から、下構屋敷廃絶の1930年頃としておく。1073、1074は産地不明の鉄絵が施される急須である。どちらも近代以降のものと推測される。1074は胎土が白色で、陶器とすべきか磁器とすべきか判断が難しい。

1075～1079は土瓶または急須の蓋である。観察表中では便宜上「土瓶蓋」とのみ記述している。1075、1076は大堀相馬産の可能性が高い蓋である。1075は筒描きで文様を描き、その内部に鉄釉を施している。1076は灰釉に褐釉を流し掛けている。どちらもつまみ部分は欠損している。1077～1079は産地不明の蓋である。いずれも近代以降の可能性が高い。1077は鉄絵の上に透明釉、1078は透明釉の上に上絵付けが施される。1079は素焼きの上に上絵付けが施される。胎土は暗赤褐色である。1079は急須の蓋の可能性が高い。

1080は土鍋である。大堀相馬産の可能性が高い。外面上半と内面口縁部に灰釉が施され、外面の前後に把手が付く。外面下半部には煤が付着している。時期は19世紀代の可能性が高い。

6 湯呑 (第75図、写真図版83)

1081～1084は湯呑である。1081は産地不明の湯呑で、鉄絵で植物が描かれ、その上に透明釉薬が施される。さらに上絵付で、「口拝記念」「大正乙丑年」「佐藤伊勢吉」の文字がある。大正年間で「乙丑(きのとうし)」は大正14年(1925)が相当する。佐藤伊勢吉は下構佐藤家の人で、1889年生まれ、1956年に67歳で亡くなっている。大正14年には26歳頃である。欠損のため不明であるが、大正14年に何処かへ参拝し、その記念に製作した湯呑と判断できる。

1082は産地不明の湯呑である。近代以降のものと推測される。外面に鉄釉を施し、その上に緑、赤?で上絵付けがなされている。内面には白色の釉が施されている。高台内部は無釉である。

1083は2破片から器形を想定しており、その形状から湯呑と推測した。外面には櫛状の工具で縦位の多条の沈線が施され、内面と外面口縁部には黒色の鉄釉、外面体部には褐釉が施される。またこの個体は漆継ぎがおこなわれている。産地は不明で、時期も判じ難いが、出土したSK15の年代観から19世紀代のものと推測される。

1084は大堀相馬産の湯呑である。器形に捻りが入っており「雅手」の湯呑である。外面と見込に藍色で駒絵が描かれ、その上から透明釉が施されている。高台内部は露胎である。胎土は灰色で黒い粒が多量に混じる。この黒い粒は器面では茶色に発色し、それ自体が文様効果となっている。時期は近代以降と推測される。

7 徳利、瓶 (第76図、写真図版83、84)

1085は瀬戸・美濃産の徳利である。外面には褐釉が施されている。胎土は淡黄色で粗く硬い。内面と高台部は無釉である。18世紀後半頃の時期と想定される。

1086は大堀相馬産の「すず徳利」である。外面には藁灰釉が施され、内面と高台部分は無釉である。非常に薄手の造りである。時期は19世紀代と想定される。底面には意図的か否か判断できないが、中央に穿孔がある。植木鉢に転用されたのであろうか。

1087は窯を特定できない在地産の「すず徳利」である。外面には白化粧がなされ、その上に染付がおこなわれている。内面は無釉で、胎土は赤褐色を呈する。時期は19世紀と想定される。

1088は大堀相馬産の可能性が高い瓶である。胎土は灰色で外面に藁灰釉が施される。時期は19世紀と想定される。

1089は産地不明の花瓶である。脚部と口縁部を欠損している。内外面に黒色の鉄釉が施される。この鉄釉は非常に光沢を持った色調を呈する。胎土は精緻な灰白色である。時期は判じ難いが19世紀以降のものと推測される。

1090は大堀相馬産の爛徳利である。銅緑釉、褐釉で葡萄文が描かれ、上に透明釉が施される。葡萄文の釉の発色が悪く文様がぼやけている。底面と内面の体部は無釉である。時期は19世紀と想定される。

1091は窯を特定できない在地産の爛徳利である。外面、内面口縁部に茶色の鉄釉が施される。底面にも豊付きを除いて釉が施される。胎土は灰色の緻密なものである。外面には文字が書かれている。「かん古々登かけて 目の薬ととく 古々路盤 あらまし吾 湯せんて用也」と読める。解説は当埋文センター文化財調

査員阿部真澄がおこなった。意味は判じ難いが、「かん古々」というのはこの爛徳利を指すと思われる。「かんここ」と読むのであろうか。「登」は平仮名の「と」の当て字と思われる。「目の葉」とは鼻葉と同様に「わいろ」の意味があるという。「古々路盤」は「こころは」と読むのであろう。「あらまし吾」は「あらましは」と読むと思われる。文の全体は「かんここ（爛徳利）は目の葉（わいろ）と解く、こころは、あらましは、湯せんで用いる也」という謎かけと思われる。「湯せん」が「目の葉」の何にかけられているのか判断できない。想像をたくましく述べると、「湯せん」を「輪船」と解すれば、大正3年に世を震撼させ、山本内閣の総辞職を引き起こした贈収賄事件「シーメンス事件」を指しているのではないだろうか。シーメンス事件は海軍の幹部がドイツのジーメンス商会から、軍艦、機関の輸入に際して賄賂をとったという疑獄事件である。調査の結果ジーメンス商会ばかりではなく、イギリスのヴィッカーズ社からも巡洋艦を注文した際の収賄も明らかになり、事件は一大政治問題に発展した。倒閣と海軍粛清の追及は議会のみならず、国民運動に発展し、数万の群集と警察、憲兵が衝突している。この事件の軍艦輸入を「輪船」、「湯せん」とかけ合わせたと考えるのである。このように、この徳利に描かれた謎かけがシーメンス事件を題材にしているのであれば、製作年代は、大正3年（1914）ということになる。しかし、これが確実にシーメンス事件を題材にしているのかは確証がなく、他の解釈の追及も必要である。

8 香炉、火入れ、灰落とし、瓶掛（第77図、写真図版84）

香炉と火入れの区分は厳密におこなっていない。1092、1093は瀬戸・美濃産の香炉である。どちらも褐釉が施される。内面は、1092は口縁部のみ施釉で以下は無釉、1093は施釉されている。1092の足の単位は3つと推測される。1093は体部に多条の横走沈線が施される。どちらも時期は18世紀代と推測される。

1094～1096は大堀相馬産の火入れである。1094は内面無釉で、外面には緑色の透明性のある灰釉が施される。1095は外面と内面口縁部に褐釉が施され、内面体部は無釉である。この個体は漆継がおこなわれている。1096は外面と内面口縁部に銅緑釉が施されている。内面体部は無釉である。時期は19世紀代と推測される。

1097、1098、1099は窯を特定できない在地産の火入れである。1097、1098は足が付き、器種は香炉とすべきかもしれないが、香炉と火入れの判別の基準を理解しておらず、ここでは火入れとする。1097は内外面鉄釉が施され、底部に足が付く。足の単位は3つと推測される。1098は無釉の焼締め陶器である。2破片から実測図上で器形を推定した。底部に足が付くが3単位と推測される。1099は内外面に鉄釉が施され、外面口縁部と内面口縁部の一部に褐釉が流し掛けられている。1097～1099の年代は19世紀と推測される。

1100、1101は窯を特定できない在地産の灰落としとしてである。どちらも内外面に空色の釉（藁灰釉？）が施される。時期は19世紀代と推測される。

1102は瀬戸・美濃産の瓶掛である。「瓶掛」は土瓶、鉄瓶を掛ける火鉢の意味で、瀬戸・美濃の窯場での用語である。出土した破片は瓶掛に装飾として施される「獅嘯」の部分である。釉葉は銅緑釉が施され、内面にも一部には掛かっている。時期は19世紀前半と推測される。

9 灯明皿（第77図、写真図版84）

1103は素焼きの皿で、油煙の付着から灯明皿として使用されたと判断される。内外面にはロクロ目がみられ、底面は回転系切りである。表面の色調は橙色を呈する。類似する形態のかわらけは中尊寺金色院で出

土しており、その年代観を考え合わせて18～19世紀の年代が推測される。

1104は大堀相馬産の可能性が高い灯明皿である。内面と外面口縁部に褐釉が施される。また、内面の灯芯支え部分は無釉で、先端には油煙が付着している。時期は19世紀代と推測される。図示したものを含め同一のものが2個体出土している。

1105、1106は窯を特定できない在地産の灯明皿である。どちらも内面、外面、底面、灯芯支え部分に鉄釉が施される。1105の底面には靱殻の痕跡が付着している。時期は19世紀代と推測される。1105は図示したものを含め同一のものが4個体分出土している。

10 甕、壺、切立、蓋（第77～80図、写真図版85～87）

1107～1118は窯を特定できない在地産の甕である。時期はいずれも19世紀代と推測される。

1107～1110は極小型の甕である。釉葉は1108が内外面鉄釉であるが、1107、1109、1110は内外面鉄釉に白～灰色の釉を流し掛けている。1108は口径が小さく器種は壺とすべきかもしれない。1107の底面には靱殻が付着している。

1111～1113は小型の甕である。いずれも内外面鉄釉で、1111は白色、1112は空色、1113は深緑色の釉を流し掛けている。1111は薄手の造りである。1113は底面が剥離するが、辛うじて一部分が残っており、器形を復元することができた。

1114～1117は中型の甕である。1114は多数の破片から実測図上で器形を復元した。外面は光沢のある鉄釉が施され、その上に褐釉が流し掛けられている。内面は全面が外面に流し掛けられたものと同じ褐釉が施される。1115は内外面褐釉が施されている。体部の径が張り出しており、器種は壺とすべきかもしれない。1116は内外面に鉄釉が施され、褐釉が流し掛けられている。またこの個体は漆継ぎをおこなっている。1117は内外面に光沢のある鉄釉が施され、空色の釉が流し掛けられている。外面の流し掛けは二重になっており、まず体部上半に施し、その後口縁部に流し掛けた様子が読み取れる。

1118は窯を特定できない在地産の大型の甕である。内外面に暗赤褐色の鉄釉が施され、外面にのみ黒色がかかった鉄釉が流し掛けられている。外底面は無釉で、僅かながら靱殻の付着痕がみられる。またこの個体の破片は1号倒木痕の埋土からも出土している。

1119は窯を特定できない在地産の切立である。切立は頸部がすぼまない筒型の器形のものをいう。時期は19世紀と推測される。内外面に褐釉が掛けられる。

1120は大型の陶器の底部である。大型の甕の底部かと考えたが、鉢の可能性も捨てきれない。窯を特定できない在地産陶器である。時期は19世紀と推測される。内外面に空色の釉葉が施される。外底面は露胎で低い高台状になっている。

1121は窯を特定できない在地産陶器の甕の底部である。内外面に褐釉葉施される。底辺部にはロクロから引き離す際に、ひっかけて、引っ張った紐の痕跡が付く。19世紀代のものと推測される。

1122は窯を特定できない在地産の壺である。2破片から実測図上で器形を復元した。外面は焼締めの素地に褐釉を流し掛け、内面は全体に褐釉が施される。底辺部には紐痕がある。時期は19世紀代と推測される。

1123は窯を特定できない在地産陶器の蓋である。釉葉は施されていない。外面は赤褐色を呈する。中心部分が欠損しているため、つまみの有無は不明である。19世紀代のものと推測される。

1124は常滑産陶器の甕である。釉葉は施されていない。時期は18世紀代のものと推測される。図示した口縁部の他に体部片が数片出土しており同一個体と推測される。体部片の中には、甕に穴が開いてしまった

部分に銅を流し込んだ補修痕がみられるものがある。銅を用いて補修するのは鍋などの「鑄掛」と共通の技法で、鑄掛屋の関与が推察される。

11 鉢、片口鉢（第81、82図、写真図版87）

1125、1126は瀬戸・美濃産の片口鉢、あるいは鉢である。どちらも共通する褐釉が施され、またどちらも漆継ぎが行われており同一個体の可能性があるが、確証はなく結論づけることはできない。1126には片口の付根部分がある。時期はどちらも18世紀代と推測される。

1127、1128は大堀相馬産の片口鉢である。1127はやや黄色がかかる灰釉が施される。意図的なものかどうか判断できないが、外底面に僅かに漆の皮膜が付着している。1128は緑色の灰釉が施され、その上に褐釉が流し掛けられている。時期はどちらも18世紀代と推測される。

1129は窯を特定できない在地産の鉢である。内外面に空色の釉（藁灰釉？）が施され、胎土は浅黄橙色で粗い。時期は19世紀代と推測される。

1130は瀬戸・美濃産の鉢と推測される。胎土の特長から瀬戸・美濃産と推測した。内外面に灰釉が施される。時期は不詳であるが19世紀代の可能性が高い。

1131は産地不明の鉢である。在地産の可能性が高い。内外面に灰釉を施し、外面には褐釉を流し掛けている。胎土はにぶい黄橙色で白い粒が多量に混じり粗い。時期は19世紀と推測されるが確証はない。

1132～1135は窯を特定できない在地産の浅めの鉢である。時期はいずれも19世紀と推測される。1132は口縁部が輪花になっており、内外面に空色の釉がかけられる。1133は褐釉が施され、外面体部下半～高台部は露胎である。1134、1135は大きさは異なるが器形は類似する。また胎土と釉薬も非常に類似し、同一の窯の製品と推測される。釉薬は空色と緑色がまだらに混じり合ったものである。1134の見込には5単位の目痕がある。また高台内部には円形の窯道具の痕跡があり、これらは桔梗台の痕跡と推測できる。

1136～1139は窯を特定できない在地産の鉢である。これらは身が深い器形で、出土片に片口部を有しないが片口鉢の可能性が高いものである。時期はいずれも19世紀代と推測される。1136～1138は口縁部が玉縁状になっている。またいずれも空色の釉薬が施されるが、1136のものは暗い色調で、1137と1138は明るい色調で非常に類似する。1136の見込には目痕が3個みられるが、欠損している部分も加えると5個と推測される。1137は内底面を有する破片であるが目痕が明瞭でない。1138は2破片から器形を推測した。口縁部の破片は微小で口径を推測できなかった。1139は内外面に光沢のある鉄釉が施される。見込には目痕が3つ有り、欠損部を補うと5個と推測される。桔梗台の痕跡と思われる。

12 植木鉢、餌入れ（第82図、写真図版88）

1140～1143は窯を特定できない在地産の植木鉢である。時期は19世紀代から下構屋敷廃絶の1930年頃と推測される。1140、1141は釉薬、胎土が共通する。外面と内面口縁部に銅緑釉が施される。底面に穴がある。1140は高台部に切り込みが1つある。出土している高台の円周は約50%の残存で、もう一箇所切り込みがあった可能性がある。1142、1143は外面に黒色の鉄釉薬が施される。内面、底面は無釉である。底辺部に1142は1箇所、1143は3箇所の切り込みがある。

1144は鳥の餌入れと推測される。産地は不明で在地産の可能性が高い。陶胎染付であり、胎土は灰～橙色の精緻なものである。外面には白化粧を施し染付で文様を描き、その上から透明釉を施している。内面には透明釉のみ施される。底面は無釉で布目がついている。時期は19世紀～1930年頃と推測される。

13 播鉢（第83～89図、写真図版88～94）

1145は丹波系の播鉢である。口縁部と底部の2破片から実測図上で器形を復元した。口縁部は屈曲し、卸目は細い線である。胎土は灰黄色で白い粒が多量に混じる。外面口縁部と内面に薄い鉄釉が施されている。また部分的に緑色の自然釉葉がわずかにみられる。時期は17世紀後半と推測される。内底面は使用によりかなり磨耗している。

1146～1153は瀬戸産播鉢である。胎土はいずれも淡黄色で粗く、内外面に鉄釉が施される。1146～1149は口縁部破片であるが、それぞれ別個体である。口縁部の形態からいずれも18世紀代のものと推測され、18世紀の中でも前半の可能性が高い。1150、1151は底部片で、1150の底辺部には回転ヘラケズリが施される。1152、1153は体部片である。

1154、1155は焼締め陶器の播鉢である。窯は特定できないが、遺跡近隣の在地産の製品と推測される。口縁部は折返し口縁で、卸目の上端部は整えられていない。外面底辺部には紐痕がある。1154、1155ともに内底面が使用によりかなり磨耗している。底面には回転糸切痕がある。これと同じ形状の播鉢は平泉近隣の近世遺跡では出土事例が多い。よって平泉近隣に窯が存在すると予想されるが、現在のところ特定できていない。時期は19世紀の在地産播鉢と形態が大きく異なることから、18世紀のものと考えたい。時期、産地ともになお検討を要する遺物である。

1156は肥前産と推測される播鉢である。胎土はにぶい赤褐色で、肥前産陶器の胎土に非常に類似している。内外面全面に鉄釉が施されている。卸目の上端部は整えられている。時期は18世紀代と推測される。

1157、1158は焼締め陶器の播鉢である。1154と同様、在地産陶器と推測される。胎土、表面の質感は1154とは異なる。形状から1157と1158は同一個体の可能性がある。卸目はまばらで上端部は整えられていない。時期の確証はないが、19世紀以降の在地産播鉢と形態が異なることから18世紀代のものと考えたい。

1159～1186は窯を特定できない在地産の播鉢である。時期は一部20世紀まで下る可能性があるが、ほとんどは19世紀代のものと推測される。また、ほとんどの個体は内外面鉄釉が施されている。

1159は底辺部に紐痕と「しんこ」の痕跡がある。しんこというのは埴焼（宮城県仙台市）での用語であるが、粘土に粉殻を混ぜたものを棒状にして、播鉢と播鉢の間に挟みこんで窯着を防ぐ窯道具の名称である。また1159の内底面は使用のため非常に磨耗している。

1160も内外面の底辺部に「しんこ」の痕跡がある。この個体は内底面もほとんど磨耗しておらず、使用痕が殆ど見出せない状態である。1161は内底面がやや磨耗している個体である。胎土は赤褐色である。1162は内外面底辺部に「しんこ」の痕跡を有し、口縁部を欠損する。内底面にも磨耗が全く無く、使用痕が何処にも見出せない状況である。同様に使用痕のない1160とは確実に別個体である。1163は2破片から実測図上で器形を復元した。底径が他の個体に比べて大きいのが特長的である。1164も2破片から実測図上で器形を復元した。内底面がやや磨耗する。1165は下半部の破片で内底面が磨耗している。

1166は素焼きの個体である。2破片に分かれるが実測図上で器形を復元した。内底面を含め使用痕は全く存在しない。口縁部破片には煤状のものが付着する。このように素焼きで使用痕が見出せない状況は、素直に解釈すると未製品ということになる。そして1166が未製品であれば、前述の施釉されているが使用痕のない1160、1162も未製品の可能性が出て来る。下構遺跡では窯道具が2点（2007、2008）出土している。近隣で窯業が営まれたのであろうか。

1167は口縁部を欠損する。底辺部には紐痕がある。1168は底辺部に回転ヘラケズリが施され、「しんこ」

の痕跡はない。内底面はかなり磨耗している。1169は底部の破片である。底辺部に指の痕跡が2つある。

1170は底部が蛇の目高台になっている。20世紀以降の時期の可能性が高い。1171、1173は底部の破片である。また1172は底辺部の破片である。磨耗のためはつきりしないが焼締め陶器と推測される。

1174～1186は口縁部破片である。いずれも内外面に鉄釉が施されている。1175～1177は片口部を有する。

14 ほうろく（第90、91図、写真図版94）

1187～1201は炒る調理具のほうろくである。いずれも窯を特定できないが在地産と推測される。また、時期を判別する材料に乏しいが19世紀以降のものと推測する。

1187は他よりも大型のほうろくである。底面と把手内面を除く全面に鉄釉が施されている。胎土には海綿状骨針が多量に混じる。

1188～1193は小型のほうろくである。いずれも片口と把手が付いていたと推測される。1190は素焼きであるが、他は底面を除き、透明釉が施されている。素地の色調と反応して見かけの色調は橙色を呈する。

1194～1201はほうろくの把手部分の破片である。1197、1200が素焼きで、他は透明釉が施されている。また1196～1200には縦に穴が貫通している。1197は穴がずれているため、断面に下部の穴が表れていない。また1194は欠損のため穴の有無は不明である。1195、1201には穴が無い。

1202は不明製品であるが、胎土、釉薬がほうろくと共通するのでここで述べる。下半部の破片で、底面と内面は無釉、外面は透明釉が施されている。釉薬が施された部分の外見は橙色を呈する。底面には穿孔がある。これは焼成前に施されたものである。胎土には海綿状骨針が多量に混入し、多くのほうろくと共通である。用途、製品名は不明であるが、軟質の焼成で内面が無釉であり、火に関係する器と推測される。

15 素焼き製品（第91～93図、写真図版95）

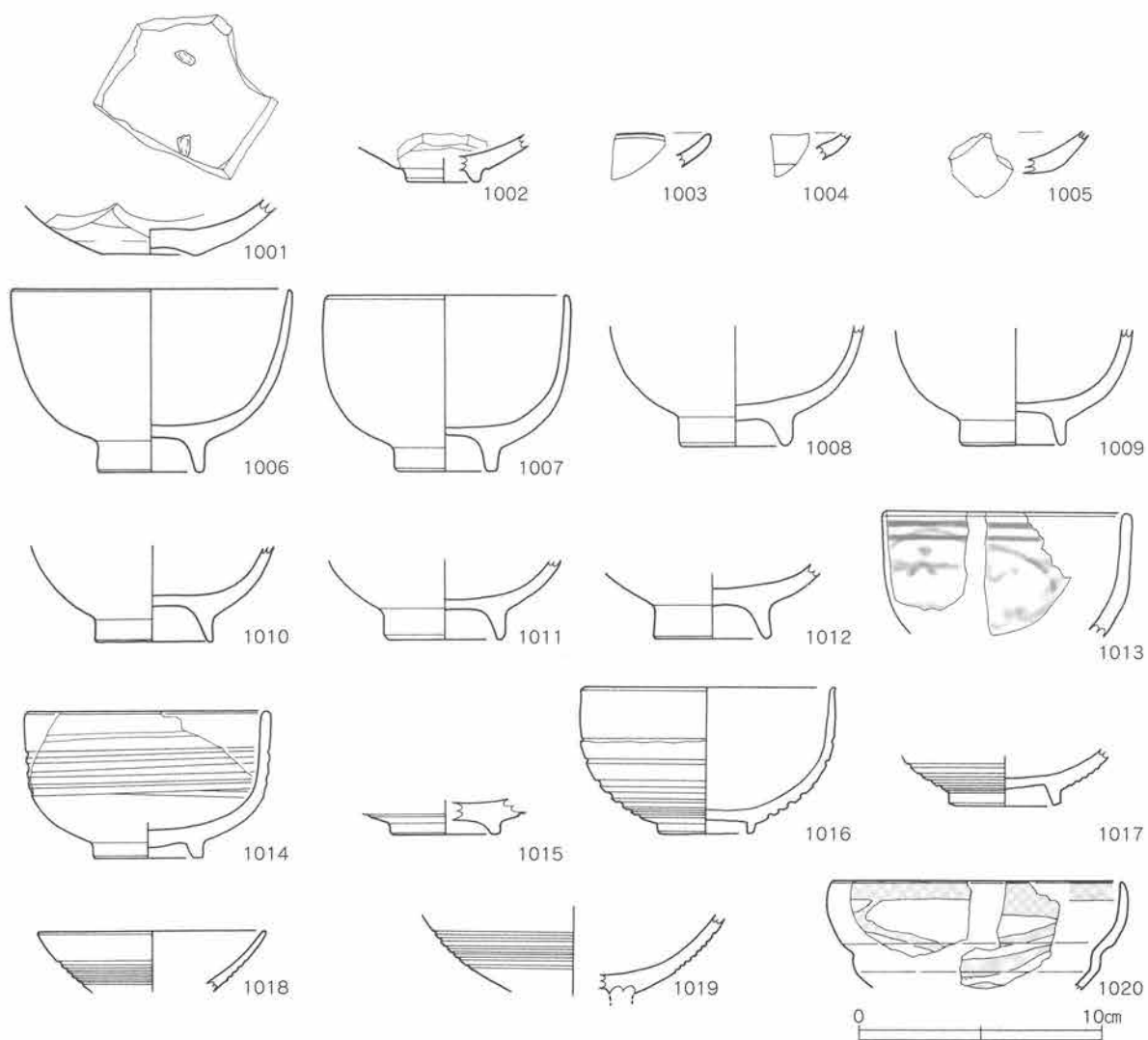
1203～1209は釉薬がほどこされない素焼き製品である。窯は特定できないが在地産と推測される。また時期を判断する材料も乏しいが、在地産の窯が多数成立するのは19世紀以降であるので、時期は19世紀以降と推測する。

1203は上部につまみの根元らしい膨らみが認められ、蓋と推測される。直径26.2cmとかなり大型で、カマドや焔炉の蓋の可能性はある。

1204は細片であるが、火消壺と推測される。外面にスタンプ状の文様が施される。図示した他に同一個体の接合しない破片が出土している。

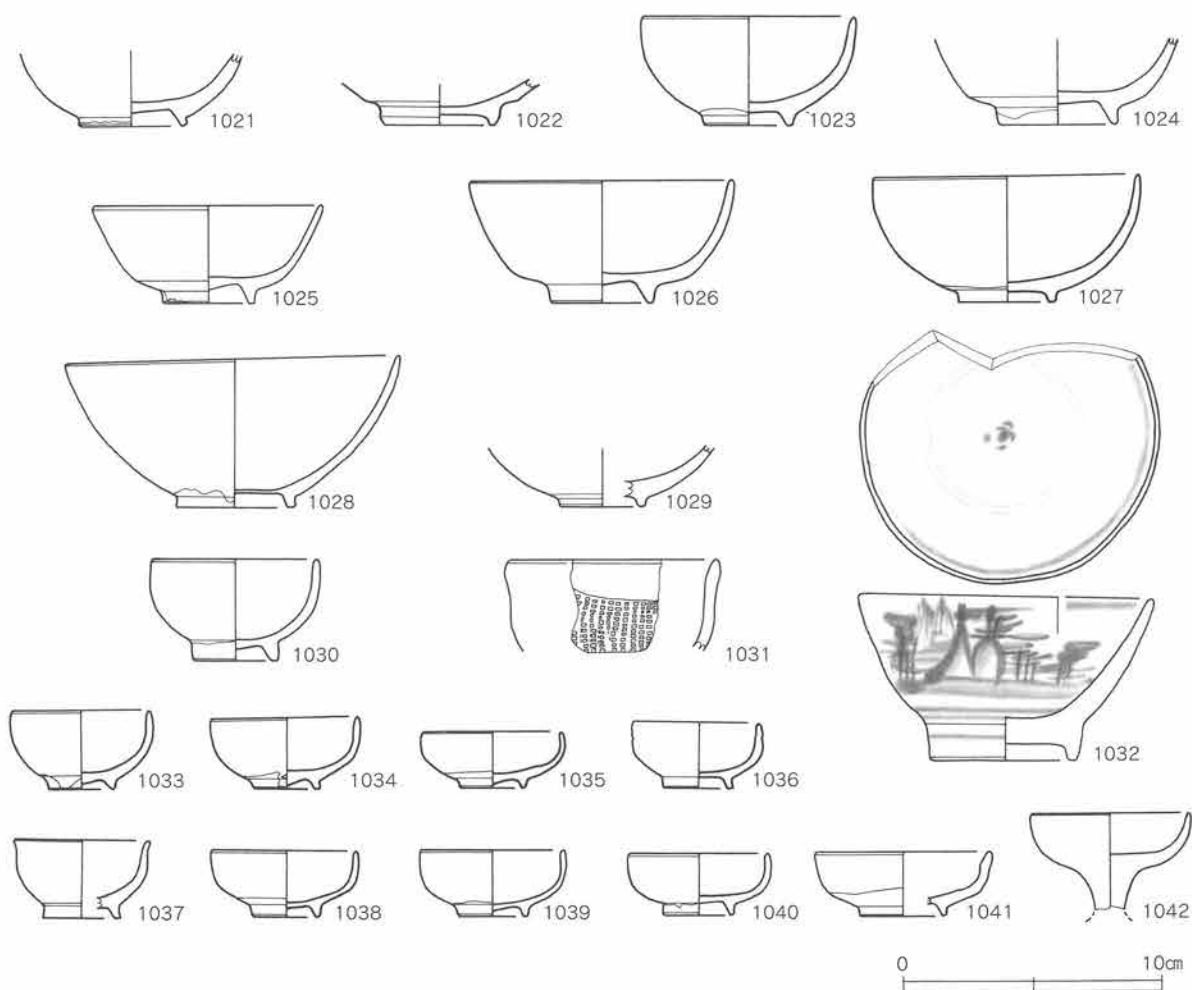
1205～1208は火鉢である。1205は口縁部外面にのみにミガキ調整が施されている。全体の色調は黒色を呈する。底部には脚が付く。欠損する部分があるが3個体と判断できる。1206は外面口唇部のみにヘラミガキが施される。全体の色調は黒～灰白色を呈する。底部は縁辺部しか残存しないが、脚が剥離した痕跡が見出せる。1207は外面と底面にヘラミガキが施されている。ヘラミガキの下地には回転ヘラケズリがみとめられる。底面には脚が付くが3個体と推測される。外面の色調は浅黄橙色を呈する。1208は頸部に隆帯が施されている。ミガキ調整は行われていない。外面の色調は黒色を呈する。

1209は焔炉の台と推測される。焔炉に大型の鍋を載せる際に、安定のため器台として焔炉の上に置かれて使用されたと推測される。また単独で、鍋敷きなどの用途も推測される。内面には突起が3単位ある。胎土は橙色で金雲母が混入している。外面の色調も橙色である。



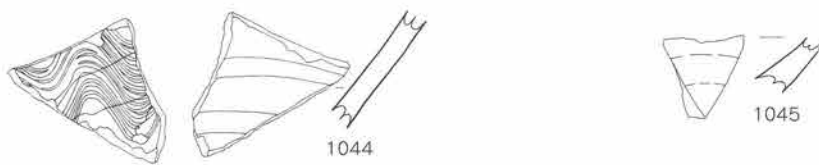
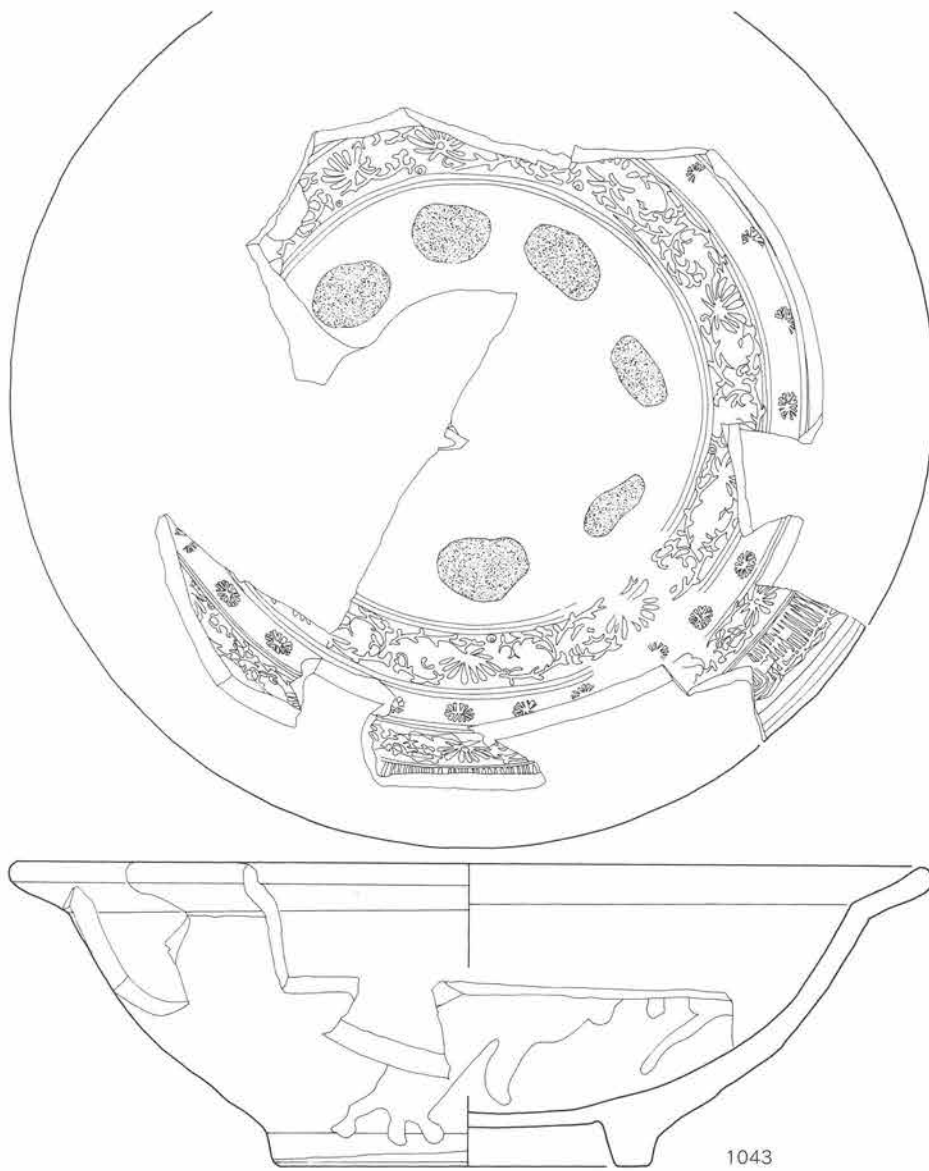
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1001	皿	表採	-	(2.1)	3.9	黄橙色	白濁した釉	肥前	16C末~17C初	胎土目唐津
1002	"	SK15埋土	-	(1.0)	3.0	暗赤褐色	オリーブ色の釉	"	"	唐津皿
1003	"	表採	-	(1.4)	-	暗灰色	白濁した釉	"	"	"
1004	"	"	-	(1.1)	-	"	オリーブ色の釉	"	"	"
1005	"	SK28埋土	-	(1.7)	-	黄橙色	長石釉	美濃	"	志野皿
1006	碗	SK3埋土 P293埋土(SB3)	11.6	7.6	4.3	黄橙色	透明釉	肥前	17C後半~18C前半	呉器手碗
1007	"	SK3埋土	9.8	7.3	4.2	"	"	"	"	"
1008	"	SK15埋土	-	(5.0)	4.2	"	"	"	"	"
1009	"	SK1埋土	-	(4.9)	4.0	"	"	"	"	"
1010	"	SK2埋土	-	(4.0)	4.7	"	"	"	"	"
1011	"	22e検出時	-	(3.3)	4.8	"	"	"	"	"
1012	"	攪乱中 (14f)	-	(2.7)	4.6	"	"	"	"	"
1013	"	2号倒木痕埋土	9.9	(5.1)	-	暗灰色	染付	"	"	陶胎染付
1014	"	"	10.2	6.1	4.6	黄橙色	灰釉・鉄釉	瀬戸・美濃	18C	腰鎗碗
1015	"	SD9埋土	-	(1.4)	4.4	"	"	"	"	"
1016	"	SK15埋土	10.4	6.1	3.8	灰白色	"	大塚相馬	"	
1017	"	SK3埋土	-	(2.4)	4.0	"	"	"	"	
1018	"	SK2埋土	9.5	(2.5)	-	"	"	"	"	
1019	"	SK1埋土	-	(3.7)	-	"	"	"	"	大型の碗
1020	"	SK3埋土・SK15埋土	12.0	(4.5)	-	"	"	"	18Cか	鉄釉流し掛

第69図 近世・近代の陶器①



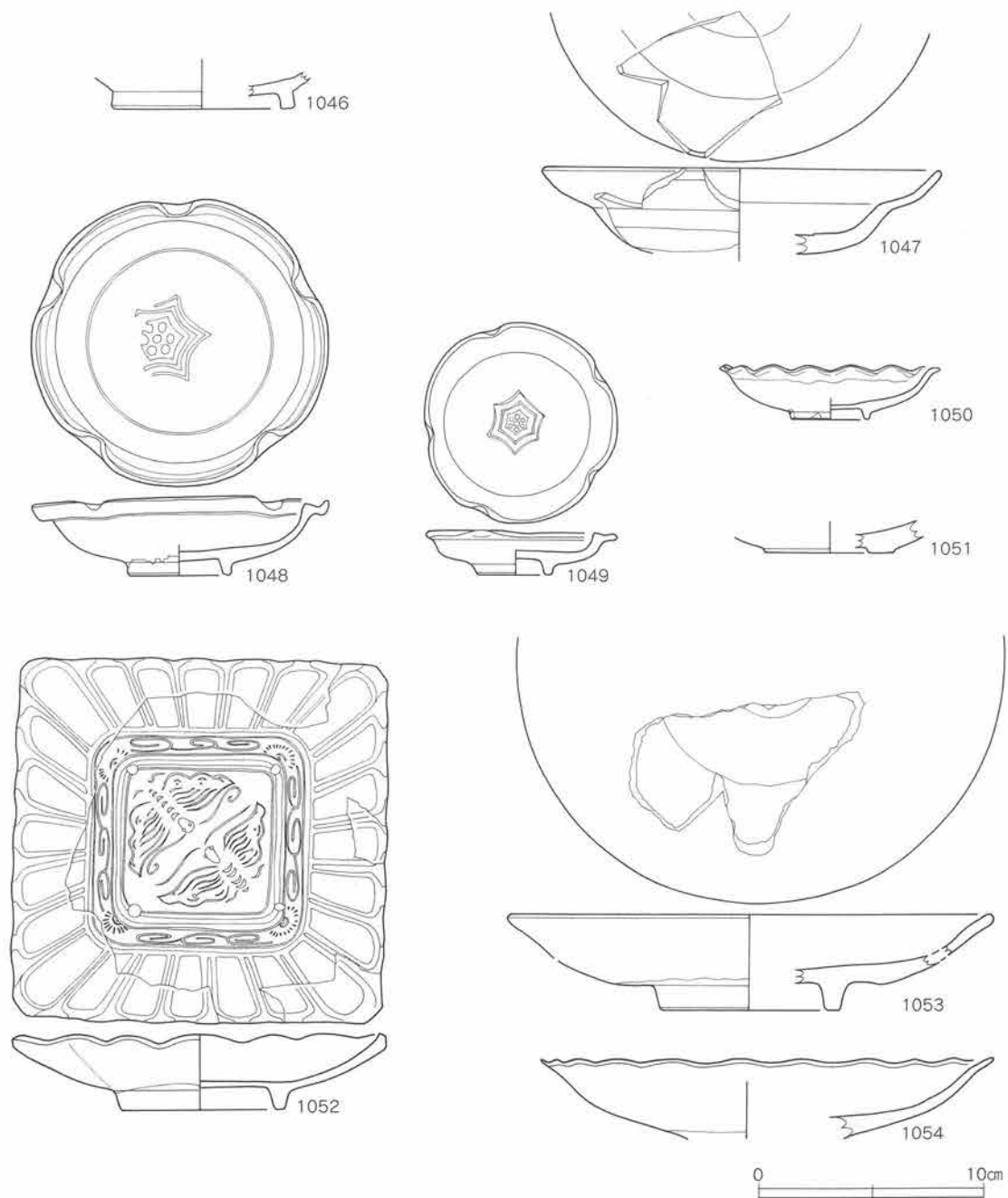
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1021	碗	SK3埋土	—	(2.9)	4.1	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	
1022	"	SK15埋	—	(1.8)	4.4	"	"	"	"	
1023	"	"	(8.4)	4.3	3.5	"	"	"	"	8個体
1024	"	SK1埋土	—	(3.4)	4.4	浅黄橙色	"	"	"	
1025	"	SK2埋土	9.0	3.9	3.6	"	"	"	"	漆継ぎ
1026	"	SK1埋土	10.3	4.8	4.0	灰白色	"	"	"	4個体
1027	"	SK4埋土	10.3	5.0	3.8	"	薬灰釉	"	19C前半	
1028	"	SK1埋土	13.0	5.8	4.6	灰色	"	"	"	5個体 漆継ぎ
1029	"	SD9埋土	—	(2.3)	3.4	浅黄橙色	透明釉	京・信楽系	19C前半?	
1030	"	20b検出時	7.4	4.0	3.4	灰色	灰釉	瀬戸・美濃	18C後半~19C前半	3個体
1031	"	21b検出時	8.0	(3.6)	—	灰白色	鉄釉	不明	19C前半?	外面下半無釉
1032	"	SK2埋土	11.2	6.5	5.6	浅黄橙色	染付	瀬戸・美濃	19C前半	2個体 陶胎染付
1033	小碗	SK1埋土	5.4	3.1	2.6	黄橙色	薬灰釉	大堀相馬	19C前半	内面酸化鉄付着
1034	"	表採	5.8	2.9	2.6	灰色	"	"	"	
1035	"	17i検出時	5.4	2.2	2.5	灰白色	"	"	"	
1036	"	SK15埋土	4.9	2.6	2.7	"	"	"	"	
1037	"	SK1埋土	5.2	3.05	3.0	"	"	"	"	
1038	"	"	5.7	2.6	2.6	浅黄橙色	"	"	"	
1039	"	"	5.6	2.6	2.7	灰白色	"	"	"	
1040	"	"	5.2	2.4	2.6	浅黄橙色	"	"	"	
1041	"	SK2埋土	6.8	2.5	3.4	灰色	"	"	"	
1042	仏飯器	14c検出時	6.0	(3.3)	—	浅黄橙色	灰釉	"	18C	2個体

第70図 近世・近代の陶器②



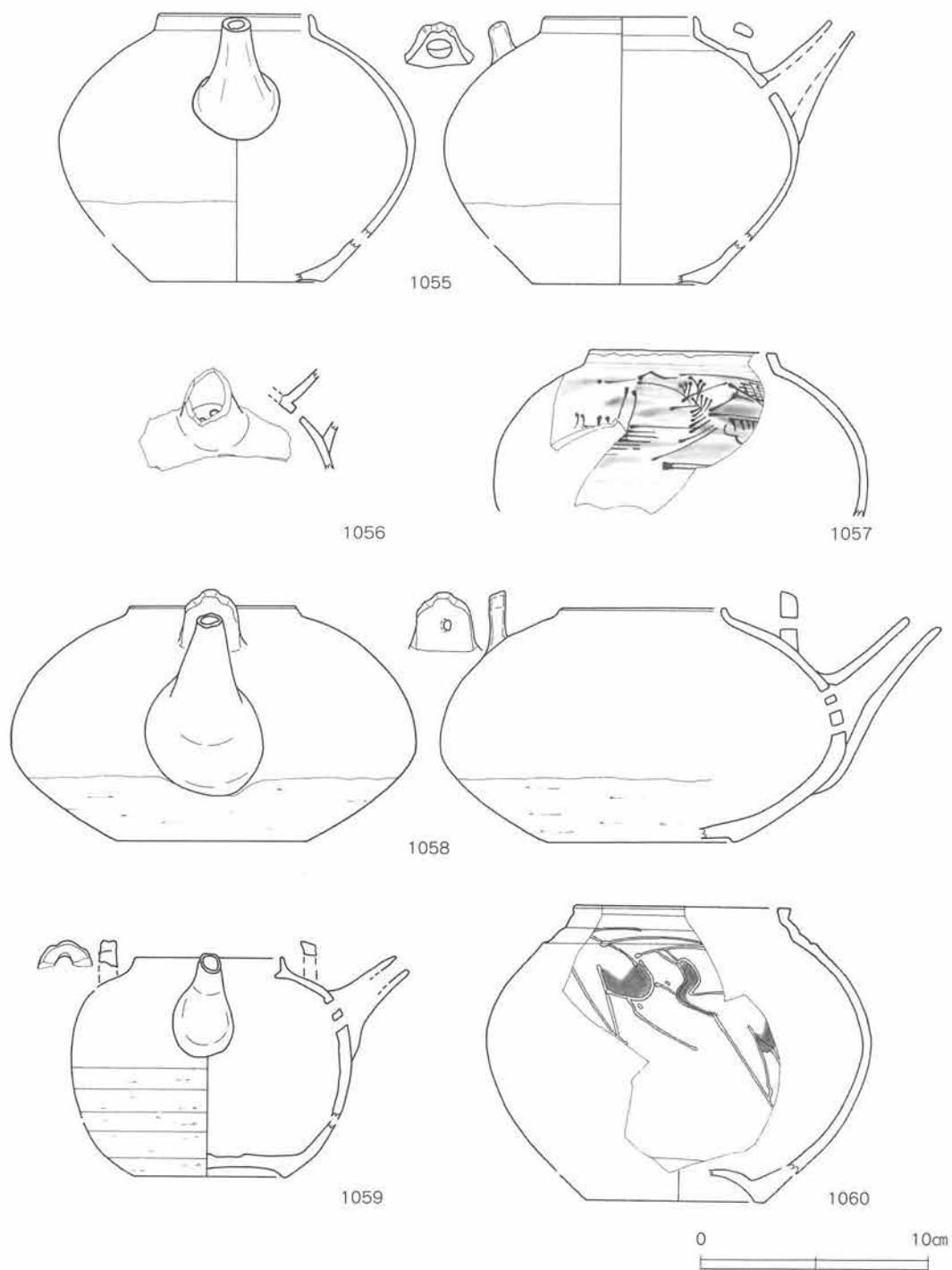
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1043	鉢	SK1,2,3埋土 1号倒木底埋土	34.0	11.4	11.4	淡橙色	鉄釉 透明釉	肥前	17C後半~18C前半	三島手
1044	"	表採	-	(4.6)	-	赤褐色	緑釉	"	"	刷毛目
1045	"	SK15埋土	-	(2.2)	-	灰色	白化粧	"	1690~1780	

第71図 近世・近代の陶器③



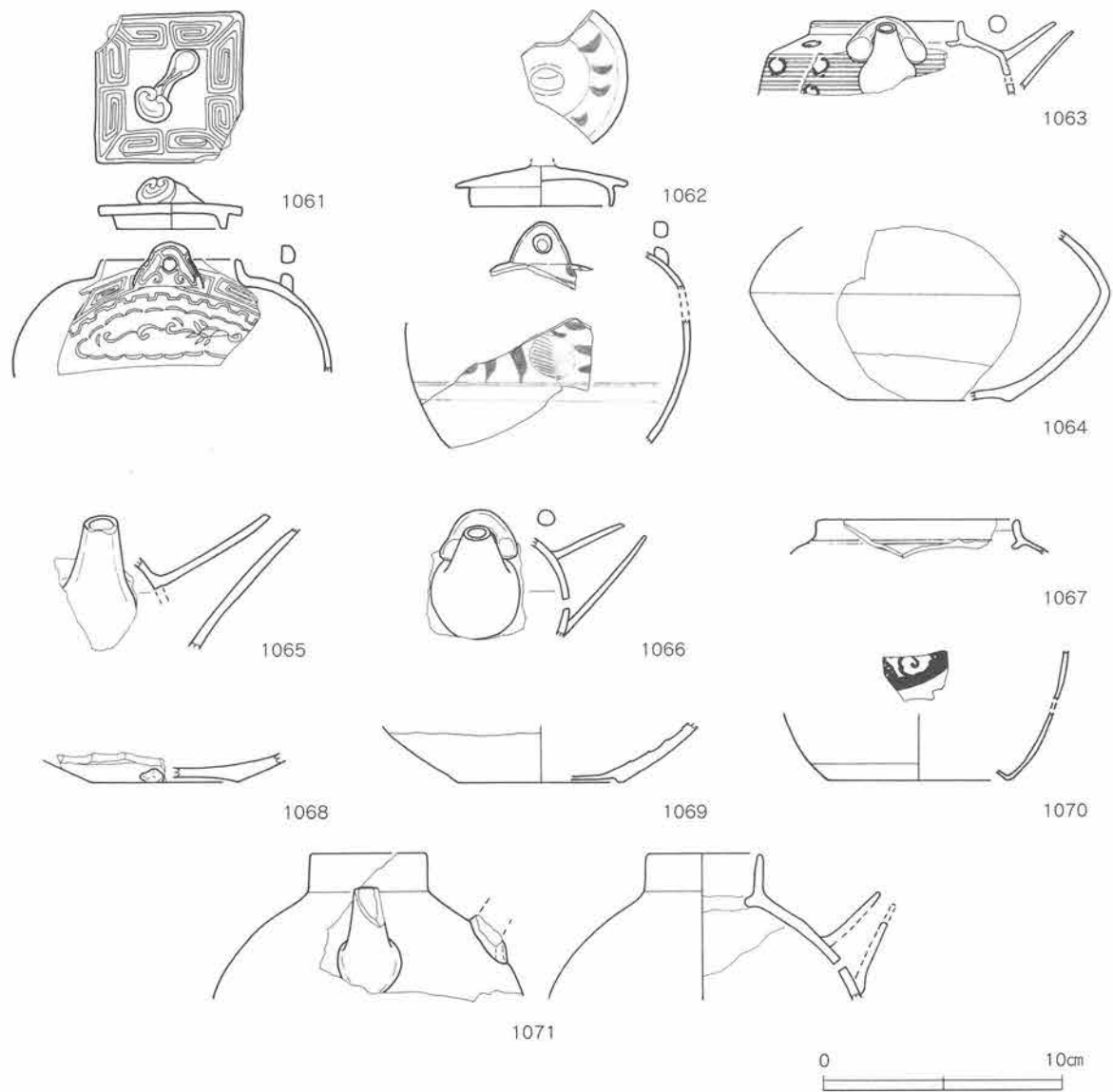
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1046	皿	SD9埋土	-	(1.6)	8.0	灰色	灰釉	瀬戸・美濃	17C後半	銅緑釉 流し掛け
1047	"	SK1埋土	17.6	(3.8)	-	黄橙色	銅緑釉	肥前	17C後半~18C前半	見込蛇目釉剥ぎ
1048	"	SK4埋土	13.3	3.6	4.7	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	輪花皿 3個体
1049	"	SK1埋土	8.6	2.0	3.4	"	"	"	"	七曜文 3個体
1050	"	2号倒木痕埋土	9.8	2.5	3.5	灰色	藁灰釉	"	19C前半	外面鉄釉 2個体
1051	"	北側粗掘	-	(1.4)	5.8	黄橙色	灰釉	瀬戸・美濃	19C前半	皿付の幅広い
1052	"	SK1埋土	16.0	3.4	6.8	灰白色	藁灰釉	大堀相馬	19C前半	型おこし皿
1053	"	SK2埋土	21.8	(4.3)	8.0	黄橙色	"	在地産	19C	見込み蛇目釉剥ぎ
1054	"	SK15埋土	22.0	(3.6)	-	灰色	"	"	"	輪花皿

第72図 近世・近代の陶器④



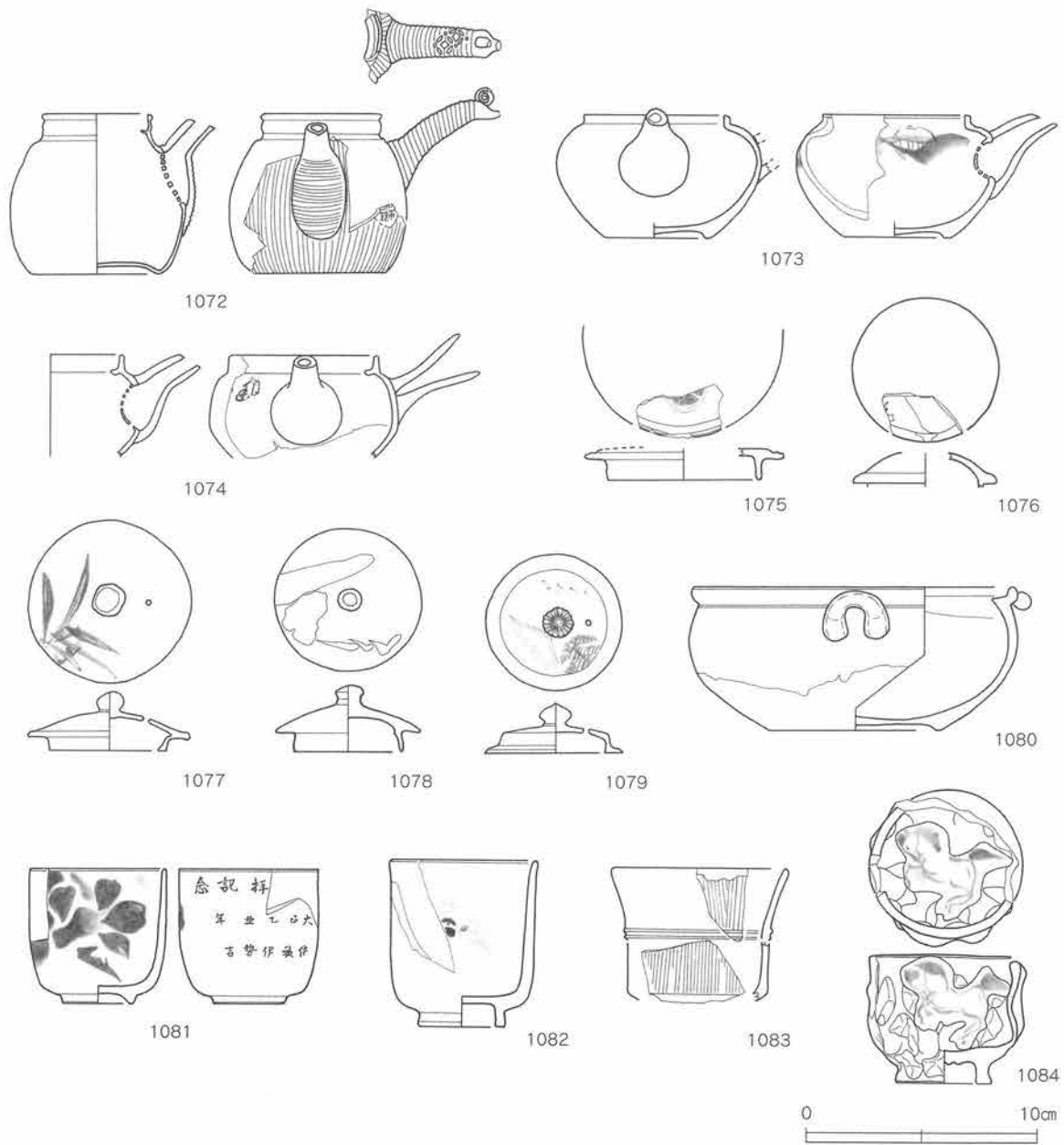
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1055	土瓶	SK2埋土	6.8	(12.0)	7.8	灰白色	銅緑釉	大塚相馬	19c前半~中葉	内面、下半部無釉
1056	"	表探	—	(4.6)		"	"	"	"	1055とは別個体
1057	"	SK1埋土	8.2	(7.3)		"	鉄絵	"	"	山水文
1058	"	SK15埋土	7.3	10.5	8.3	暗赤褐色	暗青灰の釉	在地	19c	焼継ぎ
1059	"	SK4埋土	6.6	(9.8)	6.8	暗灰色	鉄釉	"	19c	
1060	"	SK2埋土、SD9埋土	9.6	(13.2)	7.9	淡橙色	深緑色の釉	"	19c	鶴を白釉と鉄釉出さず

第73図 近世・近代の陶器⑤



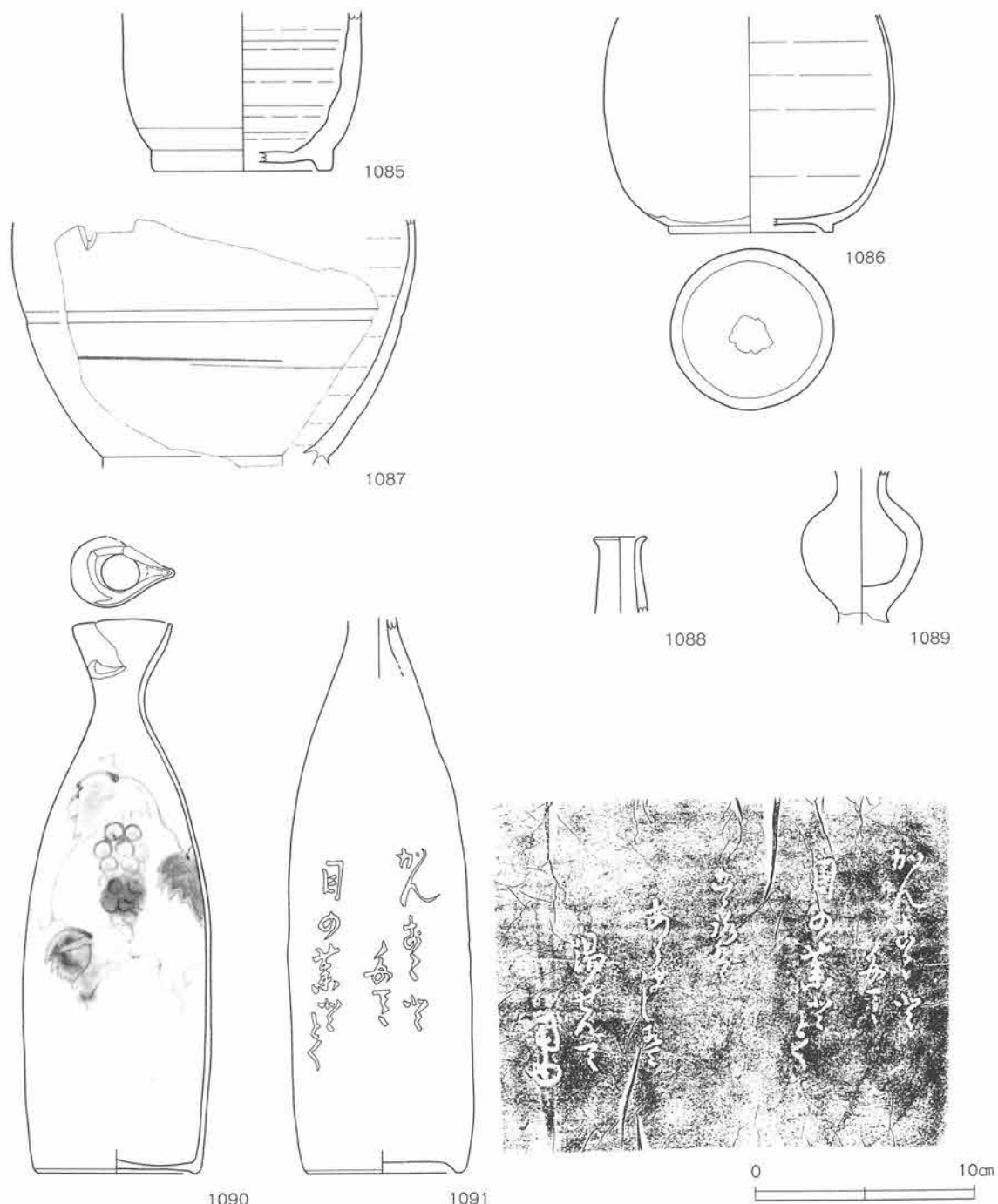
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1061	土瓶	2号倒木痕埋土、SK15埋土	5.9	(4.8)	—	暗灰色	深緑の釉	在地	19c	内面赤褐色
1062	"	SK15埋土、SK2埋土	—	(8.1)	—	褐灰色	鉄絵	"	"	
1063	"	SK15埋土、SK1埋土	6.4	(3.1)	—	黄橙色	"	大堀相馬?	19c	
1064	"	2号倒木痕埋土	—	(7.3)	6.8	灰色	藁灰釉	"	"	
1065	"	SK15埋土	—	(5.7)	—	黄橙色	"	大堀相馬	"	
1066	"	SK15埋土	—	(5.5)	—	灰白色	灰釉	"	"	
1067	"	SK15埋土	8.4	(1.5)	—	灰色	鉄絵	在地	19c	
1068	"	SK2埋土	—	(1.2)	6.2	灰色	鉄釉	"	19c	内面も施釉
1069	"	SK2埋土	—	(2.4)	6.8	灰白色	藁灰釉	大堀相馬	19c	
1070	急須	2号倒木痕埋土	—	(5.5)	7.6	灰色	鉄釉、染付	在地	19c	上半部白化粧の上染付
1071	急須	2号倒木痕埋土	4.7	(6.2)	—	灰色	胴緑釉	大堀相馬	19c	

第74図 近世・近代の陶器⑥



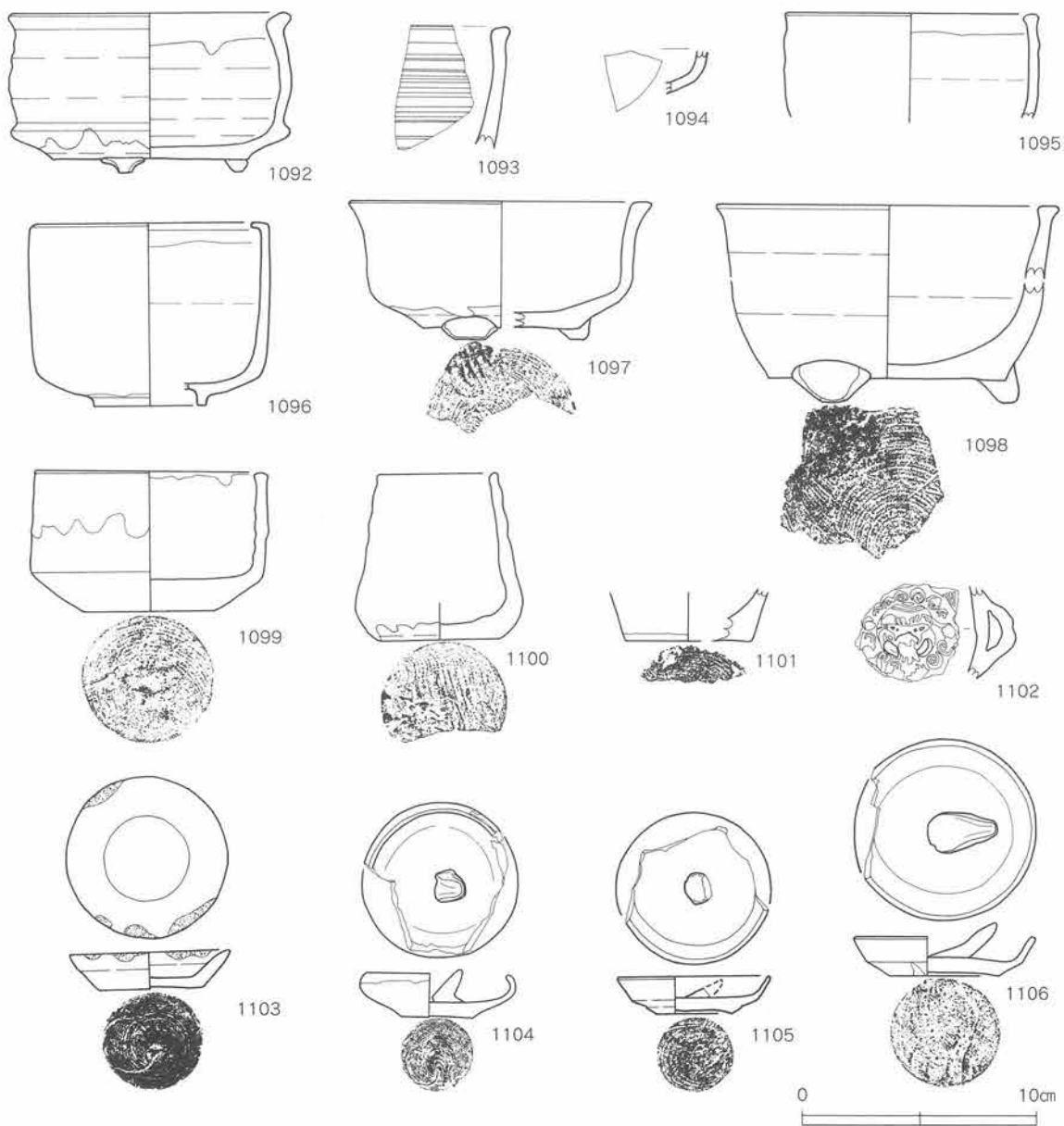
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1072	急須	SK1埋土	5.1	7.0	6.6	灰色	無釉	不明	19c後半～1930	外面暗赤褐色
1073	"	SK1埋土	6.4	5.5	4.2	淡黄色	鉄絵	"	19c後半～1930	
1074	"	SK1埋土	6.4	(4.5)	—	白色	鉄絵	"	"	磁器とするべきか
1075	"	16h検出時	6.8	(1.3)	8.6	灰白色	筒描き	大堀相馬?	19c	
1076	土瓶蓋	SK15埋土	5.0	(1.5)	6.2	"	灰、褐釉	"	19c	
1077	"	SK1埋土	5.0	2.6	7.1	淡黄色	鉄絵	不明	19c後半～1930	
1078	"	12g検出時	4.6	2.9	6.3	灰白色	上絵付	"	"	
1079	"	SK1埋土	6.1	2.2	4.7	暗赤褐色	上絵付	"	"	急須の蓋か?
1080	土鍋	SK1埋土	13.7	6.3	7.4	灰白色	灰釉	大堀相馬?	19c?	下半部に煤附着
1081	湯のみ	SK1埋土	5.95	5.9	3.0	淡黄色	鉄絵	不明	1925 (大正14年)	佐藤伊勢吉の文字
1082	"	SK1埋土	6.4	7.3	3.6	灰色	鉄釉	"	19c後半～1930	上絵付あり
1083	"	SK15埋土	7.4	(5.3)	—	灰白色	"	"	19c?	漆継ぎ
1084	"	SK1埋土	5.7	5.6	2.8	灰色、黒い粒	駒絵	大堀相馬?	19c後半～1930	

第75図 近世・近代の陶器⑦



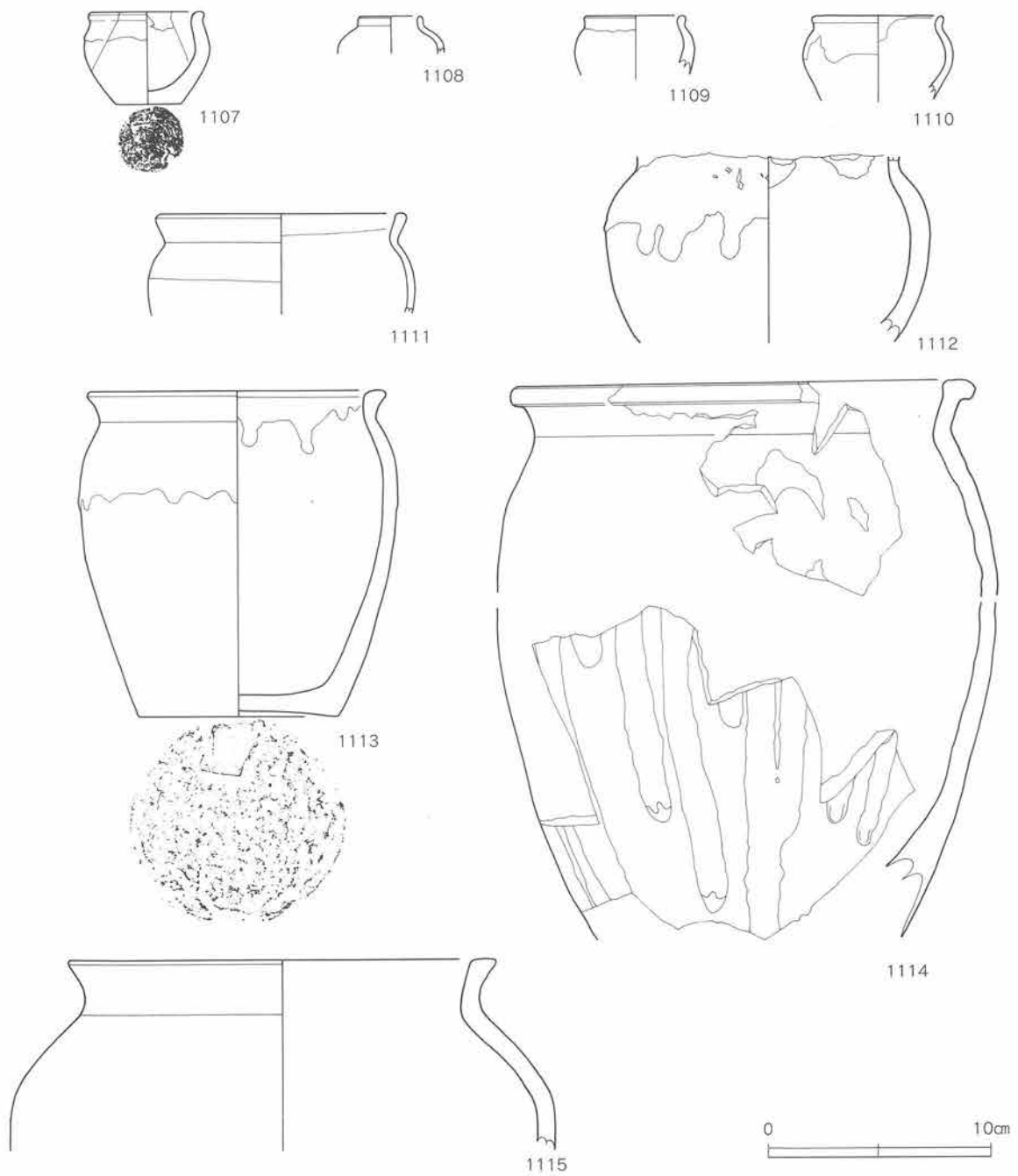
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1085	德利	SD9埋土	—	(7.3)	8.2	淡黄色	褐釉	瀬戸・美濃	18c	
1086	すず德利	SK1埋土	—	(10.0)	7.4	"	黄灰釉	大堀相馬	19c	底面に穿孔
1087	"	SD9埋土	—	(11.8)	—	赤褐色	白化粧、染付	在地	19c後半～1930	内面無釉
1088	瓶	SK48埋土	2.4	(3.5)	—	灰色	藁灰釉	大堀相馬?	19c	
1089	花瓶	SK15埋土	—	(7.0)	—	灰色	鉄釉	不明	19c～1930	鉄釉は黒色を呈する
1090	爛德利	SK1埋土	4.6	25.5	7.1	灰白色	鉄、胴緑釉	大堀相馬	19c	葡萄文
1091	"	SK1埋土	—	(25.5)	7.0	灰色	鉄釉	在地	19c	文字あり

第76図 近世・近代の陶器③



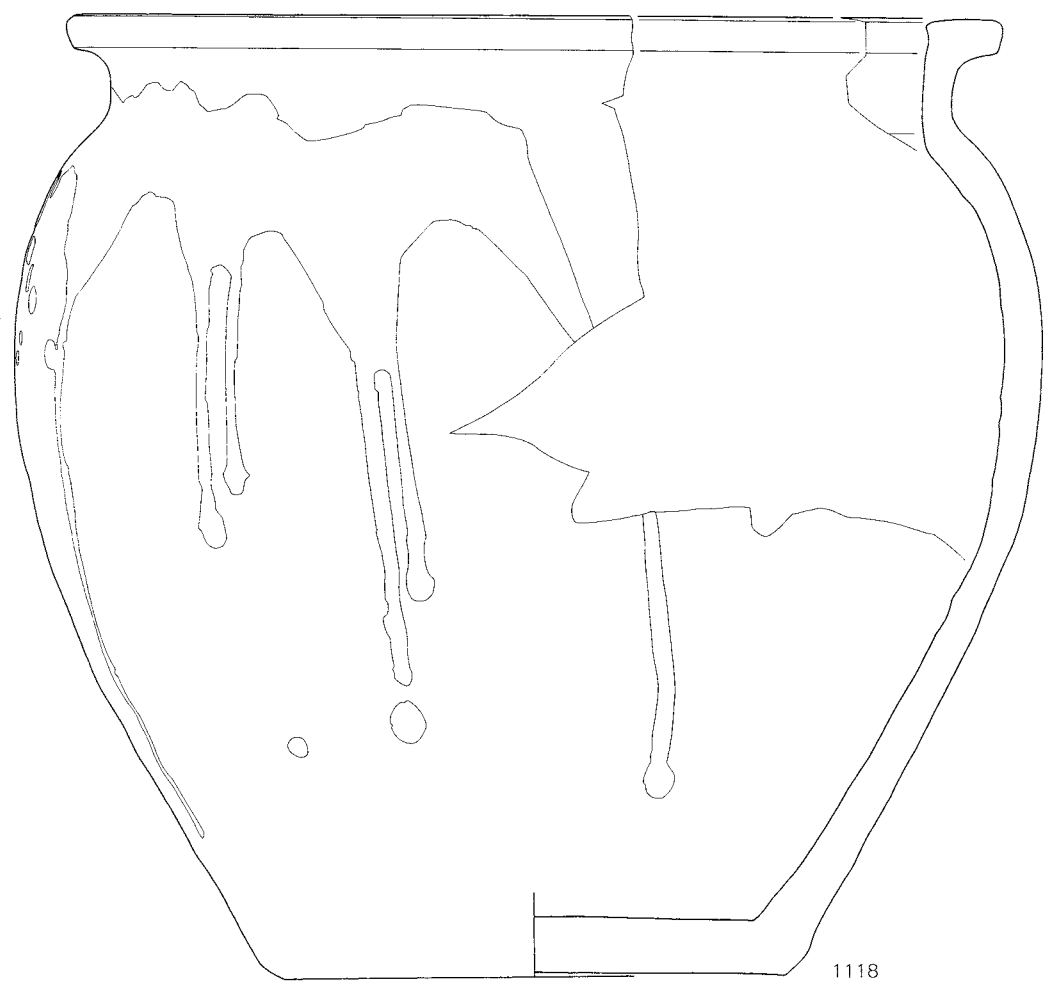
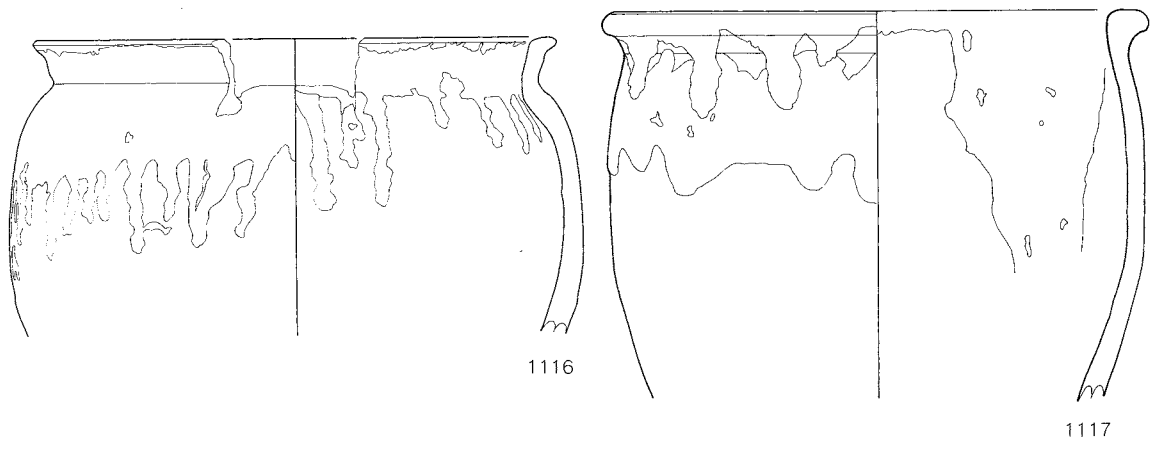
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1092	香炉	SK15埋土、2号倒木痕埋土	11.5	6.9	8.3	浅黄橙色	褐釉	瀬戸・美濃	18c	
1093	"	SK15埋土	—	(5.3)	—	淡黄色	"	"	18c	内面施釉
1094	火入れ	P433埋土 (SB22)	—	(1.95)	—	"	灰釉	大堀相馬	18c	内面無釉
1095	"	SK15埋土	10.7	(4.5)	—	"	褐釉	"	18c	漆継ぎ
1096	"	1号倒木痕埋土、SD9埋土	10.2	7.9	4.8	灰白色	銅緑釉	"	19c	
1097	"	SK15埋土	11.8	6.0	6.7	赤褐色	鉄釉	在地	19c	内面施釉
1098	"	SK15埋土	14.7	(8.5)	10.8	灰~赤褐色	焼締	"	19c	表面 暗赤褐色
1099	"	SK2埋土	9.7	6.2	5.6	赤褐色	鉄、褐釉	"	"	内面施釉
1100	灰落し	SK15埋土	5.0	7.2	5.2	灰色	空色の釉	"	"	"
1101	"	SK2埋土	—	(2.1)	5.3	橙色	"	"	"	"
1102	瓶掛	表採	—	(3.9)	—	灰白色	銅緑釉	瀬戸・美濃	19c前半	
1103	灯明皿	SK1埋土	6.8	1.5	4.4	橙色	素焼き	在地	19c	油煙付着
1104	"	SK1埋土	6.1	2.1	3.1	灰白色	褐釉	大堀相馬?	19c	2個体
1105	"	SK1埋土	6.5	1.6	3.2	灰色	鉄釉	在地	19c	4個体
1106	"	SK1埋土	7.8	2.3	4.7	灰白色	"	"	19c	

第77図 近世・近代の陶器⑨



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1107	甕	表探	5.0	4.2	2.9	灰色	鉄釉	在地	19c	空色の釉流掛け
1108	"	SD4埋土	2.9	(1.7)	—	"	"	"	19c	壺とすべきか
1109	"	表探	4.4	(2.7)	—	灰白色	"	"	"	白色の釉流掛け
1110	"	SK15埋土	5.7	(3.9)	—	"	"	"	"	空色の釉流し掛け
1111	"	2号倒木痕埋土	11.4	(4.6)	—	灰~赤褐色	"	"	19c	白色の釉流し掛け
1112	"	表探	—	(8.5)	—	灰色	"	"	"	空色の釉流し掛け
1113	"	SK15埋土	13.5	14.9	9.0	橙色	"	"	"	深緑色の釉流し掛け
1114	"	SK1埋土、SK15埋土	20.2	(27.3)	—	褐灰色	"	"	"	褐釉流し掛け
1115	"	SK3埋土	19.2	(8.7)	—	"	褐釉	"	"	

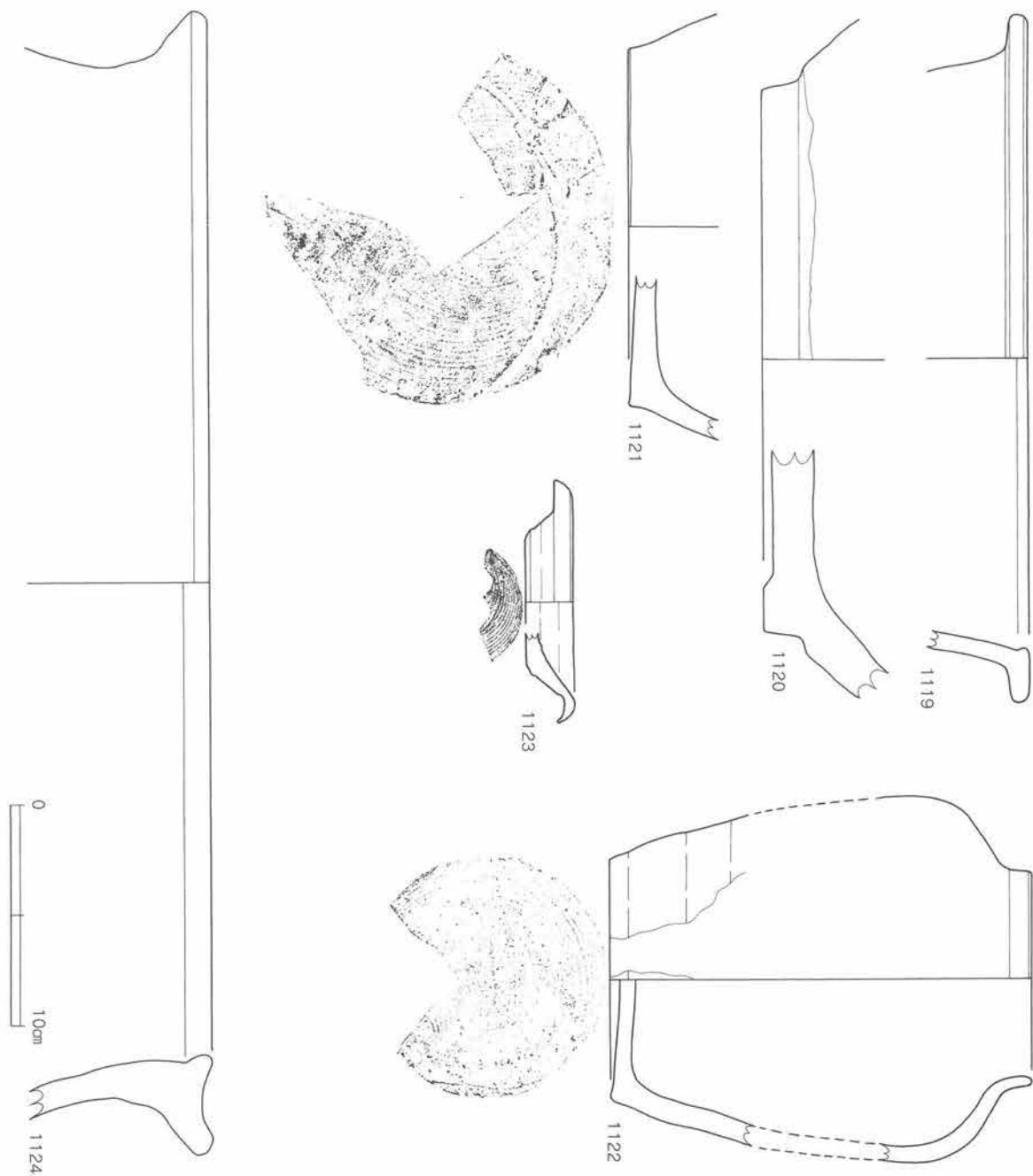
第78図 近世・近代の陶器⑩



0 10cm

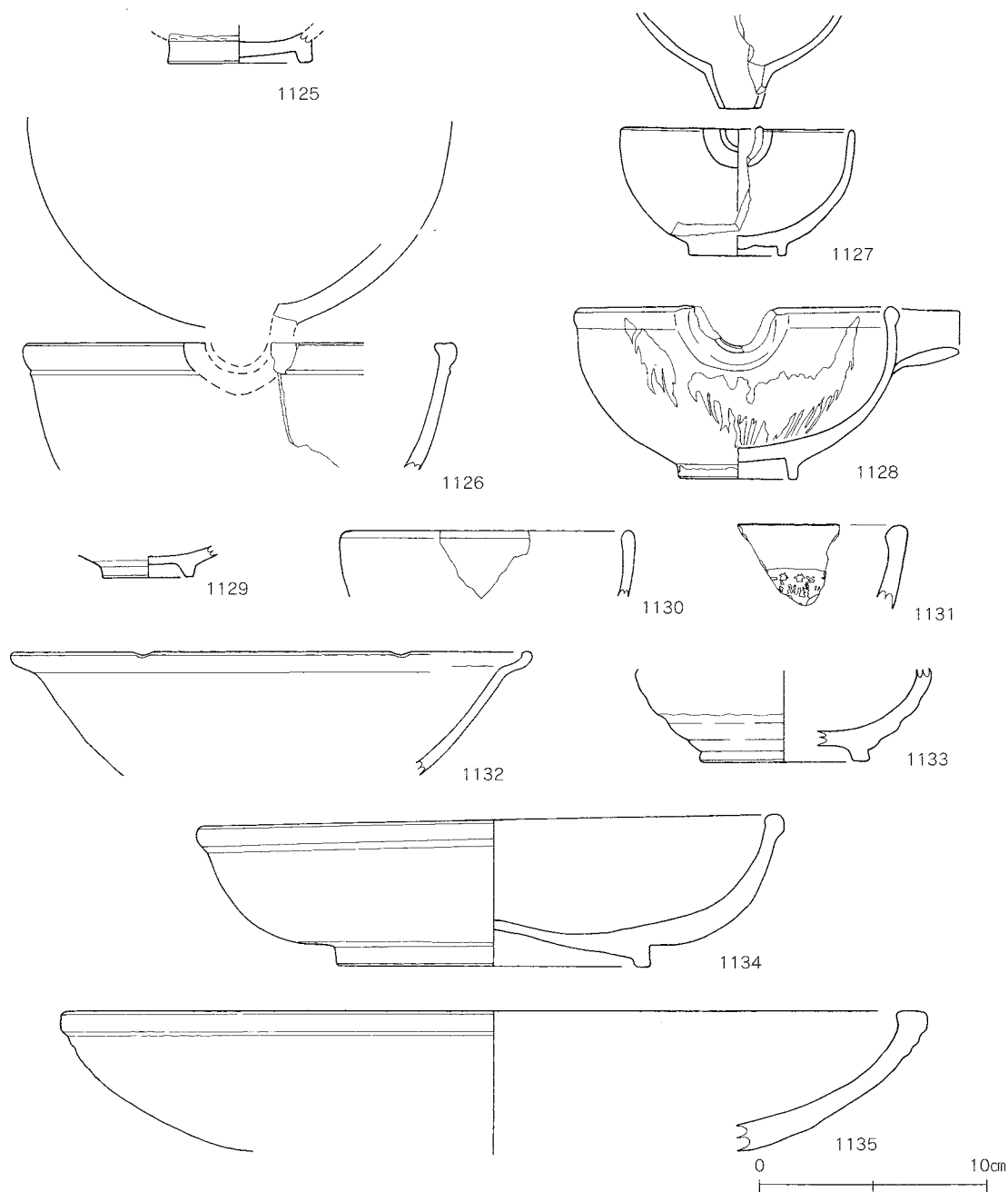
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1116	甕	SK15埋土	21.0	(11.9)	—	褐灰色	鉄、褐釉	在地	19c	漆継ぎ
1117	"	SK1埋土	20.9	(15.7)	—	灰色	鉄釉	"	"	空色の釉流し掛け
1118	"	SK1埋土	37.5	38.8	20.0	"	"	"	"	褐釉流し掛け

第79図 近世・近代の陶器①



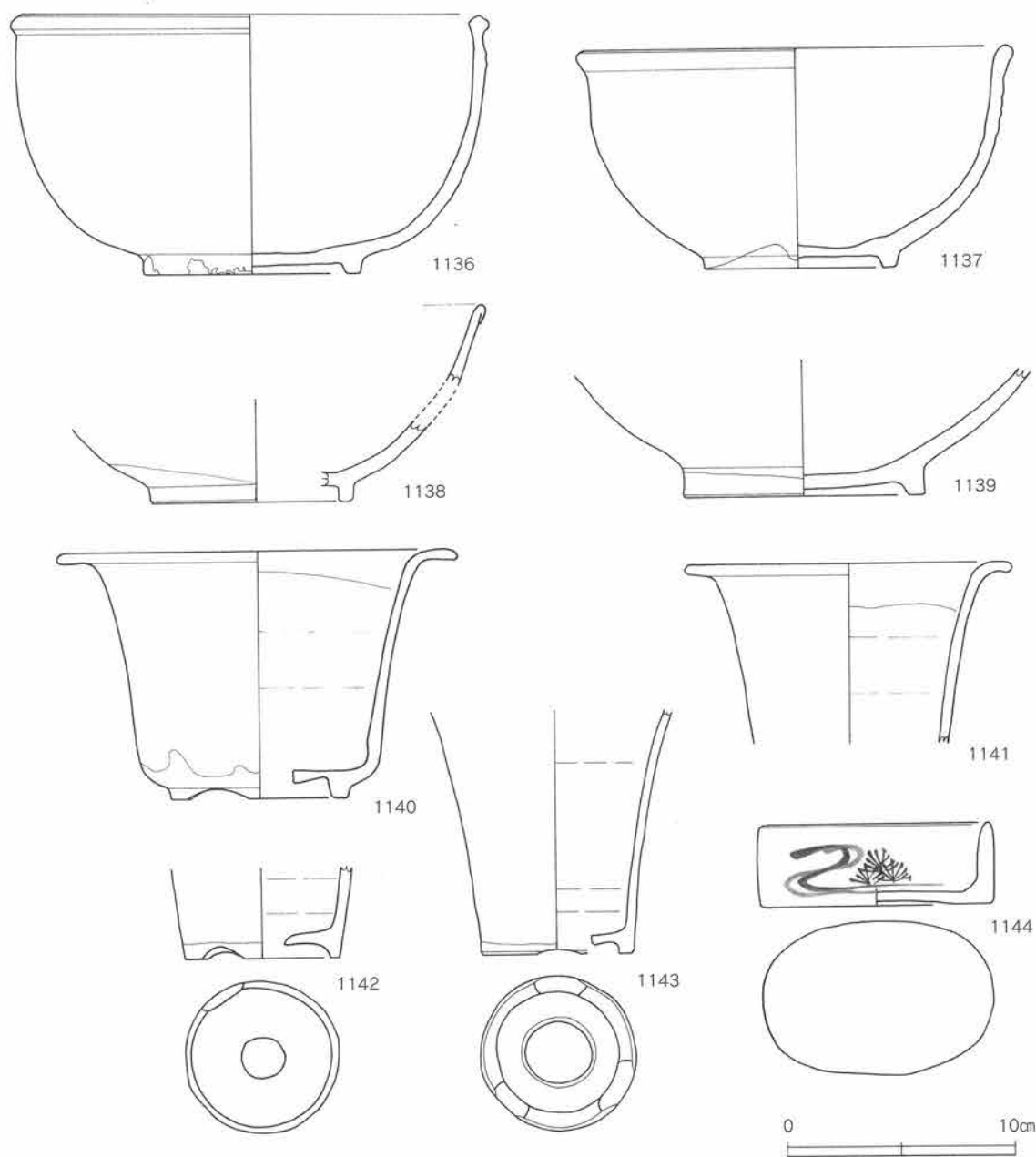
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1119	切立	SK15埋土	31.2	4.6	—	暗灰色	褐釉	在地	19c	
1120	鉢?	表採	—	(4.4)	24.5	赤褐~灰色	空色の釉	"	19c	器種確定できず
1121	甕	SK15埋土	—	(4.0)	16.2	灰色	褐釉	"	"	
1122	壺	SE1周辺	9.7	(19.0)	10.1	にぶい橙色	褐釉	"	"	焼き締に褐釉流し掛け
1123	蓋	17f検出時	9.3	2.15	5.7	赤褐色	無釉	"	"	外面灰色~赤褐色
1124	甕	SK1埋土、SK2埋土	51.8	(8.3)	—	灰色 砂混じる	"	常滑	18c	体部片もある

第80図 近世・近代の陶器⑫



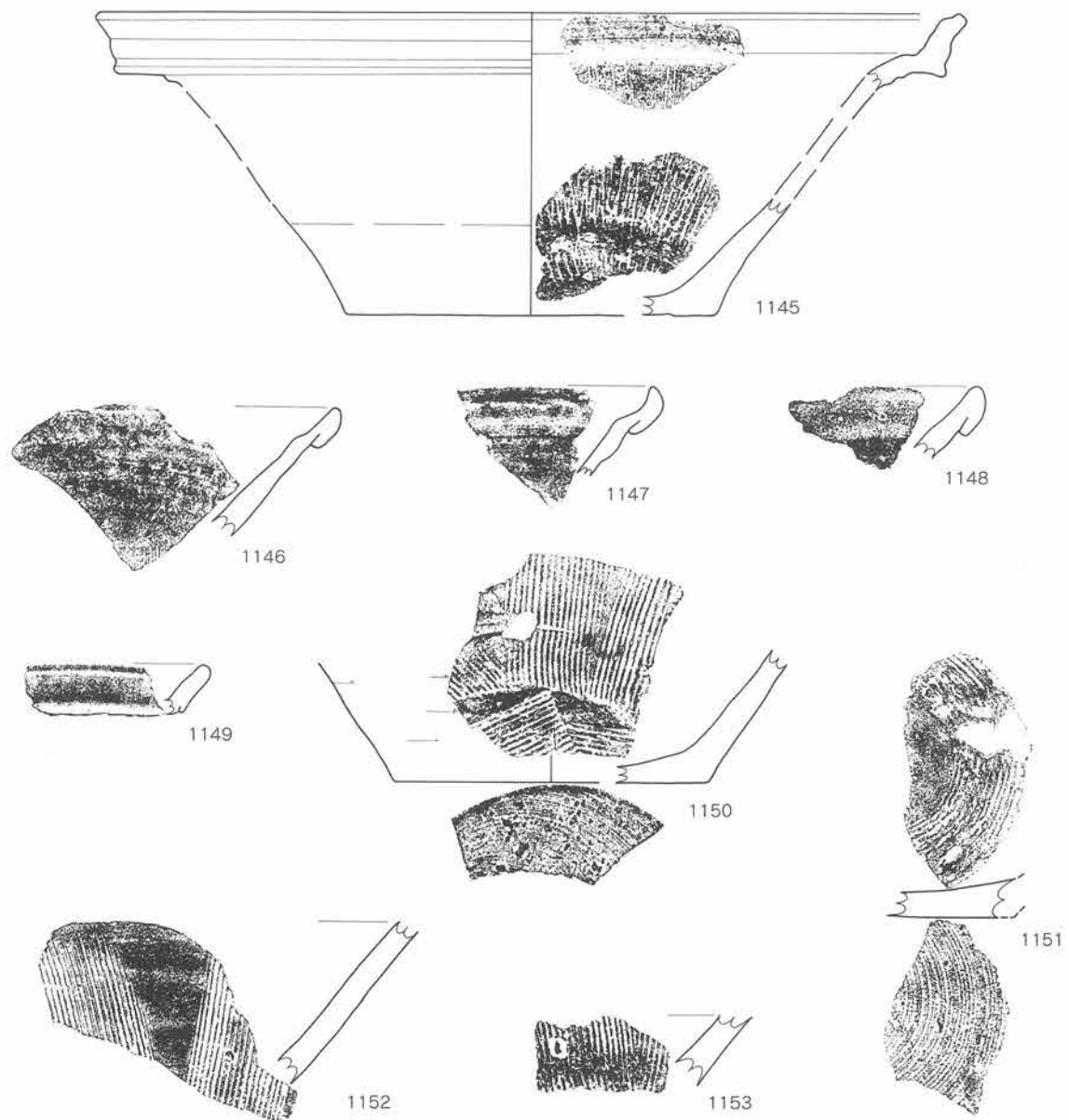
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1125	鉢	SK15埋土	—	(1.3)	6.2	にぶい黄橙色	褐釉	瀬戸・美濃	18c	漆継ぎ
1126	片口鉢	SK2埋土	18.8	(5.6)	—	"	"	"	"	"
1127	"	SK15埋土	10.1	5.6	4.2	淡黄色	灰釉	大塚相馬	18c	外底面に漆付着
1128	"	2号倒木痕埋土	14.3	7.7	5.3	灰白色	"	"	"	褐色釉流し掛け
1129	鉢	SK3埋土	—	(1.4)	4.0	浅黄橙色	空色の釉	在地	19c	
1130	"	2号倒木痕埋土	12.2	(2.9)	—	灰白色	灰釉	瀬戸・美濃	19c?	
1131	"	2号倒木痕埋土	—	(3.5)	—	にぶい黄橙色	灰、褐釉	在地?	19c	胎土に白い粒混じる
1132	"	SK2埋土	23.0	(5.5)	—	褐灰色	空色の釉	在地	19c	口縁部輪花
1133	"	SK15埋土	—	(4.1)	6.0	浅黄橙色	褐釉	在地	19c	
1134	"	SK1埋土	25.5	6.4	13.7	褐灰色	空～緑色の釉	"	"	内面に目跡
1135	"	SE1周辺	38.0	(6.1)	—	"	"	"	"	1134と胎土、釉が似る

第81図 近世・近代の陶器⑬



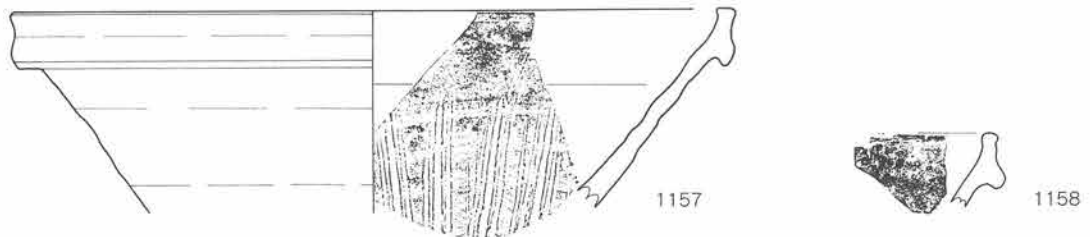
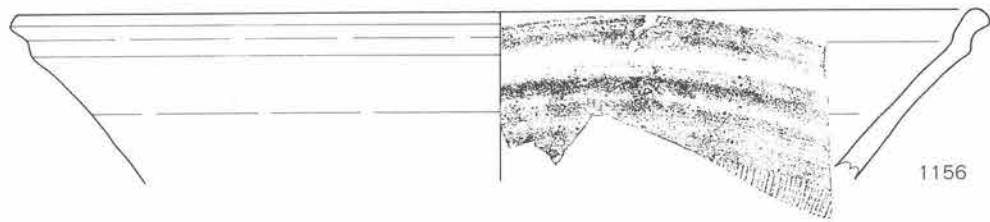
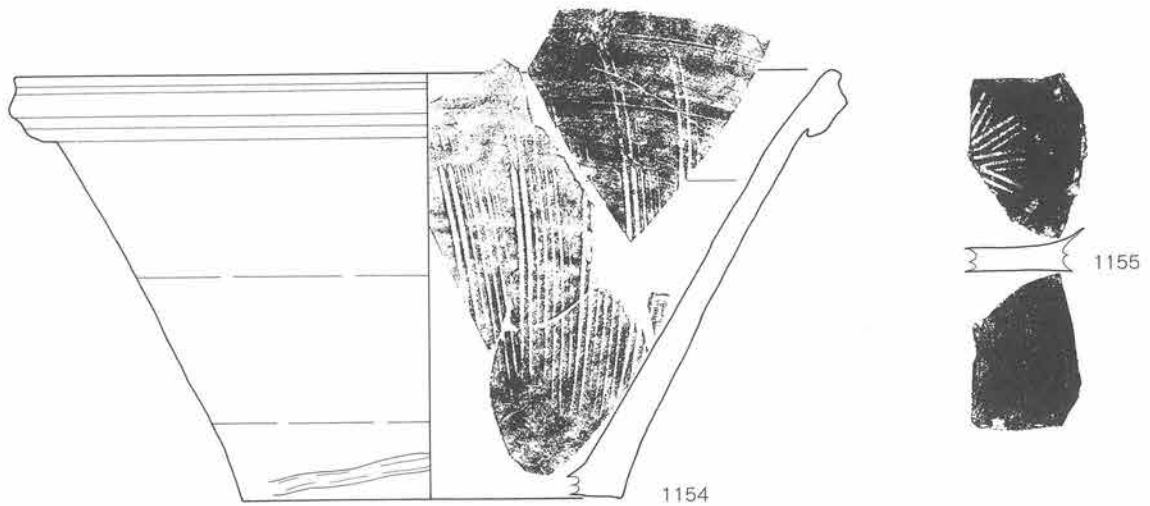
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1136	鉢	1号倒木痕埋土	20.0	13.0	9.4	褐灰色	空色の釉	在地	19c	漆継ぎ
1137	"	SK1埋土	18.5	9.65	8.4	灰白色	"	"	"	内面目跡
1138	"	30b検出	—	(8.6)	8.7	"	"	"	"	1137に胎土が似る
1139	"	表採	—	(5.4)	10.5	灰色	鉄釉	"	"	内面目跡
1140	植木鉢	SK1埋土	17.6	10.9	7.8	灰~淡黄色	銅緑釉	"	19c~1930	砂っぽい胎土
1141	"	SK1埋土	14.0	(7.9)	—	灰色	"	"	"	1140と鉢、胎土共通
1142	"	SK1埋土	—	(3.5)	6.8	褐灰色	鉄釉	"	"	内面無釉
1143	"	SK1埋土	—	(10.7)	6.6	にぶい橙色	"	"	"	"
1144	餌入れ	SK1埋土	9.8	3.6	10.1	灰~橙色	染付	"	"	白化粧の上に染付

第82図 近世・近代の陶器⑭



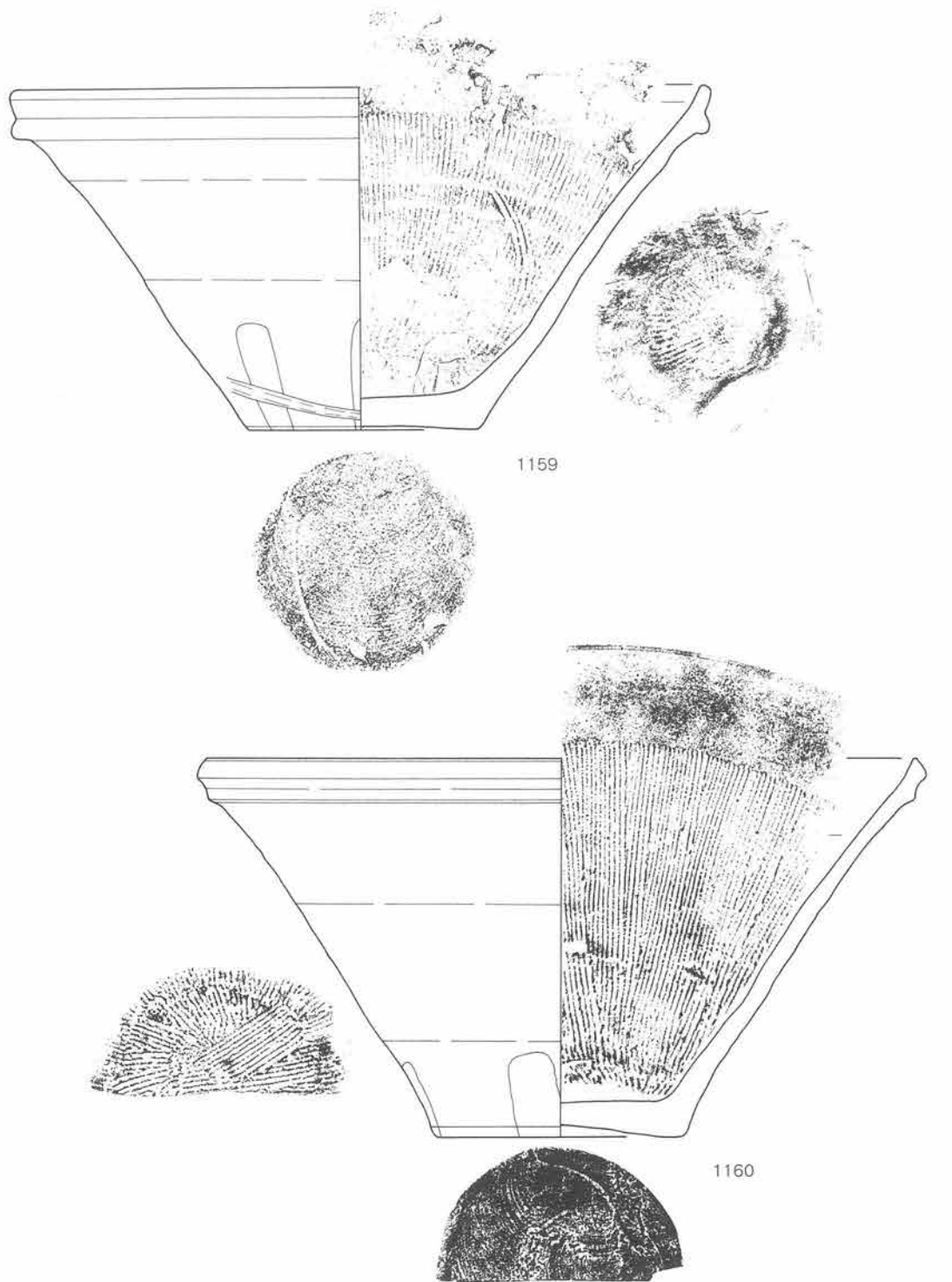
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1145	播鉢	SE1周辺、SK4埋土	36.2	(13.0)	15.6	灰黄色 白い粒	鉄釉	丹波系	17c	口縁外面～内面に軸
1146	"	SK15埋土	-	(5.6)	-	淡黄色	"	瀬戸	18c	
1147	"	表採	-	(3.9)	-	"	"	"	"	
1148	"	SE1周辺	-	(3.1)	-	"	"	"	"	
1149	"	SK3埋土	-	(2.1)	-	"	"	"	"	
1150	"	SK5埋土	-	(5.1)	13.4	"	"	"	"	内底面摩耗
1151	"	表採	-	(1.3)	-	"	"	"	"	"
1152	"	1号倒木痕埋土	-	(7.0)	-	"	"	"	"	
1153	"	SK15埋土	-	(3.0)	-	"	"	"	"	体部下半の破片

第83図 近世・近代の陶器⑮



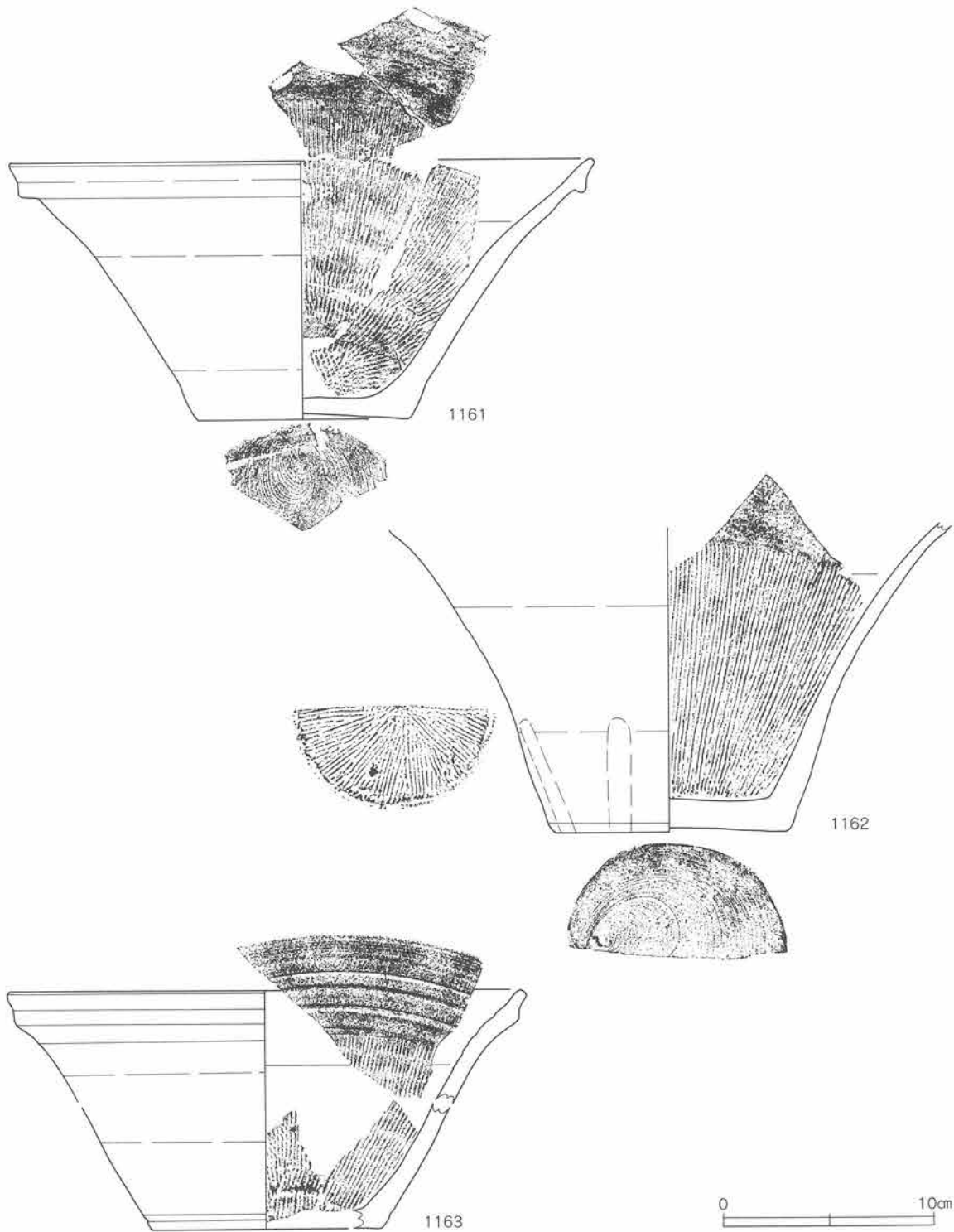
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1154	播鉢	SK13埋土	32.2	14.6	15.0	赤褐～灰褐色	焼き締	在地	18c後半?	内底面かなり摩耗
1155	"	北側粗掘	—	(1.7)	—	暗赤褐色	"	"	"	"
1156	"	SK2埋土	38.2	(6.8)	—	にぶい赤褐色	鉄釉	肥前	18c	
1157	"	SK2埋土	28.4	(7.9)	—	褐灰色	焼き締	在地?	18c?	堅緻な焼成
1158	"	SK12埋土	—	(2.95)	—	"	"	"	"	1157と同一個体か

第84図 近世・近代の陶器⑩



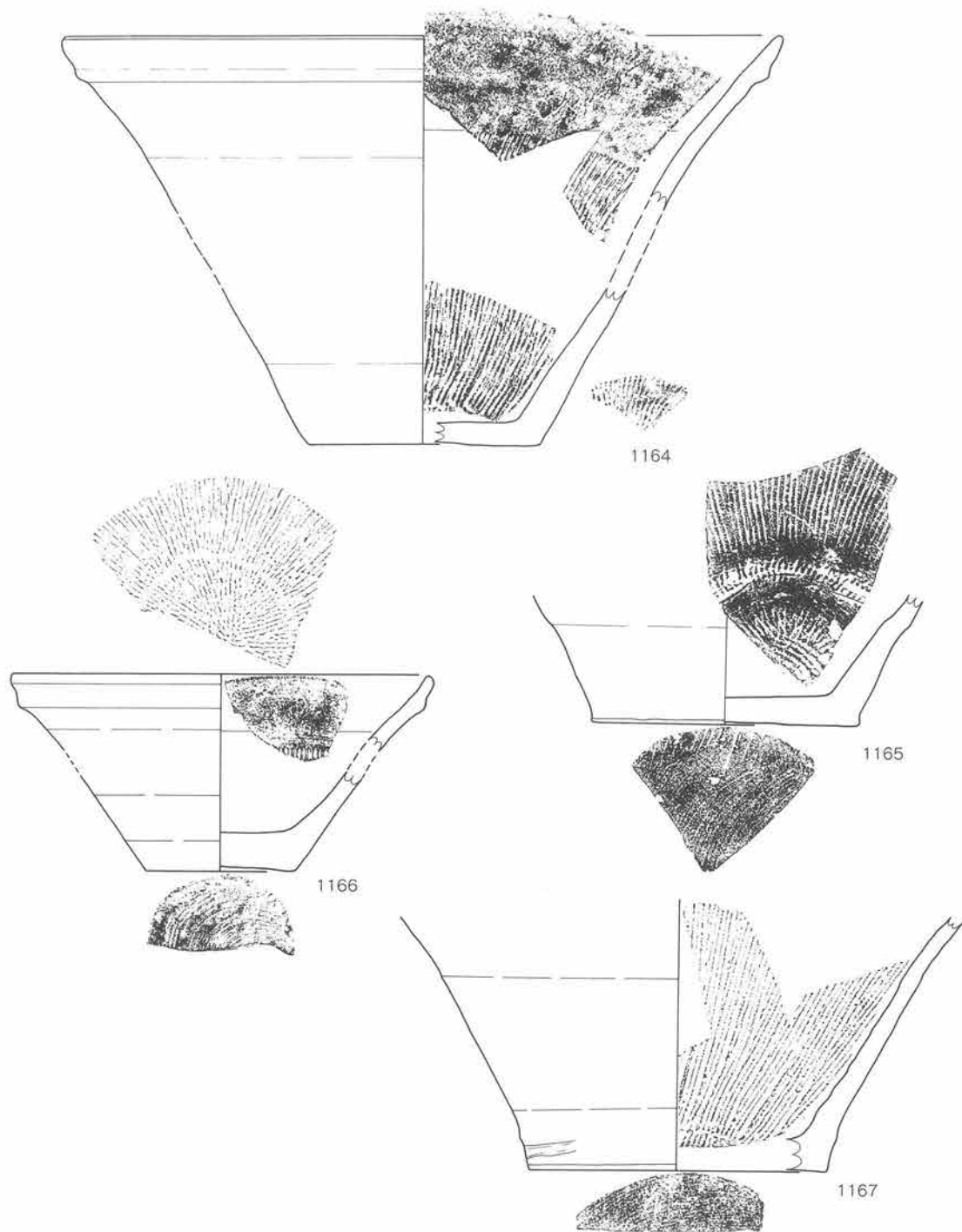
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1159	擂鉢	SK2, SD3, SD4埋土	31.8	15.8	11.2	赤褐色	鉄釉	在地	19c	内底面摩耗
1160	"	SK2埋土	32.3	17.4	11.0	暗赤褐~灰色	"	"	"	内面ほとんど摩耗せず

第85図 近世・近代の陶器⑰



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1161	楕鉢	SK13、SK15埋土	28.0	12.5	10.0	赤褐色	鉄釉	在地	19c	内底面やや摩耗
1162	"	SK1埋土	-	(14.7)	11.0	灰色	"	"	"	ほとんど摩耗ない
1163	"	SK15埋土	29.0	(11.6)	10.1	橙色	"	"	"	

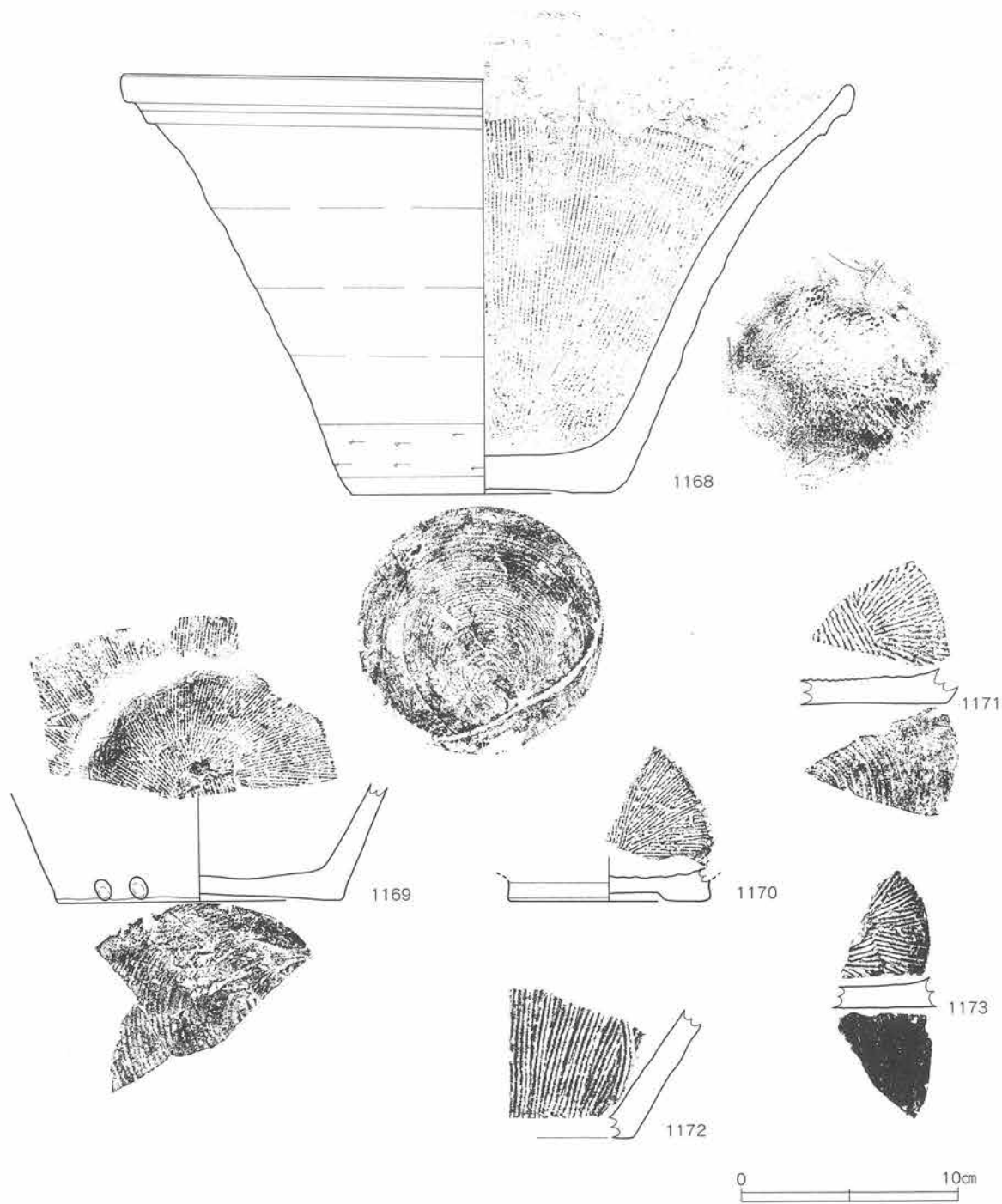
第86図 近世・近代の陶器⑩



0 10cm

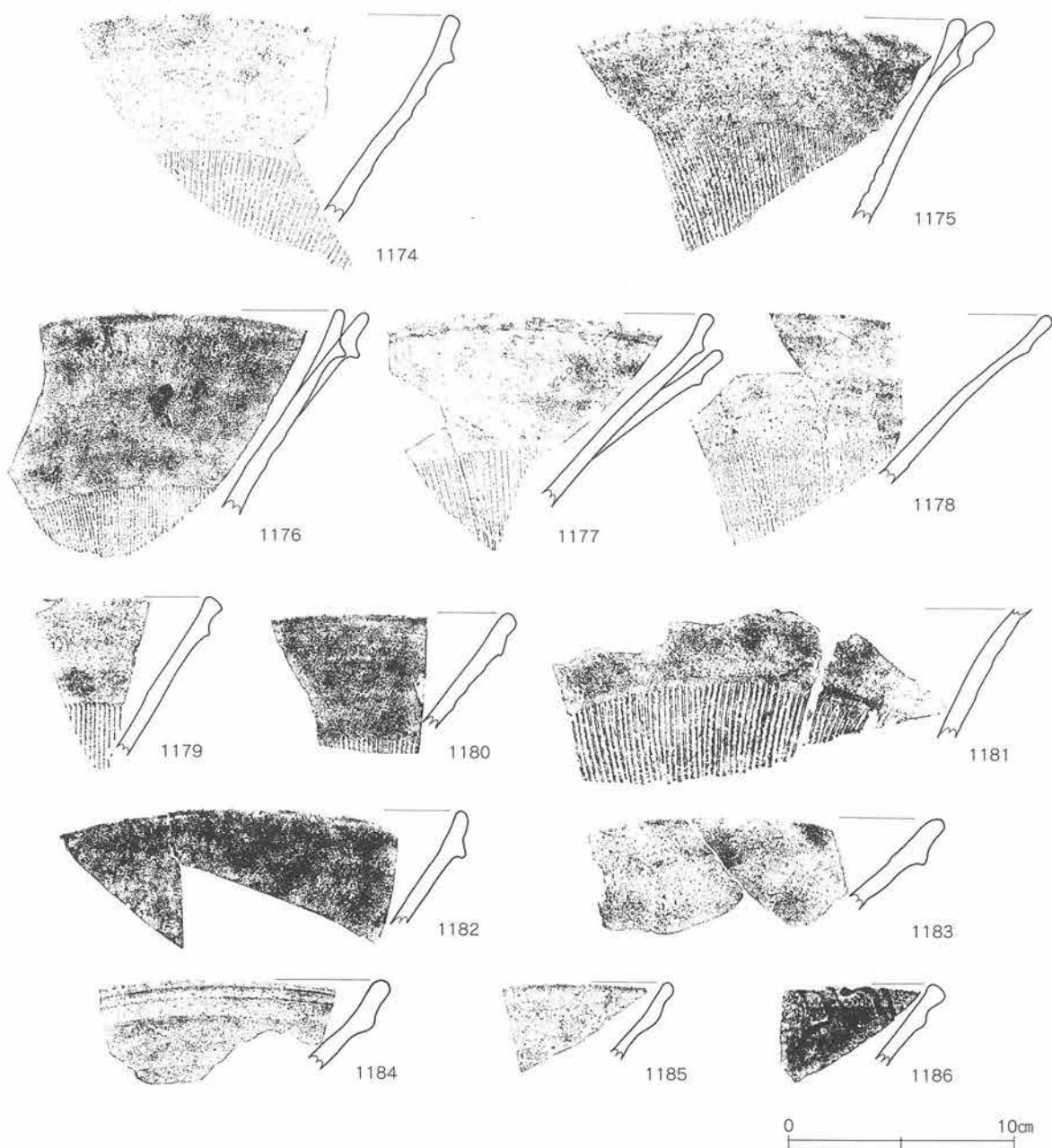
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1164	播鉢	SK1埋土、SK2埋土	32.4	(19.5)	12.7	灰褐色	鉄釉	在地	19c	内底面やや摩耗
1165	"	表採	-	(5.8)	12.2	"	焼き締?	"	"	内面摩耗
1166	"	SK3埋土	19.0	(9.0)	6.8	黄橙色	素焼	"	19c	使用痕がない
1167	"	SK2埋土	-	(11.5)	13.6	赤褐～灰色	鉄釉	"	"	内底面やや摩耗

第87図 近世・近代の陶器⑩



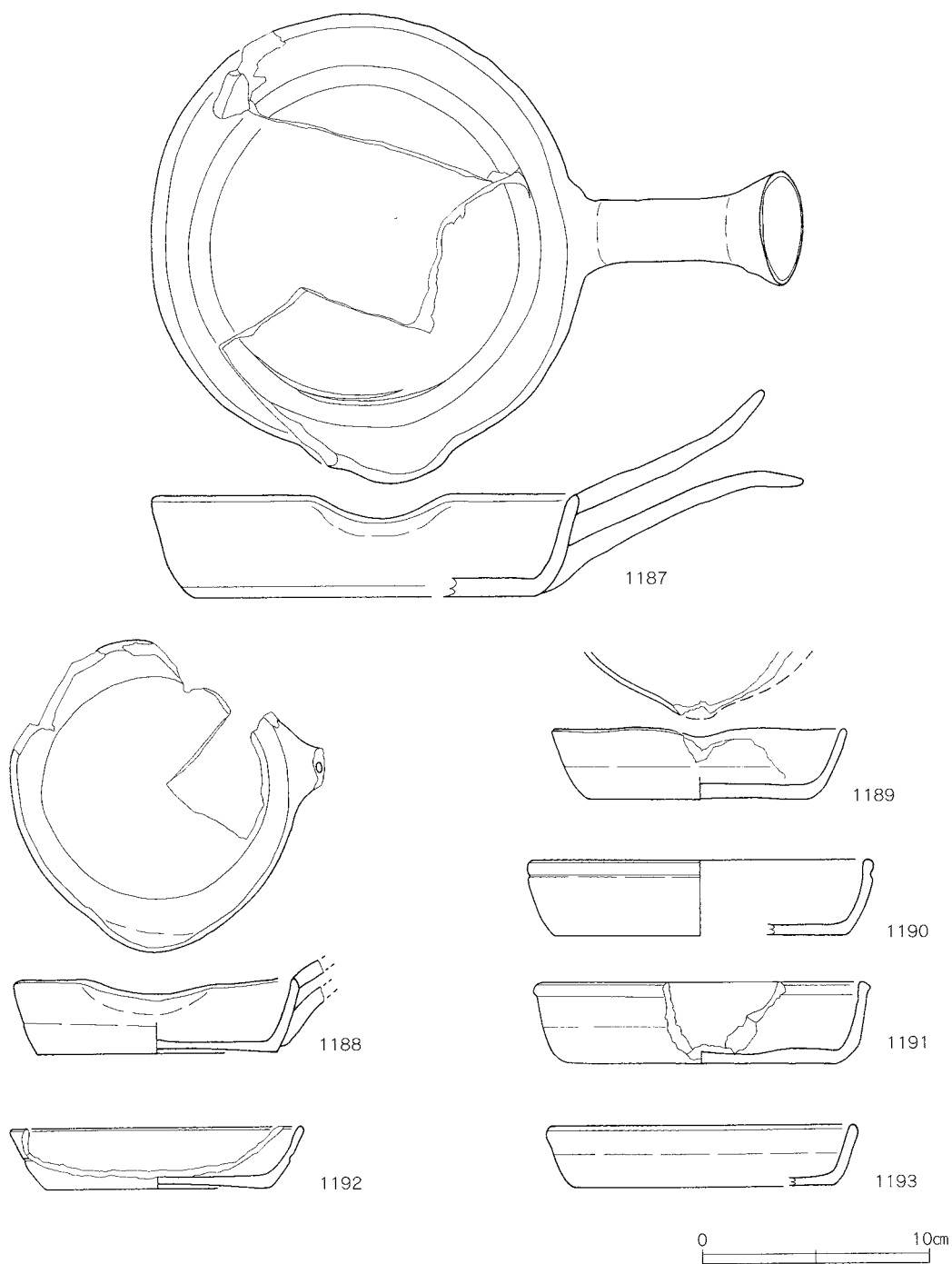
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1168	播鉢	SK1埋土	32.4	19.7	12.1	赤褐色	鉄釉	在地	19c	内底面摩耗
1169	"	SK2埋土	-	(5.2)	13.2	"	"	"	"	"
1170	"	SE1周辺	-	(1.6)	9.0	にぶい赤褐色	"	"	1900~1930頃	輪高台
1171	"	13b検出時	-	(1.7)	-	褐灰色	"	"	19c	内面あまり摩耗せず
1172	"	31b検出時	-	(5.3)	-	赤褐色	焼き締?	"	"	
1173	"	表採	-	(1.4)	-	赤褐~灰色	鉄釉	"	"	

第88図 近世・近代の陶器⑳



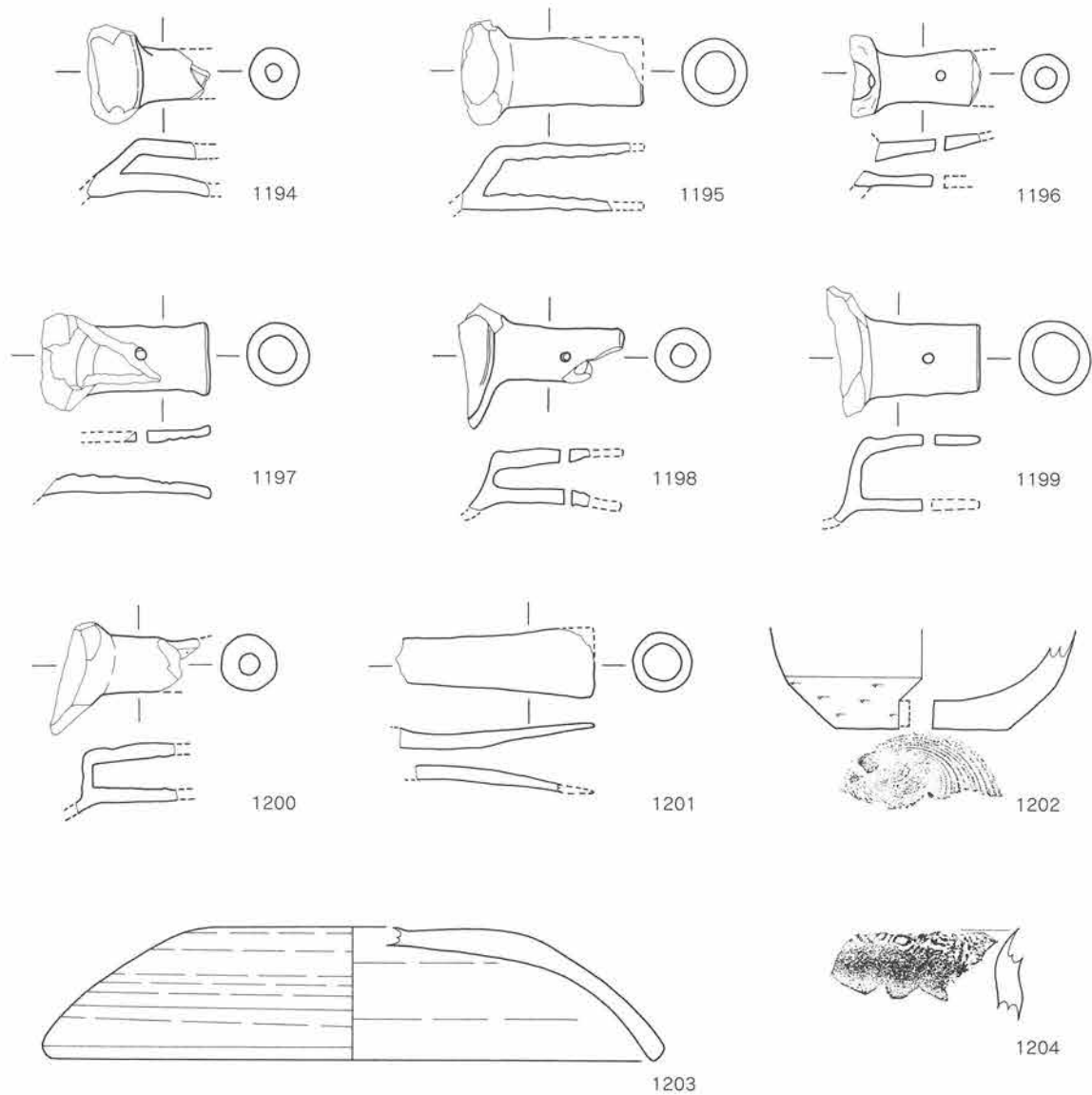
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1174	插鉢	SK2埋土	-	(9.3)	-	灰色	鉄釉	在地	19c	
1175	"	SK15埋土	-	(9.1)	-	赤褐~褐灰色	"	"	"	片口部分
1176	"	SK2埋土	-	(9.0)	-	暗赤褐色	"	"	"	"
1177	"	SE1周辺	-	(8.6)	-	赤褐色	"	"	"	"
1178	"	SK1埋土	-	(7.6)	-	灰褐色	"	"	"	
1179	"	SK15埋土	-	(7.0)	-	灰色	"	"	"	
1180	"	北側粗掘	-	(5.1)	-	"	"	"	"	
1181	"	表採	-	(5.8)	-	赤褐色	"	"	"	
1182	"	SK17埋土、SK15埋土	-	(5.0)	-	赤褐~灰色	"	"	"	
1183	"	SK2埋土、SE1周辺	-	(4.0)	-	赤褐色	"	"	"	
1184	"	SD4埋土	-	(3.9)	-	"	"	"	"	
1185	"	17検出時	-	(3.5)	-	灰色	"	"	"	
1186	"	表採	-	(3.7)	-	"	"	"	"	

第89図 近世・近代の陶器②



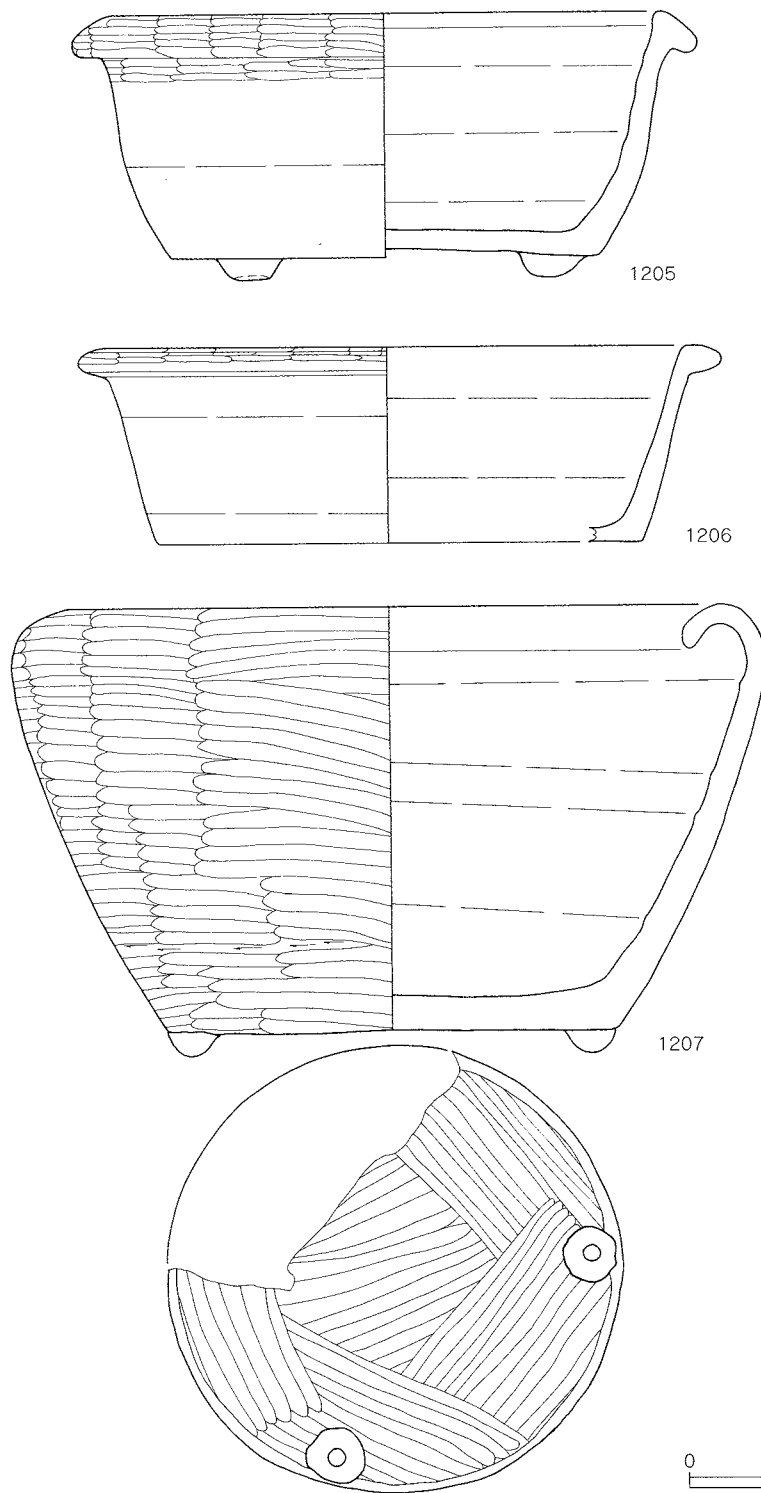
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1187	ほうろく	SK1埋土	17.8	4.5	14.8	黄橙色	鉄釉	在地	19c	
1188	"	SK2埋土	12.2	3.3	10.6	"	透明釉	"	"	
1189	"	SK2埋土	13.0	3.2	9.8	"	"	"	"	胎土に骨針顕著
1190	"	16h検出時	15.3	3.4	12.8	赤褐色	素焼	"	"	
1191	"	SK2埋土	14.2	3.6	11.9	"	透明釉	"	"	
1192	"	SK2埋土	13.0	2.7	10.0	黄橙色	"	"	"	
1193	"	2号樹木痕埋土	13.8	2.7	11.4	"	"	"	"	

第90図 近世・近代の陶器②



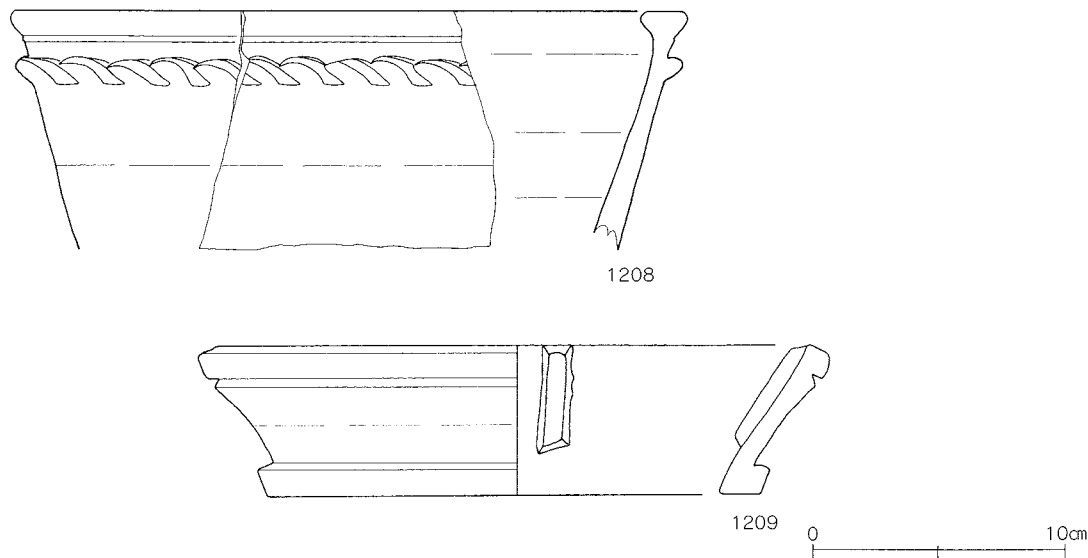
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1194	ほうろく	SK2埋土	-	(2.2)	-	にぶい黄橙色	透明釉	在地	19c	
1195	"	14b検出時	-	(2.8)	-	橙色	"	"	"	
1196	"	2号倒木痕埋土	-	(1.9)	-	黄橙色	"	"	"	
1197	"	SK2埋土	-	(2.6)	-	橙色	素焼	"	"	下側の穴はずれている
1198	"	SK2埋土	-	(2.2)	-	褐灰色	"	"	"	
1199	"	SK15埋土	-	(3.1)	-	にぶい橙色	透明釉	"	"	
1200	"	SK2埋土	-	(2.3)	-	灰白色	素焼	"	"	
1201	"	SK2埋土	-	(2.5)	-	にぶい橙色	透明釉	"	"	
1202	不明	SK1埋土	-	(4.2)	7.3	にぶい黄橙色	"	"	"	内面無釉 底部穿孔
1203	蓋?	SK1埋土	26.2	5.5	12.0	"	素焼	"	"	上部につまみ?の痕跡
1204	火消壺	SK2埋土、SD4埋土	-	(3.8)	-	浅黄橙色	"	"	"	スタンプ状の文様

第91図 近世・近代の陶器②③



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1205	火鉢	SK1埋土	25.0	10.7	19.0	灰褐色	素焼	在地	19c~	外面黒色を呈する
1206	"	SK2埋土	24.0	7.9	19.3	灰白色	"	"	"	脚部欠損か
1207	"	1号倒木痕埋土	26.0	17.9	17.8	浅黄橙色	素焼	在地	19c~	外面浅黄橙色を呈する

第92図 近世・近代の陶器④



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1208	火鉢	SK15埋土	26.8	(9.6)	—	褐灰色	素焼	在地	19c~	外面黒色を呈する
1209	爐の台	SK1埋土	23.4	6.1	19.6	橙色	"	"	"	内面突起3単位

第93図 近世・近代の陶器②

第6節 近世の磁器

近世の下構屋敷に伴う磁器を示す。磁器の中には近世、近代のどちらに属するか明瞭ではないものもあるが、陶器よりは時期区分が明瞭なので、近世の磁器と近代の磁器に分けて述べる。近世の磁器は大半が染付であるが、白磁、青磁も少量ある。

図示した磁器は、17世紀世紀代の磁器（1301～1312）、碗、小碗、碗蓋（1313～1390）、皿（1394～1414）、鉢（1415～1421）、火入れ（1422～1425）、蓋付鉢（1426～1431）、瓶、水滴、紅皿（1432～1441）である。

1 17世紀の磁器（第94図、写真図版76）

17世紀代の磁器は点数が少ないので器種に関係なく一括で示す。いずれも肥前産磁器である。

1301は碗である。口縁部には渦巻きが染付で施され、体部には縦の沈線が施される。時期は1630～1650年頃と推測される。

1302～1304は皿である。1302は口縁部片、1303、1304は底部片である。1303、1304は底径が小さい。いずれも1630～1650年頃と推測される。

1305は小杯である。体部に一重網目文が施される。時期は1650～1690年頃と推測される。

1306は青磁の鉢である。青磁は内外面に施される。内面には筋が放射状に施されている。時期は1630～

1650年頃と推測される。

1307は型おこしの皿である。口縁部内面にひだがあり、見込みには花文の染付が施される。同じ形状のものが図示したものを含め3個体出土している。時期は1650～1690年頃と推測される。

1308は皿である。内面に染付が施される。同じ形状のものが図示したものを含め4個体出土している。透明釉の発色が悪く、白濁した色調を呈する個体もある。時期は1650～1690年頃と推測される。

1309は皿である。小破片のため確証はないが質感から、1650～1690年頃の時期と推測される。

1310、1311は見込み蛇の目釉剥ぎの皿である。どちらも内面に簡略な染付が施され、高台部は露胎である。同じ形状のものが図示した物を含め1310、1311それぞれが4個体出土している。1311は漆継ぎをおこなっている個体もある。時期は17世紀後半～18世紀前半と推測される。

1312は見込み蛇の目釉剥ぎの青磁皿である。内外面青磁で高台部は露胎である。時期は17世紀後半～18世紀前半と推測される。

2 碗、小碗、碗蓋（第95～100図、写真図版96～99）

1313～1328は肥前産の碗である。時期は1690～1780年頃と推測される。体部には草花文を主体とする染付が施されている。1313～1318、1320は高台内に銘が施されている。同一の形状のものが図示したものを含め、1313は7個体、1316は6個体、1321は3個体出土している。また1313には焼継ぎがおこなわれた個体もある。1317は焼継ぎが行われた部分が再び割れてしまい、さらに漆継ぎをおこなっている。

1329は肥前産の端反の碗である。器種は猪口とするのが妥当かもしれない。体部には山水文が施され、その背面には竹の子の文様が描かれる。見込には花、高台内には崩れた字体で「大明年製」と記される。時期は1690～1780年頃と推測される。

1330、1331は肥前産の碗の小破片である。時期は1690～1780年頃と推測される。1332は肥前産の端反りの碗である。1329と似た器形と推測される。時期は1690～1780年頃と推測される。

1333～1338は肥前産の小碗である。いずれも時期は1690～1780年頃と推測される。1333は植物が染付で描かれる。1334は漆継ぎがおこなわれている。1335は口唇部をわずかに欠損する。1336、1337は底部破片である。1338は出土部位に染付部分がない。

1339、1340は肥前産の碗である。内面に文様が有り、いわゆる「うがい茶碗」と推測される。1339は大型で内外面に大根が描かれている。1440は小型で内面にのみ染付がある。またこの個体は漆継ぎがおこなわれている。時期は判別し難いが1690～1780年頃と推測される。

1341は型おこしの肥前産白磁小杯？である。口縁部は輪花になっている。時期は判別し難いが1690～1780年頃と推測される。

1342～1349は肥前産の丸型湯呑碗である。時期は18世紀後半～19世紀初頭と推測される。1342は同じ形状のものが図示したものを含め10個体出土している。この中の幾つかの個体に漆継ぎが行なわれている。1343は漆継ぎが行なわれている。見込には崩れた五弁花が描かれる。1346の見込にも五弁花がみられる。

1350は肥前産の青磁碗である。青磁釉は外面にのみ施され内面には染付が施される。見込みの五弁花はコンニャク印判である。同一の形状の個体が図示したものが5個体出土している。この中の幾つかの個体は焼継ぎがおこなわれている。1351は1350の碗蓋である。外面は青磁釉が施され、内面には染付が施される。五弁花はコンニャク印判である。碗の1350は5個体の出土であったが、1351は1個体のみの出土である。1350、1351の年代は18世紀後半～19世紀初頭と推測される。

1352は肥前産の染付碗である。外面には文字？文、口縁部内面には花菱の文様である。1353は1352の碗蓋である。外面の染付文様は1352の外面と共通である。1352、1353ともに1個体分のみの出土である。時期は18世紀後半～19世紀初頭と推測される。

1354～1358は肥前産の筒型湯呑碗である。時期はいずれも18世紀後半～19世紀初頭と推測される。1354、は外面に雪輪文が施され、見込みに崩れた五弁花が施される。コンニャク印判と推測される。図示したものを含め、同一のものが5個体出土している。この中には漆継ぎをしている個体がある。1355の外面底辺部には「蛟龍（みずち）」と思われるものが一對描かれている。内面見込には五弁花が施される。1356は割菊文が施され、見込みに五弁花の存在が確認できる。1357は外面に花？が描かれる。1358は外面に割菊文が施されるが、1356とは文様構成が若干異なっている。内面口縁部には花菱が施される。

1359は小杯？である。器種は盃とすべきかもしれない。外面に割菊文が施されている。内面は無文である。同一のものが図示したものを含め、4個体出土している。

1360、1361は切込産の碗である。1360と1361は同一個体の可能性が高いが確証はなく、それぞれ別個体として図示した。時期は19世紀前～中葉と推測される。どちらも口縁部外面に筋が数条横位に入っている。染付の色調は青灰色～暗緑色を呈する。胎土は灰色でガラスのような質感で黒い針状の粒が混入する。1361は見込み蛇の目釉剥ぎである。

1362、1362は肥前産と推測される碗である。胎土は白色で他の肥前産磁器のものに似る。時期は1780～1860年頃と推測される。

1364は肥前産の碗蓋である。外面には鳳凰？が3単位、内面には雷文と松竹梅が線描きで描かれている。時期は1820～1860年頃と推測される。なお、この蓋に対応する碗は出土していない。

1365～1372、1375は肥前産の「筒丸碗」である。用途は湯呑と推測される。時期は1820年～1860年頃に位置付けられる。1365は亀とその背面に「壽」の文字が描かれる。同一のものが図示したものを含め8個体出土している。1366、1367は栗の木が描かれているが、文様構成はそれぞれ異なる。1368は口縁部に雷文が施される。1369は焼継ぎがおこなわれている。1370は花、1372は蝶が描かれている。1371の文様は1366、1367と同様に栗の木と推測される。またこの個体は焼継ぎが行なわれている。1375は線描きで文様が描かれており、高台内には銘がある。

1373、1374は「筒丸碗」であるが、胎土がガラスのような質感で肥前産磁器ではない可能性が高い。相当する窯を見出せず、産地は不明である。時期は上記の肥前産のものと同様に1820～1860年頃と推測される。1373、1374はいずれも線描きで文様が描かれており、高台内には銘がある。

1376～1386は瀬戸産または瀬戸産の可能性が高い碗、碗蓋である。胎土は白色でガラスのような質感を呈し、染付部分が盛り上がったようになっている個体が多い。時期はいずれも19世紀前半と推測される。1376は草花文の端反碗である。同一のものが図示したものを含め3個体出土している。1377は草花と兎？の文様の端反碗である。口唇部に口紅が施されている。1378の染付文様には「壽」の文字がみえる。端反碗で漆継ぎが施されている。1379は碗の下部破片である。染付の盛り上がりは顕著ではなく、東北地方産の磁器の可能性もある。1380は碗蓋である。端部がやや反っている。二次被熱のため器面が荒れている。1381は小振りな端反碗である。体部に3箇所印刻で花を表し、その上に染付を施している。同一のものが図示したものを含め5個体出土している。1382、1383は端反碗の口縁部片である。どちらも染付の盛り上がりは顕著である。1382は漆継ぎを行なっている。1384は小振りな端反碗、1385、1386は碗の底部片である。

1387、1388は東北地方産と推測される端反碗である。時期は19世紀前～中葉と推測される。どちらも

染付は体部に「よろけ縞」、見込には「壽」？が施され共通である。しかし器形は1388の底径が大きく、器高が低い。胎土は白色のガラス状の質感で共通しており、同じ窯の製品と推測される。1387は同一のものが図示したものを含め3個体出土している。この中には漆継ぎが行なわれた個体もある。

1389、1390は平清水産と推測される端反碗である。染付の呉須はどちらも工業精製されたコバルトの色調を呈する。胎土は白色のガラス状の質感である。時期は19世紀中葉と推測される。

1391は東北地方産と推測される碗である。口縁部は小さい玉縁状になっている。体部には印刻で花？を表し、その上に染付を施している。透明釉の発色が悪く、白濁した色調を呈している。時期は確定できないが、19世紀中葉と推測される。

1392、1393は微細片ではあるが碗と思われる。掘立柱建物の柱穴から出土したものである。いずれも肥前産と推測されるが確証はない。1392は内外面青磁である。詳細な時期は不明であるが、どちらも近世と推測される。

3 皿（第101～103図、写真図版100、101）

1394、1395は肥前産の皿である。時期は1690～1780年頃と推測される。1394は内面に草花文が施される。底部には「元」の銘とハリ支えの痕が1つある。同一のものが、図示したものを含め8個体出土している。これらには焼継ぎを行なっている個体がある。さらに焼継ぎした部分が再び剥がれ、そこに漆継ぎを行なっている個体もある。1395は内面に山川？と花？が描かれている。底面にはハリ支えの痕跡が1つある。同一のものが、図示したものを含め5個体出土している。

1396～1399は肥前産の身がやや深い皿である。時期はいずれも1690～1780年頃と推測される。1396と1397は見込み蛇の目釉剥ぎである。外面には文様が施されない。1397は見込み中央に五弁花が施される。1398は口縁部が輪花になっている。外面にも唐草文が描かれ、やや上手の皿である。1399は見込み蛇の目釉剥ぎである。厚く下手な皿である。

1400は肥前産の皿の小片である。内面に井桁文が施される。出土片に見込みの部位が含まれないが、見込み蛇の目釉剥ぎの器形である。時期は1690～1780年と推測される。

1401～1404は肥前産の皿である。時期はいずれも1690～1780年頃と推測される。1401は小皿である。口縁部が小さい玉縁状になっており、内面には蝶文が描かれる。透明釉の発色が悪く白濁している。1402は底部小破片、1403、1404は口縁部破片である。1404は僅かに端反りになっている。

1405は肥前産の型おこしの皿である。口縁部は輪花になっている。内面にはもみじ文がコンニャク印判で施される。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。1個体は漆継ぎが施されている。どちらの個体も透明釉の発色が悪く白濁した色調を呈する。時期は1690～1780年頃と推測される。

1406は肥前産の身が深い皿である。口縁部は端反り、見込み蛇の目釉剥ぎである。時期は1690～1780年頃と推測される。

1407は肥前産の型おこしの「小紋皿」である。内面には型紙刷りで文様が施される。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。時期は1690～1780年頃と推測される。

1408、1409は肥前産の「凹蛇の目高台」の皿である。時期は18世紀後半～19世紀初頭頃と推測される。1408は口縁部が輪花になっている。外面には唐草文、内面には蝶、菊、梅の文様が配される。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。1409は底部破片である。見込みに松竹梅の文様が施される。

1410は肥前産の角型の皿である。内面には「蛟龍」が描かれその周囲に雲を吹き墨技法で表している。同

一のものが図示したものを含め2個体出土している。時期は1780～1860年頃と推測される。

1411は身の深い皿である。胎土がガラスのような質感であり、東北地方産の磁器と推測される。型おこしの皿で口縁部は輪花になっている。底部は凹蛇の目高台である。内面には山水楼閣文が描かれる。呉須の色調は工業精製のコバルト色を呈する。時期は19世紀前～中葉と推測される。

1412は肥前産の身の深い皿である。型おこしで口縁部は輪花になっている。底部は凹蛇の目高台である。内面には氷列文と松竹梅が描かれる。時期は19世紀前～中葉と推測される。

1413、1414は東北地方産の型おこし白磁皿である。どちらも角型で、内面に型で花などの文様が描かれ、目痕がみられる。1413の胎土は灰色で光沢がない。1414の胎土は白色でガラスのような質感である。1413の透明釉は発色が悪く白濁している。1413は同一のものが図示したものを含めて2個体出土している。時期は19世紀前～中葉と推測される。

4 鉢（第103、104図、写真図版101）

1415は肥前産の型おこしの鉢である。口縁部は隣花になっている。外面には唐草、内面には植物、渦巻き文が描かれる。時期は1690～1780年頃と推測される。

1416～1418は肥前産の青磁鉢である。いずれも青磁釉は外面のみで、内面には染付が施される。底部は凹蛇の目高台である。時期は18世紀後半～19世紀初頭頃と推測される。

1419は青磁の鉢、1420は青磁の鉢または皿である。どちらも内外面に青磁釉が厚く施され、胎土は白色でガラスのような質感であり、肥前産の可能性は低いと思われる。しかし、両者ともに該当する産地を見出せず製作地は不明である。また時期も不明である。

1421は肥前産の「角鉢」である。型おこし成型である。口縁部はやや端反り、内外面に染付が施される。時期は1780～1860年頃と推測される。

5 火入れ（第104図、写真図版102）

1422は肥前産の火入れである。外面は滝と波立つ水が描かれている。水の中の渦は沈線で施されている。この個体は漆継ぎが行なわれている。また内面にも全面に透明釉が施されている。時期は1690～1780年と推測される。

1423は肥前産の火入れである。外面に山水楼閣文が描かれている。底部は凹蛇の目高台である。内面は上半部には透明釉が施されているが下半部は無釉である。時期は18世紀後半～19世紀初頭と推測される。

1424は肥前産の火入れである。外面にみじん唐草文が施される。内面口縁部には花菱文が施され、内面下半は無釉である。底部は凹蛇の目高台である。時期は18世紀後半～19世紀初頭と推測される。

1425は肥前産の火入れと思われる。口唇部には口紅が施される。近世のものであるが、詳細な時期は不明である。

6 蓋付鉢（第104、105図、写真図版102）

1426、1427は肥前産の蓋付鉢である。1426は鉢、1427は組み合わせの蓋である。胎土、染付の色調は両者同じである。1426は体部に白抜きで鼠、植物の葉が表されている。口唇部は無釉である。1427も白抜きで文様を表すが、欠損のため図柄は判断できない。つまみ部分も欠損している。時期は1690～1780年頃と推測される。

1428～1431は肥前産の小型の蓋付き鉢である。いずれも口唇部が無釉で、蓋が付くと判断できる。1428は筒型碗と共通する器形であり、時期も18世紀後半～19世紀初頭と推測される。1429～1431は時期の特定が難しいが1780～1860年頃と推測される。1429は氷裂文、1430は山水文が描かれる。1431は細片のため絵柄は不明である。

7 瓶、徳利 (第105図、写真図版102)

1432は肥前産の瓶の口縁部破片である。釉の発色が悪く白濁した色調を呈する。時期は1690～1780年頃と推測される。1433、1434は肥前産の瓶である。どちらも首の長い「鶴首瓶」と推測される。時期は1780年～1860年頃と推測される。1433は外面には若杉の文様が描かれる。内面は無釉である。1434は底部が碁笥底状になっている。内面は無釉である。

1435は肥前産の青磁瓶である。外面に横走る沈線が多数施され、その上に青磁釉が施される。内面は無釉である。時期は1690～1780年頃と推測される。

1436は肥前産の瓶である。2破片から実測図上で復元した。内面は肩部以下が無釉で、器面が橙色の色調を呈する。外面の器面の色調は灰色を呈する。時期は1690～1780年頃と推測される。

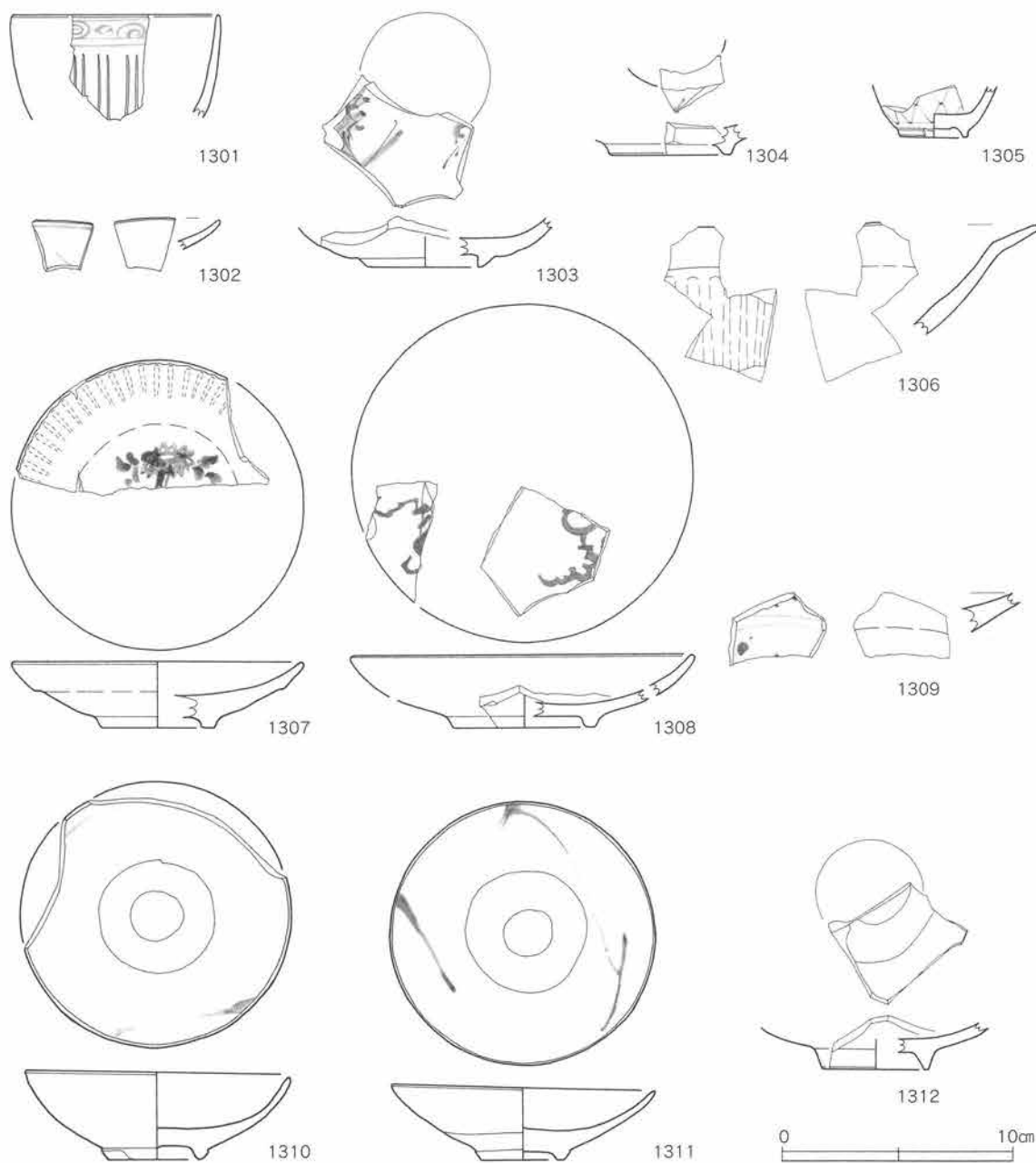
1437は切込産の磁器に似るが確証はない。器種は爛徳利で、数破片から実測図上で器形を復元した。胎土は灰白色でガラスのような光沢は無い。外面の透明釉部分の色調は灰色を呈する。内面は口縁部を除き無釉である。無釉部分の色調は肌色を呈する。染付の呉須の色は暗灰色である。体部には染付で文字が施されるが欠損のため読めない部分がある。時期はいずれの産地であれ19世紀前～中葉と推測される。

1438、1439は切込産の爛徳利である。時期は19世紀前～中葉と推測される。1438は外面に松の文様が描かれている。内面は口縁部を除き無釉である。透明釉の部分は灰色を呈する。底面には回転ヘラケズリ調整が同心円状にみられる。口縁部の片口部分は欠損している。1439は外面と内面上半に瑠璃釉が施される。底面は露胎で、墨汁が付着するが文字ではないようである。片口部分は欠損している。

8 水滴、紅皿 (第105図、写真図版102)

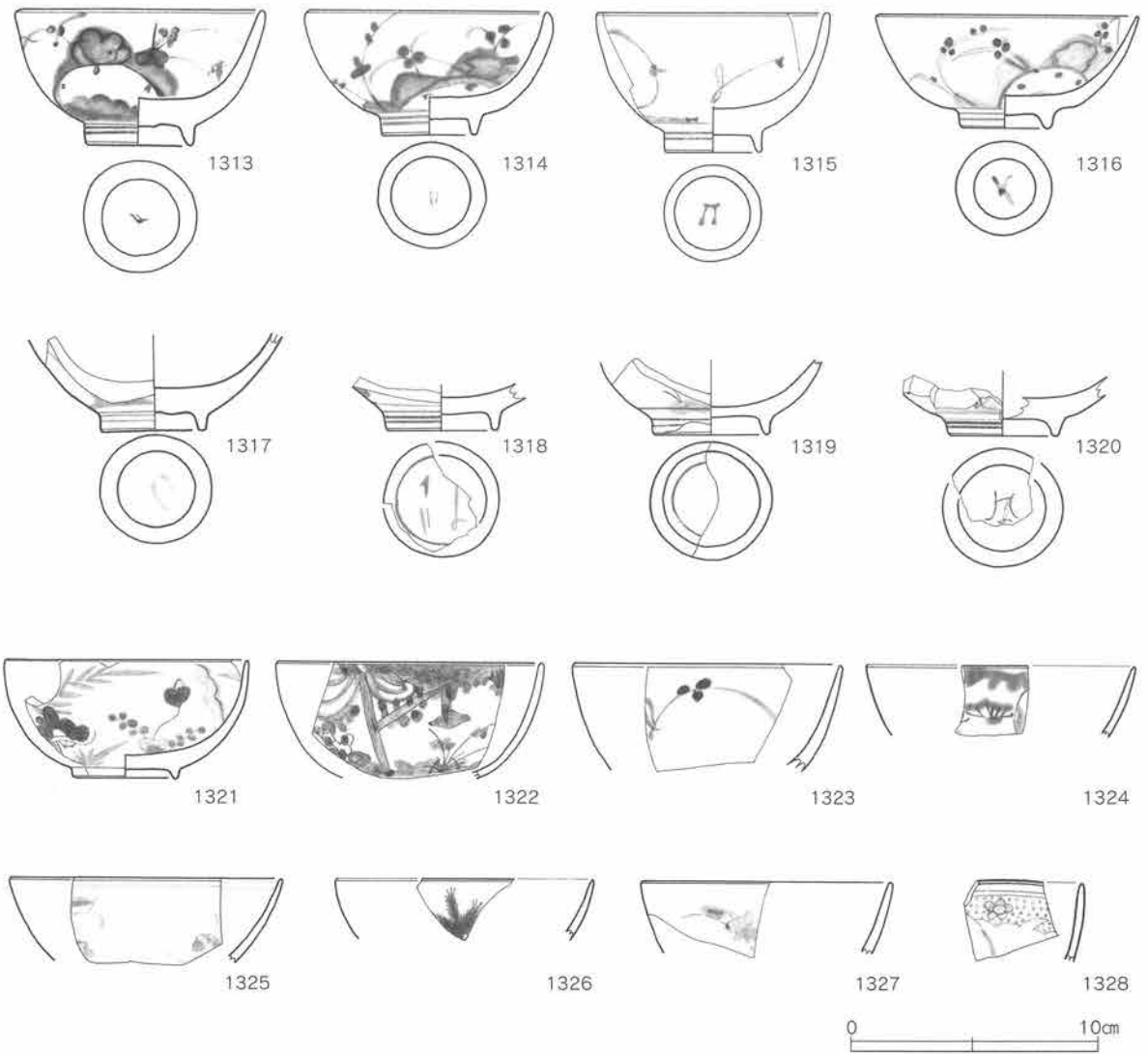
1432は水滴である。胎土は白色で黒い粒が混入する。確証はないが肥前産と推測される。型おこしで、鮑貝に白波がかかる形状である。鮑貝の部分には褐釉、白波の部分には透明釉と一部瑠璃釉がかかる。内面は無釉である。時期は判別が難しいが、1780～1860年頃と推測される。

1441は紅皿である。産地ははっきりしないが肥前産の可能性が高い。内面と外面上半に透明釉が施される。型おこしで、口唇部は平坦になっている。時期は1780～1860年頃と推測される。



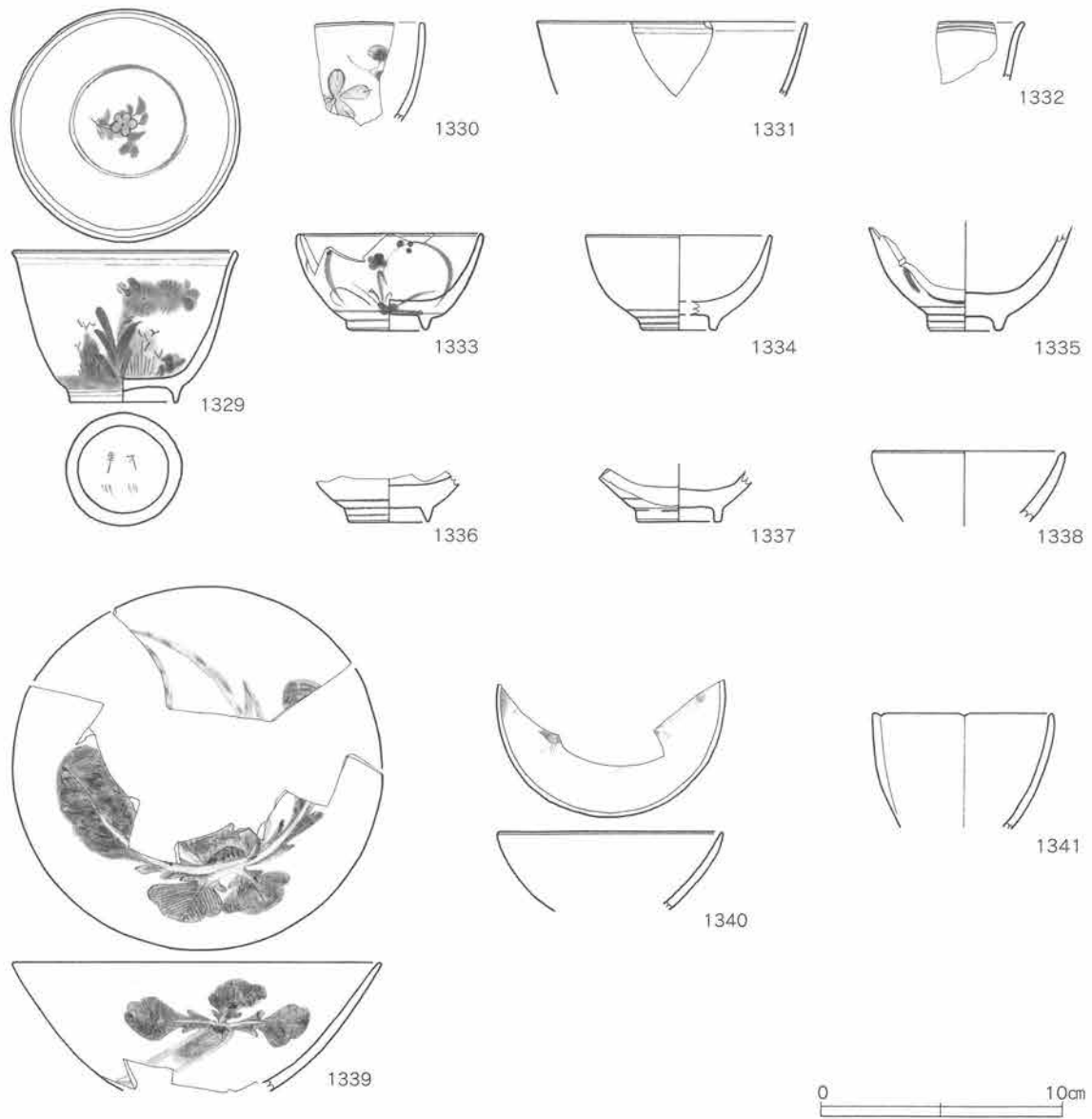
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1301	碗	13a検出時	9.0	(4.6)	—	白色、黒い粒	染付	肥前	1630~1650	
1302	皿	P357掘方 (SB8)	—	(1.3)	—	—	—	—	—	
1303	—	北側粗掘	—	(2.2)	4.6	—	—	—	—	
1304	—	SK15埋土	—	(1.5)	5.3	—	—	—	—	
1305	小杯	SD10埋土	—	(2.3)	3.0	白色	—	—	1650~1690	一重網目文
1306	皿	SK15埋土	—	(4.9)	—	白色	青磁	—	1630~1650	内外面青磁
1307	—	SK3埋土	12.8	(2.9)	5.0	—	染付	—	1650~1690	3個体
1308	—	SK3埋土	15.0	(3.2)	6.2	—	—	—	—	4個体
1309	—	表採	—	(1.7)	—	—	—	—	1650~1690か	
1310	—	SK4埋土	11.7	3.9	4.2	—	—	—	17c後半~18c前半	4個体
1311	—	SK2埋土	11.6	3.4	3.6	—	—	—	—	4個体 漆継ぎ
1312	—	表採	—	(2.1)	4.6	—	青磁	—	—	内外面青磁

第94図 近世の磁器①



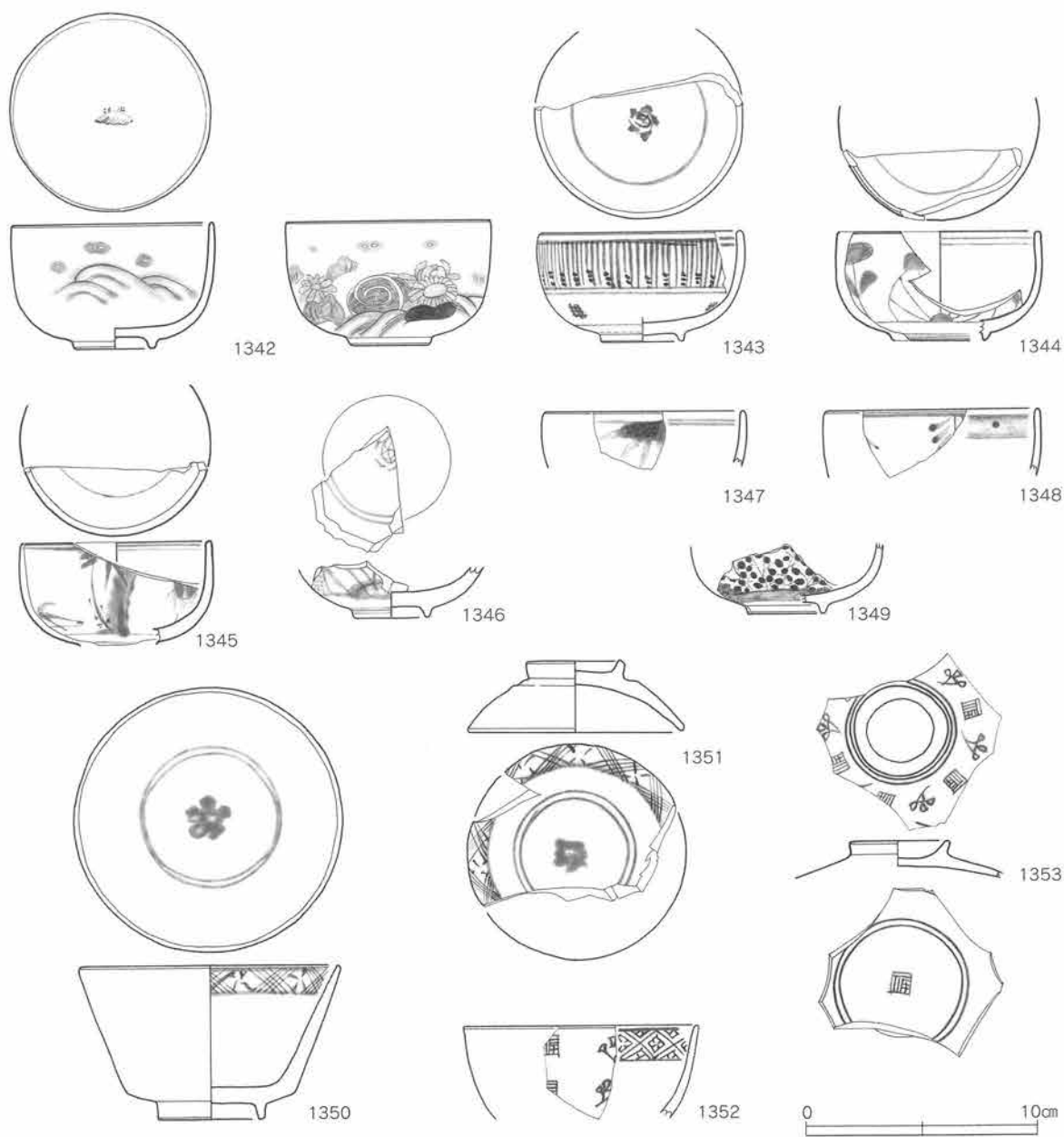
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1313	碗	SK1埋土、SK2埋土	10.0	5.7	4.2	白色	染付	肥前	1690~1780	7個体 焼継ぎ
1314	"	2号倒木痕埋土	9.7	5.3	3.8	"	"	"	"	
1315	"	SK15埋土	9.6	5.8	4.0	"	"	"	"	
1316	"	SK2埋土	10.7	4.7	3.8	"	"	"	"	6個体
1317	"	SD4埋土	-	(4.0)	3.7	"	"	"	"	焼継ぎ 漆継ぎ
1318	"	SK15埋土	-	(2.3)	4.6	"	"	"	"	
1319	"	表採	-	(3.1)	4.6	"	"	"	"	
1320	"	14b検出時	-	(2.5)	4.4	"	"	"	"	
1321	"	SK15埋土	10.0	4.9	4.3	"	"	"	"	3個体
1322	"	SK2埋土	11.0	(4.9)	-	白色	"	"	"	
1323	"	SD1埋土	11.0	(4.4)	-	"	"	"	"	
1324	"	SK15埋土	10.8	(2.9)	-	"	"	"	"	
1325	"	2号倒木痕埋土	11.2	(3.6)	-	"	"	"	"	
1326	"	SK15埋土	10.4	(2.5)	-	"	"	"	"	
1327	"	SK15埋土	10.2	(3.0)	-	"	"	"	"	
1328	"	SK29埋土	-	(3.4)	-	"	"	"	"	

第95図 近世の磁器②



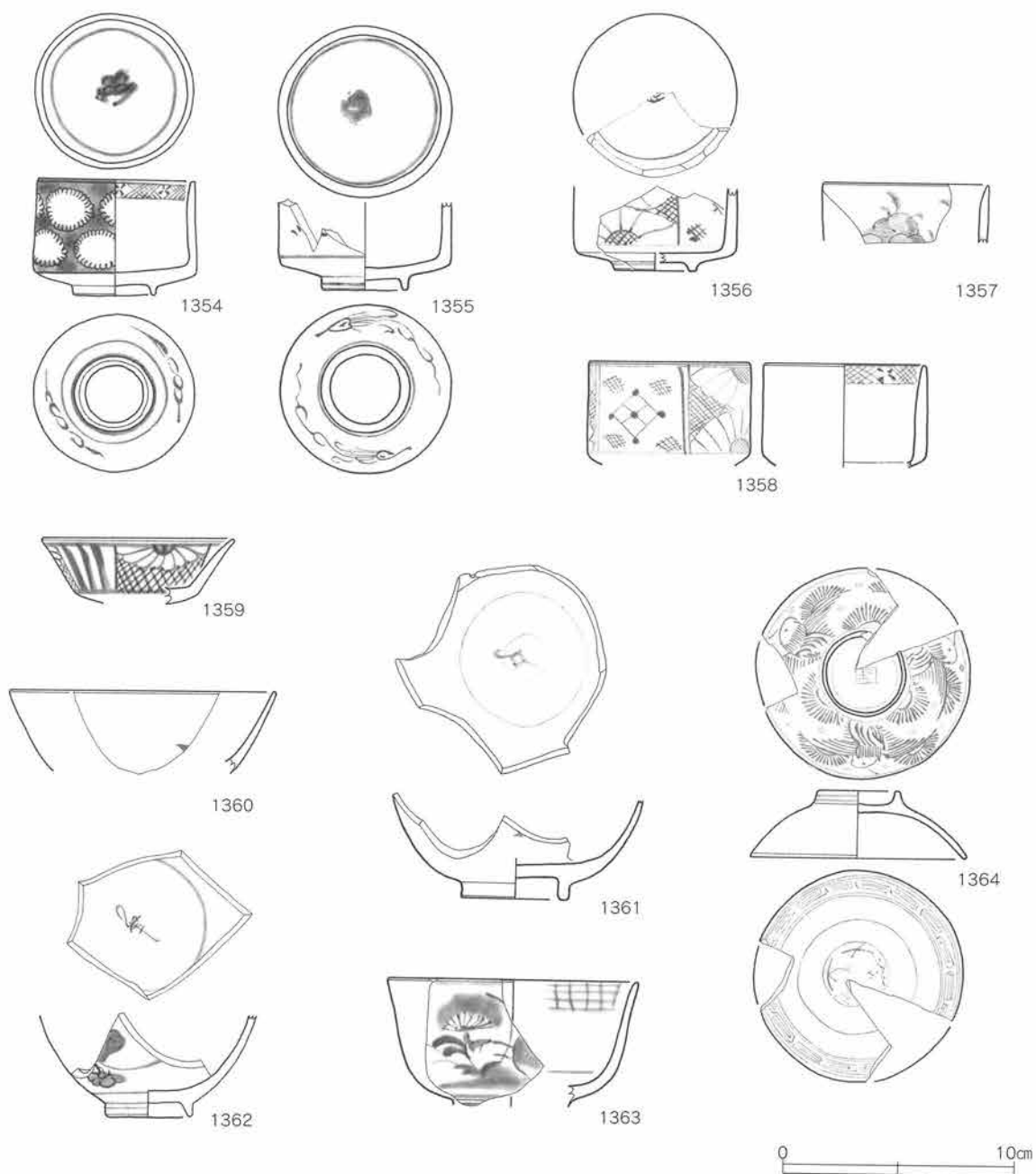
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1329	碗	SK1埋土	9.0	6.4	4.4	白色	染付	肥前	1690~1780	銘 大明年製
1330	"	2号倒木痕埋土	-	(4.2)	-	"	"	"	"	"
1331	"	SK15埋土	11.2	(3.2)	-	白色、黒い粒	"	"	"	"
1332	"	SK15埋土	-	(2.5)	-	白色	"	"	"	"
1333	小碗	2号倒木痕埋土	7.7	4.1	3.2	"	"	"	"	"
1334	"	SK1埋土	7.7	4.0	3.2	"	"	"	"	漆継ぎ
1335	"	16h検出時	-	(4.3)	3.0	"	"	"	"	"
1336	"	表採	-	(2.1)	3.3	"	"	"	"	"
1337	"	2号倒木痕埋土	-	(2.2)	3.4	"	"	"	"	"
1338	"	SK15埋土	8.0	(3.0)	-	"	"	"	"	"
1339	碗	SK1埋土	15.3	(5.5)	-	"	"	"	1690~1780?	うがい茶碗
1340	"	表採	9.3	(3.3)	-	"	"	"	"	漆継ぎ
1341	小杯?	SK2埋土	7.5	(4.9)	-	"	白磁	"	"	型おこし

第96図 近世の磁器③



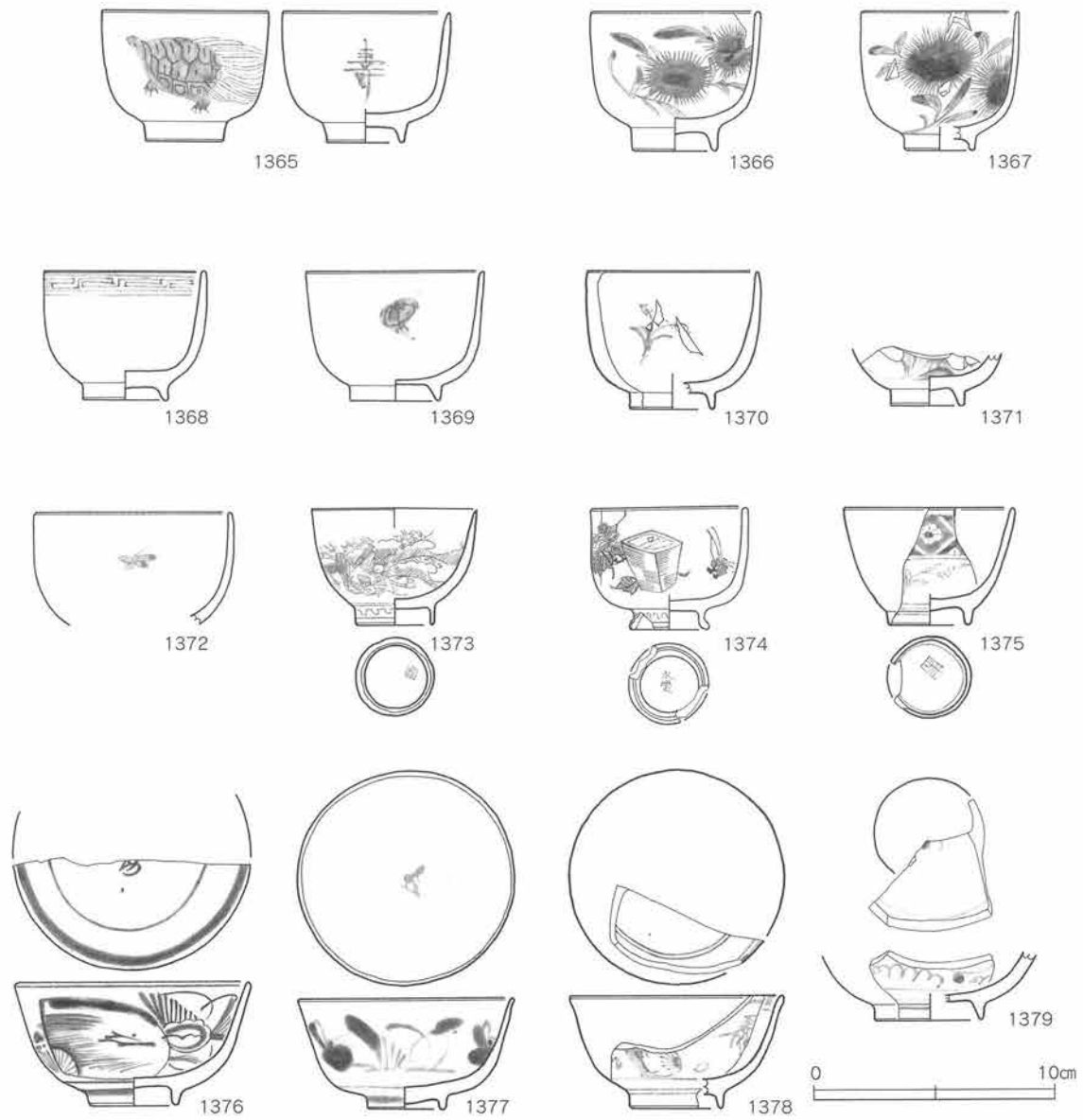
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1342	碗	SK1埋土	8.9	5.5	3.4	白色	染付	肥前	18c後半~19c初	10個体 漆継ぎ
1343	"	SK1埋土	8.9	4.9	3.6	"	"	"	"	漆継ぎ
1344	"	SK2埋土	8.8	4.8	4.0	"	"	"	"	
1345	"	SD3埋土	8.2	(4.5)	-	"	"	"	"	
1346	"	表採	-	2.5	3.2	白色	"	"	"	
1347	"	SK2埋土	8.8	(2.5)	-	"	"	"	"	
1348	"	SK15埋土	9.4	(3.0)	-	"	"	"	"	
1349	"	表採	-	(3.0)	3.4	白~橙色	"	"	"	
1350	"	SK1埋土	11.2	6.8	4.6	白色	青磁、染付	"	"	5個体 焼継ぎ
1351	碗蓋	SK1埋土	9.3	3.1	4.1	"	"	"	"	1350の蓋
1352	碗	SK1埋土	10.2	(4.1)	-	"	染付	"	"	
1353	碗蓋	SK1埋土	-	(1.7)	4.2	"	"	"	"	1352の蓋

第97図 近世の磁器④



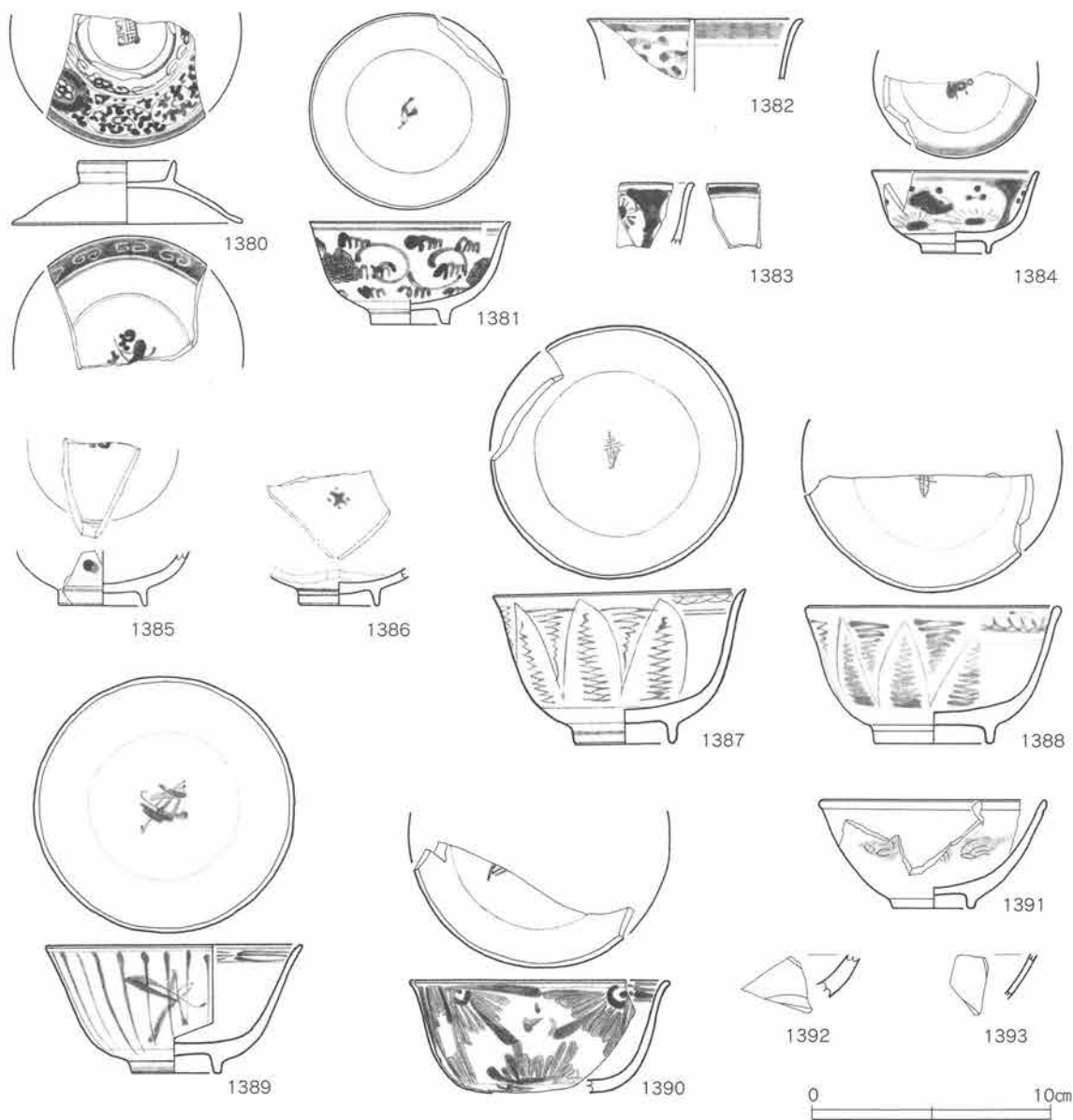
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1354	碗	SK2埋土	6.8	5.2	3.5	白色	染付	肥前	18c後半~19c初	5個体 漆継ぎ
1355	"	表採	-	(3.9)	3.7	"	"	"	"	
1356	"	表採	-	(3.7)	3.6	"	"	"	"	
1357	"	2号倒木痕埋土・SK2埋土	7.2	(2.7)	-	白色、黒い粒	"	"	"	
1358	"	SK2埋土	7.2	(4.6)	-	白色	"	"	"	
1359	"	SK2埋土	8.4	(2.9)	-	白色、黒い粒	"	"	"	4個体
1360	"	SK15埋土	11.7	(3.6)	-	灰色、ガラス質	"	切込	19c前半~中葉	
1361	"	表採	-	(5.5)	4.7	"	"	"	"	見込み蛇目釉剥ぎ
1362	"	SK2埋土	-	(4.5)	3.7	白色	"	肥前?	19c前半	
1363	"	2号倒木痕埋土	10.9	(5.6)	-	"	"	肥前?	19c前半	
1364	碗蓋	SK1埋土	9.4	3.0	3.5	"	"	肥前	"	

第98図 近世の磁器⑤



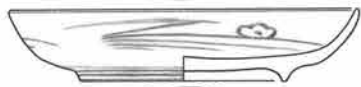
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1365	小碗	SK2埋土	7.0	5.6	3.3	白色	染付	肥前	1820~1860	8個体
1366	"	SK1埋土	7.2	5.9	3.6	白色、黒い粒	"	"	"	
1367	"	表採	6.7	5.9	3.0	"	"	"	"	1366と文様異なる
1368	"	1号倒木痕埋土	6.8	5.5	3.5	白色	"	"	"	
1369	"	SK1埋土	7.3	5.5	3.6	"	"	"	"	焼継ぎ
1370	"	14h検出時	7.3	5.9	3.6	"	"	"	"	
1371	"	表採	-	(2.5)	3.0	"	"	"	"	焼継ぎ
1372	"	SK2埋土	8.0	(4.8)	-	"	"	"	"	
1373	"	SK1埋土	6.9	5.0	3.2	白色、ガラス質	"	不明	"	底面 銘あり
1374	"	SK1埋土	6.6	5.3	3.4	"	"	"	"	
1375	"	SK1埋土	7.2	5.0	3.4	白色	"	肥前	"	"
1376	碗	SK1埋土	9.8	5.2	3.6	白色、ガラス質	"	瀬戸	19c前半	3個体
1377	"	SK1埋土	8.9	4.7	3.0	"	"	"	"	口紅
1378	"	表採	9.0	4.8	4.0	"	"	"	"	漆継ぎ
1379	"	北側掘	-	(2.8)	4.6	"	"	瀬戸?	"	

第99図 近世の磁器⑥

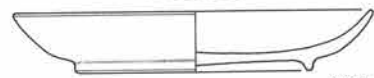
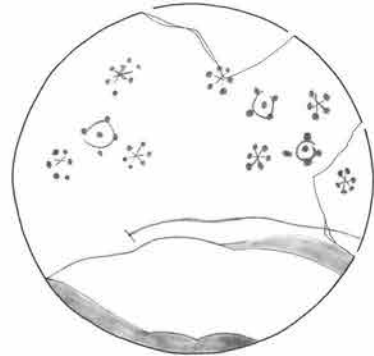
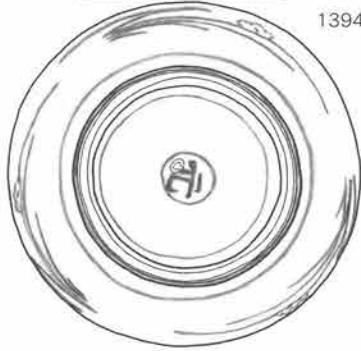


番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1380	碗蓋	表採	9.8	2.7	4.1	白色、ガラス質	染付	瀬戸	19c前半	
1381	碗	SK1埋土	8.4	4.4	3.3	"	"	"	"	5個体
1382	"	SK2埋土	9.2	(2.6)	-	"	"	"	"	漆継ぎ
1383	"	表採	-	(2.8)	-	"	"	"	"	
1384	"	SK1埋土	7.1	3.5	2.9	"	"	"	"	
1385	"	表採	-	(2.4)	3.8	"	"	"	"	
1386	"	31b検出時	-	(1.6)	3.4	"	"	"	"	
1387	"	SK1埋土	10.7	6.5	4.2	"	"	東北地方	19c前~中葉	3個体 漆継ぎ
1388	"	SK1埋土	10.6	6.0	4.8	"	"	"	"	1387と器形異なる
1389	"	SK1埋土	10.9	5.5	3.7	"	"	平清水	19c中葉	染付工業コバルト
1390	"	SK1埋土	11.0	(4.8)	-	"	"	"	"	"
1391	"	2号倒木痕埋土	9.6	4.6	3.4	白色	"	東北地方?	"	文様刻印
1392	"	P392埋土 (SB13)	-	(1.8)	-	白~橙色	青磁	肥前?	近世	時期不詳
1393	"	P363掘方 (SB9)	-	(1.9)	-	白色	白磁	肥前?	近世か	"

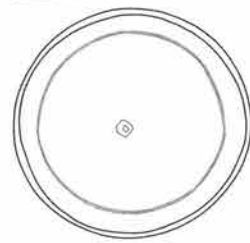
第100図 近世の磁器⑦



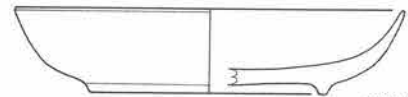
1394



1395



1396

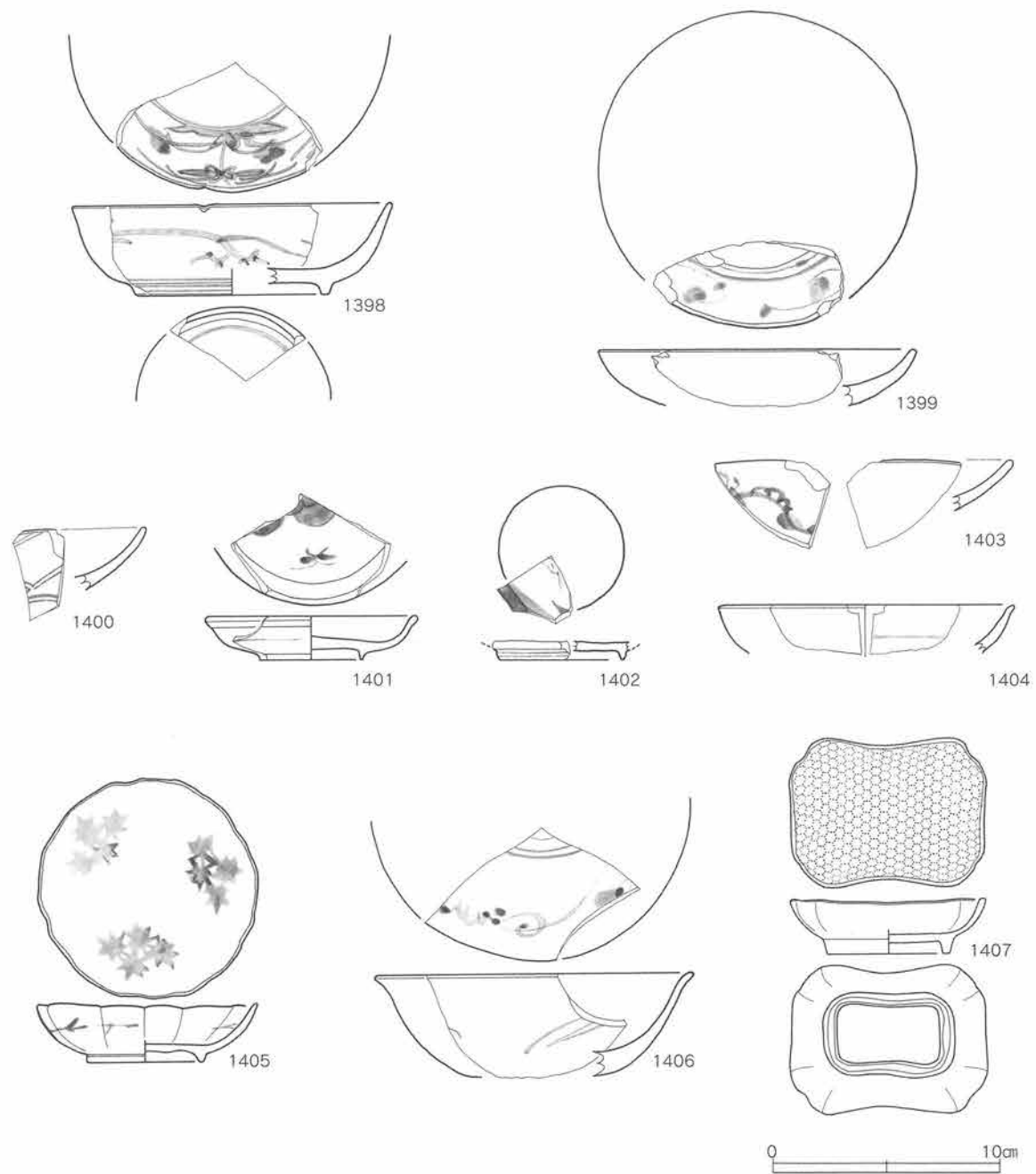


1397



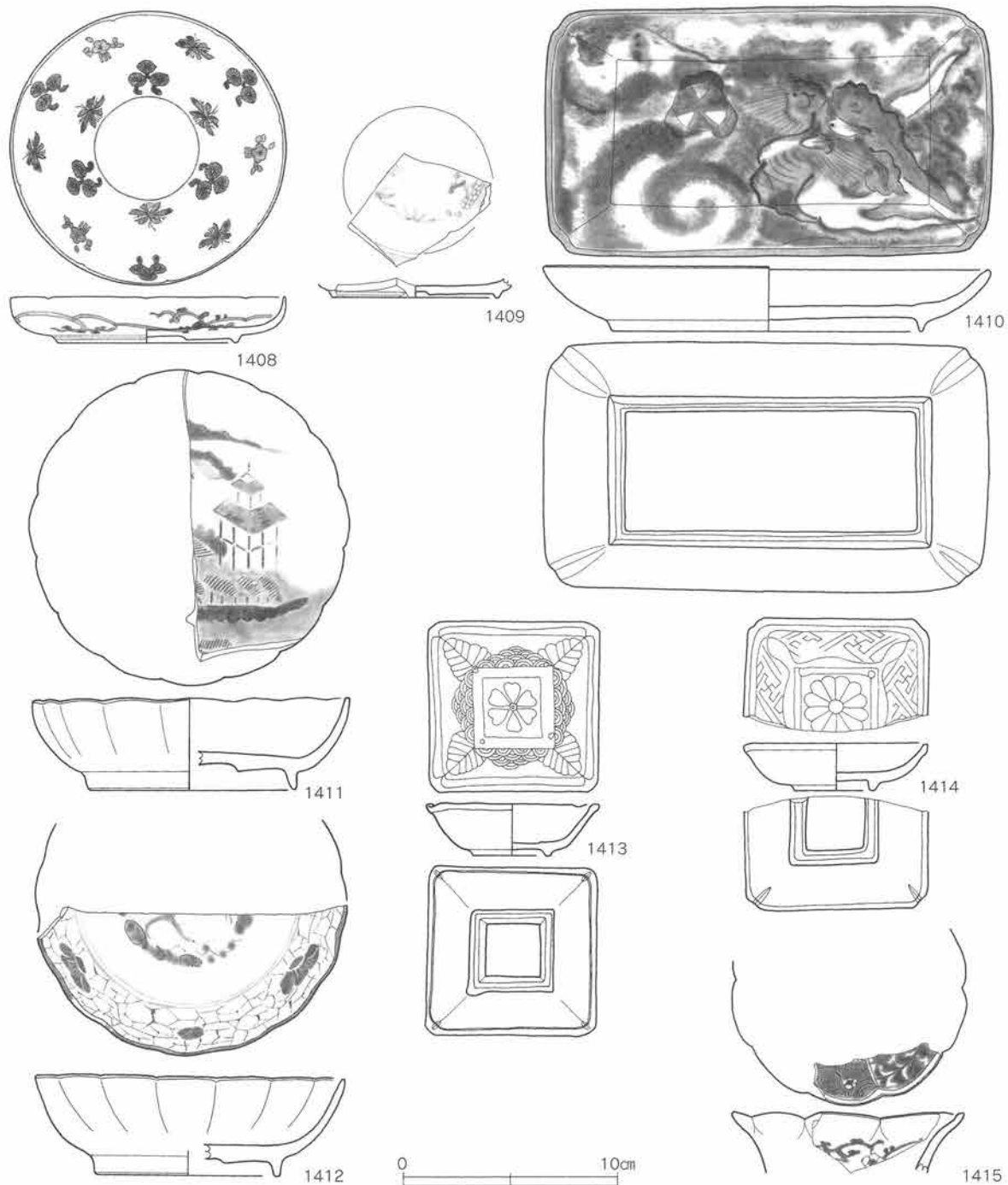
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1394	皿	SK1埋土	13.7	2.9	8.1	白色	染付	肥前	1690~1780	8個体 漆、焼継ぎ
1395	"	SK15埋土・SK2埋土	14.2	2.4	9.4	"	"	"	"	5個体
1396	"	SK15埋土	19.4	3.8	10.0	白色、黒い粒	"	"	"	見込蛇目釉剥ぎ
1397	"	表採	15.4	3.4	9.4	白色	"	"	"	"

第101図 近世の磁器⑧



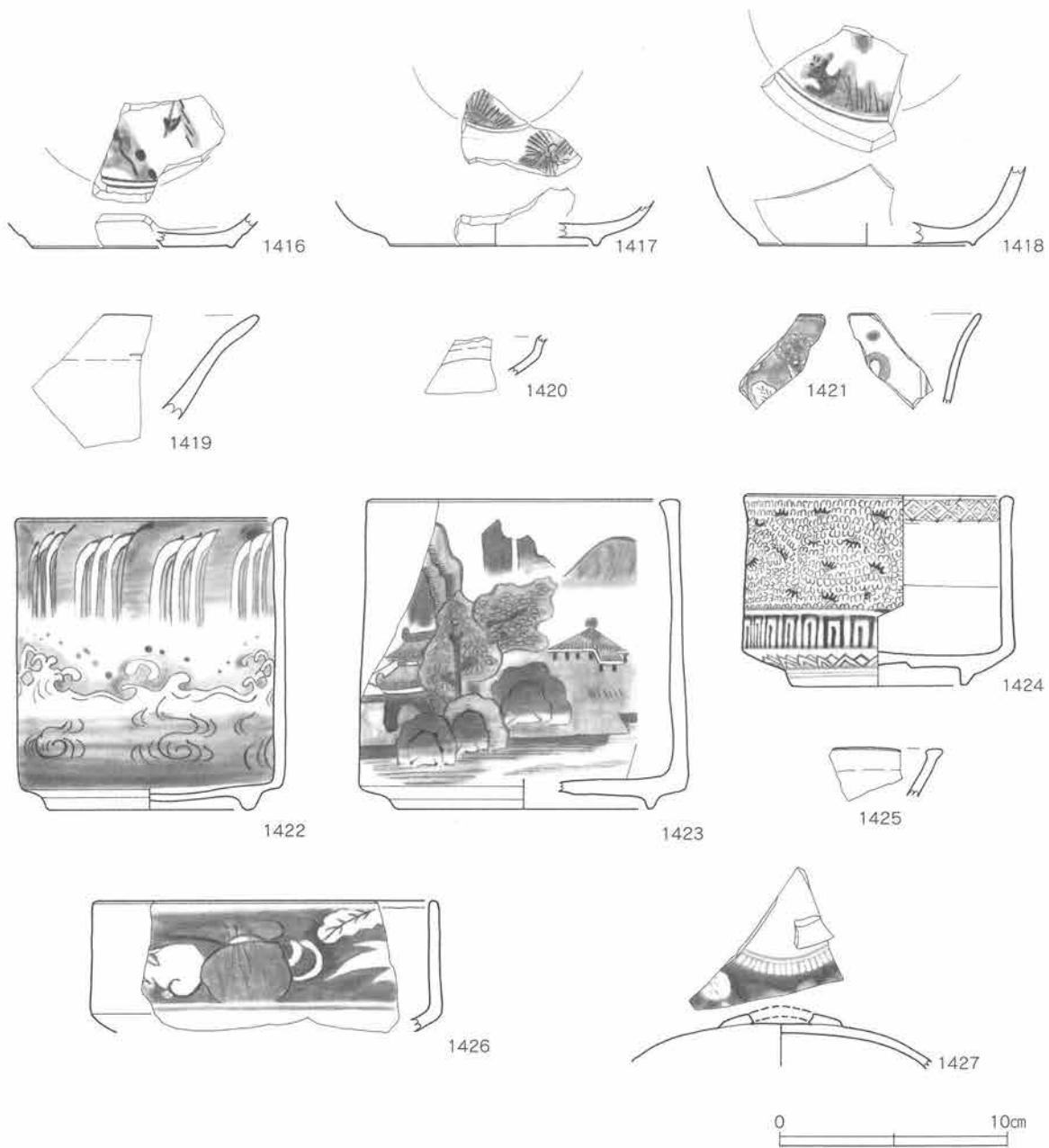
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1398	皿	SK1埋土	14.2	4.1	8.6	灰色	染付	肥前	1690~1780	輪花皿
1399	"	1号倒木痕埋土	14.2	(2.6)	-	白色	"	"	"	見込蛇目釉剥ぎ
1400	"	攪乱 (17b)	-	(2.8)	-	灰色	"	"	"	
1401	"	SK2埋土	9.3	2.0	4.6	白色	"	"	"	
1402	"	北側粗掘	-	(0.9)	5.6	白色	"	"	"	
1403	"	SK1埋土	-	(2.3)	-	白色、黒い粒	"	"	"	
1404	"	SK15埋土	13.0	(2.2)	-	白色	"	"	"	
1405	"	SK2埋土	9.8	2.7	5.2	白色	"	"	"	2個体 コンニャク印判
1406	"	表採	14.2	(4.7)	-	"	"	"	"	見込蛇目釉剥ぎ
1407	"	SK1埋土	8.7	2.5	5.4	"	"	"	"	2個体 型紙刷り

第102図 近世の磁器⑨



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1408	皿	SK15埋土	12.8	2.2	8.4	白色	染付	肥前	18c後半~19c初	2個体 凹蛇目高台
1409	"	SK15埋土	-	(0.9)	7.7	白色, 黒い粒	"	"	"	凹蛇目高台
1410	"	SK1埋土	20.7	3.1	14.4	白色, 黒い粒	"	"	1780~1860	2個体
1411	"	SK1埋土	14.8	4.3	9.4	白色, ガラス質	"	東北地方?	19c前~中葉	凹蛇目高台
1412	"	SK1埋土	14.4	4.7	8.5	白色	"	肥前	"	"
1413	"	1号倒木痕埋土	8.0	2.4	3.7	灰色	白磁	東北地方	"	2個体 型おこし皿
1414	"	SK1埋土	8.5	2.2	3.7	白色, ガラス質	"	"	"	型おこし皿
1415	鉢	表採	10.8	(2.9)	-	白色	染付	肥前	1690~1780	型おこし

第103図 近世の磁器⑩



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1416	鉢	北側粗掘	8.8	(1.5)	—	白色	青磁、染付	肥前	18c後半～19c前半	外面青磁 凹蛇目高台
1417	"	表採	9.2	(2.6)	9.2	"	"	"	"	"
1418	"	北側粗掘	—	(3.6)	9.4	"	"	"	"	"
1419	"	表採	—	(4.7)	—	白色、ガラス質	青磁	不明	時期不明	内外面青磁
1420	皿?	SK15埋土	—	(1.7)	—	"	"	不明	"	"
1421	鉢	表採	—	(4.0)	—	白色、黒い粒	染付	"	1780～1860	多角形の鉢
1422	火入れ	SK1埋土	11.9	13.0	9.0	白色	"	"	1690～1780	漆継ぎ
1423	"	SK1埋土	13.6	13.8	11.2	"	"	"	18c後半～19c前半	内面下半無釉
1424	"	SK1埋土	11.7	8.6	7.6	"	"	"	"	"
1425	"	SK15埋土	—	(2.1)	—	—	白磁?	"	時期不明	口唇部 鉄釉
1426	蓋付鉢	SK1埋土	15.0	(5.8)	—	白色	染付	"	1690～1780?	"
1427	蓋	13a粗掘	—	(2.5)	—	"	"	"	"	1426の蓋

第104図 近世の磁器①



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
1428	蓋付鉢	SE1周辺	6.8	4.8	4.4	白色	染付	肥前	18c後半~19c後半	
1429	"	SK1埋土	6.0	(2.0)	-	白色	"	"	1780~1860	
1430	"	SK2埋土	6.4	4.2	4.0	白色	"	"	"	漆継ぎ
1431	"	表探	-	(3.0)	-	白色	"	"	"	
1432	"	SK3埋土	6.0	(2.4)	-	白色	白磁	"	1690~1780	釉の発色悪い
1433	瓶	SK2埋土	-	(4.2)	4.6	白色 黒い粒	染付	"	1780~1860	内面無釉
1434	"	1号倒木痕埋土	-	(5.6)	4.8	白色 黒い粒	"	"	1780~1860	内面無釉
1435	"	SK2埋土	-	(3.3)	-	白色	青磁	"	1690~1780	外面青磁
1436	"	SK15埋土・2号倒木痕埋土	-	(16.4)	7.0	灰~橙色	染付	"	1690~1780	内面橙色を呈する
1437	"	SK1埋土	4.3	25.5	6.8	灰白色	"	切込?	19c前半~中葉	製作地不詳
1438	"	SK1埋土	3.9	21.9	6.8	灰白色	"	切込	19c前半~中葉	
1439	"	SK1埋土	3.5	17.7	5.4	灰白色	瑠璃釉	"	"	内面下半無釉
1440	水滴	SK15埋土・2号倒木痕埋土	-	(4.0)	-	白色 黒い粒	褐釉	肥前?	1780~1860?	浪の部分白色
1441	紅皿	SK1埋土	4.6	1.4	1.2	白色	白磁	"	1780~1860	型おこし

第105図 近世の磁器⑫

第7節 近代の磁器

近代（明治時代以降）の磁器を示す。遺跡地内の下構屋敷が廃絶したのは昭和5年（1930）頃であるのでこれらの磁器の下限年代は1930年頃ということになる。近代以降の磁器は基本的に産地が不明である。よって観察表中に「製作地」の項目を設けていない。本文中でも製作地について触れていない場合は「産地不明」ということである。

図示したのは、碗、碗蓋（1442～1455）、小碗（1456～1465）、湯呑（1466、1467）、猪口（1468～1473）、盃（1474～1496）、皿（1497～1517）、鉢（1518、1519）、爛徳利（1520、1521）、花生（1522）、仏飯器（1523）、急須蓋（1524）である。

1 碗（第106、107図、写真図版103、104）

1442～1446は型紙刷の碗である。飯碗と推測される。いずれも時期は明治以降、概ね19世紀後半と推測される。染付の色調は工業精製のコバルト色である。1442と1443は同じ型紙を使用しているが、1442の方の器高が高く器形が異なっている。なお、見込みの型紙は共通である。1445は同一のものが図示したものを含め11個体出土している。染付の色調は濃い色調を呈する個体と薄い個体がある。型紙の継ぎ目がずれている個体が目につく。1446は口縁部破片である。人物文の型紙を使用している。

1447は染付の碗である。飯碗と推測される。近世末期に属する可能性もあるが、染付の色調が鮮やかな工業コバルトで、近代以降の磁器に含めた。時期は明治以降、概ね19世紀後半と推測される。見込にも染付文が施されている。

1448は染付の碗である。飯碗と推測される。龍とその背面に宝珠が描かれる。大振りな碗で内面、高台内には文様がない。時期は19世紀後半～1930年頃と推測される。

1449は碗蓋である。青色と桃色で文様が描かれている。時期は19世紀後半～1930年頃と推測される。

1450～1452は銅版刷の碗である。飯碗と推測される。時期は銅版転写の技法が日本で大規模に開始されたとされる1870年頃が上限である。1450は青色の刷色で蔓草、船の文様である。同一のものが図示したものを加え6個体出土している。1451は黒色の刷色で山水楼閣、橋、人物の文様である。同一のものが6個体出土している。1452は青と緑の刷色で花の文様である。同一のものが5個体出土している。

1453は染付？の碗である。飯碗と推測される。体部には黒色で樹木が描かれ、高台外面には青色で網目文が施される。時期は1870～1930年頃と推測される。

1454は「子供茶碗」である。ゴム印判で桃太郎の輪郭線を表し、緑、桃、赤、茶、黄色で彩色している。子供茶碗の生産が開始されたのは大正末期、1920年代後半であるという（浅川範之 2001「近代日本における「子ども」茶碗の領有 - 遺跡出土資料を中心に -」メタ・アーケオロジー第3号）。よって1454の時期は1920年代と推測される。子供茶碗はこの1個体のみ出土である。

1455は碗である。飯碗ではなく汁物を入れる碗の可能性が高い。緑、黒、青で植物文が描かれ、金色で彩色されている。底面には染付による銘がある。同一のものが図示したものを含め8個体出土している。金色の彩色は剥がれている個体が多い。時期は1870～1930年頃と推測される。

2 小碗、湯呑（第107、108図、写真図版104）

1456～1459は銅版刷の小碗である。用途は湯呑と推測される。時期は1870～1930年頃と推測される。1456は黒、緑、桃、青の刷色で花文を表す。高台内に「大日本沢田製」の銘がある。同一のものが図示し

たものを含め3個体出土している。1457は青と桃色の刷色で花文を表す。高台内に「日本司製」の銘がある。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。1458は青と桃と黒の刷色で花文を表す。高台内に銘がある。同一のものが図示したものを含め4個体出土している。1459は緑と茶色の刷色で花文を表す。同一のものが図示したものを含め4個体出土している。

1460～1462は染付の小碗である。用途は湯呑と推測される。時期は1870～1930年頃と推測される。

1460は樹木と楼閣の文様である。染付の色は青である。1461は青磁の地に染付が施されている。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。1462は松の木が染付されている。染付の色は青色である。高台内に「白山」の銘がある。同一のものが図示したものを含め3個体出土している。

1463は白磁の小碗である。用途は湯呑と推測される。時期は1870～1930年頃と推測される。見込みに型で壽文が施される。口唇部には口紅が施される。同一のものが図示したものを含め4個体出土している。

1464は青磁小碗である。用途は湯呑と推測される。外面に「飛びカンナ」を施した後、青磁釉が掛けられる。時期は1870～1930年頃と推測される。

1465は染付の小碗である。口唇部が無釉で蓋付きの碗と理解できる。器種は蓋付鉢が妥当かもしれない。時期は1870～1930年頃と推測される。

1466は筒型の湯呑である。外面に上絵付けで竹刀、防具、桜が描かれ、その背面に上絵付けで「養勇館」の文字がある。絵付けの色は金、黒、茶を使用している。同一のものが図示した個体を含め7個体出土している。時期は1870～1930年頃と推測される。

1467は青磁の湯呑である。型おこしのものである。緑、赤、白、桃色で植物文の上絵付けが施されている。高台内には染付の銘がある。時期は1870～1930年頃と推測される。

3 猪口、盃（第108、109図、写真図版104、105）

1468～1473は猪口である。ここでの「猪口」はそば猪口などを指しているのではなく、爛酒を呑む酒器としての「猪口」である。時期はいずれも1870～1930年頃と推測される。1468、1469は型おこしの猪口である。ともに青と緑色で染付が施される。1468は高台内に銘がある。1469は同一のものが図示したものを含め4個体出土している。

1470～1473は端反りで「盃」とすべきかもしれないが、ここでは「猪口」とする。時期はいずれも1870～1930年頃と推測される。1470、1471は青色の染付で草花が描かれる。1470は高台内に銘がある。1471は同一のものが図示したものを含め3個体出土している。1472は底辺部に線のみが染付で施されている。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。1473は緑、茶、青で染付が施される。高台内には圏線が施される。

1474～1480は上絵付けのある盃である。時期はいずれも1870～1930年頃と推測される。1474は青色で「出羽三山」が描かれ、金色で「羽黒山 月山 湯殿山」の文字が施される。同一のものが図示したものを含め3個体出土している。1475は若松が緑色と金色で施され、文字が金色と赤で施される。文字は解読できない。1476は金色で「泉屋 陸中一関」の文字と文様が書かれている。1477は金色で内面に「社会 展覧会 記念」、外面に「小島青年支会 大正十二年」の文字が書かれている。大正12年（1923）に作成された盃と理解できる。1478は青、緑、黒、赤、金色で鶴と夕日が描かれる。1479は吹き墨で桜の花が表される。上絵付けではなく染め付けである。同一のものが図示したものを含め2個体出土している。1480は黒、緑、赤、橙色を用いて盆栽を描いている。

1481～1487は「兵隊盃」である。兵隊盃とは軍隊の除隊の記念品である。餞別返しとして多用されたものという。1481は金色で日章旗と「朝鮮守備 満期記念」の文字がある。1482は金色で日章旗、連隊旗、星が描かれ、「朝鮮守備 歩三一、三」の文字がある。「朝鮮守備、歩兵31連隊第3大隊（あるいは第3中隊）」の意味であろう。歩兵第三十一連隊は青森県弘前市に所在した。三十一連隊は明治45年4月から3ヵ年連隊の一部ずつが交替で「朝鮮警備」に出動しており（歩三一岩手会編 1976「連隊史 歩兵第三十一連隊」）、その折の記念品と推測される。1483は金色で連隊旗が描かれ「朝鮮守備記念 ～帰る嬉し？～」の文字がある。1484は金色で星が描かれ、「淵」の字がある。他にも文字があったと推測されるが、剥がれ落ちてしまい読解できない。「淵」の字は「岩淵」などの人名の可能性が高い。1485～1487は金色で野砲が描かれ、「野戦砲兵」の文字がある。1487には「佐」の文字もある。「佐藤」などの人名であろうか。野砲兵連隊の除隊記念盃と推測される。野砲兵第八連隊は青森県弘前市に所在した。

1488～1490は高台外面に浪線の染付が施される盃である。1488、1489は内面に金色の痕跡があり、文字、絵が剥がれてしまったと判断できる。1490は痕跡が見出せないが、完全に絵、文字が剥がれた可能性が高い。

1491～1496は文字、絵が確認できない盃である。1493～1495は金色の痕跡があり、文字、絵の存在を知ることができる。他は痕跡が見出せないが、完全に絵、文字が剥がれた可能性が高い。これらは「兵隊盃」の確率が高いと想像される。

4 皿 (第110～113図、写真図版105～108)

1497～1499は「壽文皿」である。図示したものを含め約30個体が出土している。「壽文皿」は型おこしの白磁皿で、瀬戸で19世紀前半に製作が開始されている。この年代であれば近世の磁器とういことになるのだが、東北地方などの瀬戸以外の産地で近代以降にも引き続き製作されていた可能性も高い。よってここでは近代の磁器として扱うことにする。胎土は白色でガラスのような質感のものである。産地は特定できないが東北地方産の可能性が高いのではないだろうか。佐藤家の伝世品の中にも、かなりの枚数の「壽文皿」がある。出土した枚数に加えるとかなりの個数の「壽文皿」が下構屋敷に存在したことになる。

1500は型おこしの白磁皿である。時期は近世に上がる可能性もあるが、近代の磁器に含めて扱っている。型おこしの文様は「印鑑」である。同一のものが図示したものを含め3個体出土している。また佐藤家の伝世品の中に同一のものが存在する。

1501、1502は型おこしの皿に染付を施している。型おこしの文様はどちらも獅子であるが、図柄は異なっている。1502は獅子の文様がうまく表れていない。染付の色調はどちらも工業コバルトの色を呈する。

1503は型おこしの染付の皿である。口縁部は輪花で、底部は凹蛇の目高台になっている。染付の色調は工業精製のコバルト色を呈し、時期は19世紀後半と推測される。同一のものが図示したものを含めて2個体出土している。

1504、1505は型紙刷の皿である。どちらも型おこしで口縁部は輪花になっている。底部は凹蛇の目高台である。1504の外面の唐草文は手描きである。見込みの型紙はどちらも松竹梅文である。時期は19世紀後半と推測される。

1506は型紙刷の小皿である。染付の色は工業コバルトの色を呈する。同一のものが図示したものを含めて3個体出土している。時期は19世紀後半と推測される。

1507、1508は銅版刷の小皿である。1507の刷色は緑色、1508は青色である。1508は同一のものが図

示したものを含め2個体出土している。時期は1870～1930年頃と推測される。

1509は銅版刷りの小皿である。銅版で花と水面を表す。花は黄色、他は青色の刷り色である。同一のものが図示したものを含め3個体出土している。時期は1870～1930年頃と推測される。

1510、1511は染付の小皿である。1510の染付の色は青、1511は青と緑である。同一のものが図示したものを含め1510は3個体、1511は2個体出土している。時期は1870～1930年頃と推測される。

1512はゴム印判の皿である。恵比寿、松、磯の輪郭をゴム印判で施し、赤、緑、青、茶色で彩色している。時期は1910～1930年頃と推測される。同一のものが佐藤家の伝世品の中に2個体存在する。

1513は銅版刷りの皿である。緑と茶色の刷り色で菊が表される。時期は1870～1930年頃と推測される。

1514、1515は型紙刷りの皿である。どちらも外面の文様も型紙刷りである。染付の色は工業コバルト色を呈する。時期は19世紀後半と推測される。

1516、1517は上絵付けが施される皿である。どちらも型おこしで腰部が屈曲し、文様は外輪に花、見込みに帆船を表している。色は赤、緑、桃、黄、金色を使用している。時期は1870～1930年頃と推測される。

5 鉢 (第113図、写真図版108)

1518、1519は銅版刷りの鉢である。どちらの刷り色も青である。1518は笹、唐草などの植物、1519は鹿の文様を表している。外面の文様も銅版刷りである。また、どちらも底部は凹蛇の目高台になっている。時期は1870～1930年頃と推測される。

6 爛徳利 (第114図、写真図版108)

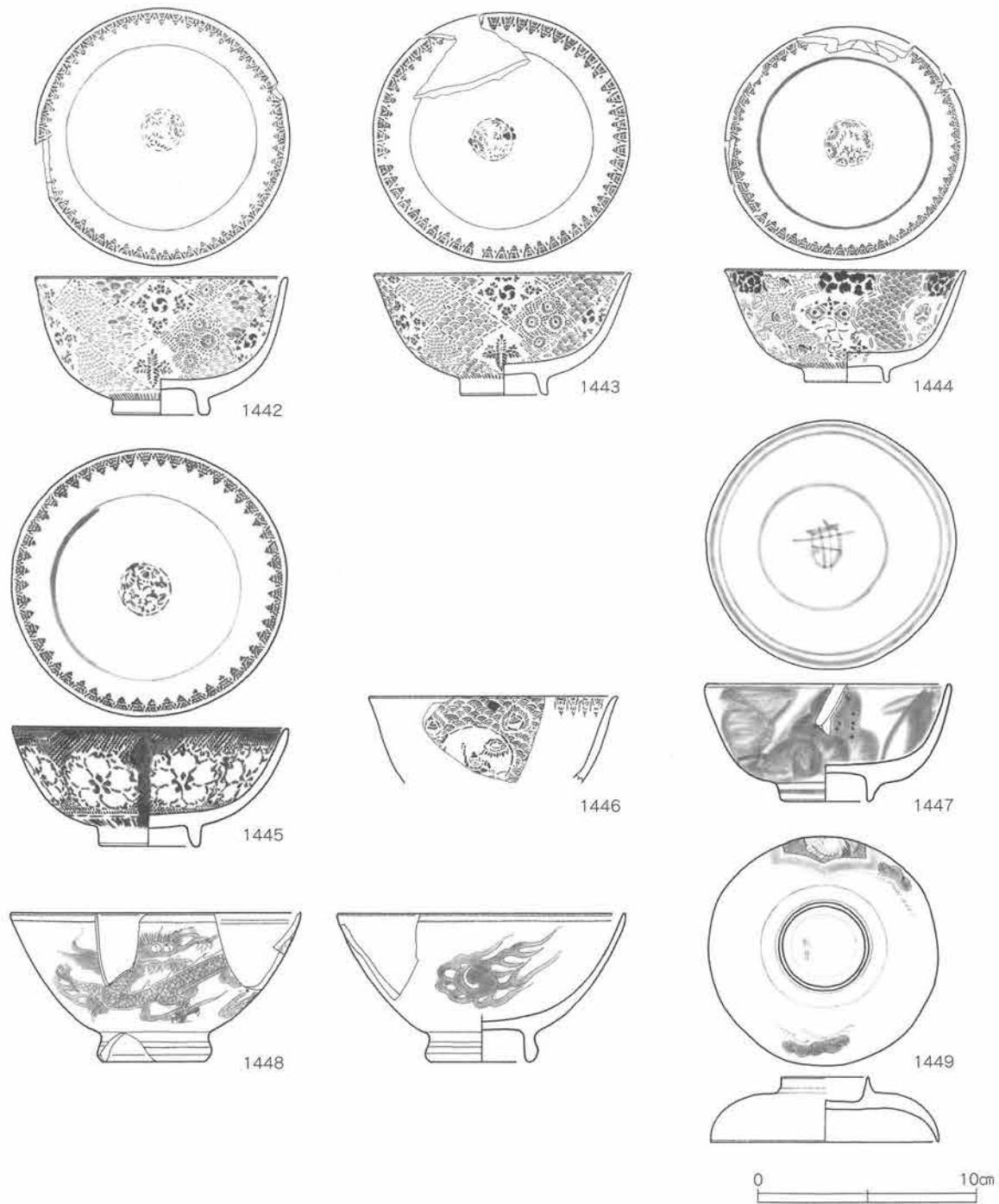
1520、1521は銅版刷りの爛徳利である。どちらも刷り色は青色で、内面は口縁部を除き無釉である。1520は図示したものを含めて2個体出土している。時期は1870～1930年頃と推測される。

7 花生、仏飯器、急須蓋 (第114図、写真図版108)

1522は花生である。外面は全面が青磁である。時期は1870～1930年頃と推測される。

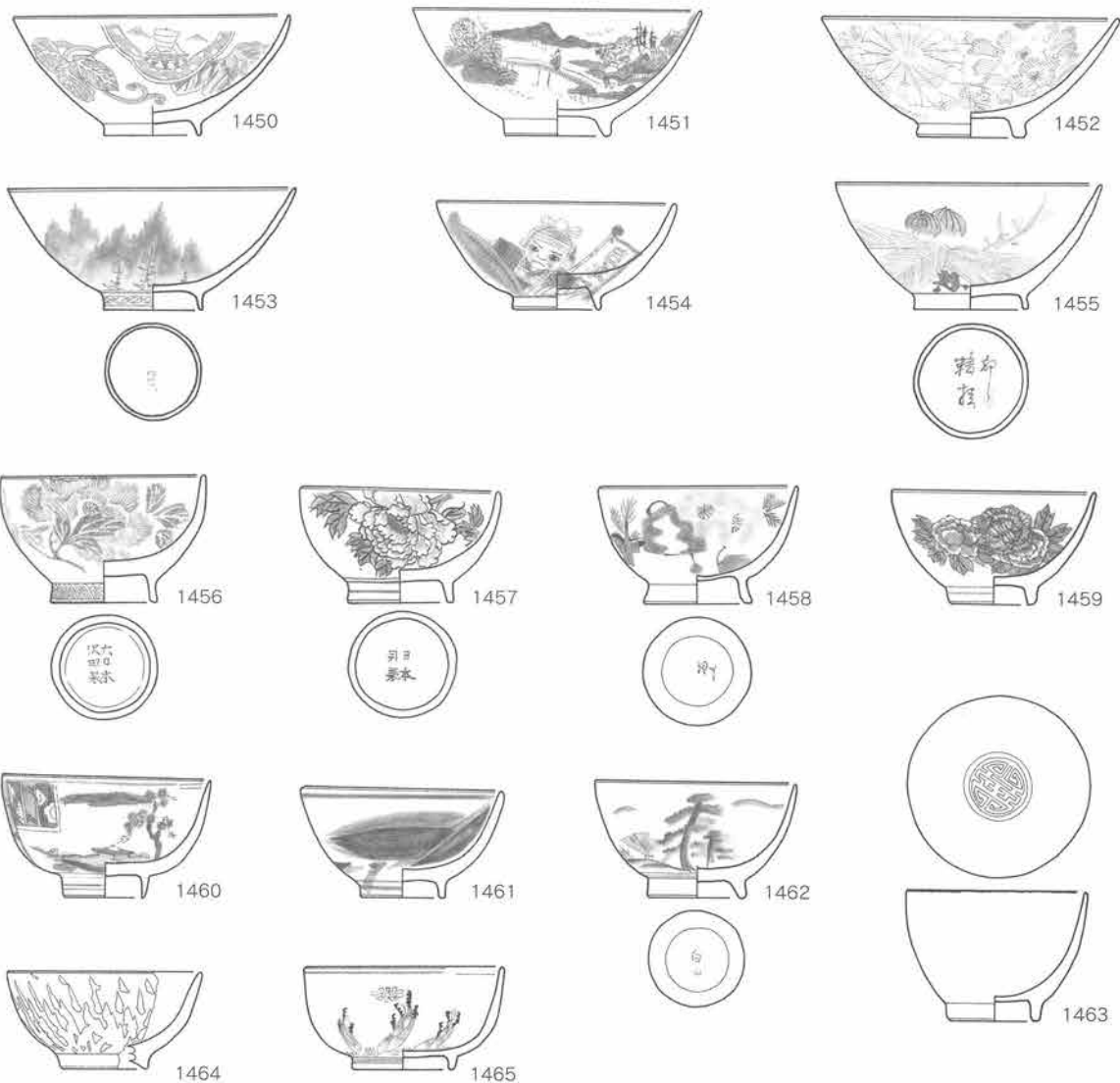
1523は仏飯器と推測される。外面全体が工業コバルトで染付される。内面は透明釉薬である。時期は1870～1930年頃と推測される。

1524は急須蓋と推測される。緑と金色で上絵付けが施されている。時期は1870～1930年頃と推測される。



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1442	碗	SK1埋土	11.6	6.4	4.4	白色、ガラス質	型紙刷	19c後半	
1443	"	SK1埋土	11.8	5.7	4.1	"	"	"	1442と同じ型紙
1444	"	SK1埋土	11.2	5.2	3.9	"	"	"	
1445	"	SK1埋土	12.6	5.5	4.2	白色、ガラス質	"	"	11個体
1446	"	表採	11.2	(4.0)	-	"	"	"	
1447	"	SK1埋土	11.3	5.5	4.0	"	染付	"	染付工業コバルト
1448	"	SK1埋土	13.2	6.9	4.7	"	"	19c後半～1930	
1449	碗蓋	SK1埋土	10.4	3.1	3.9	"	"	"	

第106図 近代の磁器①



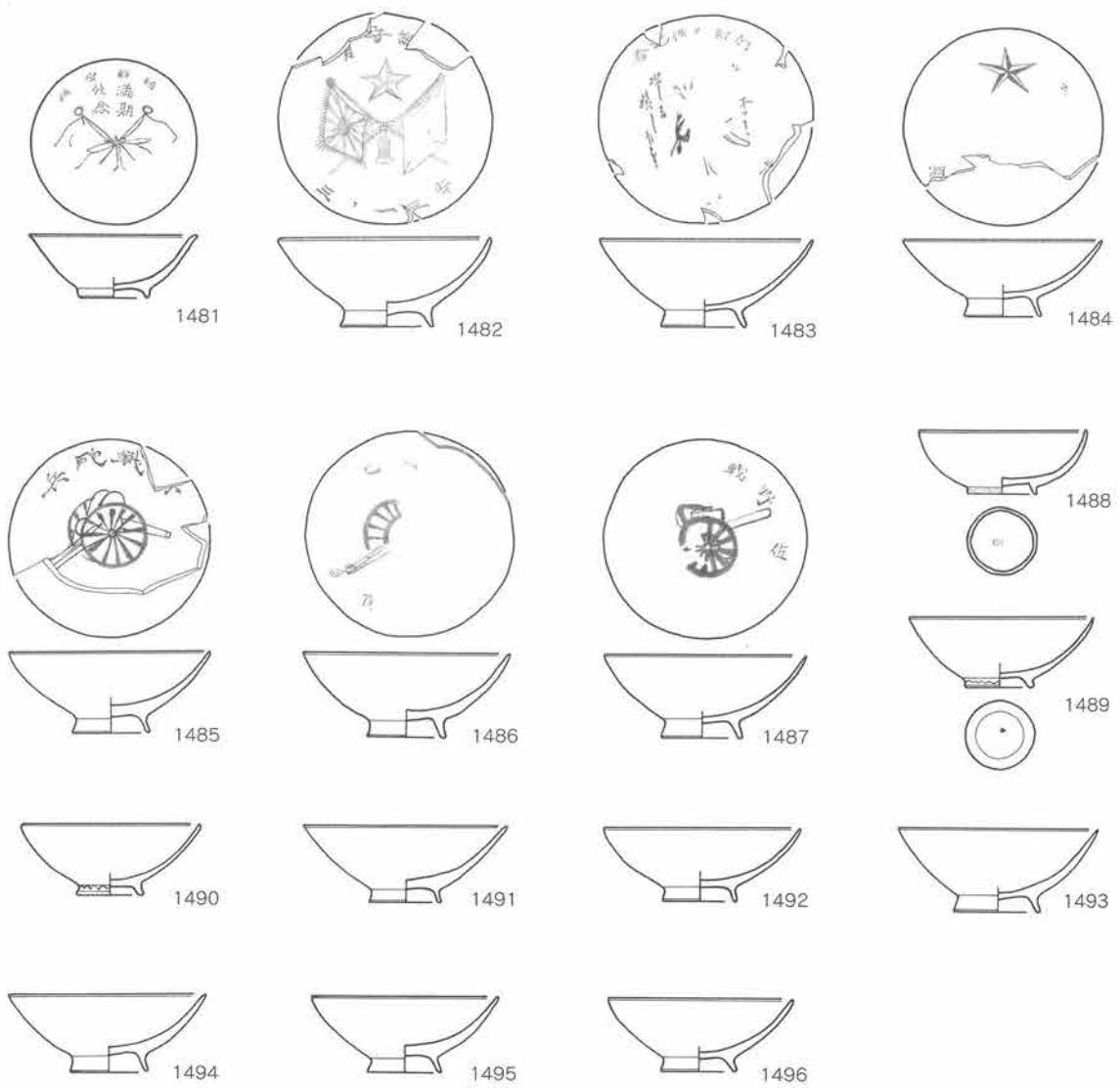
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1450	碗	SK1埋土	11.2	4.9	4.0	白色、ガラス質	銅版刷	1870~1930	6個体
1451	"	SK1埋土	11.7	5.2	4.2	"	"	"	6個体 刷色黒色
1452	"	SK1埋土	10.0	4.9	4.3	"	"	"	5個体 刷色青と緑
1453	"	SK1埋土	11.6	4.9	4.0	"	染付	"	2個体 刷色黒と青
1454	"	SK1埋土	9.6	4.4	3.4	"	ゴム印判	1920年代	子供茶碗 緑、桃、赤、茶、黄使用
1455	"	SK1埋土	10.7	5.2	4.6	"	上絵付	1870~1930	8個体 絵付 金、緑、黒、青
1456	小碗	SK1埋土	8.3	5.2	4.3	"	銅版刷	"	3個体 刷色黒、緑、桃、青
1457	"	SK1埋土	7.9	4.7	4.2	"	"	"	2個体 刷色青、桃
1458	"	SK1埋土	8.1	4.8	4.4	"	"	"	4個体 刷色青、桃、黒
1459	"	SK1埋土	8.0	4.6	3.3	"	"	"	4個体 刷色緑、茶
1460	"	SK1埋土	8.4	4.9	3.2	"	染付	"	染付青色
1461	"	SK1埋土	7.9	4.5	3.3	"	"	"	2個体 青磁に染付
1462	"	SK1埋土	8.2	4.8	3.9	"	"	"	3個体
1463	"	SK1埋土	7.4	5.3	3.6	"	白磁	"	4個体 口紅
1464	"	SK1埋土	7.9	4.0	3.6	"	青磁	"	飛びカンナの上に青磁釉
1465	"	SK1埋土	8.0	4.2	4.0	"	染付	"	蓋付

第107図 近代の磁器②



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1466	湯呑	SK1埋土	6.0	7.0	3.6	白色、ガラス質	上絵	1870~1930	7個体 絵付は金、黒、茶
1467	"	SK1埋土	7.8	7.4	3.9	"	青磁	"	絵付は緑、赤、白、桃
1468	猪口	SK1埋土	4.9	5.4	3.0	"	染付	"	染付は青、緑
1469	"	SK1埋土	4.4	5.5	2.6	"	"	"	4個体 染付は青、緑
1470	"	SK1埋土	6.5	4.8	3.2	"	"	"	"
1471	"	SK1埋土	6.7	4.8	2.6	"	"	"	3個体
1472	"	SK1埋土	6.6	4.1	3.0	"	"	"	2個体
1473	"	SK1埋土	6.4	4.5	2.8	"	"	"	染付は緑、茶、青 外底に圏線
1474	盃	SK1埋土	8.7	3.5	3.5	"	上絵	"	3個体 文字金、山青色
1475	"	SK1埋土	9.2	3.5	3.7	"	"	"	文字 金、赤 松 緑、金
1476	"	SK1埋土	7.3	2.9	3.7	"	"	"	文字 金色
1477	"	SK1埋土	7.8	3.0	2.8	"	"	1923 (大正12)	文字 金色
1478	"	SK1埋土	7.2	2.9	3.0	"	"	1870~1930	青、緑、黒、赤、金色を使用
1479	"	SK1埋土	7.7	3.0	2.8	"	染付	"	2個体 染付青色
1480	"	SK1埋土	6.2	2.9	2.6	"	上絵	"	黒、緑、赤、橙色を使用

第108図 近代の磁器③



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1481	盃	SK1埋土	6.8	2.6	2.8	白色, ガラス質	上絵	1910~1930	文字絵付 金色
1482	"	SK1埋土	8.5	3.7	3.8	"	"	"	"
1483	"	SK1埋土	8.6	3.6	3.4	"	"	"	"
1484	"	SK1埋土	8.1	3.2	3.1	"	"	1870~1930	"
1485	"	SK1埋土	8.2	3.4	3.2	"	"	"	"
1486	"	SK1埋土	8.3	3.5	3.2	"	"	"	"
1487	"	SK1埋土	8.2	3.4	3.3	"	"	"	"
1488	"	SK1埋土	6.8	2.6	2.8	"	薬付上絵	"	上絵の金色わずかに残る
1489	"	SK1埋土	7.5	2.9	2.7	"	"	"	"
1490	"	SK1埋土	7.3	2.9	2.8	"	對上絵?	"	上絵の痕跡みいだせず
1491	"	SK1埋土	8.2	3.2	2.9	"	上絵?	"	"
1492	"	SK1埋土	7.9	3.0	3.0	"	"	"	"
1493	"	SK1埋土	8.2	3.4	3.4	"	上絵	"	上絵の金色わずかに残る
1494	"	SK1埋土	8.1	3.2	3.2	"	"	"	上絵の金色わずかに残る
1495	"	SK1埋土	7.6	3.1	3.0	"	"	"	"
1496	"	SK1埋土	7.6	3.0	3.0	"	上絵?	"	上絵の痕跡みいだせず

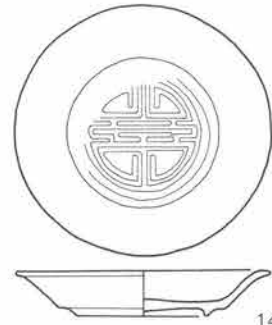
第109図 近代の磁器④



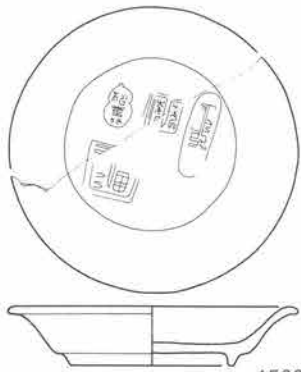
1497



1498



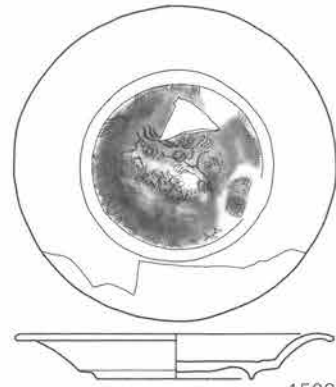
1499



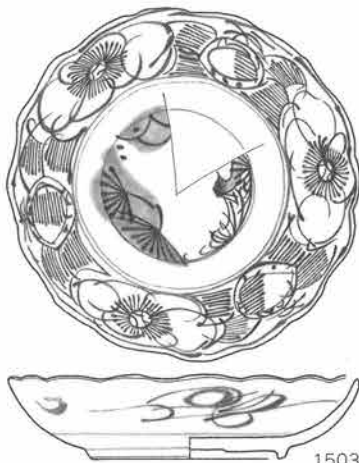
1500



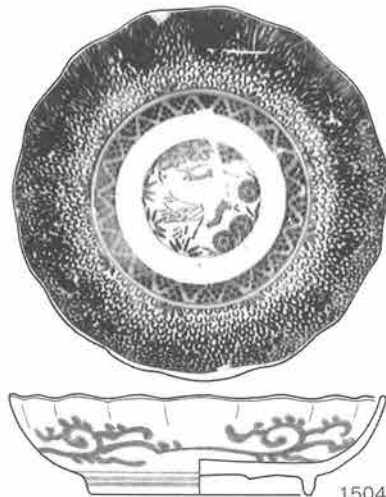
1501



1502



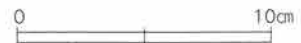
1503



1504

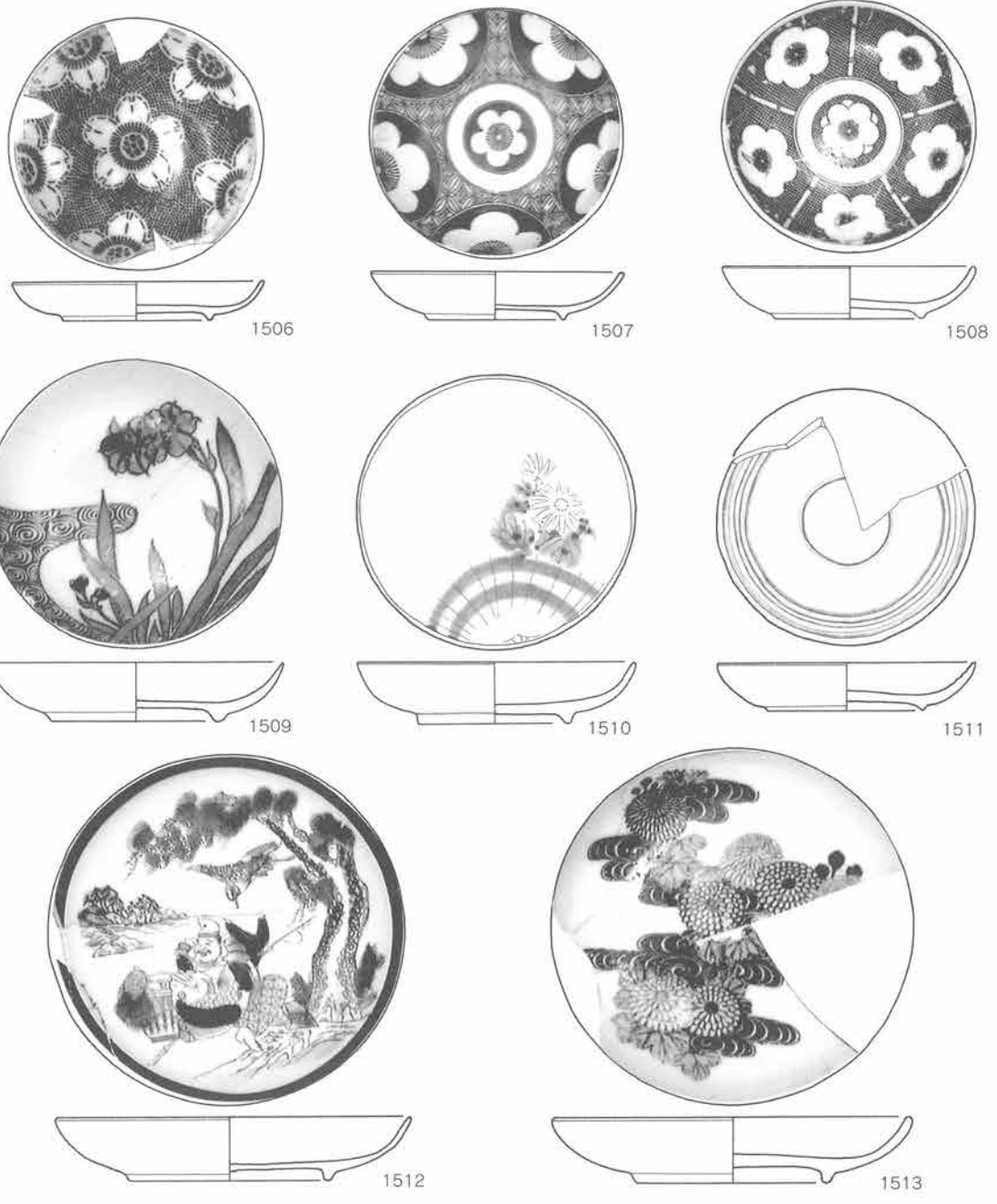


1505



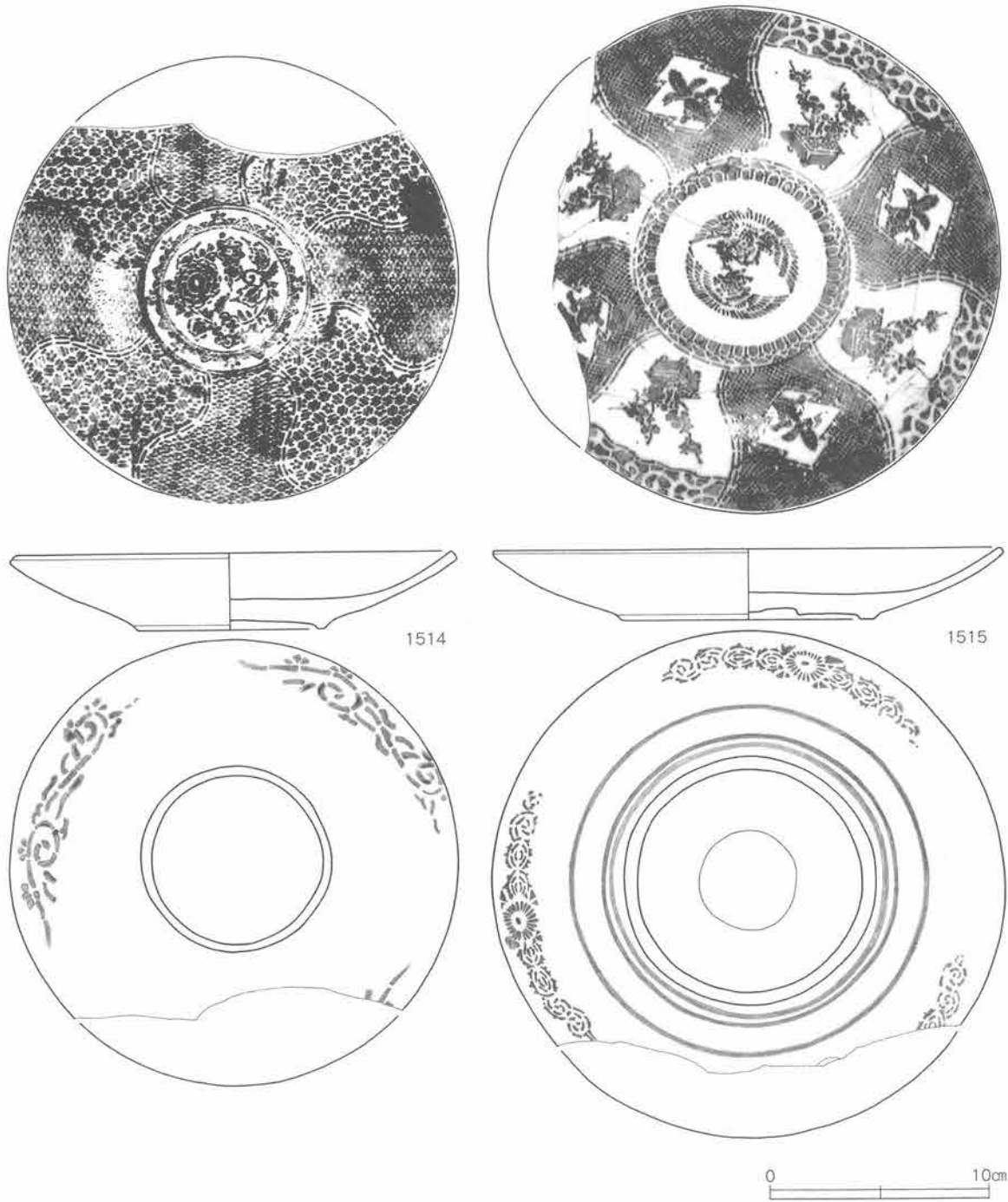
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1497	皿	SK1埋土	9.6	2.0	5.0	白色、ガラス質	型おこし	19c前半～1930	壽文皿
1498	"	SK1埋土	9.8	2.3	4.5	"	"	"	
1499	"	SK1埋土	10.0	1.85	5.2	"	"	"	図した他に約30個体あり
1500	"	SK1埋土	11.6	2.4	6.6	"	"	19c前半～1930	3個体
1501	"	SK1埋土	11.0	2.1	7.1	"	藍い點	1870～1930	
1502	"	SK1埋土	11.8	1.8	6.1	"	"	"	刻印浅く 文様ははっきりせず
1503	"	SK1埋土	13.8	3.4	7.6	"	染付	19c後半	2個体 凹蛇目高台
1504	"	SK1埋土	14.9	4.0	8.8	白色	型紙	19c後半	凹蛇目高台
1505	"	SK1埋土	14.3	3.4	7.1	白色、ガラス質	"	19c後半	"

第110図 近代の磁器⑤



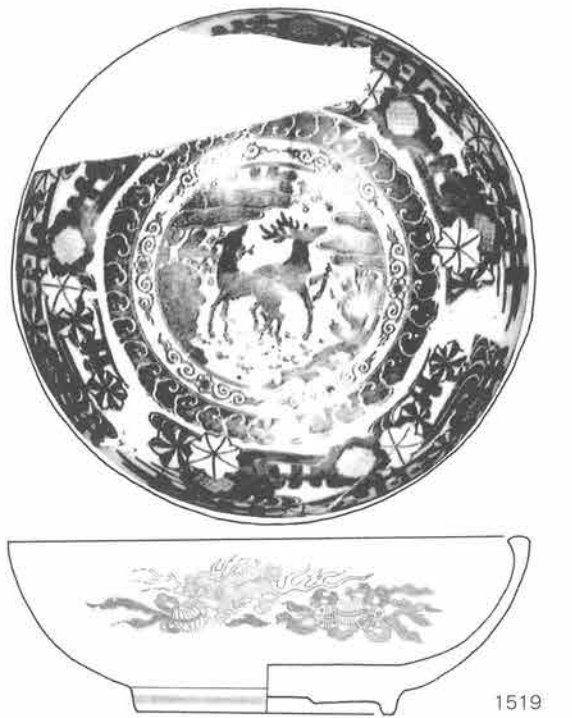
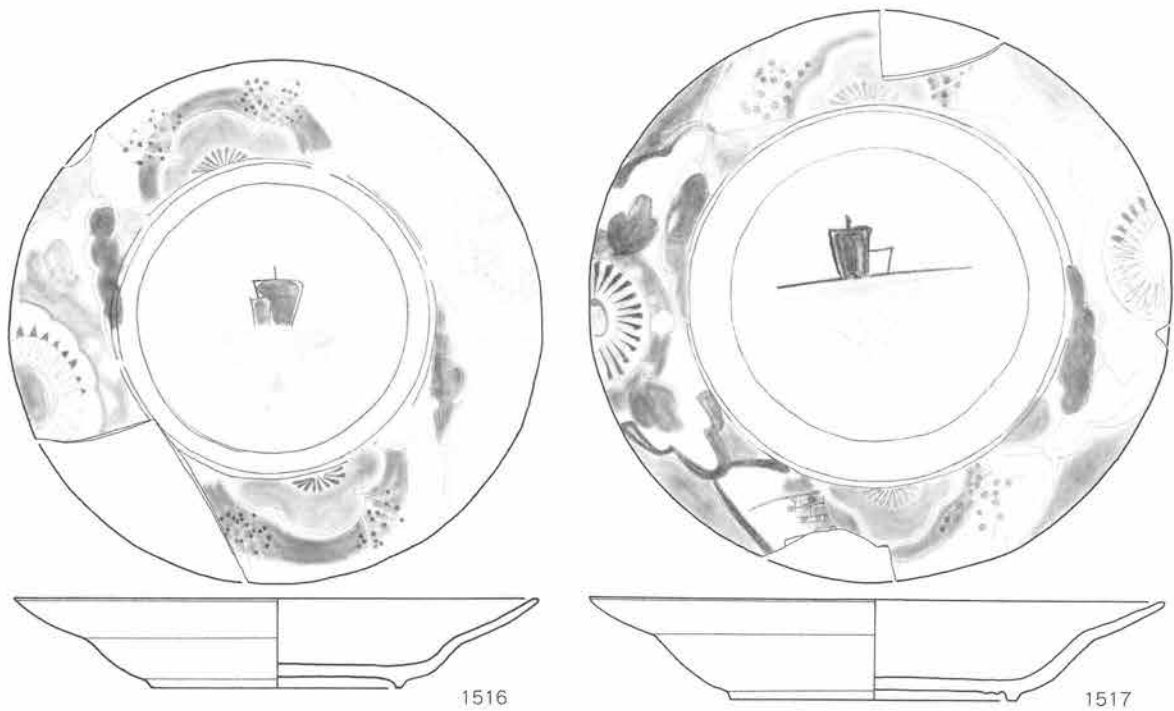
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1506	皿	SK1埋土	11.0	1.7	6.5	白色、ガラス質	型紙	19c後半	3個体
1507	"	SK1埋土	11.1	2.1	6.1	"	銅版刷	1870~1930	刷色 緑色
1508	"	SK1埋土	11.1	2.3	6.6	"	"	"	2個体
1509	"	SK1埋土	12.9	2.6	7.4	"	"	"	3個体 花の色 黄色
1510	"	SK1埋土	12.1	2.8	6.7	"	染付	"	5個体
1511	"	SK1埋土	10.2	2.1	6.8	"	"	"	2個体 染付、緑と青
1512	"	SK1埋土	15.5	2.8	6.8	"	ゴム印判	"	赤、緑、青、茶で上絵付
1513	"	SK1埋土	15.7	2.9	8.5	"	銅版刷	"	刷色 緑、茶色

第111図 近代の磁器⑥



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1514	皿	SK1埋土	10.4	3.5	8.6	白色	型紙	19c後半	
1515	"	SK1埋土	23.4	3.3	11.6	白色	型紙	19c後半	

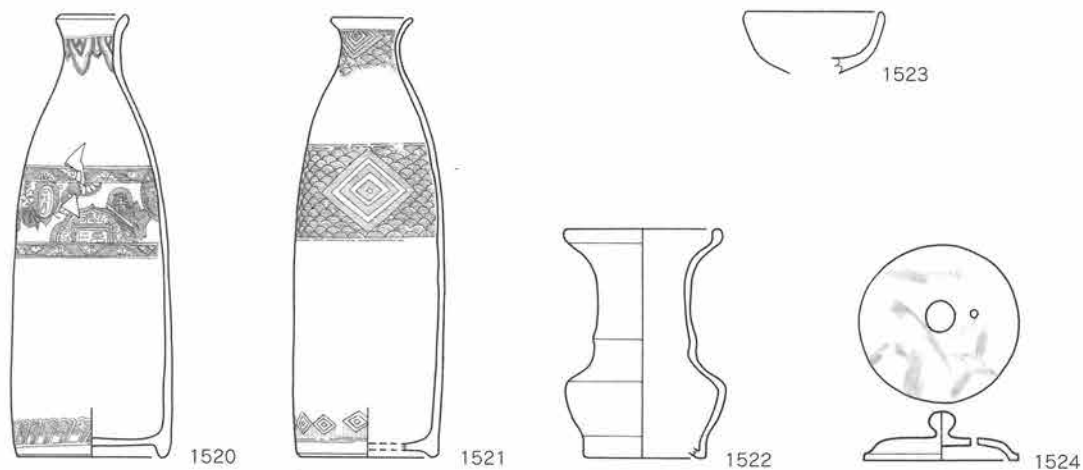
第112図 近代の磁器⑦



0 10cm

番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1516	皿	SK1埋土	20.8	3.6	9.8	白色、ガラス質	上絵付	1870~1930	赤、緑、桃、黄、金色使用
1517	皿	SK1埋土	22.7	4.1	11.4	"	"	"	"
1518	鉢	SK1埋土	15.0	4.8	8.6	白色	銅版刷	"	凹蛇目高台
1519	"	SK1埋土	20.2	7.0	10.0	白色、ガラス質	"	"	"

第113図 近代の磁器⑧



0 10cm

番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
1520	燭徳利	SK1埋土	2.6	17.7	5.6	白色、ガラス質	銅版刷	1870~1930	2個体
1521	"	SK1埋土	3.3	17.6	5.7	"	"	"	
1522	花生	表採	6.2	9.2	4.9	"	青磁	"	
1523	仏飯器	SK27埋土	5.7	(2.5)	-	"	染付	"	外面染付
1524	急須蓋	SK1埋土	6.2	1.95	-	不明	上絵付	"	緑、金色を使用

第114図 近代の磁器⑨

第8節 ガラス製品

近代のガラス製品が多数出土している。そのほとんどはSK1からの出土である。SK1は下構屋敷廃絶時に不要物を廃棄した土坑であり、これら多くのガラス製品は屋敷廃絶時の1930年頃に廃棄されたものである。よって1930年よりも古い製品ということになる。

図示したのは薬小瓶(1601~1613)、インク瓶(1614、1615)、不明小瓶(1616、1617)、クリーム瓶(1616、1617)、椿油瓶(1620)、哺乳瓶(1621)、薬瓶(1622~1631)、清酒瓶(1632~1637)、牛乳瓶(1638、1639)、サイダー瓶(1640~1641)、コップ(1642)、ワイン瓶(1643、1644)、ビール瓶(1645~1658)、石油ランプ(1659~1660)、ランプのほや(1661~1674)、ランプの笠(1675~1677)である。

1 薬小瓶 (第115図、写真図版109)

1601~1605は粒薬の瓶と推測される。いずれも丸底の扁平な形状である。1001~1604は緑色のガラス、1605は透明のガラスである。1601は「寶丹」の文字がある。この寶丹の瓶は図示したものを含め4個体出土している。佐藤家所蔵の文書に混じり、明治8年印刷の寶丹の広告用紙があった。これは、1601の年代の一端を示している。広告には「起死回生 寶丹 守田治兵衛謹製 正味秤量 式匁三分入大器 定価

金式拾五銭 壺匁五分入中器 定価金拾貳銭五厘 五分入小器 定価金六拾貳厘五毛」とある。またこの広告には全国の寶丹取扱店が記されているが、下構遺跡の近場では「陸中國遠野一日市町 十文字屋哲蔵?」、
「同南部花巻上町 山形屋喜八」が記されている。その他、盛岡、仙台も数店が記されている。また1605は
図示したものを含め2個体出土している。

1606、1607は「神薬」の文字がある。色はどちらも青色である。1606は底部が丸型、1607は角型である。1606には目盛があり、神薬は液体の薬と理解できる。1606は図示したものを含めSK 1から2個体が
出土している。

1608は透明の瓶で「石井謹製」、裏面に「ヨヂムチンキ」の文字がある。ヨヂムチンキはヨードチンキの
ことであろう。

1609、1610は文字がないが、薬小瓶と推測される。器形はどちらも扁平で底部が長方形をなす。1609
は透明、1610は青色のガラスである。

1611、1612は極小の透明の瓶で薬瓶と推測される。1612の内部には黄色い物体が残存している。

1613は細長い扁平な透明の瓶である。「東京 暁星堂謹製」の文字と星にGのマークがある。薬瓶という
確証はないが、他に適切な器種を見出せず、薬瓶と考える。図示したものを含め2個体が出土している。

2 インク瓶、不明瓶（第115図、写真図版109）

1614、1615は緑色のガラスのインク瓶である。1614の底面には「M・」、1615の底には「登M録」の
文字がある。1615は図示したものを含め2個体出土している。株式会社丸善のインク瓶である。

1616、1617は透明なガラスの小瓶である。薬瓶の可能性も考えられるが用途は不明である。1616は口
径が小さく、1617は口径が大きい。

3 クリーム瓶、椿油瓶（第115図、写真図版109）

1618、1619は白色のガラスでクリーム瓶と推測される。1618は横断面が八角形で、口縁は蓋を受ける
形状になっている。1619は横断面が隅丸方形で、口縁はねじ式栓の螺旋がある。正面?には楕円形の平坦
な面があり、ラベルを貼る部分と考えられる。

1620は透明のガラス瓶である。いかり肩で首の長い形状から椿油瓶と推測される。椿油は鬢付け油とし
て使用されたと推測される。

4 哺乳瓶（第115図、写真図版109）

1621は透明のガラス瓶で、伏せて置く形態で口が上を向いている。上面には桃が割れて、桃太郎が生ま
れた状態の絵が描かれている。器種は哺乳瓶である。（高橋洋二編 1994 「明治・大正時代のガラス」『別
冊太陽 骨董を楽しむ2』64頁）に同様の器形のものが「哺乳器」として掲載されている。掲載された写真
を見ると、細いガラスの管の先端にゴムキャップを装着したものを金属製のキャップで口縁部に固定してい
る。説明のキャプションは「哺乳器 明治後期～大正 乳児を寝かせたまま飲ませることができる改良型哺
乳器。」とある。

5 薬瓶（第116図、写真図版109）

1622～1624は目盛のある透明のガラス製薬瓶である。いずれの目盛があることから液体の薬と推測さ

れる。1623は底面に不明瞭な文字で「実用 15989 新案」とある。この1623は頸部の形状が特異で、この瓶の形が実用新案特許であるという意味であろうか。1624は底面に菱形内に「高」の字がある。

1625は透明のガラスで横断面が楕円形の薬瓶である。正面に「宮城病～」の文字がある。1626も透明のガラス瓶で横断面は楕円形である。正面に「～醫院」の文字と側面に目盛がある。

1627～1631はオキシドールなど液体の瓶である。1627～1629が緑色、1630が茶色、1631が青色を呈する。容量は1627が約450ccで、他も概ね同一である。

6 清酒瓶（第117図、写真図版110）

1632～1635は緑色の瓶で清酒1合瓶と推測される。いずれも底部が上げ底ぎみである。形状がいずれも微妙に異なり、人の口による吹き込みと推測される。図示した他にもSK1から多数の破片が出土しており、口縁部破片を数えると最低9個体以上あることが確認できる。

1636は緑色の瓶で清酒2合瓶と推測される。底部はやや上げ底で、口縁部は玉縁状になる。2合瓶と推測される個体はこの一個体のみである。

1637は緑色の瓶である。上部片と下部片が接合しないが、同一個体と推測した。清酒4合瓶と思われる。底部は上げ底で、口縁部は機械栓の針金を装着する2対の穴がある。他に図示していない機械栓の口縁部破片が1片SK1埋土から出土している。緑色のガラスで、容量は不明である。

7 牛乳瓶（第117図、写真図版110）

1638は透明ガラスの牛乳瓶である。体部に「特選 全乳 一合入 金十銭」の文字がある。1639も透明ガラスの牛乳瓶である。体部に「全乳 正一合入」の文字がある。牛乳瓶の破片は図示した他にSK1から4個体分が出土している。

8 サイダー瓶（第117図、写真図版110）

1640は緑色のガラスで、「金線サイダー」の瓶である。肩部には「金線」の文字がある。底部には円にBの文字がある。同一の瓶が図示したものを含めSK1から3個体出土している。口唇部の形態から栓は王冠と判断できる。容量は約350ccである。

1641は透明ガラスで「金線サイダー」の瓶と推測される。肩部裏表2箇所「K I N S E N」、底辺部に「金～式会社製造」の文字がある。金と式の間には4文字分ほどの空間が存在するが、欠損のため文字は不明である。また口縁部が欠損しており栓の種類は判別できない。

9 コップ（第117図、写真図版110）

1642はコップである。透明のガラスであるが色調はやや黒ずみ、全体に気泡がみられる。体部には10単位の剣先状のカットが存在する。底部は2cmほど上がっている。図示した物を含めSK1から5個体分が出土している。容量は八分目で約110ccである。

10 ワイン瓶？（第118図、写真図版110）

1643、1644はワイン瓶と推測される。黒味の強い茶色のガラスで、底部は上げ底（キック）になっている。キックとは沈殿した澱などが、再び液体に混じらないように上げ底にする技法をいう（現代グラスパッ

ケーシング・フォーラム編 1988「ガラスびんの文化誌」三推社)。どちらも栓はコルク栓である。SK1の埋土から図示したものを含め2個体ずつ出土している。1643は容量約350cc、1644は約700ccである。

11 ビール瓶 (第118～120図、写真図版111、112)

1645～1658ビール瓶である。いずれもガラスの色は茶色である。

1645は文字のない上げ底の瓶である。口はコルク栓である。図示したものを含め3個体出土している。1646は上底のコルク栓の瓶である。口縁部に銀色の口紙の痕跡が残る。瓶の表面は波打っており、滑らかではない。腰部には「登録商標」、「大日本麦酒株式会社醸造」の陽刻文字がある。札幌麦酒、大阪麦酒、日本麦酒の3社が合併して大日本麦酒株式会社が成立したのは明治39年(1906)であるので、1646はそれ以降の瓶ということになる。また大日本ビールで王冠栓が採用されたのは明治40年(1907)であるという(山本孝造1990「びんの話」日本能率協会)。よってこの瓶は1906年頃の短い期間の製造に限定される。容量は約650ccである。なお大日本麦酒株式会社のビールの銘柄には「札幌ビール」、「朝日ビール」「恵比寿ビール」、後に「ユニオンビール」などがある。

1647は上げ底、コルク栓の瓶である。器面は波打ち、口縁部には銀色の口紙の痕跡が明瞭に残る。腰部に印刷で「登録商標」、「大日本麦酒株式会社醸造」の文字がある。文字は銀色を呈する。1646同様に1906年頃の短い期間の製造に限定される。容量は約610ccである。

1648は上げ底の瓶で、口縁部を欠損するがコルク栓と推測される。器面は波打っている。腰部に「KIRIN BREWERY」、「YOKOHAMA(キリン)」の陽刻文字がある。キリンビール社の設立は明治21年(1888)、キリンビール社の王冠採用は明治45年(1912)であるというので、この瓶は1888年～1912年頃の瓶と推測される。底面には「S」の文字がある。

1649は上げ底の瓶である。口縁部は王冠栓の形状であるが、銀色の口紙の痕跡が明瞭に有り、瓶の内部にはコルク栓の現物が入っており、コルク栓と判断される。器面は1648と比較すると平滑である。腰部に「登録商標」、「キリンビール」の陽刻文字がある。1648と同様に1888年～1912年頃の瓶と推測される。底面には丸に十字のマークがある。容量は約660ccである。図示した他に同様の瓶が1個体ある。これは文字と形状は同一であるが、底部の上がりが1649よりもやや低く、底面に文字、記号がない。

1650は平底の瓶である。栓は王冠栓と推測される。器面は平滑である。ガラスの色調がやや緑色がかっている。肩部に「登録商標」、「キリンビール」の陽刻文字がある。王冠栓であるので1907年以降の製造である。底面には「14」の数字がある。容量は瓶が破れており測定ができない。図示した他に同じ形状の個体が他に3個体ある。体部の文字は同じであるが、底面にはそれぞれ「4」、「5」、「15」の数字がある。

1651は平底の瓶で栓は王冠栓と推測される。肩部に「TRAD MARK」、腰部に「DAINIPPON BREWERY Co., LTD.」の陽刻文字がある。「BREWERY」はブリュワリーでビール醸造所の意味である。また「Co., Ltd.」は株式会社の略号である。大日本ビールで王冠栓を採用したのは明治40年(1907)であるというので、この瓶はそれ以降の製造になる。底面には「12」の数字がある。容量は約640ccである。図示した他に同じ形状の瓶が他に3個体ある。体部の文字は同じで、底面には「12」の数字があるものと無文のもの、底部欠損のものがある。

1652は平底の瓶で栓は王冠栓と推測される。肩部に「TRAD MARK」、腰部に「DAINIPPON BREWERY Co., LTD.」の陽刻文字がある。1651とは字体、字の大きさが異なっている。大日本ビールで王冠栓を採用したのは明治40年(1907)であるというので、この瓶はそれ以降の製造になる。底面に

は「K」の文字がある。容量は約620ccである。図示した他に同じ形状の瓶が他に4個体ある。体部の文字は同じで、底面にはそれぞれ、「T」、「S」、「10」の数字または文字がある。1個体は無文である。

1653は平底の瓶で栓は王冠栓と推測される。肩部に「登録商標」「大日本ビール」の陽刻文字がある。腰部には文字はない。底面には「ト」の文字がある。図示した1個体のみの出土である。王冠栓で1907年以降の製造である。瓶が破れており容量の測定は不能である。

1654は平底の瓶で、口唇部が欠損するが王冠栓と推測される。腰部に「KABUTO BEER」「カブトビール」の陽刻文字がある。また底面には「D」の文字がある。丸三麦酒醸造株式会社が「カブトビール」を発売したのは明治31年（1898）であるという。また丸三麦酒醸造が社名変更した加富登麦酒株式会社は大正10年（1921）に日本鉱泉株式会社と合併し日本鉱泉麦酒株式会社となり、ユニオンビールを販売した。このことから、1654のカブトビールの瓶は1898年から1921年の間に製造されたと判断できる。この年代の中でも、王冠栓であることから、1910年代以降である可能性が高い。この瓶は1個体のみの出土である。容量は瓶が破れており測定不能である。

1655は王冠栓と推測される瓶である。底部は欠損している。肩部に「登録商標」、腰部に「～クラビ～」の陽刻文字がある。腰部の文字は「サクラビール」と解釈できる、この瓶の色調を他のビール瓶と比較すると、やや赤みがかっている。帝国麦酒株式会社がサクラビールを発売したのが大正2年（1913）であるという。また帝国麦酒が社名変更した桜麦酒株式会社が、大日本麦酒株式会社に吸収されるのが1943年であり、サクラビールは1913～1943年の間の製造になる。下構遺跡の場合、屋敷の廃絶が1930年頃であるので、1655の年代は1913～1930年頃の間ということになる。なおこの瓶は図示したもの1個体のみの出土である。また底部が欠損しており容量は測定できない。

1656は平底の瓶で栓は王冠栓と推測される。肩部に「TRAD MARK」「フジビール」、腰部には「TOYO BREWERY CO., LTD.」の陽刻文字がある。底面には「B」の文字がある。容量は約610ccである。東洋醸造株式会社がフジビールを発売したのが大正10年（1921）である。そして東洋醸造は大正12年（1923）にキリンビールに吸収される。よって1656の製造年代は1921～1923の間に限定される。同じ瓶が図示した他に1個体出土している。底部には「B」の文字がある。

1657は平底の瓶で栓は王冠栓と推測される。腰部に「NIPPON BEER KOSEN CO. LTD.」の陽刻文字がある。底面には不明瞭に「N」？の文字がある。容量は約630ccである。日本麦酒鉱泉株式会社は大正10年（1921）に加富登麦酒と帝国鉱泉とが合併した名称で、同年に「ユニオンビール」を発売している。日本麦酒鉱泉は昭和8年（1933）に大日本麦酒と合併する。よって1657の商品名は「ユニオンビール」で、1921年から下構屋敷廃絶の1930年頃の製造になる。なお、「ユニオンビール」は大日本麦酒と合併後も大日本麦酒の銘柄として製造されている。同じ瓶は図示した他に1個体出土している。底部には「II」の数字がある。

1658は平底の瓶で栓は王冠栓と推測される。体部には文字がなく、何処の会社のビール瓶か判別できない。底面には「8」の文字がある。瓶が破れているため容量を測定できない。

12 石油ランプ（第121、122図、写真図版112、113）

1659～1677は石油ランプに関係するガラスの部品である。下構遺跡が属する長島村小島地区で電気が通ったのは大正13年（1924）頃であるという（平泉町長島字平石沢 石川公子氏談）。その後も、納戸や小屋などの照明として、石油ランプは依然として多用されていたということである。

1659、1660は石油ランプの本体である。1659は薄い緑色、1660は透明のガラスである。1660は底部を欠損する。1659は口径2.6cm、1660は口径3.0cmである。また図示したこの2点の他にもう1個体石油ランプの本体破片がSK1から出土している。細片で被熱のために歪んでいるが、緑色のガラスで、上部の口径が3.5cmと推測される。これも合せ、ランプ本体は3個体のみ出土である。後述するがランプのほやは大、中、小の3種類に分類される。口径から判断すると、ランプの本体は1659が小型、1660が中型、図示していないものが大型のほやに対応すると予測される。

1661～1674はランプのほや（火屋）である。いずれもガラスの色は透明である。底径の大きさから大、中、小3種類のあることがわかる。ほやの破片は図示した他にもSK1埋土から多量に出土しているが、上部片と下部片が接合して完形になった個体は1個もない。ほやの上部と低部には厚みがあるが、中央部は非常に薄く、接合が困難なためである。図示していないランプのほやの破片は合計1.5kgある。

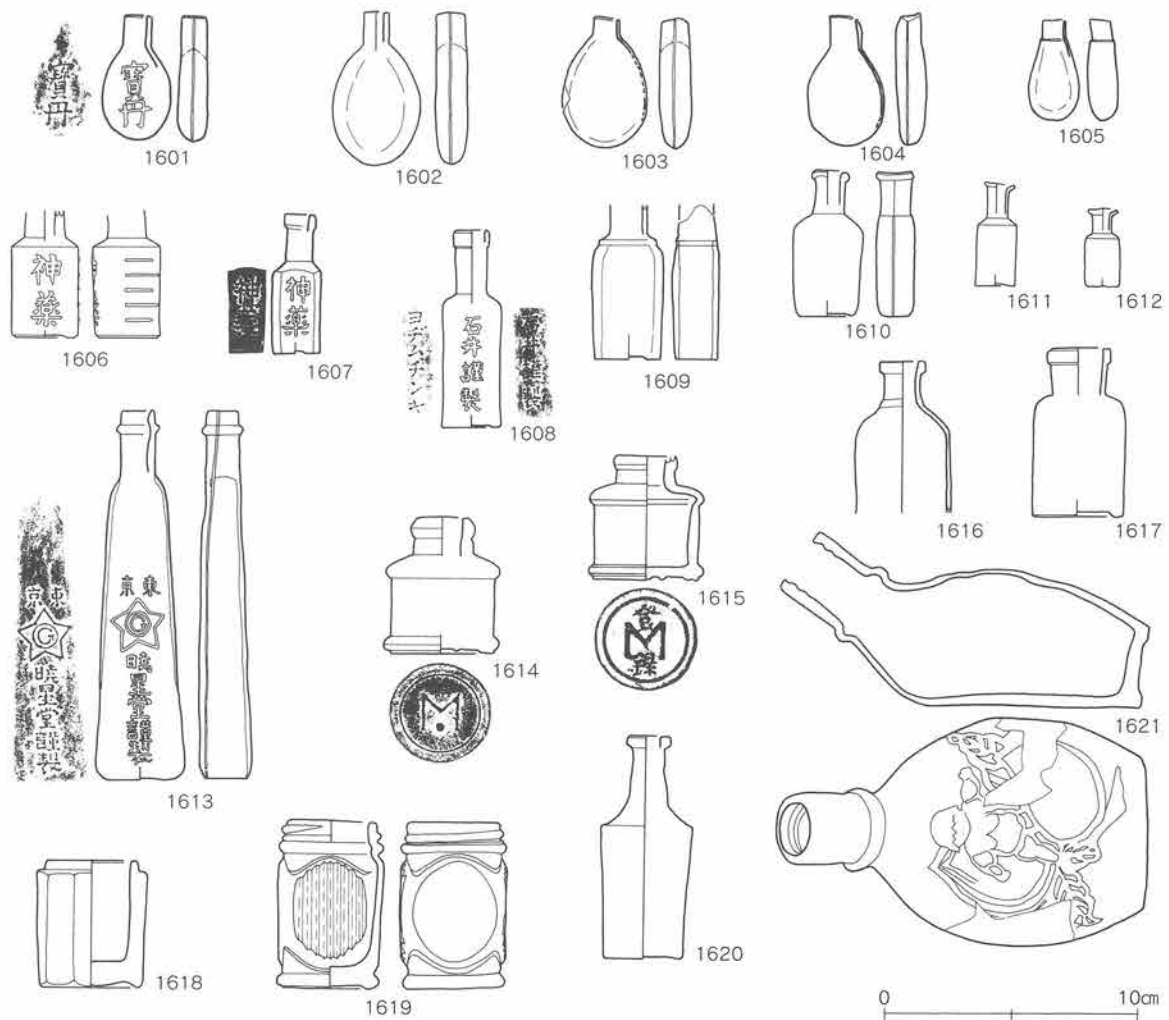
1661～1666は小型と推測されるほやである。上部片1661の首部分にはマークがあり、その中に「保険」、「NAGAOKA GARASUKUMIAI CO」の文字が配される。マーク、文字は白色を呈している。1660にも首部にマークがあり、その中に「- TRADEMARK - NIPPONSEKIYUKAISHA」の文字が配される。それぞれ「長岡ガラス組合会社」、「日本石油会社」と解せる。1664、1665はほやの下部破片である。底部の径が約3.9cmある。1666は特異な形態のほやの下部片である。図示していない中にも、この形状のものは1点もない。底径が約4.0cmで小型品に分類できる。図示していない小型品の個数を底部の数から想定すると、最低13個体存在している。図示したものを合わせると16個体となる。

1667～1669は中型品のほやである。1667は上部片、1668、1669は下部片である。底径はどちらも約5.4cmある。図示していない中型品の個数を底部の数から想定すると、最低12個体存在している。図示したものを合わせると14個体となる。

1670～1674は大型品のほやである。上部片1670の首部には桜のマークの中央に「保険」の文字が配される。桜の花は白色を呈する。1671、1672の状部片にはマーク、文字がない。1672は体部のふくらみがやや小さく中型の可能性もある。この1672に限らず、上部片のサイズの判別は困難なものがある。1673、1674は下部片である。1673の底径は6.2cm、1674は6.6cmある。図示していない大型品の個数を底部の数から想定すると、最低2個体存在している。図示したものを合わせると4個体となる。

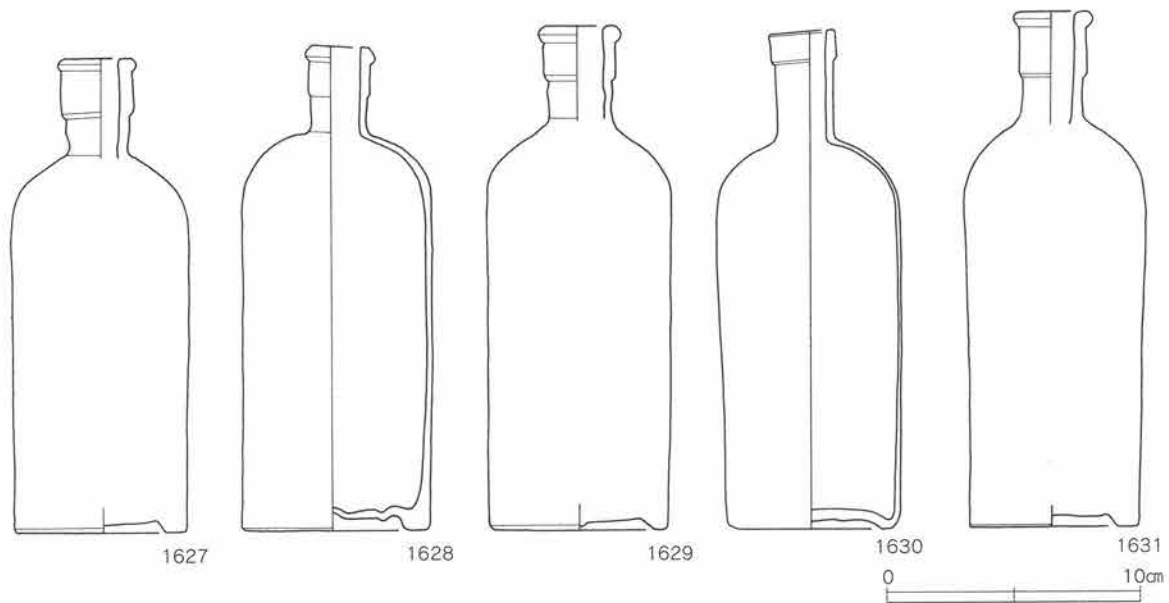
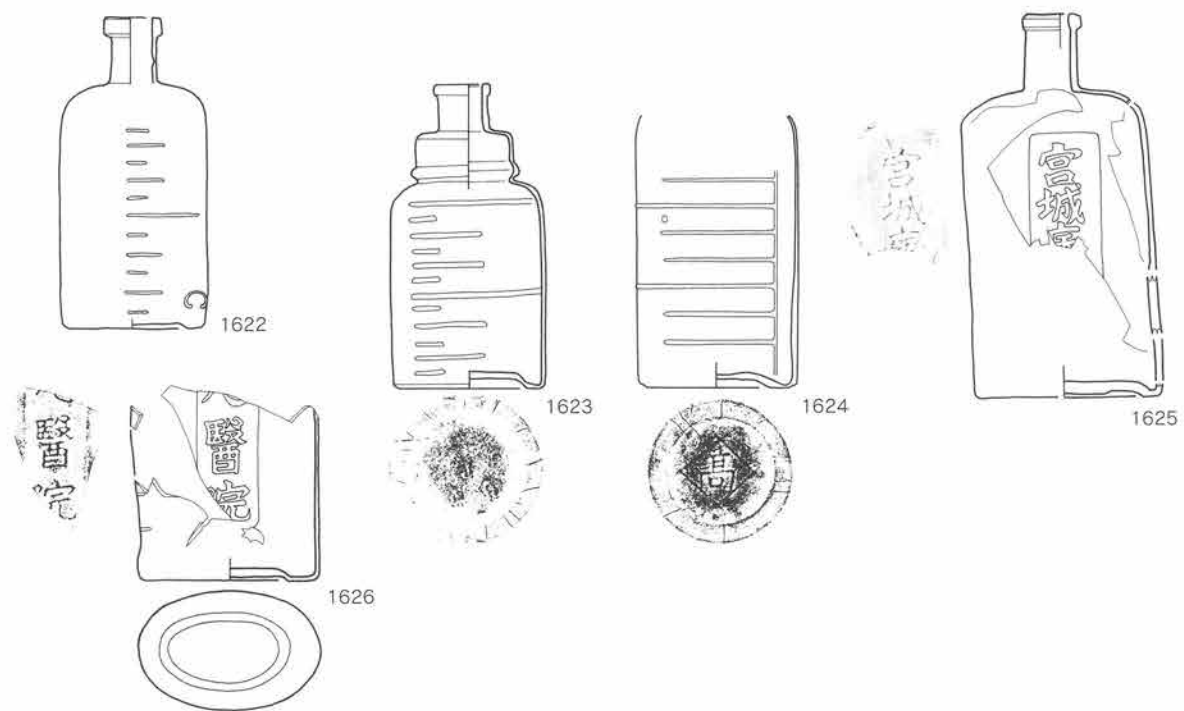
1675～1677は石油ランプの笠である。図示した他に笠は出土していない。いずれも白色のガラスであるが、1675のみやや空色がかかる。1675は上端の径5.8cm、笠の径21.0cm、1676は上端の径6.5cm、笠の径27.0cm、1677は上端の径7.4cm、笠の径27.6cmである。大きさから推測して1675が小型のほや、1676が中型のほや、1677が大型のほやに対応する笠と推測される。

以上のように石油ランプの本体、笠はそれぞれ小型、中型、大型が1個体ずつ、それぞれ合計3個しか出土していないの対して、ほやは合計34個体出土している。ランプの部品の中で、ほやは欠損しやすい消耗品であったことを物語っている。



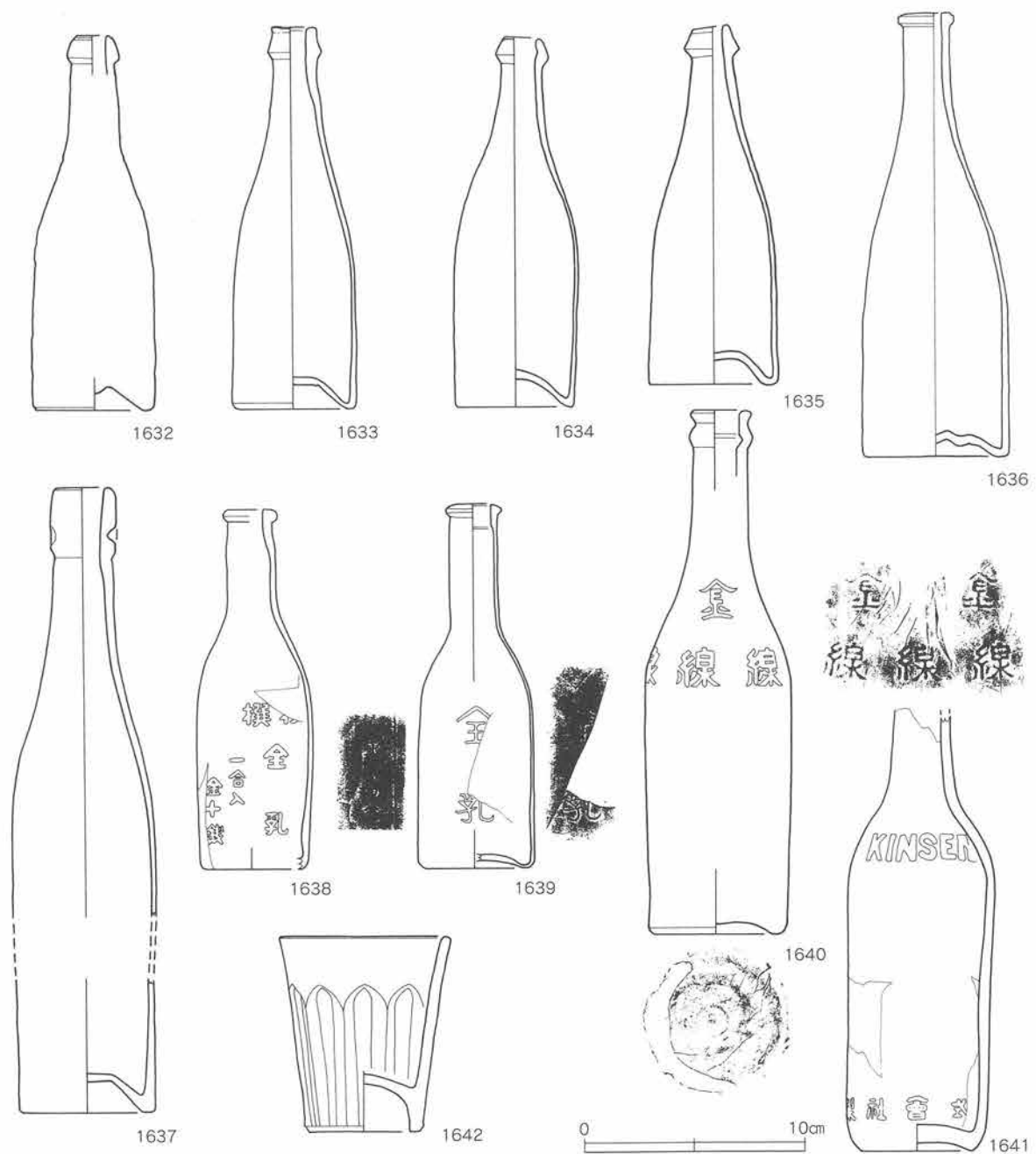
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1601	薬瓶	SK1埋土	1.1	-	5.0	緑色	4個体あり 「寶舟」
1602	"	"	1.0	-	6.1	緑色	文字なし
1603	"	"	1.1	-	5.2	緑色	"
1604	"	"	1.1	-	5.3	緑色	"
1605	"	"	0.9	-	4.0	透明	2個体あり 文字なし
1606	"	"	-	2.4	(5.1)	青色	「神薬」 目盛りあり
1607	"	"	1.2	1.9	5.6	青色	「神薬」
1608	"	"	1.2	2.3	7.9	透明	「ヨヂムチンキ」「石井謹製」 ヨードチンキの瓶
1609	"	"	-	2.6	(6.2)	透明	文字なし
1610	"	表彩	1.5	2.2	5.8	青色	"
1611	"	SK1埋土	1.2	1.6	4.2	透明	"
1612	"	"	1.2	1.4	3.2	透明	文字なし、内部に黄色の物体残存
1613	薬瓶?	"	1.3	2.6	14.8	透明	「東京 暁星堂謹製」 2個体あり
1614	インク瓶	"	2.0	4.1	5.5	緑色	「M」
1615	"	"	2.4	4.2	5.0	緑色	「登M録」
1616	不明	"	1.8	-	(6.1)	透明	文字なし
1617	"	"	2.3	3.5	6.7	透明	文字なし
1618	クリーム瓶	"	3.7	4.0	5.0	白色	文字なし
1619	"	"	3.4	3.5	6.7	白色	文字なし
1620	椿油瓶	"	1.7	3.1	8.9	透明	"
1621	哺乳瓶	"	2.7	8.5	5.4	透明	桃太郎の絵

第115図 ガラス製品①



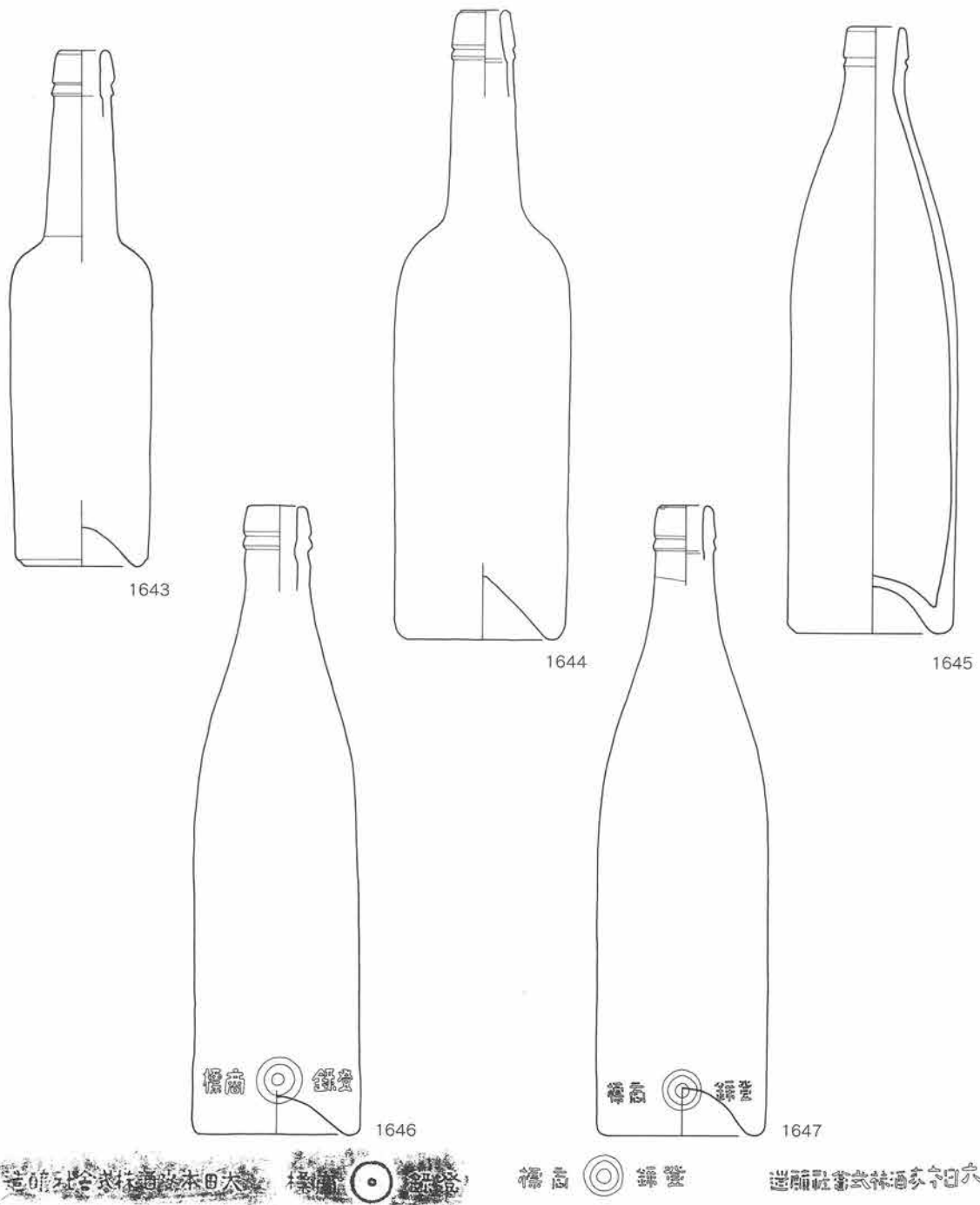
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1622	薬瓶	SK1埋土	2.1	5.3	12.5	透明	目盛
1623	"	"	2.2	5.7	12.2	透明	目盛 底面に「実用15989 新案」
1624	"	"	-	5.8	10.9	透明	目盛 底面に「  」
1625	"	"	1.8	7.1	(15.4)	透明	「宮城病-」 角型の瓶
1626	"	"	-	6.9	(7.8)	透明	「一醫院」 目盛あり
1627	"	"	2.7	6.8	19.0	緑色	文字なし
1628	"	"	2.4	7.2	19.4	緑色	"
1629	"	"	2.8	6.8	20.2	緑色	"
1630	"	"	2.5	6.0	20.0	茶色	"
1631	"	"	3.0	6.6	20.6	青色	"

第116図 ガラス製品②



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1632	清酒瓶?	SK1埋土	1.5	5.2	17.2	緑色	清酒一合瓶か
1633	"	"	2.0	5.3	17.4	緑色	"
1634	"	"	1.6	5.2	16.9	緑色	"
1635	"	"	1.7	5.7	16.4	緑色	"
1636	"	"	2.2	6.9	20.3	緑色	清酒二合瓶か
1637	"	"	2.4	6.0	(28.5)	緑色	機械栓 清酒四合瓶か
1638	牛乳瓶	"	2.2	4.5	16.4	透明	「特撰 全乳 一合入 金十銭」
1639	"	"	2.0	4.7	16.6	透明	「全乳 正一合入」
1640	サイダー瓶	"	2.5	5.8	23.9	緑色	「金線」3個体 金線サイダーの瓶
1641	"	"	-	5.0	(20.2)	透明	「KINSEN 一式会社製」 金線サイダーの瓶
1642	コップ	"	7.5	5.0	8.9	透明	色やや黒ずむ 3個体あり

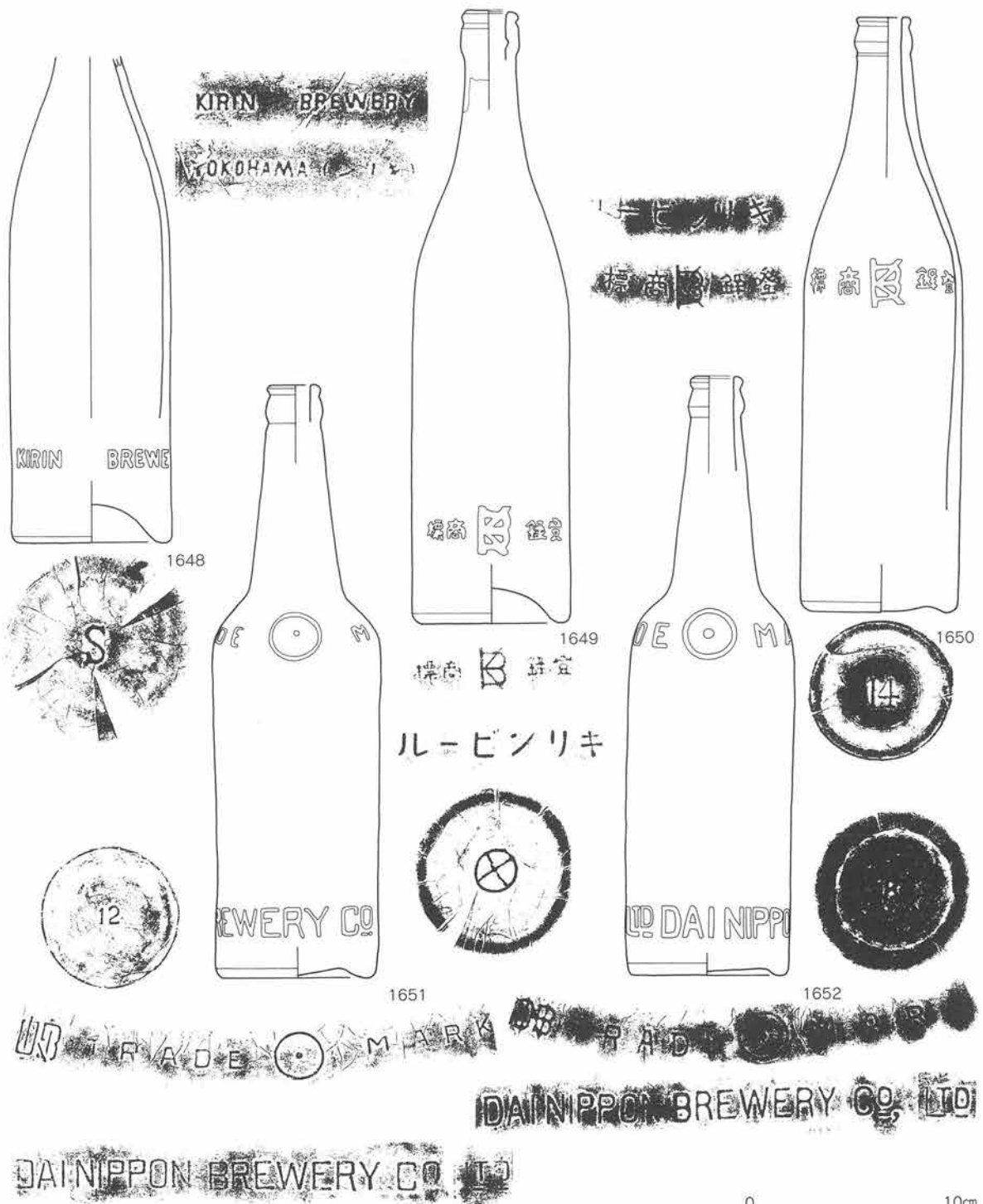
第117図 ガラス製品③



0 10cm

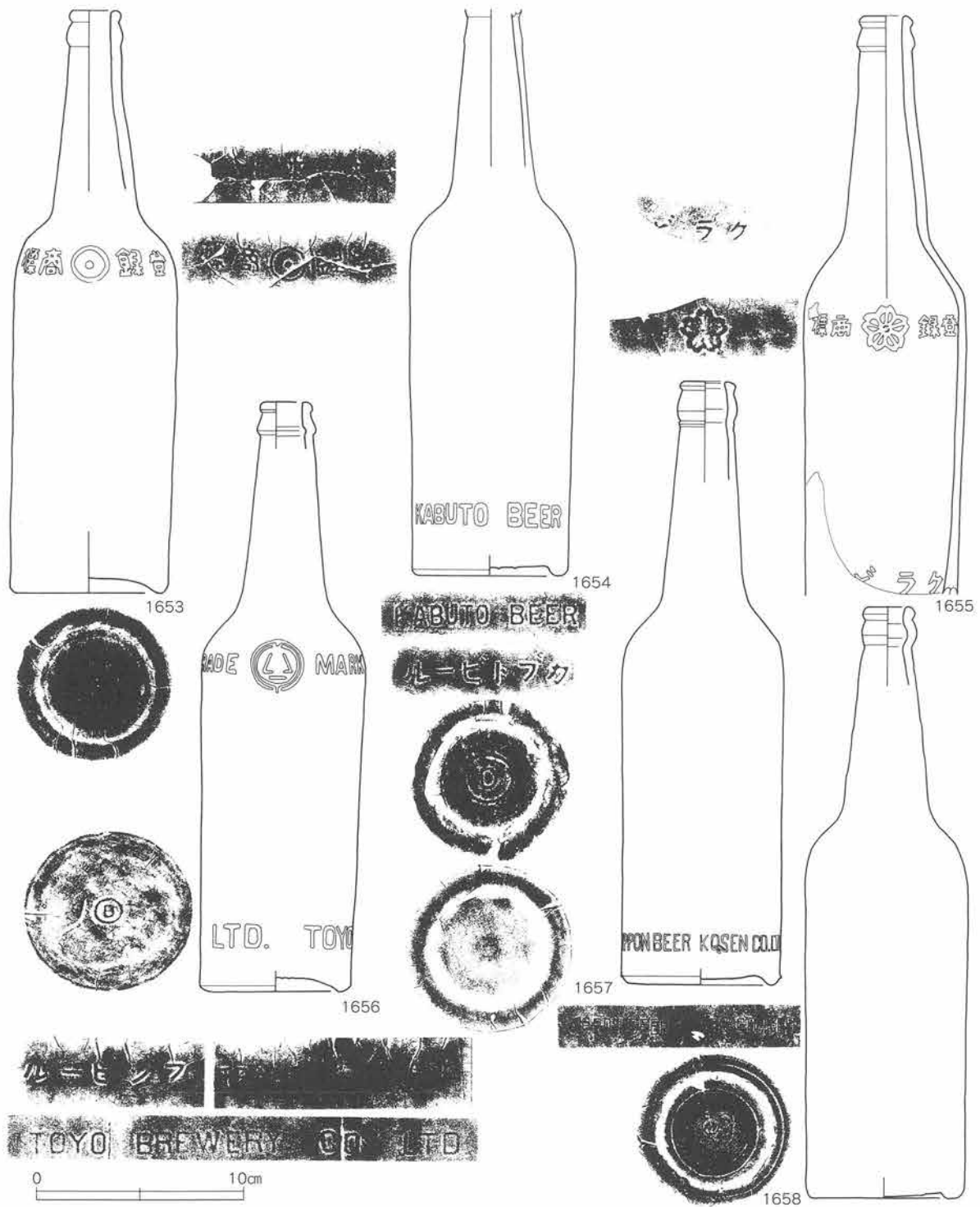
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1643	ワイン瓶?	SK1埋土	2.2	5.4	23.8	茶色	文字なし 2個体あり 上げ底 コルク栓
1644	"	"	2.1	6.9	29.0	茶色	"
1645	ビール瓶	"	2.5	6.8	27.9	茶色	文字なし 上げ底 コルク栓
1646	"	"	2.5	7.1	28.9	茶色	上げ底 口紙の痕跡 コルク栓 1906年頃
1647	"	"	2.2	7.0	29.0	茶色	文字印刷 口紙の痕跡 コルク栓 1906年頃

第118図 ガラス製品④



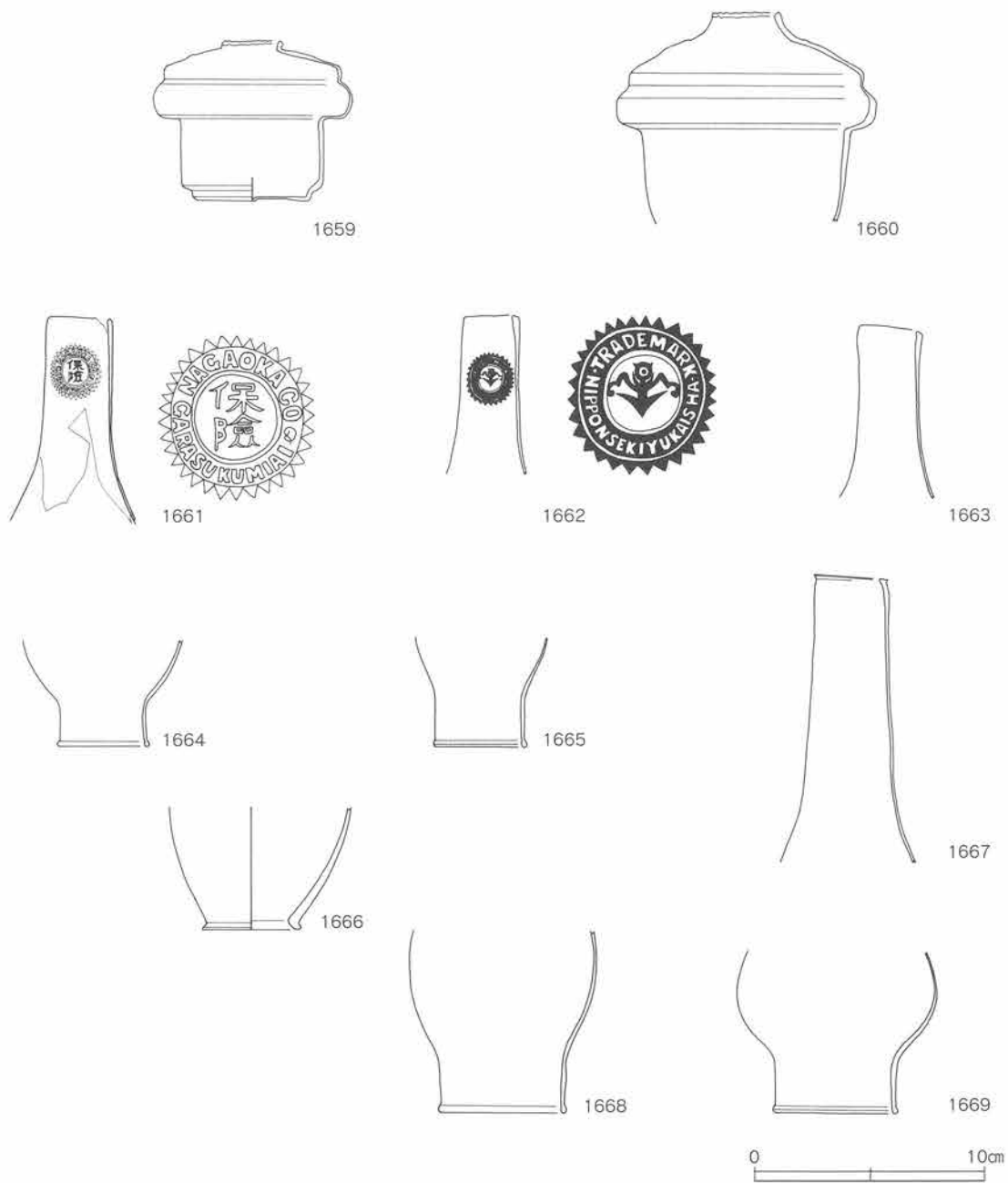
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1648	ビール瓶	SK1埋土	—	7.3	(23.5)	茶色	上げ底 1880~1907年頃
1649	"	"	2.3	7.0	29.7	茶色	上げ底 口紙の痕跡 コルク栓 1880~1907年頃
1650	"	"	2.4	6.7	28.8	茶色	王冠 3個体 1907~1930年頃
1651	"	"	2.2	7.1	28.8	茶色	王冠 4個体 1906~1930年頃
1652	"	"	2.1	7.3	28.9	茶色	王冠 5個体 1651と字体が異なる 1906~1930年頃

第119図 ガラス製品⑥



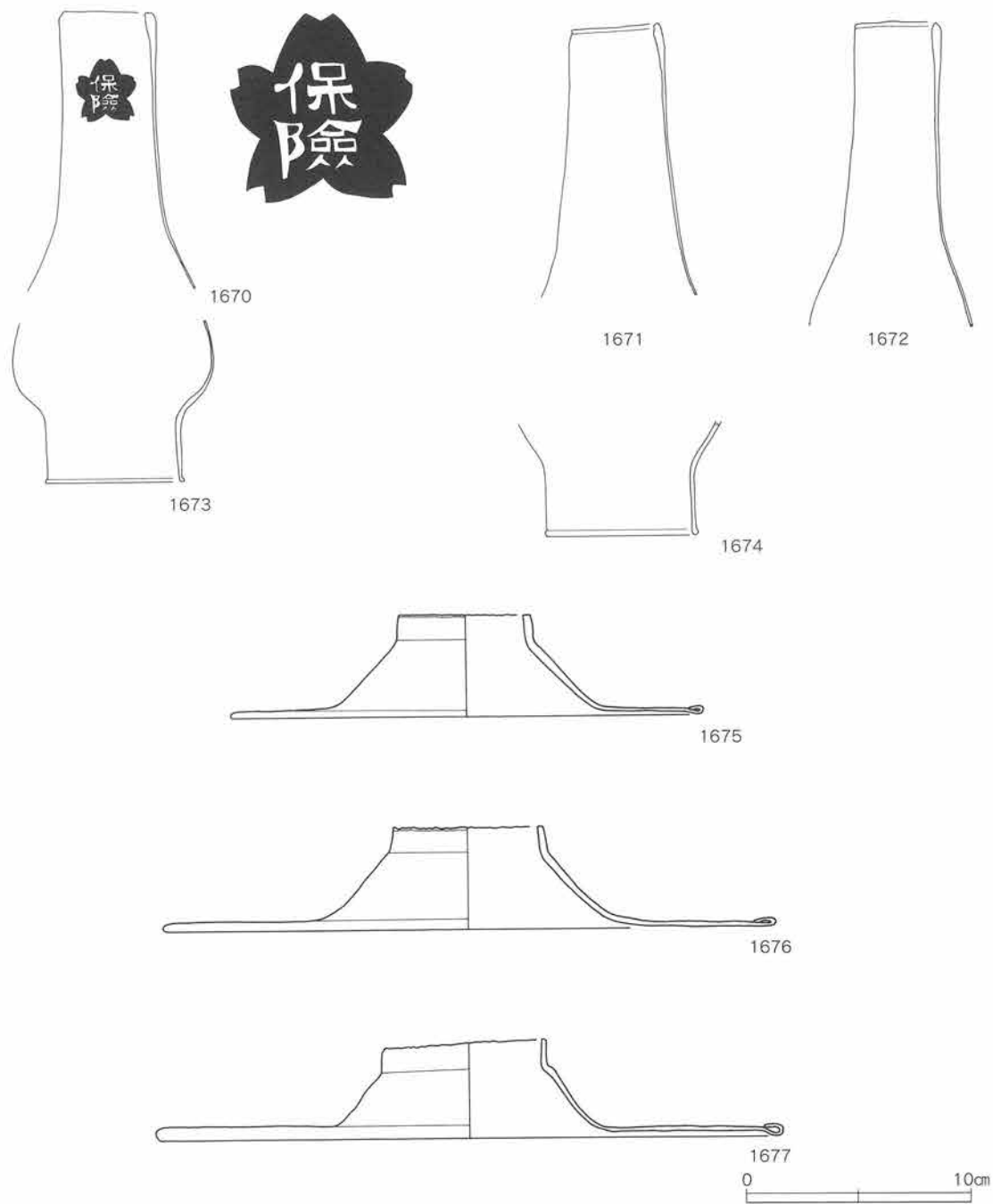
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1653	ビール瓶	SK1埋土	2.2	7.1	28.6	茶色	王冠 1906~1930年頃
1654	"	"	-	7.1	(27.7)	茶色	王冠 1898~1921年頃 カブトビール
1655	"	"	2.1	-	(28.3)	茶色	王冠 1913~1930年頃 サクラビール
1656	"	"	2.1	6.5	28.8	茶色	王冠 1921~1923年頃 フジビール 2個体
1657	"	"	2.5	7.0	29.5	茶色	王冠 1921~1930年頃 ユニオンビール 2個体
1658	"	"	2.2	7.0	28.9	茶色	王冠 文字なし

第120図 ガラス製品⑥



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1659	石油ランプ	SK1埋土	2.6	4.9	7.0	緑色	小型
1660	"	"	3.0	-	(9.3)	透明	大型 底部欠損
1661	ランプのほや	"	2.7	-	(9.0)	透明	小型 「NAGAOKA GARASU KUMIAI 00」
1662	"	"	2.4	-	(7.0)	透明	" 「NIPPON SEKIYUKAISHA - TRADEMARK -」
1663	"	"	2.7	-	(7.6)	透明	小型
1664	"	"	-	4.0	(4.7)	透明	小型
1665	"	"	-	4.0	(4.8)	透明	小型
1666	"	"	-	4.2	(5.4)	透明	中型 他と形状異なる
1667	"	"	3.1	-	(12.7)	透明	"
1668	"	"	-	5.6	(8.0)	透明	"
1669	"	"	-	5.3	(7.1)	透明	"

第121図 ガラス製品⑦



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
1670	ランプのほや	SK1埋土	4.0	—	(12.5)	透明	大型 「保検」
1671	"	"	4.0	—	(12.2)	透明	"
1672	"	"	3.7	—	(13.8)	透明	大型?
1673	"	"	—	6.2	(7.2)	透明	大型
1674	"	"	—	6.8	(5.1)	透明	"
1675	ランプの笠	"	5.9	20.9	4.6	白色	やや空色がかかる
1676	"	"	6.7	27.0	4.6	白色	
1677	"	"	7.2	27.6	4.5	白色	

第122図 ガラス製品⑧

第9節 石製品

石製品は砥石（1701～1714）、硯（1715、1716）、不明石製品（1717、1719、1720）、墨書石（1718）、挽臼（1721～1723）が出土した。

1 砥石（第123、124図、写真図版114）

砥石はその形状では時期判別が困難である。下構遺跡の場合、12世紀の可能性も考慮しなければならないが、近世～近代に属する可能性が非常に高い。石質は1701、1703、1706～1710、1712～1714が砂岩、1702は頁岩、1705が粘版岩、1711は凝灰岩である。砥面は1面のみ使用のものが5点、2面使用が8点、4点使用が1点である。1715には砥面に人為的に施されたくぼみがある。

2 硯（第124図、写真図版114）

1715は粘板岩製の硯である。石の色調は黒色を呈する。海の部分が残るが縁は欠損している。また手前半分が欠損するが、その欠損面を観察すると、人為的に切断していることが読み取れる。時期は近世～近代と推測される。

1716は粘板岩製の硯である。石の色調は暗赤褐色を呈する。かなり使い込まれており陸の部分も磨耗のため窪む。縁の部分はいずれも欠損している。時期は近世～近代と推測される。

3 不明製品、墨書石（第124、125図、写真図版114、115）

1717は凝灰岩製の不明製品である。表面と裏面を平滑にし、表面に勾玉状の形状のくぼみを彫り、それに加えて多条の沈線を彫り込んでいる。また上側面には漏斗状の穴を彫り、勾玉状のくぼみにつなげている。下側面には2条の沈線が施されている。何らかの鋳型とも考えたが、二次被熱の痕跡は全く見出せない。また勾玉状のくぼみの形状に当てはまる製品も該当するものが見出せない、その他に用途は適切なものが見出せず不明製品とせざるを得ない。時期は近世～近代と推測される。

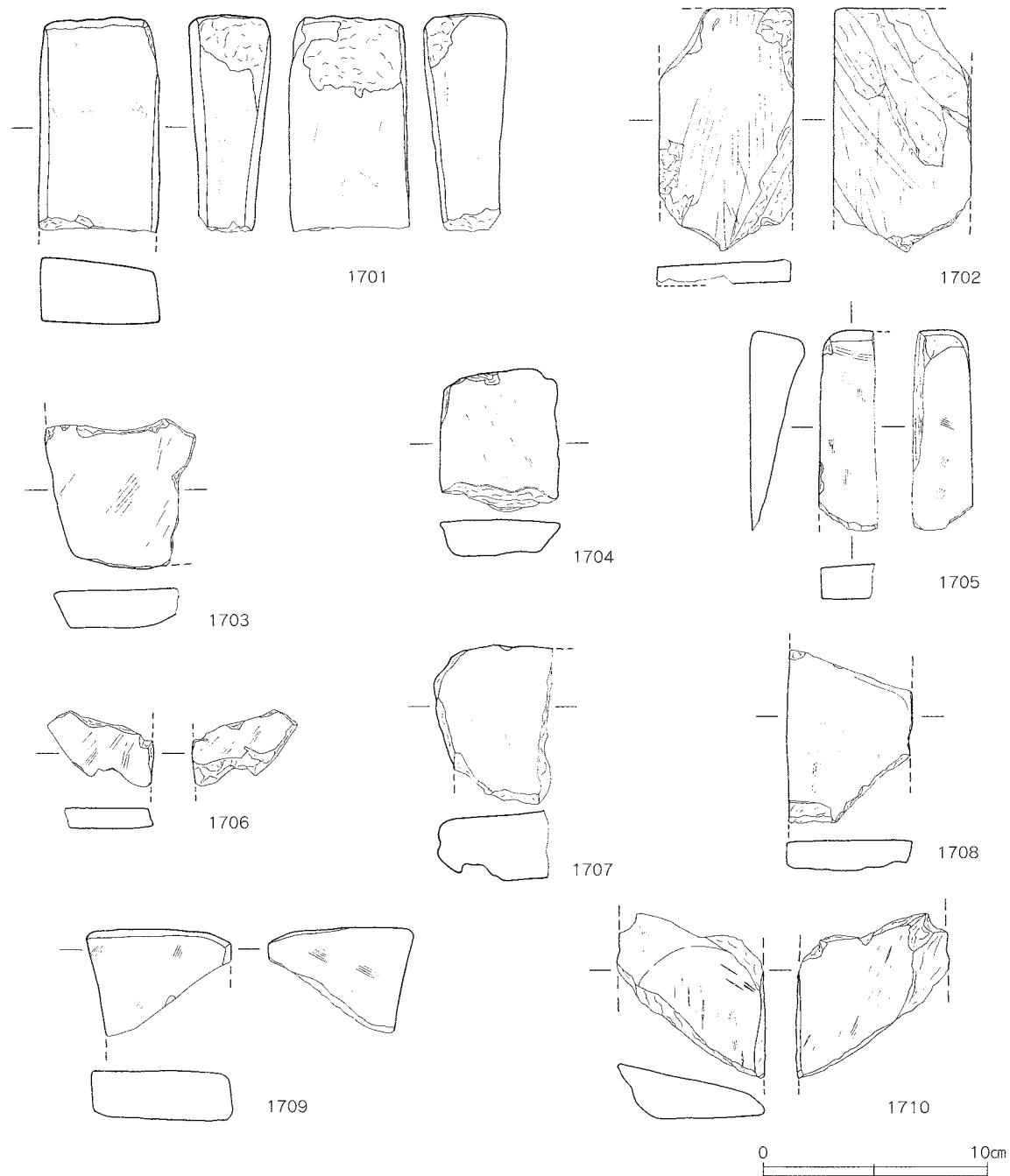
1718は墨書のある石である。石質は凝灰岩である。表、裏に墨書が施されるが、欠損部にも墨書が続いており、墨書を読むことができない。表と裏では文字の書く方向が異なっている。時期は近世～近代と推測される。

1719は半球型の不明製品である。下面が平坦になっているが人為的に成型している痕跡は見出せない。また、それ以外の部位にも人為的成型、調整痕は見出せない。石質は同定していないが火成岩である。当初は五輪塔の空輪（頂部）の可能性などを考えたのであるが、宝珠形になっておらず、その可能性は低い。このように人為的な痕跡はないが、特異な形状であり、人が何らかの意図を持って生活の場に持ち込んだ可能性はあると考える。

1720も不明製品で石質は砂岩である。片面がくぼみ、その内部に鑿の痕跡がある。その背面にも鑿の痕跡がある。このように人為が加えてあるのは確かであるが明確な用途が見出せない。形状から石製挽臼の未製品の可能性も考えられるがその確証もない。

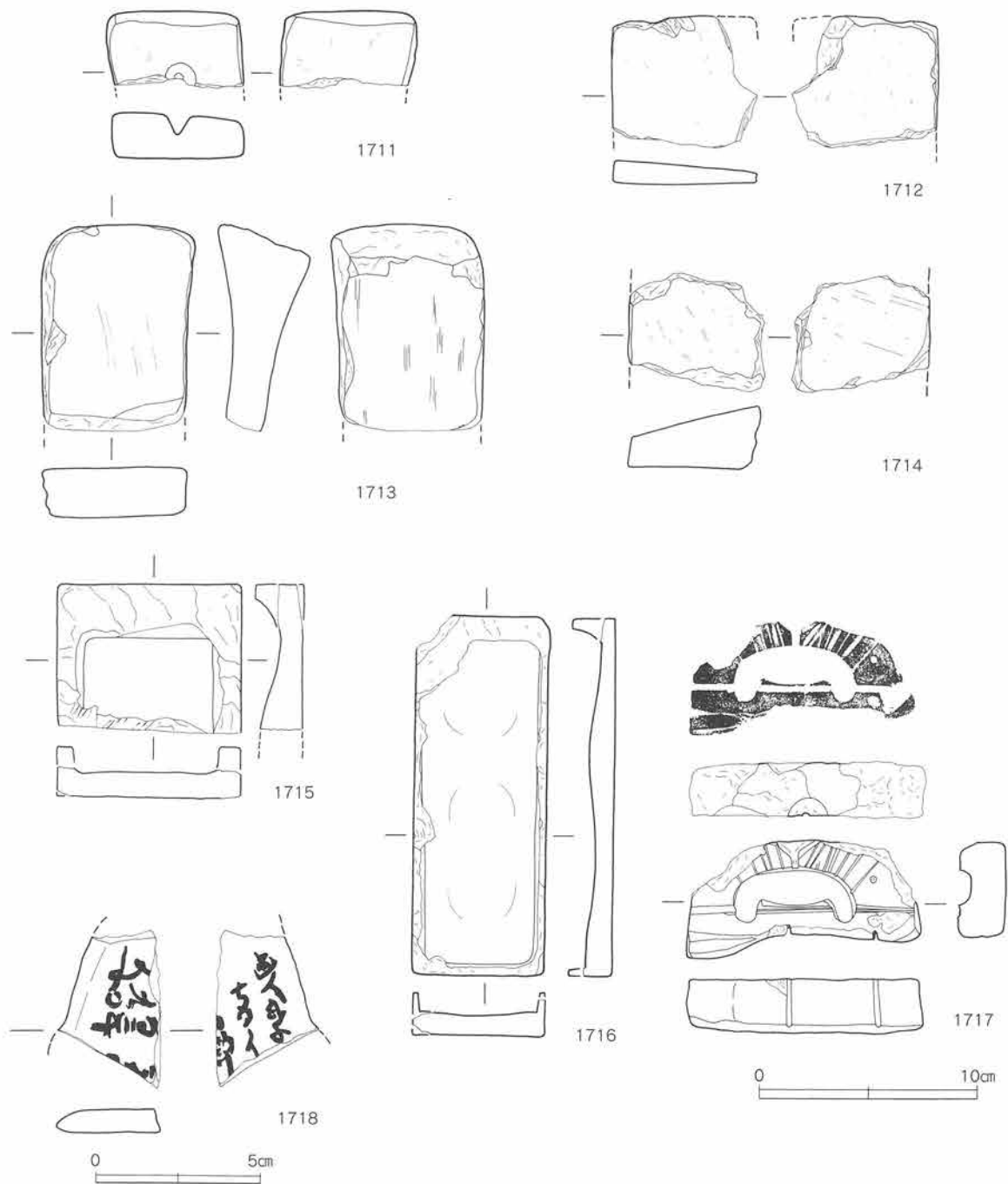
4 挽臼（第126～128図、写真図版115～118）

1721～1723は石製挽臼である。1721は上臼である。約半分欠損している。石質はデイサイト（石英安山岩）である。卸し目は磨耗と欠損のため明瞭ではないが、6単位の分割と推測される。また軸穴の部分



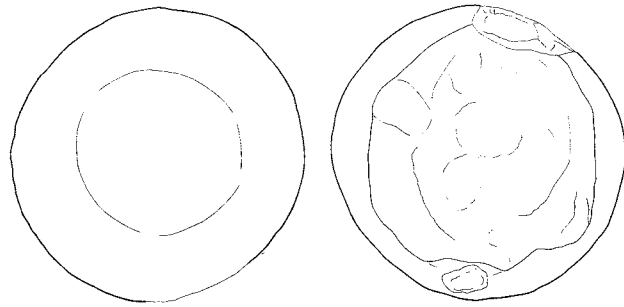
番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
1701	砥石	表採	砂岩	4面使用 時期は近世～近代と推測される	320
1702	"	SK2埋土	頁岩	2面使用 "	100
1703	"	SK3埋土	砂岩	1面使用 "	110
1704	"	SD10埋土	"	" "	93
1705	"	北側粗掘	粘板岩	2面使用 "	79
1706	"	SD9埋土	砂岩	2面使用 "	20
1707	"	SK15埋土	砂岩	1面使用 "	140
1708	"	SK1埋土	砂岩	1面使用 "	80
1709	"	SK15埋土	"	2面使用 "	85
1710	"	14c検出時	"	1面使用 "	105

第123図 石製品①

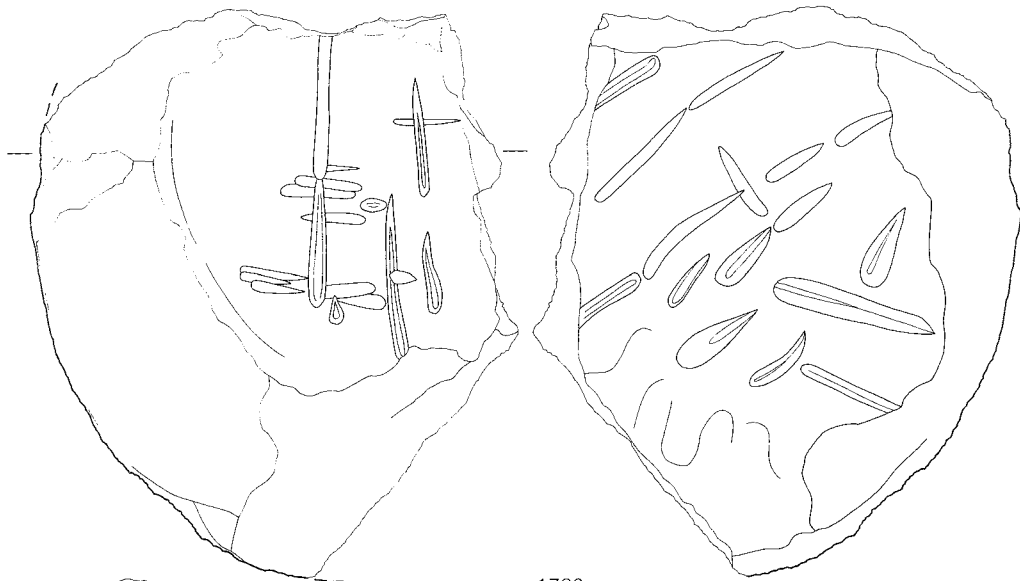
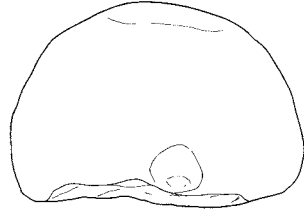


番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
1711	砥石	SK2埋土	凝灰岩	2面使用 上面にくぼみ 時期は近世～近代と推測される	90
1712	"	SD6埋土	砂岩	2面使用 "	69
1713	"	北側粗掘	"	" "	311
1714	"	SK15埋土	"	" "	121
1715	硯	SK1埋土	粘板岩	人為的に切断している "	180
1716	"	SK1埋土	粘板岩	暗赤褐色を呈する "	280
1717	不明	SK1埋土	凝灰岩	用途不明 "	171
1718	墨書石	SK15埋土	凝灰岩	墨書が両面に施される	20

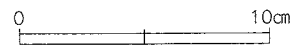
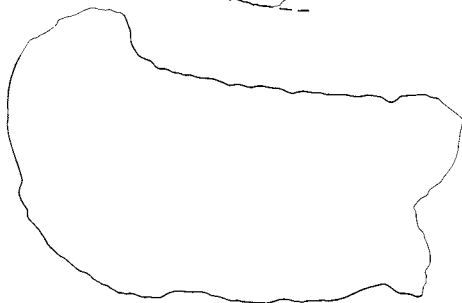
第124図 石製品②



1719

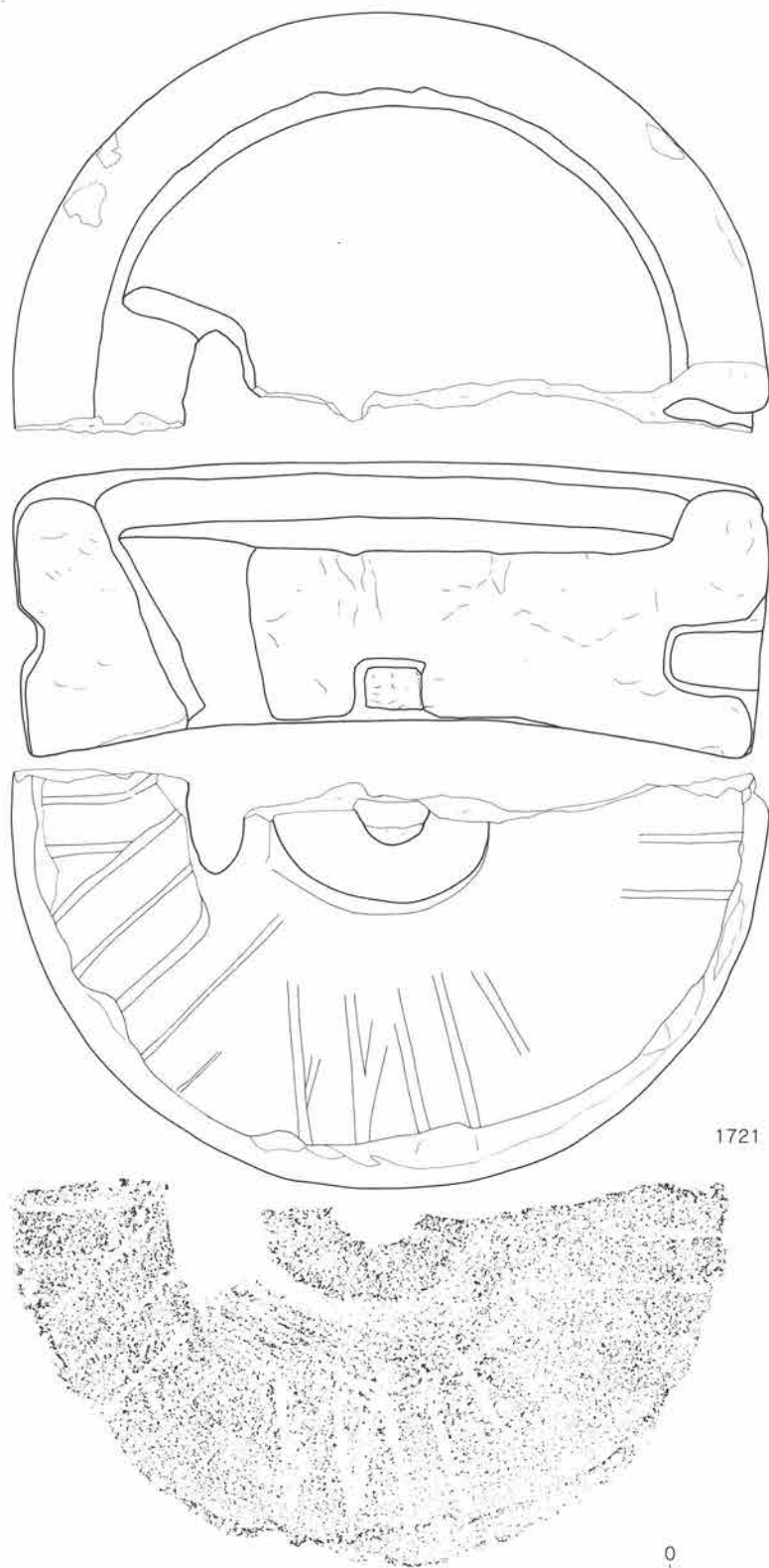


1720



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
1719	不明	SK1埋土	同定していない	下部が平坦になっている 人為加工の有無不明	1,340
1720	不明	SK1埋土	砂岩	挽臼の未成品か	4,500

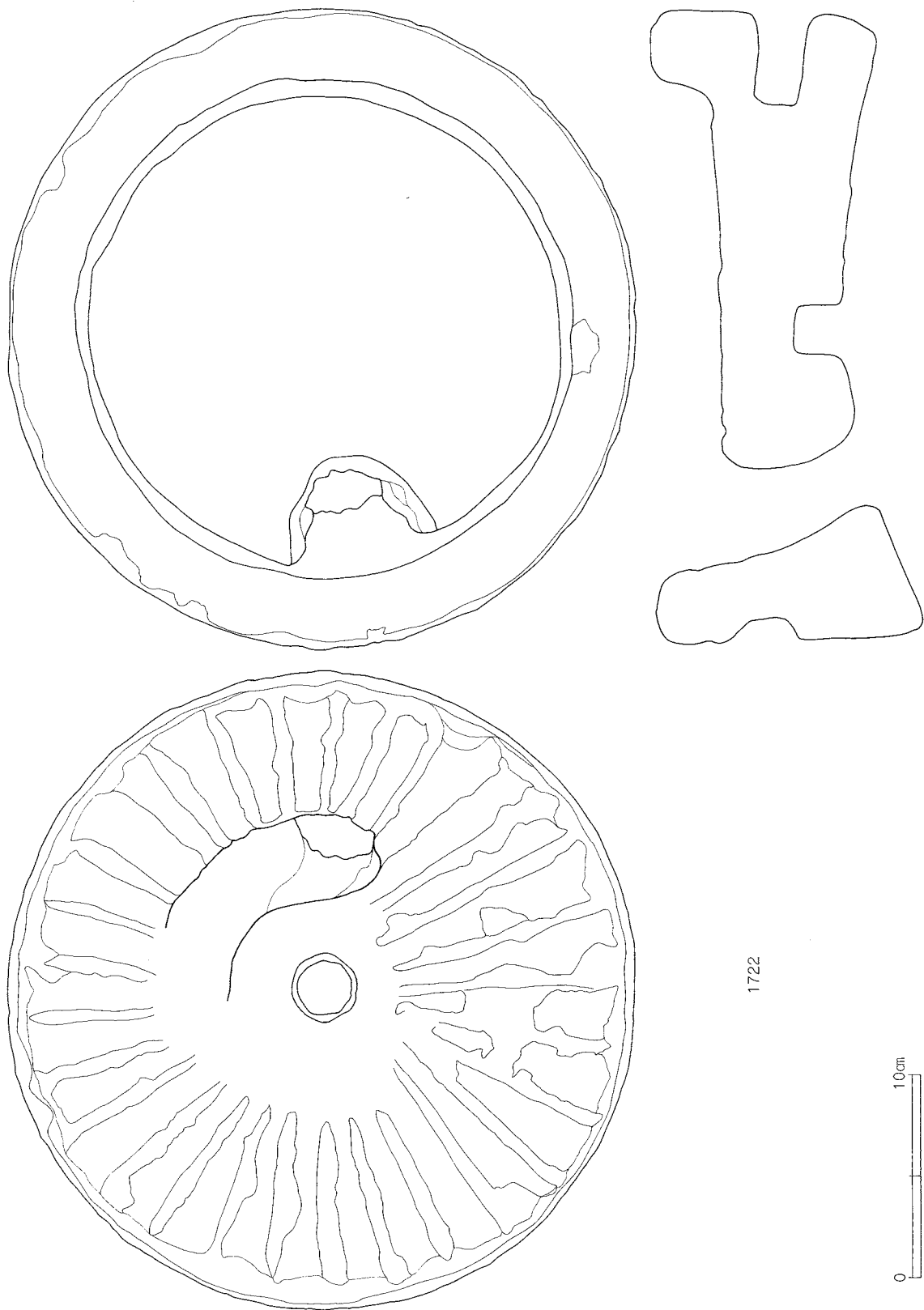
第125図 石製品③



1721

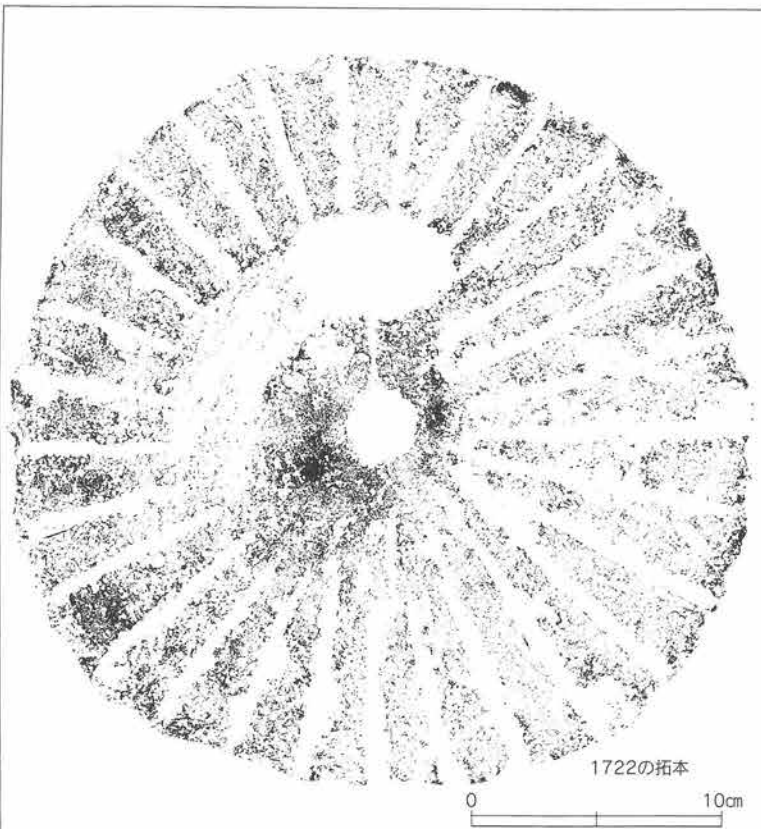
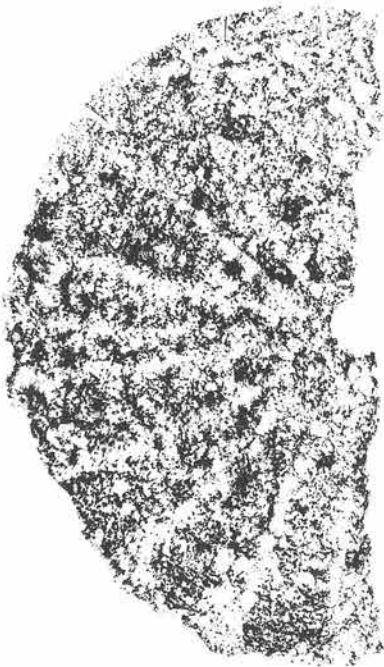
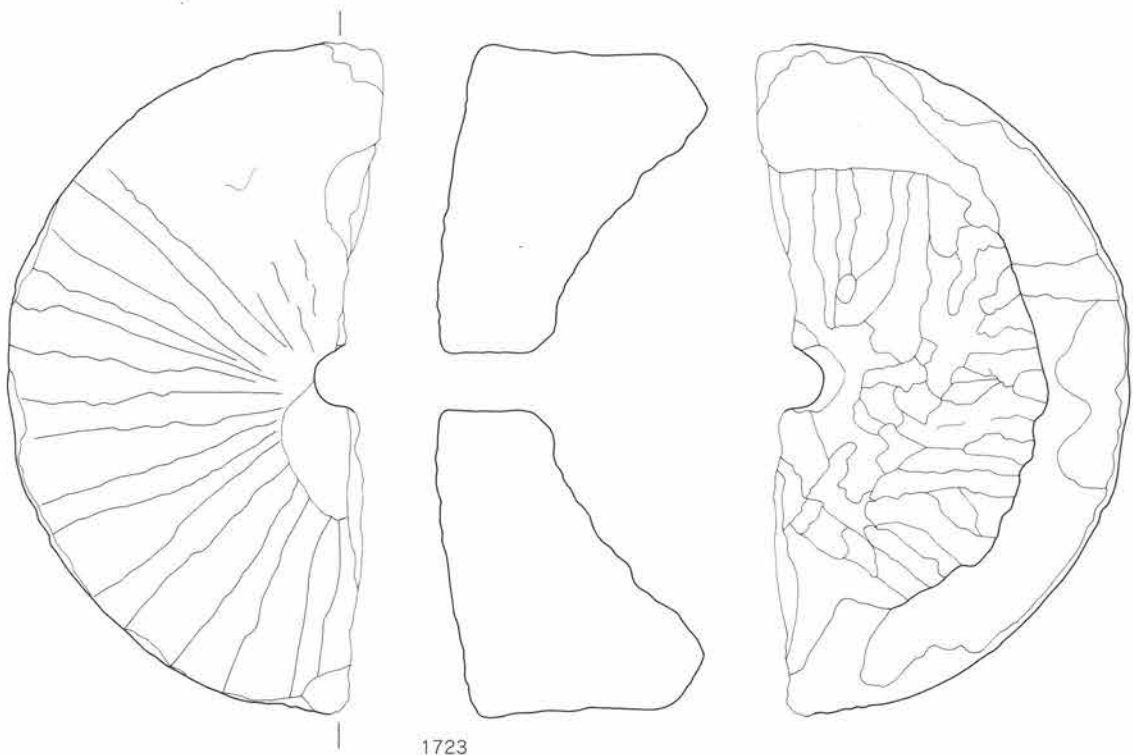
番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
1721	挽臼	1号倒木痕埋土	デイサイト (石英安山岩)	上白 鉄製の芯棒の痕跡あり 近世後半～近代か	6,400

第126図 石製品④



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
1722	挽臼	表採 (21b)	デイサイト (石英安山岩)	上白、目のパターン放射状 近世か	7,700

第127図 石製品⑤



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
1723	挽臼	攪乱中 (17e)	デイサイト (石英安山岩)	下白、目のパターン放射状 近世か	4,600

第128図 石製品⑥

に鉄製の心棒の一部が残存している。平泉地域において近世の挽き臼の目は放射状のものが多い。また心棒が鉄製と判断できる近世の資料は存在しない。よって1721の時期は近代以降の可能性が高い。

1722は上臼である。石質はデイサイト（石英安山岩）である。卸し目は放射状である。卸し目の形状から時期は近世と推測される。

1723は下臼である。約半分に欠損している。石質はデイサイト（石英安山岩）である。卸し目は磨耗が著しいが放射状と推測される。卸し目の形状から時期は近世と推測される。1722とは直径が異なり、組み合わせではない。

第10節 木製品

木製品は漆器碗、蓋（1801～1805）、不明漆器製品（1806）、下駄（1807、1808）、曲物底板？（1809）、鍋蓋（1810）、棒状製品（1811）、桶底（1812）が出土した。

1 漆器碗、蓋、不明漆器（第129図、写真図版118）

1801～1803は漆器碗である。いずれも腐食が著しく土圧で歪んだ状態で出土した。図の下部に示したのが現状で、実測図はいわば復元想定図である。歪みの少ない部位を利用して作成した。漆は黒漆、赤漆が使用されているが、スクリーントーンで区別して図示した。1801、1802は外面、高台内が黒漆、内面が赤漆、1803は全面赤漆である。樹種は1805については行なっていないが、他の樹種はいずれもブナ属である。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。全体の器形がわかるものは1802のみである。1801の底径は5.1 cm、器高1.9 cm以上、高台の高さ0.4 cmである。1802は口径11.6 cm、底径5.4 cm、器高4.4 cm、高台の高さ0.4 cmである。1803は底径5.5 cm、器高4.8 cm以上、高台の高さ1.1 cmである。

宮城県大日北遺跡の墓の副葬品で、明らかに入れ子にして収容可能な三つ組み碗が出土している（関根達人2000「東北地方における近世食膳具の構成—近世墓の副葬品の検討から—」東北文化研究室紀要通巻第40集）。これらは大きいものから順に、「飯碗」、「汁碗」、「菜碗」に相当し、最も基本的な一汁一菜の組合せになるという。このそれぞれの法量を1801～1803に仮に当てはめると、1801は菜碗か汁碗、1802は汁碗、1803が飯碗に相当する。もっともこれらが確実に三つ組み碗である証左はなく、参考程度に示したものである。

1804、1805は端部が欠損しているが、器厚を考えると端部は近いと考えられ、器高の低さから碗蓋と推測した。図示の方法、スクリーントーンの使い方は1801～1803と共通する。どちらも内外面赤漆である。樹種は1805については同定を行なっていないが、1804はブナ属である。また、どちらも高台部が欠損している、底径（上部径）が1804は4.2 cm、1805は5.2 cmと推測される。器高は1804が1.8 cm以上、1805は1.7 cm以上である。1805の高台内には剥離のため明瞭ではないが、黒漆による銘のようなものが描かれている。

1806は不明漆器製品である。破片が3つに分かれるが、同一個体と判断した。湾曲した縁部を持っており裏表面に黒漆を施している。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

2 下駄（第130図 写真図版118）

1807、1808は下駄である。樹種はどちらもクリである。1807はバラバラの状態で出土したが、全体形がわかる程度に復元された。幅6.4 cmに対して長さは22.1 cmと細長い平面形を持っている。時期は出土遺構

の年代観から近世と推測される。

1808の樹種はクリである。約1/3が欠損しており全体の形状はわからない。全体に磨耗、腐食も著しい。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

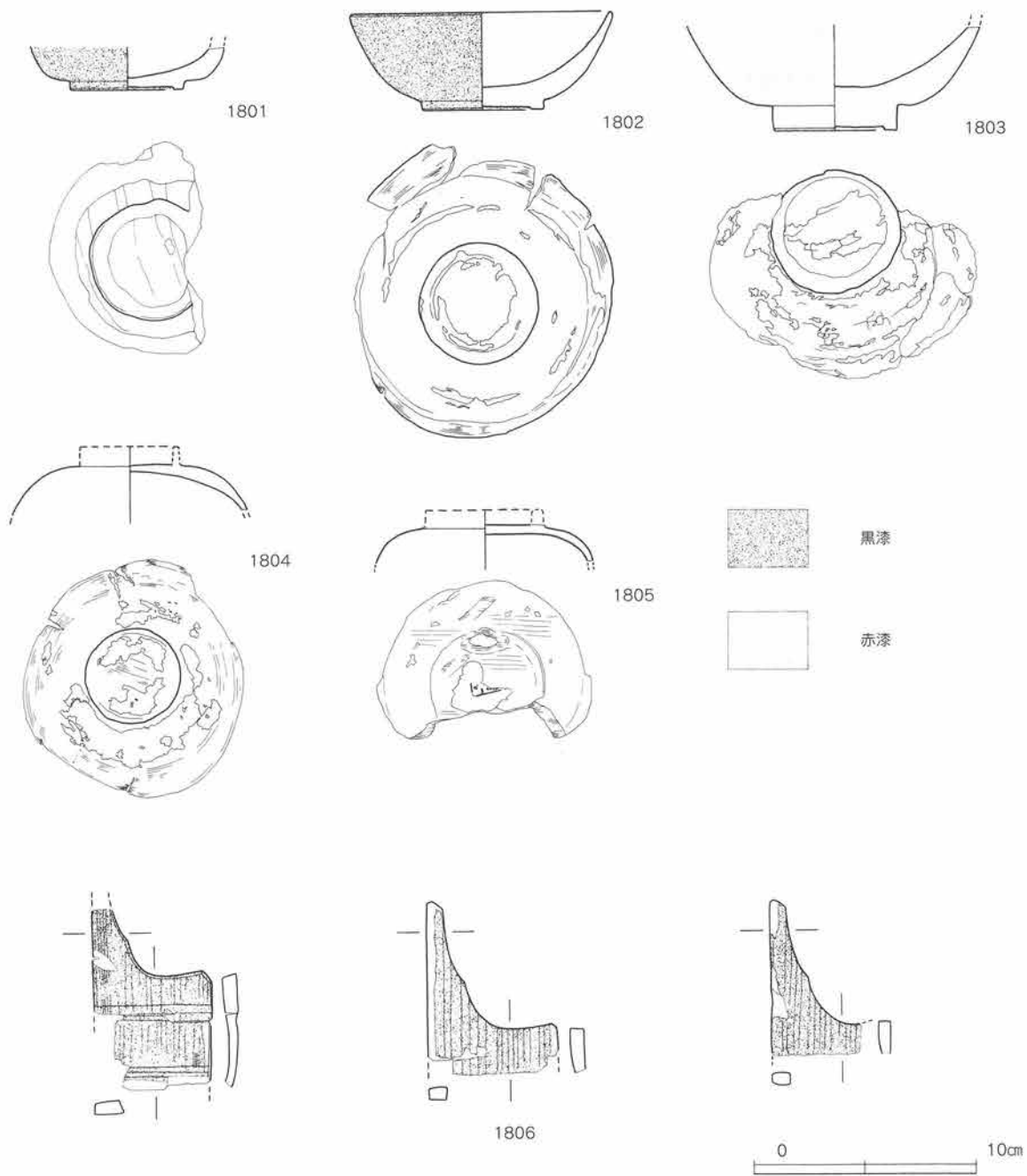
3 その他の木製品（第130図 写真図版118、119）

1809は曲物の底板と推測される。樹種は同定していない。直径5.7cmで小型のものである。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

1810は鍋の蓋である。樹種はスギである。把手部分は欠損している。直径は約20cmである。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

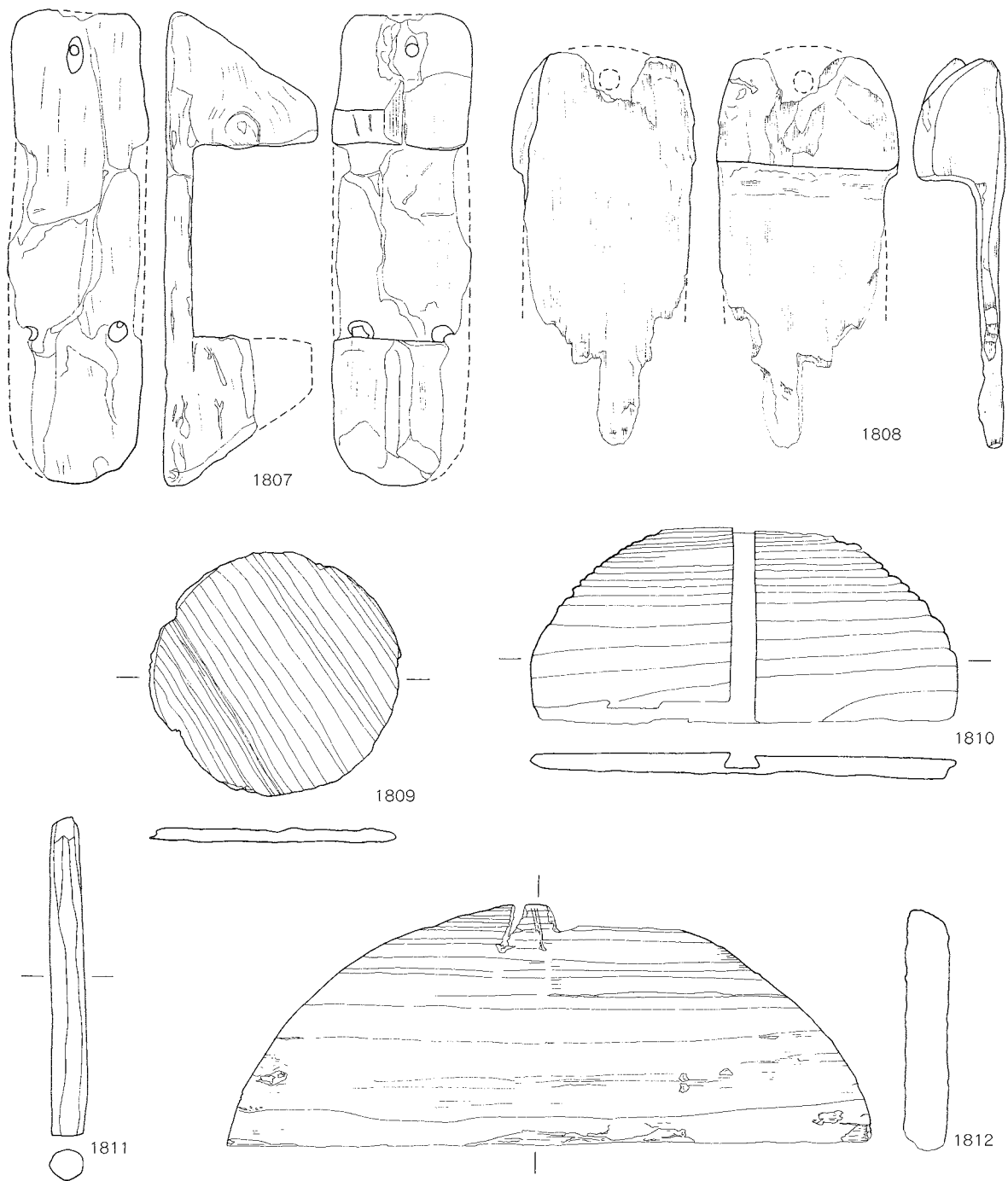
1811は棒状の製品である。樹種同定は行っていない。全面に面取りをおこなっており、両端部は完結している。具体的な用途は不明である。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

1812は桶の底板である。約3/5欠損している。直径は約30cmと推測される。樹種はスギである。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。



番号	器種	出土位置	樹種	その他
1801	漆器碗	SK2埋土	ブナ属	外面、外底面黒漆、内面赤漆
1802	"	"	"	" 著しくゆがんだ状態で出土
1803	"	"	"	外面、外底面、内面赤漆 著しくゆがんだ状態で出土
1804	漆器碗蓋	"	"	外面、上面、内面赤漆 器形から碗蓋と推測
1805	"	"	同定していない	外面、上面、内面赤漆 上面に黒漆による銘のようなものあり
1806	不明漆器	"	マツ属複雑管束亜属	図の裏面にも黒漆 製品名不明

第129図 木製品①



番号	器種	出土位置	樹種	その他
1807	下駄	SK2埋土	クリ	
1808	"	"	クリ	腐食著しい
1809	曲物底板?	"	同定していない	
1810	鍋蓋	"	スギ	
1811	棒状	"	同定していない	面取りしている
1812	桶底板	"	スギ	

第130図 木製品②

第11節 金属製品

金属製品には鉄製品、銅製品がある。時期はいずれも近世～近代のものである。

鉄製品は鎌（1901～1905）、包丁（1906）、やっこ（1907）、鑿（1908、1909）、釘（1910～1919）、受け金具（1920）、くさび？（1921）、くつわ？の部品（1922）、不明製品（1923～1925）である。また製品ではないが、鍛冶滓（1926、1927）も図示した。

銅製品は煙管雁首（1928～1935）、煙管吸口（1936～1940）、小柄の柄（1941）、金具（1942）である。

1 鉄製品（第131、132図 写真図版119）

1901～1905は鎌である。1901、1902と1903～1905は形状が異なっている。前者は柄に装着する部分が短いに対して、後者は長い。1902は錆に覆われ、柄の木質が若干残っている。1903は柄と止め釘が装着されたまま残っている。

1906は包丁と推測される。錆に覆われ、柄の木質が若干残っている。出土遺構の年代観から近世のものと推測される。

1907はやっこである。開いたままの状態出土した。SK1からの出土で、近代以降のものである可能性が高い。

1908、1909は鑿である。どちらも柄は出土せず、鉄部分のみである。時期は確定できず近世～近代のものと言えない。

1910～1919は釘である。いずれも断面形は長方形か方形で、断面形が丸い洋釘はない。釘の形状から時期を判断できないが、出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。

1920は掛け金具を受ける、受け金具と推測される。金具を受けるリングの部分とそれを装着する釘の部分からなる。時期は出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。

1921はくさびと推測される。時期は出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。

1922は確証がないが、馬の口に装着するくつわの「嘴み（はみ）」の部分に類似する。時期は出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。

1923～1925は不明製品である。1923は薄い鉄を方形に巻いており、何らかのものを締める締め金具と推測される。時期は出土遺構の年代観から近代以降の可能性もある。1924は思い当たる形状の製品がない。時期は出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。1925は鋳物である。器種は断定できないが、鉄瓶の口縁部の可能性がある。時期は出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。

1926、1927は鉄滓である。形状と質感、色から鍛冶滓と判断される。1927は半分に分れているが碗型滓である。時期は近世～近代の可能性が高いが、9世紀あるいは12世紀の可能性も皆無ではない。

2 銅製品（第133図 写真図版120）

1928～1935は煙管の雁首である。1928は火皿の部分の破片である。1929は火皿が折れた状態で出土した。図の下は折れていない状態を想定した実測図である。時期は古泉弘氏の煙管の編年（小泉1987「江戸の考古学」ニューサイエンス社）に当てはめるとIV期、18世紀前半頃と推測される。1930は火皿の端部が欠けている。古泉編年のIV期、18世紀前半に当てはまる。1931は火皿が欠損している。古泉編年ではおそらくIV期、18世紀前半に当てはまる。1932は欠損部が多い。図の下は欠損していない状態を想定した実

測図である。古泉編年のV期、18世紀後半に当てはまる。1933は古泉編年のV期、18世紀後半に当てはまる。1934、1935は古泉編年のVI期、19世紀代にあてはまる。1935は「らお」が一部残っている。

1936～1940は煙管の吸口である。吸口の形状では時期を想定することが困難であるが、あえて当てはめると1939は古泉編年のIII期、17世紀後半、他はIV～VI期、18～19世紀に当てはまる。また出土遺構の年代観から1937、1939は近世に属する可能性が高い。1938は約半分が欠損している。

1941は小柄の柄である。扇の文様が施されている。内部には鉄製の小刀の柄が残っており、錆膨れで小柄の柄を歪ませている。出土遺構SK1は1930年頃の廃絶であるが、1941は近世の製品と推測される。

1942は金具である。菊花型で中央に四角の穴がある。飾り金具と推測されるが、具体的な用途は不明である。時期は出土遺構の年代観から近世に属する可能性が高い。

3 銭貨（第134、135図、写真図版120、121）

出土した銭貨には永楽通寶（1943、1944）、寛永通寶（古寛永1945～1948）、新寛永（新寛永1949～1958）、寛永通寶（鉄一文銭1959～1961）、寛永通寶（鉄四文銭1962、1963）、仙台通寶（1964～1966）がある。

1943は永楽通寶の本銭と推測される。また1944は永楽通寶の模鑄銭と推測される。永楽通寶は初鑄年代1408年の明銭である。下構遺跡では15～16世紀に属する遺物は他に全く出土しておらず、この永楽通寶も近世下構屋敷に伴う遺物と判断される。

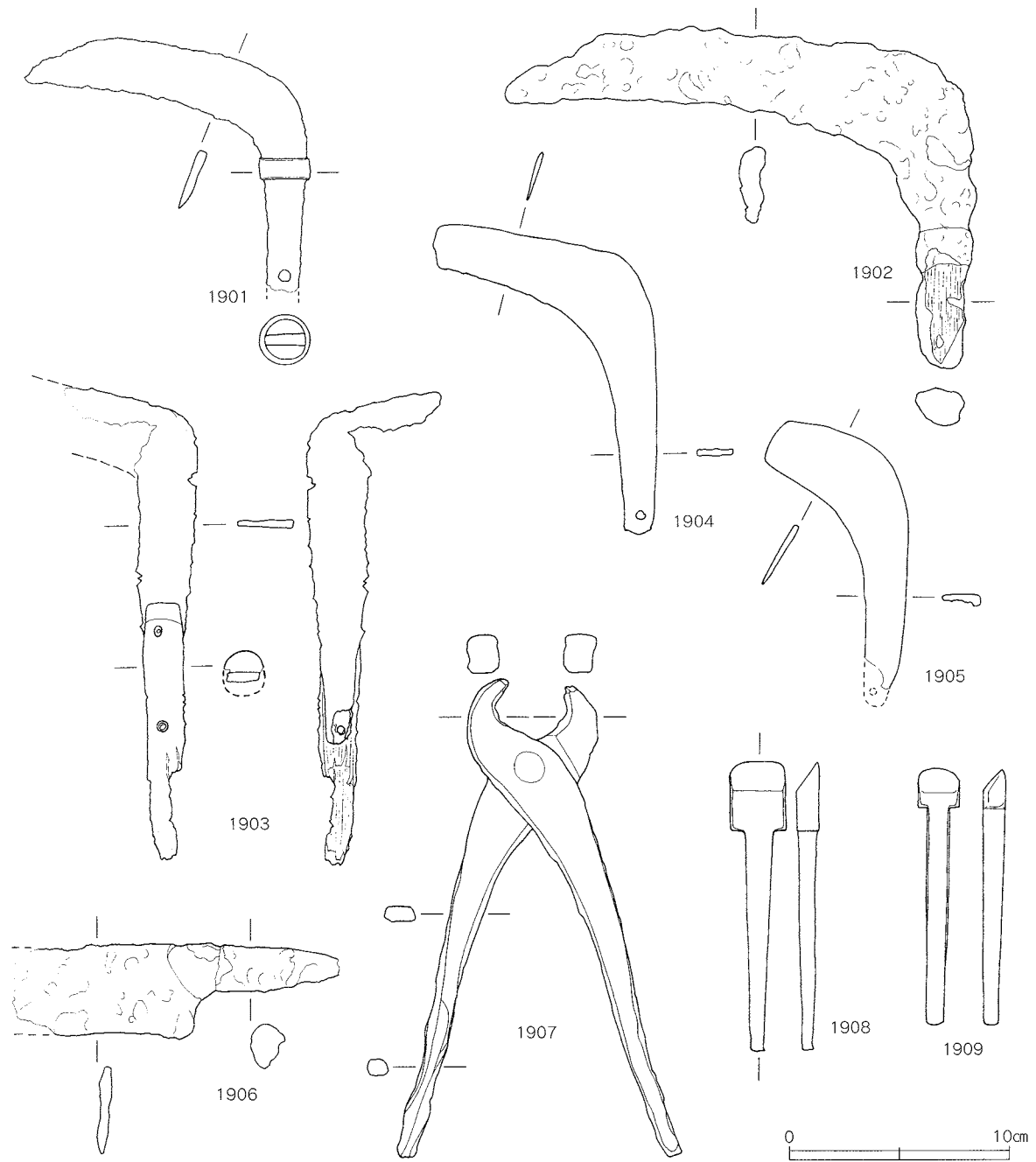
1945～1948は「古寛永」である。初鑄年代は1636年である。部分的に欠損している個体もあるが、重量は1.78～2.57gである。

1949～1958は「新寛永」である。ちなみに今回の調査では「文銭」は1点も出土していない。新寛永の分類について永井久美男氏は「収集界では、銭座毎に鑄造時期別の分類が行なわれているが、はたしてこの分類が学術的な裏づけをもってなされているのかとなるか大変疑問である。……多数を占める無背銭の分類は収集界でも流動的であり、学術的な根拠も乏しいこともあって受け入れられない。」（永井久美男編1998「近世の出土銭Ⅱ」兵庫埋蔵銭調査会）としている。その点を承知の上で（日本銀行調査局1974「日本の貨幣3」東洋経済新報社）の記述に従って分類すると、1949は1714年初鑄の正徳江戸亀戸鑄所銭、1950は1737年～1745年鑄造の元文出羽秋田鑄所銭にあてはまる。他については分類できなかった。

1959～1961は寛永通寶の鉄一文銭である。鉄一文銭の初鑄は元文4年（1739年）であるので、これらもそれ以降の年代である。

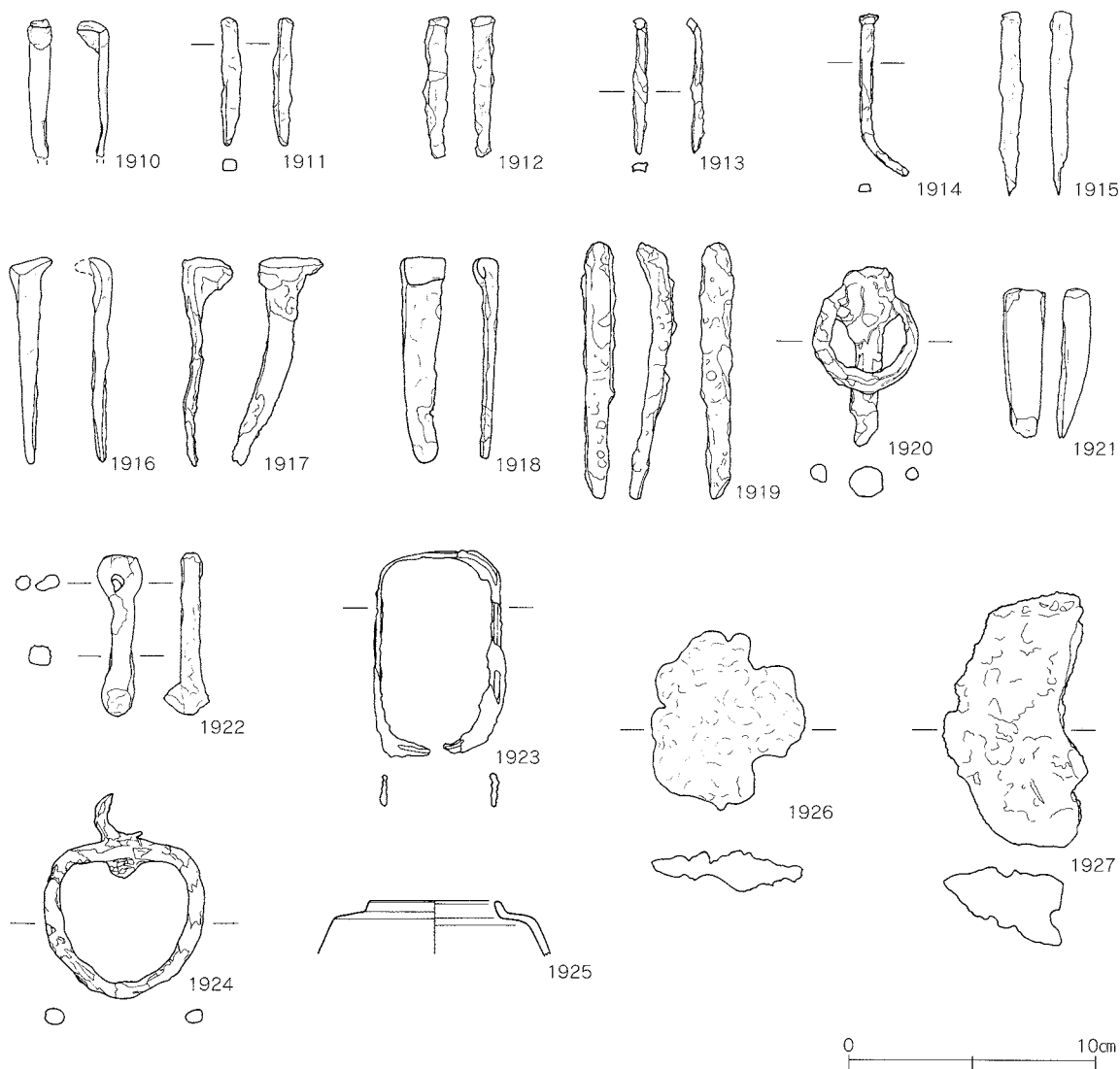
1962は寛永通寶鉄四文銭である。1963は錆のため文字が読み取れないが、形状から寛永通寶鉄四文銭と判断できる。鉄四文銭の初鑄年代は1860年である。

1964～1966は錆で文字が読み取れないが、形状から仙台通寶と判断される。仙台通寶は隅丸方形の鉄銭で、初鑄年代は1784年である。



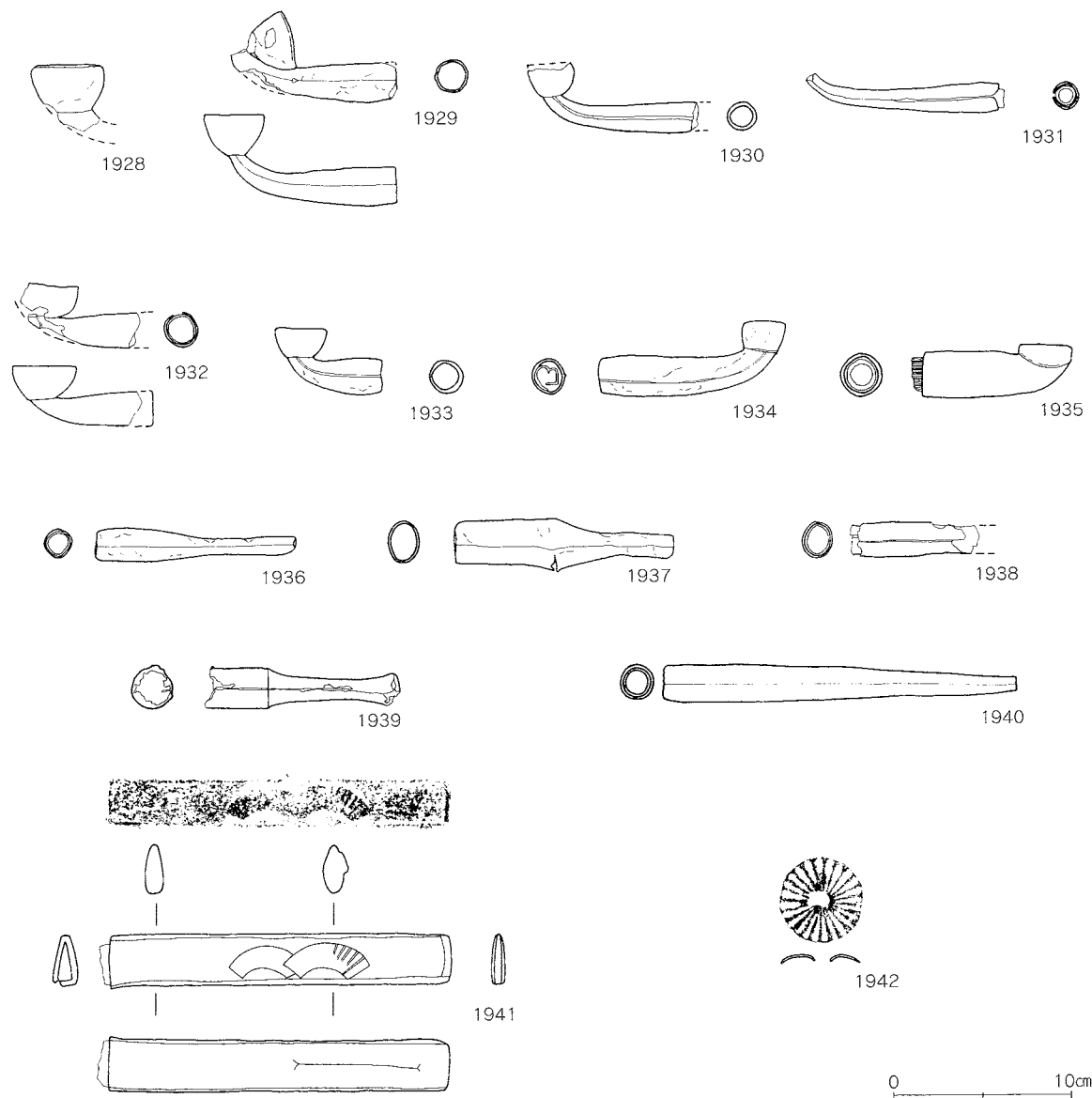
番号	器種	出土位置	金属の種類	その他	重さ (g)
1901	鎌	SK1埋土	鉄	留め釘の穴がある	79
1902	"	SK15埋土	"	錆著しい	92
1903	"	SK1埋土	"	柄の木質が残存	50
1904	"	SK1埋土	"	留め釘の穴がある	50
1905	"	SK15埋土	"	留め釘の穴欠損	49
1906	包丁	SK3埋土	"	柄の木質がさびで覆われ残存	52
1907	やっこ	SK1埋土	"	開いた状態で出土	399
1908	のみ	表採	"	柄欠損	70
1909	"	1号倒木痕埋土	"	"	35

第131図 金属製品①



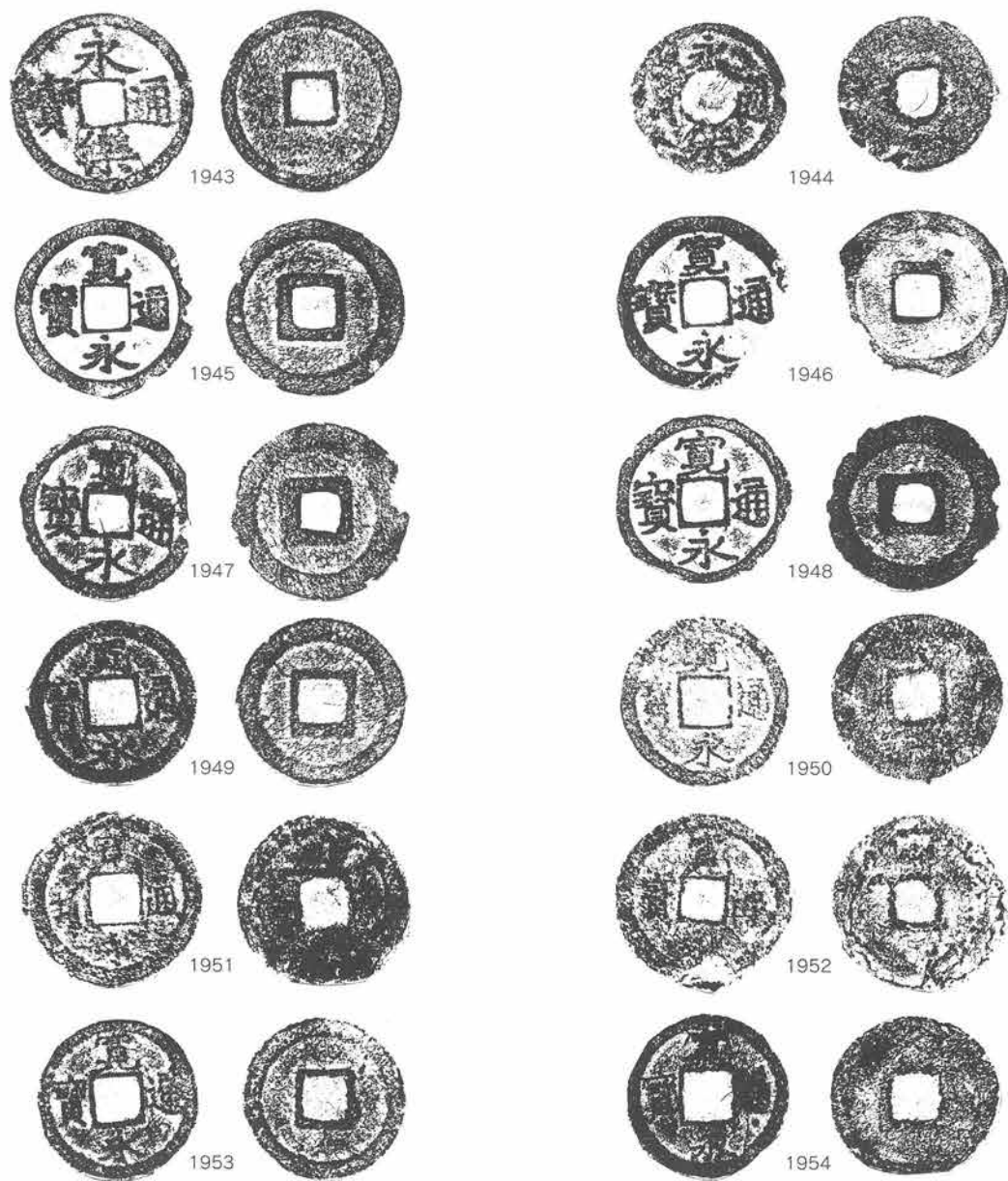
番号	器種	出土位置	金属の種類	その他	重さ (g)
1910	釘	SK15埋土	鉄	扁平な断面	10
1911	"	SK15埋土	"	断面四角形	9
1912	"	SK15埋土	"	"	10
1913	"	SK2埋土	"	"	8
1914	"	SK15埋土	"	"	8
1915	"	SK2埋土	"	"	15
1916	"	SK15埋土	"	"	18
1917	"	SK2埋土	"	扁平な断面	21
1918	"	1号倒木痕埋土	"	"	30
1919	"	SK15埋土	"	断面四角	30
1920	受け金具	SK2埋土	"	掛金具を受ける金具	48
1921	くさび?	SK3埋土	"		32
1922	くつわ?	SK2埋土	"	くつわの「はみ」の部品か	21
1923	不明	1号倒木痕埋土	"	締め金具?	35
1924	"	SK2埋土	"	不明製品	39
1925	"	SK2埋土	鑄鉄	鉄瓶?	55
1926	鍛冶滓	SK49埋土	鉄滓	錆色を呈する	92
1927	"	16C検出時	鉄滓	碗型滓 錆色を呈する	220

第132図 金属製品②



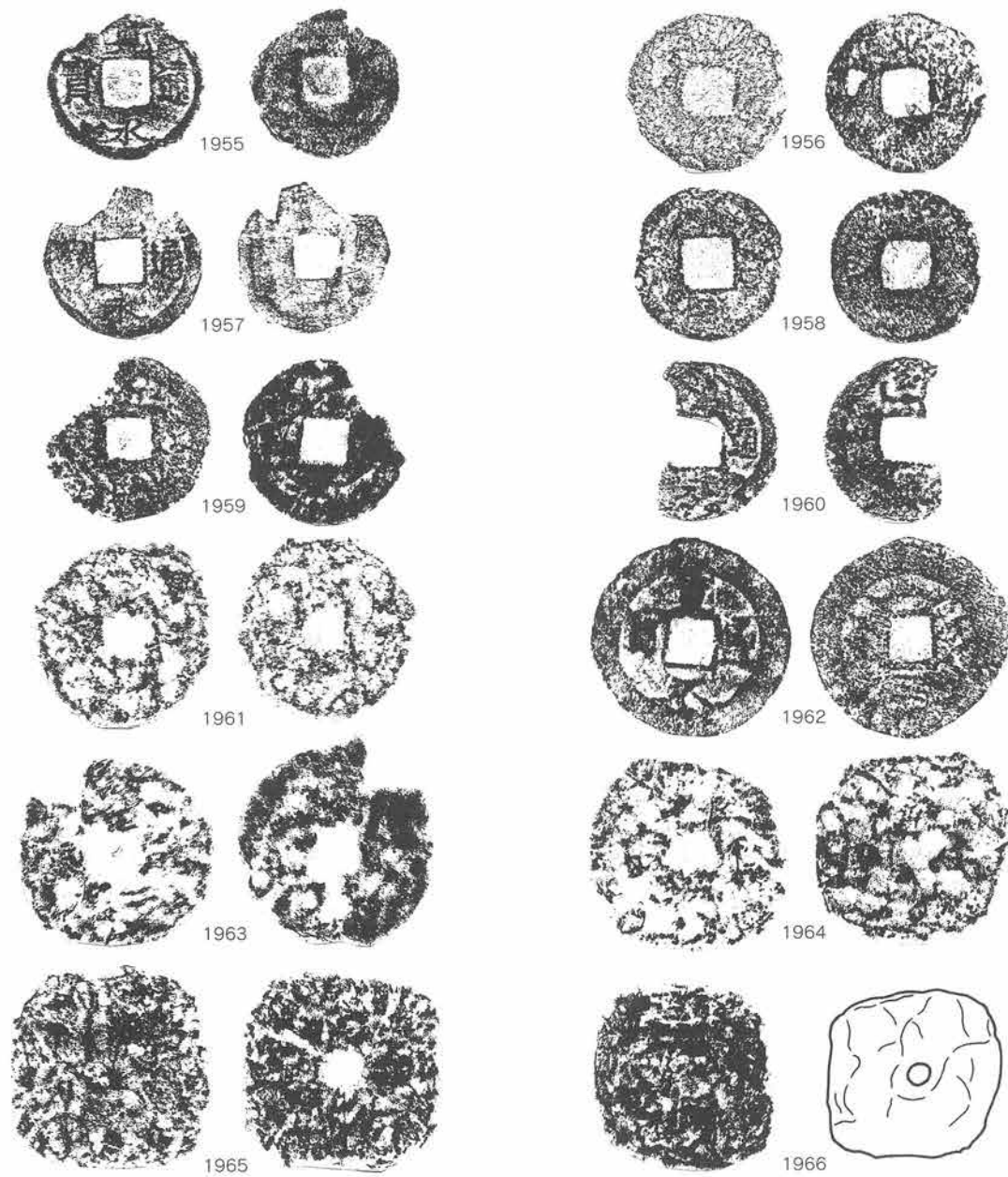
番号	器種	出土位置	金属の種類	その他	重さ (g)
1928	煙管	SD10埋土	銅	火皿の部分	1.69
1929	"	P411埋土 (SB21)	"	雁首 火皿が折れた状態で出土 製作年代18C前半か	5.74
1930	"	SD4埋土	"	雁首 火皿の端部欠損 "	4.54
1931	"	SK2埋土	"	雁首 火皿が欠損	2.65
1932	"	SK4埋土	"	雁首 製作年代18C後半か	1.73
1933	"	SK4埋土	"	雁首 "	3.76
1934	"	SK2埋土	"	雁首 製作年代19C代か	6.02
1935	"	SK15埋土	"	雁首 らおが一部残存 "	7.74
1936	"	P33埋土	"	吸口	3.87
1937	"	SK15埋土	"	吸口 潰れている	5.54
1938	"	SK10埋土	"	吸口 半分欠損	1.71
1939	"	SK2埋土	"	吸口	3.26
1940	"	SK1埋土	"	吸口	10.61
1941	小柄	SK1埋土	"	扇の文様 内部に鉄製の柄が残る	22.81
1942	金具	SK2埋土	"	飾り金具	0.75

第133図 金属製品③



番号	種類	出土位置	直径 (cm)	重さ (g)	金属の種類	铸造年代	備考
1943	永楽通寶	表採 (23b)	2.4	2.29	銅	1408年以降	本銭
1944	"	攪乱 (16f)	2.1	0.89	"	"	模鑄銭
1945	寛永通寶	SK15埋土	2.3	2.23	"	1636年以降	古寛永
1946	"	SK15埋土	2.3	1.78	"	"	"
1947	"	SK15埋土	2.4	2.52	"	"	"
1948	"	SK15埋土	2.3	2.57	"	"	"
1949	"	23b検出時	2.2	2.49	"	1714年	新寛永 正徳江戸亀戸
1950	"	31b検出時	2.2	2.46	"	1737~1745年	新寛永 元文出羽秋田
1951	"	表採	2.2	2.10	"	18C以降	新寛永
1952	"	13b検出時	2.2	2.37	"	"	"
1953	"	表採	2.1	2.17	"	"	"
1954	"	表採	2.1	2.70	"	"	"

第134図 銭貨①



番号	種類	出土位置	直径 (cm)	重さ (g)	金属の種類	鑄造年代	備考
1955	寛永通寶	SK1埋土	2.1	1.13	銅	18C以降	新寛永
1956	"	北側粗掘	2.2	2.75	"	"	"
1957	"	SK15埋土	2.1	1.29	"	"	"
1958	"	SK1埋土	2.1	1.17	"	"	"
1959	"	1号倒木痕埋土	2.2	1.38	鉄	"	寛永通寶 鉄一文銭
1960	"	SK48埋土	2.1	1.16	"	"	"
1961	"	北側粗掘	2.3	2.74	"	"	"
1962	"	1号倒木痕埋土	2.6	3.12	"	1860年～	寛永通寶 鉄四文銭
1963	"	SD10埋土	2.6	2.25	"	1860年～	"
1964	仙台通寶	SD1埋土	2.5	4.02	"	1784年	仙台通寶
1965	"	SK15埋土	2.5	3.97	"	"	"
1966	"	SK15埋土	2.5	2.25	"	"	"

第135図 銭貨②

第12節 土製品

土製品は土人形（2001～2003）、土鈴（2004）、羽口（2005、2006）、窯道具（2007、2008）がある。

1 土人形・土鈴（第136図 写真図版122）

2001は型おこしの人形で、角隠しをかぶった花嫁である。素焼きで、白色の彩色の痕跡が僅かに残る。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

2002も型おこしの人形と推測されるが、下端部のみの出土で形状は不明である。素焼き製品である。2破片からなるが、同一個体と判断した。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

2003は型おこしの犬の玩具である。素焼き製品である。頭部、脚部が欠損する。彩色の痕跡は見出せない。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

2004は土鈴である。約1/2が欠損している。素焼き製品である。時期は出土遺構の年代観から近世と推測される。

2 羽口（第136図 写真図版122）

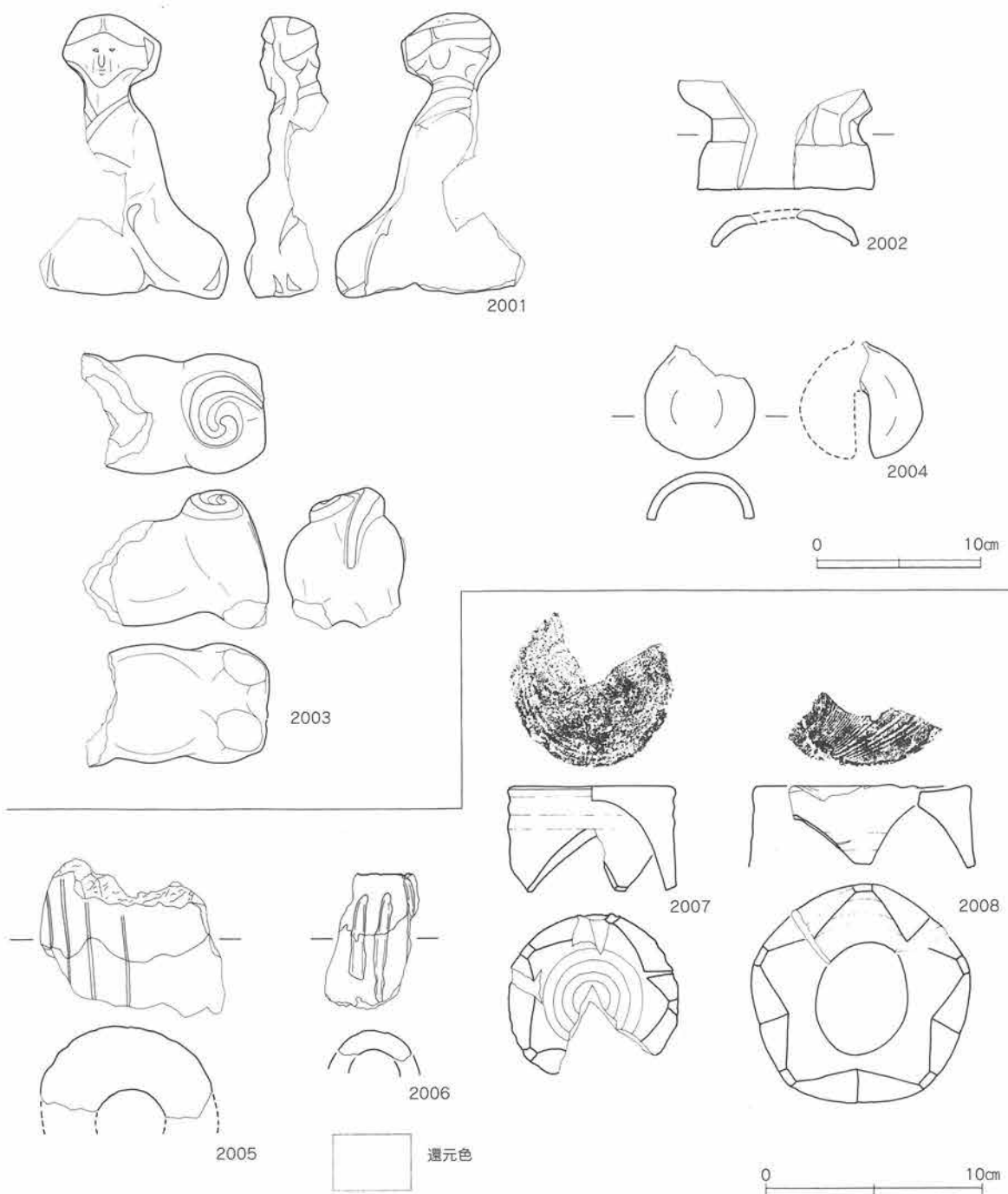
2005の羽口は縦に数条の筋が入っている。スクリーントーンは還元色を呈する部分である。時期は近世～近代の可能性が高いが、9世紀、12世紀の可能性も皆無ではない。

2006は小型の羽口である。縦に数条の幅の広い筋が入っている。スクリーントーンは還元色を呈する部分である。2005と同様に、時期は近世～近代の可能性が高いが、9世紀、12世紀の可能性も皆無ではない。

3 窯道具（第136図 写真図版122）

2007、2008は窯業に用いる窯道具である。鉢など重ね窯着を防ぐ「桔梗台」である。2008は上部に穴があり2007には穴がないが、胎土、質感は共通である。またどちらも脚部の端部を欠き、硬く陶器質に焼けていることから、実際に陶器の焼成に使用されたと判断できる。時期は近世後半のものと推測される。

何故、下構遺跡から窯道具が出土したのか疑問である。下構遺跡内、又は隣接地で窯業が行なわれたという記録や言伝えは全くない。下構遺跡から最も近い陶器窯は、約2km離れた下田焼窯（長島焼）である。この窯は下構遺跡と同じ旧小島村内に所在し、そこから窯道具が下構遺跡地内に持ち込まれた可能性もある。しかし、下構遺跡の出土陶器挿鉢の中に、素焼きで使用痕のないもの（1166）、施釉されているが使用痕のないもの（1160、1162）があり、下構遺跡地内、または近隣地区に窯が存在した可能性も皆無ではない。



番号	種類	出土位置	その他
2001	土人形	SK15埋土	型おこし 花嫁 彩色の痕跡あり
2002	"	SK1埋土	型おこし 人形の下部か
2003	"	SK15埋土	型おこし 犬 足、頭を欠く
2004	土鈴	SK15埋土	素焼
2005	羽口	SK49埋土	スクリーントーンは還元色部分 縦に筋が入る
2006	"	表採	" 小型の羽口
2007	窯道具	SD9埋土	桔梗台 にぶい赤褐色を呈する
2008	"	SD10埋土	"

第136図 土製品

第6章 付編

第1節 1次調査検出の近世墓について

平成13年3月初旬、平泉町長島字下構地内において、用水路工事中に鏡が出土した旨の連絡が工事業社より平泉町教育委員会にもたらされた。教育委員会職員が現地に赴き、実見した結果、近世の墓壙と判断された。墓壙は掘削中の用水路東壁に6基認められ、鏡、銭などが露出していた。この用水路工事地点は遺跡範囲外ではあるが、「下構遺跡」の西側に接する地点であった。町教育委員会ではこれを「下構遺跡」の一部として遺跡範囲を拡張した。そして追加された用水路工事に係わる部分を「下構遺跡第1次調査」として発掘調査をおこなうことになった。調査は3月14日、15日の2日間行なわれた。調査では露出していた6基に加え、東側からさらに1基の墓壙を検出し、計7基の墓壙を調査した。墓域はさらに東側に広がる可能性が指摘されたが、用水路工事区域外のためにその点は明らかにできなかった。今回の2次調査では1次調査区の東側も調査したのであるが、墓壙は検出されず、墓域の広がりも東側には広がらないことが明らかになった。この場所から移設されたと推測される墓石は20基以上あり、本来は用水路の東壁よりもさらに西側に墓域が広がっていたと推測される。

このように調査次が分かれたが、1次調査検出の近世墓群は、2次調査で検出された近世下構屋敷の一部を構成する要素で、一体不可分のものである。よって、近世下構屋敷の理解をより深めるためここでは1次調査の成果を掲載することにする。

1号墓壙（第137、138図、写真図版124、125）

〔位置〕 0 n、0 mに位置する。検出された中では最も北側に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 北～西壁が用水路造成によって削平されているが、開口部は隅丸方形と推測される。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である。

〔出土遺物〕 キセルの雁首（2101）、北宋銭（2102）、「天下一」の銘がある長方形の鏡（2103）、頭蓋骨が出土した。また図示していないが、鉄釘が5本出土している。他にも副葬品、骨が存在していた余地があるが、用水路造成により失われた可能性がある。

〔年代〕 キセルの形態から、18世紀以降の埋葬の可能性が高い。

〔被葬者〕 鏡の出土から女性と推測される。被葬者個人を特定することは難しい。

2号墓壙（第137、138図、写真図版124、125）

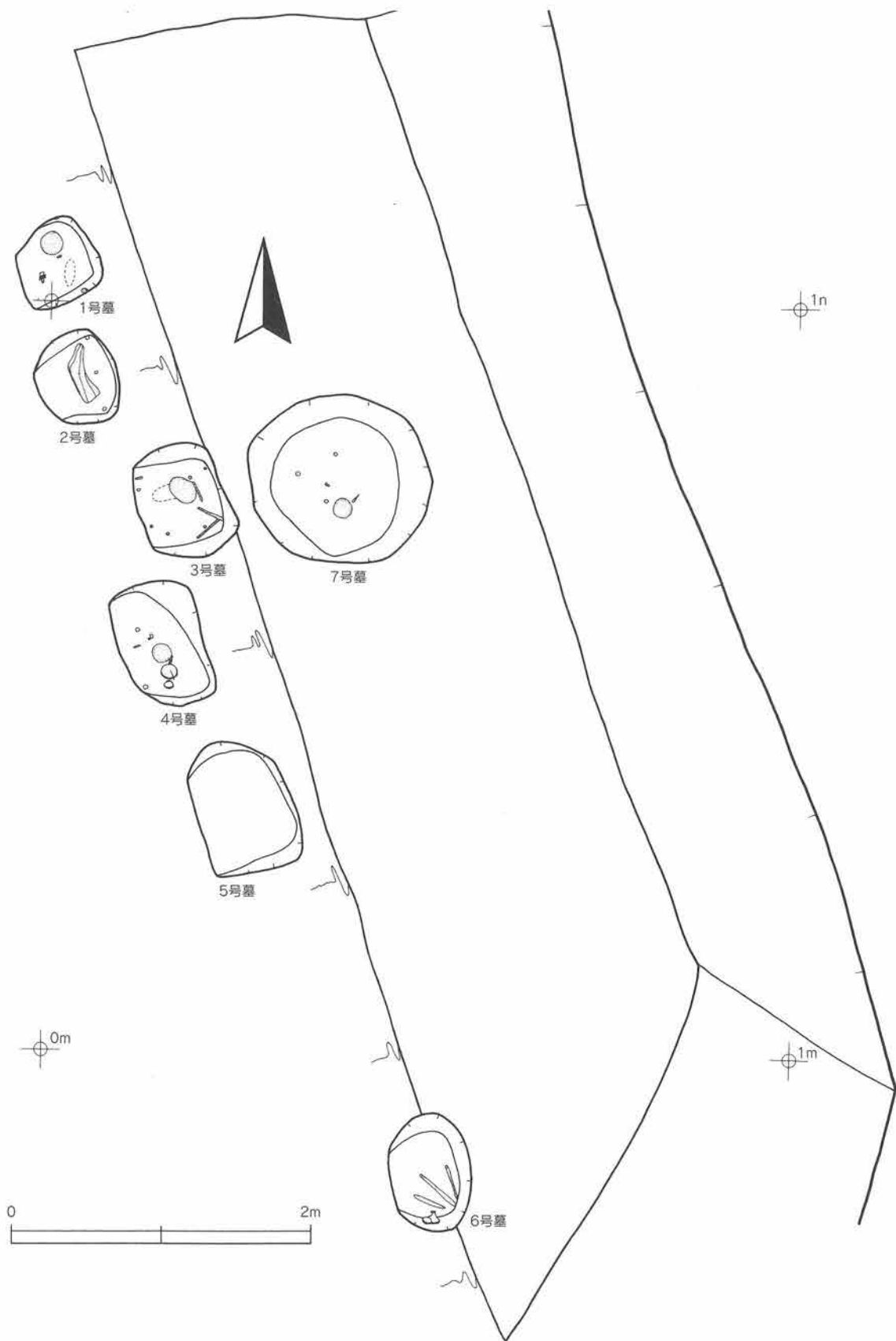
〔位置〕 0 mに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 西壁が用水路造成によって削平されているが、開口部は隅丸方形と推測される。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である。

〔出土遺物〕 寛永通寶が3枚（2104～2106）出土した。2104、2105は古寛永、2106は新寛永通寶銅銭である。また図示していないが鉄釘が4本出土した。それから、遺存状況が不良であるが、四肢骨？が出土した。他にも副葬品、骨が存在していた余地があるが、用水路造成により失われた可能性がある。

〔年代〕 新寛永通寶が存在することから、18世紀以降の埋葬の可能性が高い。



第137图 下構遺跡1次調査墓塚

〔被葬者〕 男女の別を特定する材料もなく、被葬者個人を特定することは難しい。

3号墓壙（第137、138図、写真図版124、125）

〔位置〕 0mに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 西壁が用水路造成によって削平されているが、開口部は隅丸長方形と推測される。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である。

〔出土遺物〕 キセルの吸口（2107）、寛永通寶が7枚（2108～2114）出土した。2108は古寛永、他は新寛永通寶銅銭である。また図示していないが鉄釘が9本出土している。それから、遺存状況が不良であるが、頭蓋骨、四肢骨？が出土した。他にも副葬品、骨が存在していた余地があるが、用水路造成により失われた可能性がある。

〔年代〕 新寛永通寶が存在することから、18世紀以降の埋葬の可能性が高い。

〔被葬者〕 男女の別を特定する材料もなく、被葬者個人を特定することは難しい。

4号墓壙（第137、139図、写真図版124～126）

〔位置〕 0mに位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 西壁が用水路造成によって削平されているが、開口部は隅丸長方形と推測される。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である。

〔出土遺物〕 寛永通寶が8枚（2115～2122）出土した。2115～2117は古寛永、他は新寛永通寶銅銭である。また、錆で覆われており銭種を特定できないが、大きさと形状から寛永通寶鉄四文銭と推測されるもの（2123、2124）が出土している。2123は2枚が癒着した状況と推測され、合計3枚が存在すると判断できる。またべっこう製と推測される筭（こうがい）が2点（2125、2126）、紅皿と推測される大堀相馬産の灰釉小碗（2127）、キセルの雁首と吸口（2128）、柄鏡（2129）が出土している。柄鏡には「天下一上村大和守」の銘がある。また依存状況が不良であるが頭蓋骨？が出土した。他にも副葬品、骨が存在していた余地があるが、用水路造成により失われた可能性がある。

〔年代〕 寛永通寶鉄四文銭が存在することから、その初鑄年代1860年以降の埋葬である。キセルの形態からこの年代観に齟齬はない。

〔被葬者〕 柄鏡、筭の出土から被葬者は女性と判断できる。下構屋敷の墓石の中では、1873年（明治6年）埋葬の「いね（8代賀茂左衛門妻）」の可能性が高い。墓石番号（後述）は8番である。

5号墓壙（第137、140図、写真図版124、126）

〔位置〕 0mに位置する。連続して5つ並ぶ1～5号墓壙の南端である。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 西壁が用水路造成によって削平されているが、開口部は隅丸長方形と推測される。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である。

〔出土遺物〕 錆で覆われており銭種を特定できないが、大きさと形状から仙台通寶と推測されるもの（2130、2131）が出土している。2130、2131はそれぞれが2枚癒着した状況と推測され、合計4枚が存在すると

判断できる。また鏝に覆われているが、大きさと形状から寛永通寶鉄一文銭と推測されるもの(2133)がある。これは数枚が付着している状態であるが枚数は確定できない。また瀬戸・美濃産の灰釉小型碗(2134)、銅製の鏡(2135)が出土している。骨は検出されなかった。他にも副葬品、骨が存在していた余地があるが、用水路造成により失われた可能性がある。

〔年代〕 仙台通寶が存在することから、その初鑄年代1784年以降の埋葬である。寛永通寶鉄一文銭、小型碗の年代も齟齬はない。

〔被葬者〕 鏡の出土から被葬者は女性と判断できる。下構屋敷の墓石の中では、1851年(嘉永4年)埋葬の「蓮香庵楽邦妙壽善大姉(おりこ7代九吉妻)」の可能性が高い。墓石番号(後述)は21番である。また墓石が背面を上に向けているため墓石を特定できないが、1788年に亡くなった6代長左衛門妻の可能性もある。

6号墓壇(第137、140図、写真図版124、127)

〔位置〕 01に位置する。検出された墓壇の中では最も南に位置する。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 西壁が用水路造成によって削平されているが、開口部は楕円形と推測される。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である。

〔出土遺物〕 鏝で覆われており銭種を特定できないが、大きさと形状から仙台通寶と推測されるもの(2136、2137)が出土している。2130、2131はそれぞれが2枚癒着した状況と推測され、これはどちらも数枚が付着している状態であるが枚数は確定できない。またキセルの雁首(2138)が出土している。骨は遺存状態が不良であるが、四肢骨?が出土している。他にも副葬品、骨が存在していた余地があるが、用水路造成により失われた可能性がある。

〔年代〕 仙台通寶が存在することから、その初鑄年代1784年以降の埋葬である。キセル雁首の年代観とも齟齬はない。

〔被葬者〕 男女の別を特定できる副葬品は出土しておらず、被葬者個人を特定することは難しい。

7号墓壇(第137、141、142図、写真図版124、127)

〔位置〕 0mに位置する。他の墓壇は1列状に並ぶが、本墓壇は単独で東側に位置する。

〔重複〕 なし。

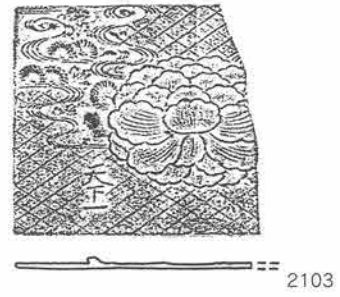
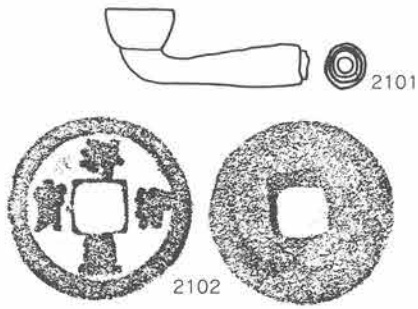
〔形態〕 開口部は円形である。壁は概ね垂直に立ち、底面は平坦である他の墓壇に比較して径が大きい。

〔出土遺物〕 寛永通寶が23枚(2139～2161)出土した。2139、2140は古寛永、他は新寛永の銅銭である。またキセルの雁首と吸口(2162)が出土している。骨は遺存状態が不良であるが、頭蓋骨?が出土している。

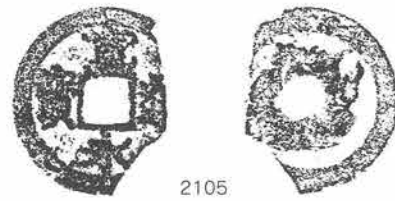
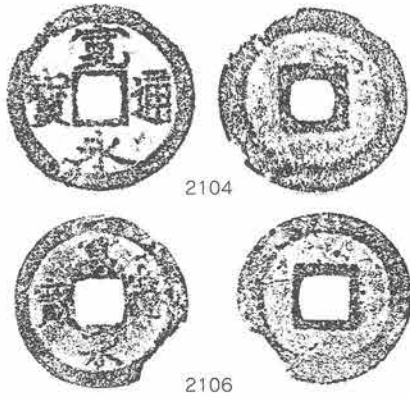
〔年代〕 寛永通寶が新寛永を含み、そして銅銭のみで構成されることから、18世紀中葉頃の埋葬の可能性が高い。この埋葬推定年代はキセルの年代観とも齟齬はない。

〔被葬者〕 本墓壇は用水路造成の破壊がおよんでおらず、副葬品が失われた可能性は少ない。その状況でキセルと銭のみの出土で、被葬者は男の可能性が高いと推測される。被葬者個人の特定は可能性にすぎないが、1760年埋葬の「草提慈音信士(陸平 4代清兵衛弟)、墓石番号5番」、1745年埋葬の「清月道教信士(4代清兵衛)、墓石番号18番」があげられる。

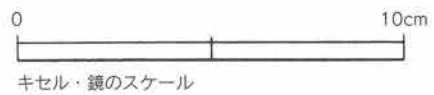
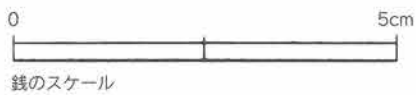
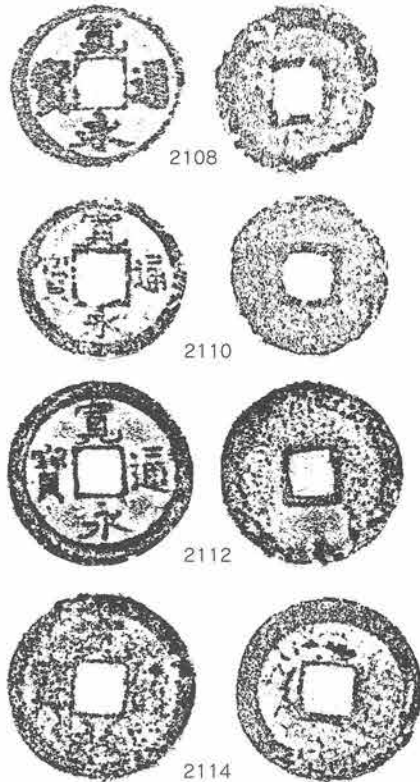
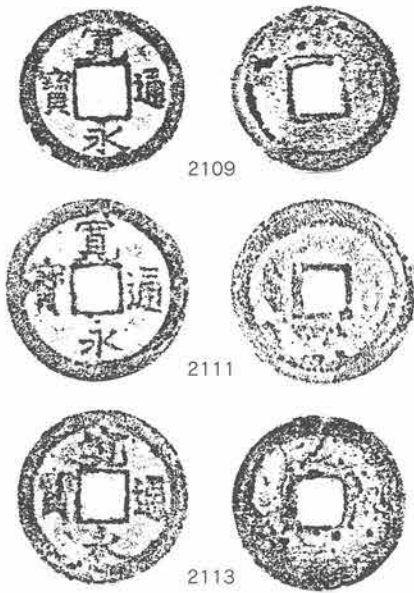
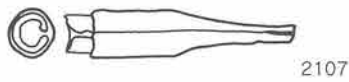
1号墓



2号墓

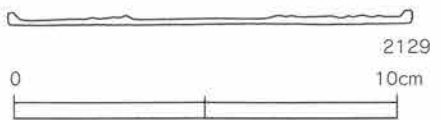
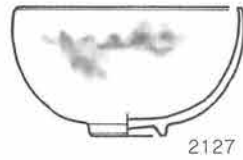
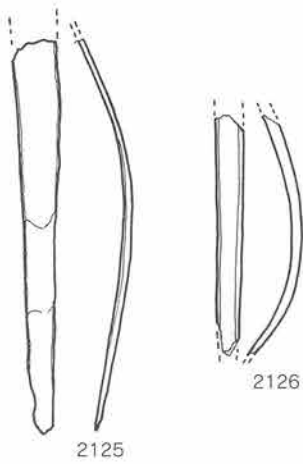
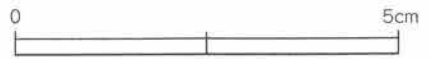
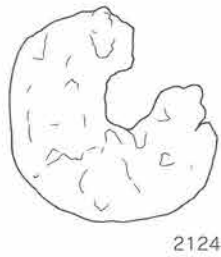
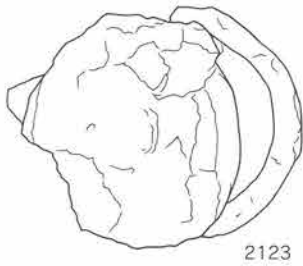
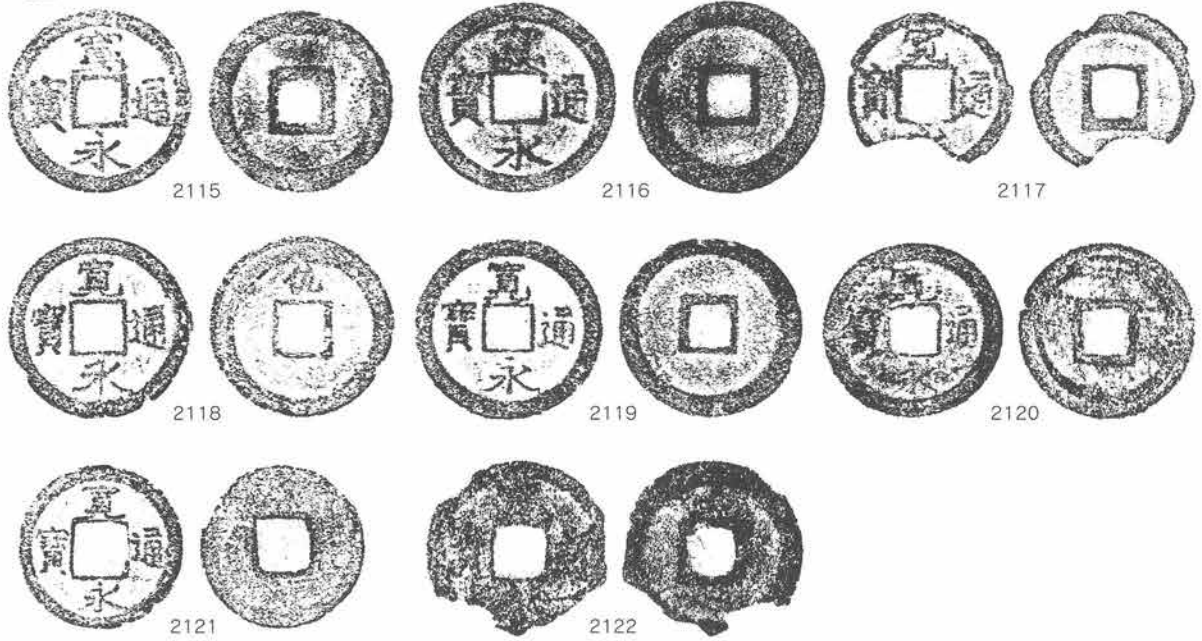


3号墓



第138図 1次調査出土遺物①

4号墓

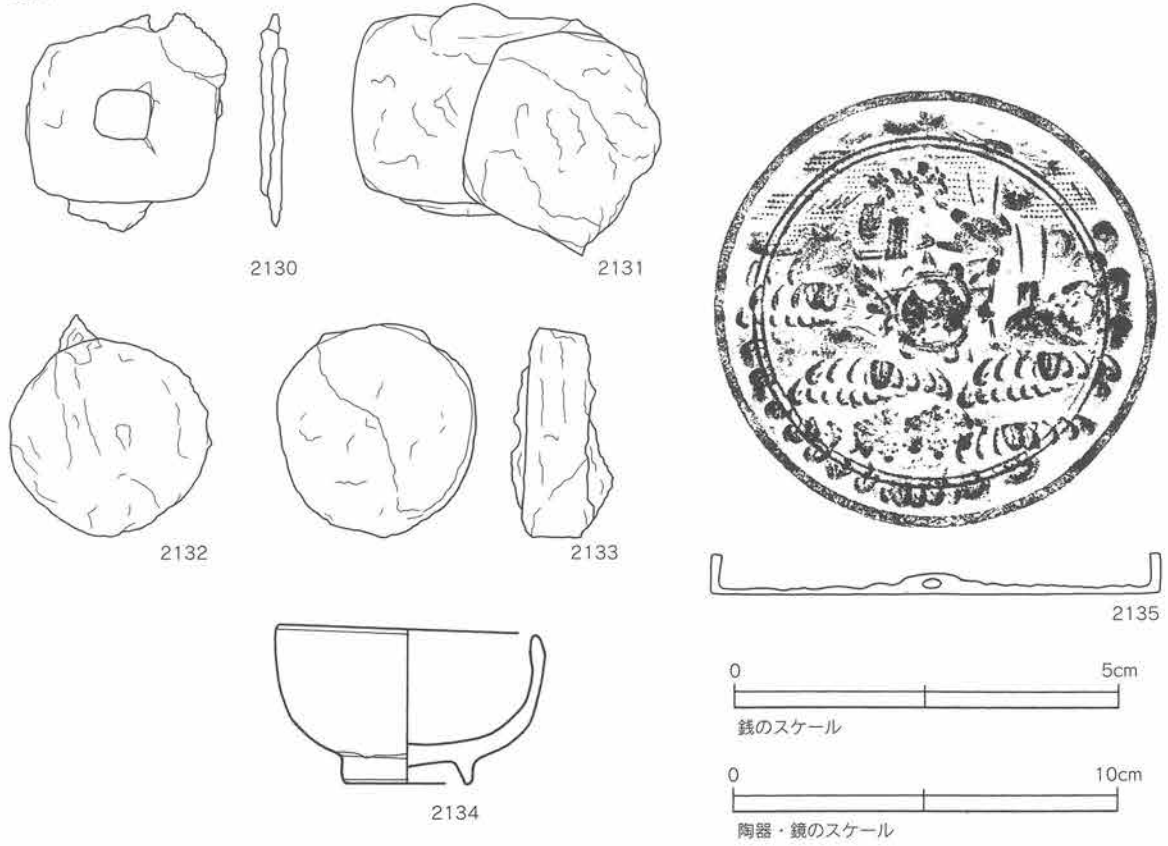


第139図 1次調査出土遺物②

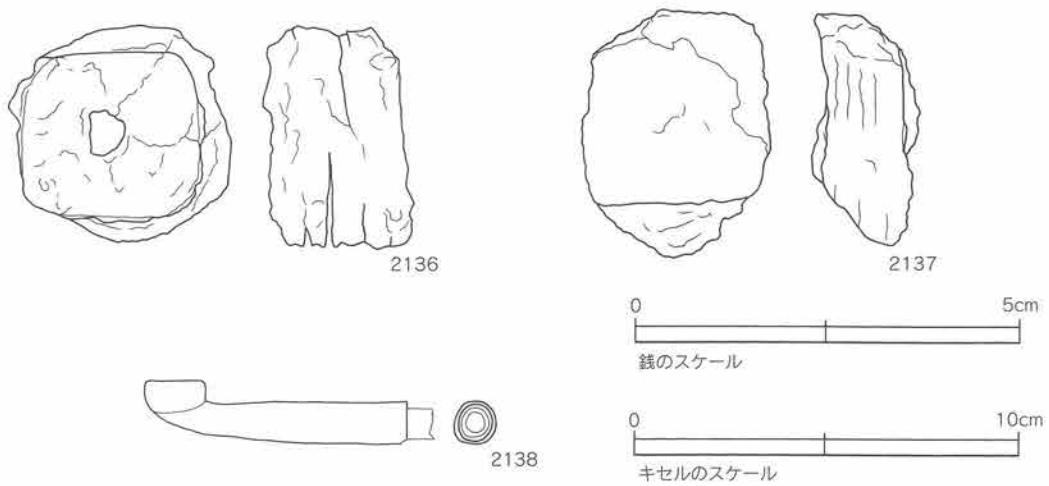
遺構外出土遺物 (第142図)

1次調査において墓域外から出土した青磁片(2163)がある。肥前産の青磁大皿で、内外面に青磁釉、内面にはヘラ彫りが施されている。時期は17世紀後半と推測される。下構屋敷で使用された器と推測される。

5号墓

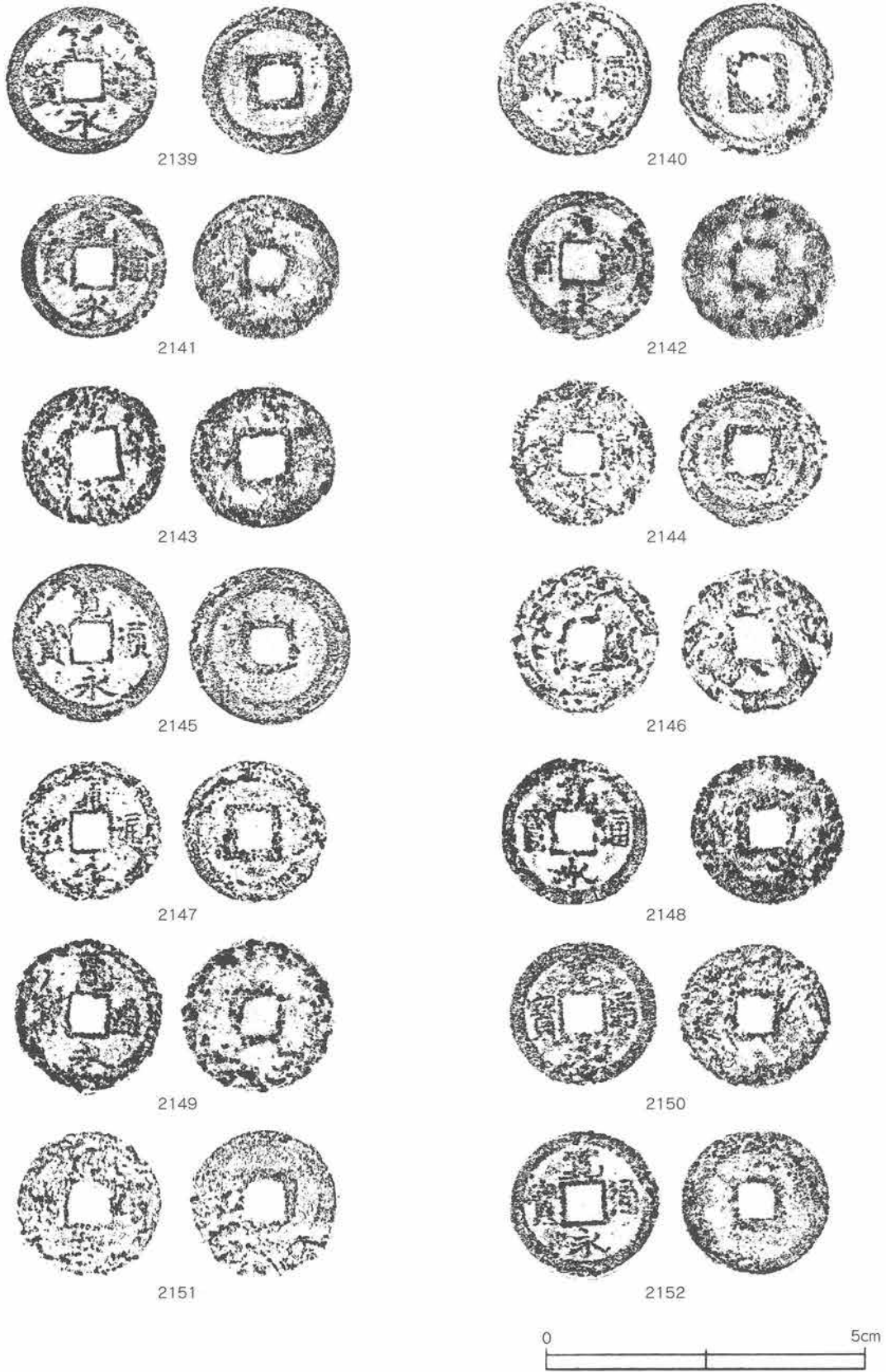


6号墓



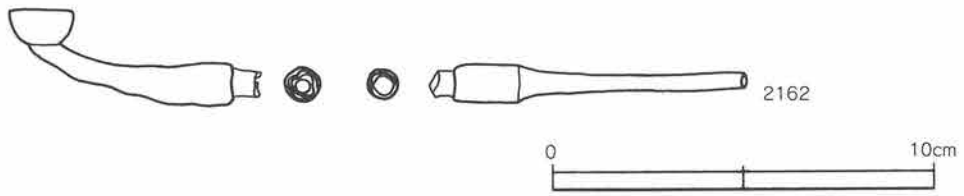
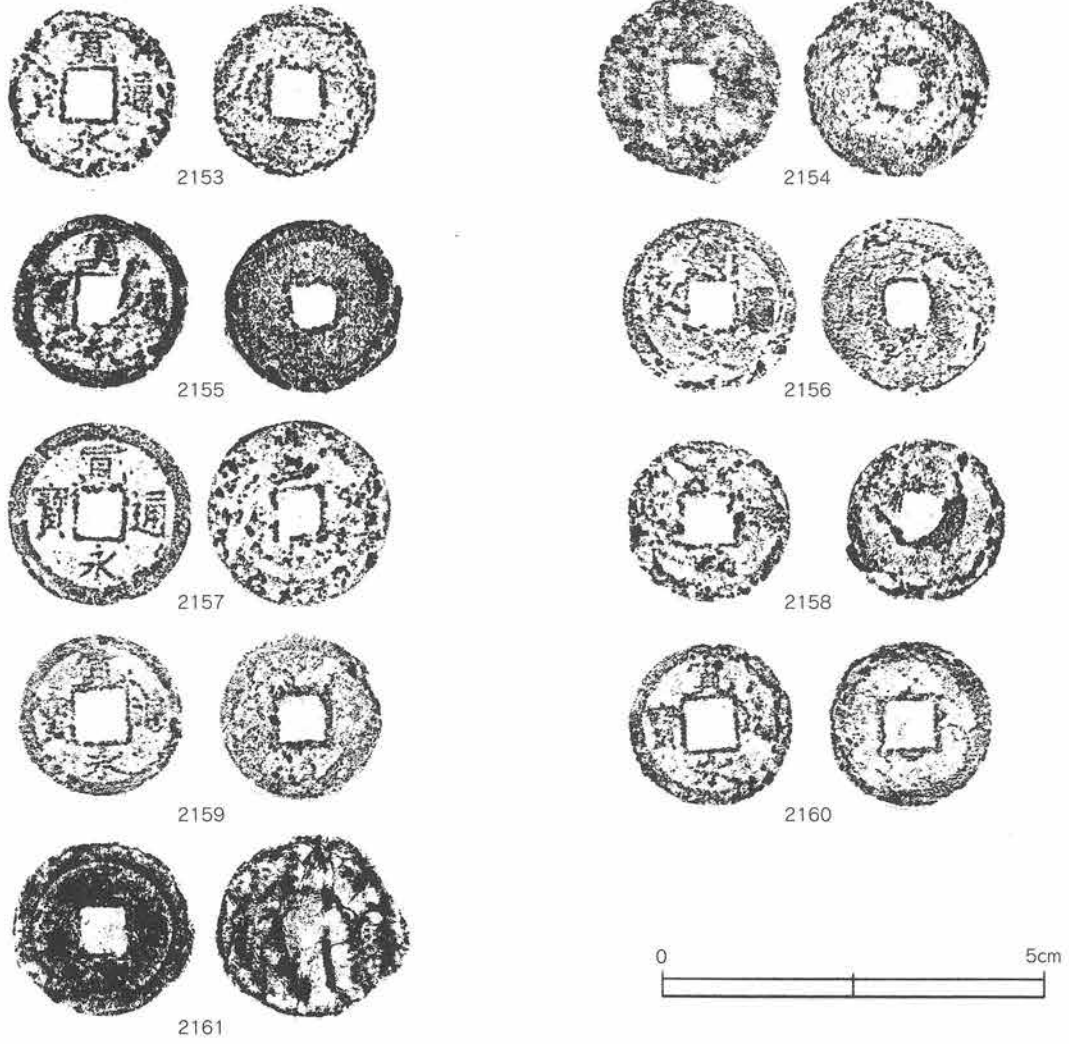
第140図 1次調査出土遺物③

7号墓①

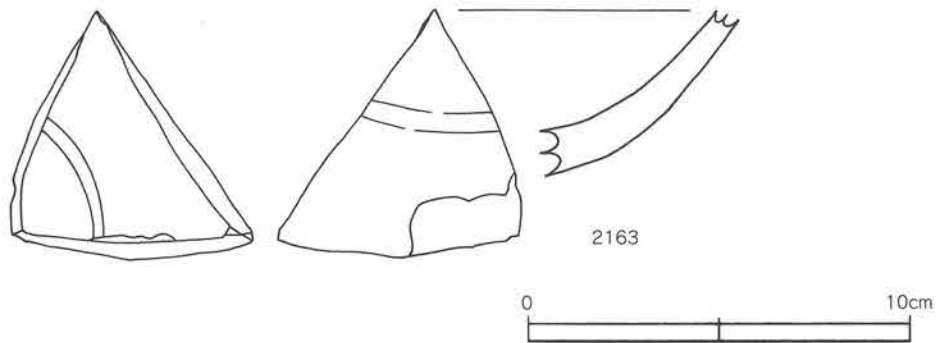


第141図 1次調査出土遺物④

7号墓②



遺構外



第142図 1次調査出土遺物⑤

第2節 下構屋敷の墓石について

下構屋敷に伴う屋敷墓の墓石は、調査地区の約100m北東側の長島字境田地内に所在する。これは1次調査区に所在した屋敷墓から現在地に移設したものであるという。また、1次調査区以外の下構屋敷周辺に所在した墓石も現在の場所に移設してあるという。よって、墓石すべてが下構屋敷に伴うものではない可能性があるが、ここでは合せて下構屋敷の墓石として示すこととする。墓石については表と模式図(第143～145図)にまとめている。また5基については拓本を示した。墓石には整理のために並んでいる順に番号を付した。

所在する墓石は44基である。調査時に同一の墓石の断片それぞれ(4と5)に番号を付したため墓石番号は45番までである。最古は元禄12年(1699年)、最新は明治6年(1873年)である。墓石は8列に密接して立てられている。前5列は大型の墓石が多く、後3列は小型の墓石が並ぶ傾向にある。前5列の墓石はほとんどが下構屋敷の家系図稿本に登場する人のものであり、被葬者を特定できる。よって前5列(墓石番号1～24)は1次調査区(下構屋敷佐藤家の屋敷墓)から移設されたものと推測される。一方、後3列は被葬者を特定できたものは無く、下構屋敷以外の近隣に散在していた墓石を集積したものと推測される。

墓石の形状は自然石を使用したもの…①、粘板岩を使用した板状のもの…②、加工した角柱型のもの…③がある。②は上端部を加工し半円状に加工している。該当する墓石は5、6、20、36、37の5基である。時期は1738年～1760年の間に納まり、18世紀中葉という限られた時期の所産といえる。③は断面正方形の角柱型で頂部が宝珠状に尖る。該当するのは7、8、10、11の4基である。時期は1811年～1873年の間に納まり、19世紀になって登場する形状と判断される。自然石とした①は最も数が多い。時期は1699年から1851年と長い年月に及び、時期的なまとまりを見出せない。

戒名の上に施される梵字はア(胎藏界大日如来)が21基と圧倒的に多い。他にはキリーク(阿弥陀如来)、バン(金剛界大日如来)、パーンク(金剛界大日如来)がそれぞれ2基、カ(地藏菩薩)、アン(普賢菩薩)、ウーン(阿閼如来)がそれぞれ1基、月輪が3基である。

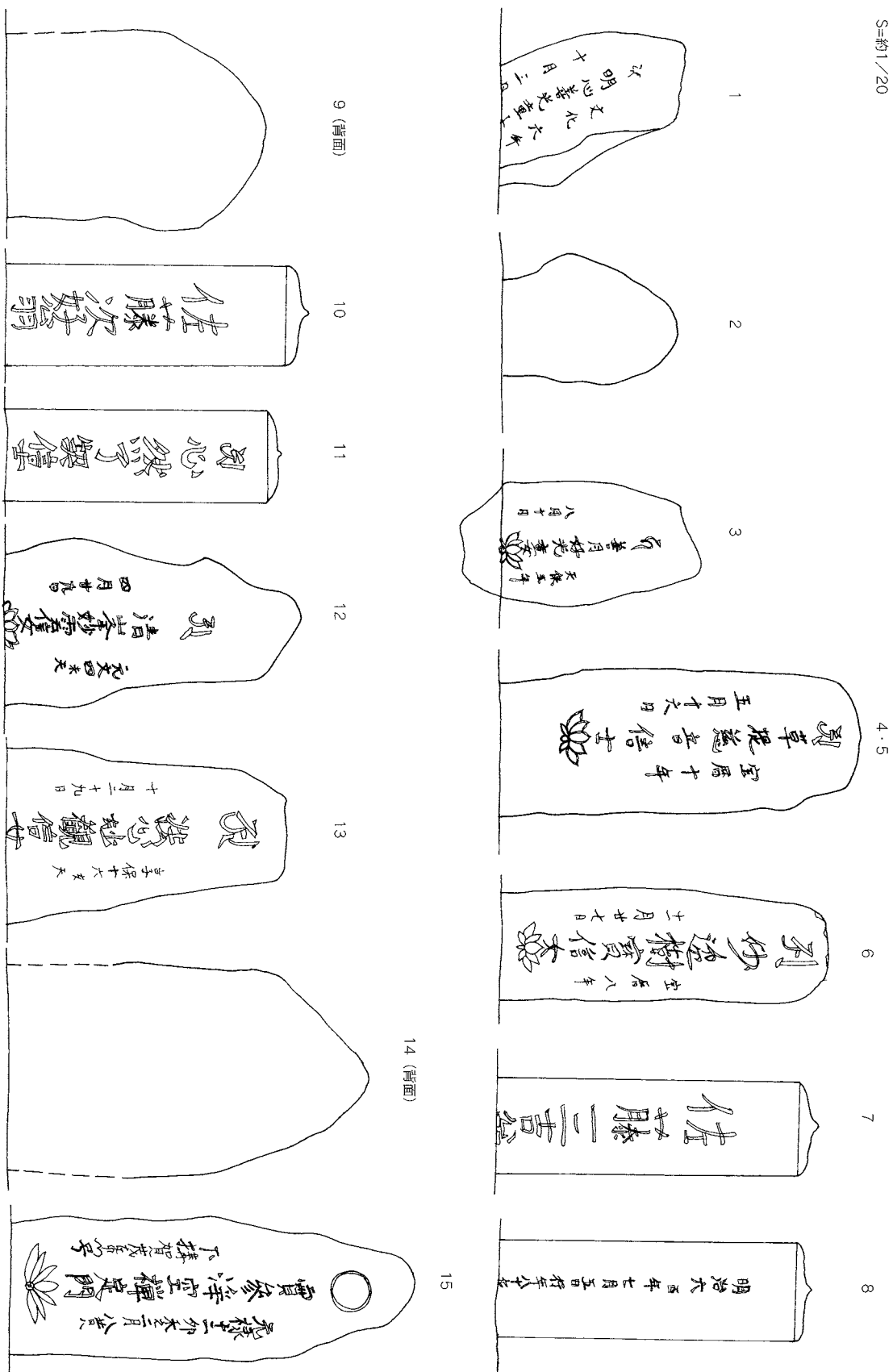
46番とした墓石(第149図)は角柱型の塔身に笠、その上に宝珠が載る形態のものである。現在は長島観福寺裏の共同墓地(いわゆる新墓)に移設されているが、以前は調査区から道路を隔てた東側に立っていたものであるという。塔身の前面中央部には地藏が陽刻され、その左側には「ア 権祥師法印 呉位」、右側には「ウーン算道禪定尼 呉祥?」と刻まれる。また、左側面には「享保十一天八月廿八日 同十二同月日 施主 光順坊」右側面には「享保八年七月十日」と刻まれる。「光順坊」は享保14年(1729年)の「小嶋村切支丹宗門改帳」(平泉町史資料編2所収)に「下構屋敷羽黒派山伏光順坊」と記載されている。光順坊は53歳、そして、女房49歳、男子門右衛門11歳、弟左七39歳が記載され、さらに隷属する水呑孫作65歳とその家族5人が記載されている。この「下構屋敷羽黒派山伏光順坊」は、「下構屋敷組頭長作」とは別の世帯で、その両者の関係は明らかにし得なかった。いずれにせよこの人別帳の記載から、47番の墓石は光順坊の両親の墓石と推測される。

下構屋敷の墓石に混じり中世の板碑(第150図)と推測されるものが存在する。近世墓石を集積する際に近隣の地域から持ち込まれたものと思われる。現況は倒れた状態で横たわっている。石材は粘板岩で長さ56cm、幅25cmである。上部には梵字ウーン(阿閼如来)が刻まれ、その下に「正一禪門」の法名が刻まれる。さらにその下は石の表面が剥離しており、文字の有無は確認できない。これを中世板碑と断定する根拠はないが、法名が「禪定門」ではなく「禪門」である点と、近世墓石とは文字の彫り込みの感じが異なることから中世板碑と推測したい。このような小型の板碑は岩手県南部では多数存在し、その時期は14世紀後半～

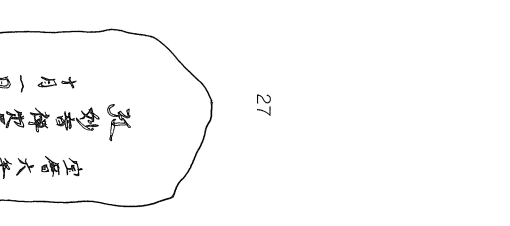
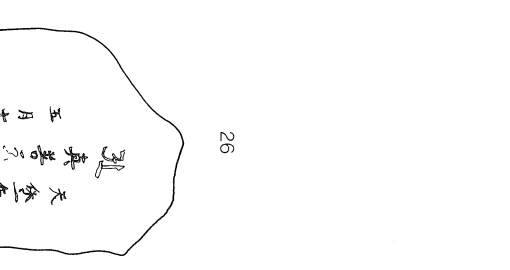
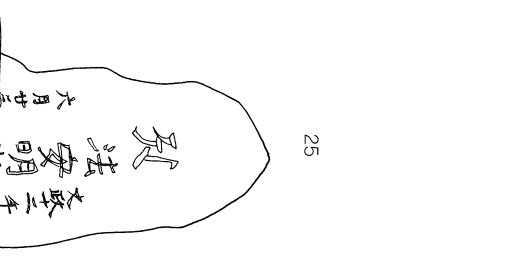
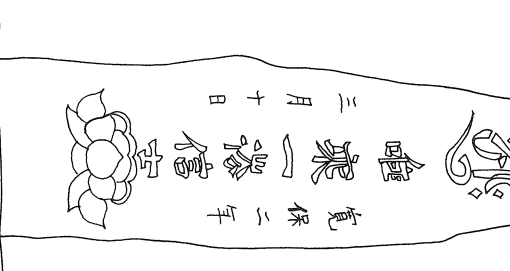
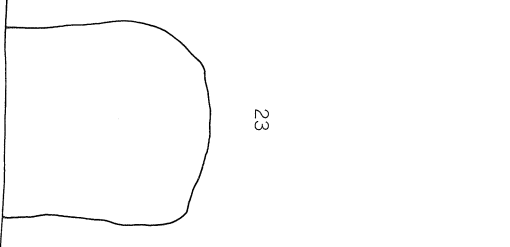
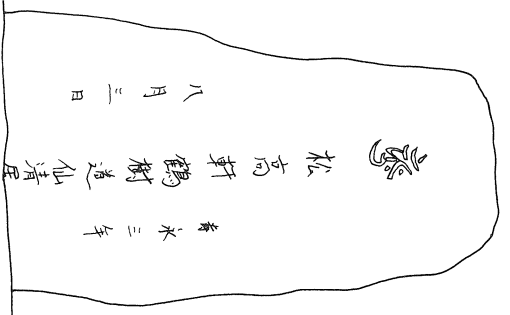
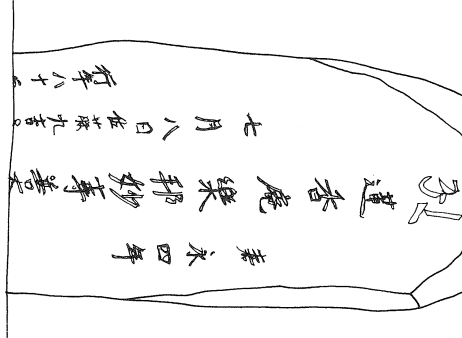
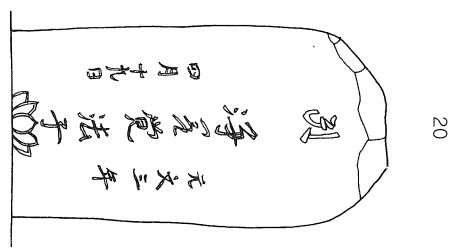
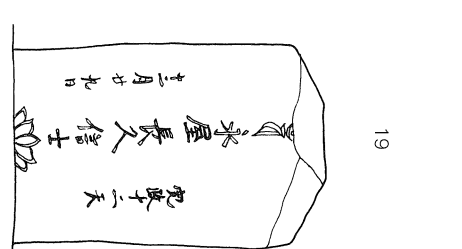
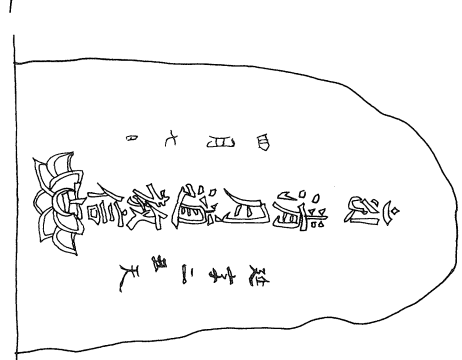
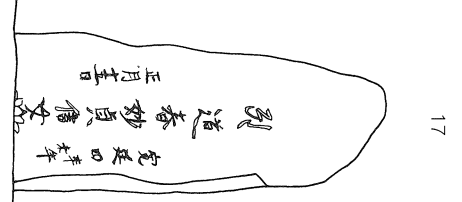
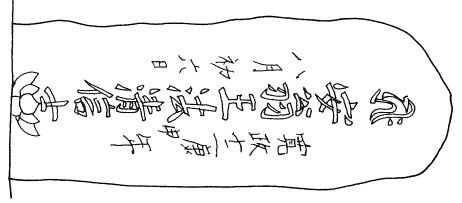
15世紀前半に多いようである。十三仏では「ウーン」は七回忌を示しており、「正一禅門」の七回忌に造立した可能性が想定される。

番号	年月日	西暦	戒名など	高さ	石質形状	俗名など	その他	梵字
1	文化6年10月3日	1809	明心善光童子	58cm	自然石			不明
2	なし		なし	60cm	自然石		白碑	なし
3	天保5年8月10日	1788	善月好光童女	60cm	粘板岩			カ
4	-	-	-	33cm	粘板岩		5の上端の破片	-
5	宝暦10年5月16日	1760	草提慈音信士	146cm	粘板岩	陸平(4代弟)	高さは4の値を加えたもの	ア
6	宝暦8年11月27日	1758	妙連樹寶信女	105cm	角柱型	5代妻		ア
7	慶応3年2月11日	1867	佐藤三吉翁墓	102cm	角柱型	三吉(9代弟)	享年56	なし
8	明治6年7月5日	1873	不明	100cm	自然石	いね(8代妻)	背面を上倒れている	-
9	不明		不明	86cm	角柱型		背面を上倒れている	-
10	慶応元年8月11日	1865	佐藤次好翁~	98cm	角柱型	賀茂左衛門(8代)	享年76	-
11	文化8年12月22日	1811	心然了契信士	98cm	自然石	長左衛門(6代)		ア
12	元文4年4月29日	1739	清峰好雲信女	94cm	自然石	りん(5代姉)		ア
13	享保16年10月29日	1731	法心妙観信女	94cm	自然石	4代妻		ア
14	不明		不明	120cm	自然石		背面を上倒れている	-
15	元禄12年2月8日	1699	寛参浄空禅定門	136cm	自然石	賀茂左衛門(2代)	「下構賀茂左衛門号」と刻まれる	○
16	寛政12年8月6日	1800	安翁玉法清信士	111cm	自然石	名平(5代)		キリーク
17	寛延4年正月15日	1751	道春妙眞信女	94cm	自然石	3代妻	文字の中に赤色の痕跡	ア
18	延享2年4月7日	1745	清月道敦信士	104cm	自然石	清兵衛(4代)		アン
19	寛政12年12月29日	1800	永屋長久信士	82cm	粘板岩		上端が欠けている	パン
20	元文3年4月19日	1738	浄口 覚法子	96cm	自然石			ア
21	嘉永4年7月8日	1851	蓮香庵楽邦妙壽善大姉	131cm	自然石	おりこ(7代妻)		ア
22	嘉永3年8月3日	1850	松高軒鶴樹道仙清居士	129cm	自然石	九吉(7代)		バーンク
23	-	-	-	53cm	自然石		白碑	-
24	寛保2年3月10日	1742	唯兼一法信士	190cm	自然石		正面を上倒れている	バーンク
25	文政12年6月23日	1829	法安明光信口	70cm	自然石	長作(3代)	下部土中	ア
26	天保3年5月十~	1832	信善~	49cm	自然石		戒名下半読めない	ア
27	宝暦6年10月1日	1756	妙音禅定尼	57cm	自然石			ア
28	不明		地藏陰刻	42cm	自然石		右下に文字あるが読めない	なし
29	なし		なし	40cm	自然石		白碑	なし
30	不明		不明	42cm	自然石		文字があるが読めない	不明
31	なし		なし	46cm	自然石		白碑	なし
32	享保8年?~	1723?	清月真政禅定門	75cm	自然石		月日を読めない	○
	正徳6年~	1716	口月口口禅定尼					
33	正徳6年4月5日	1756	覺門禅定門	70cm	自然石			ア
34	元文2年10月~	1736	秋口禅定口	42cm	自然石		下部土中	ア
35	享保16年正月3日	1731	妙願禅定尼	74cm	自然石			○
36	宝暦6年4月8日	1756	春道妙項禅定尼	63cm	粘板岩		文字の中に赤色の痕跡	ア
37	寛保3年正月24日	1743	泰庵妙光禅定尼	67cm	粘板岩		文字の中に赤色の痕跡	ア
38	天保~正月二十~	1830頃	法林~	40cm	自然石		下部土中	ア
39	天~正月~	不明	不明	21cm	自然石		半分以上土中か	ア
40	寛延元年8日	1748	大慈道來信士	73cm	自然石		それぞれの戒名の上に梵字	パン
	宝暦8年?~	1758	妙口口口信女					ア
41	享和3年3月4日	1803	法林常證信士	73cm	自然石			キリーク
42	寛政10年9月23日	1798	妙園桃光~	50cm	自然石		下部土中	ウーン
43	天保3年3月~	1832	圓光春山~	38cm	自然石		下部土中	ア
44	寛延2年6月12日	1749	清口妙信口	57cm	自然石		下部土中	ア
45	享保14年10月17日	1729	自延性久信士	54cm	自然石			ア
	正徳元年3月11日	1711	本山元水信女					
46	享保11年8月28日	1726	権祥師法印	125cm	-	光順坊の父か	新墓に所在	ア
	享保8年7月10日	1723	算道禅定尼			光順坊の母か		

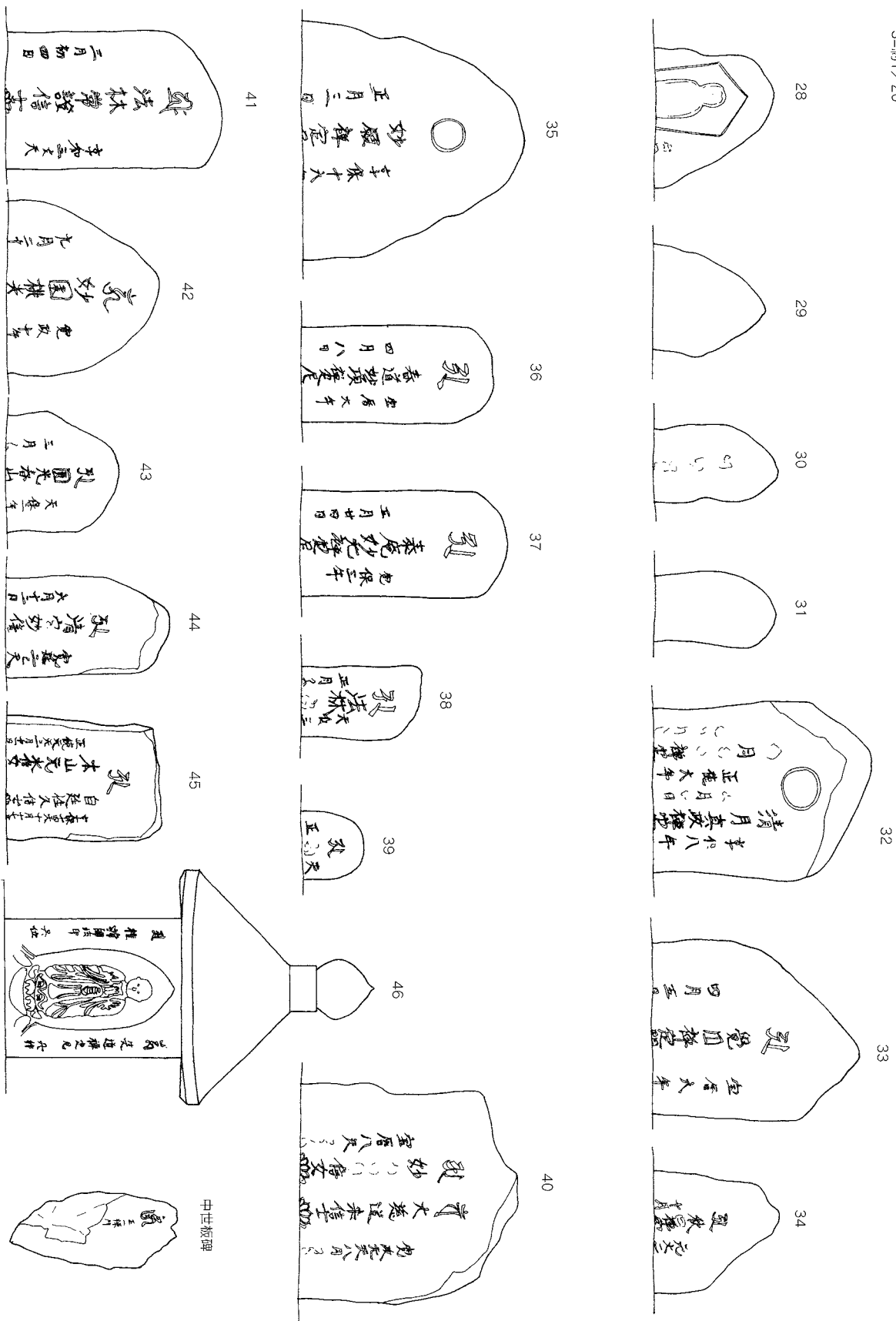
近世墓石観察表



第143図 下構屋敷石碑模式図①



第144図 下層階敷石模式圖②



③ 式圖石體數圖上 圖 145 聯

15



元禄十二年二月八日
實參淨空禪定門
下橋加茂左衛門号

24



唯乘一法信士
元禄二年三月十日

0 20cm

第146图 墓石拓影图①



0 20cm

第147図 墓石拓影図②

13



十月二十九日

法心妙觀信女

享保十六亥天

11

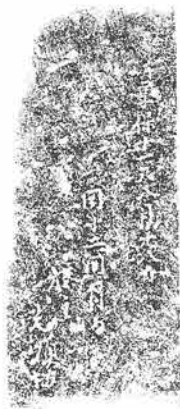


心然了契信士

文化八年十二月二十一日

0 20cm

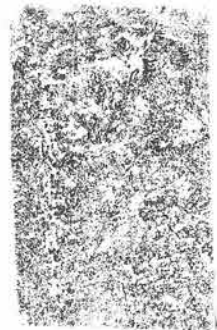
第148図 墓石拓影図③



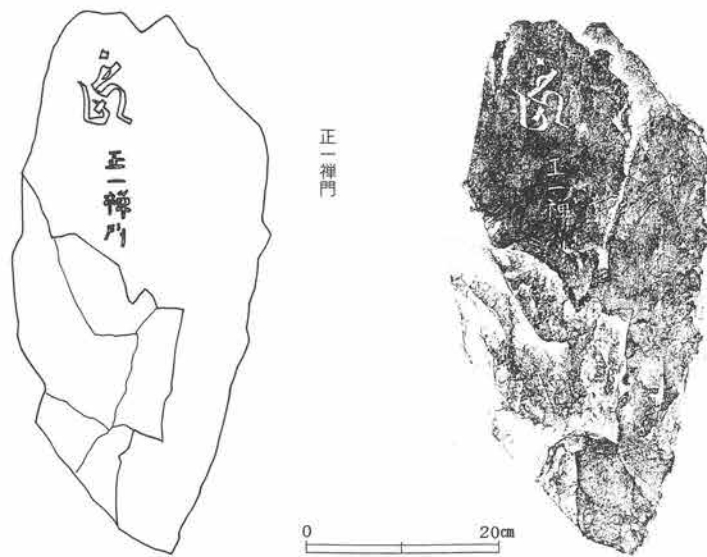
享保十一年八月廿八日
同十二月
施主 光順坊



享保八年七月十日



第149図 墓石拓影図④



第150図 中世板碑拓影図

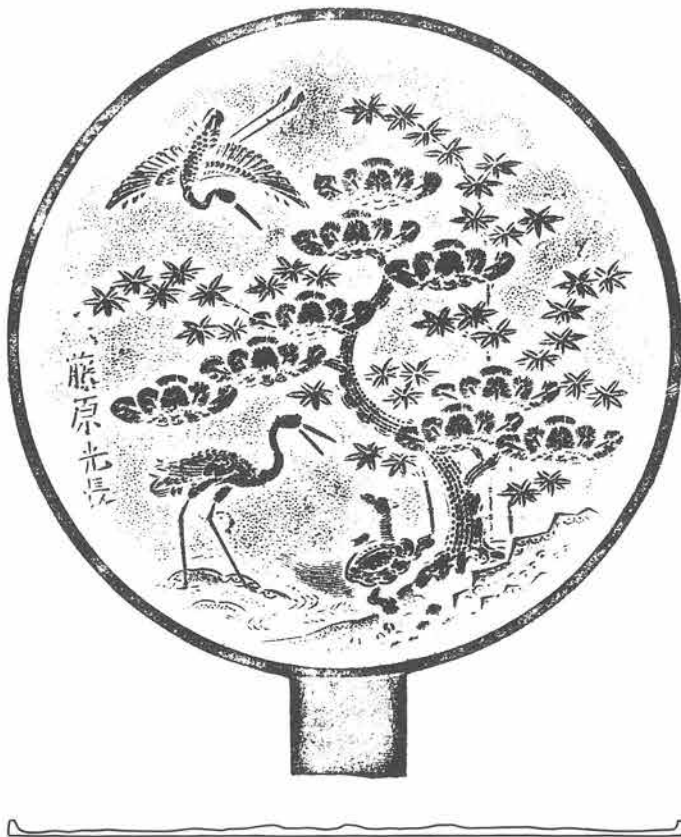
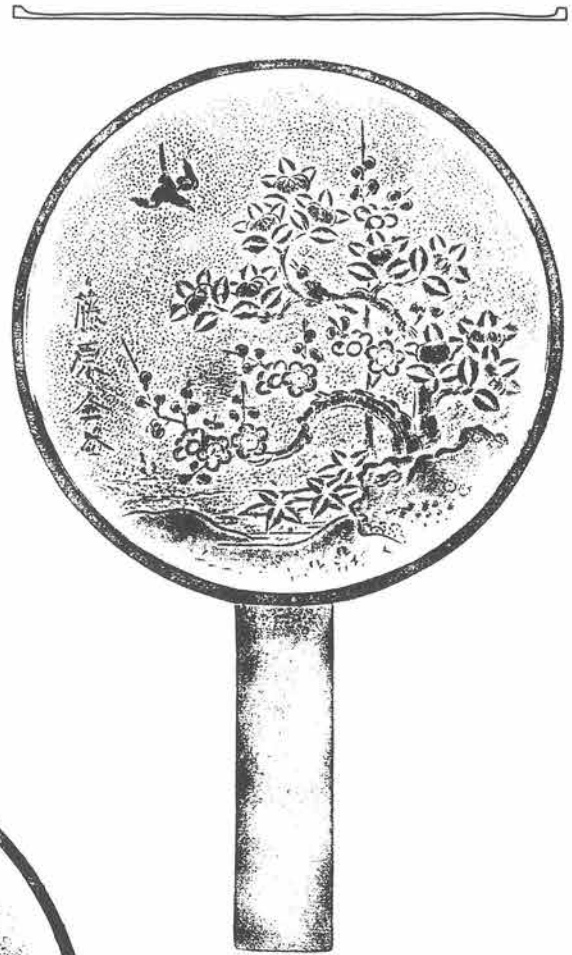
第3節 下構屋敷佐藤家の伝世品について

調査が行われた下構屋敷の子孫佐藤家は、現在も調査区から直線距離で約100m離れた長島字境田に居住している。調査終了後に佐藤氏のご好意で、伝世する物品を実見させて頂く機会を得た。見せて頂いた物品には陶磁器、漆器、銅鏡、古地図、文書がある。

陶磁器は物置の長持の中などに納められている(写真図版134～136)。発掘調査でも出土した壽文皿(報告書掲載番号1497～1499)、型おこしの白磁皿(報告書掲載番号1500)と同一のものが多数所蔵されていた。またゴム印判の恵比寿文の皿(報告書掲載番号1512)も出土品と同様のものが所蔵されている。他に型紙刷りの皿や揃いの蓋付きの碗、大型の甕などがある。また陶磁器ではないが大黒天の型おこしの土人形がある。

漆器(写真図版135)は提子、盃、弁当箱などが長持に納められている。また箱入りで揃いの器が納められている。箱の上書きには「明治十年 二の椀式拾人前 佐藤吉之進 第七月二日」、「明治十年 壺式拾人前 佐藤吉之進 第七月二日」、「皇紀第二千五百三十七年 中皿六十人前 佐藤吉之進 第七月二日」が認められた。

古地図には「平泉古図」(写真図版136)と「小島村細見全図」(写真図版2)が所蔵されている。その他に長持に納められた状態で多量の行政文書が所蔵されている。年代は幕末から大正時代のものがみられるが、明治初年のものが特に多い。明治9年に下構屋敷佐藤吉之進は第九大区九小区第六番組総代を拝命しており(長島村役場沿革記 平泉町史資料編二所収)、その関係で佐藤家に明治初年の行政文書が所蔵されていると推測される。また平泉郷土館千葉信胤氏のご教示によると佐藤家は小島村役場の「祐筆」を勤めていたということで、この点も行政文書所蔵に関係ありそうである。文書の数は膨大でその全様は明らかにし得ない。目に付く文書の題名には「国民軍調書」、「御達留」、「第九大区九小区小島村字田向一筆限野帳」、「丈量野帳」などがある。明治初年の地方行政を知るには絶好の資料で、体系的な整理をおこない資料化することが望まれる。



第151図 佐藤家所蔵の和鏡①



第152図 佐藤家所蔵の和鏡②

鏡（第151、152図）は仏壇の引き出しに納められている。円鏡が1面、柄鏡が3面ある。円鏡は亀をかたどった摘みを持ち、他に鶴、松、竹が描かれる蓬莱図である。柄鏡の1点は鶯と梅が描かれ、「藤原金益」の銘がある。もう1点は柄部が欠損している。鶴、亀、松、笹が描かれる蓬莱図で「藤原光長」の銘がある。残る1点は梅、竹、二羽の鶴、州浜が描かれる蓬莱図である。上部には紋が施され、「藤原光長」の銘がある。

第4節 下構屋敷系図稿本について

上記の長持に納められた行政文書とは別に、家系図作成の際の稿本と推測される資料が仏壇の引き出しに納められている。稿本は2冊あり、1冊・①は12頁にわたる横長の冊子で建武元年（1334年）に亡くなった「佐渡麿」とその妻「佐藤秀衡孫娘」から、明治9年に下構屋敷9代目佐藤長左衛門が亡くなる記事までが記されている。2冊目・②は9頁にわたる縦長の冊子で、「佐渡麿」から慶長8年（1603年）生まれの「佐藤隼人成壽」が寛永19年（1642年）に「下構屋敷」に住まいを始める記述で終了している。①の前半部分と②の記載内容は微細を除くと同一で、②は①の前半を清書したものと判断される。この2冊の稿本の他に、巻物の家系図が存在しているが、汚損を恐れ実見はおこなっていない。内容は稿本①、②の内容と同一と推測される。稿本①の最後の記載は、明治9年の事柄で終了しており、その際の当主である下構屋敷10代目佐藤吉之進が家系図を作成したと推測される。

ここでは資料として稿本①の後半（5頁以降）の読み下し文を掲載する。①の前半部分と②の内容は中世の事柄であるが、事実とは判じ難い記載内容であり、その概略は以下に記載するに留める。下構佐藤家の遠祖は「佐渡麿（1236～1334年）」である。佐渡麿の父は84代天皇の「須徳院」としている。佐渡麿は胆沢郡磐神社社人の食客の娘「佐藤秀衡の孫娘」を妻とし、文永7年（1270）より磐神社の社人となった。その後、佐渡麿から数えて11代目の「成元（1572～1634年）」まで磐神社の社人を勤めた。「成元」は慶長4年（1599年）に「東山長部小川」に移り住み、田畑を開き、名を「佐藤隼人成元」に改めた。そして、その息子「佐藤隼人成長（1603～1674年）」は「長部村小川屋敷」に住いを続け、その息子「佐藤隼人成壽（1626～1686年）」は寛永19年（1642年）に小川屋敷から小島村下構屋敷に屋敷を移した。この「佐藤隼人成壽」が下構屋敷初代である。

以後は稿本①の後半の記述によると、初代 隼人→二代 賀茂左衛門→三代 長作→四代 清兵衛→五代 名平→六代 長左衛門→七代 九吉→八代 賀茂左衛門→九代 長左衛門→十代 吉之進となる。

下構屋敷人員構成表はこの稿本の記述を元に作成した。この稿本では他家へ行った者の生没年は記載されおらず、生没年を推定で記載したものも多い。これらの者の中には他村の宗門改人別長や、聞き取りで、生年、没年が明らかになった例が僅かながらある。また下構屋敷に嫁いで来た者の年代についての記載も無く一律に20歳で嫁いだと推測した。また下構屋敷から他家へ嫁いだ者の年代の記載もなく、これも男女ともに一律20歳と仮定している。このように推測、仮定の多い構成人員表ではあるが、時期をおっての家族構成を具体的に知ることができる資料になり得る。

また系図稿本とは別紙で、嘉永2年に七代九吉夫婦が揃って80歳を越え、藩主にお目見えした旨の書付があった。この事柄については系図稿本にも記載があるが、内容がより具体的であるのでその読み下し文も掲載する。

成元長子慶長八癸卯三十二子
佐藤成長隼人

法名円圓学道詮信士 延宝七己未年四月十八日行年七十七
室白山堂司吉祥院女 法名梅園妙香信女 延宝二甲寅年二月廿七日行年七十才
寛永十九年壬午年東山長部村御百姓小川屋敷御竿荅佐藤隼人田畑合五十八丁
五反三畝卜開拓

一男

一 佐藤隼人成壽 幼名宮内小島村下構屋敷轉任又屋敷六十間四方竿外口

二男

一 佐藤信濃成次 幼名式部同村角地屋敷御百姓出ヤシキ三十間四方竿外口

三女

一 女みへ 同村田中屋敷菊地平三郎次男平治賀養子呼取戸下内村へ分家致候事

從弟伊沢より同村へ移

一 高橋孫兵衛小島村長屋敷御百姓出

從弟膽澤ヨリ当地移

一 千葉薩摩 同林田屋敷

一 高橋彦兵衛 同坂上屋敷

一 佐藤掃部 同下長根屋敷

一 畑山数馬 同砂田屋敷

一家僕善四郎 坂下屋敷御百姓頼出

一 附代 傳助 一 吉右衛門

一 八藏 一 三十郎

一 九藏 一 吉郎次

一 五良次 一 源之右衛門

一 喜助

一人有

成長 二十四歳長男 法名華岳宗映信士
貞享三丙寅年三月八日 行年六十二歳

隼人 寛永三丙寅年生
室山王嗣司清禪院女

成壽 法名 正山妙意信女 天和元辛酉年二月八日 行年五十六

一 賀茂左衛門 成重 正保元甲申年生 元禄十二年行年五十六死

二 主計 成泰 早世

三 一 女 五串上野菅原惣右衛門室

四 一 女 長坂新右衛門室 宝曆年中凶歳之節
夫婦子共二人連立寄り添人相来
長男三十郎追て升之坊羽黒派山伏二相成
二男丹藏

成壽長男十九子 正保元甲申年産

賀茂左衛門信(成)重

實參淨空禪定門 元禄十二己卯年行年五十六才死二月八日死去

室信濃長女元禄六庚酉年行年

照月妙零信女 正保四年生 元禄六年四十七才二而五月五日死

信濃長女賀茂左衛門妻 二女東学兵庫妻

三男東左衛門家督 四男新助分家

早世

一 長作 寛文七丁未年生

二 一 女 長部里ヤシキ兵庫之助室

三 一 女 舞草榮ヤシキ平馬室

四 一 四女 山目町近江屋市輔室

成重長子廿四子 一唯乘一法信士
長作 寛文七年生 寛保二年三月十日行年七十六
成信

室同村上山屋敷八喜右衛門女
寛文七年生道春妙貞信女 寛延四年正月十五日死
行年八十五才

一 清兵衛 幼名伊豆 安内 清左衛門と名改

三 一 勘左衛門 長部村大峯へ分家

二 一 女 長部村峯屋敷彦平室

四 一 女 舞草村榮屋敷専太左衛門室□□□

五 一 女 千厩町新町権断喜右衛(門)室

六 一 男 陸平事 陸奥守臣濟藤喜膳養子

陸平名改め濟藤潤平と号実家帰り病死
草提慈音信士 宝曆十年五月十六日行年五十四才

成信廿一長男 貞享四丁卯年生

清兵衛 清月道教信(士) 延享二年四月七日行年五十九歳
成清

室西岩井猪岡村コウノス肝入女
享保十六辛亥年十月廿九日死去

法心妙観信女 春秋四十才
一 長女 清峯妙雲信女 元文四年四月廿九日
行年三十才

成清廿七次男
安翁玉法清信士

寛政十二庚申八月六日卒
行年八十八

名平 正徳三癸巳年生
成徳

室舞草村薬師別当西岑兵衛女
妙連樹寶信女 寶曆八年十一月廿七日四十一才死

一 長左衛門 幼名伊豆 卯左衛門トモ申ス

二 一 女 赤生津村サイ田ヤシキ佐藤園左衛門室

成徳二十三長男
心然了契信士

文化八辛未十二月廿二日卒
行年七十七

長左衛門 享保二十乙卯年生
成保

・佐藤助之丞長女 □六伯母ナリ
室相川村岩ノ澤・惣之丞女

白室妙鏡信女 天明八年六月二十九日行□

一 女 西岩井中里村根岸大内田ヤシキ
三太郎室

二 一 女 西岩井五串村宮富ヤシキ
甚之丞室

三 感保二十九三男 寶曆十三年生

一 九吉 家督
成吉

松高軒鶴樹道仙清居士 宝曆十三癸未年生

九吉八十七才室おりこ八十三才夫婦諸共家内

三夫婦欠なく残度事□□□ △子共加茂左衛門六十才ニテ

附添登了

九吉 嘉永三年庚戌八月三日行年八十八

蓮香庵樂邦妙壽善大姉

室 赤生津村サイ田ヤシキ三十郎女

△嘉永四辛亥七月八日 八十五才 三女也

嘉永二年三月國主松平陸奥守慶邦君ニ

被召呼夫婦駕籠ニテ馱々御口馬ニテ御城下相登了

御目見之上御酒其後吸物ニテ頂戴是□残下り

祝之事

一 賀茂左衛門 幼名新作ト言ふ

二

一 女 西岩井一閑地主町金田ヤ

肝入 藤原安左衛門室

右□子共

一 女 江戸ニテ徘徊ス

二

一 女 一関大町河口ヤ吉兵衛妻

三

一 菅原道三郎 早世

子安之助

九吉成義長男二十八子

高昌軒樂邦道右清居士 慶応元乙丑年八月十一日

賀茂左衛門 寛政二庚戌年生 行年七十六

成政

室長部村矢野目田ヤシキ友右衛門女

右成政廿一長男文化七庚年十月十七日生

壺 一 佐藤長左衛門

式 一 三吉 仙台藩渡辺彦三郎家中二

相居病氣ニテ実家帰り四年

臥居病死致事

三 一 女 下伊沢目呂木村後藤茂蔵室

四 女 舞草村峯ノ薬師別当

西嶽弥右衛門室

太惣右衛門婿家督

五 男 当村大平ヤシキ千葉春吉

彦三郎婿家督

六 男 赤生津村宿ヤシキ大石茂右衛門

七 男 江刺郡黒石村下柳ヤシキ兵左衛門婿

家督

千葉兵吉

成政長男二十一 文化七庚午年十月十七日産

佐藤長左衛門 信好 明治九年丙子年六月十五日午前十時

右八小島村々長拜命 死去享年六十七年神葬祭満福寺へ葬△

室当東学ヤシキ浅利直治長女

一 次男 浅利丞之進

一 三男 幼名仲輔 出家千厩大光寺住職

一 四男 伊沢前沢五日町 御足輕佐藤貞助

一 女 舞草村附森佐藤喜東次室

二 女 下胆沢目呂木村伊藤茂蔵婿市之助室

家内不和ニ而実家江子共式人連戻る

英平 おきちト申

信好三十一子 天保十一年十月十七日産

三 男 佐藤吉之進 成盛 家嗣

四 女 江刺郡高寺村下河原□□ 斎藤彦輔室

五(次)男 長部村干場屋敷三浦吉五郎

右八岩井師範学校ニテ教科卒業ノ上明治九丙子年

一月十四日長朝ヨリ長部小学校訓導拜命

佐藤長左衛門信好長男

一 佐藤吉之進守保 明治七年七月七日小島村総代拜命

嘉永貳巳酉年三月七日東山

小島村御百姓九吉当八拾七歳

妻乃里古当八拾三歳雅蓮乃

夫婦二而役頂衆中ヨリも目出度キ

家内雅蓮三夫婦能相統之者

南方川通り村併二も無御座候二付

殊処目出度儀家内成卜申候喜

比度八拾才已上の老人者男女共丹

御屋形様御目見被仰付能々奉

比節登仙仕候様肝入衆ヨリ被申渡

二月廿九日出立申能時二付引添

粹人加茂左衛門当六拾歳妻いね五拾六歳

人□□長左衛門四拾才妻てい三拾九才雅蓮之

家内三夫婦相違無御座候二付□□事

御目見相済而後の御吸物二而御酒

頂戴御酒さいにかすてらかまぼこ登

味連酒

其外にも御夕飯御にしめ二□ま□ふ

□□ふいもこんにやくおわりに牛蒡引添

人共二白飯むすび二こにしめいもこんにやく

□に牛蒡頂戴□にの丸二而右如し

NO	名前	性別	墓石番号	1600年	1650年	1700年	1750年	1800年	1850年	1900年	1950年
1	単人 成長	男		←	→ (1602~1679) 長部村小川屋敷						
2	単人 成長妻	女		←	→ (1604~1674) 白山堂司吉祥院女						
3	単人 成壽	男		←	→ (1626~1686) 小島村下構屋敷 (寛永19年から)						
4	単人 成壽妻	女		←	→ (1626~1681) 山王祠清禅院女						
5	信濃	男		←	→ (1628~1693) 小島村角地屋敷						
6	みへ	女		←	→ (1630~1695) 生没年推定 戸下内村へ分家						
7	賀茂左衛門	男	15	←	→ (1644~1699)						
8	賀茂左衛門妻	女	9か14	信濃長女	←	→ (1647~1693)					
9	主計	男		早世	←						
10	女	女		五串村上野へ	←	→ (1648~1713) 生没年推定					
11	女	女		小島村長坂へ	←	→ (1650~1715) 生没年推定					
12	長作	男	24	←	→ (1667~1742)						
13	長作妻	女	17	小島村上山屋敷より	←	→ (1667~1751)					
14	女	女		長部村里屋敷へ	←	→ (1669~1734) 生没年推定					
15	女	女		舞草村榮屋敷へ	←	→ (1671~1736) 生没年推定					
16	女	女		山目町	←	→ (1673~1738) 生没年推定					
17	清兵衛	男	18	←	→ (1687~1746)						
18	清兵衛妻	女	13	猪岡村コウノス肝入家より	←	→ (1692~1731)					
19	勘左衛門	男		長部村大峯へ分家	←	→ (1697~1762) 没年推定					
20	女	女		長部村峯屋敷へ	←	→ (1689~1754) 没年推定					
21	女	女		舞草村榮屋敷へ	←	→ (1691~1756) 生没年推定					
22	女	女		千厩町新町へ	←	→ (1693~1758) 生没年推定					
23	陸平	男	5	仙台藩濟藤家養子 実家帰り病死	←	→ (1707~1760)					
24	名平	男	16	←	→ (1713~1791)						
25	名平妻	女	6	舞草村薬師別当西岑家より	←	→ (1718~1758)					
26	りん	女	12	←	→ (1710~1739)						
27	長左衛門	男	11	←	→ (1735~1811)						
28	長左衛門妻	女	9か14	相川村岩ノ沢より	←	→ (1735~1788)					
29	女	女		中里村根岸大内田屋敷へ	←	→ (1737~1803) 生没年推定					
30	女	女		五串村宮富屋敷へ	←	→ (1739~1805) 生没年推定					
31	九吉	男	22	←	→ (1763~1850)						
32	おりこ(妻)	女	21	赤生津村サイ田屋敷より	←	→ (1767~1851)					
33	賀茂左衛門	男	10	長部村矢野目田屋敷より	←	→ (1790~1865)					
34	いね(妻)	女	8	一閔地主町金田屋藤原家へ	←	→ (1794~1873)					
35	女	女		←	→ (1792~1757) 生没年推定						
36	長左衛門	男	新墓	←	→ (1810~1876)						
37	てい(妻)	女	新墓	←	→ (1811~1896)						
38	三吉	男	7	小島村東屋敷浅利家より	←	→ (1812~1867)					
39	女	女		仙台藩渡辺家へ 病氣にて実家帰り4年後病死	←	→ (1814~1879) 生没年推定					
40	女	女		目呂木村後藤家へ	←	→ (1816~1881) 生没年推定					
41	春吉	男		舞草村西岑家へ	←	→ (1818~1883) 生没年推定					
42	定吉	男		小島村大平屋敷千葉家へ	←	→ (1824~1899)					
43	兵吉	男		赤生津村宿屋敷大石家へ	←	→ (1826~1891) 生没年推定					
44	吉之進	男	新墓	黒石村下柳屋敷へ	←	→ (1840~1879)					
45	けん(妻)	女	新墓	←	→ (1838~1907)						
46	丞之進	男		記述なし	←	→ (1842~1907) 生没年推定					
47	仲輔	男		千厩大光寺住職へ	←	→ (1844~1909) 生没年推定					
48	貞助	男		前沢五日?町足軽佐藤家へ	←	→ (1846~1911) 生没年推定					
49	女	女		舞草村附森佐藤家へ	←	→ (1848~1913) 生没年推定					
50	女	女		目呂木村伊藤家へ	←	→ (1850~1915) 生没年推定					
51	女	女		高寺村斉藤家へ	←	→ (1852~1917) 生没年推定					
52	吉五郎	男		長部村千場屋敷三浦家へ	←	→ (1854~1919) 生没年推定					

生没年の不明の寿命は、一律65歳(生没年の明らかなものの平均値)とした。
20歳にて他家へ出る、あるいは下構屋敷に入ったと仮定した。
太線は下構屋敷にいた年代、細線は他家にいた年代を示す。

下構屋敷構成人員表

第7章 まとめ

1. 遺跡の立地

下構遺跡はJR東北本線平泉駅から東約2km、北上川東岸に位置し、沖積低地に張り出す微高地上に立地している。標高は20m～22m前後で、調査開始前は水田、畑として利用されていた。

2. 調査の概要

遺跡の層序は、第Ⅰ層 ぶい黄褐色土 層厚0～50cm 表土・耕作土、第Ⅱ層 黄褐色土 層厚約4m、に分けられる。Ⅱ層上面が古代以降の遺構検出面である。Ⅱ層以下からは遺構は検出されていない。

検出遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物24棟（柱穴約470個）、土坑53基、溝12条、井戸1基、倒木痕4基、焼土5基である。遺構の所属時期は不明のものもあるが、9世紀、12世紀、近世～近代に大別される。

＜9世紀の遺構＞出土土器の形態と十和田a降下火山灰との関係から、9世紀代に属すると考えられる遺構である。竪穴住居跡2棟、焼土4基、土坑1基がある。竪穴住居はカマドを有するもの（S I 1）とカマドの無いもの（S I 2）がある。焼土は竪穴住居の壁、床面が地盤の削平、流出で失われ、カマドあるいは炉の焼土がかろうじて残った部分と推測される。土坑（S K 52）は堆積土内に十和田a降下火山灰を含んでいる。この土坑は竪穴住居S I 2と重複しており住居より新しい、これにより竪穴住居（S I 2）が十和田a火山灰降下より古いと判断できた。

＜12世紀の遺構＞近世の掘立柱建物と軸方向が異なる掘立柱建物（S B 17）があり、12世紀の掘立柱建物の可能性を指摘できる。柱と柱の間の寸法は約273cm（約9尺）である。しかし、確実に12世紀と判断するには根拠が少なく、なお検討を要する。

＜近世～近代の遺構＞下構遺跡には、昭和5年頃（1930年頃）まで屋敷が所在していた。この屋敷は、近世の文書では「下構屋敷」と記載されている。今回の調査はこの下構屋敷に関係する遺構を調査したことになる。子孫の佐藤家が所蔵する文書には、寛永19年（1642年）から下構屋敷に住まいを始めた旨の記述がある。この年代は出土した遺物と遺構の形態にも齟齬はなく、信頼できる年代と考えられる。

下構屋敷に付随すると推測される遺構は、掘立柱建物23棟、土坑52基、溝12条、井戸1基、倒木痕4基、焼土1基がある。掘立柱建物は規模と形態から母屋と推測される建物が4棟、附属屋と推測される建物が19棟検出されている。

母屋の4棟は、屋敷の中央部に位置する2棟と、南東隅で検出された2棟に分けられる。中央部の2棟（S B 11、S B 16）は重複しており、S B 16が古い。この掘立柱建物の母屋S B 16、S B 11は17世紀代の建築と推測される。それ以後は、礎石建物の母屋に変換したと考えられる。南東隅の母屋2棟（S B 22、S B 23）は中央部の母屋よりも規模が小さく、下構屋敷に隷属する者の家屋、または隠居屋といった性格を想定できる。附属屋と推測される掘立柱建物は、母屋の掘立柱建物よりも検出数が多い。中央部母屋の東隣に位置する附属屋は5棟（S B 3、S B 7、S B 9、S B 12、S B 14）重複している。これは母屋が礎石建物に変換した後も、附属屋は依然として掘立柱建物であったことを示している。具体的な用途を推測できる附属屋にS B 2がある。これは建物の内部に埋設桶遺構（S K 7）があり、便所と推測できる。

井戸（S E 1）は屋敷廃絶後も近年まで使用されていたものである。石組みの井戸で、深さは584cmである。構築時期を判断する資料は無いが、他に井戸が存在しないことから、屋敷の開始時に掘られた可能性も

ある。また、倒木痕が4基検出されている。これは屋敷廃絶時に屋敷林を伐採、抜根した痕跡である。

SK1は池と推測される遺構である。埋土中から多量の陶磁器、ガラス製品が出土した。屋敷廃絶時に不要物を廃棄したものと考えられる。

＜出土遺物＞以下の遺物が出土した。縄文土器片微量（後期前葉、晩期後半）、石鏃、土師器、須恵器、土錘、12世紀のかわらけ（ロクロ、手づくね）、渥美産陶器（甕）、常滑産陶器（甕、片口鉢）、中国産白磁（壺）、14世紀の古瀬戸壺、近世陶器（肥前産、瀬戸・美濃産、常滑産、大堀相馬産、在産）、近世磁器（肥前産、瀬戸・美濃産、東北地方産）、近代陶磁器、石製品（石臼、砥石）、金属製品（銭、煙管、小柄、鎌、釘）、ガラス製品（ビン、石油ランプ）、木製品（漆器椀、鍋蓋、下駄）。

縄文時代の遺物は微量で、調査区内に遺構が存在しないことから、周辺からの混入品と推測される。土師器、須恵器はいずれも9世紀前～中葉のもので、時間幅は小さいと推測される。12世紀の遺物は少量であるが、かわらけ、国産陶器、中国産磁器が揃っており、北上川西岸の平泉遺跡群拠点地区と質的には遜色ない内容の遺物である。北上川の東岸では近年12世紀の遺物の出土が各地で確認されているが、下構遺跡は現在のところ、東岸では最も南側での12世紀の遺物出土地点となった。

古瀬戸は1片のみの出土で、14世紀前半の四耳壺と推測される。中世の遺物はこの1点のみの出土である。

近世～近代の遺物は質量ともに豊富で、下構屋敷の暮らしぶりを具体的に物語る良好な資料である。SK1からの出土品は種類、量ともに豊富で、下限年代が明確（昭和初年頃）であり、近代遺物編年の基準と成り得る資料である。

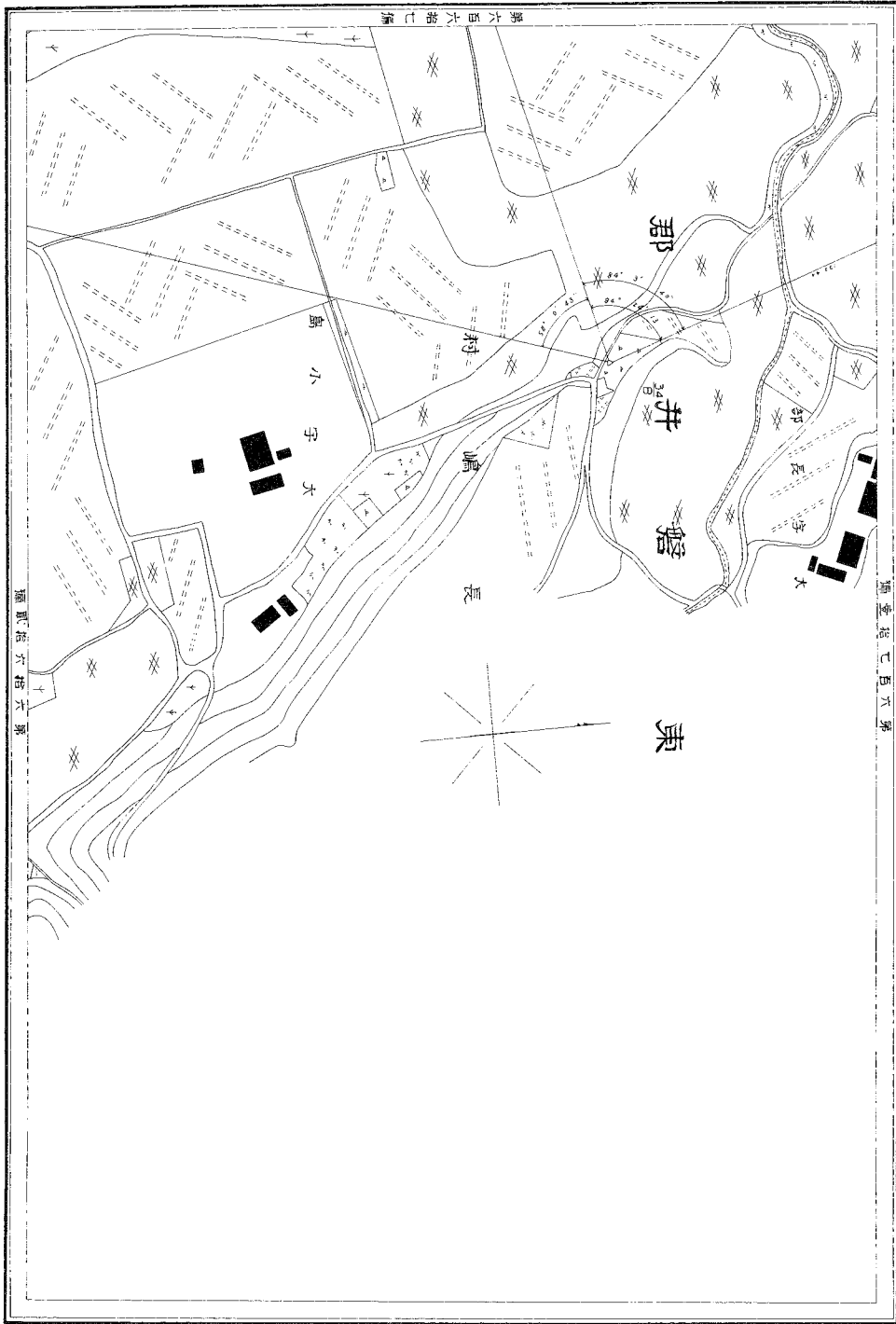
3. まとめ

下構遺跡の調査では、9世紀の集落、12世紀の集落、近世～近代の屋敷跡が検出された。

特筆されるのは、12世紀のかわらけ、国産陶器、中国産白磁の出土である。これによって、12世紀平泉遺跡群の範囲が、従来の認識よりもさらに広がることを明らかになった。平泉遺跡群における北上川東岸の様相、性格を明らかにして行くことが今後の課題といえる。

また近世～近代の「下構屋敷」は、発掘調査と佐藤家の文書から、17世紀中葉（1642年）から20世紀前半（1920年代）まで、約280年間営まれた屋敷であることが明らかになった。このように下構屋敷の遺物、遺構は時間幅が明確であり、具体的な近世農民の生活を考察するには格好の資料である。また多量に得られた近代遺物も下限年代が明確であり、近代遺物の時代指標として有効である。

第153図は明治40年頃に作成されたと推測される「河川台帳副本」である。河川管理のために旧内務省が作成したもので、平泉村役場旧蔵品である。この第666号図に下構遺跡の調査区付近が掲載されている。この図をみると下構屋敷は母屋と3棟の附属屋が存在することがわかる。また、調査区の南端は土取りのためにカットされているが、この図では本来の屋敷の広がりが見られている。正確に遺構配置図をこの河川台帳を重ねることは不可能であるが、調査時の現況では約30m屋敷の広がりが見られておりと理解される。この失われた部分にも下構屋敷の構成物が存在していたはずで、今回の調査で屋敷の全体が調査できたわけではない。



河川台帳副本に載る下構屋敷

第153図 河川台帳副本に載る下構屋敷

写 真 图 版



下構遺跡 調査区遠景



下構遺跡 調査区全景

写真図版 1



SB11 完掘状況



小島村細見全図（佐藤家蔵）

写真図版2



12Cの陶磁器・古瀬戸



肥前産磁器碗

写真図版3



大堰相馬・切込産徳利

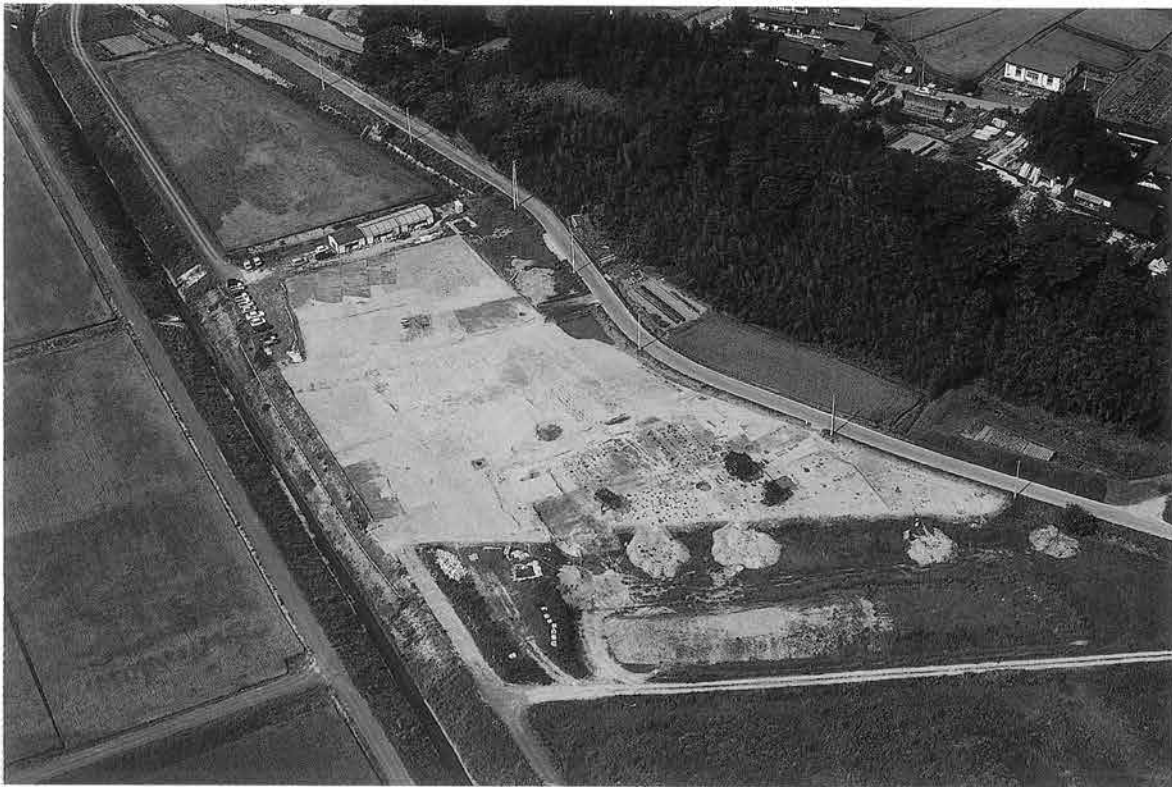


ビールビン・サイダービン

写真図版4

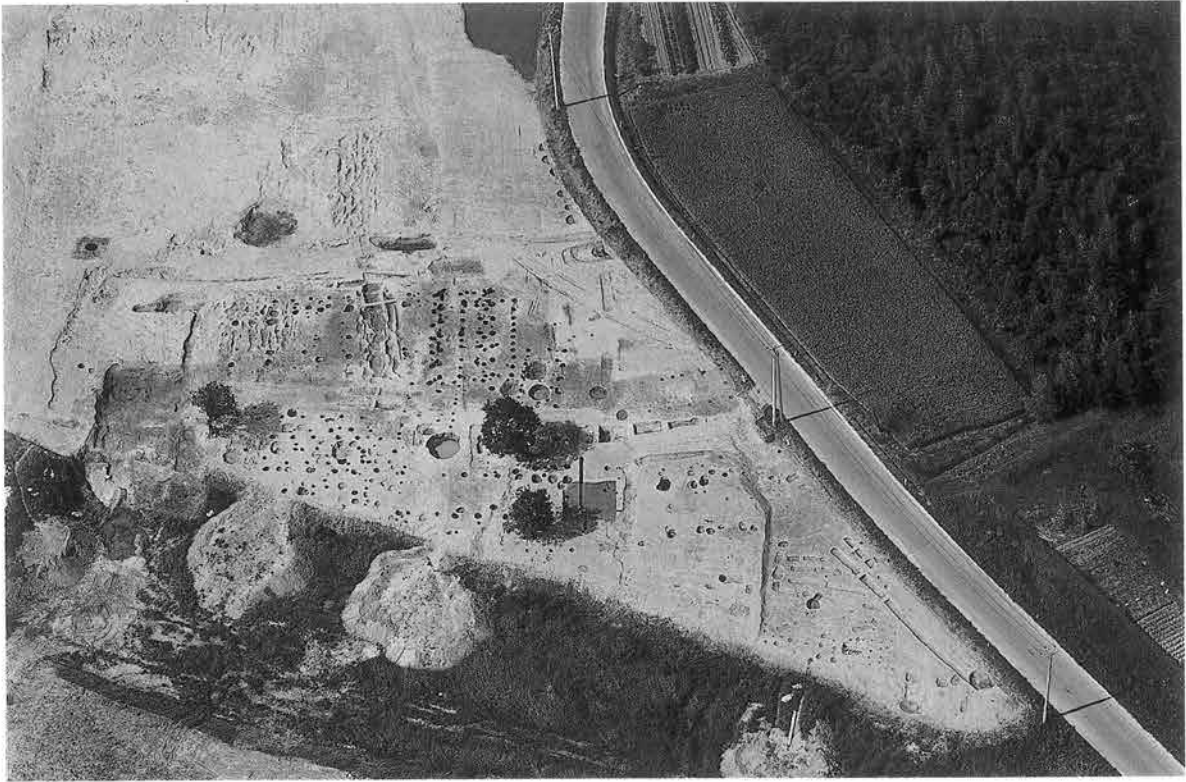


調査区付近航空写真

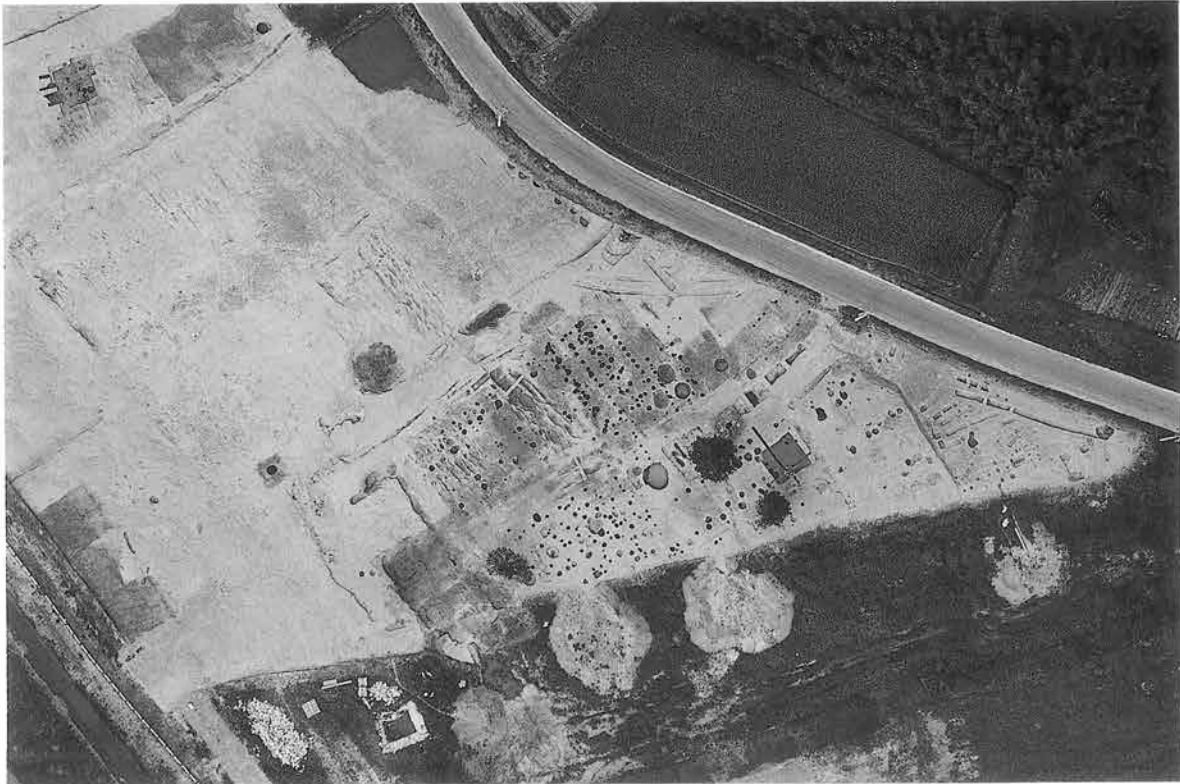


下構遺跡 調査区全景

写真図版5 航空写真①



下橋遺跡 調査区南側航空写真



下橋遺跡 調査区南側航空写真

写真図版6 航空写真②



基本土層 (6V~8V)



SB1 完掘

写真図版7 基本土層・SB1完掘



SB2 完掘



SB3 完掘

写真図版8 SB2・3完掘



SB4 完掘



SB5 完掘

写真図版9 SB4・5完掘



SB6 完掘



SB7 完掘

写真図版10 SB6・7完掘

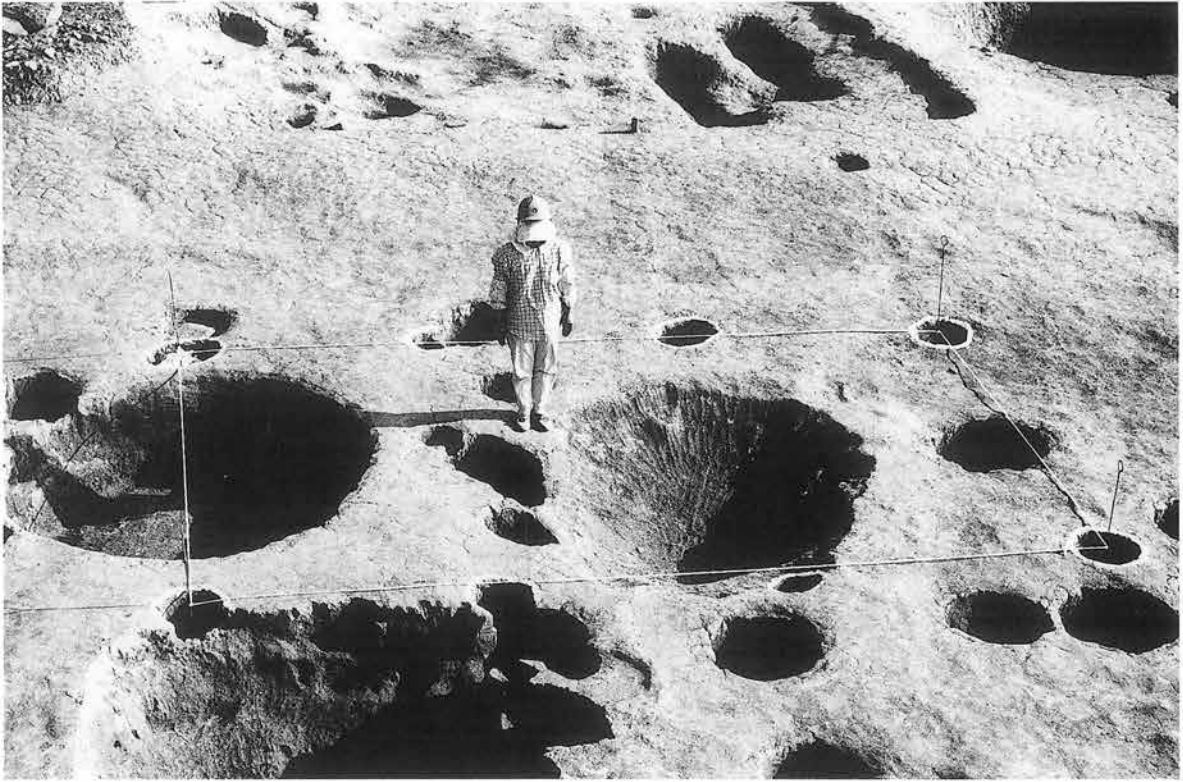


SB8 完掘

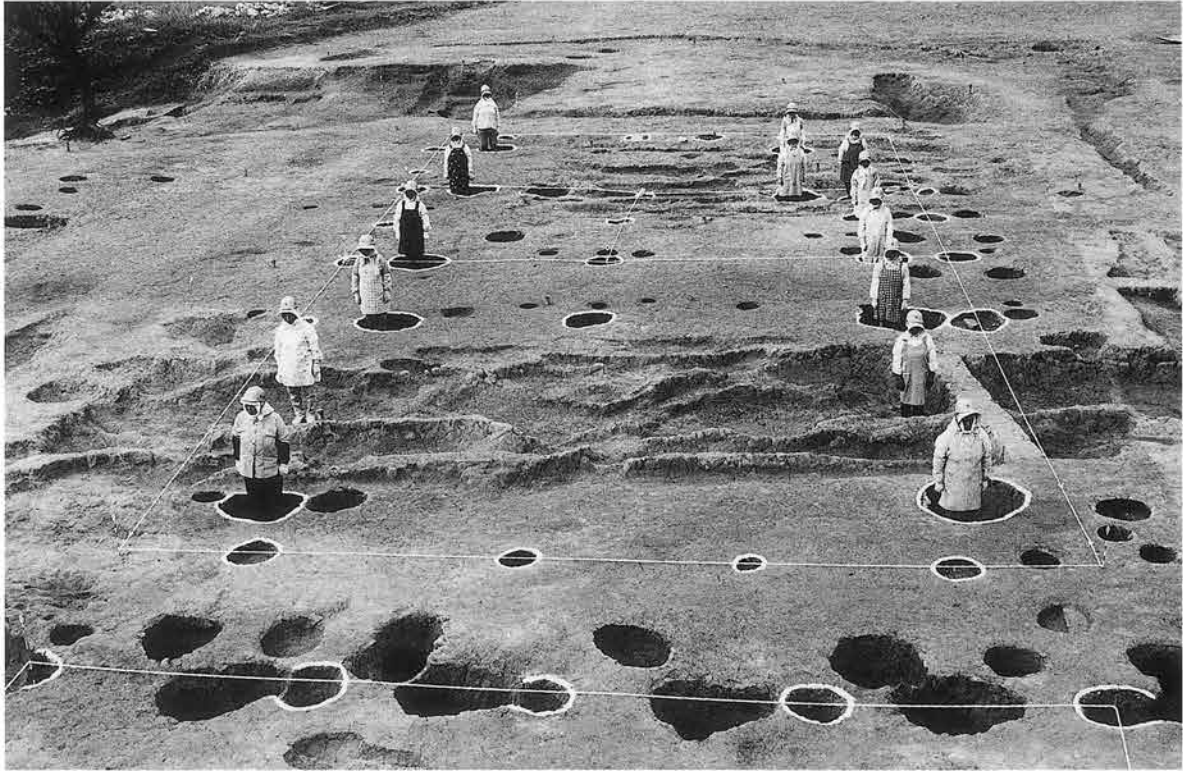


SB9 完掘

写真図版11 SB8・9完掘

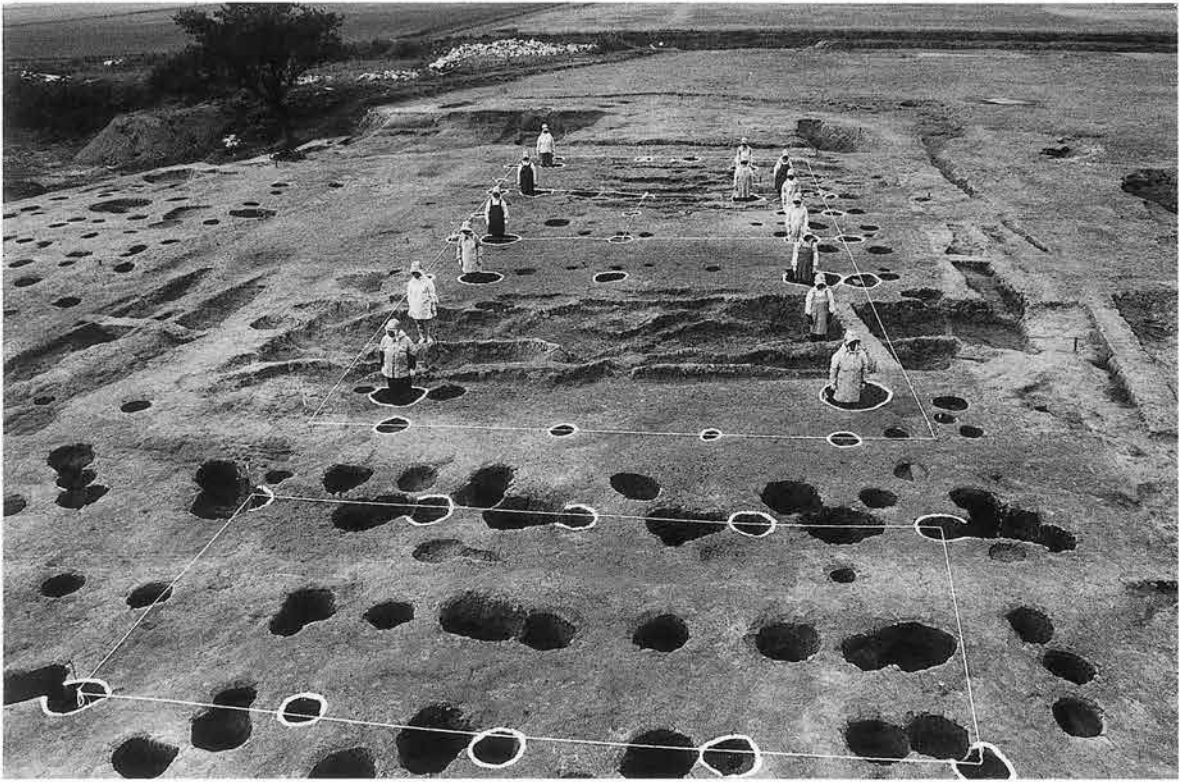


SB10 完掘



SB11 完掘

写真図版12 SB10・11完掘



SB11・14 完掘

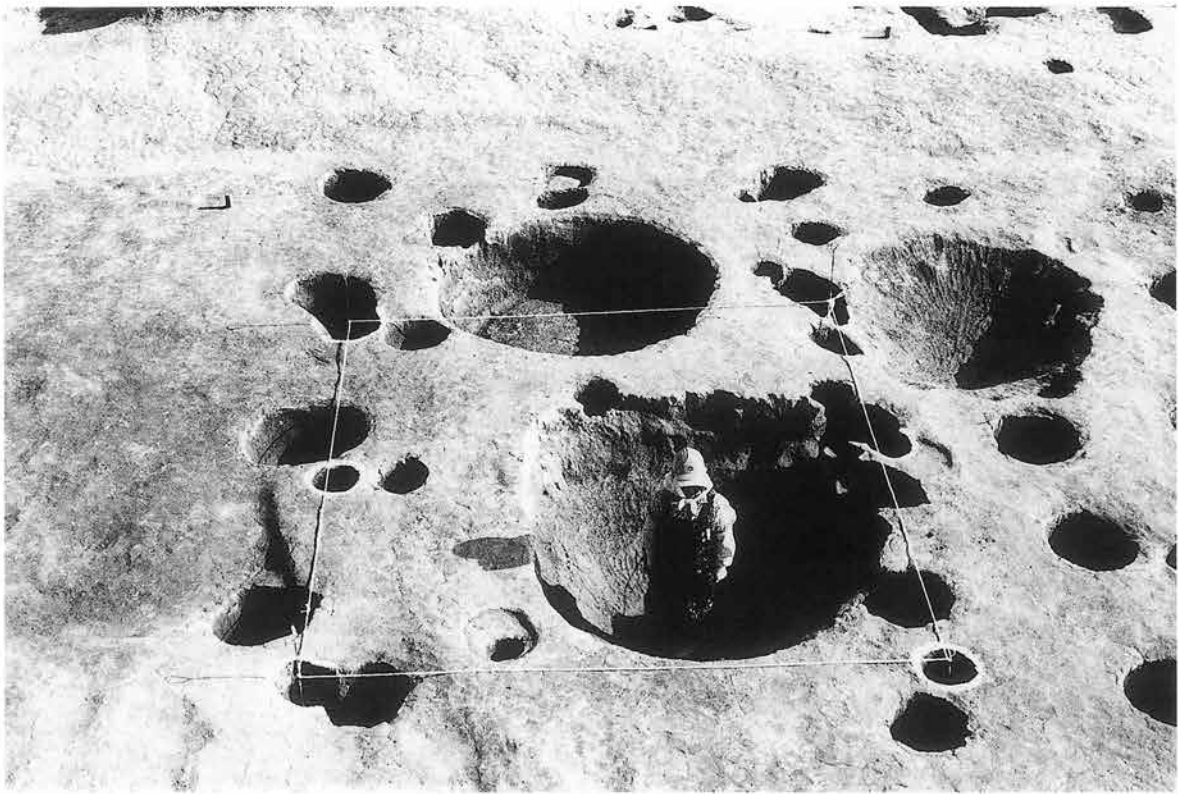


SB12 完掘

写真図版13 SB11・14・12完掘



SB14 完掘



SB15 完掘

写真図版14 SB14・15完掘



SB16 完掘

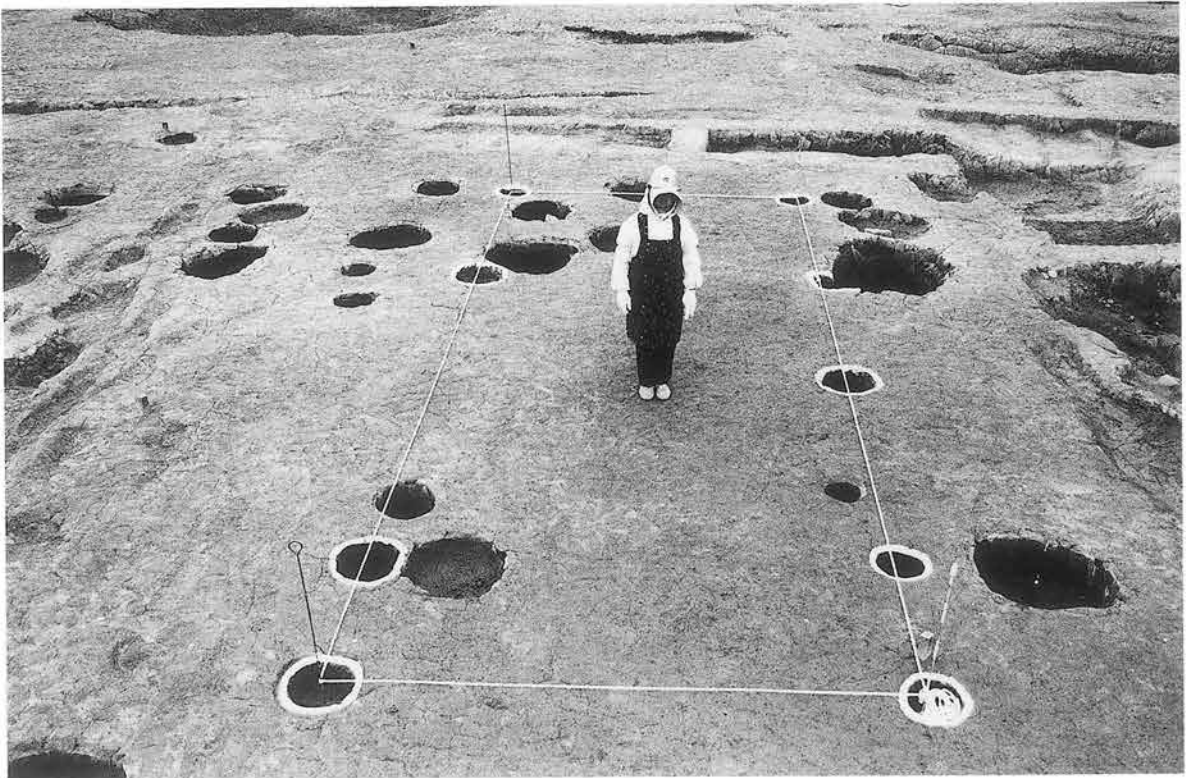


SB16・14 完掘

写真図版15 SB16・14完掘



SB17 完掘



SB18 完掘

写真図版16 SB17・18完掘



SB19 完掘

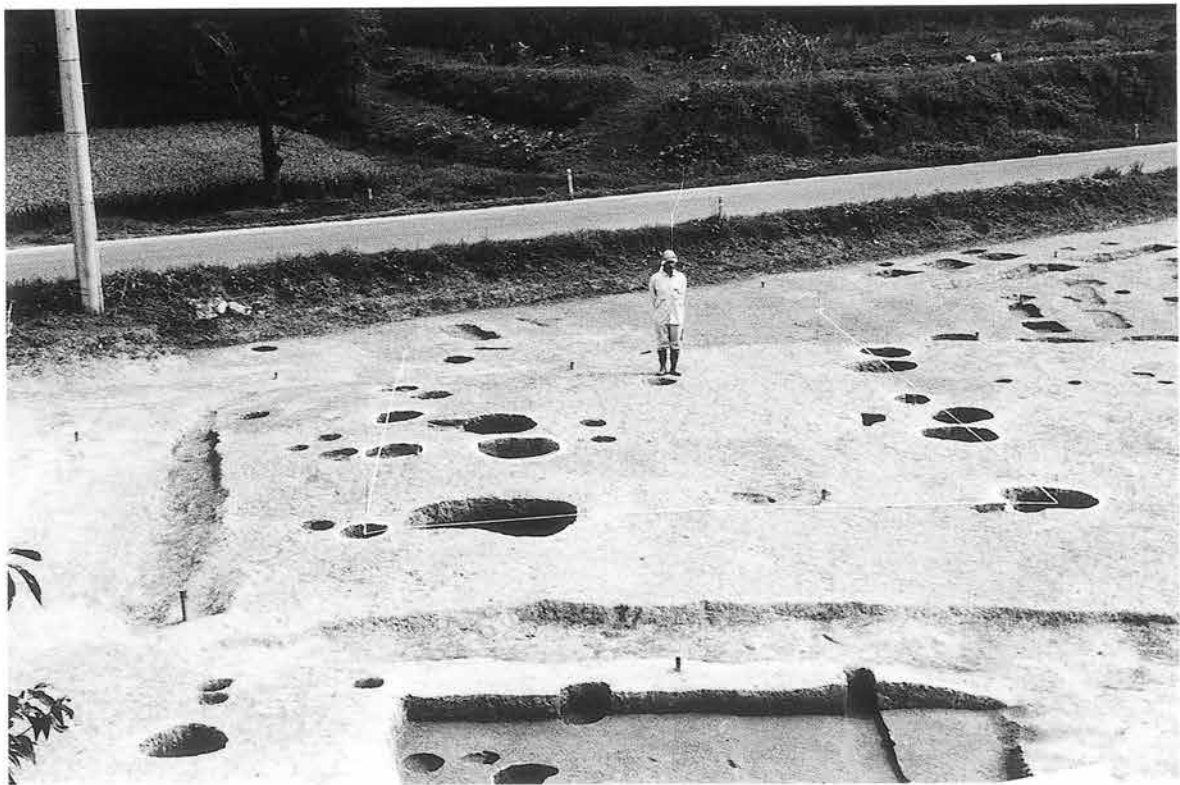


SB20 完掘

写真図版17 SB19・20完掘



SB21 完掘



SB22 完掘

写真図版18 SB21・22完掘



SB23 完掘



SB24 完掘

写真図版19 SB23・24完掘

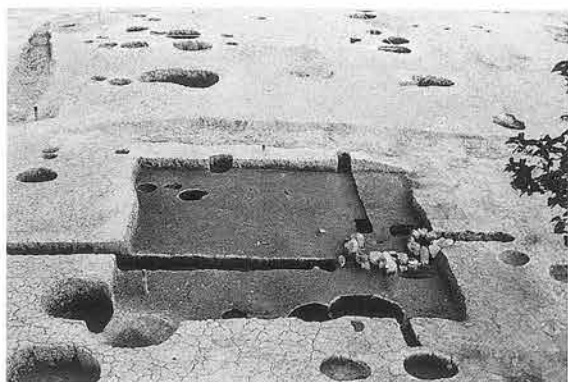


S11 完掘

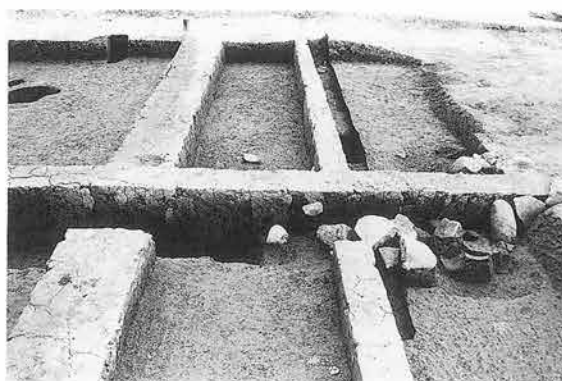


S12 完掘

写真図版20 S11・2完掘



SI1 完掘



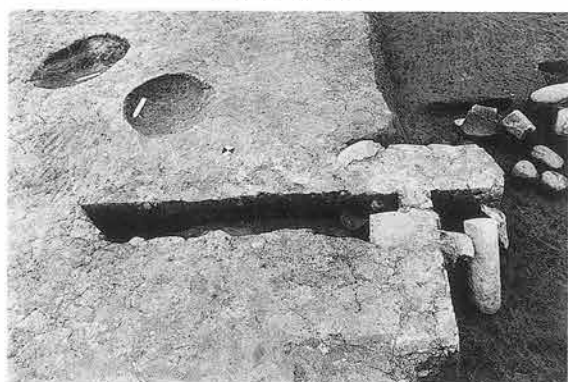
SI1 (A-B) 断面



SI1 (C-D) 断面



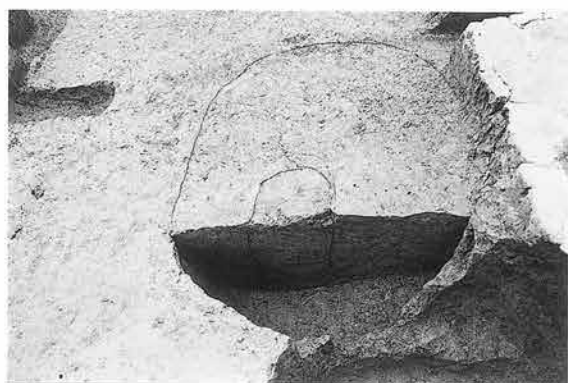
SI1 カマド完掘



SI1 カマド断面



SI1 カマド燃烧部



SI1 pit1断面



SI1 pit2断面

写真図版21 SI1



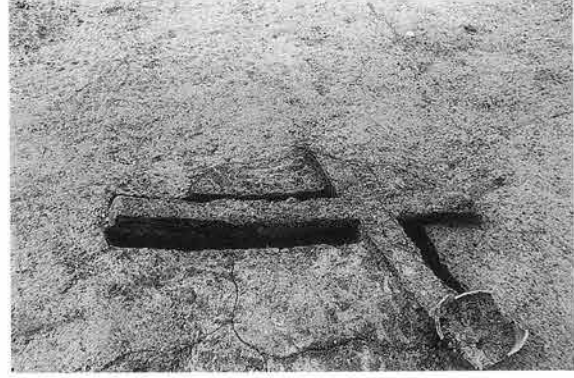
SI2 完掘



SI2 断面



SI2 遺物出土状況



SI2焼土 (G-H) 断面



SI2 焼土 (E-F) 断面



SI2 pit1断面

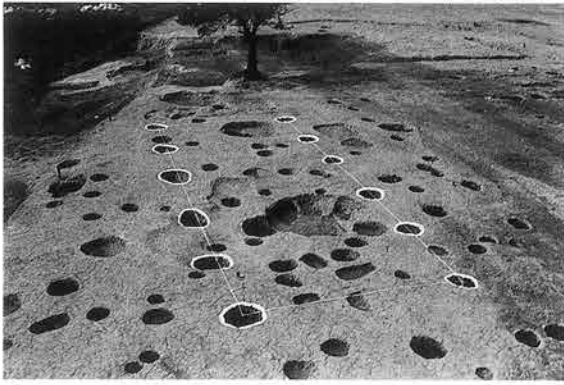


SI2 pit2・pit3断面

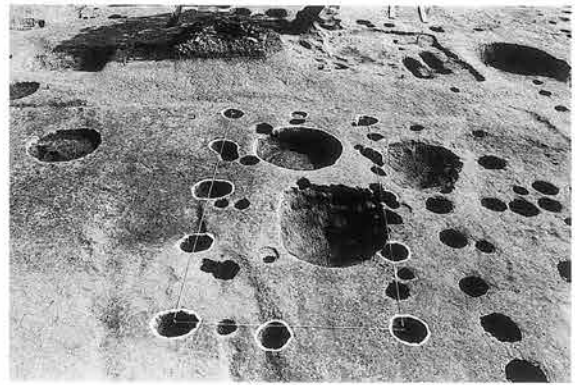


SI2 土錘出土状況

写真図版22 SI2



SB1 完掘



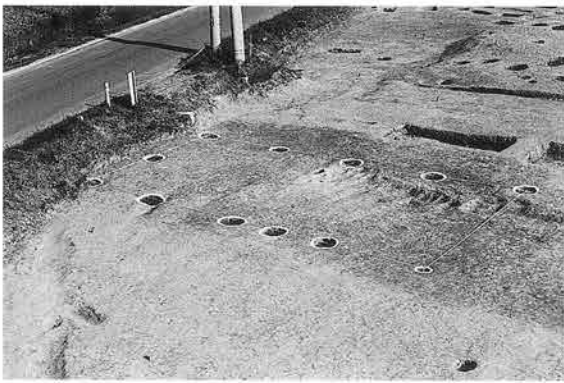
SB2 完掘



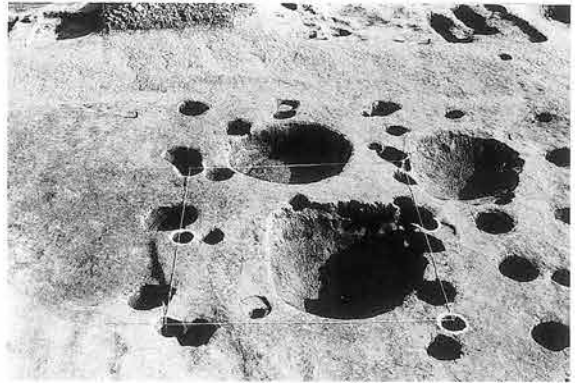
SB3 完掘



SB4 完掘



SB5 完掘



SB6 完掘



SB7 完掘

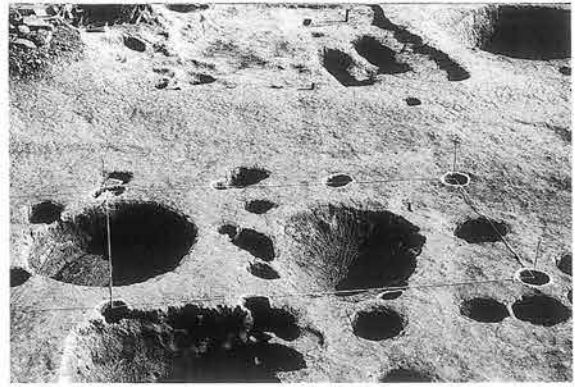


SB8 完掘

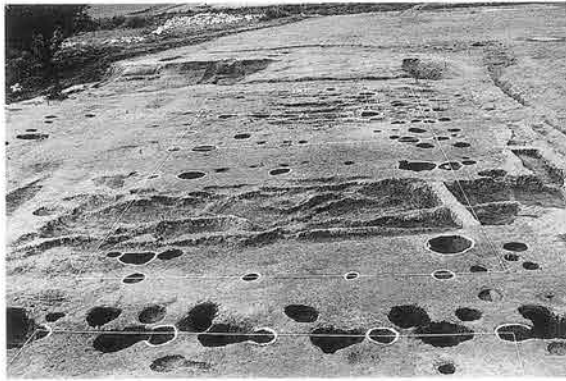
写真図版23 掘立柱建物完掘 (SB1~8)



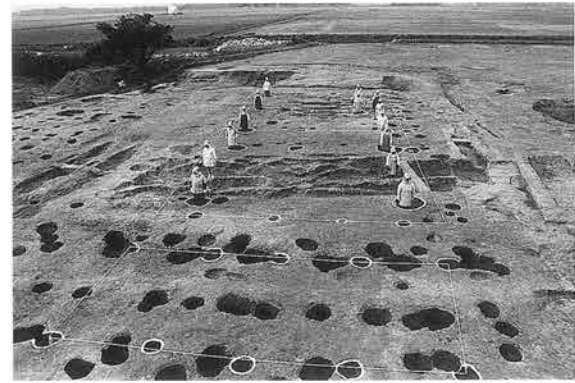
SB9 完掘



SB10 完掘



SB11 完掘



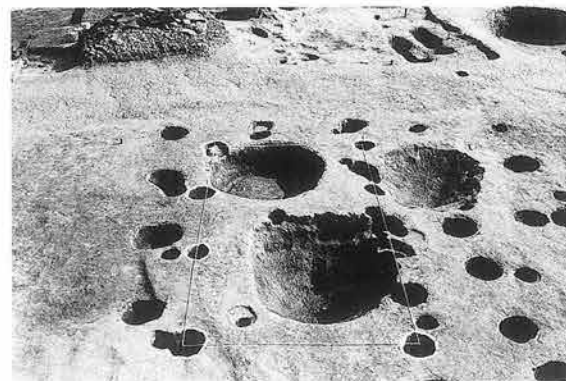
SB11 完掘



SB12 完掘



SB14 完掘



SB15 完掘



SB16 完掘

写真図版24 掘立柱建物完掘 (SB9~16)



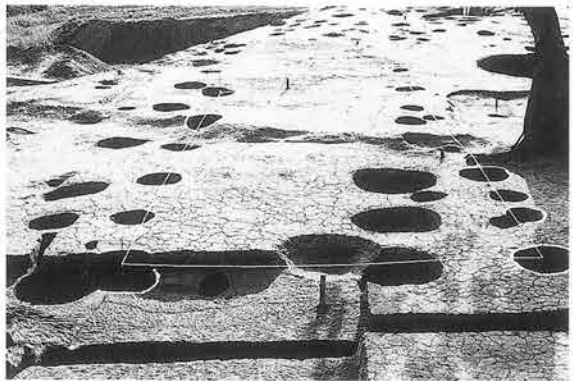
SB17 完掘



SB18 完掘



SB19 完掘



SB20 完掘



SB21 完掘



SB22 完掘



SB23 完掘

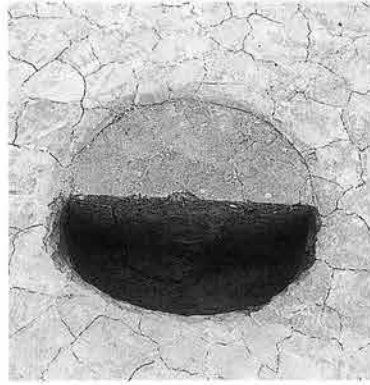


SB24 完掘

写真図版25 掘立柱建物完掘 (SB17~24)



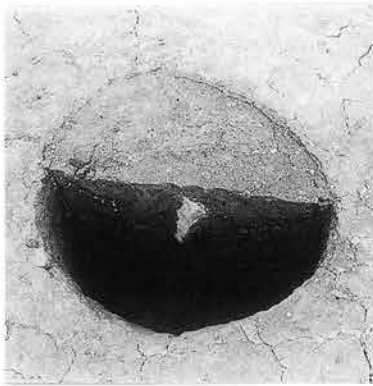
P301 (SB1)



P75 (SB1)



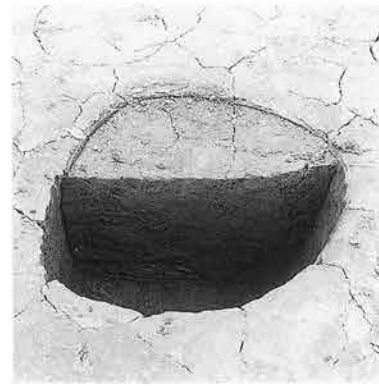
P76 (SB1)



P60 (SB1)



P61 (SB1)



P350 (SB1)



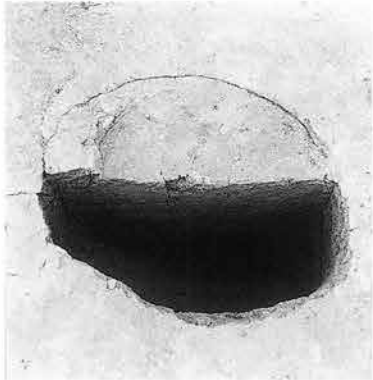
P66 (SB1)



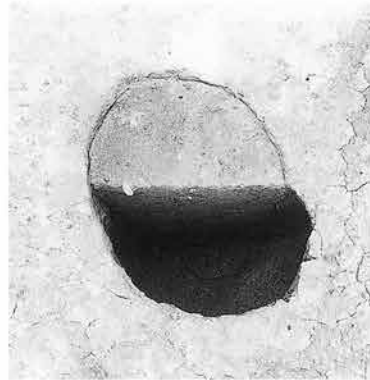
P303 (SB1)



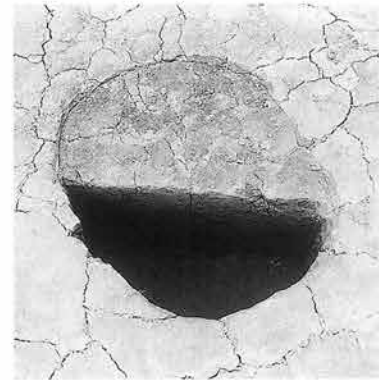
P304 (SB1)



P299 (SB1)

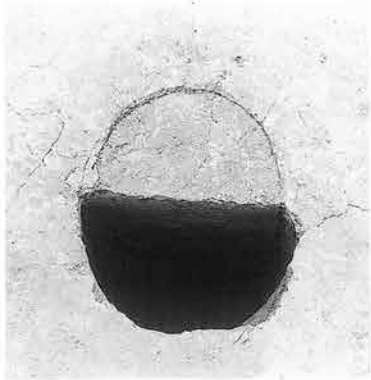


P297 (SB1)

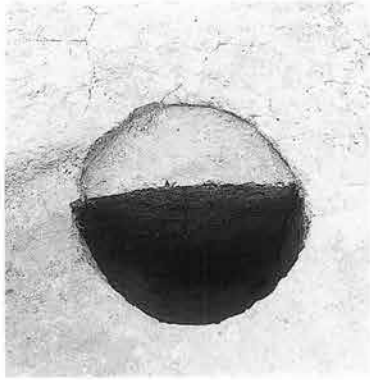


P22 (SB1)

写真図版26 SB1柱穴断面



P143 (SB2)



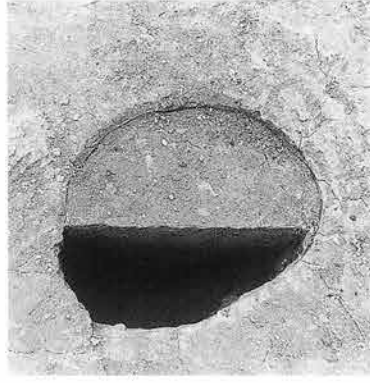
P164 (SB2)



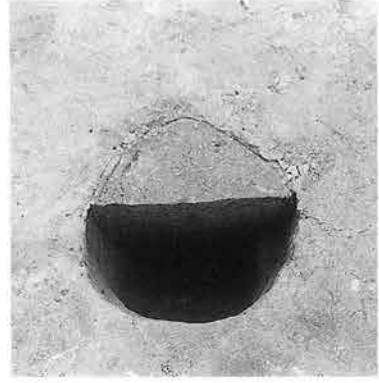
P162 (SB2)



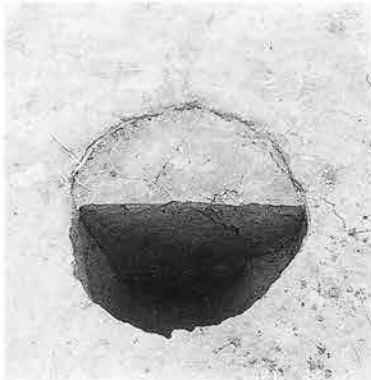
P159 (SB2)



P168 (SB2)



P150 (SB2)



P170 (SB2)



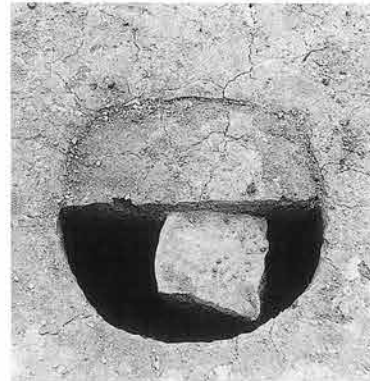
P276 (SB2)



P124 (SB2)



P289 (SB2)



P290 (SB2)



P147 (SB2)

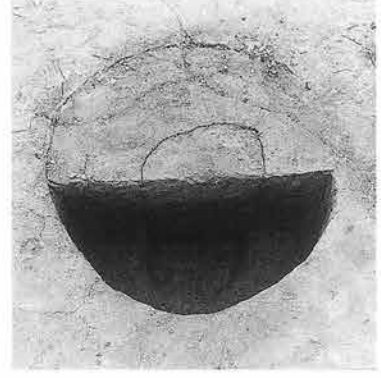
写真図版27 SB2柱穴断面



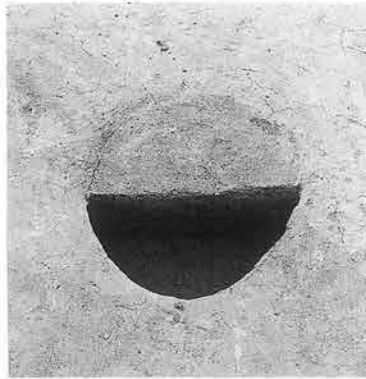
P227 (SB3)



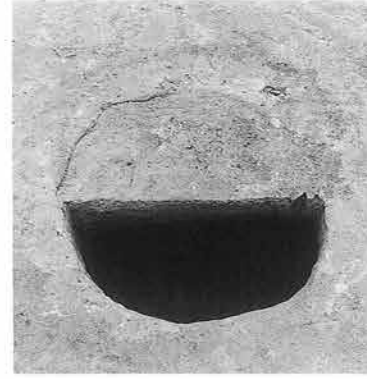
P228 (SB3)



P151 (SB3)



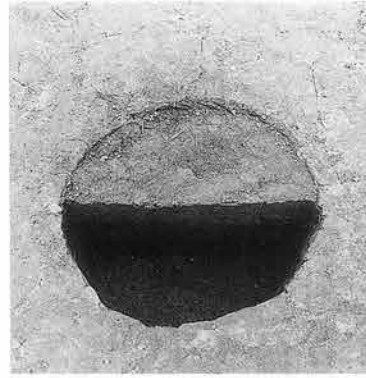
P152 (SB3)



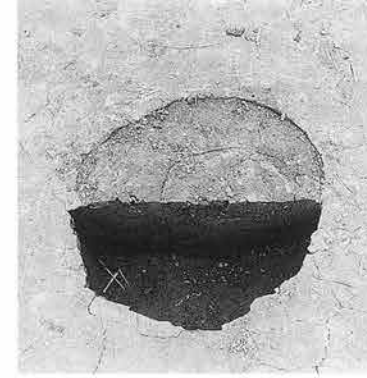
P167 (SB3)



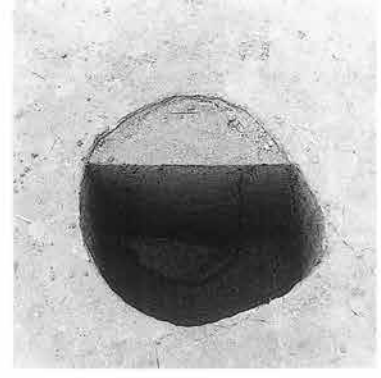
P153 (SB3)



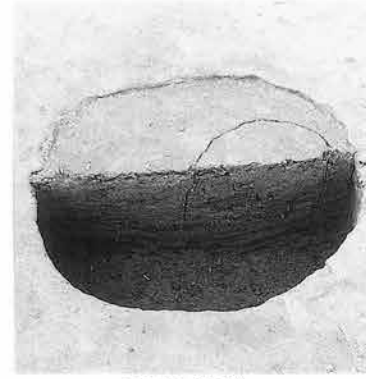
P154 (SB3)



P155 (SB3)



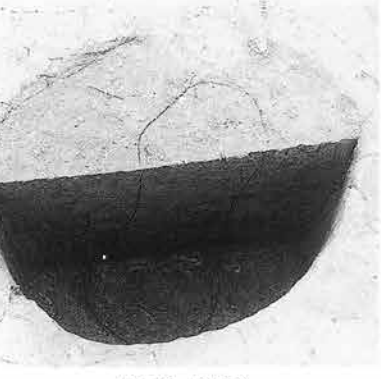
P268 (SB3)



P272 (SB3)

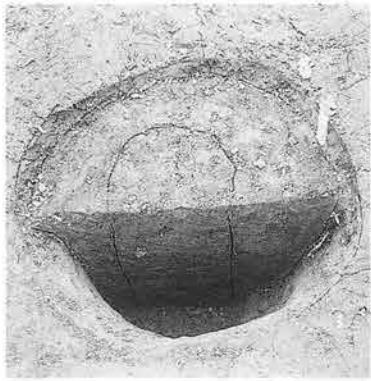


P280 (SB3)

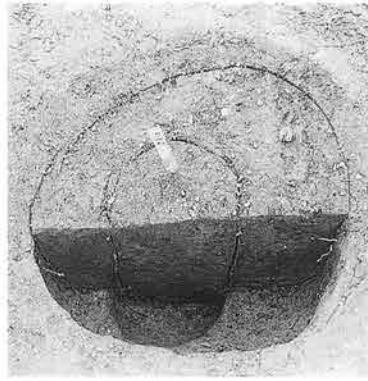


P186 (SB3)

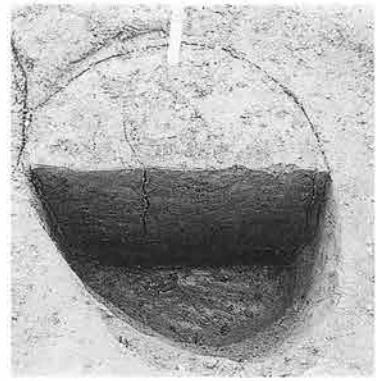
写真図版28 SB3柱穴断面



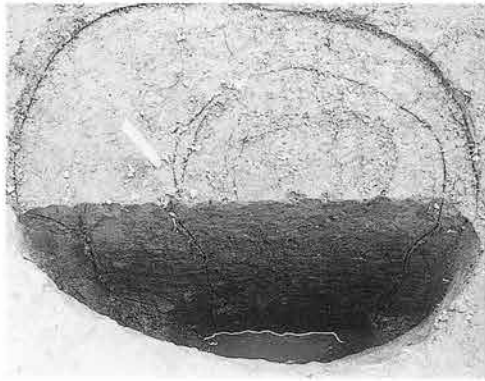
P181 (SB3)



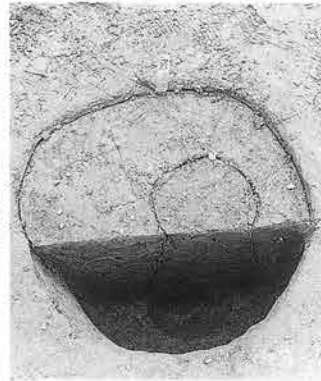
P182 (SB3)



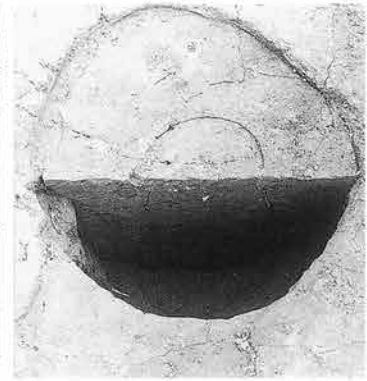
P178 (SB3)



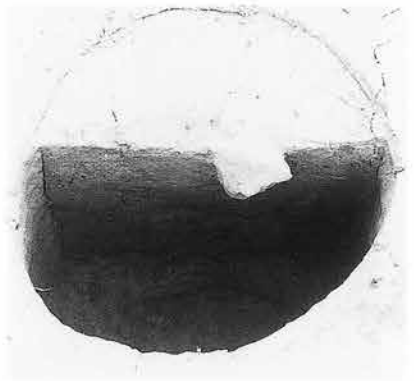
P179 (SB3)



P262 (SB3)



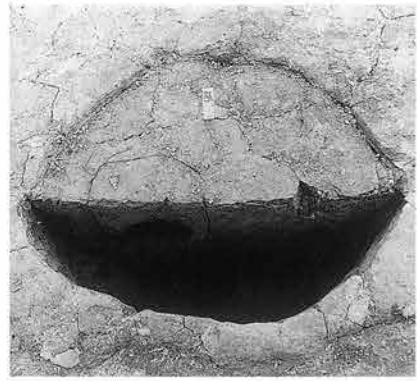
P267 (SB3)



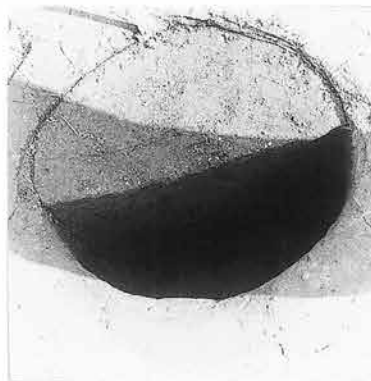
P184 (SB3)



P183 (SB3)



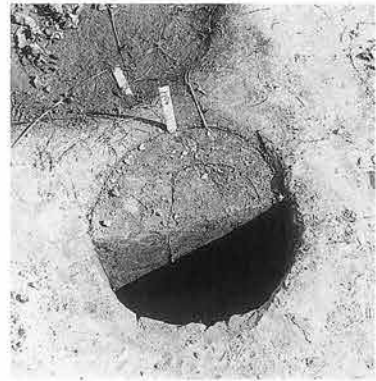
P283 (SB3)



P226 (SB3)

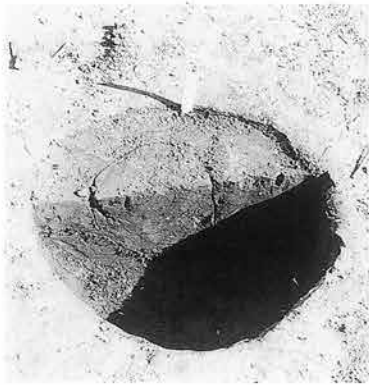


P291 (SB3)

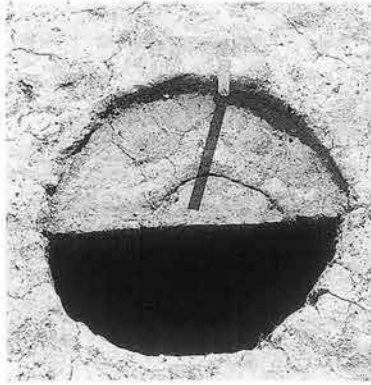


P174 (SB3)

写真図版29 SB3柱穴断面



P279 (SB3)



P281 (SB3)



P375 (SB3)



P81 (SB4)



P79 (SB4)



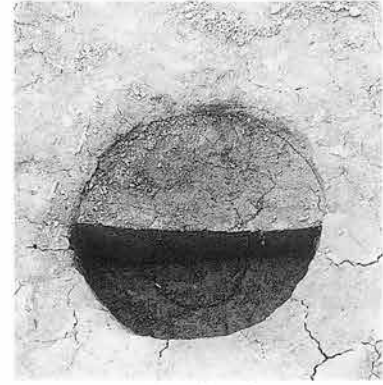
P80 (SB4)



P98 (SB4)



P100 (SB4)



P302 (SB4)



P310 (SB4)



P311 (SB4)

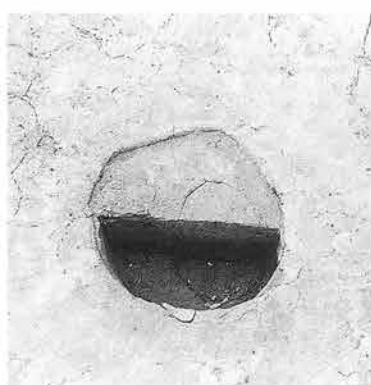


P56 (SB4)

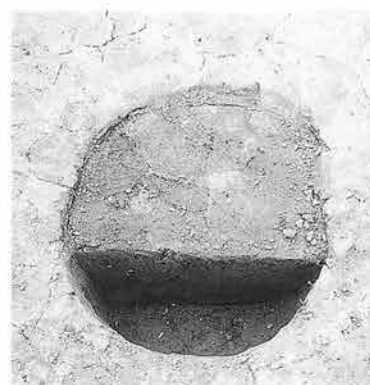
写真図版30 SB3・4柱穴断面



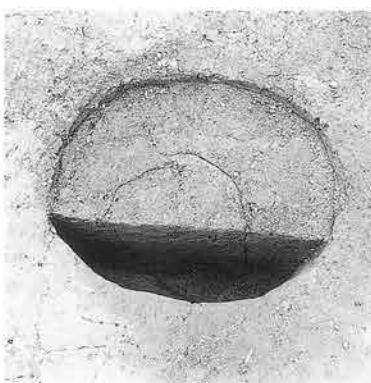
P140 (SB5)



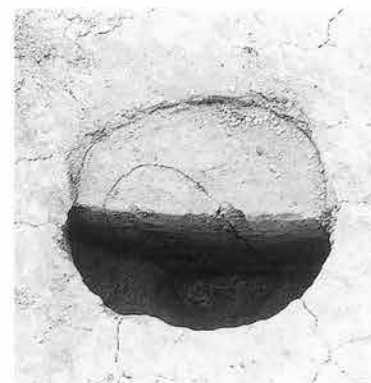
P139 (SB5)



P138 (SB5)



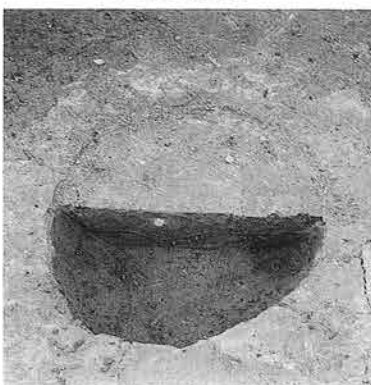
P137 (SB5)



P136 (SB5)



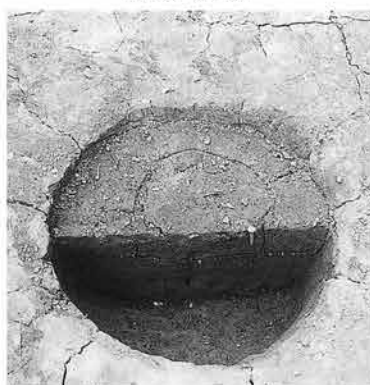
P359 (SB5)



P133 (SB5)



P158 (SB5)



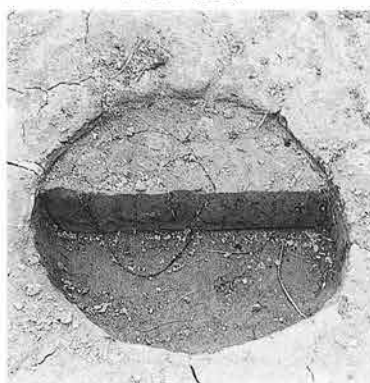
P157 (SB5)



P156 (SB5)

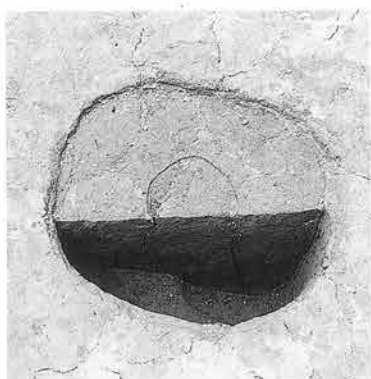


P134 (SB5)

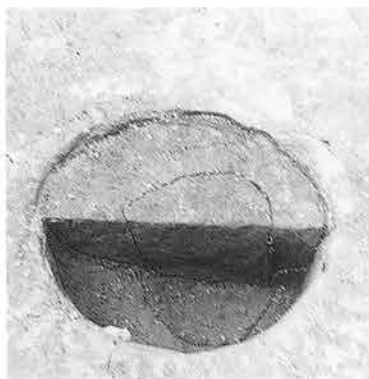


P132 (SB5)

写真図版31 SB5柱穴断面



P145 (SB6)



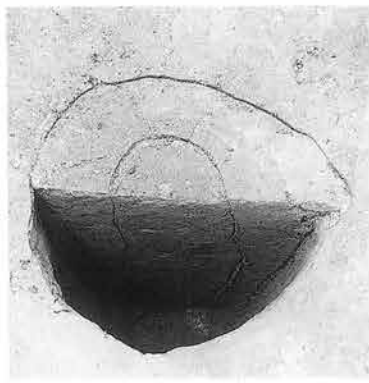
P163 (SB6)



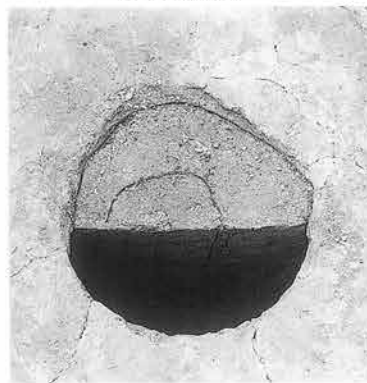
P116 (SB6)



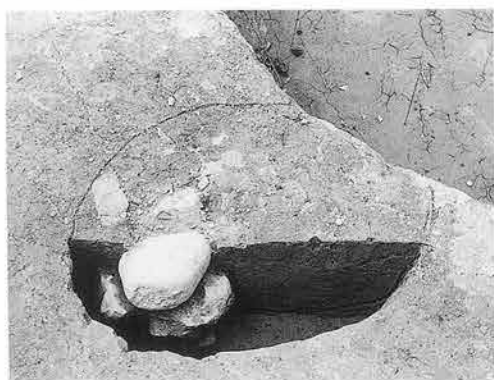
P294 (SB6)



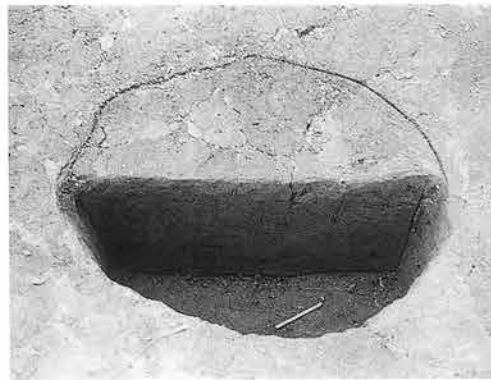
P295 (SB6)



P128 (SB6)



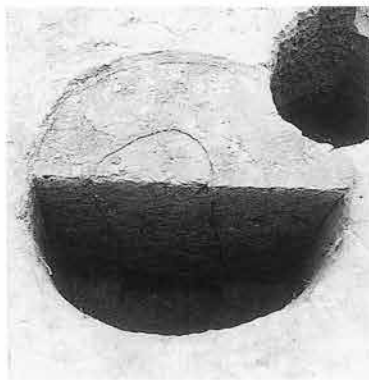
P127 (SB6)



P172 (SB6)



P225 (SB7)

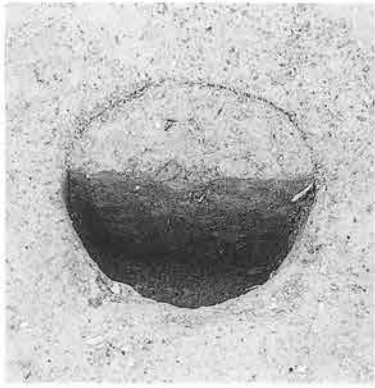


P292 (SB7)

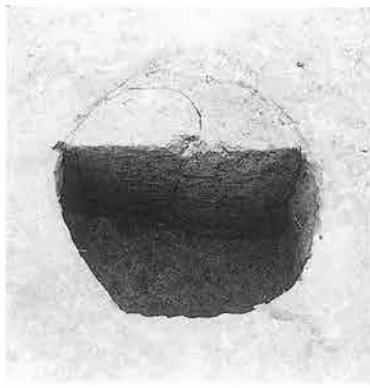


P253 (SB7)

写真図版32 SB6・7柱穴断面



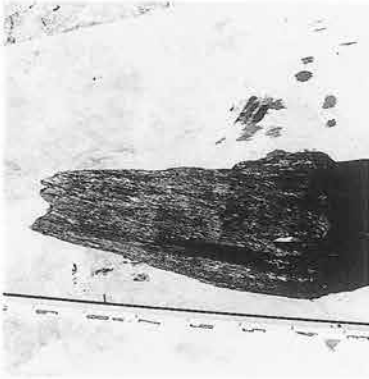
P258 (SB7)



P260 (SB7)



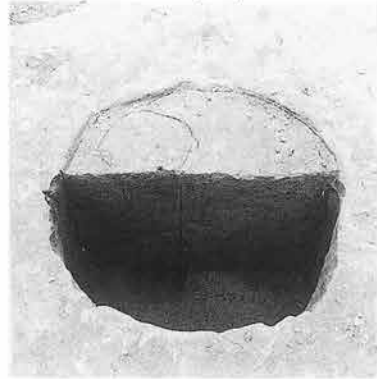
P264 (SB7)



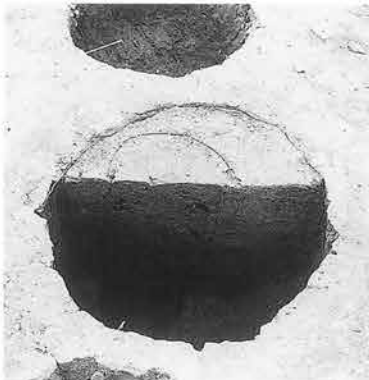
P264 (SB7) 柱材



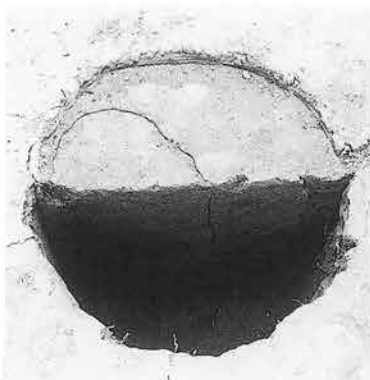
P264 (SB7) 柱材



P270 (SB7)



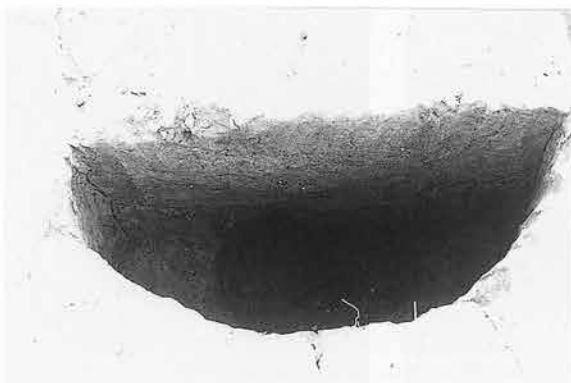
P278 (SB7)



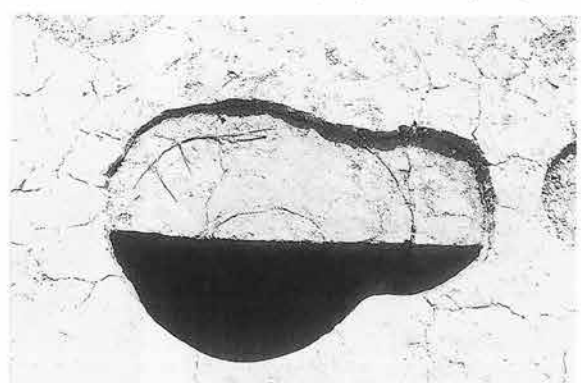
P288 (SB7)



P193 (SB7) · P361 (SB9)

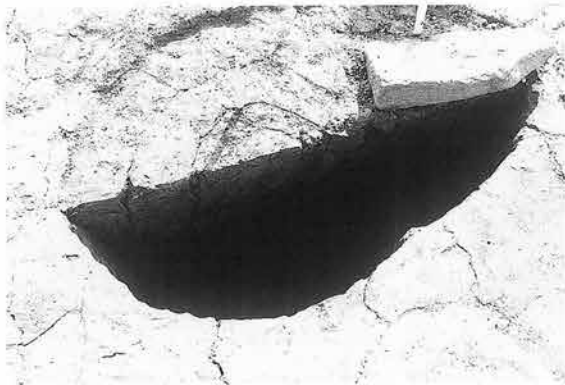


P360 (SB7)

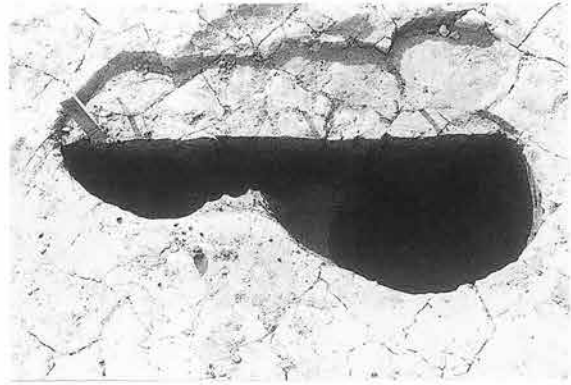


P189 (SB7) · P362 (SB9)

写真図版33 SB7・9柱穴断面



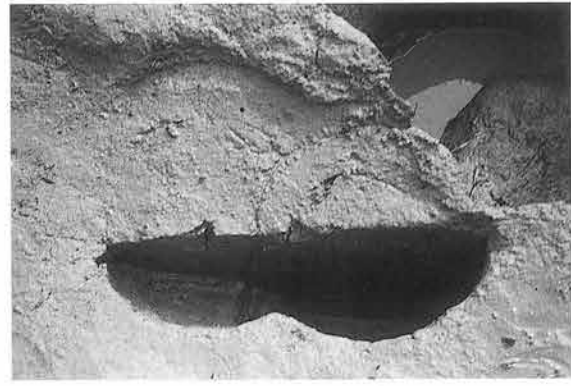
P200 (SB7) · P363 (SB9)



P347 (SB7) · P366 (SB9) · P348 (SB12)



P368 (SB12) · P367 (SB9) · P117 (SB7)



P284 · 285 (SB7)



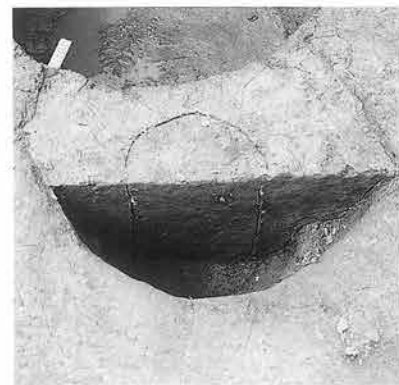
P370 (SB7)



P381 (SB7)



P175 (SB7)



P383 (SB7)

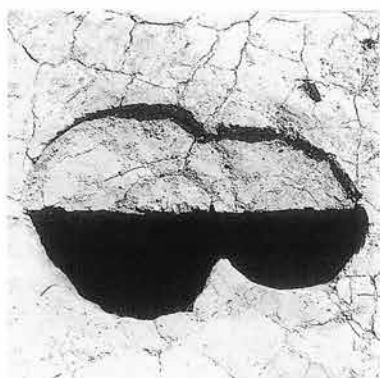


P187 (SB7)

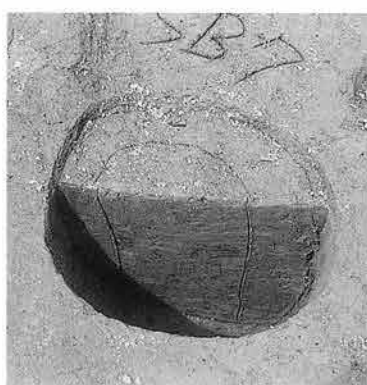


P266 (SB7)

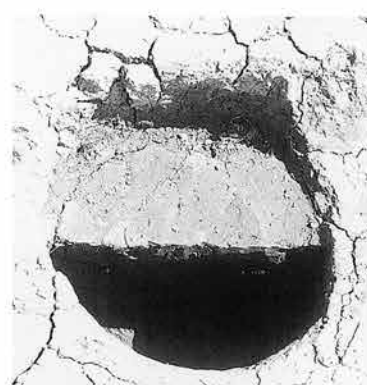
写真図版34 SB7 · 9 · 12柱穴断面



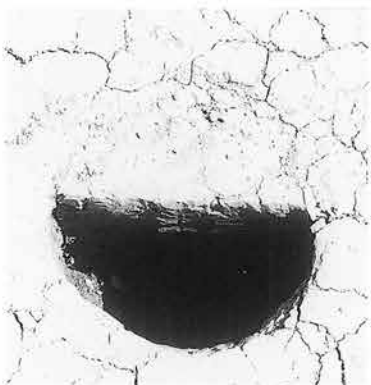
P185 (SB7) · P365 (SB9)



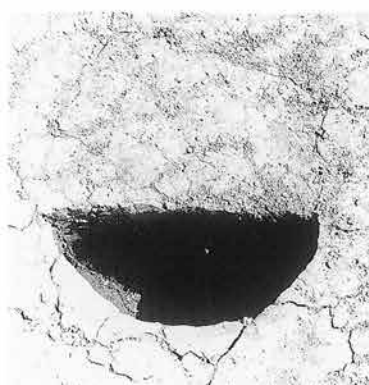
P389 (SB7)



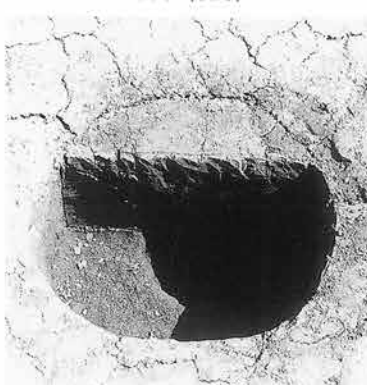
P309 (SB8)



P77 (SB8)



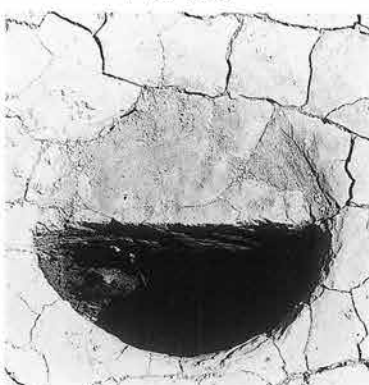
P78 (SB8)



P64 (SB8)



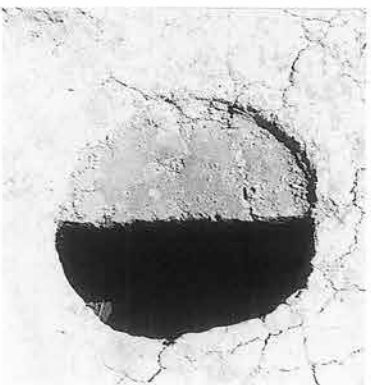
P63 (SB8)



P69 (SB8)



P70 (SB8)



P305 (SB8)



P246 (SB8)



P357 (SB8)

写真図版35 SB7・8・9柱穴断面



P379 (SB9)



P372 (SB9)



P256 (SB9)



P261 (SB9)



P265 (SB9)



P273 (SB9)



P286 (SB9)



P377 (SB9)



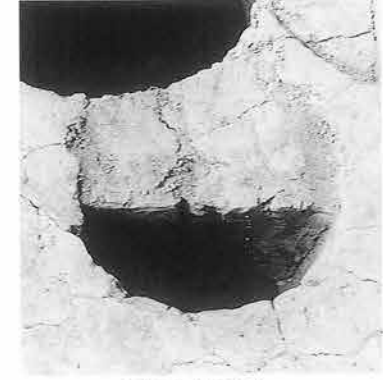
P384 (SB9)



P282 (SB10)



P376 (SB10)



P169 (SB10)

写真図版36 SB9・10柱穴断面



P165 (SB10)



P122 (SB10)



P123 (SB10)



P358 (SB10)



P126 (SB10)



P325 (SB11)



P248 (SB11)



P211 (SB11)



P327 (SB11)



P314 (SB11)

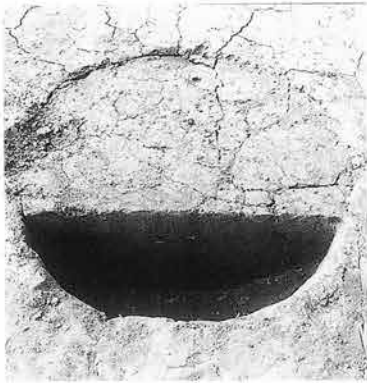


P320 (SB11)

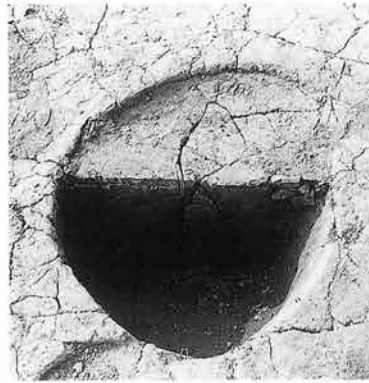


P331 (SB11)

写真図版37 SB10・11柱穴断面



P333 (SB11)



P336 (SB11)



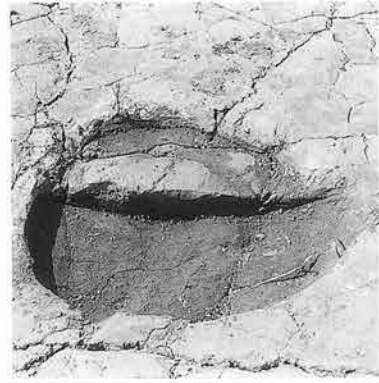
P324 (SB11)



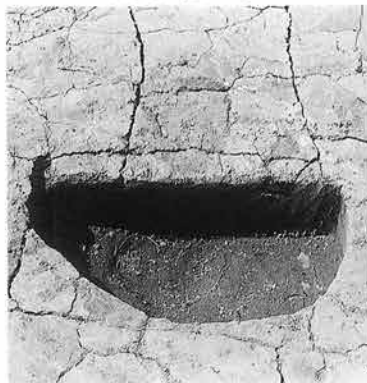
P210 (SB11)



P322 (SB11)



P89 (SB11)



P86 (SB11)



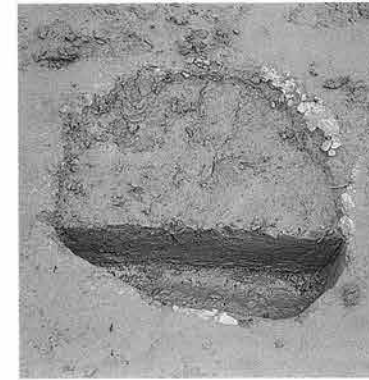
P205 (SB11)



P313 (SB11)



P93 (SB11)



P329 (SB11)

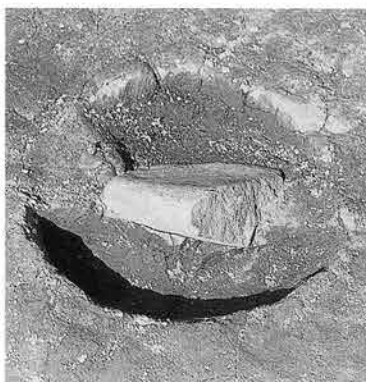


P332 (SB11)

写真図版38 SB11柱穴断面



P334 (SB11)



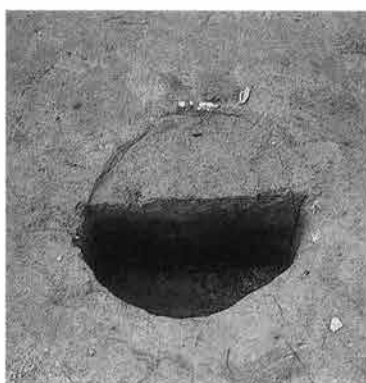
P315 (SB11)



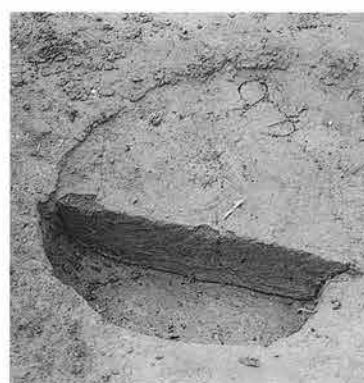
P195 (SB11)



P339 (SB11)



P338 (SB11)



P247 (SB11)



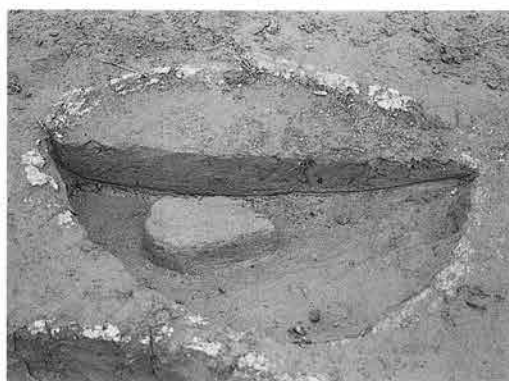
P341 (SB11)



P323 (SB11)

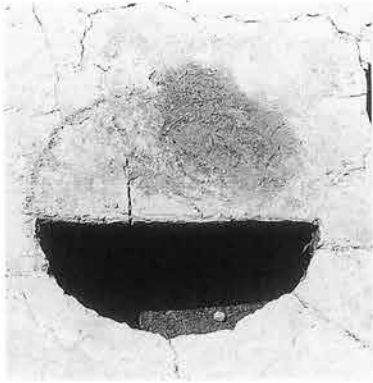


P218 (SB11)



P390 (SB11)

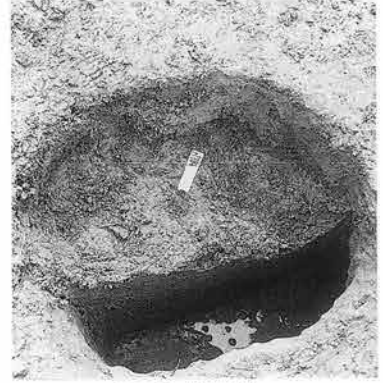
写真図版39 SB11柱穴断面



P173 (SB12)



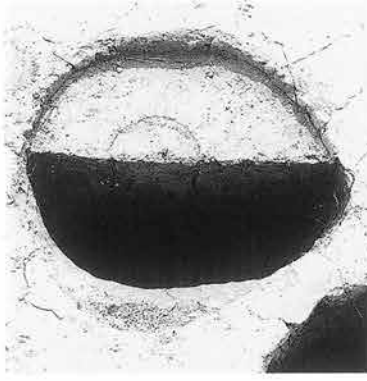
P257 (SB12)



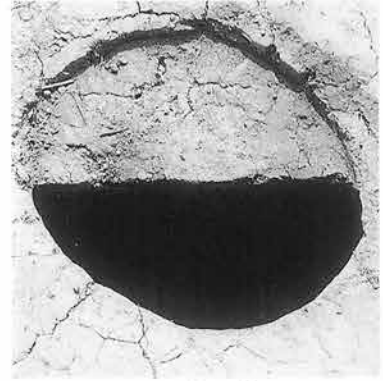
P386 (SB12)



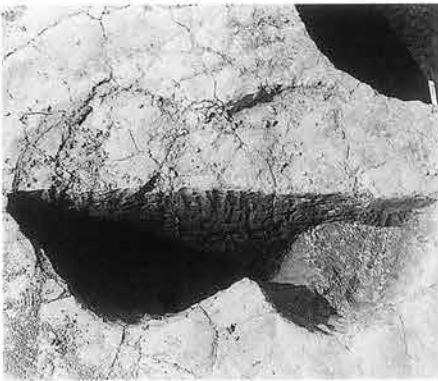
P191 (SB12)



P192 (SB12)



P196 (SB12)



P202 (SB12)



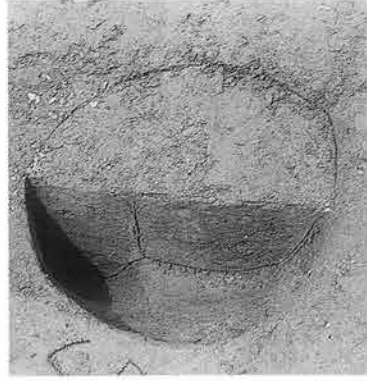
P374 (SB12)



P349 (SB12)



P380 (SB12)



P120 (SB12)

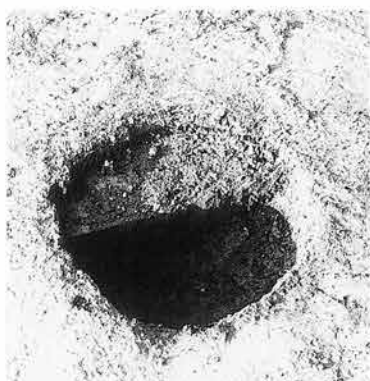


P369 (SB12)

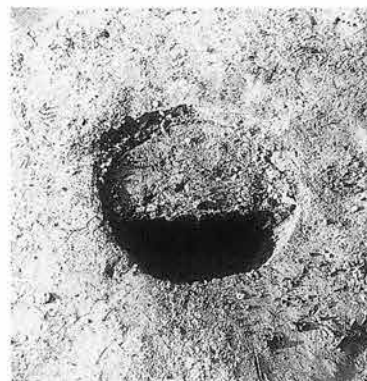
写真図版40 SB12柱穴断面



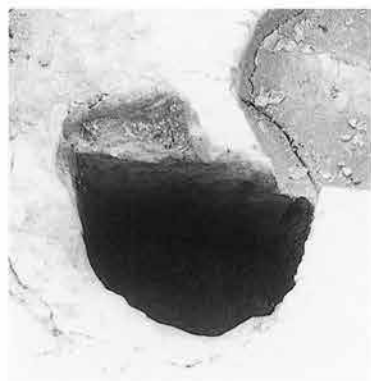
P1003 (SB13)



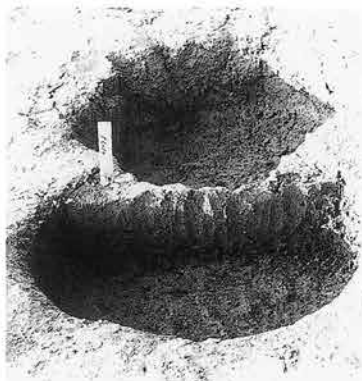
P1006 (SB13)



P1008 (SB13)



P373 (SB13)



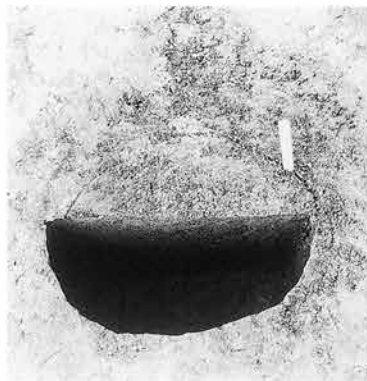
P1010 (SB13)



P392 (SB13)



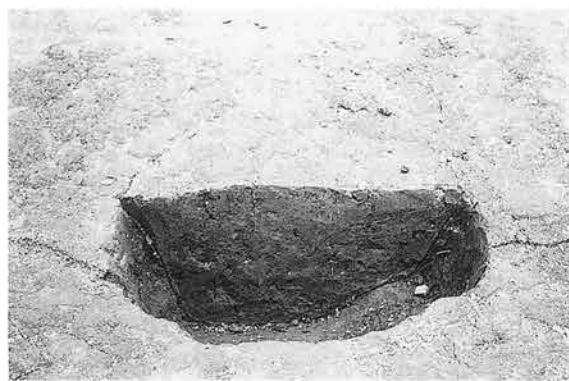
P1034 (SB13)



P1012 (SB13)



P1032 (SB13)



SK34 (SB13)



SK34 (SB13)

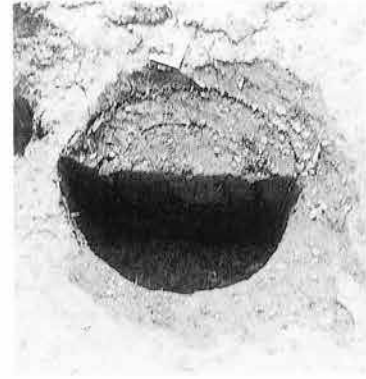
写真图版41 SB13柱穴断面



P346 (SB14)



P201 (SB14)



P197 (SB14)



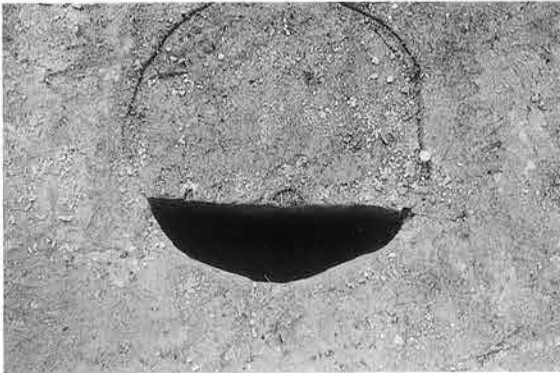
P188 (SB14)



P190 (SB14)



P269 (SB14)



P263 (SB14)



P259 (SB14)



P176 (SB14)



P371 (SB14)

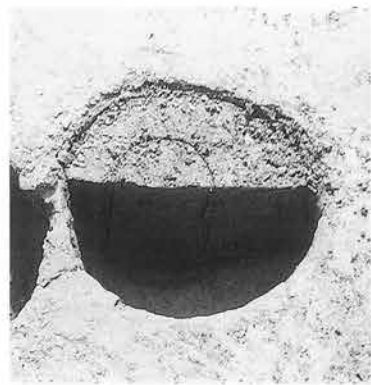
写真図版42 SB14柱穴断面



P144 (SB15)



P180 (SB15)



P160 (SB15)



P171 (SB15)



P275 (SB15)



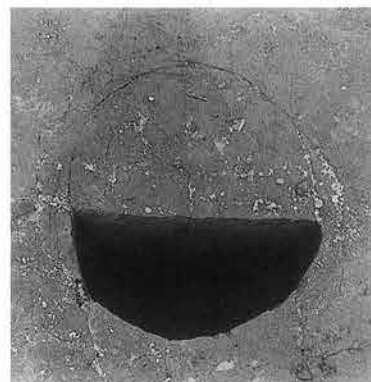
P387 (SB15)



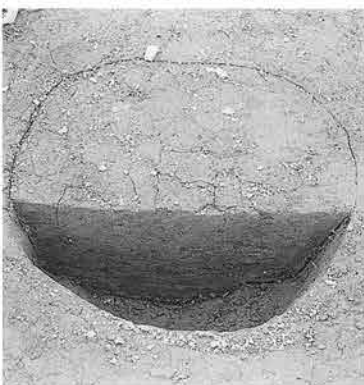
P250 (SB16)



P219 (SB16)



P214 (SB16)



P208 (SB16)



P203 (SB16)



P337 (SB16)

写真図版43 SB15・16柱穴断面



P251 (SB16)



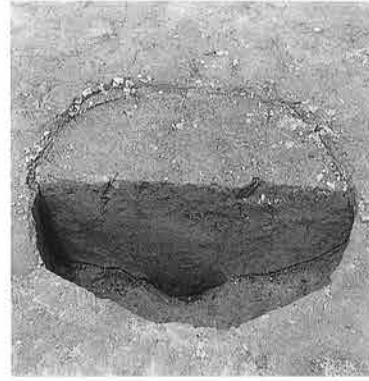
P249 (SB16)



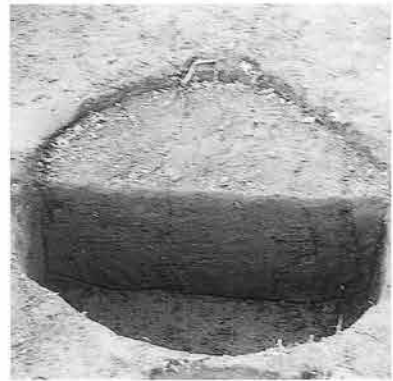
P215 (SB16)



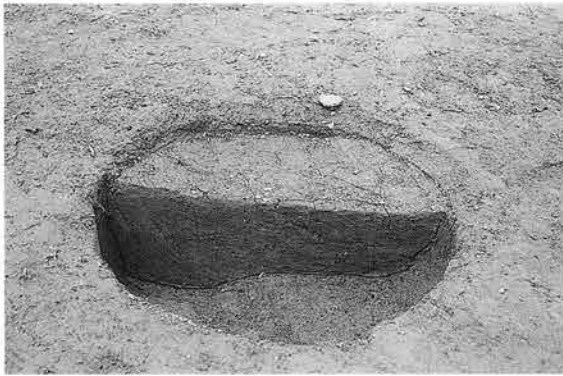
P209 (SB16)



P330 (SB16)



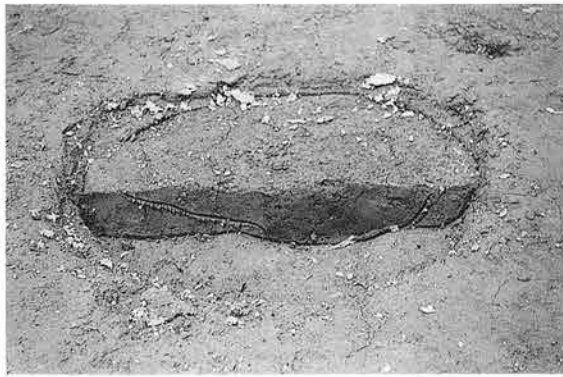
P335 (SB16)



P199 (SB16)



P321 (SB16)

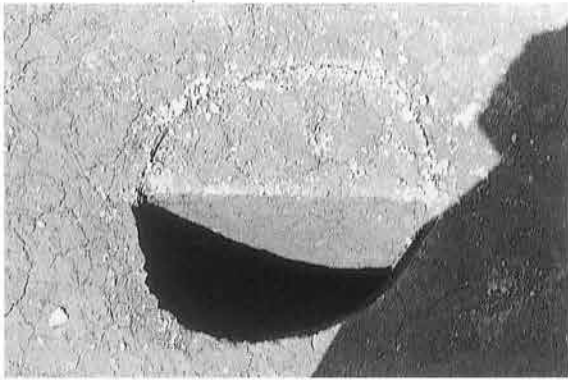


P95 (SB16)



P96 (SB16)

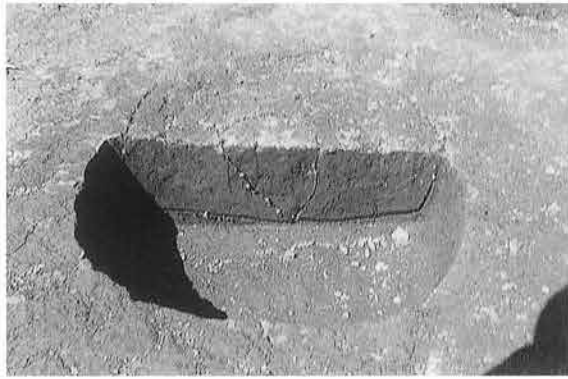
写真図版44 SB16柱穴断面



P50 (SB17)



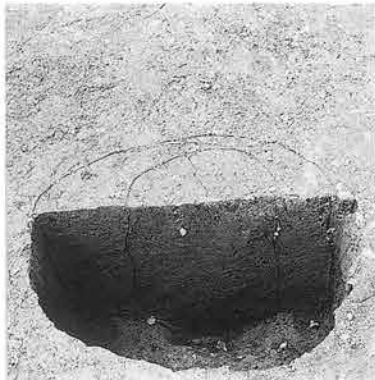
P38 (SB17)



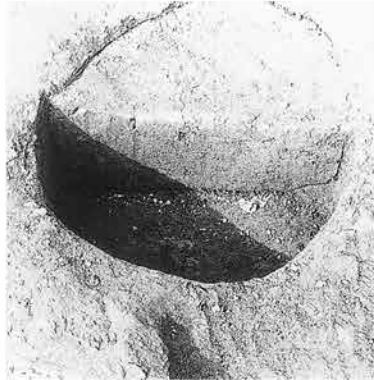
P36 (SB17)



P20 (SB17)



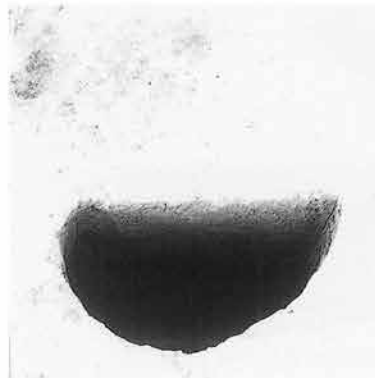
P415 (SB20)



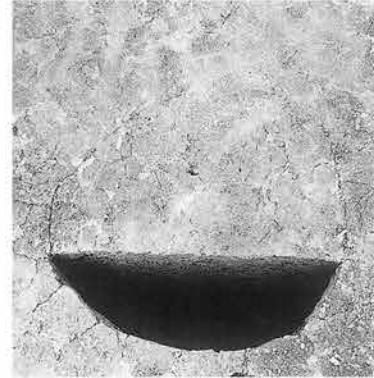
P420 (SB20)



P419 (SB20)



P418 (SB20)



P417 (SB20)



P416 (SB20)

写真図版45 SB17・20柱穴断面



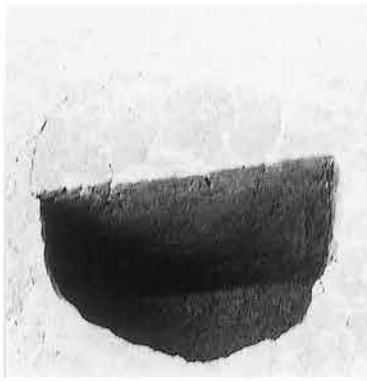
P407 (SB20)



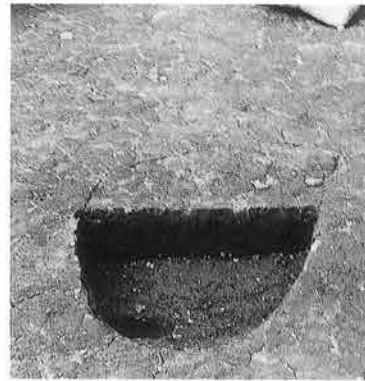
P406 (SB20)



P405 (SB20)



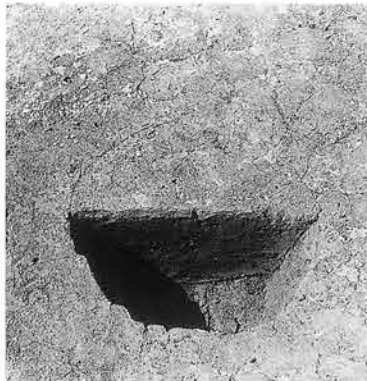
P404 (SB20)



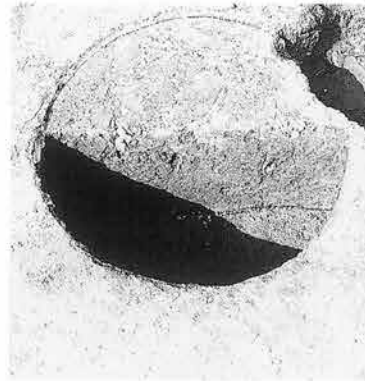
P403 (SB20)



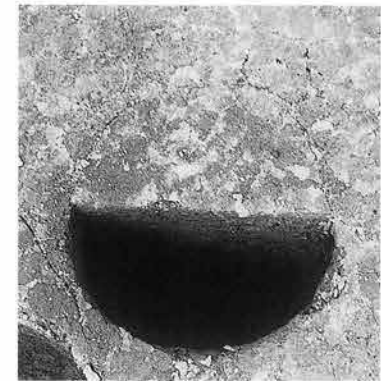
P402 (SB20)



P414 (SB21)



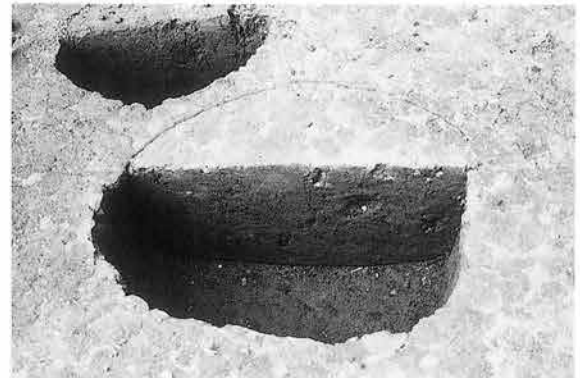
P1021 (SB21)



P399 (SB21)

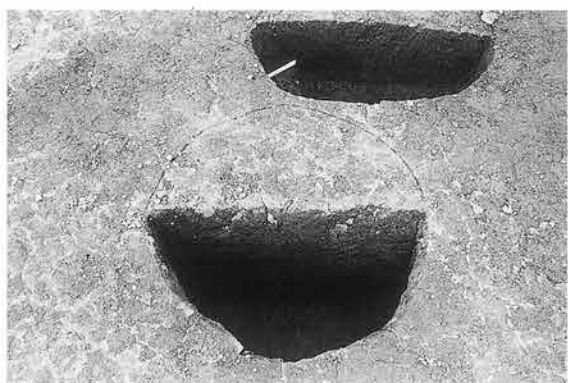


P1020 (SB21)



P11 (SB21)

写真図版46 SB20・21柱穴断面



P412 (SB21)



P410 (SB21)



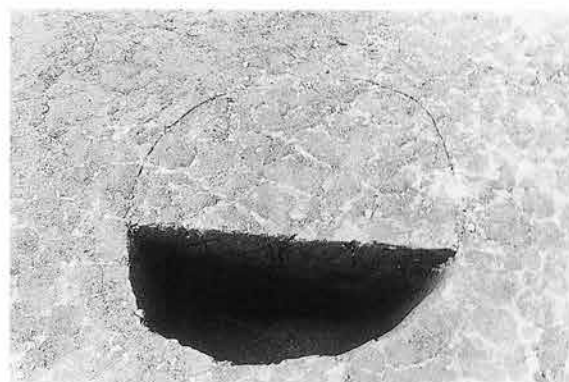
P409 (SB21)



P408 (SB21)



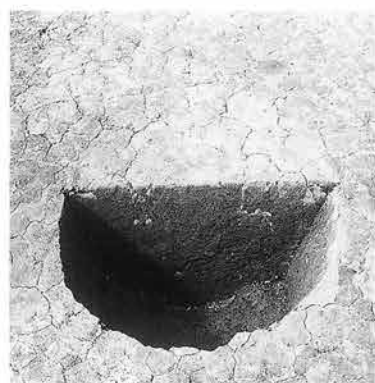
P413 (SB21)



P411 (SB21)



P426 (SB22)

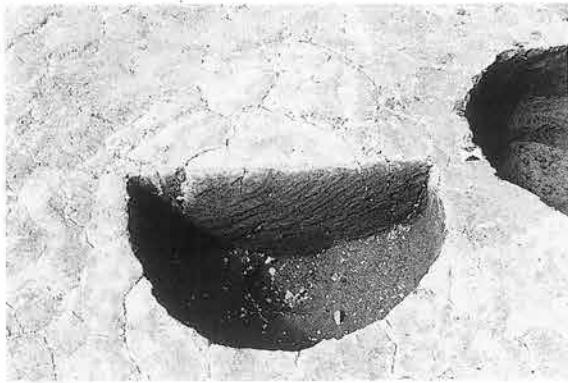


P432 (SB22)

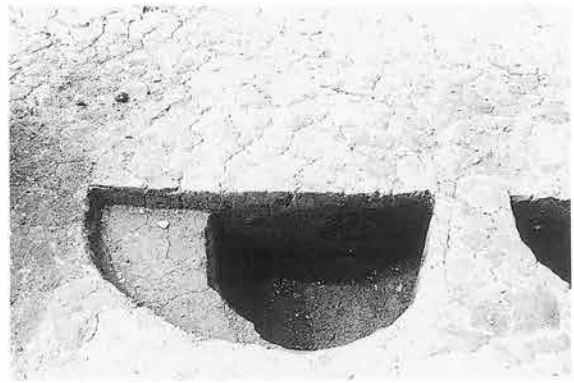


P430 (SB22)

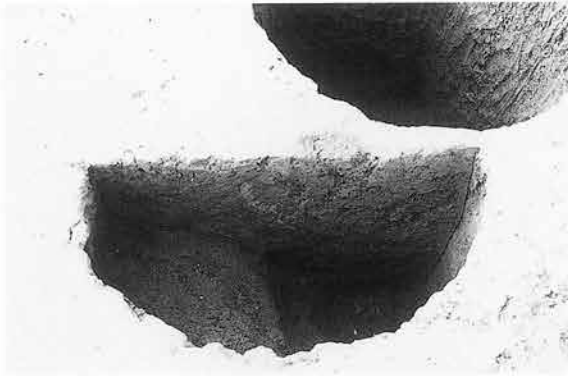
写真図版47 SB21・22柱穴断面



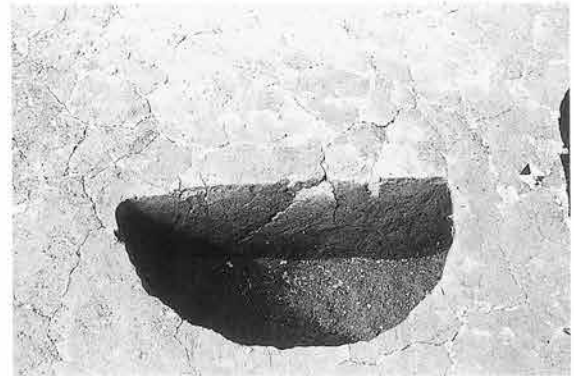
P431 (SB22)



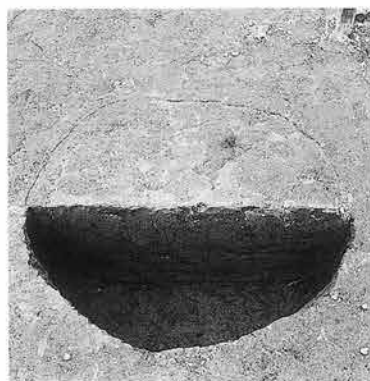
P428 (SB22)



P433 (SB22)



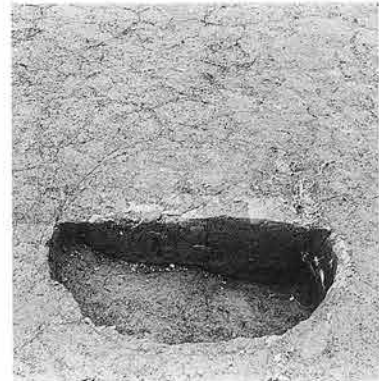
P429 (SB22)



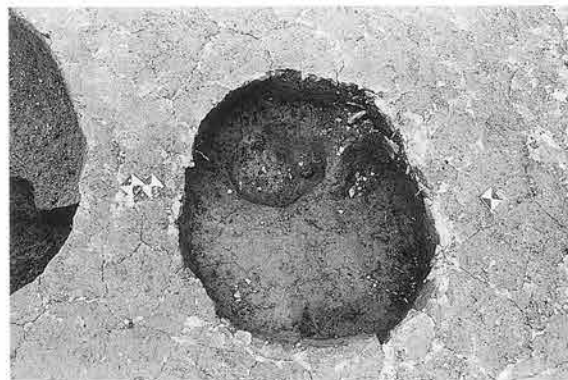
SK42 (SB23)



SK42 (SB23)



SK43 (SB23)

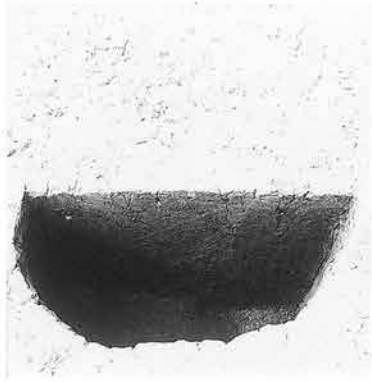


SK43 (SB23)



SK44 (SB23)

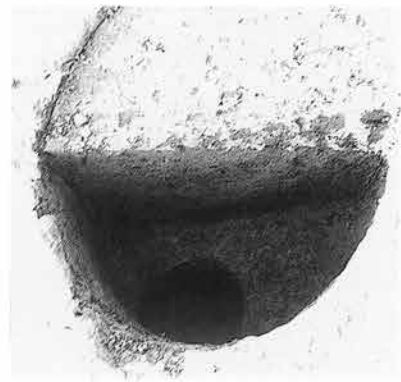
写真図版48 SB22・23柱穴断面



SK44 (SB23)



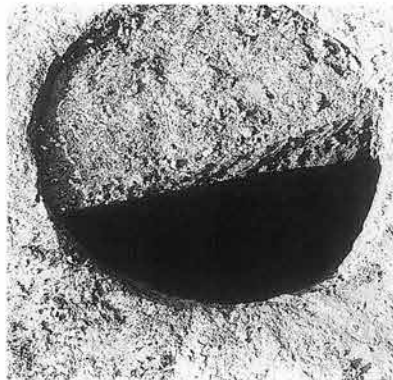
P422 (SB23)



P1005 (SB24)



P1007 (SB24)



P1011 (SB24)



P1014 (SB24)



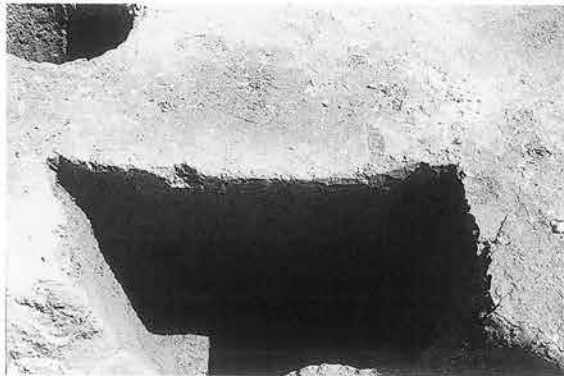
P306 (SB24)



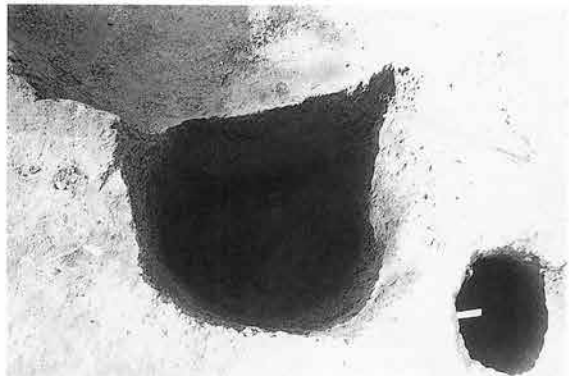
P1031 (SB24)



P1028 (SB24)



SK33 (SB24)



SK33 (SB24)

写真図版49 SB23・24柱穴断面



SE1 検出



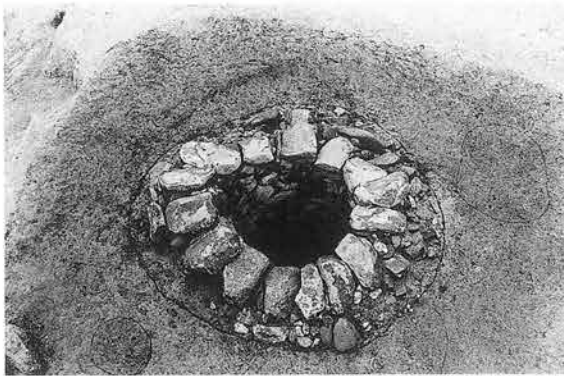
SE1 検出



SE1 検出



SE1 石組



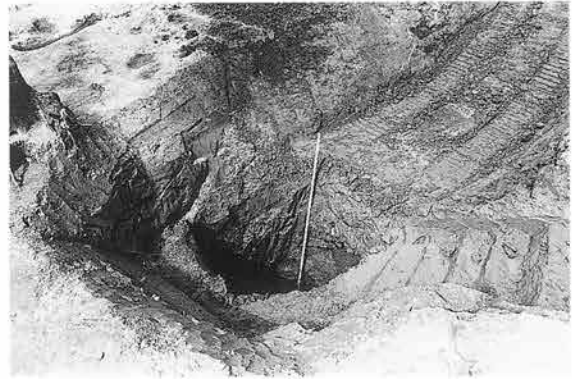
SE1 掘方



SE1 掘方



SE1 石組 (内部)



SE1 完掘

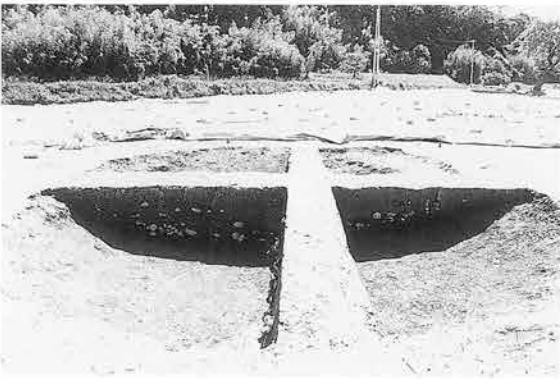
写真図版50 SE1



SK1 完掘



SK1 完掘



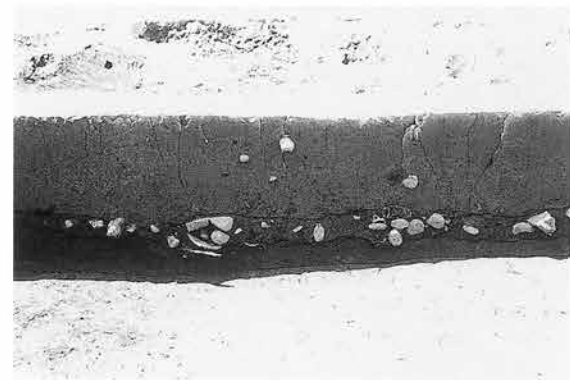
SK1 (A-B) 断面



SK1 (C-D) 断面



SK1 (A-B) 断面



SK1 (C-D) 断面



SK1 遺物出土状況

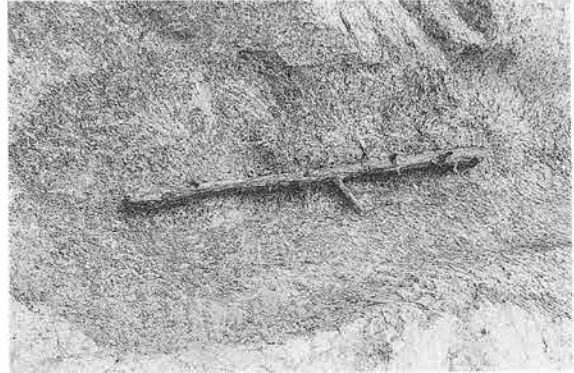


SK1 遺物出土状況

写真図版51 SK1



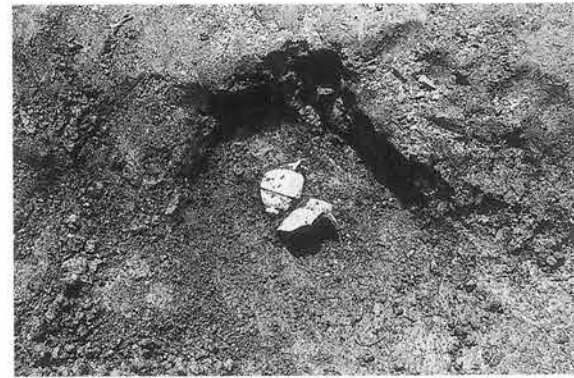
SK2 完掘



SK2 完掘



SK2 断面



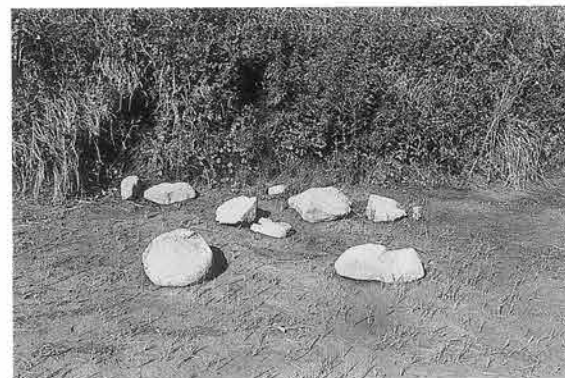
SK2 遺物出土状況



SK2 遺物出土状況



SK2 貝殻出土状況



SK2から出土した石



SK2から出土した石

写真図版52 SK2



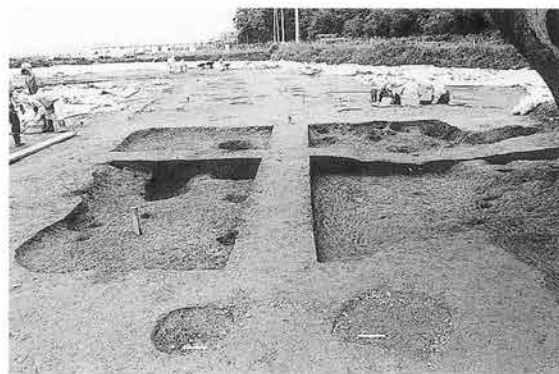
SK3 断面



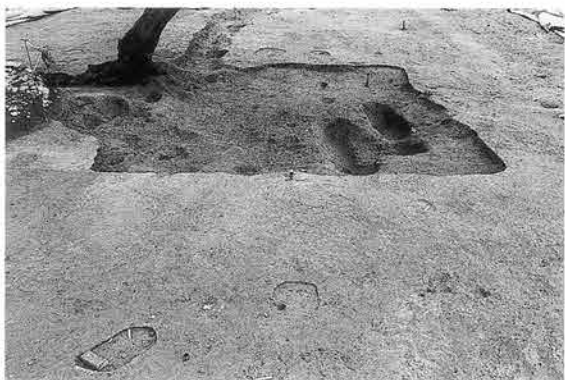
SK3 完掘



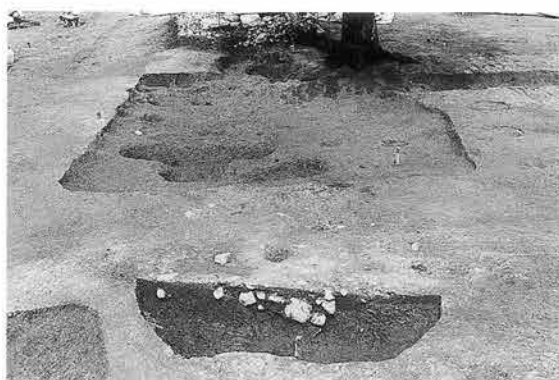
SK4 (C-D) 断面



SK4 (A-B) 断面



SK4 完掘



SK4 完掘



SK5 検出状況



SK5 断面

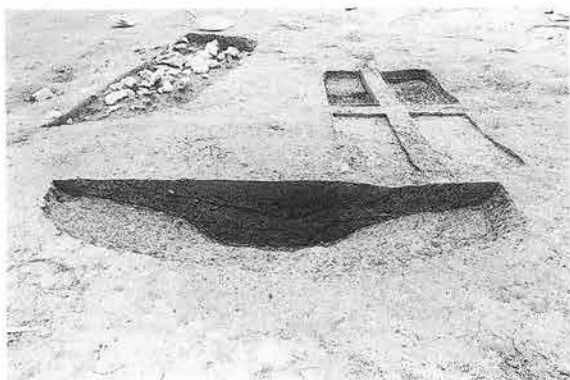
写真図版53 SK3・4・5



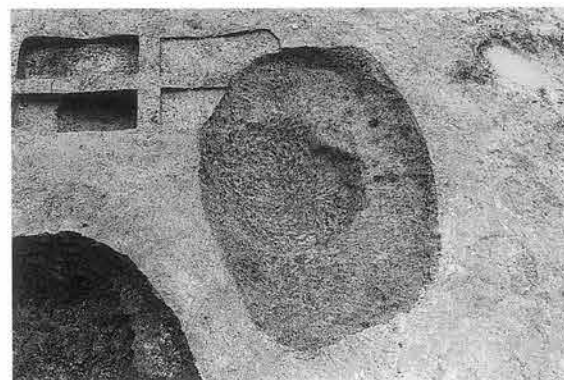
SK5 断面



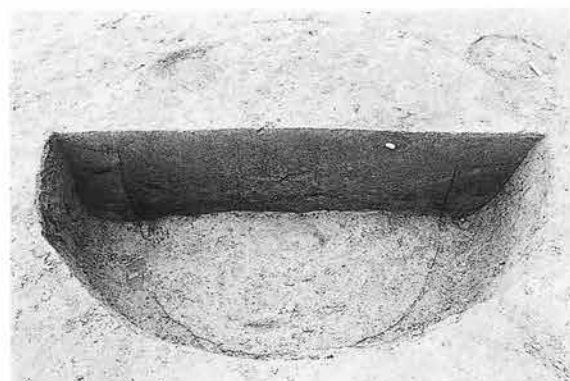
SK5 完掘



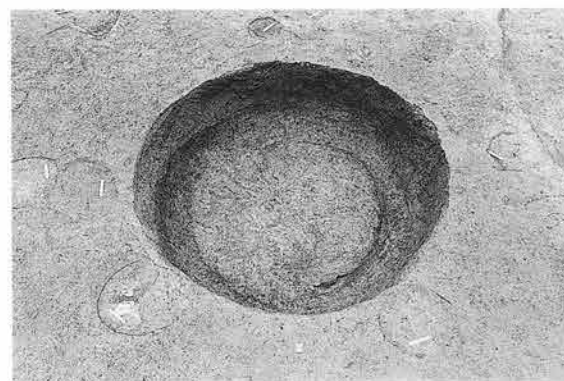
SK6 断面



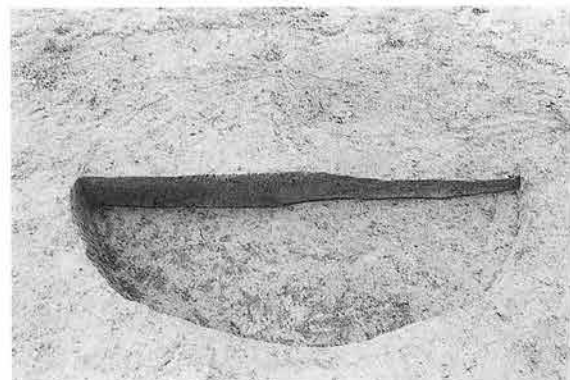
SK6 完掘



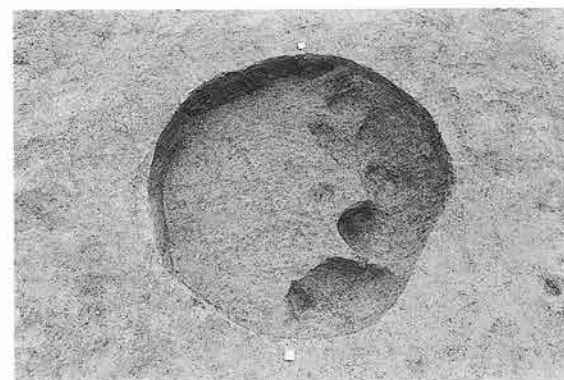
SK7 断面



SK7 完掘

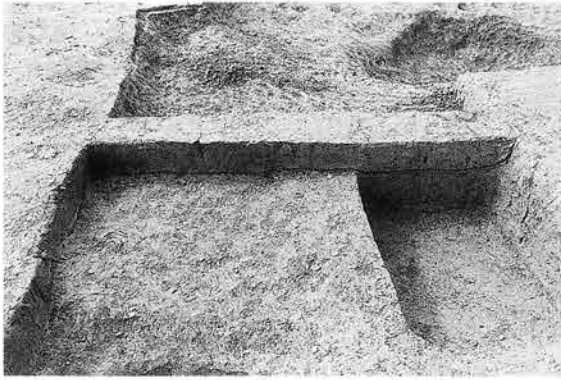


SK8 断面

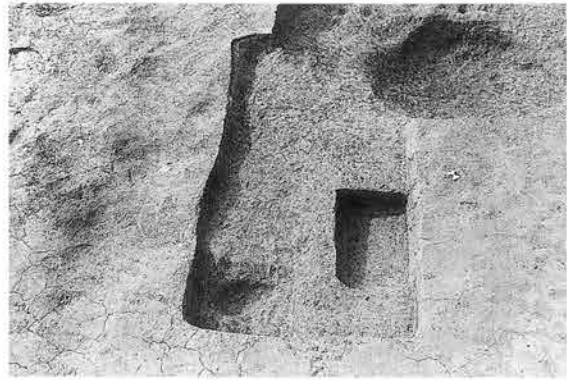


SK8 完掘

写真図版54 SK5・6・7・8



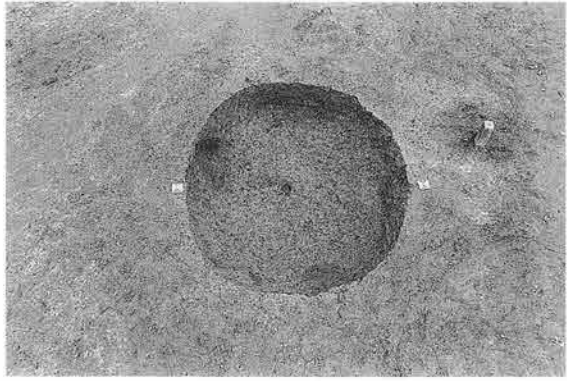
SK9 断面



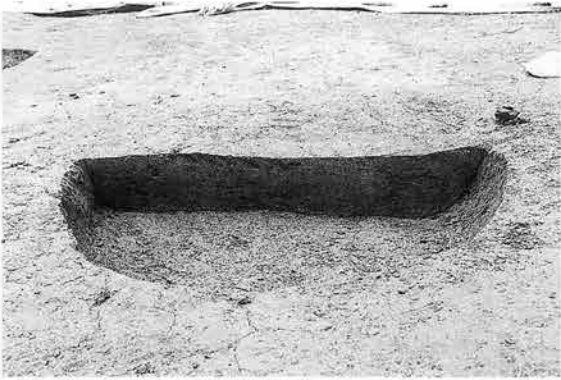
SK9 完掘



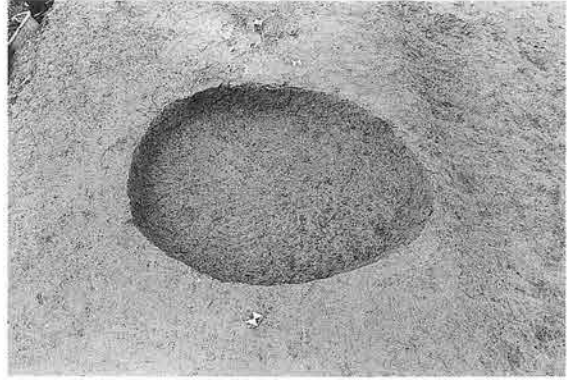
SK10 断面



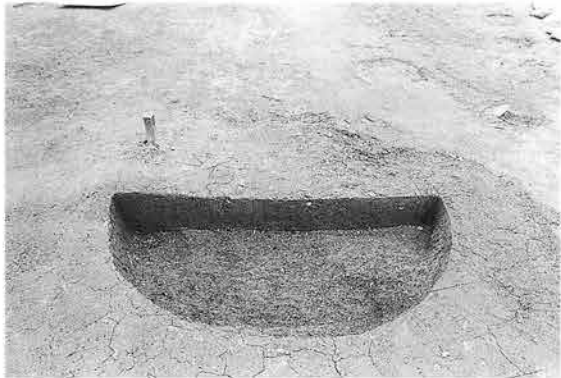
SK10 完掘



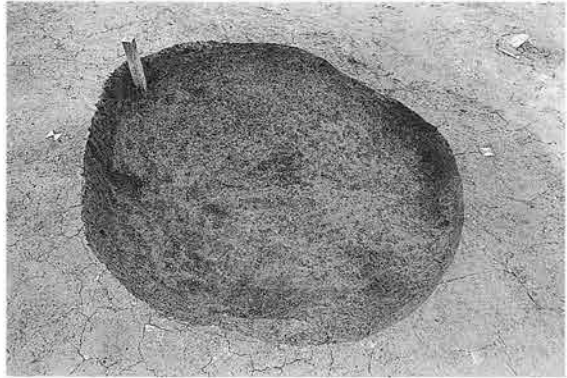
SK11 断面



SK11 完掘

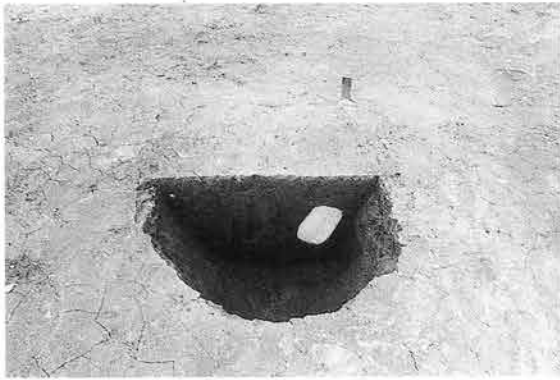


SK12 断面

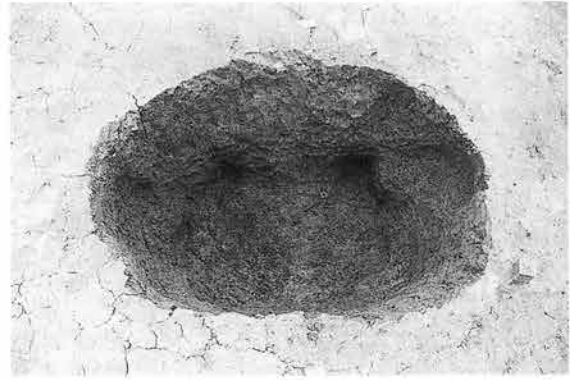


SK12 完掘

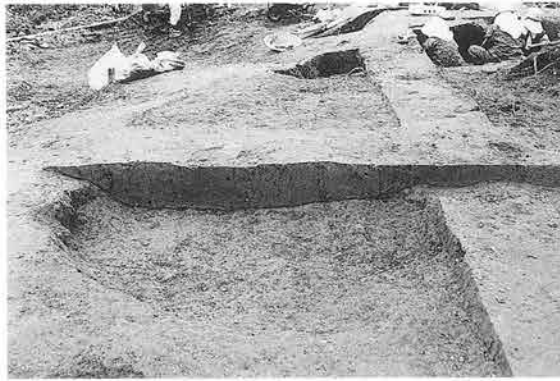
写真図版55 SK9・10・11・12



SK13 断面



SK13 完掘



SK14 断面



SK14 完掘



SK15 (C-D) 断面



SK15 (E-F) 断面



SK15 (A-B) 断面

写真図版56 SK13・14・15



SK15 (A-B) 断面



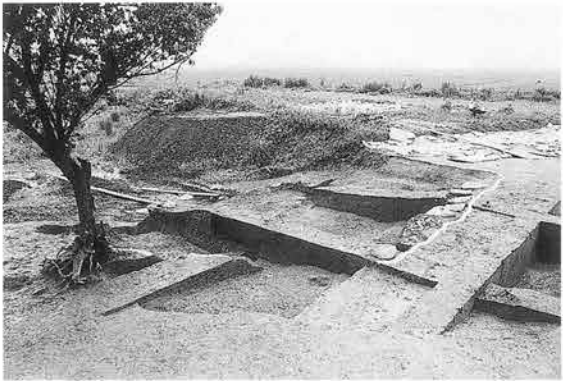
SK15 (A-B) 断面



SK15 (A-B) 断面



SK15 新段階



SK15 (E-F) 断面



SK15 石組



SK15 石組



SK15 石組

写真図版57 SK15



SK15 石組



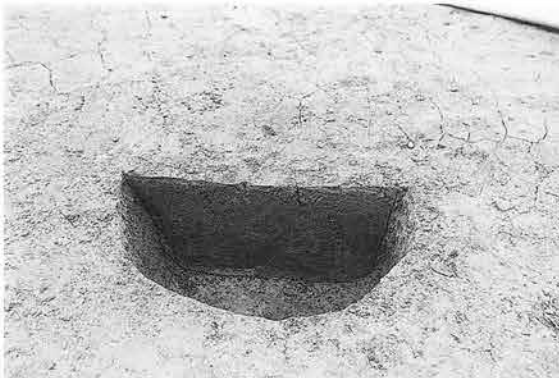
SK15 (C-D) 断面



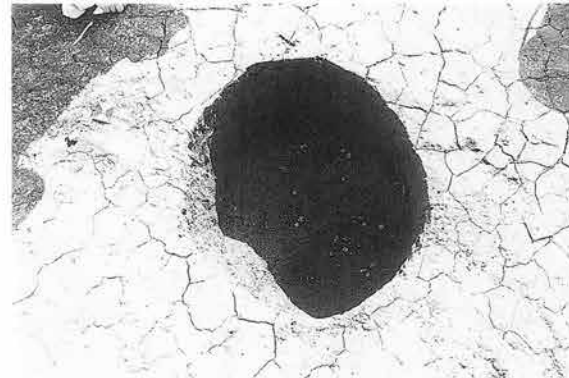
SK15 旧段階



SK15 旧段階



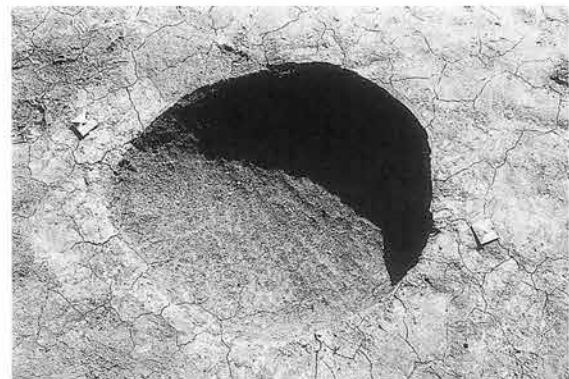
SK16 断面



SK16 完掘



SK17 断面



SK17 完掘

写真図版58 SK15・16・17



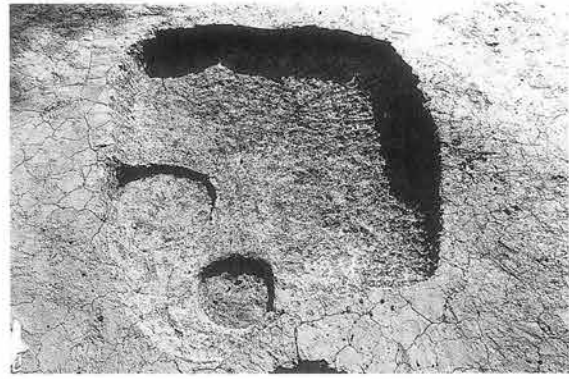
SK18 断面



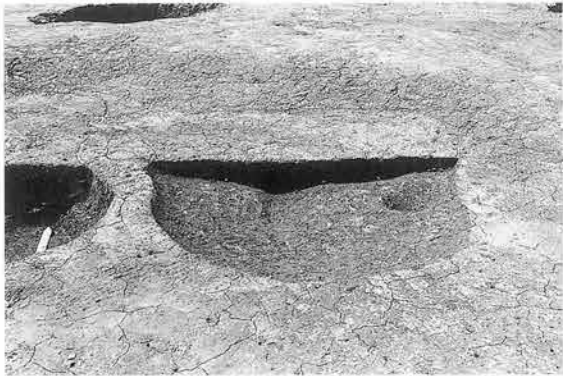
SK18 完掘



SK19 断面



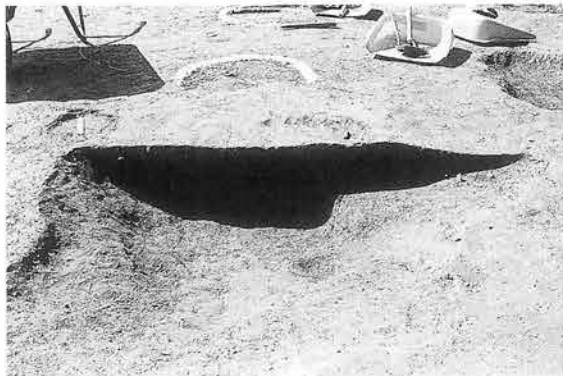
SK19 完掘



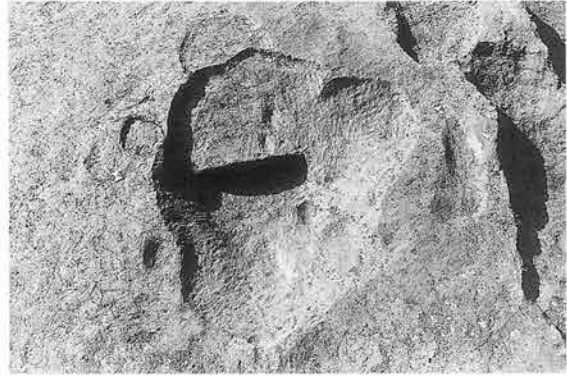
SK20 断面



SK20 完掘

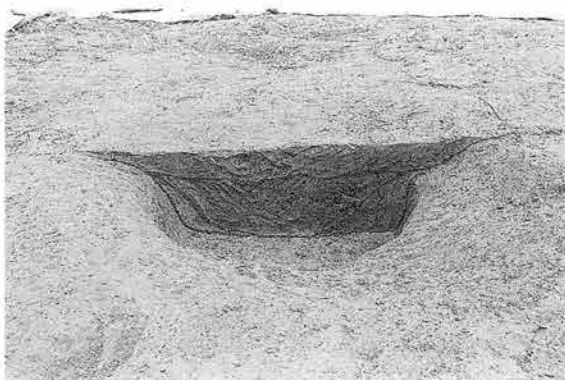


SK21 断面



SK21 完掘

写真图版59 SK18·19·20·21



SK22 断面



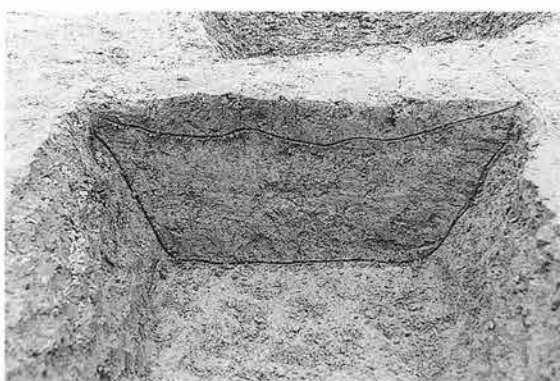
SK22 完掘



SK23 断面



SK23 完掘



SK24 断面



SK24 完掘

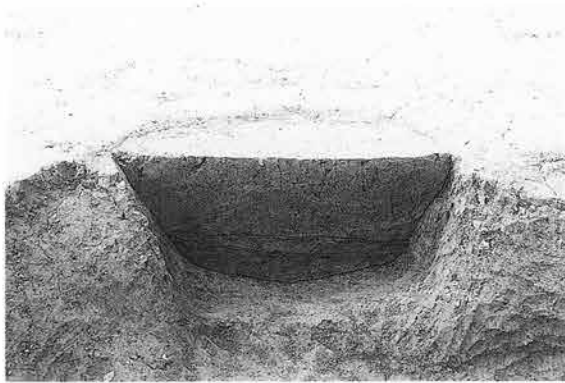


SK25 断面

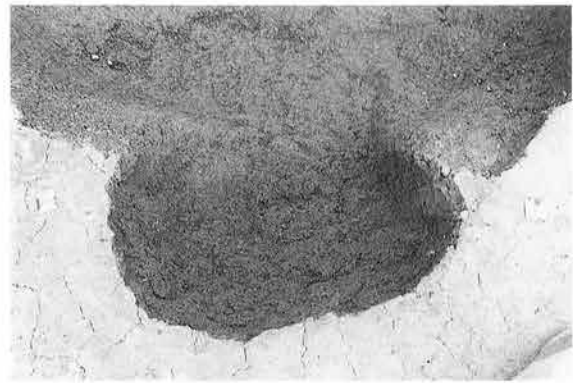


SK25 完掘

写真図版60 SK22・23・24・25



SK26 断面



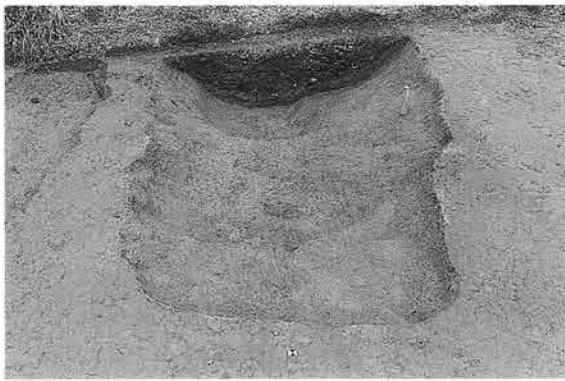
SK26 完掘



SK27 (A-B) 断面



SK27 (C-D) 断面



SK27 完掘



SK28 断面



SK28 完掘



SK29 断面

写真図版61 SK26・27・28・29



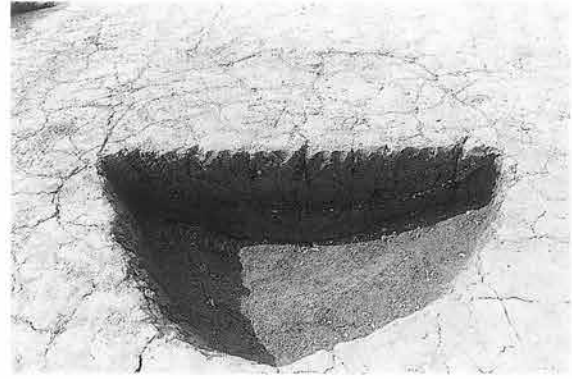
SK29 完掘



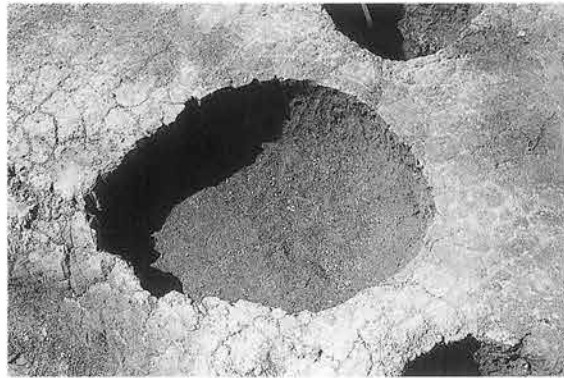
SK31 断面



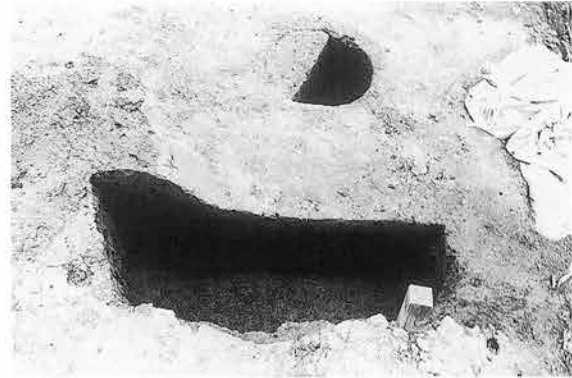
SK31 完掘



SK32 断面



SK32 完掘



SK35 断面



SK35 完掘

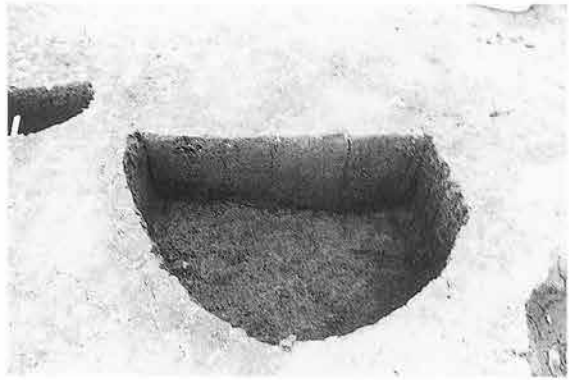


SK37 断面

写真図版62 SK29・31・32・35・37



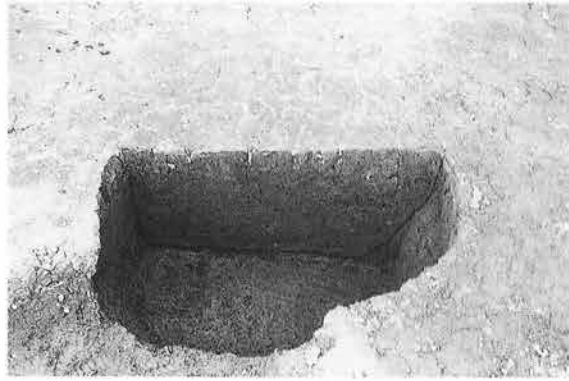
SK37 完掘



SK38 断面



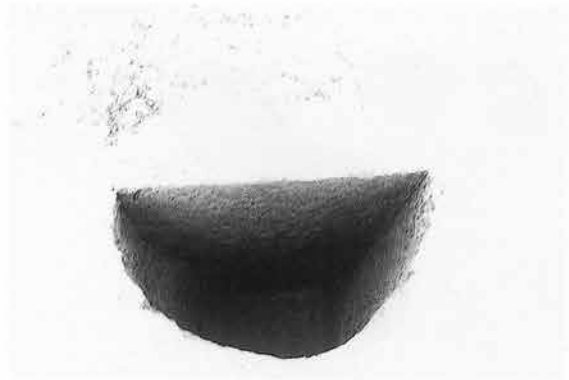
SK38 完掘



SK39 断面



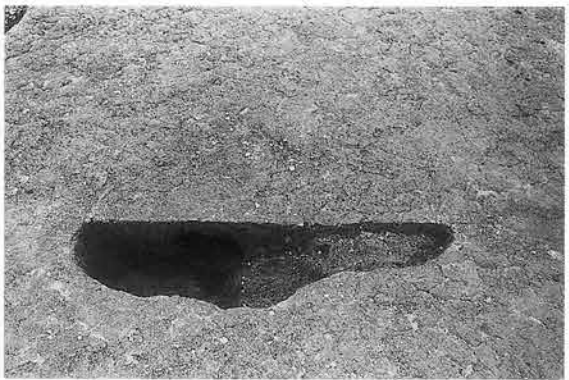
SK39 完掘



SK40 断面

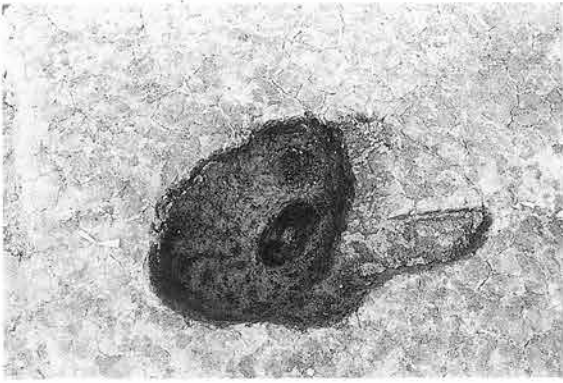


SK40 完掘

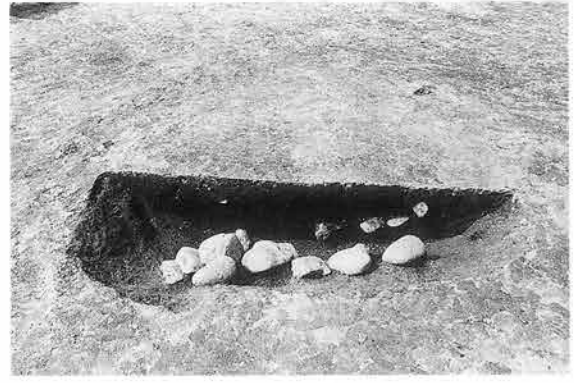


SK41 断面

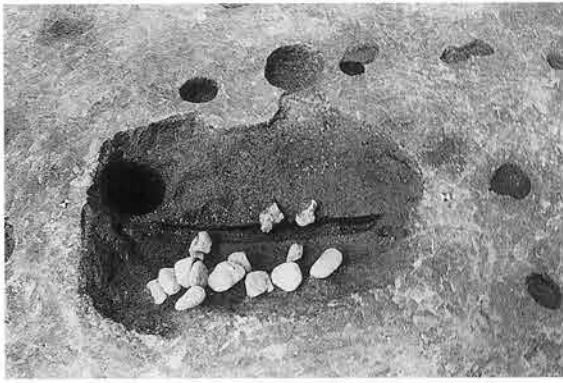
写真図版63 SK37・38・39・40・41



SK41 完掘



SK45 断面



SK45 完掘



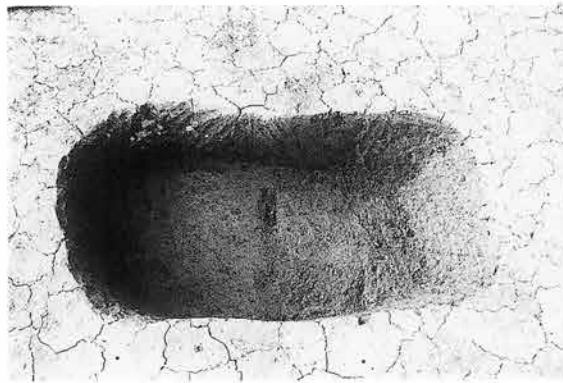
SK46 断面



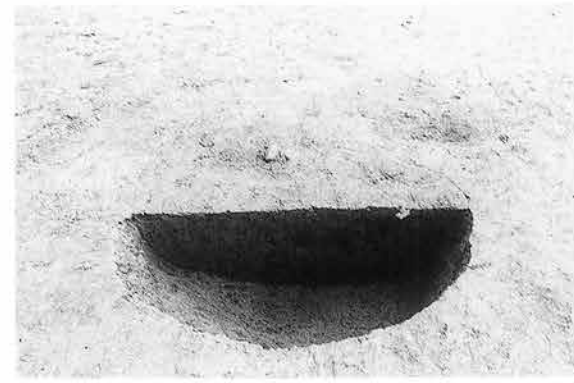
SK46 完掘



SK47 断面

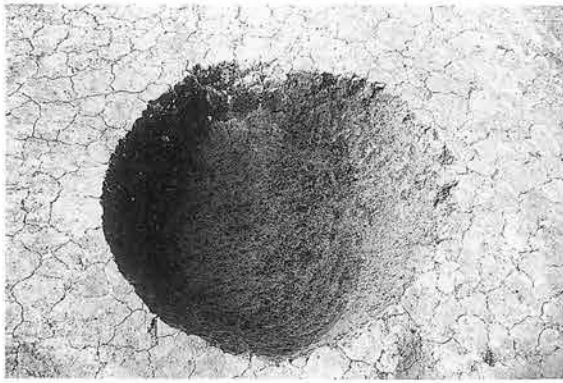


SK47 完掘



SK48 断面

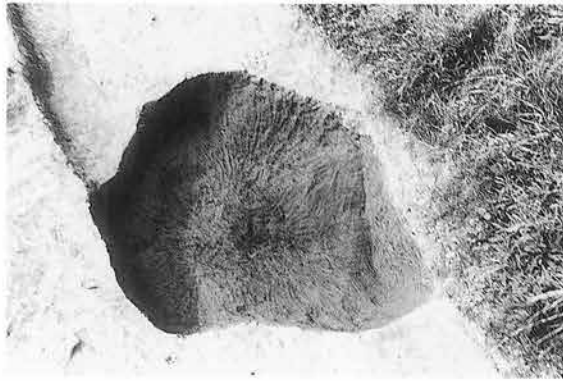
写真図版64 SK41・45・46・47・48



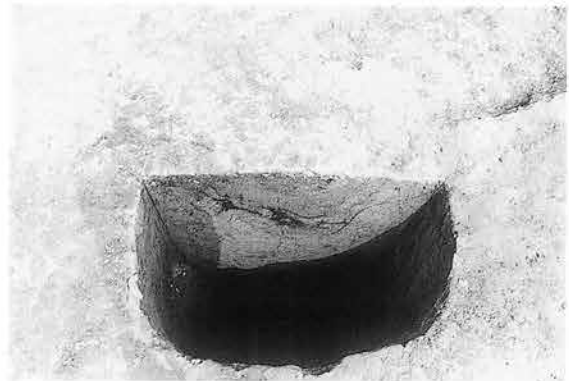
SK48 完掘



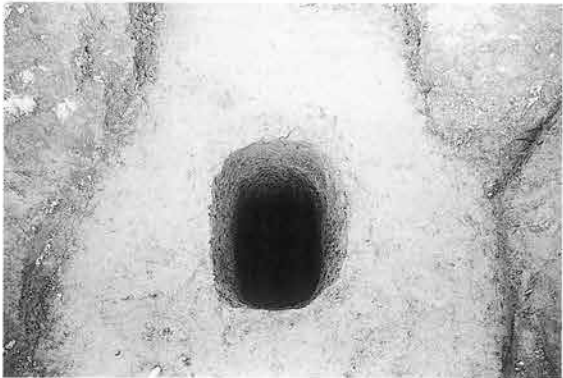
SK49 断面



SK49 完掘



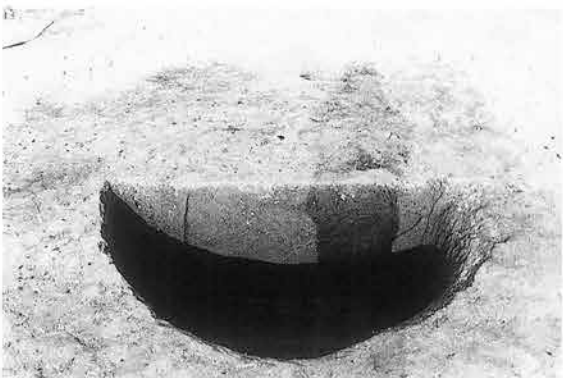
SK50 断面



SK50 完掘



SK50 完掘

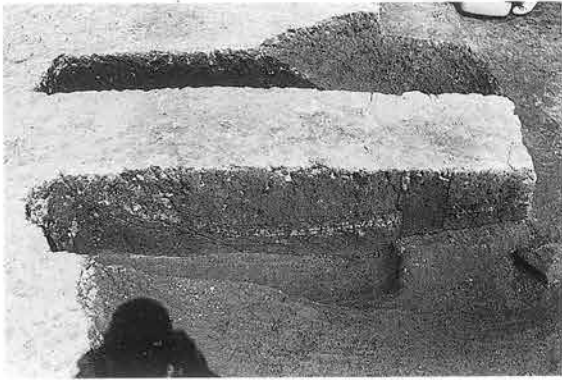


SK51 断面

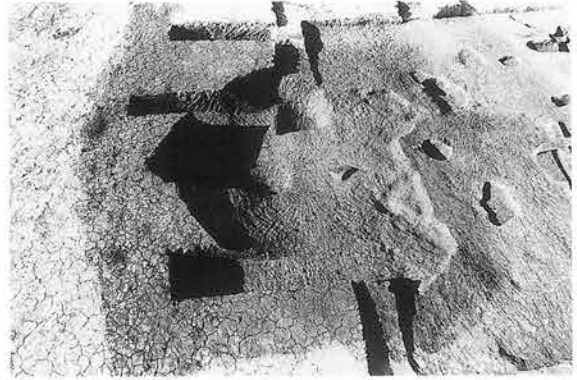


SK51 完掘

写真図版65 SK48・49・50・51



SK52 断面



SK52 完掘



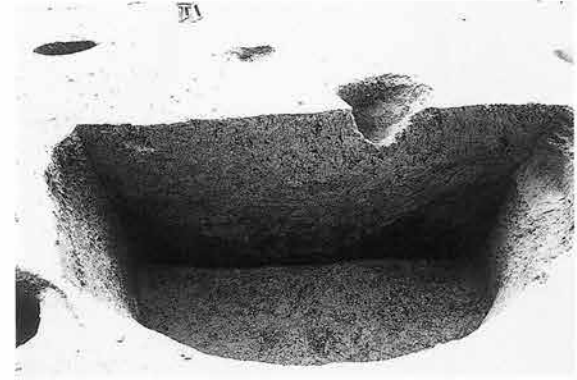
SK53 断面



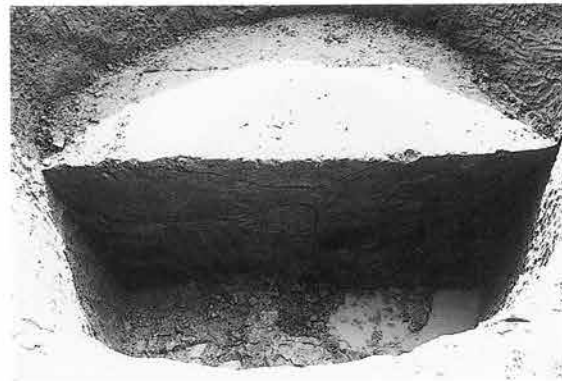
SK53 断面



SK53 完掘



SK54 断面

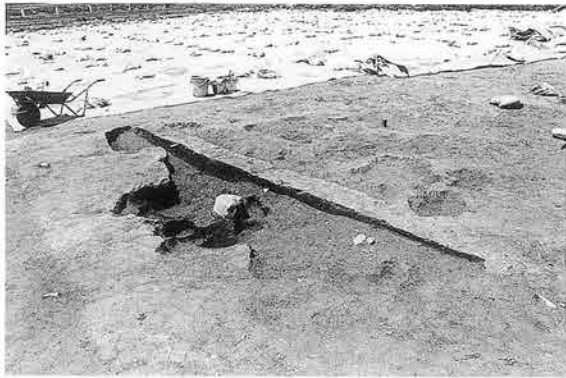


SK54 断面



SK54 完掘

写真図版66 SK52・53・54



1号倒木痕 断面



1号倒木痕 遺物出土状況



1号倒木痕 遺物出土状況



1号倒木痕 完掘



2号倒木痕 断面



2号倒木痕 完掘

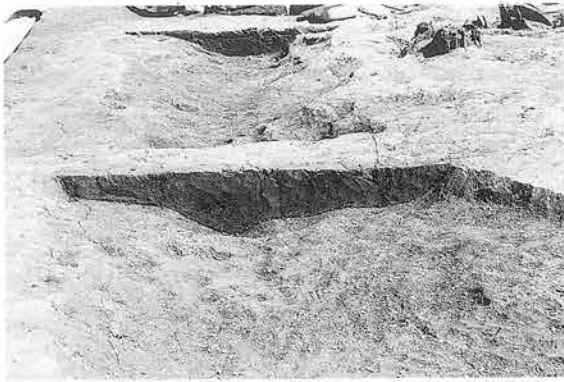


3号倒木痕



4号倒木痕

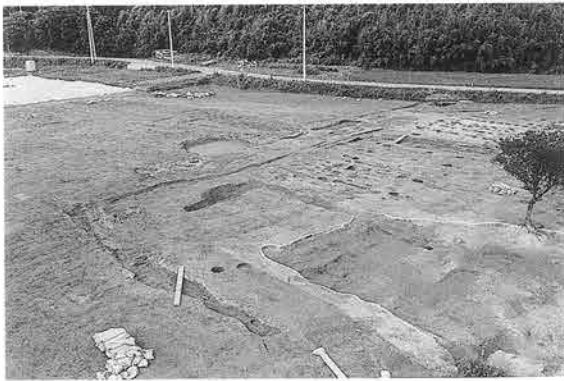
写真図版67 1号~4号倒木痕



SD1 (A-B) 断面



SD1 (C-D) 断面



SD1 完掘



SD1 完掘



SD1 完掘



SD1 完掘

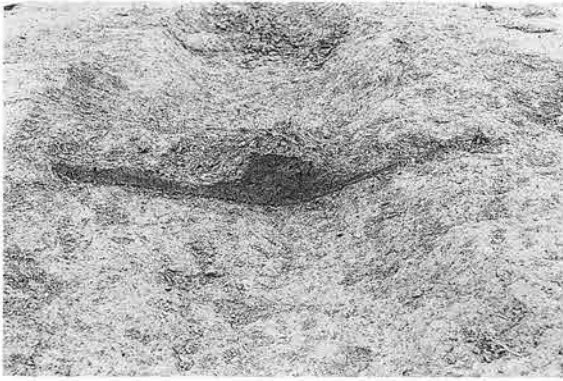


SD2 断面

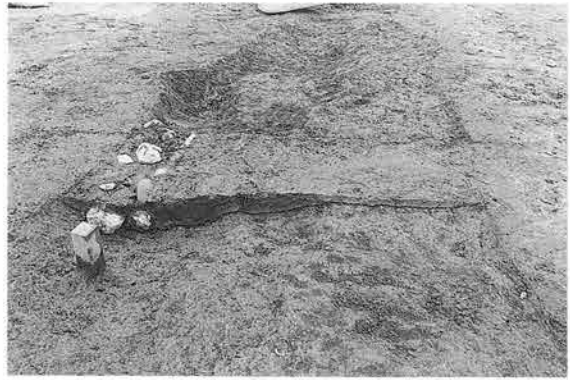


SD1・SD2 完掘

写真図版68 SD1・2



SD3 (A-B) 断面



SD3 (C-D) 断面



SD3 完掘



SD3 完掘



SD4 (A-B) 断面



SD4 (C-D) 断面

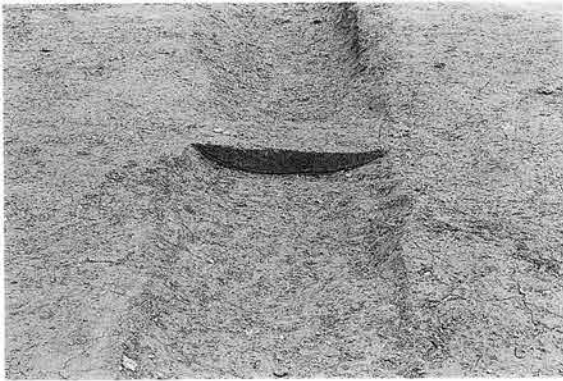


SD4 完掘

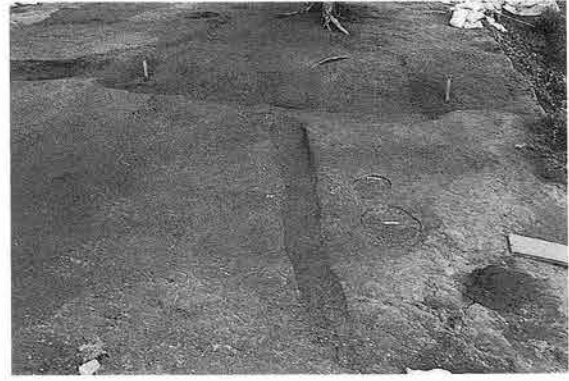


SD4 完掘

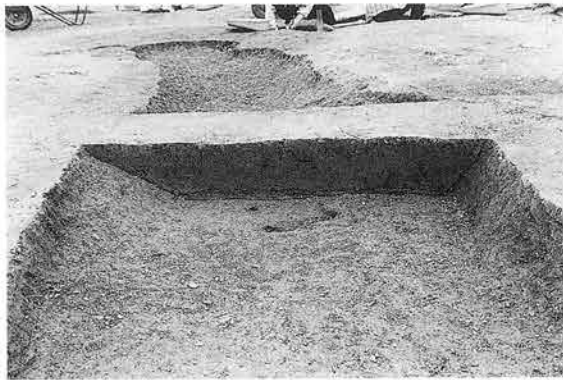
写真図版69 SD3・4



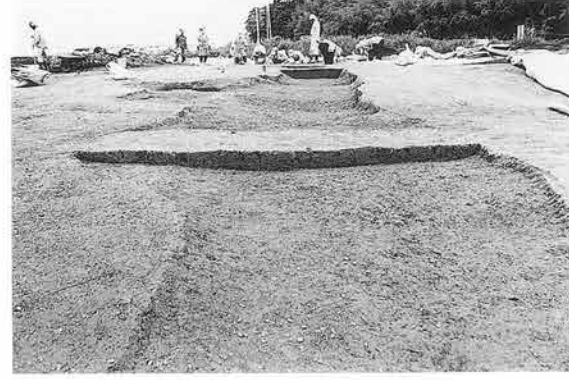
SD5 断面



SD5 完掘



SD6 (A-B) 断面



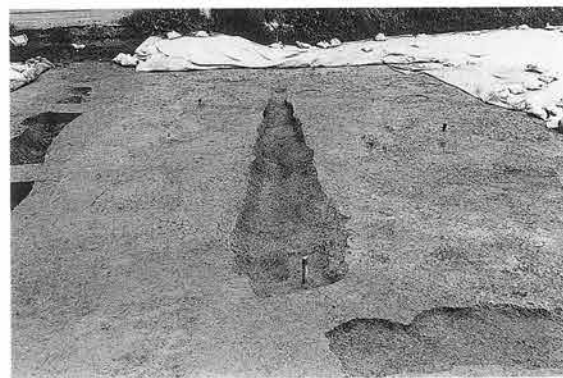
SD6 (C-D) 断面



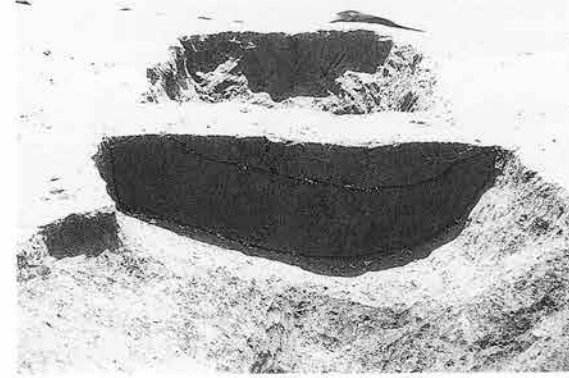
SD6 完掘



SD7 断面



SD7 完掘



SD8 (A-B) 断面

写真図版70 SD5・6・7・8



SD8 (C-D) 断面



SD8 (E-F) 断面



SD8 完掘



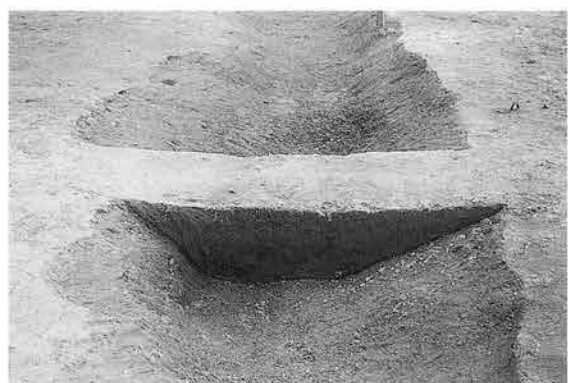
SD8 完掘



SD9 断面



SD9 完掘



SD10 (A-B) 断面



SD10 (C-D) 断面

写真図版71 SD8・9・10



SD10 完掘



SD10 完掘



SD11 (A-B) 断面



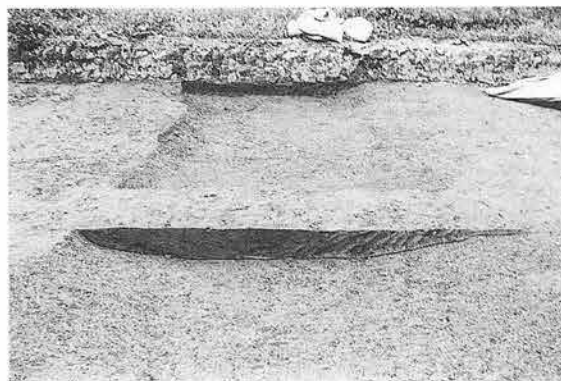
SD11 (C-D) 断面



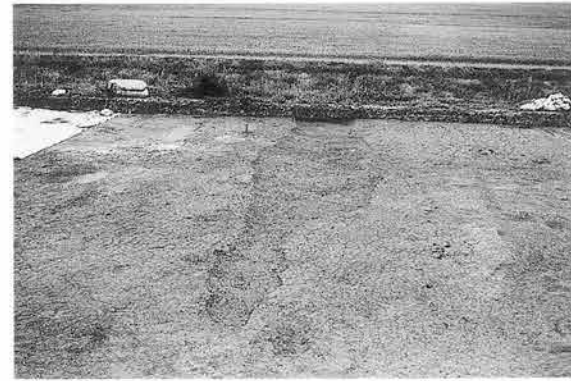
SD11 完掘



SD11 完掘

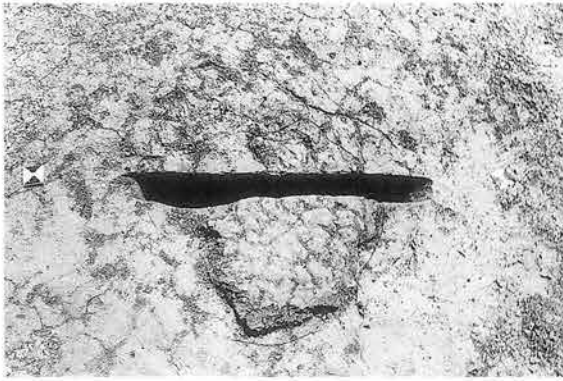


SD12 断面



SD12 完掘

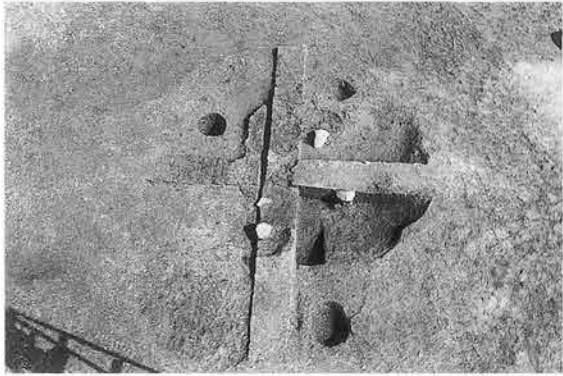
写真図版72 SD10・11・12



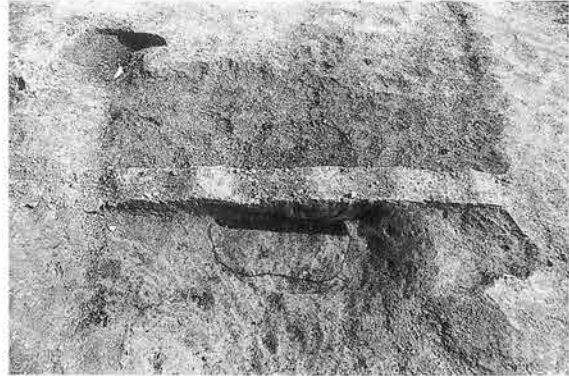
1号焼土



2号焼土 断面



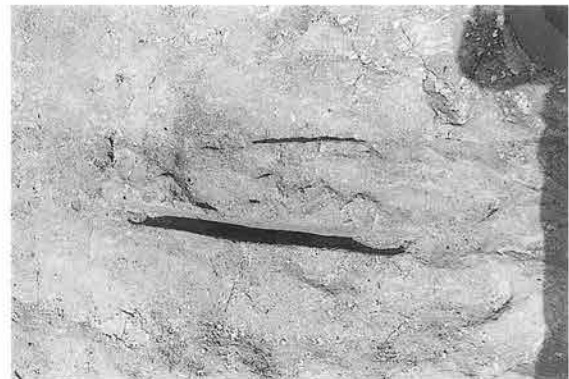
2号焼土 完掘



3号焼土 断面



3号焼土 完掘



4号焼土 完掘



4号焼土 断面



4号焼土 遺物出土状況

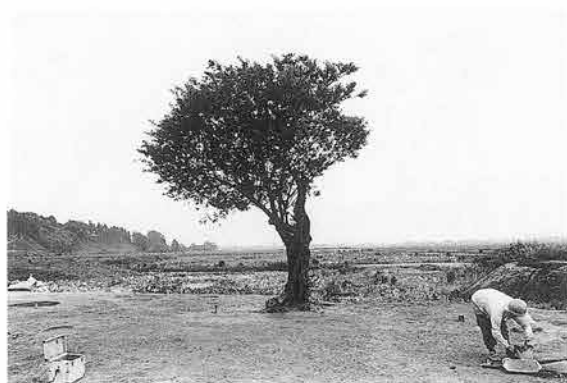
写真図版73 1号~4号焼土



梅の木と柿の木



梅の木



梅の木



梅の木



柿の木①



柿の木②



柿の木②



柿の木①・②

写真図版74 下構屋敷の梅の木・柿の木



出水時の状況（7月11日午前10時頃）



出水時の状況（7月11日午前10時頃）



高館橋から（7月11日午後）



県道相川・平泉線（7月11日午後）



冠水したプレハブ（7月12日午前）



冠水した調査区（7月12日午前）



退水後の状況（7月12日午後）



退水後の状況（7月12日午後）

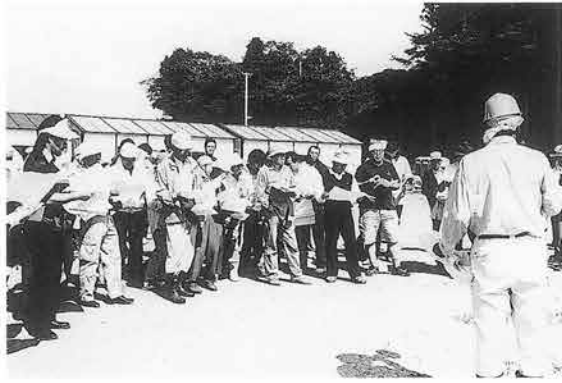
写真図版75 台風6号の被害



現地説明会（9月21日）



現地説明会（9月21日）



現地説明会（9月21日）



現地説明会（9月21日）



調査風景



調査区北東側

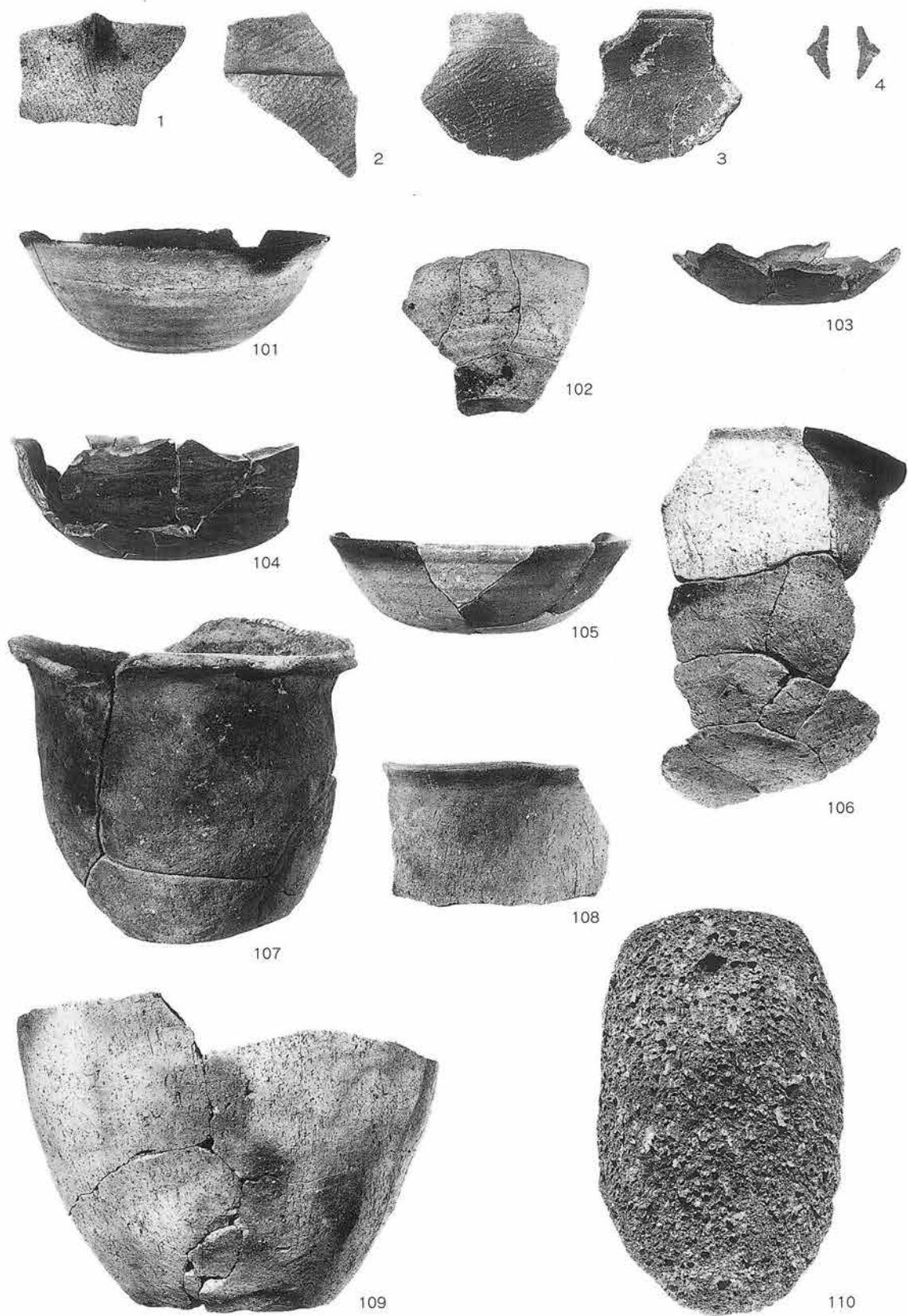


調査区南側

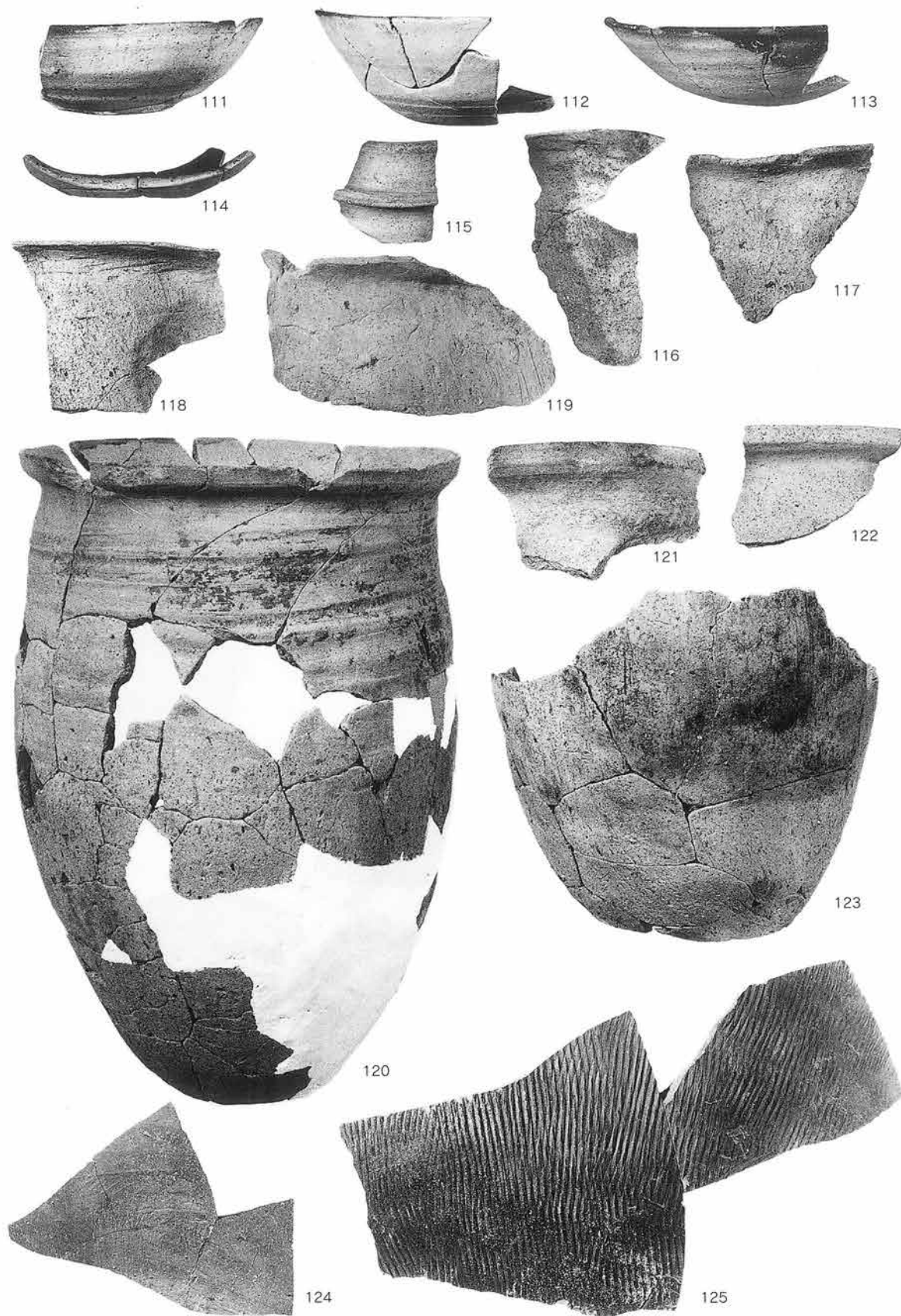


調査区北側

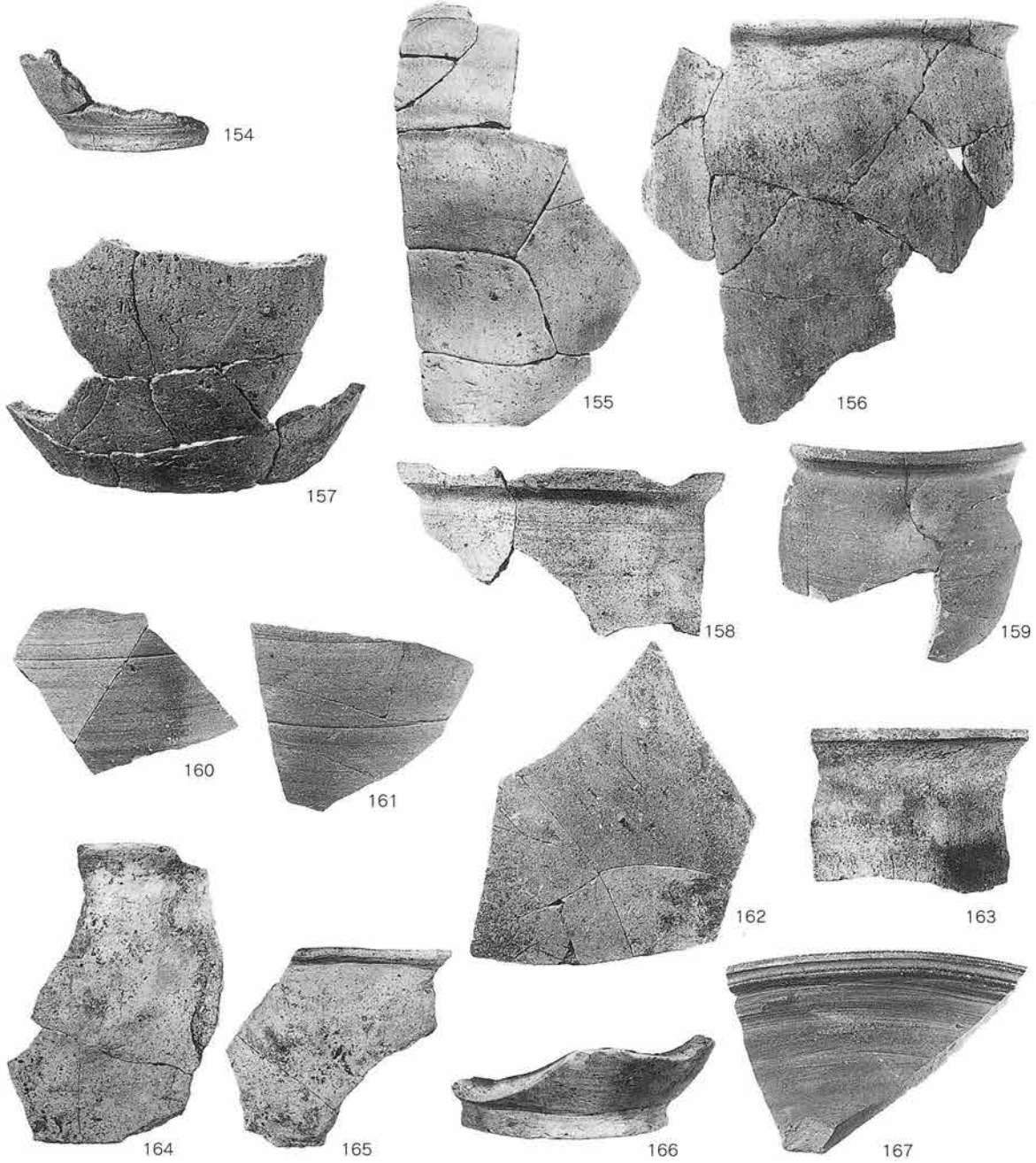
写真図版76 現地説明会・調査風景など



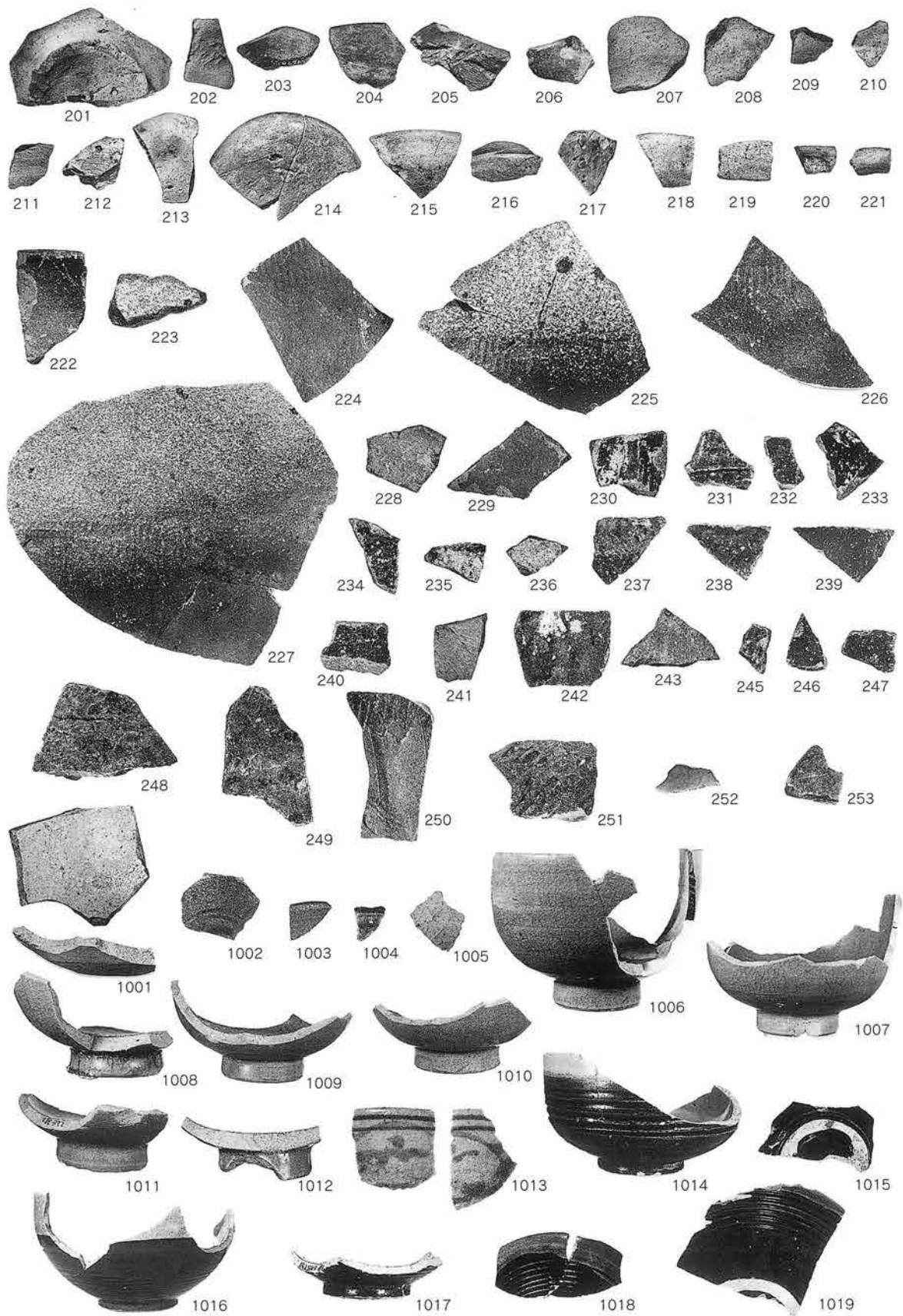
写真図版77 縄文時代の遺物・古代の遺物①



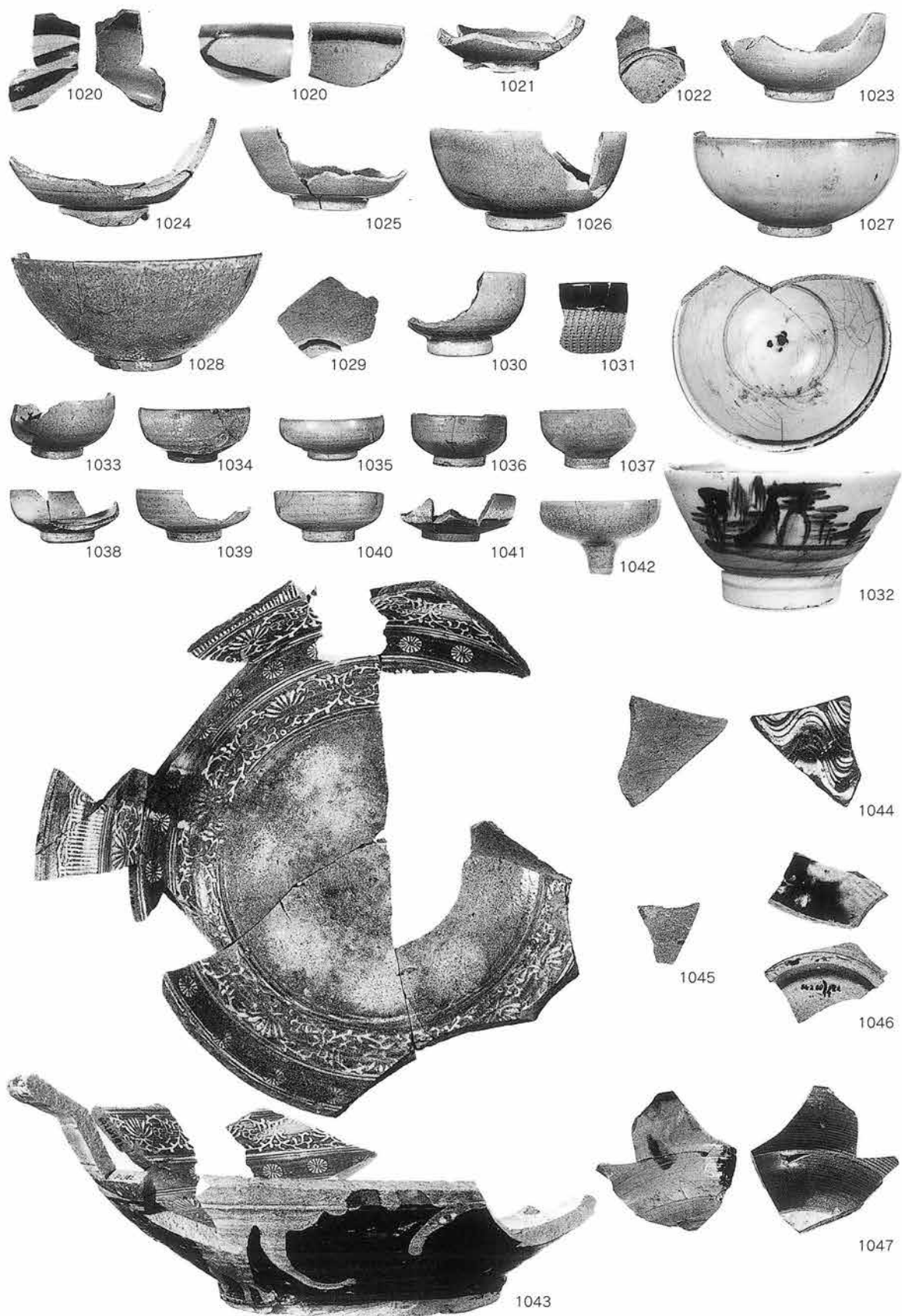
写真図版78 古代の遺物②



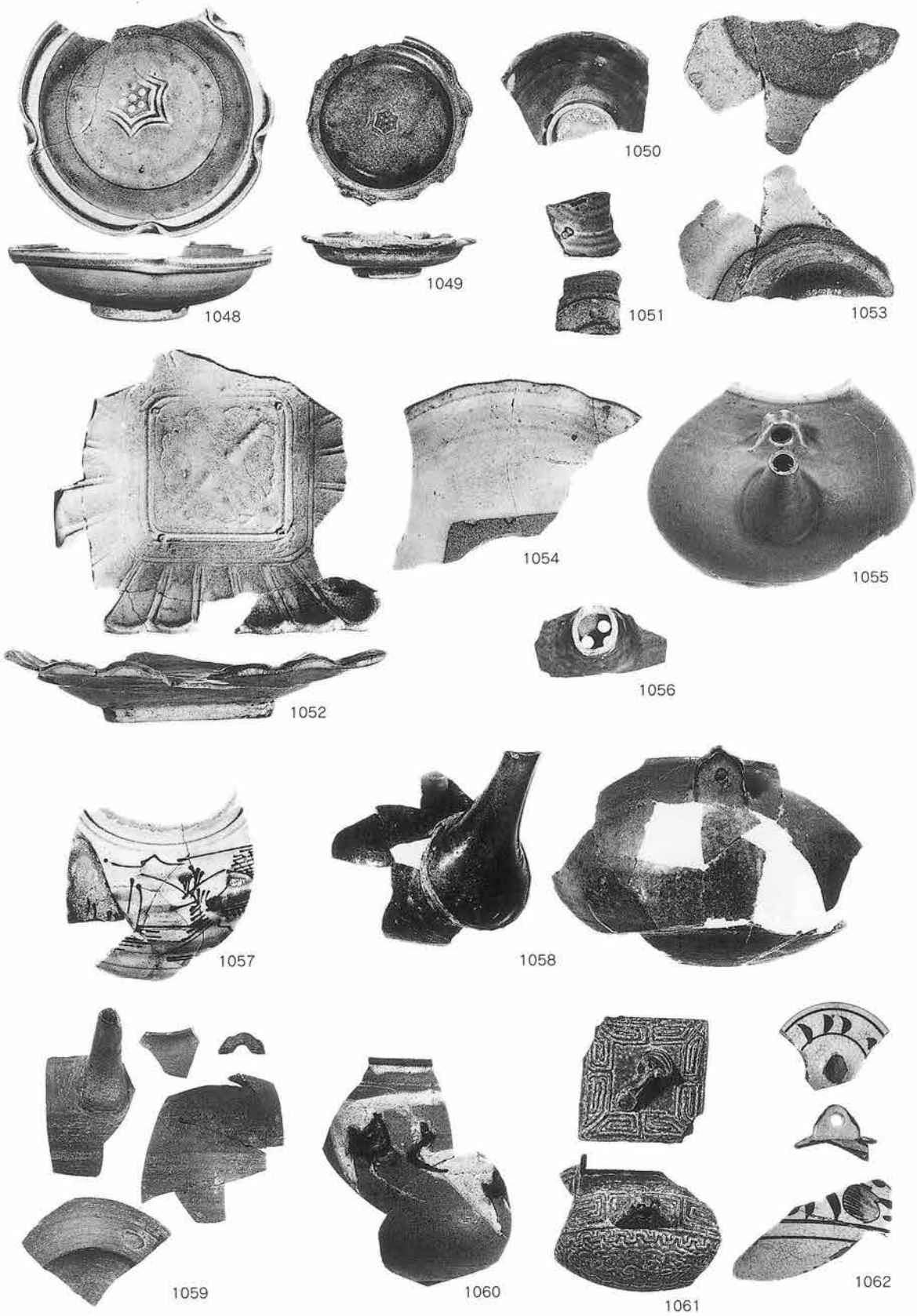
写真図版79 古代の遺物③



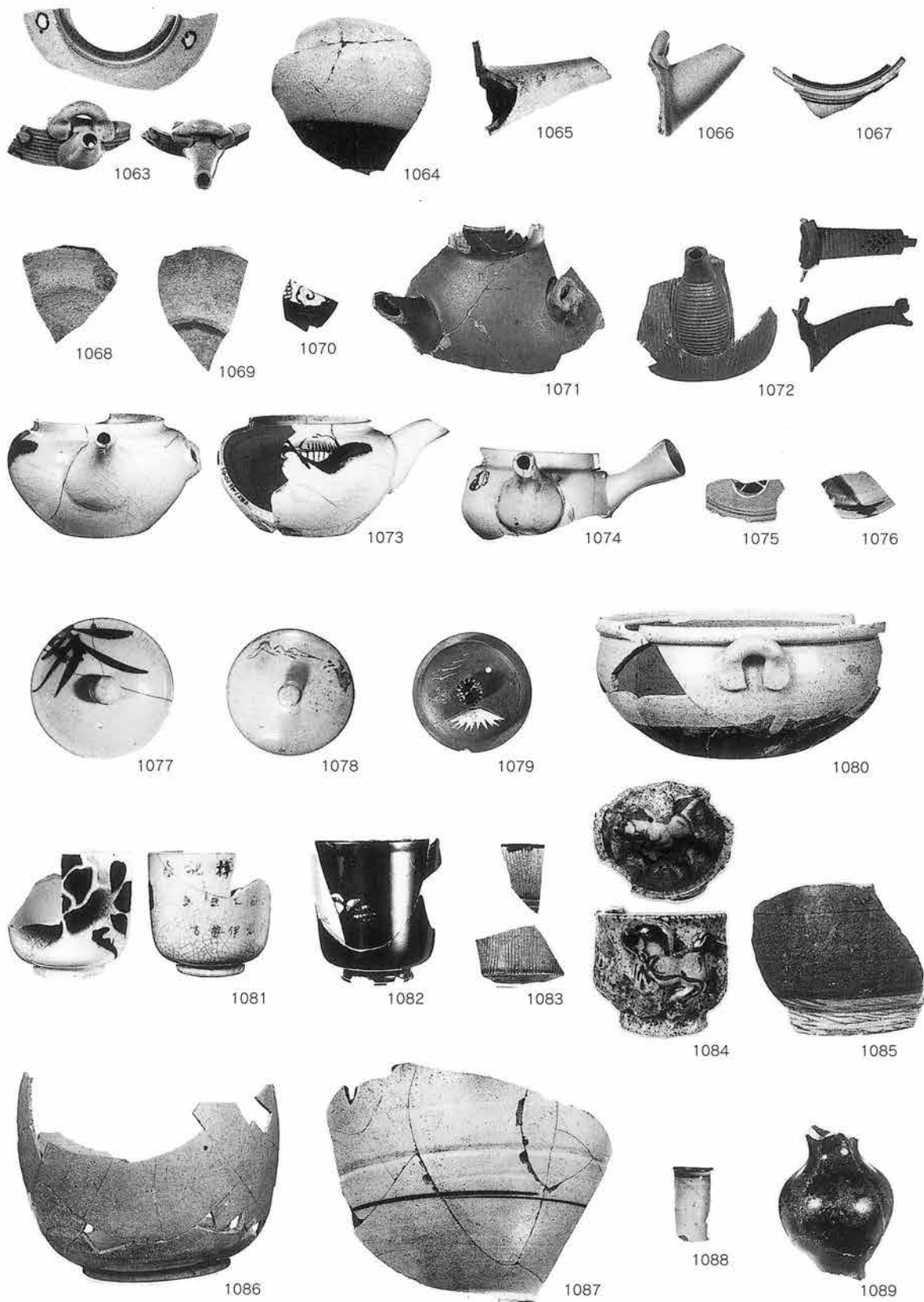
写真図版80 12世紀の遺物・近世、近代の陶器①



写真図版81 近世、近代の陶器②



写真図版82 近世、近代の陶器③



写真図版83 近世、近代の陶器④



1090



1091



1092



1093



1094



1095



1096



1097



1098



1099



1100



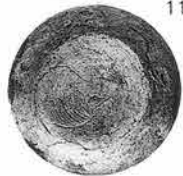
1101



1102



1103



1104



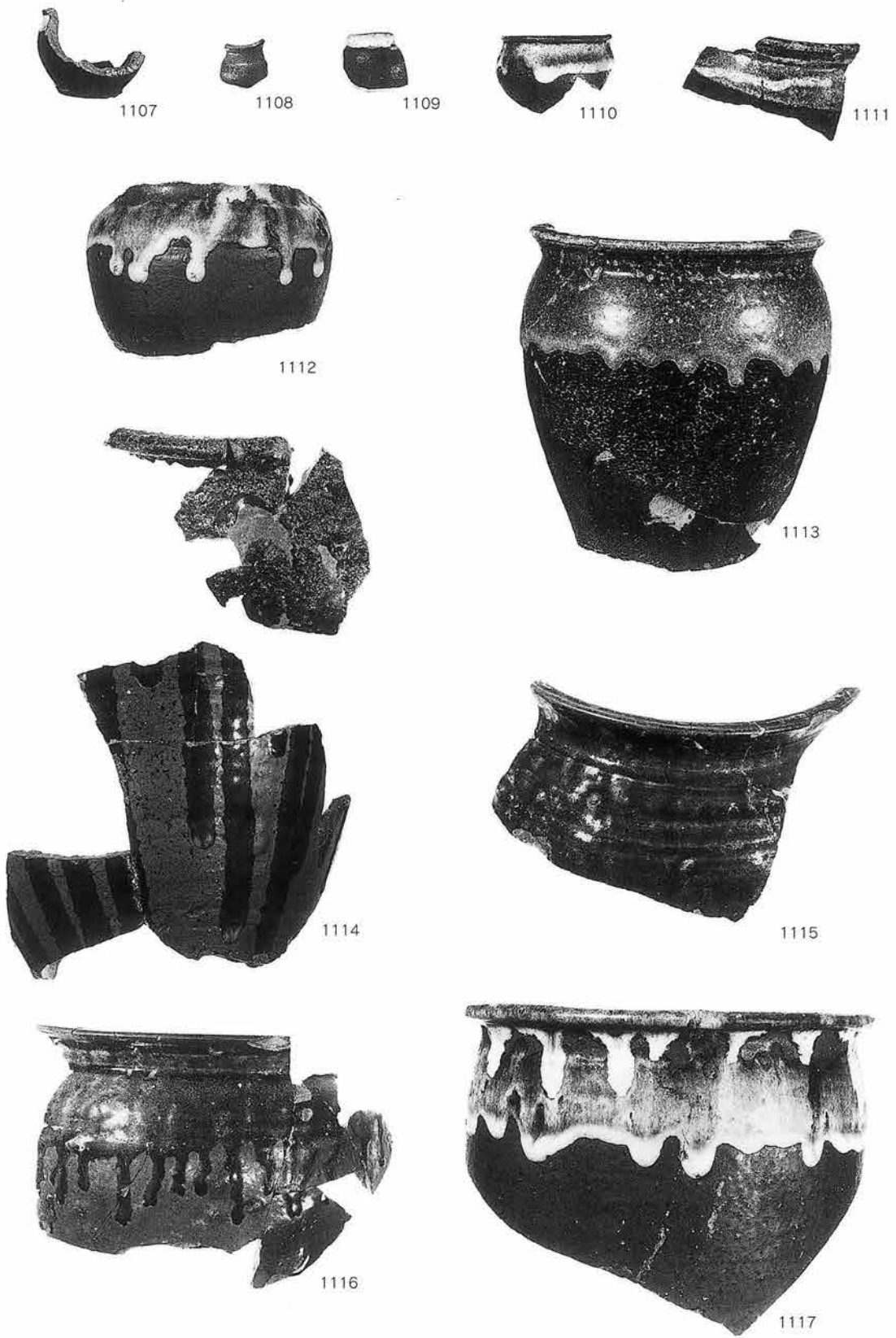
1105



1106



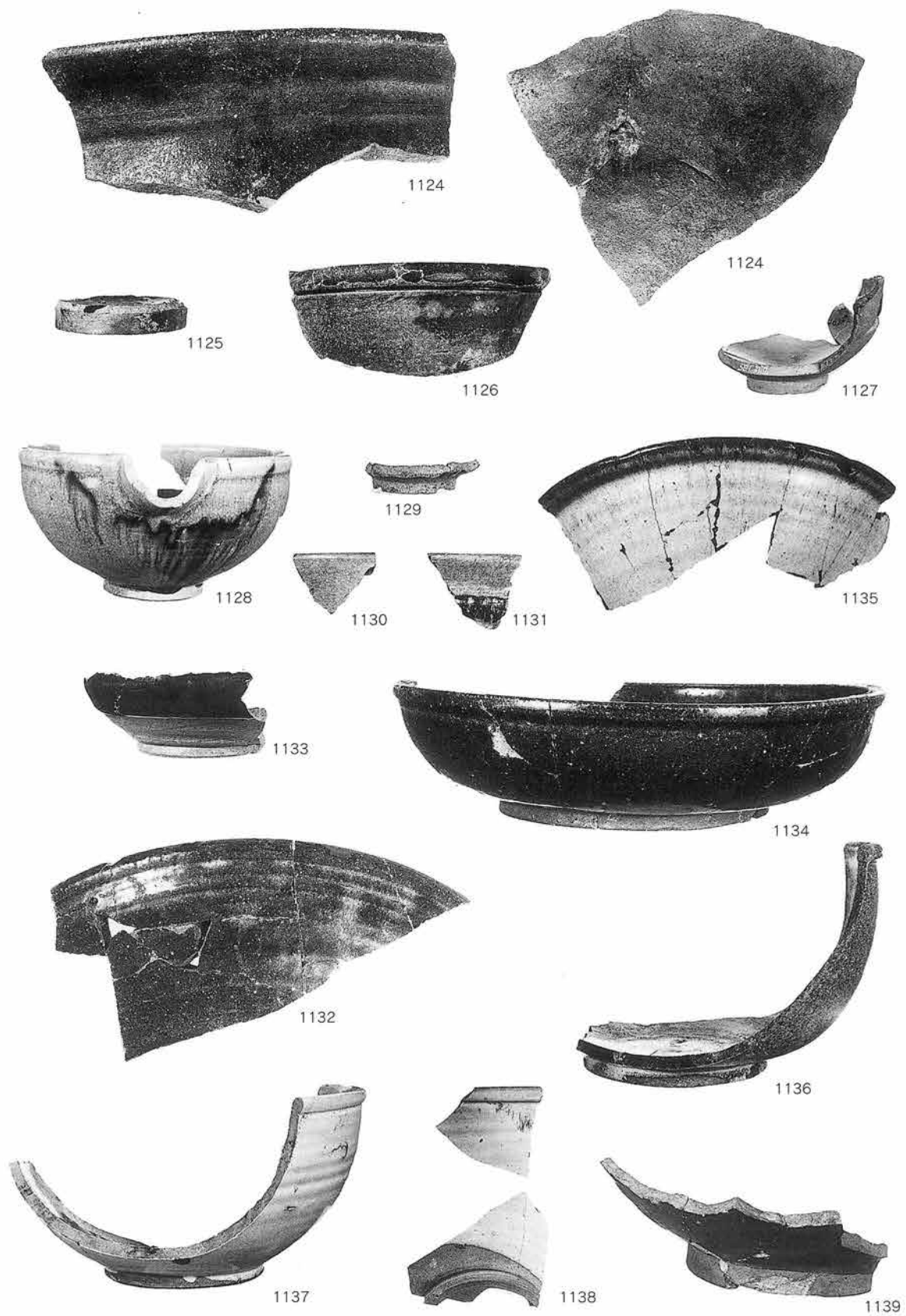
写真図版84 近世、近代の陶器⑤



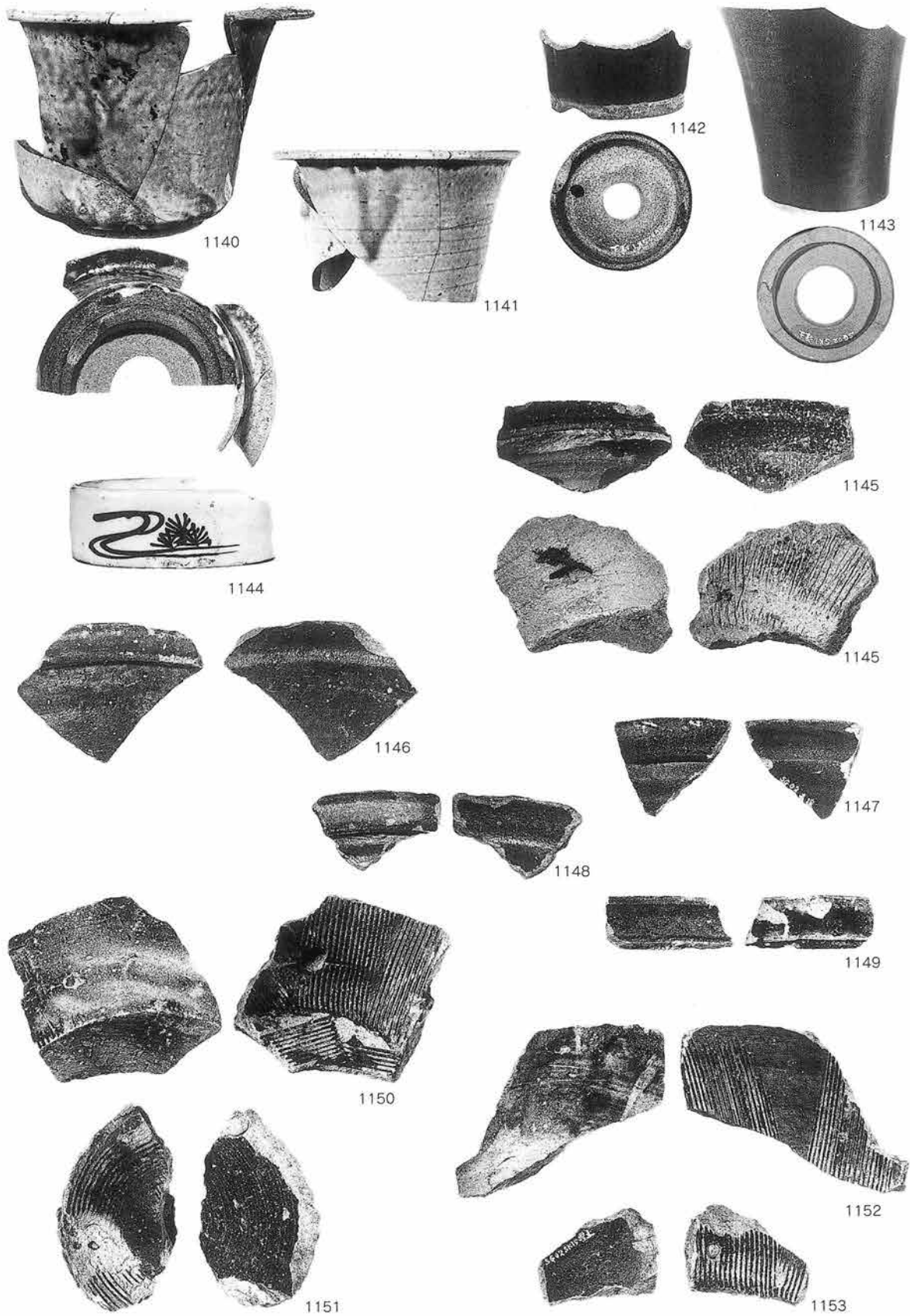
写真図版85 近世、近代の陶器⑥



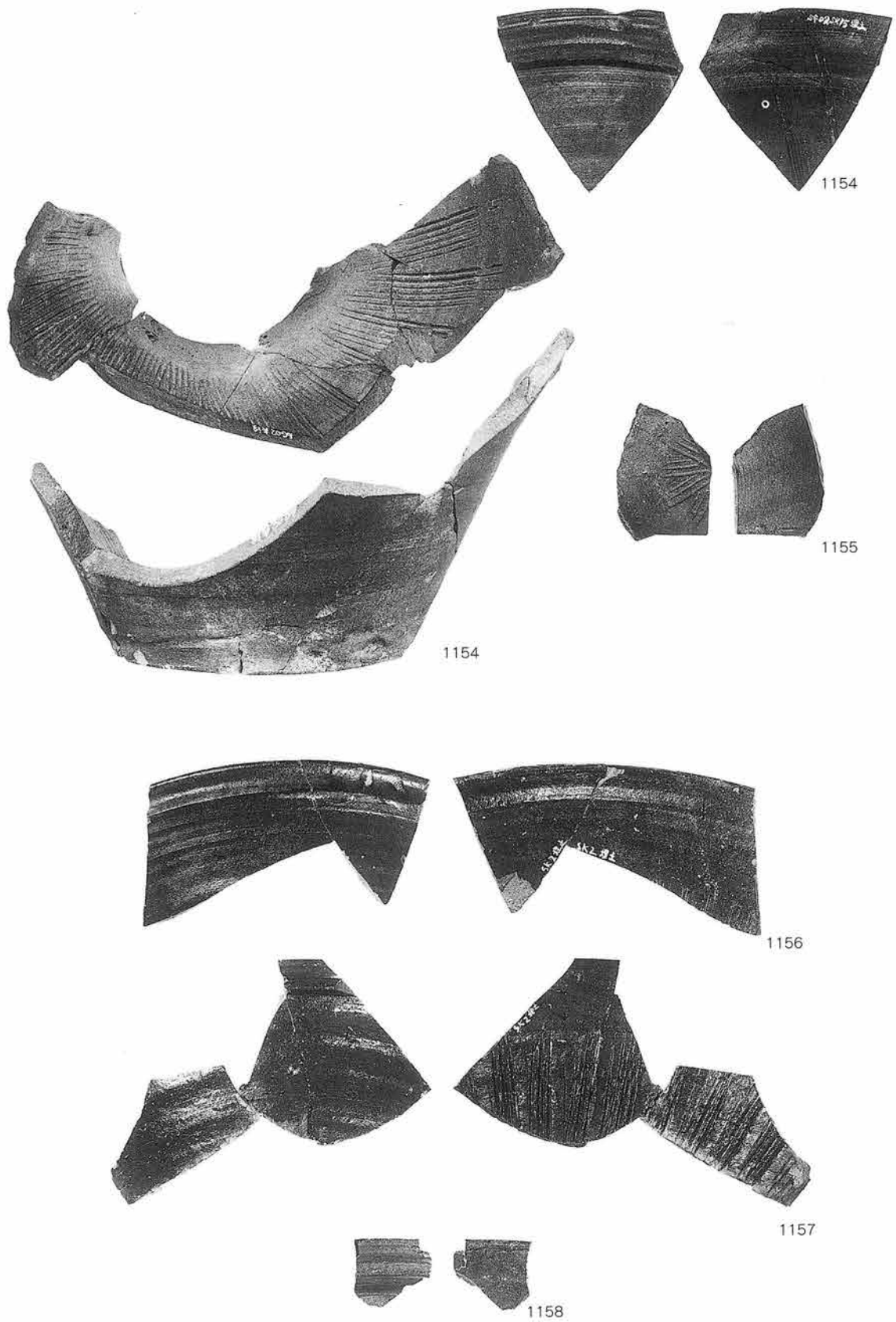
写真図版86 近世、近代の陶器⑦



写真図版87 近世、近代の陶器⑧



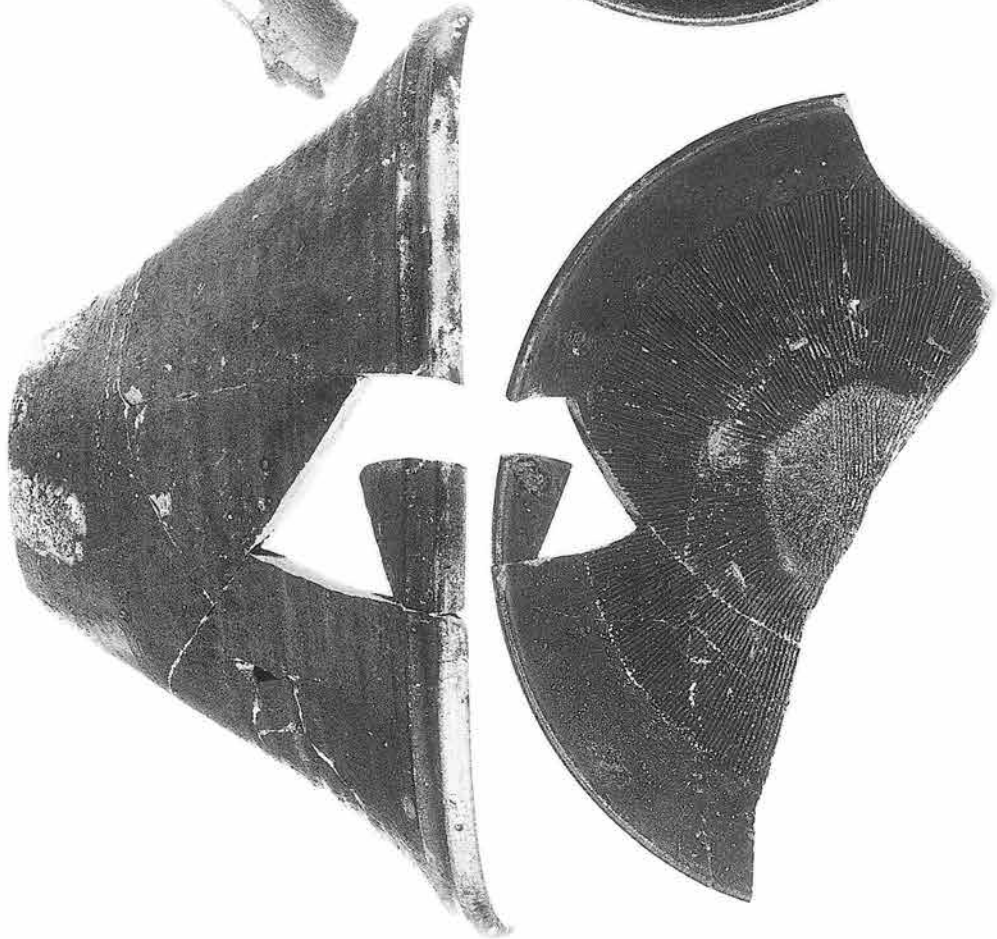
写真図版88 近世、近代の陶器⑨



写真図版89 近世、近代の陶器⑩

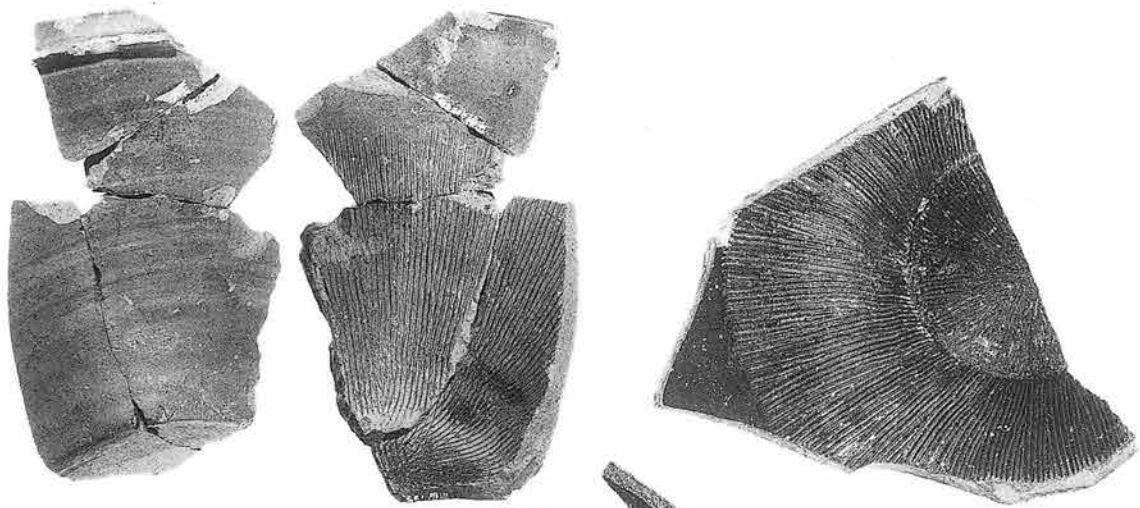


1159



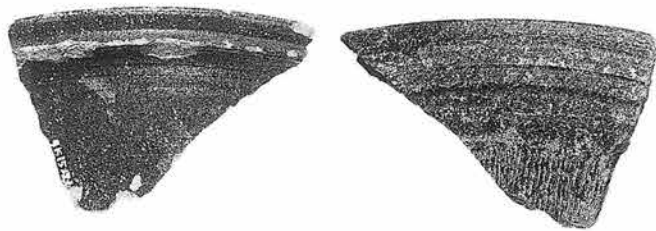
1160

写真図版90 近世、近代の陶器⑪

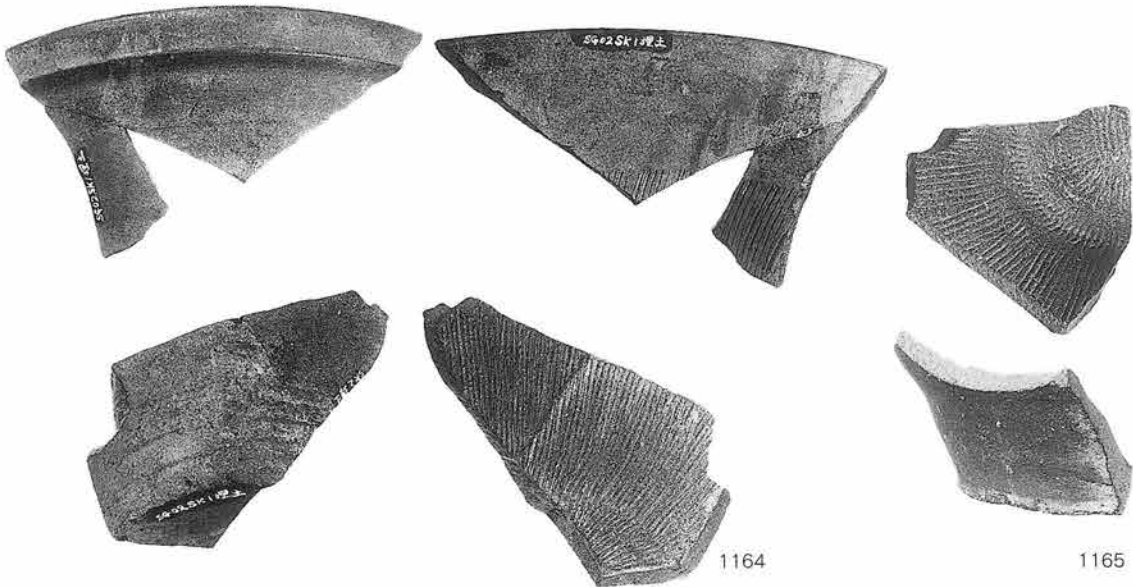


1161

1162



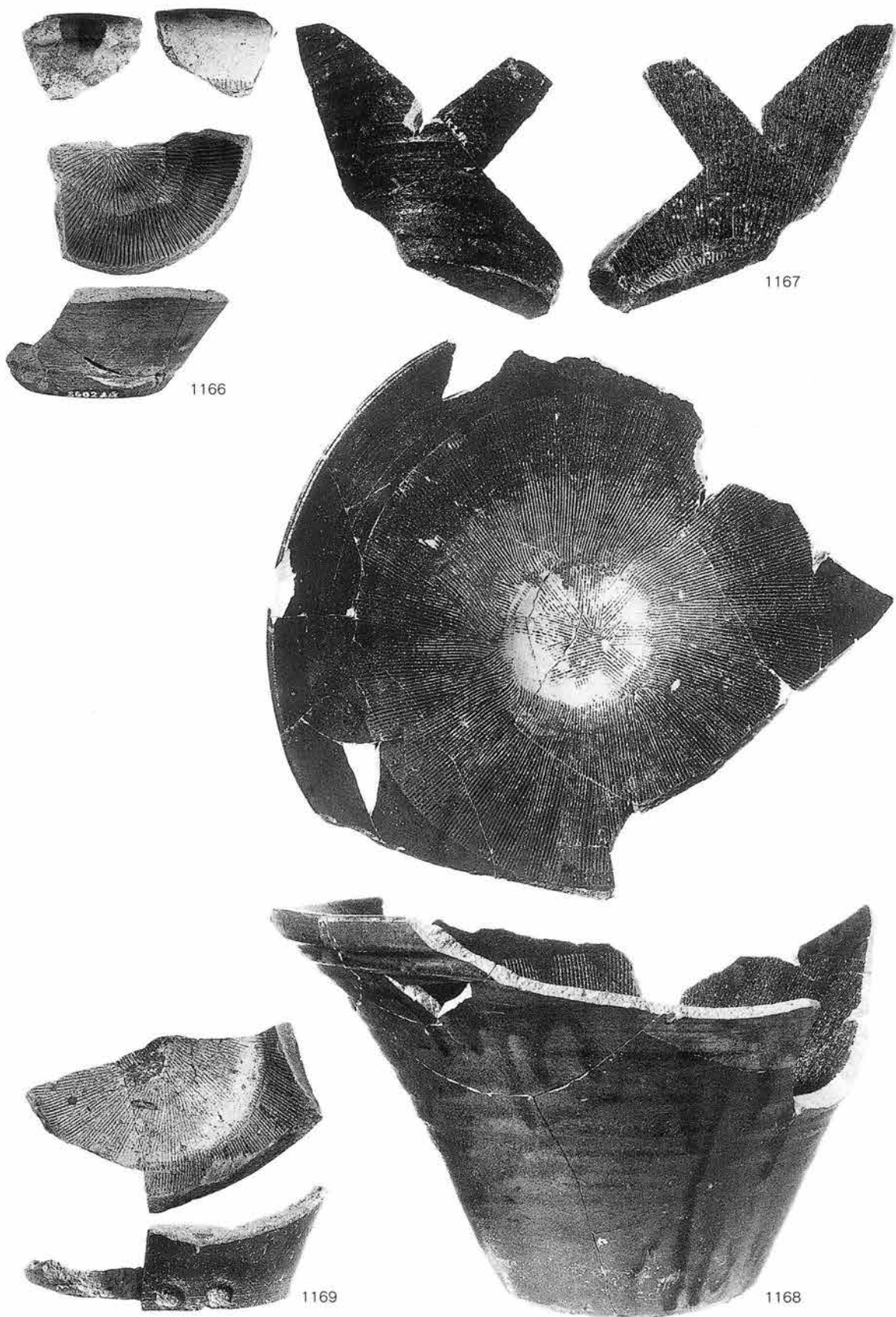
1163



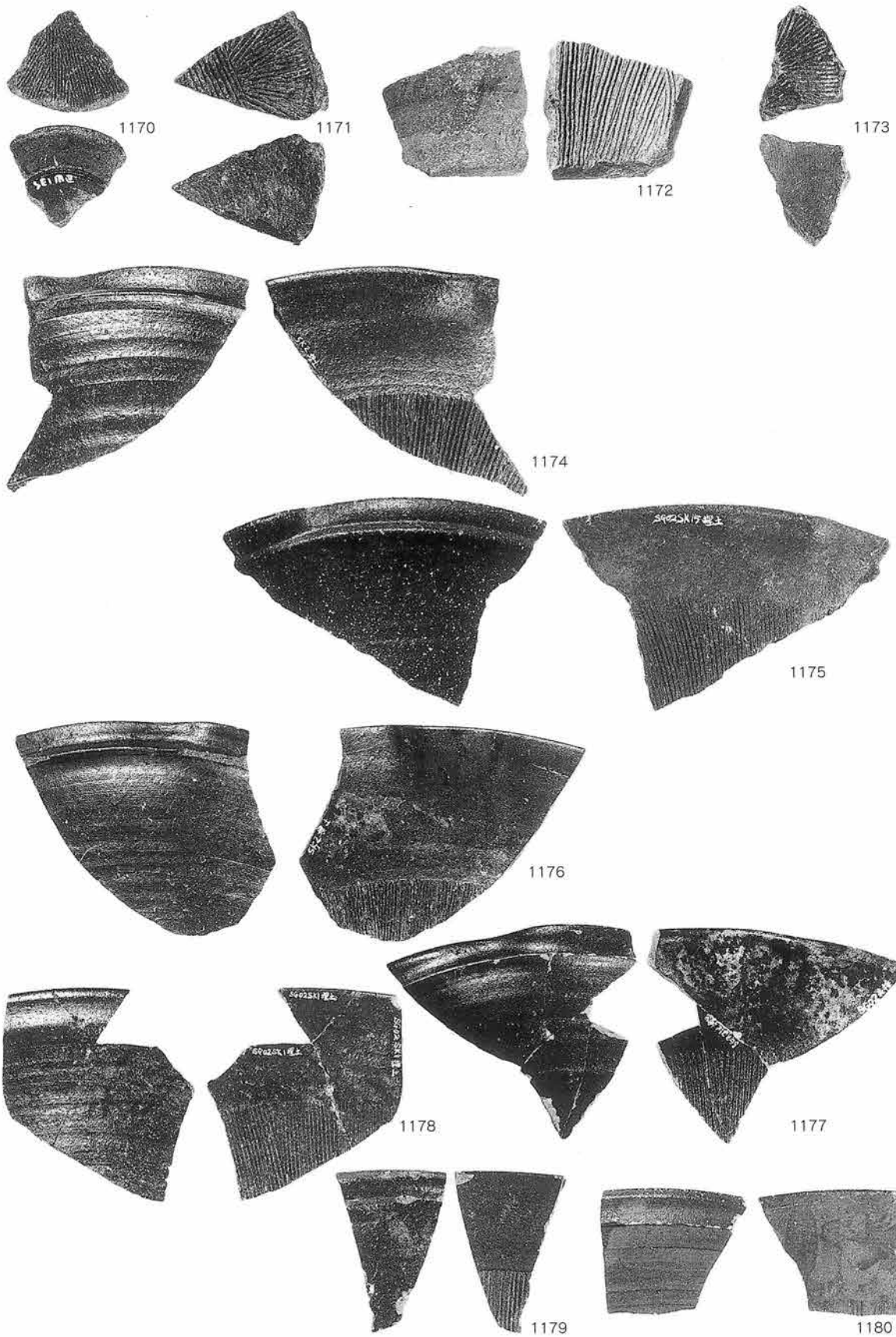
1164

1165

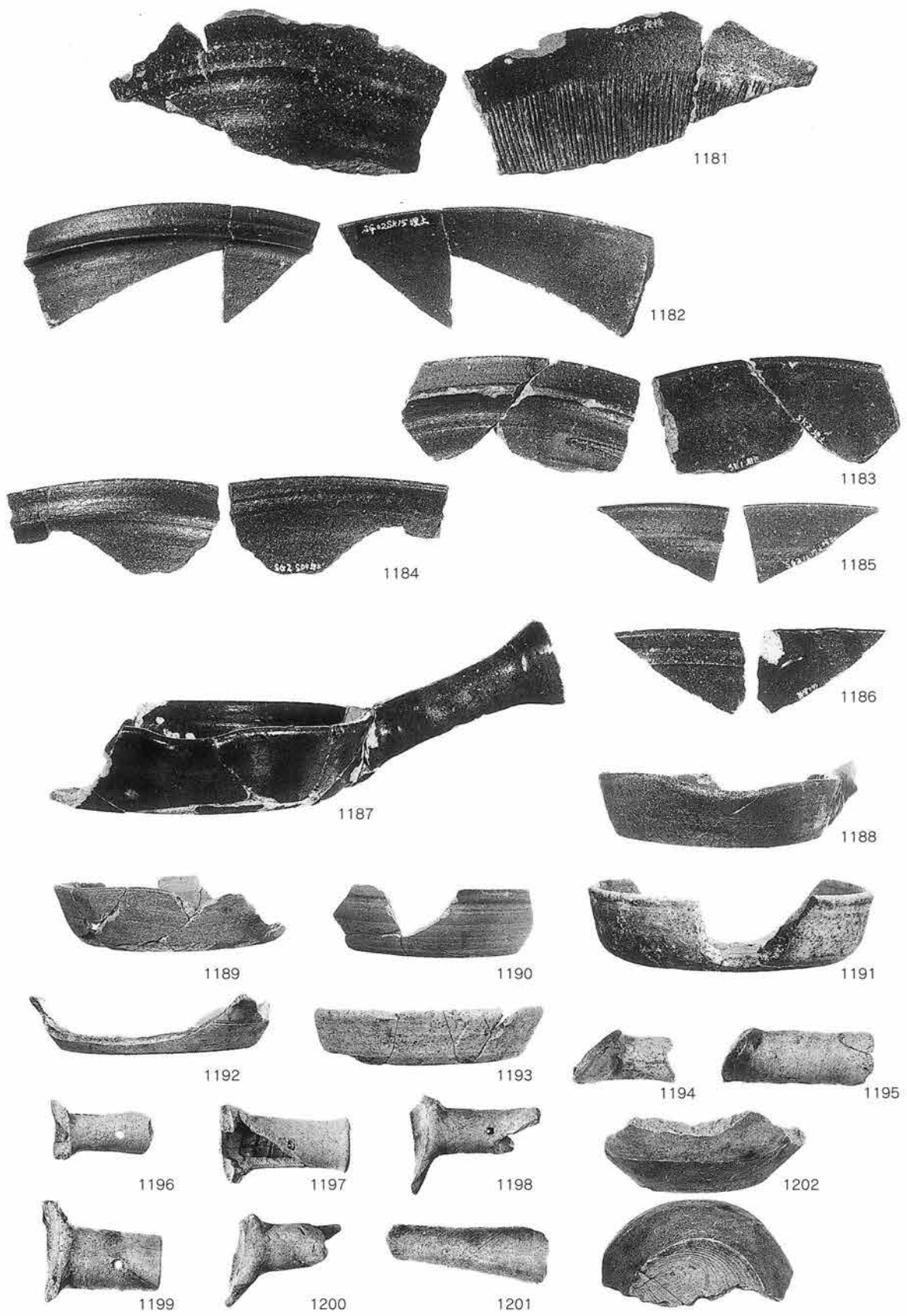
写真図版91 近世、近代の陶器②



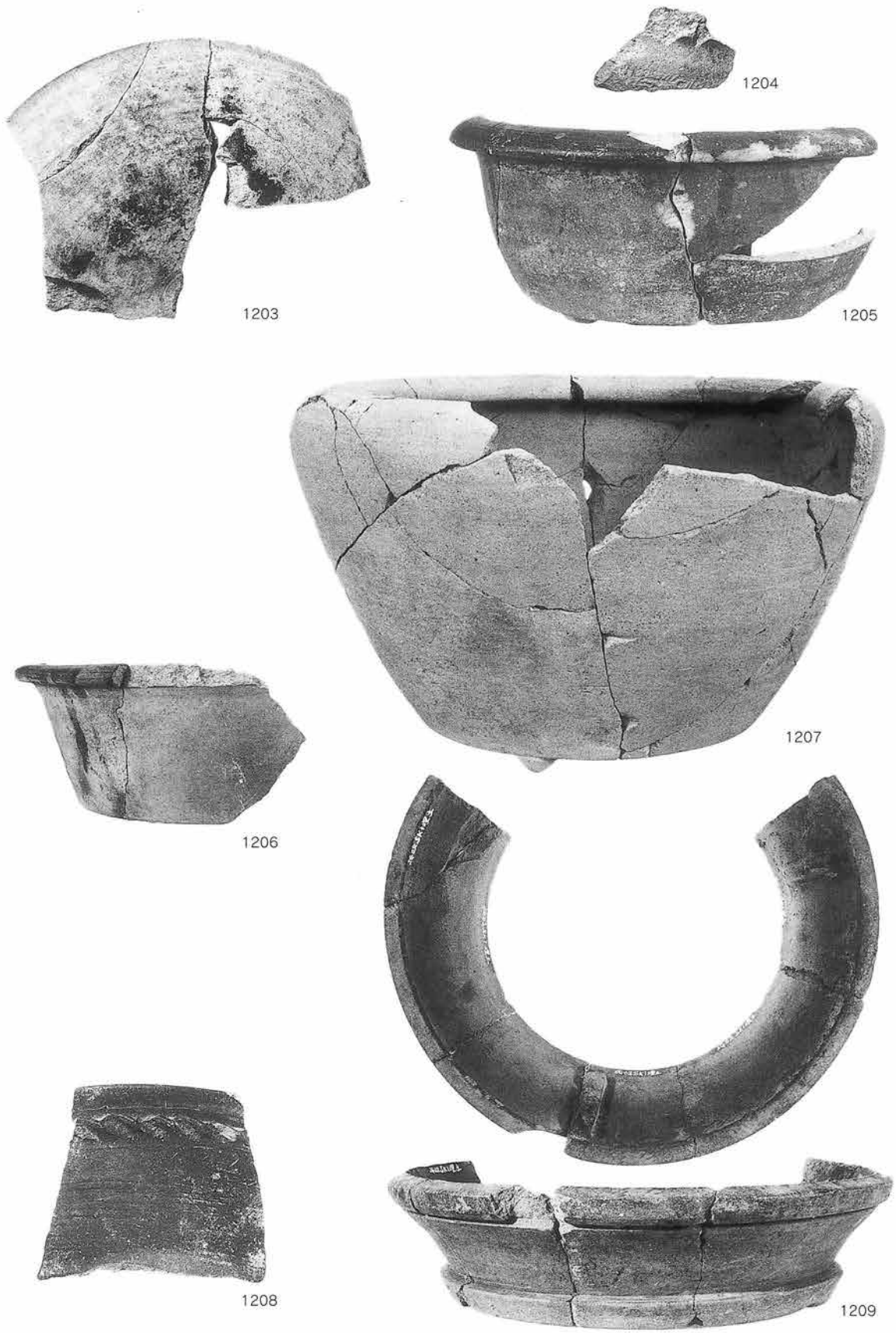
写真図版92 近世、近代の陶器⑬



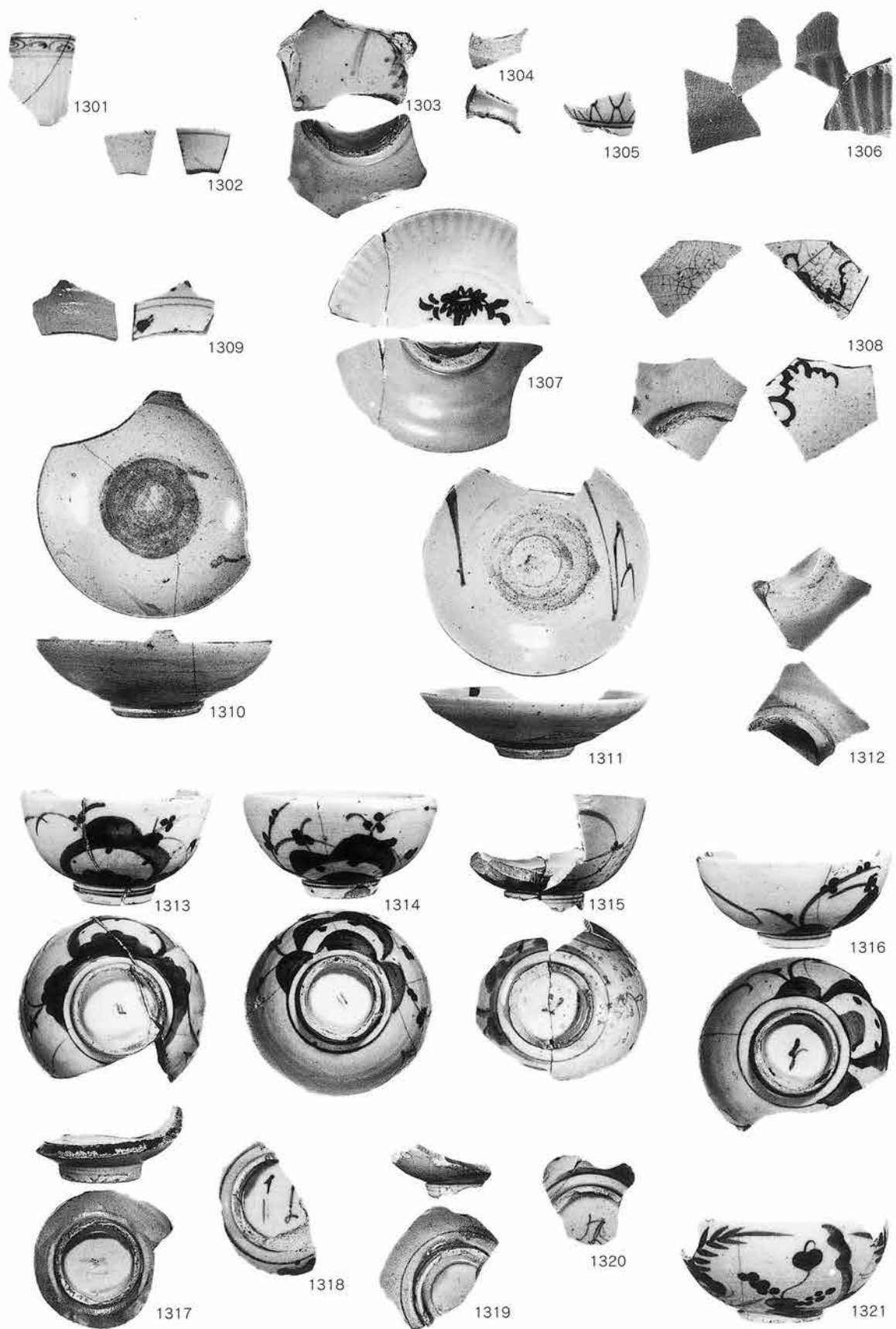
写真図版93 近世、近代の陶器⑭



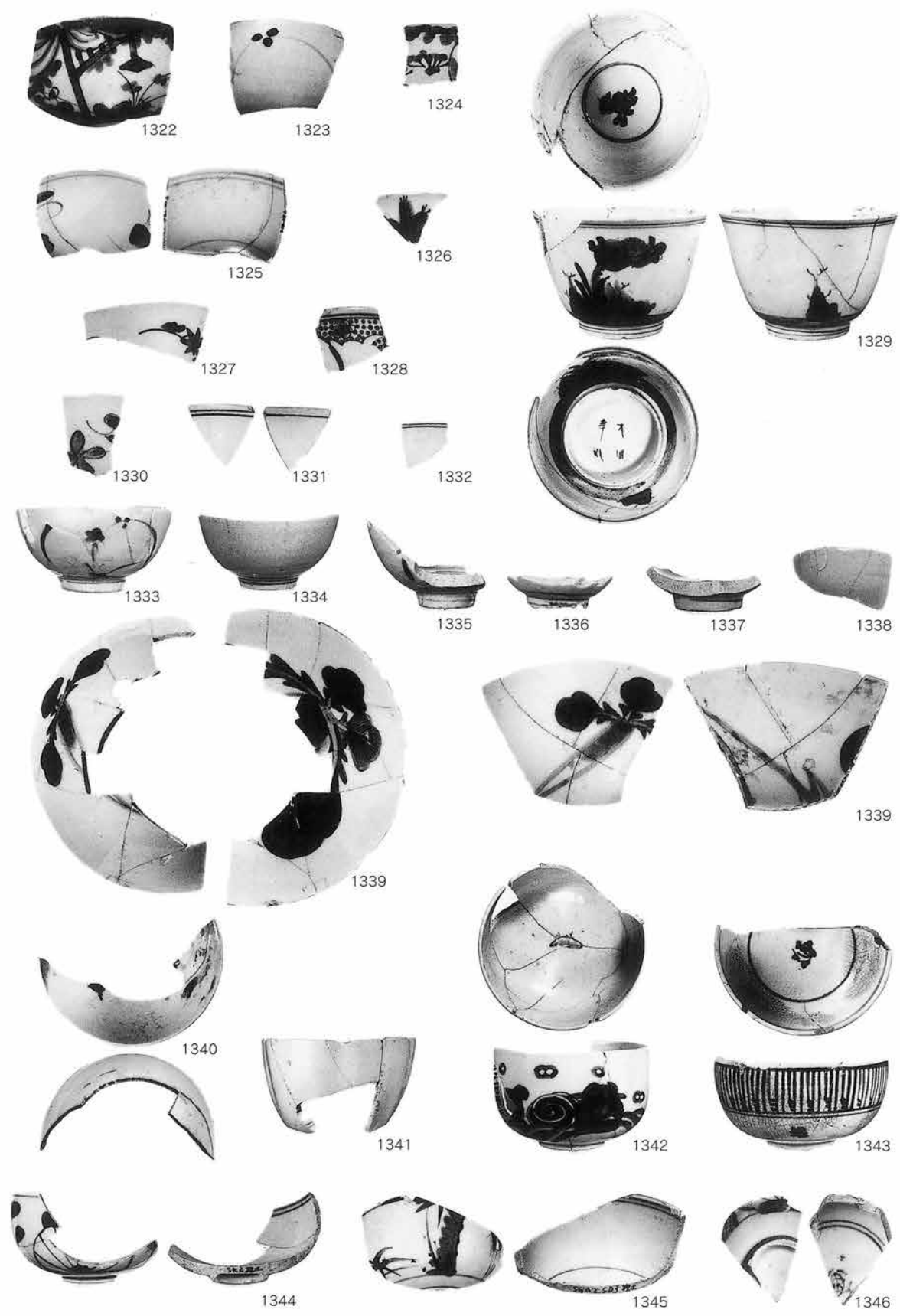
写真図版94 近世、近代の陶器⑮



写真図版95 近世、近代の陶器⑩



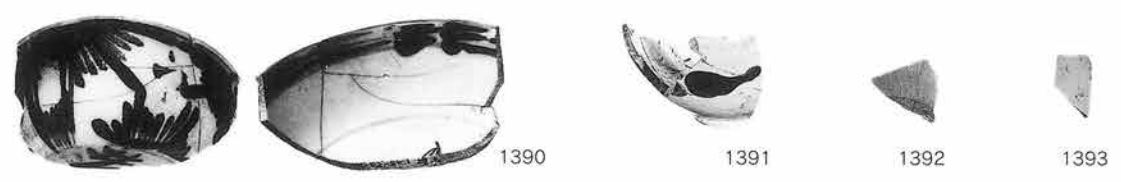
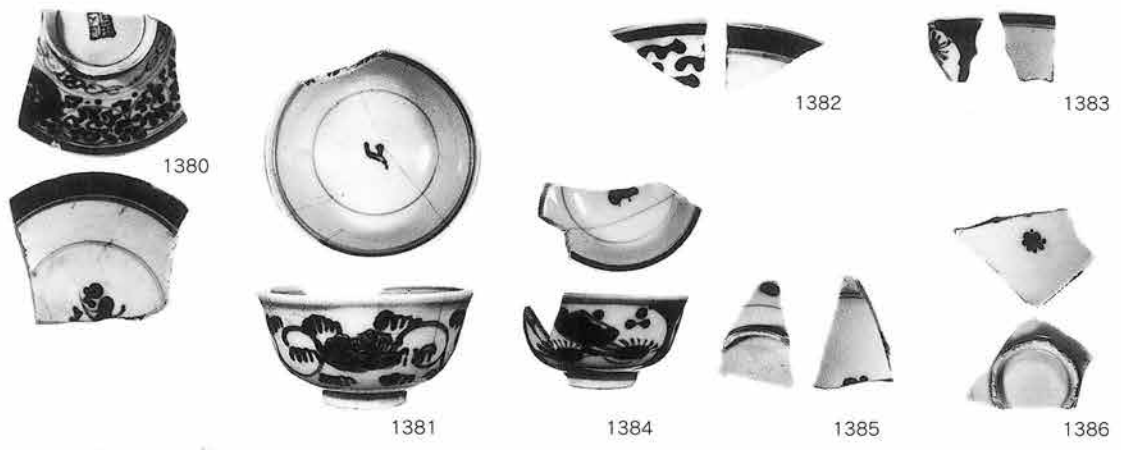
写真図版96 近世の磁器①



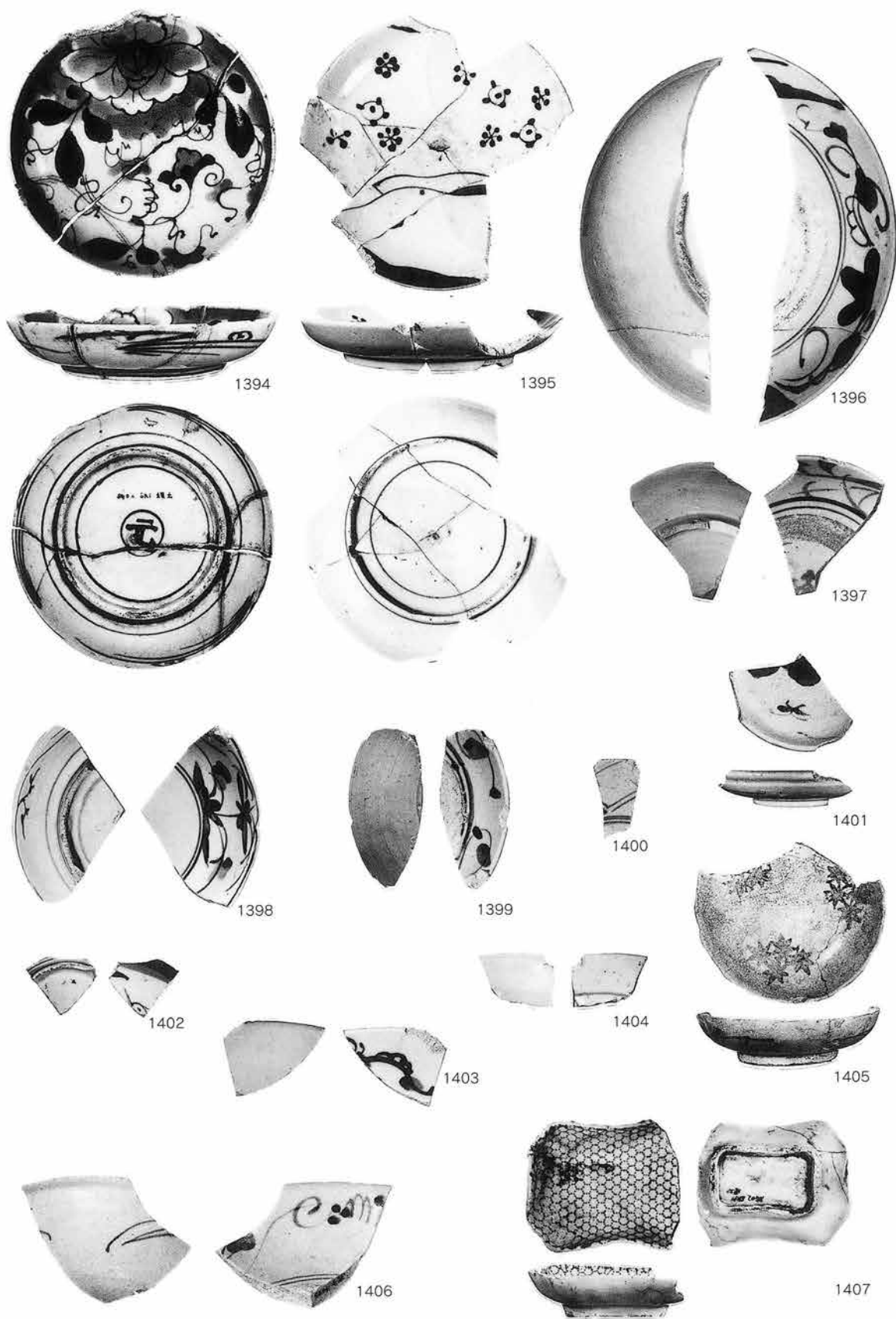
写真図版97 近世の磁器②



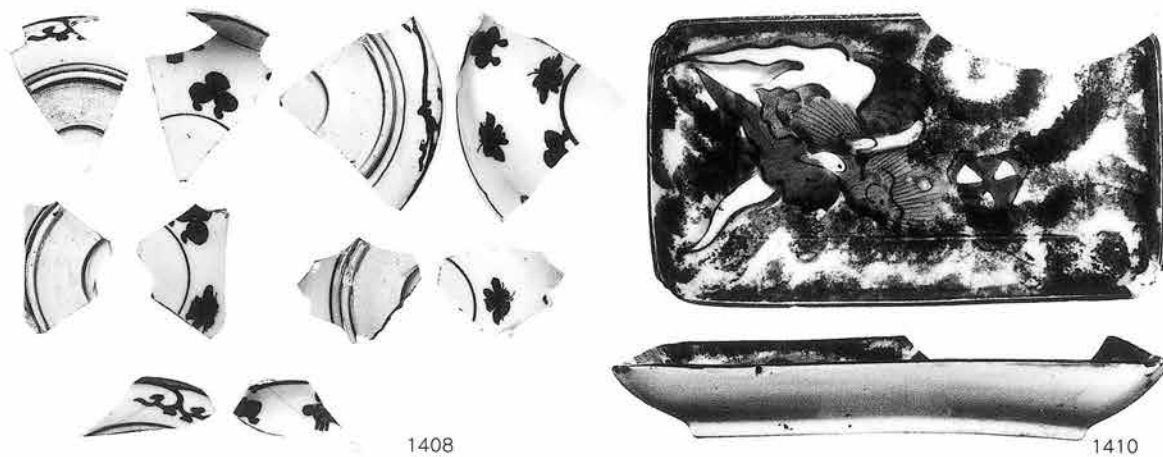
写真図版98 近世の磁器③



写真図版99 近世の磁器④



写真図版100 近世の磁器⑤

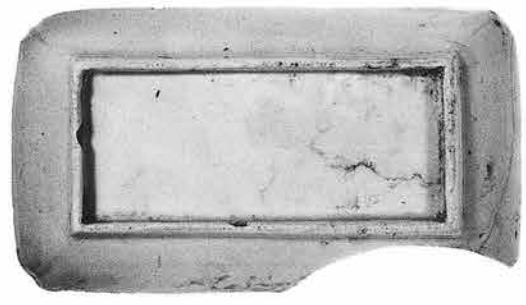


1408

1410



1409



1411



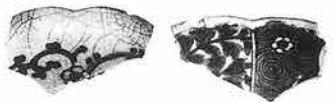
1412



1413



1414



1415



1416



1417



1418



1419



1420



1421

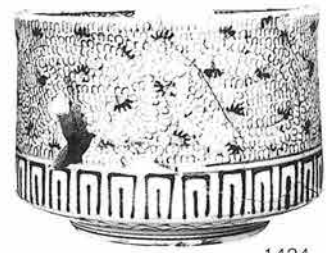
写真図版101 近世の磁器⑥



1422



1423



1424



1425



1426



1427



1428



1429



1430



1431



1432



1433



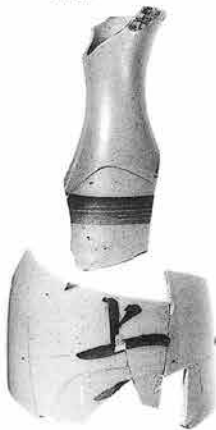
1434



1435



1436



1437



1438



1439

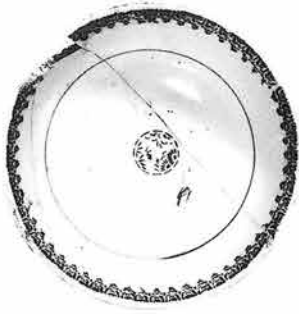


1440



1441

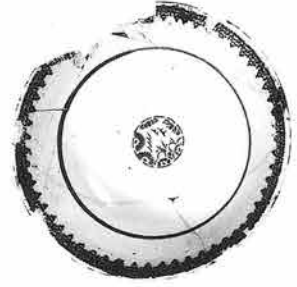
写真図版102 近世の磁器⑦



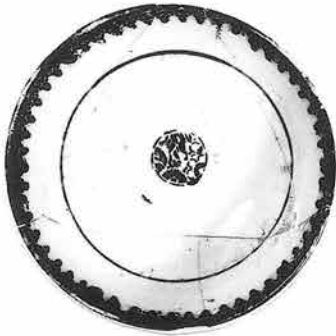
1442



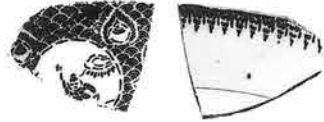
1443



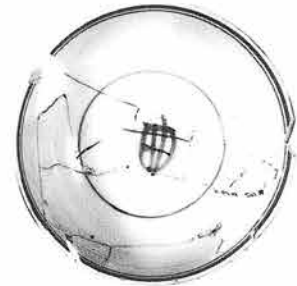
1444



1445



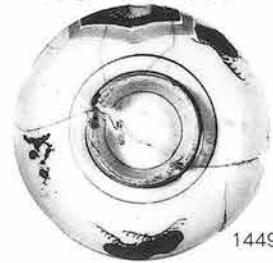
1446



1447



1448



1449



1450

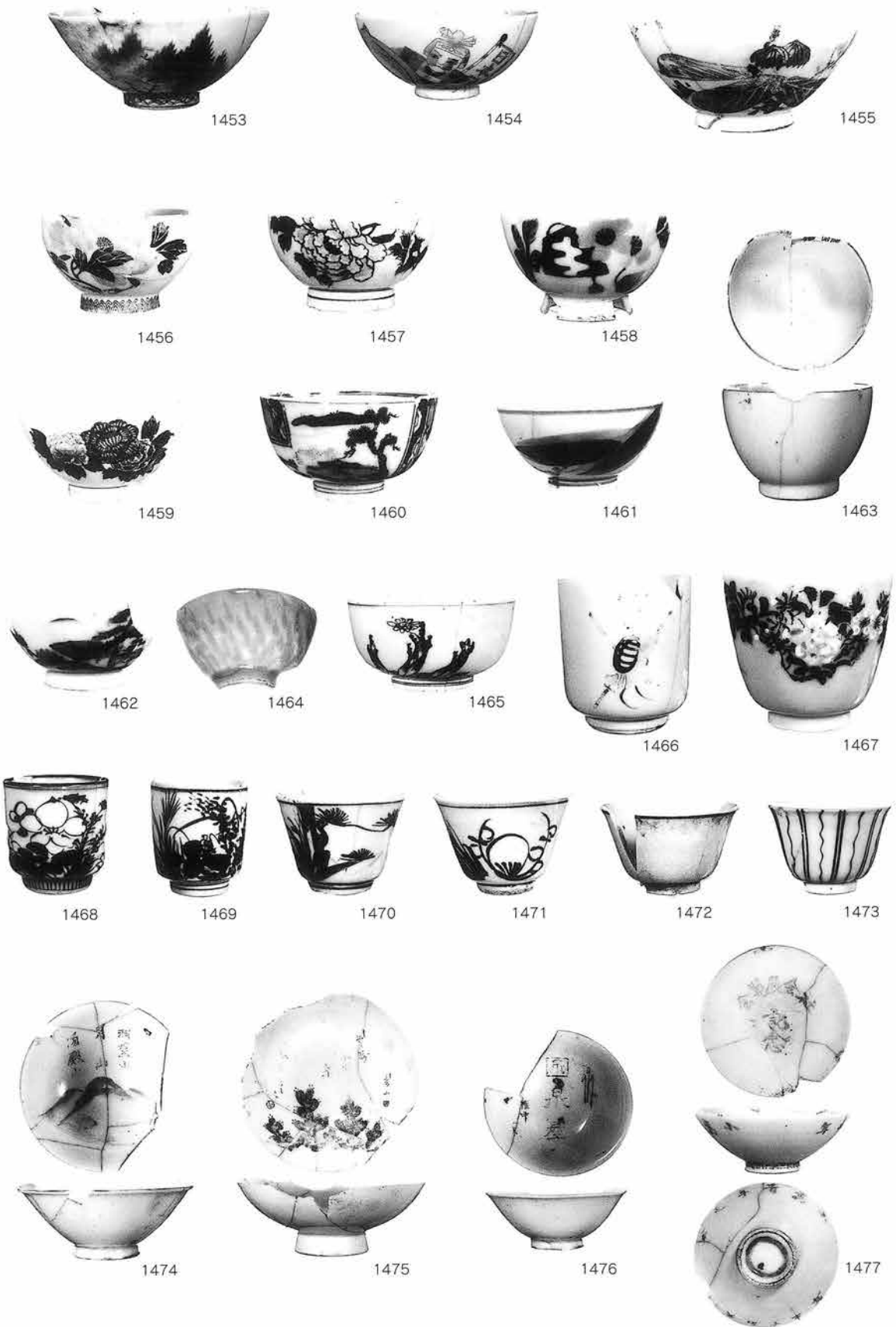


1451



1452

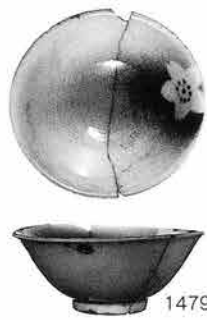
写真図版103 近代の磁器①



写真図版104 近代の磁器②



1478



1479



1480



1481



1482



1483



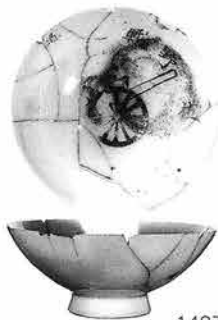
1484



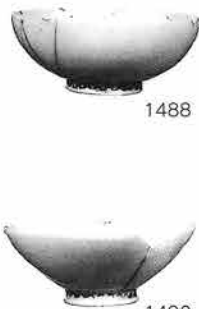
1485



1486



1487



1488



1489



1492



1493



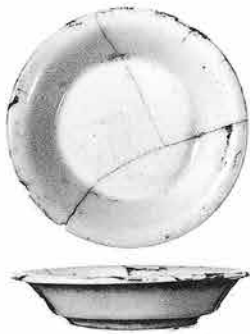
1494



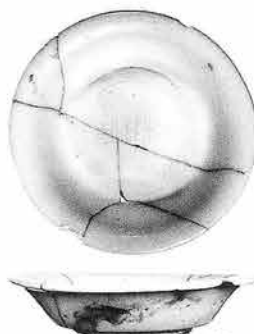
1495



1496



1497



1498



1499

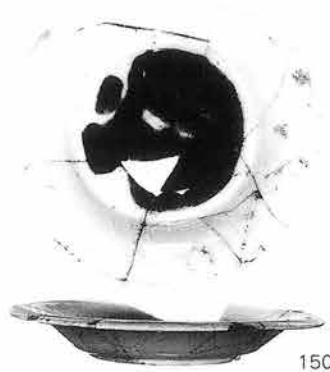
写真図版105 近代の磁器③



1500



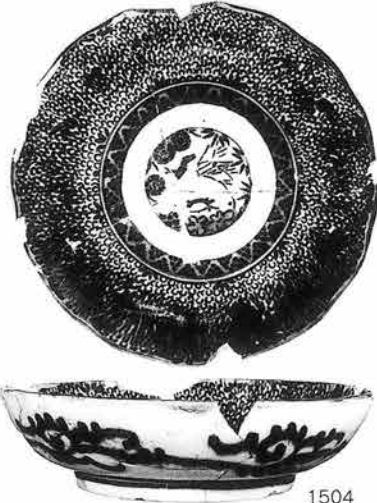
1501



1502



1503



1504



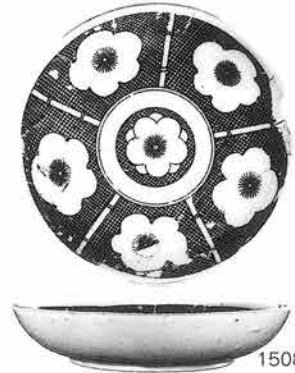
1505



1506



1507



1508



1509



1510



1511

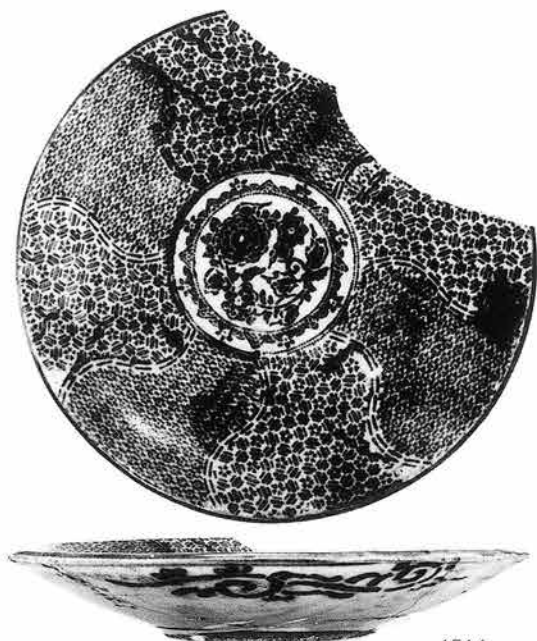
写真図版106 近代の磁器④



1512



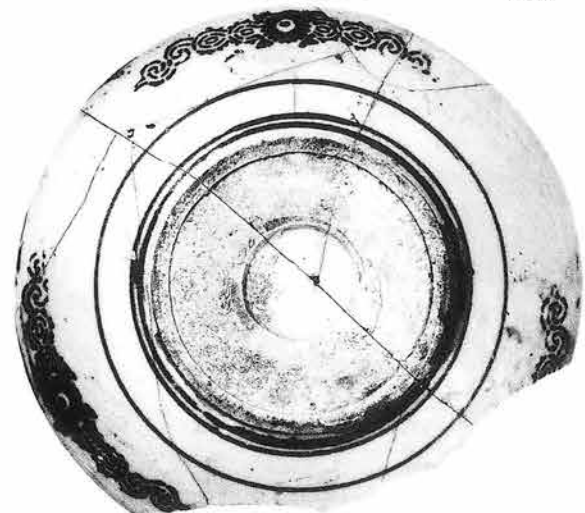
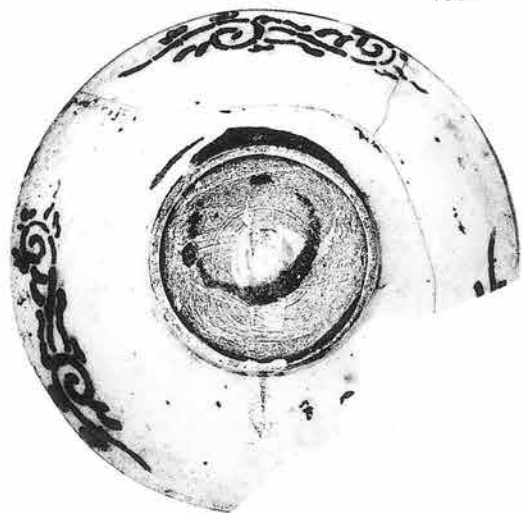
1513



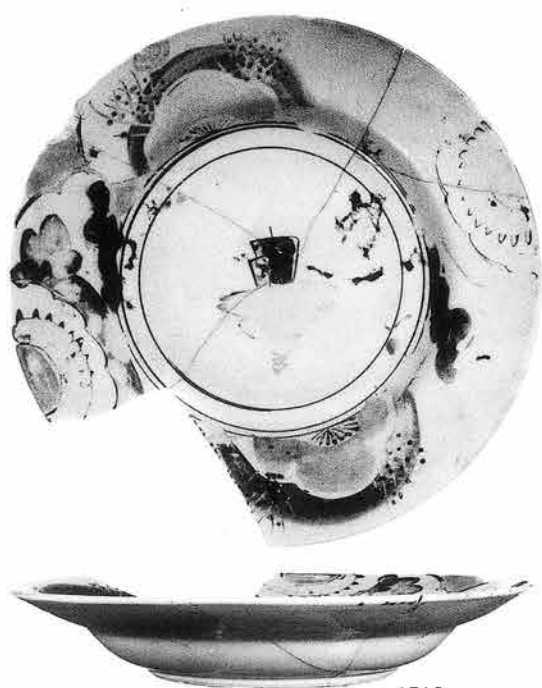
1514



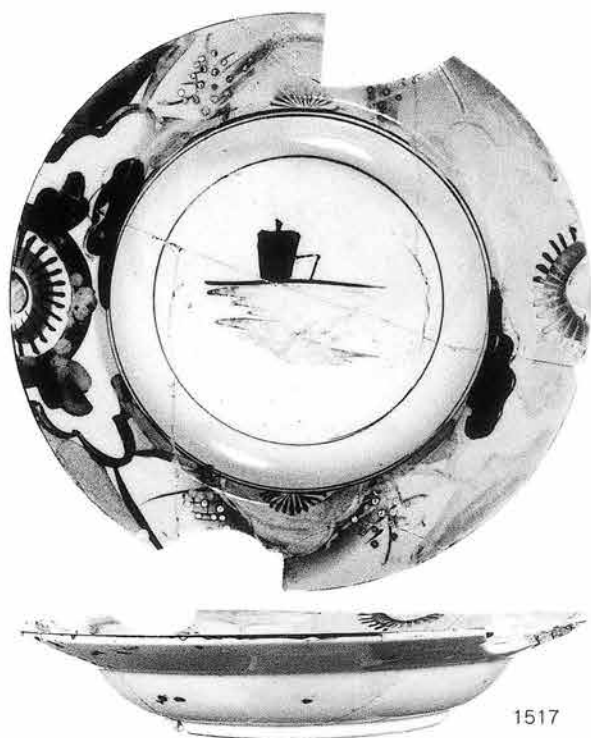
1515



写真図版107 近代の磁器⑤



1516



1517



1518



1519



1520



1521



1522



1523

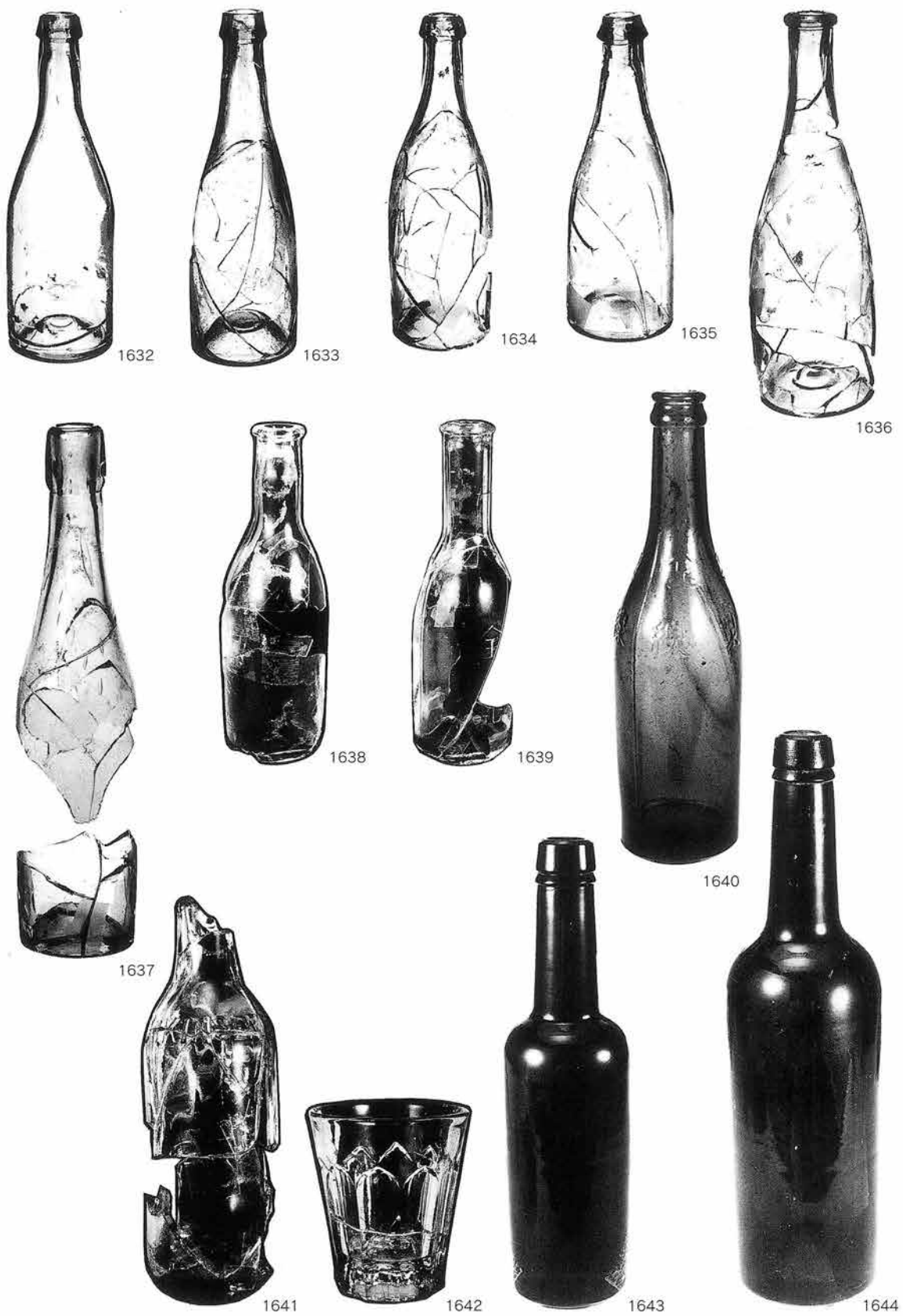


1524

写真図版108 近代の磁器⑥



写真図版109 ガラス製品①



写真図版110 ガラス製品②



1645



1646



1647



1648



1649



1650



1651



1652

写真図版111 ガラス製品③



1653



1654



1655



1656



1657



1658



1659



1660



1661



1662



1663



1664

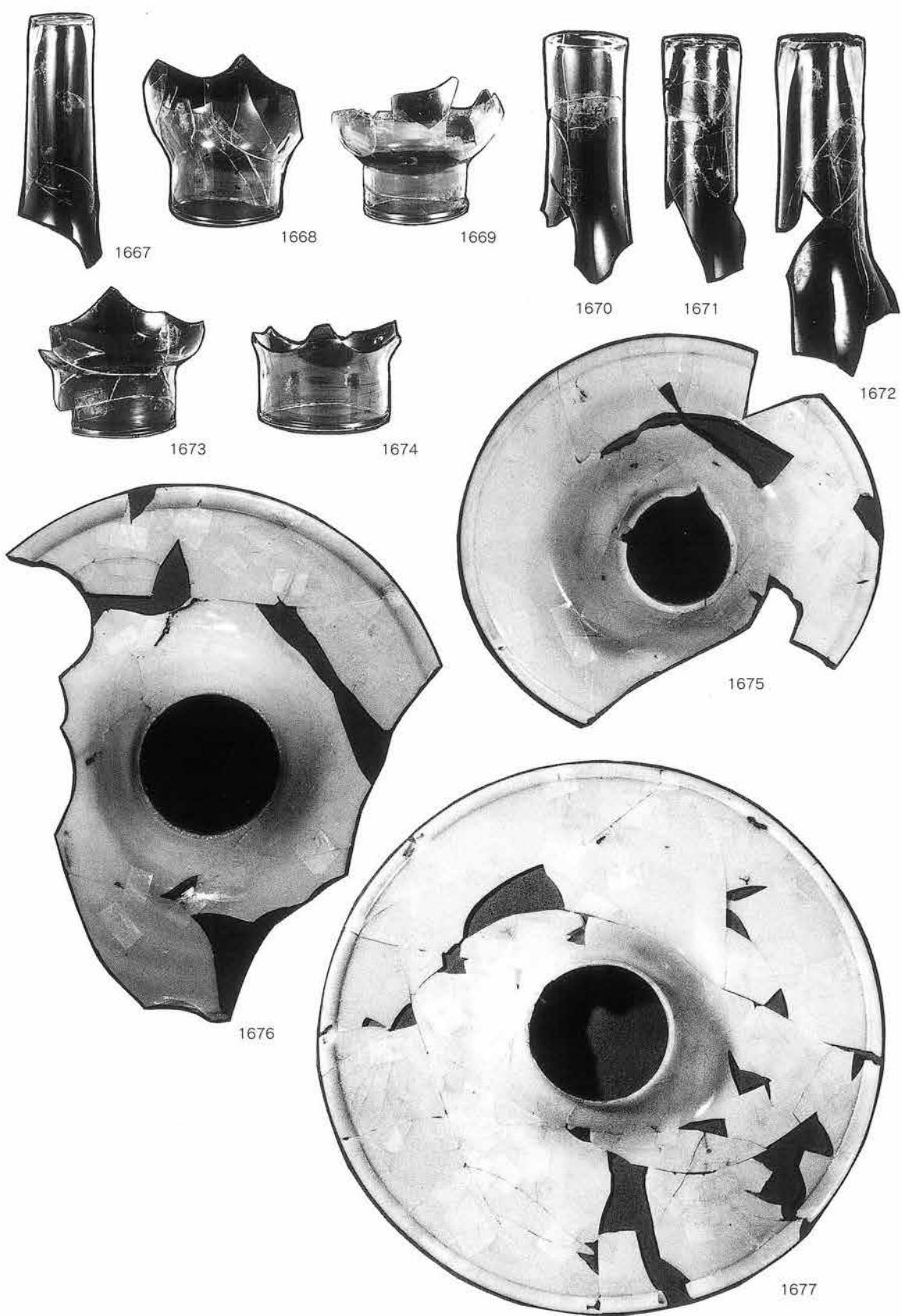


1665



1666

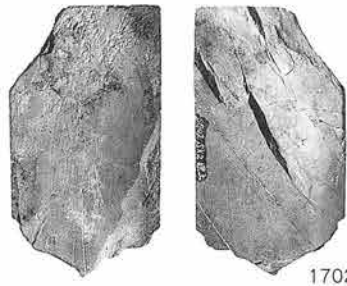
写真図版112 ガラス製品④



写真図版113 ガラス製品⑤



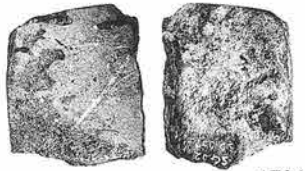
1701



1702



1703



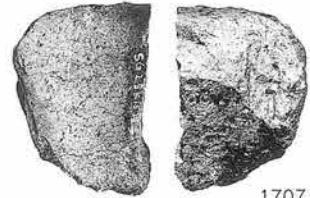
1704



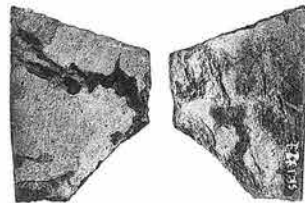
1705



1706



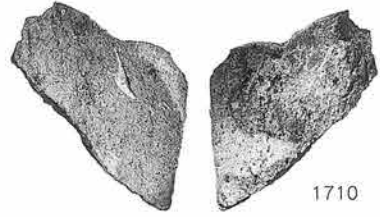
1707



1708



1709



1710



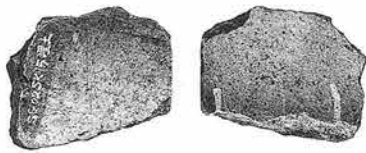
1711



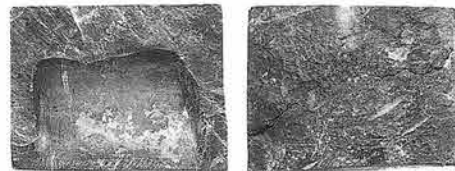
1712



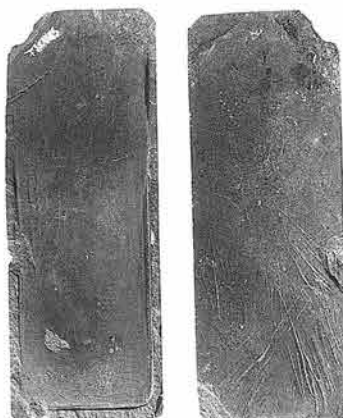
1713



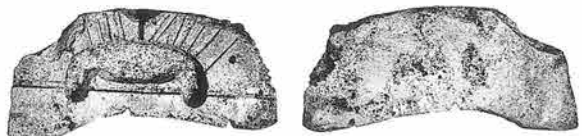
1714



1715



1716

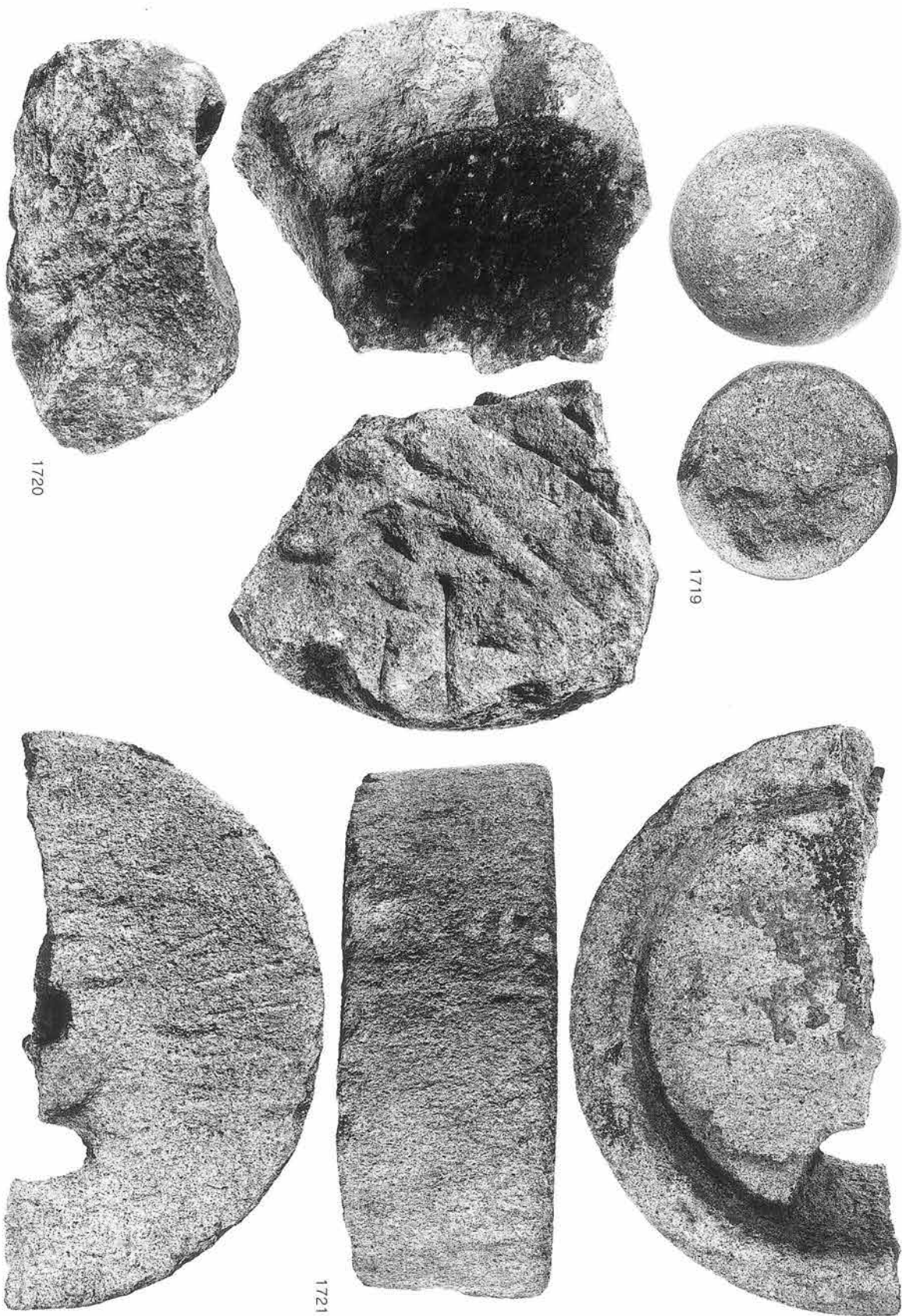


1717

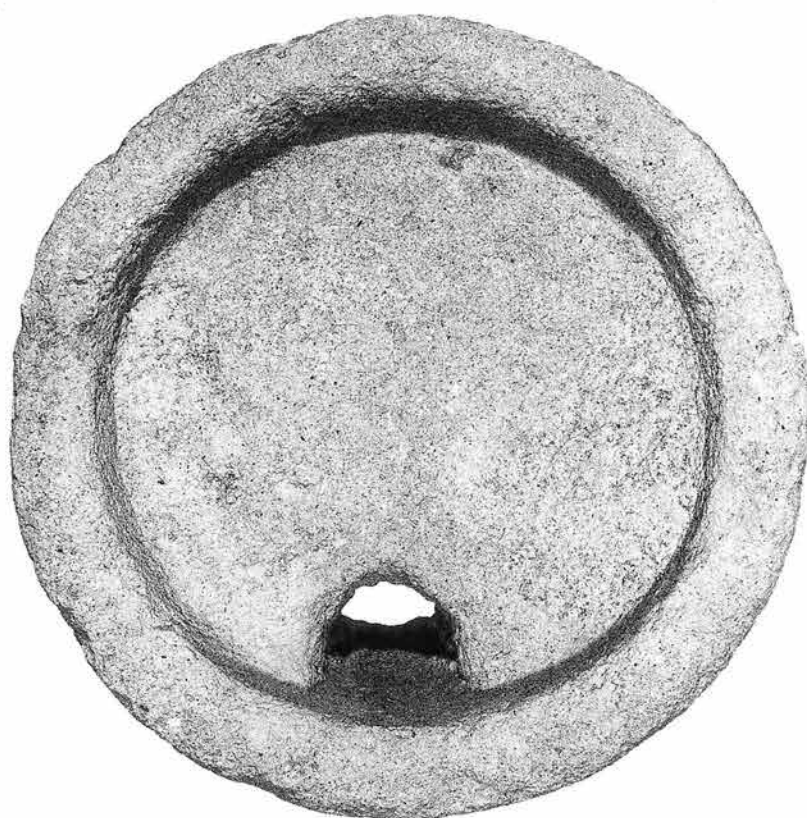


1718

写真図版114 石製品①

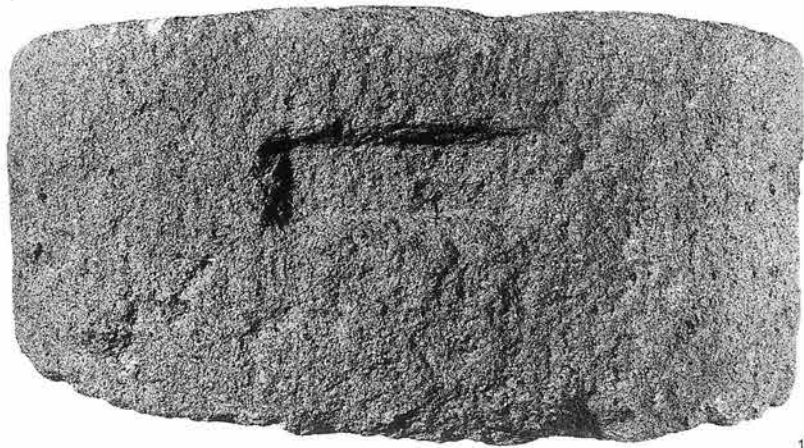


写真図版115 石製品②

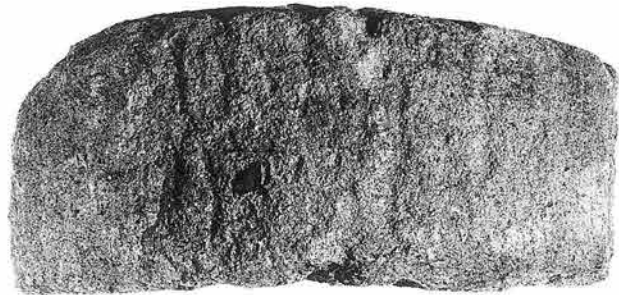
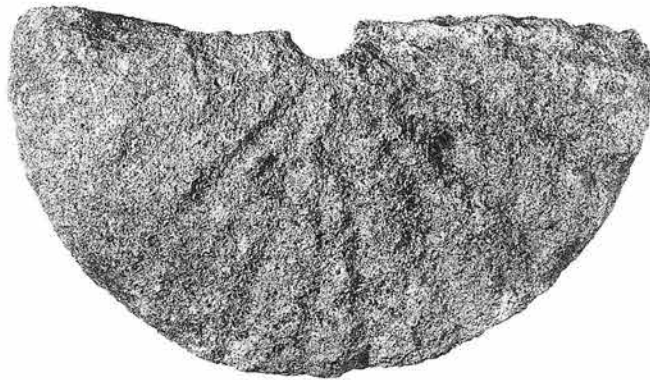


1722

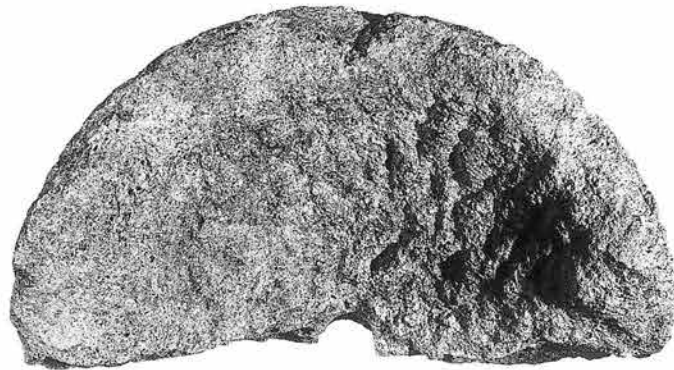
写真図版116 石製品③



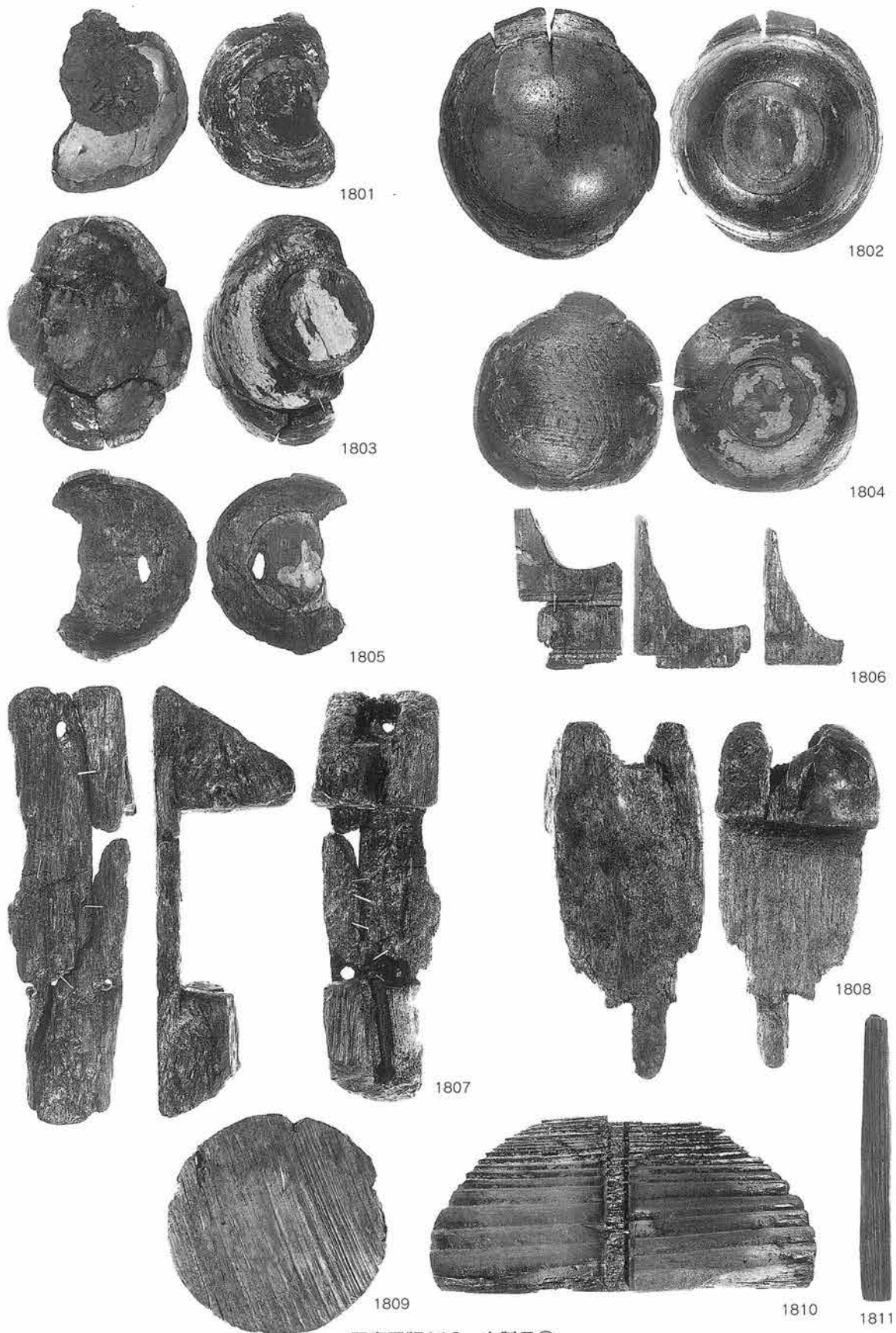
1722



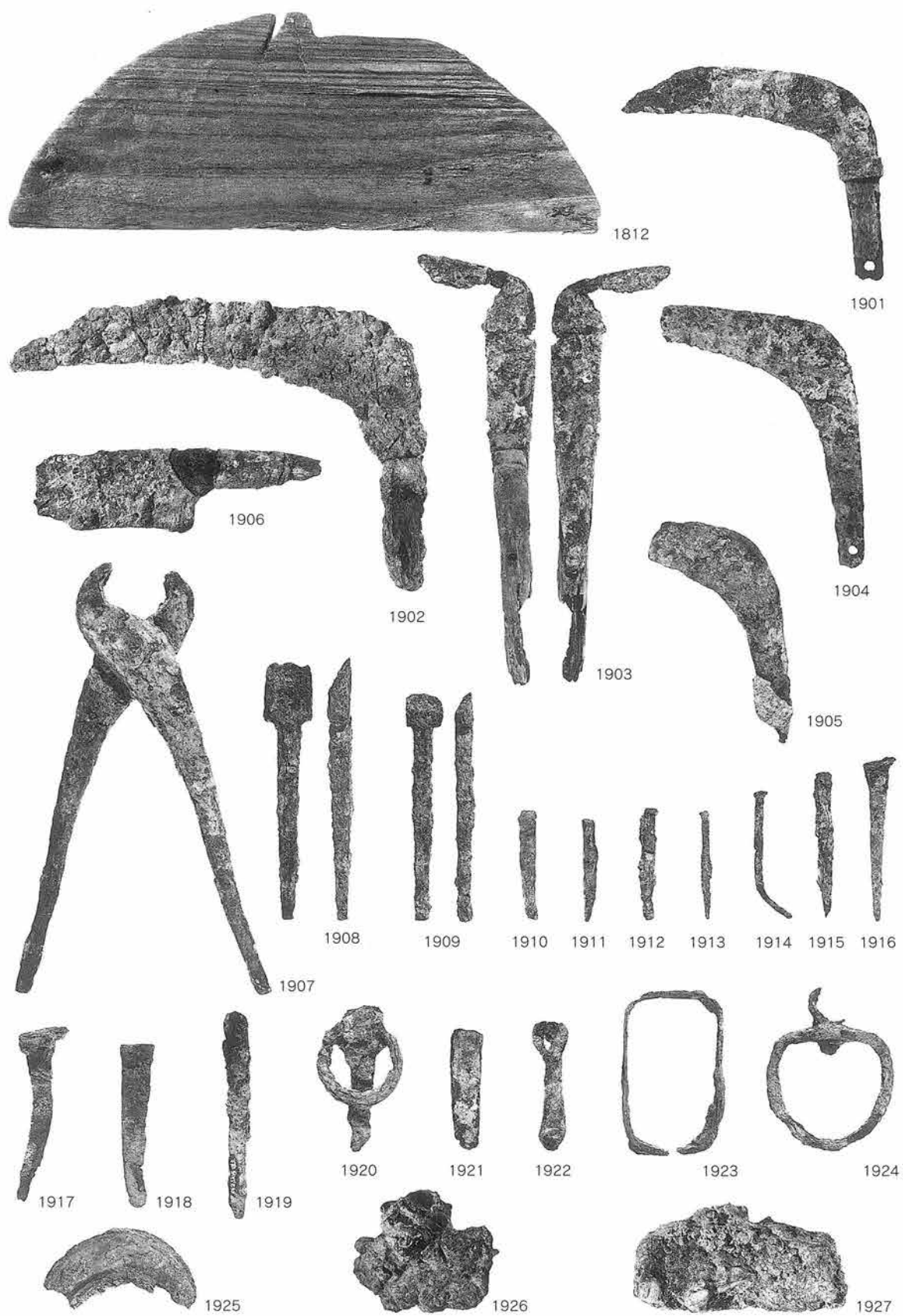
1723



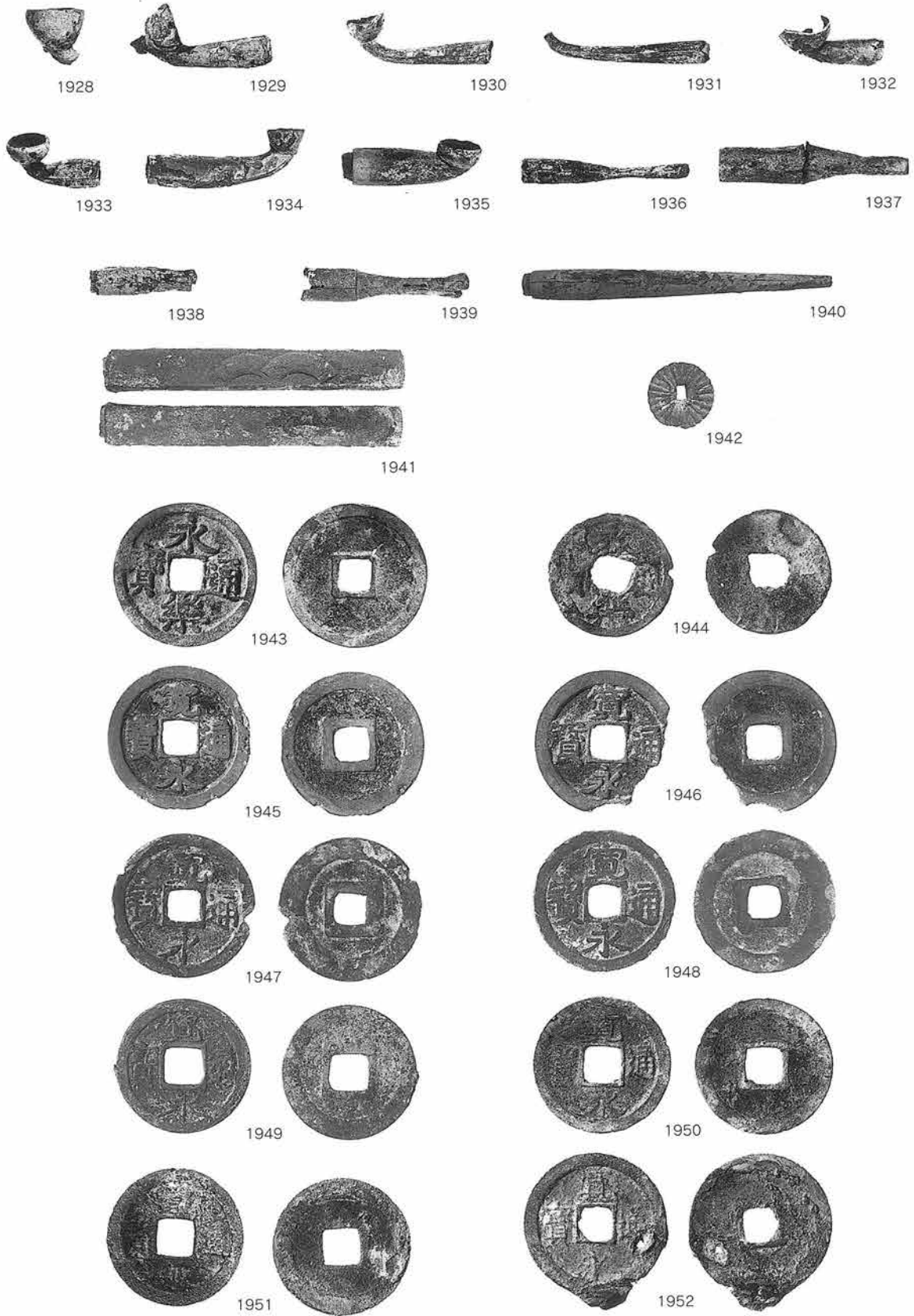
写真図版117 石製品④



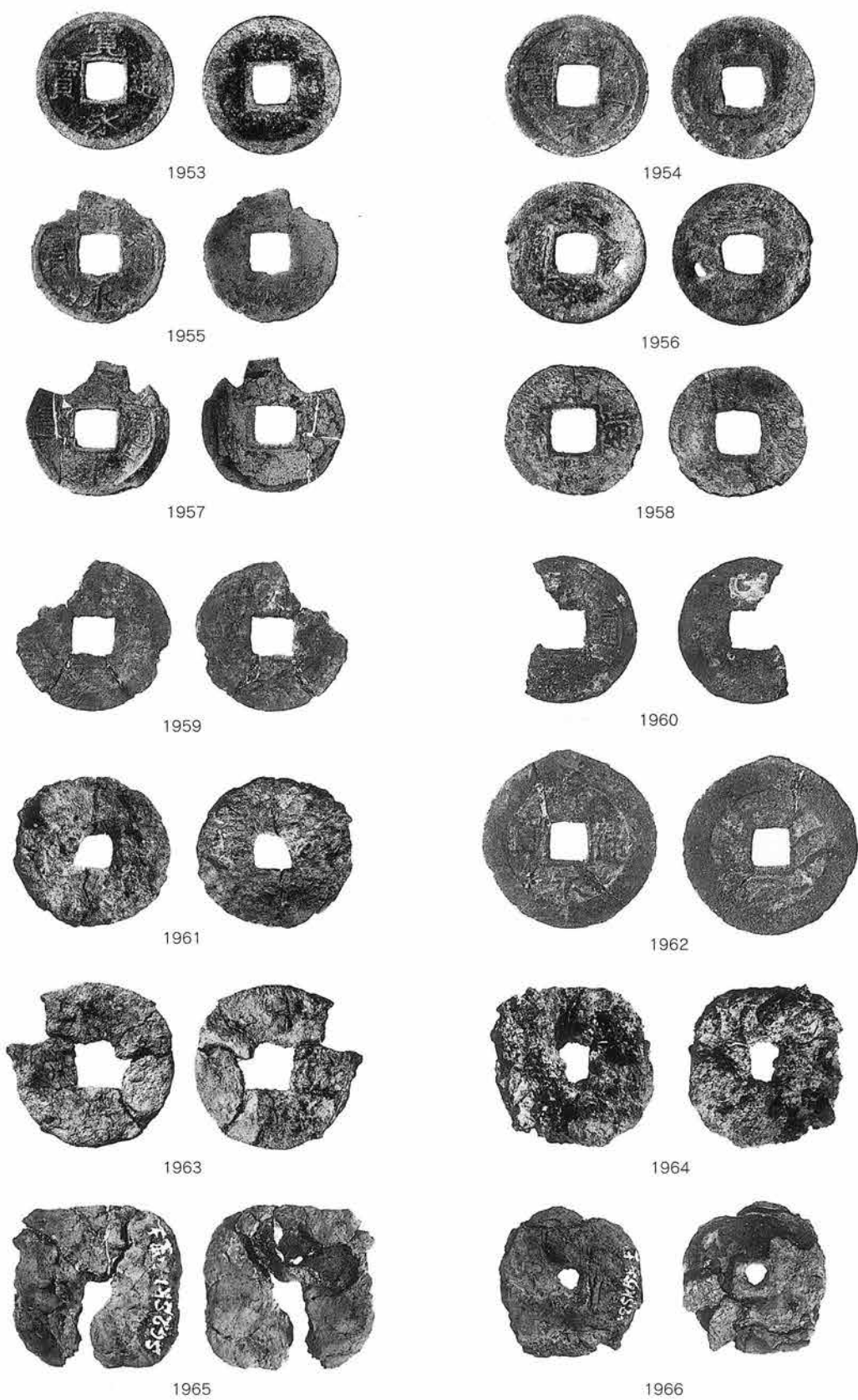
写真図版118 木製品①



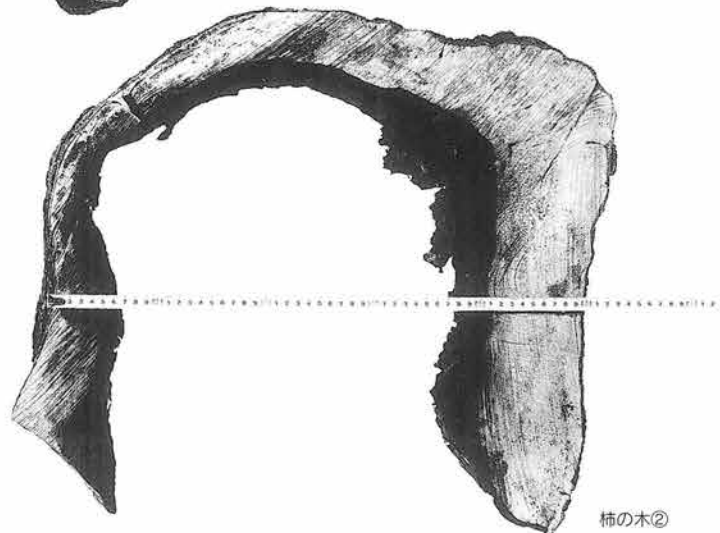
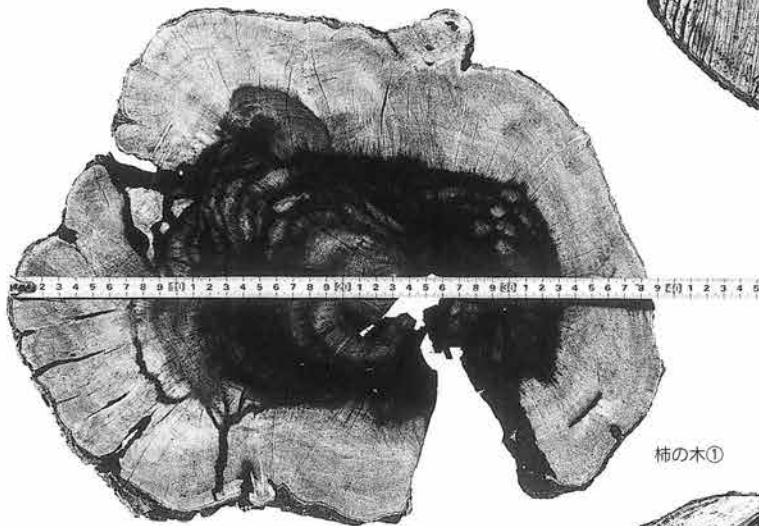
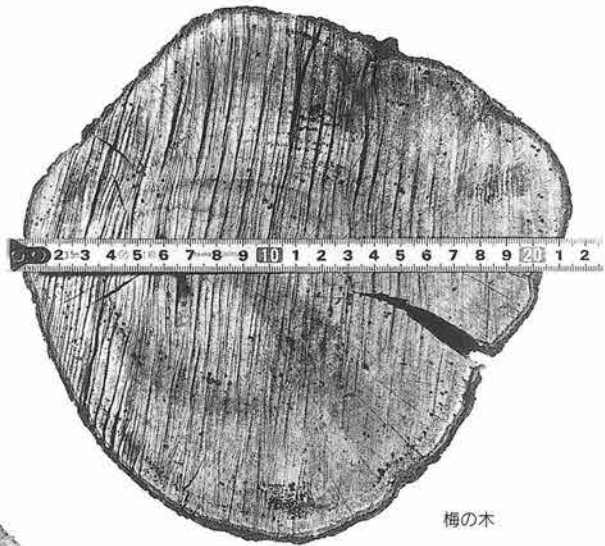
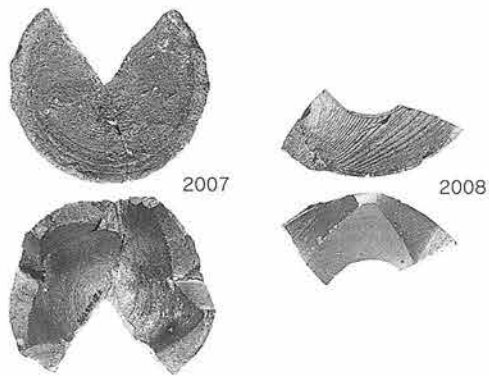
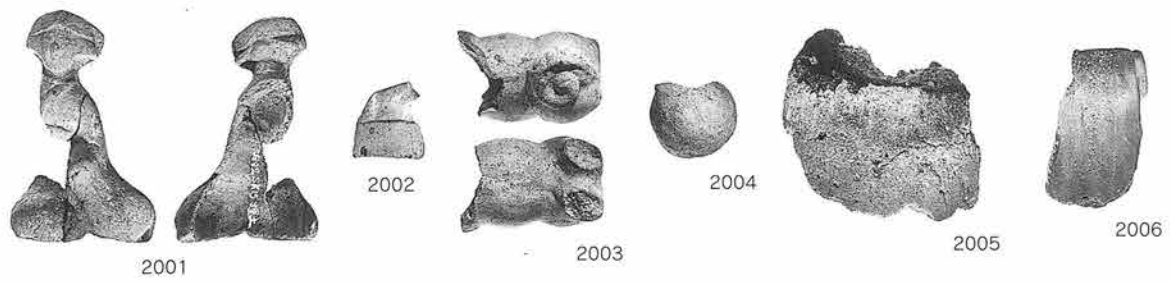
写真図版119 木製品②・金属製品①



写真図版120 金属製品②



写真図版121 金属製品③



写真図版122 木製品・梅の木、柿の木



墓塚発見状況



墓塚検出状況



墓塚検出状況



墓塚検出



墓塚調査状況



墓塚調査状況



墓塚完掘



墓塚完掘

写真図版123 下構遺跡1次調査①



1号墓墳



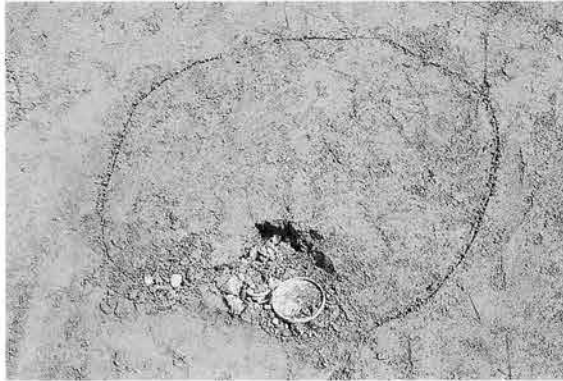
2号墓墳



3号墓墳



4号墓墳



5号墓墳



6号墓墳



7号墓墳



7号墓墳

写真図版124 下構遺跡1次調査②

1号墓



2101



2102



2103

2号墓



2104



2105



2106

3号墓



2107



2108



2109



2110



2111



2112

4号墓



2113



2114



2115



2116



2117



2118



2119



2120



2121

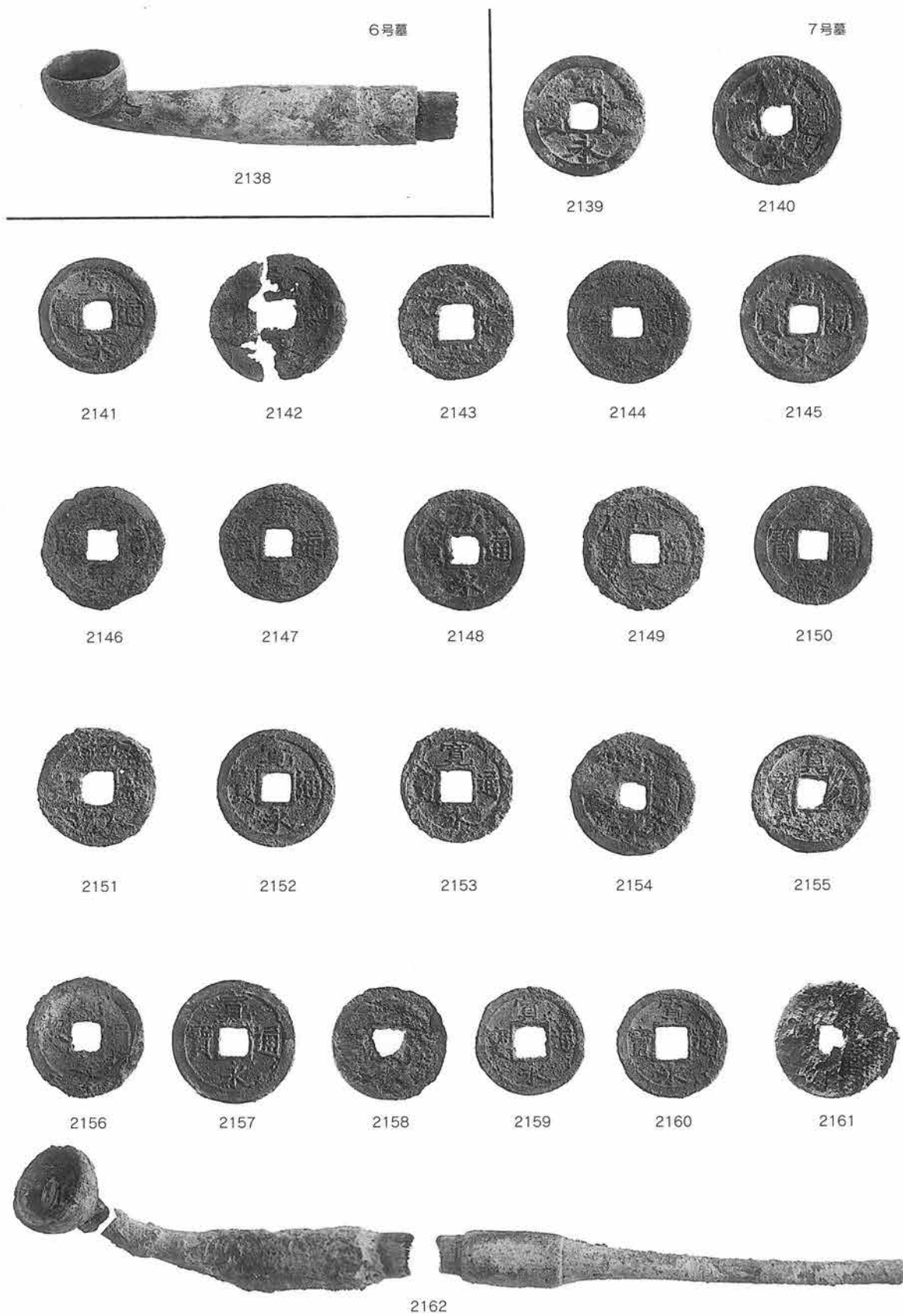


2122

写真図版125 下構遺跡1次調査出土遺物①



写真図版126 下構遺跡1次調査出土遺物②



写真図版127 下構遺跡1次調査出土遺物③



下構屋敷の墓石 (S→)



下構屋敷の墓石 (N→)



1



2



3



4 (5の上端)



5



6

写真図版128 下構屋敷の墓石①



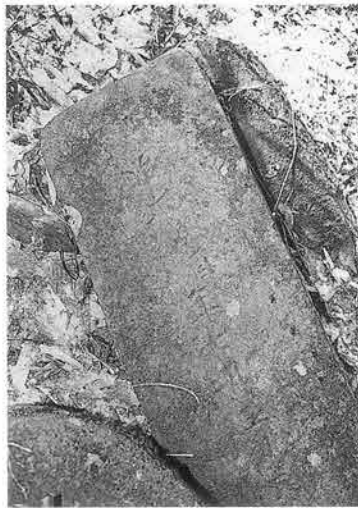
7



7の背面



8



8の文字



9 (倒れている)



10



10の背面



11



11の背面

写真図版129 下構屋敷の墓石②



12



13



14 (倒れている)



15



16



17



18



19



20

写真図版130 下構屋敷の墓石③



21



22



23



24



24 (拡大)



25



26



27

写真図版131 下構屋敷の墓石④



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39

写真図版132 下構屋敷の墓石⑤



40



41



42



43



44



45



46 (万福寺墓地)

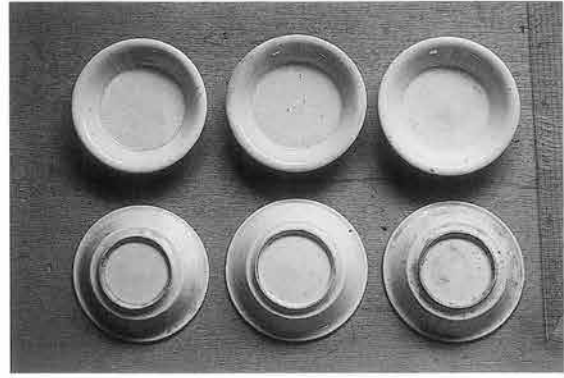


中世の板碑

写真図版133 下構屋敷の墓石◎



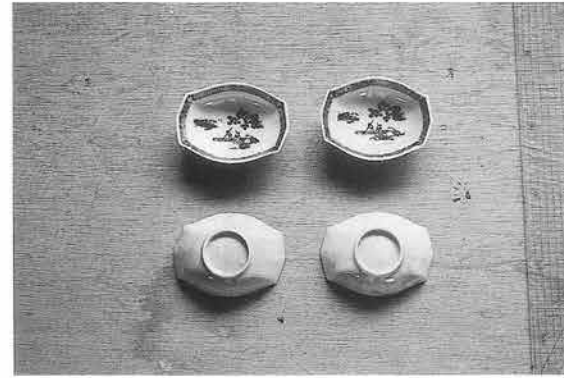
壽文皿



型おこし皿



磁器皿



磁器皿



磁器皿



磁器碗

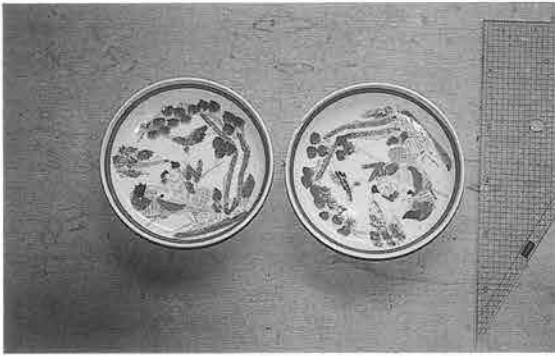


磁器皿 (型紙刷)



磁器皿 (型紙刷)

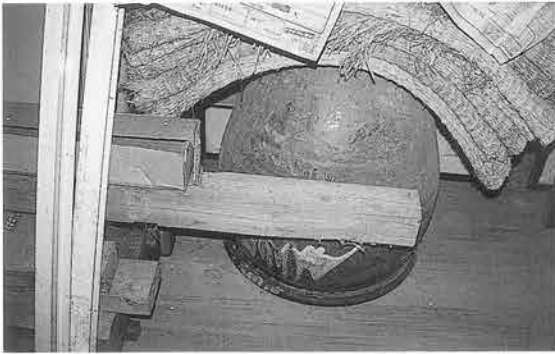
写真図版134 佐藤家伝世品①



磁器皿（恵比寿文）



磁器碗



大型の甕



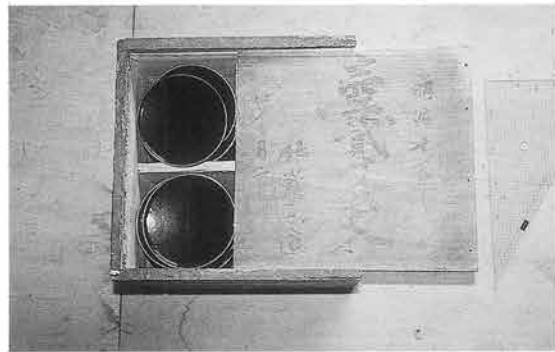
漆器椀



漆器盃 提子など



漆器を納めた箱



漆器を納めた箱

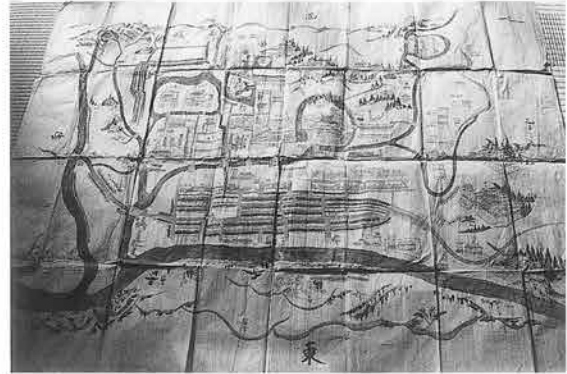


漆器を納めた箱

写真図版135 佐藤家伝世品②



型おこしの大黒天



平泉古図



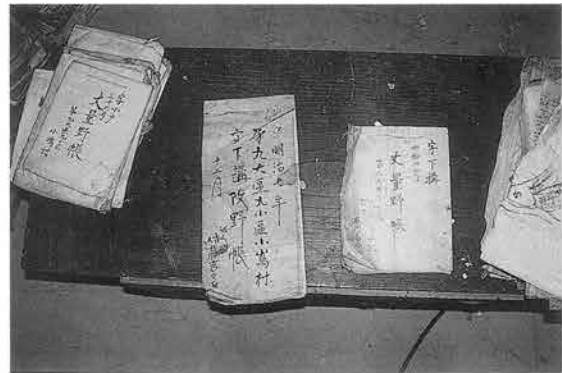
行政文書



行政文書



行政文書



行政文書



行政文書を納めた長持



長部村小川屋敷跡と伝えられる場所

写真図版136 佐藤家伝世品③



写真図版137 昭和37年の航空写真（国土地理院 日本地図センター提供）

報告書抄録

ふりがな	したがい せきだいに じ はつくつちようぎ ほうこくしょ							
書名	下構遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名	ほ場整備(一関第2地区)関連発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第446集							
編著者名	羽柴 直人							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-85 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2004年2月27日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
したがい せき 下構遺跡	いわて けん に し い わ い 岩手県西磐井 ぐん ひ ら い ず み ち よ う な が し ま 郡平泉町長島 あざしたがい 字下構	03402	NE76- 1226	38° 59' 40"	141° 7' 53"	2002.4.12 ~10.18	10,000m ²	ほ場整備(一 関第2地区) に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な建物		主な遺物		特記事項	
	集落	古代(9C) 古代(12C)	竪穴建物	2棟	土師器・須恵器		12世紀のかわらけ、 国産陶器、白磁のセ ットが出土 近世～近代の屋敷 とそれに伴う豊富 な遺物が出土	
	屋敷	(1642～1930年)	掘立柱建物	23棟	土鍾 支脚			
			井戸	1基	かわらけ(12C)			
			土坑	46基	国産陶器(12C)			
			倒木痕	4基	中国産白磁(12C)			
			溝	12条	古瀬戸四耳壺(14C)			
	焼土	5基	近世の陶磁器					
					近代の陶磁器			
					ガラス製品(近代)			
					石製品(砥石、挽臼)			
					木製品(漆器、下駄)			
					金属製品			
					(鎌、煙管、銭貨)			
					土製品			
					(羽口、窯道具)			

平成15年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長	木 村 昇	副 所 長	平 野 允 苗
[管理課]			
課 長	菲 沢 正 吾	嘱 託	高 橋 照 雄
課 長 補 佐	山 岸 直 美	"	湯 沢 邦 子
主 査	中 嶋 賢 一	"	沼 田 テル子
主 事	猿 橋 幸 子	"	伊 藤 滋 子
[調査第一課]			
課 長	佐々木 勝	文化財調査員	北 村 忠 昭
課 長 補 佐	佐々木 清 文	"	八 木 勝 枝
文化財専門員	金 子 昭 彦	"	丸 山 浩 治
文化財調査員	吉 田 充	"	北 田 勲
"	亀 大 二郎	"	島 原 弘 征
"	野 中 真 盛	期限付調査員	坂 部 恵 造
"	新 妻 伸 也	"	小 林 弘 卓
"	阿 部 勝 則	"	藤 原 大 輔
"	杉 沢 昭太郎	"	小 針 大 志
"	西 澤 正 晴	"	太 田 代 一 彦
"	村 木 敬	"	新 井 田 えり子
[調査第二課]			
課 長	三 浦 謙 一	文化財調査員	星 雅 之
課 長 補 佐	中 川 重 紀	"	佐 藤 淳 一
"	高 橋 義 介	"	星 幸 文
文化財専門員	小山内 透	"	溜 浩 二 郎
"	金 子 佐知子	"	本 多 準 一 郎
"	濱 田 宏	"	丸 山 直 美
文化財調査員	赤 石 登	"	福 島 正 和
"	阿 部 眞 澄	"	米 田 寛
"	水 上 明 博	"	須 原 拓
"	阿 部 憲	"	中 村 絵 美
"	早 坂 淳	"	川 又 晋
"	小 松 則 也	"	村 田 淳
"	阿 部 徳 幸	"	(村 上 拓)
"	窓 岩 伸 吾	期限付調査員	斎 藤 麻 紀 子
"	亀 澤 盛 行	"	石 崎 高 臣
"	飯 坂 一 重	"	吉 田 里 和
"	鈴 木 裕 明	"	立 花 裕
"	林 勲	"	江 藤 敦
"	阿 部 孝 明	"	駒 木 野 智 寛
"	羽 柴 直 人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 446 集

下構遺跡第 2 次発掘調査報告書

ほ場整備事業（一関第 2 地区）関連遺跡発掘調査

印刷 平成 16 年 2 月 20 日

発行 平成 16 年 2 月 27 日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 盛岡市下飯岡 11 地割 185

TEL(019)638 - 9001

FAX(019)638 - 8563

印 刷 川口印刷工業株式会社

〒 020-0841 盛岡市羽場 10 - 1 - 2

TEL(019)632 - 2211

Y=26255m

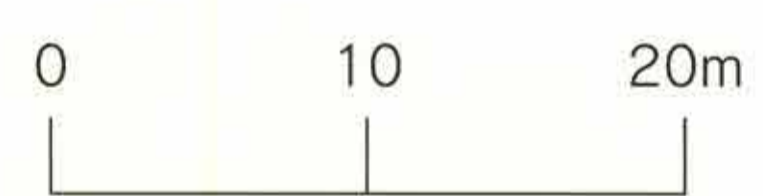
Y=26325m



X-axis labels: x, v, t, r, p, n, l, j, h, f, d, b

X=-111885m

X=-111945m



下構遺跡遺構配置図(全体)

0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20 22 24 26 28 30



下構遺跡主要部分遺構配置図

9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

